
北足立郡伊奈町

原 / 谷 畑

上尾都市計画事業伊奈特定土地地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

- I -

1 9 9 7

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



原遺跡第13号住居跡遺物出土状況



原遺跡第13号住居跡出土遺物



原遺跡第13号住居跡出土土器



原遺跡第24号住居跡炉体土器



原遺跡第15号住居跡炉体土器



原遺跡第16号住居跡炉体土器



原遺跡第16号住居跡出土土鈎手土器人面部破片



原遺跡第16号住居跡出土遺物



原遺跡第2号住居跡出土土器



谷畑遺跡第1号住居跡出土土器

序

埼玉県北足立郡伊奈町は、大宮台地の東縁に位置し、首都近郊としては貴重な自然を残している地域です。また、この豊かな環境のもとに営まれた人々の生活の跡が、埋蔵文化財として数多く残されており、

埼玉県では、この伊奈町北部地域において、職・住・遊・学などが集積した中枢都市圏の形成に寄与するため、21世紀に向けたモデルタウンの建設を進めています。その一環として、乱開発を防止し、また、田園と融和した地域社会の形成を図るための基盤づくりを目的として、上尾都市計画事業伊奈特定土地地区画整理事業が進められています。

事業計画地内に存在する埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関が慎重に協議して、公園等の保存地域とするよう努めてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置がとられることになった遺跡については、当事業団が発掘調査を実施いたしました。

本書はこれらの遺跡のうち、原遺跡、谷畑遺跡の発掘調査報告書です。原遺跡からは、縄文時代中期の集落跡が検出されました。上越新幹線の建設に伴う調査において、既に集落の一部が確認されておりましたが、このたびの調査で、住居跡が約70軒発見され、大規模な環状集落の跡であることが明らかになりました。住居跡には特異な構造を持つ炉跡、並びに廃絶に伴い儀礼的な行為が行われた痕跡のある事例が残されていました。

また、住居跡からは大量の遺物が出土し、注目すべきものとして、釣り手土器につけられた人面部分が発見されており、そのほか中・近世の溝跡、陶磁器等も発見され、当地域の開発史の一端を明らかにする資料が得られました。

谷畑遺跡で発見された縄文時代前期前半の住居跡からはまとまった資料が出土し、この地域を代表する良好な資料が得られました。谷畑遺跡の南東に隣接する台地に所在する、縄文時代前期前半の貝塚である大針貝塚との関連が大いに注目されます。

これらの成果をまとめた本書が埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査から刊行に至るまで御指導・御協力をいただきました、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県伊奈新都市建設事務所、伊奈町教育委員会、並びに地元関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成9年1月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は下記の遺跡の発掘調査報告書である。

原遺跡

所在地：北足立郡伊奈町大字羽貫字原865番地他

遺跡コード：18-46

谷畑遺跡

所在地：北足立郡伊奈町大字羽貫字谷畑999番地
他

遺跡コード：18-69

文化庁長官指示通知

平成5年6月29日 委保第5の838号

平成5年11月30日 委保第5の1680号

教育長通知

平成6年4月25日 教文第2-18号

なお、上記の2遺跡は発掘調査時には原遺跡(18-46)に一括されており、調査終了後、遺跡の変更増補を行い、2遺跡となった。

2. 遺跡の略称は発掘調査時の遺跡のコード番号である「18-46」を用いている。
3. 発掘調査は、上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業に伴うもので、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県伊奈新都市建設事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査は銀持和夫、木戸春夫、村田章人、宮澤京子が行い、平成5年5月17日から平成7年3月31日まで実施した。整理・報告書作成作業は、

村田章人が担当し、平成7年4月1日から平成8年3月29日まで行い、橋本勉、上野真由美、鈴木秀雄、山本直、書上元博、西井幸雄の協力を得た。発掘調査・整理・報告書作成作業の組織は第1章第3節に示した。

5. 出土遺物の整理および挿図の作成は、旧石器時代の遺物を上野が、縄文土器の一部を宮崎朝雄が、中・近世の陶磁器については桜井元子が、他は村田章人が行った。
6. 遺跡の基準点測量・空中写真測量・空中写真撮影は株式会社中央航業に委託した。
7. 写真撮影は、発掘調査時の撮影を銀持、木戸、村田、宮澤が行い、遺物撮影を村田が行った。巻頭カラー写真・土器展開写真の撮影は小川忠博氏に委託した。
8. 胎土分析は第四紀地質研究所、テフラ分析は古環境研究所、リン・カルシウム分析は株式会社パリオ・サーヴェイにそれぞれ委託した。
9. 本書の執筆は第1章第1節を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、第3章第2節(1)については上野が、その他は村田が行った。
10. 本書の編集は資料部資料整理第2課の村田が行った。
11. 本書にかかる資料は平成8年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

凡例

1. X・Y座標による表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位はすべて座標北を表す。
2. 縮尺は全測図を1:800、住居跡・土壇・竈穴・井戸・遺物分布図を1:60、炉跡等の微細図を1:30、溝平面図を1:200、溝断面図を1:60を原則とし、例外的なものについてはスケールを示した。縄文土器展開図は1:8が原則だが、例外的に1:5のものも作成した。
3. 遺物押印図の縮尺は下記の通りである。また、例外的なものについてはスケールで示した。
縄文土器(中期)1:5、縄文土器(前期)1:4、
縄文土器拓影図(中期)1:3、(前期)1:2
占銭1:1、中・近世の陶磁器1:4
4. 遺構の略号は次の通りである。
S J = 住居跡、SK = 土壇、SD = 溝、
SE = 井戸、SB = 掘立柱建物跡
5. 遺構平面図中の網掛けは焼土の範囲を、遺物分布図中の網掛けは、垂直分布を落とした範囲を示す。
6. 縄文土器展開図中の網掛けは地文の範囲を示す。
7. 遺物分布図中の記号の示す内容は、次の通りである。
土器、土製品：● 石鏃：▲ 打製石斧：*
磨製石斧：◦ スクレイパー：▼ 磨石：○
石皿・凹石：◡ フレイク：△ 礫：▽
不明：■
8. 土層註記中の含有物の大きさに関する表現は「ブロック」が5cm以上、「中」が1~5cm、「小」が0.5~1cm、「極小」がそれ以下をおよそ表す。

目次

口絵		(5) その他の時代の遺構と遺物	260
序		第IV章 谷畑遺跡の調査	297
例言		1. 遺跡の概観	297
凡例		2. 遺構と遺物	300
目次		(1) 縄文時代	300
		(2) その他の時代	311
第I章 調査の概要	1	第V章 結語	317
1. 調査にいたる経過	1	1. 原遺跡	317
2. 調査の経過	2	(1) 縄文時代中期の土器	317
3. 調査・整理・報告書刊行の組織	3	(2) その他の遺物	326
第II章 遺跡の立地と環境	4	(3) 住居跡内土壌	326
第III章 原遺跡の調査	7	2. 谷畑遺跡	327
1. 遺跡の概観	7	3. まとめ	327
2. 遺構と遺物	13	付篇 自然科学的分析	331
(1) 旧石器時代	13	1. 原遺跡出土土器胎土分析	331
(2) 縄文時代の遺構	15	2. 原遺跡より検出された土壌の理化学分析	340
(3) 縄文時代の遺物	128	3. 埼玉県、谷畑遺跡の火山灰同定分析	343
(4) グリッド出土遺物	245		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	4	第14図 第4号住居跡、第4号住居跡遺物出土状況	22
第2図 原・谷畑遺跡の位置・周辺遺跡分布図	5	第15図 第5号住居跡	23
第3図 遺跡周辺の地形図	8	第16図 第5号住居跡炉跡	24
—原遺跡—		第17図 第5号住居跡遺物分布図	25
第4図 原遺跡全体図	9	第18図 第6号住居跡	26
第5図 遺構配置図(1)	10	第19図 第6号住居跡遺物分布図	27
第6図 遺構配置図(2)	11	第20図 第7号住居跡	28
第7図 遺構配置図(3)	12	第21図 第7号住居跡炉跡	29
第8図 グリッド出土細石器	14	第22図 第7号住居跡遺物分布図	29
第9図 第1号住居跡	16・17	第23図 第8号住居跡	30
第10図 第1号住居跡遺物分布図	18	第24図 第8号住居跡炉跡	31
第11図 第2号住居跡	19	第25図 第8号住居跡遺物分布図	31
第12図 第2号住居跡遺物分布図	20	第26図 第9号住居跡	32
第13図 第3号住居跡	21	第27図 第9号住居跡遺物分布図	33

第28图	第10号住居跡	34	第65图	第27号住居跡	67
第29图	第10号住居跡内土壇	35	第66图	第28号住居跡	68
第30图	第10号住居跡遺物分布図	36	第67图	第29号住居跡	69
第31图	第11号住居跡	37	第68图	第29号住居跡遺物分布図	70
第32图	第11号住居跡遺物分布図	38	第69图	第30号住居跡	71
第33图	第12号住居跡	39	第70图	第31号住居跡	72
第34图	第12号住居跡遺物分布図	40	第71图	第32号住居跡	73
第35图	第13号住居跡	41	第72图	第33号住居跡	73
第36图	第13号住居跡遺物分布図	42	第73图	第34号住居跡	74
第37图	第14号住居跡	43	第74图	第35号住居跡	75
第38图	第14号住居跡遺物分布図	44	第75图	第36号住居跡	75
第39图	第15号住居跡	45	第76图	第37号住居跡	76
第40图	第15号住居跡遺物分布図	46	第77图	第38号住居跡	77
第41图	第16号住居跡	47	第78图	第39号住居跡	78
第42图	第16号住居跡炉跡	48	第79图	第40号住居跡	79
第43图	第16号住居跡遺物分布図(1)	49	第80图	第41号住居跡	80
第44图	第16号住居跡遺物分布図(2)	50	第81图	第41号住居跡遺物分布図	81
第45图	第17号住居跡	51	第82图	第42号住居跡	81
第46图	第18号住居跡	52	第83图	第43号住居跡	82
第47图	第18号住居跡炉跡	53	第84图	第43号住居跡炉跡	83
第48图	第18号住居跡遺物分布図	53	第85图	第44号住居跡	84
第49图	第19号住居跡	54	第86图	第45号住居跡	85
第50图	第20号住居跡	55	第87图	第46号住居跡	86
第51图	第20号住居跡炉跡	56	第88图	第47号住居跡	87
第52图	第20号住居跡遺物分布図	56	第89图	第48号住居跡	88
第53图	第21号住居跡	57	第90图	第49号住居跡	89
第54图	第21号住居跡遺物分布図	58	第91图	第50号住居跡	90
第55图	第22号住居跡	59	第92图	第51号住居跡	91
第56图	第22号住居跡炉跡	60	第93图	第52号住居跡	92
第57图	第22号住居跡遺物分布図	60	第94图	第53号住居跡	93
第58图	第23号住居跡	61	第95图	第54号住居跡	94
第59图	第23号住居跡内土壇	62	第96图	第55号住居跡	95
第60图	第23号住居跡遺物分布図	62	第97图	第56号住居跡	96
第61图	第24号住居跡	63	第98图	第57号住居跡	97
第62图	第24号住居跡遺物分布図	64	第99图	第58号住居跡	98
第63图	第25号住居跡	65	第100图	第59号住居跡	99
第64图	第26号住居跡	66	第101图	第60号住居跡	100

第102図	第61号住居跡	101	第139図	第7号住居跡出土土器(3)	146
第103図	第62号住居跡	102	第140図	第8号住居跡出土土器	148
第104図	第63号住居跡	103	第141図	第9号住居跡出土土器	150
第105図	第64号住居跡	104	第142図	第10・11・12号住居跡出土土器	152
第106図	第65号住居跡	105	第143図	第13号住居跡出土土器(1)	154
第107図	第66号住居跡	106	第144図	第13号住居跡出土土器(2)	155
第108図	第67号住居跡	107	第145図	第13号住居跡出土土器(3)	156
第109図	第68号住居跡	108	第146図	第13号住居跡出土土器(4)	157
第110図	第69号住居跡	108	第147図	第13号住居跡出土土器(5)	158
第111図	第70号住居跡	109	第148図	第13号住居跡出土土器(6)	159
第112図	第71号住居跡	110	第149図	第13号住居跡出土土器(7)	160
第113図	縄文時代の土壌(1)	112	第150図	第14号住居跡出土土器(1)	163
第114図	縄文時代の土壌(2)	113	第151図	第14号住居跡出土土器(2)	164
第115図	縄文時代の土壌(3)	114	第152図	第14号住居跡出土土器(3)	165
第116図	縄文時代の土壌(4)	115	第153図	第15号住居跡出土土器(1)	167
第117図	縄文時代の土壌(5)	116	第154図	第15号住居跡出土土器(2)	168
第118図	縄文時代の土壌(6)	117	第155図	第15号住居跡出土土器(3)	169
第119図	縄文時代の土壌(7)	118	第156図	第16号住居跡出土土器(1)	170
第120図	縄文時代の土壌(8)	119	第157図	第16号住居跡出土土器(2)	171
第121図	縄文時代の土壌(9)	120	第158図	第16号住居跡出土土器(3)	172
第122図	縄文時代の土壌(10)	121	第159図	第16号住居跡出土土器(4)	173
第123図	縄文時代の土壌(11)	122	第160図	第16号住居跡出土土器(5)	174
第124図	第1号埋甕	127	第161図	第16号住居跡出土土器(6)	175
第125図	第1号住居跡出土土器(1)	129	第162図	第16号住居跡出土土器(7)	176
第126図	第1号住居跡出土土器(2)	130	第163図	第16号住居跡出土土器(8)	177
第127図	第1号住居跡出土土器(3)	131	第164図	第16号住居跡出土土器(9)	178
第128図	第1号住居跡出土土器(4)	132	第165図	第16号住居跡出土土器(10)	180
第129図	第1号住居跡出土土器(5)	133	第166図	第16号住居跡出土土器(11)	181
第130図	第2号住居跡出土土器(1)	134	第167図	第16号住居跡出土土器(12)	182
第131図	第2号住居跡出土土器(2)	135	第168図	第16号住居跡出土土器(13)	183
第132図	第2号住居跡出土土器(3)	137	第169図	第17号住居跡出土土器	185
第133図	第3号住居跡出土土器	139	第170図	第18号住居跡出土土器(1)	186
第134図	第4号住居跡出土土器	140	第171図	第18号住居跡出土土器(2)	187
第135図	第5号住居跡出土土器	141	第172図	第18号住居跡出土土器(3)	187
第136図	第6号住居跡出土土器	143	第173図	第19号住居跡出土土器	188
第137図	第7号住居跡出土土器(1)	144	第174図	第20号住居跡出土土器(1)	189
第138図	第7号住居跡出土土器(2)	145	第175図	第20号住居跡出土土器(2)	190

第176図	第20号住居跡出土土器(3)	191	第213図	第1号埋甕出土土器	230
第177図	第21号住居跡出土土器(1)	192	第214図	縄文時代遺構出土土製品(1)	232
第178図	第21号住居跡出土土器(2)	193	第215図	縄文時代遺構出土土製品(2)	233
第179図	第21号住居跡出土土器(3)	194	第216図	縄文時代遺構出土土器(1)	235
第180図	第22号住居跡出土土器(1)	196	第217図	縄文時代遺構出土土器(2)	236
第181図	第22号住居跡出土土器(2)	197	第218図	縄文時代遺構出土土器(3)	237
第182図	第22号住居跡出土土器(3)	198	第219図	縄文時代遺構出土土器(4)	239
第183図	第23号住居跡出土土器(1)	200	第220図	縄文時代遺構出土土器(5)	240
第184図	第23号住居跡出土土器(2)	201	第221図	縄文時代遺構出土土器(6)	241
第185図	第24号住居跡出土土器(1)	202	第222図	縄文時代遺構出土土器(7)	242
第186図	第24号住居跡出土土器(2)	203	第223図	グリッド出土縄文土器(1)	246
第187図	第25号住居跡出土土器(1)	204	第224図	グリッド出土縄文土器(2)	248
第188図	第25号住居跡出土土器(2)	205	第225図	グリッド出土縄文土器(3)	249
第189図	第25号住居跡出土土器(3)	206	第226図	グリッド出土縄文土器(4)	250
第190図	第26号住居跡出土土器	207	第227図	グリッド出土縄文土器(5)	251
第191図	第29号住居跡出土土器(1)	208	第228図	グリッド出土縄文土器(6)	252
第192図	第29号住居跡出土土器(2)	209	第229図	グリッド出土縄文土器(7)	253
第193図	第28号住居跡出土土器・第29号住居跡出土土器(3)	210	第230図	グリッド出土縄文土器(8)	254
第194図	第34号住居跡出土土器(1)	211	第231図	グリッド出土縄文土器(9)	255
第195図	第34号住居跡出土土器(2)	212	第232図	グリッド出土土製品	256
第196図	第30・31・33・40号住居跡出土土器	213	第233図	グリッド出土土器	258
第197図	第39号住居跡出土土器	214	第234図	中・近世土壌(1)	261
第198図	第41号住居跡出土土器	215	第235図	中・近世土壌(2)	262
第199図	第43号住居跡出土土器	216	第236図	中・近世土壌(3)	263
第200図	第42・44・45・47・48・50号住居跡出土土器	217	第237図	中・近世土壌(4)	264
第201図	第51・52・54・57号住居跡出土土器	218	第238図	中・近世土壌(5)	265
第202図	第67号住居跡出土土器	219	第239図	中・近世土壌(6)	266
第203図	第69号住居跡出土土器	220	第240図	中・近世土壌(7)	267
第204図	第70号住居跡出土土器	221	第241図	中・近世土壌(8)	268
第205図	縄文時代土壌出土土器(1)	222	第242図	中・近世土壌(9)	269
第206図	縄文時代土壌出土土器(2)	223	第243図	中・近世土壌(10)	270
第207図	縄文時代土壌出土土器(3)	224	第244図	中・近世土壌出土遺物(1)	274
第208図	縄文時代土壌出土土器(4)	225	第245図	中・近世土壌出土遺物(2)	275
第209図	縄文時代土壌出土土器(5)	226	第246図	井戸	276
第210図	縄文時代土壌出土土器(6)	227	第247図	溝(1)	277
第211図	縄文時代土壌出土土器(7)	228	第248図	溝(2)	278
第212図	縄文時代土壌出土土器(8)	229	第249図	溝(3)	280

第250図	溝(4)	281
第251図	溝(5)	282
第252図	溝(6)	283
第253図	溝(7)	284
第254図	溝(8)	285
第255図	第37号溝遺物分布図	286
第256図	第37号溝出土古銭(1)	287
第257図	第37号溝出土古銭(2)	288
第258図	第37号溝出土古銭(3)	289
第259図	第39号溝出土遺物	290
第260図	第1号掘立柱建物跡	291
第261図	第1号塚跡(1)	292
第262図	第1号塚跡(2)	293
第263図	第1号塚跡出土遺物(1)	294
第264図	第1号塚跡出土遺物(2)	295
第265図	第1号道路跡	296
—谷畑遺跡—		
第266図	谷畑遺跡全体図	298
第267図	谷畑遺跡遺構配置図	299

第268図	第1号住居跡	301
第269図	第1号住居跡遺物分布図	302
第270図	第2号住居跡	302
第271図	縄文時代土壌	303
第272図	第1号炉穴	305
第273図	第1号住居跡出土遺物(1)	306
第274図	第1号住居跡出土遺物(2)	308
第275図	第1号住居跡出土遺物(3)	309
第276図	グリッド出土縄文土器	310
第277図	中・近世土壌(1)	312
第278図	中・近世土壌(2)	313
第279図	井戸	315
第280図	第1号井戸出土遺物	315
第281図	溝	316
—結語—		
第282図	原遺跡出土土器変遷図(1)	319
第283図	原遺跡出土土器変遷図(2)	321
第284図	原遺跡出土土器変遷図(3)	323
第285図	原遺跡出土土器胴部文様集成	325

表 目 次

—原遺跡—		
第1表	旧石器観察表	14
第2表	縄文時代土壌観察表(1)	123
第3表	縄文時代土壌観察表(2)	124
第4表	縄文時代土壌観察表(3)	125
第5表	遺構出土土器観察表(1)	243
第6表	遺構出土土器観察表(2)	244
第7表	グリッド出土土器観察表	259

第8表	中・近世土壌観察表(1)	271
第9表	中・近世土壌観察表(2)	272
第10表	中・近世土壌観察表(3)	273
第11表	第37号溝出土古銭観察表	289
第12表	第1号塚出土古銭観察表	295
—谷畑遺跡—		
第13表	縄文時代土壌観察表	304
第14表	中・近世土壌観察表	314

図 版 目 次

原遺跡	
図版1	遺跡周辺の地形、原遺跡遠景
図版2	第1号住居跡、第2号住居跡、第2号住居跡遺物出土状況

図版3	第4号住居跡、第4号住居跡遺物出土状況、第5号住居跡、第5号住居跡炉跡、第6号住居跡埋塞、第7号住居跡炉跡土器
図版4	第6号住居跡、第7号住居跡

- 図版5 第7号住居跡遺物出土状況、第8号住居跡、第8号住居跡炉跡、第9号住居跡、第10号住居跡内土塊遺物、第10号住居跡内土塊遺物
- 図版6 第10号住居跡、第11号住居跡、第12号住居跡
- 図版7 第13号住居跡、第13号住居跡遺物出土状況
- 図版8 第14号住居跡、第14号住居跡遺物出土状況、第15号住居跡、第15号住居跡炉跡、第15号住居跡炉跡下土塊
- 図版9 第16号住居跡、第16号住居跡遺物出土状況、第16号住居跡炉跡、第16号住居跡炉跡下土塊
- 図版10 第18号住居跡、第18号住居跡炉跡、第19号住居跡、第20号住居跡、第20号住居跡炉跡、第21号住居跡
- 図版11 第21号住居跡遺物出土状況、第21号住居跡炉跡、第22号住居跡、第22号住居跡炉跡、第23号住居跡、第23号住居跡内土塊遺物出土状況
- 図版12 第24号住居跡、第25号住居跡
- 図版13 第26号住居跡、第29号住居跡、第29号住居跡炉跡、第31号住居跡炉跡、第30号住居跡、第31号住居跡
- 図版14 第34号住居跡炉跡(1)、第34号住居跡炉跡(2)、第37号住居跡、第38号住居跡、第39・45・46号住居跡、第43号住居跡
- 図版15 第41号住居跡、第44・45号住居跡、第47号住居跡、第49号住居跡、第51号住居跡、第53号住居跡
- 図版16 第48号住居跡、第50号住居跡
- 図版17 第52号住居跡、第54号住居跡炉跡、第55・56号住居跡
- 図版18 第57号住居跡、第58号住居跡
- 図版19 第69号住居跡炉跡、第70号住居跡炉跡、第8号土塊、第9号土塊、第13号土塊、第18号土塊、第20号土塊、第62号土塊
- 図版20 第99号土塊、第112号土塊、第117号土塊、第127号土塊、第123号土塊、第1号埋甕、第173号土塊、第184号土塊
- 図版21 第184号土塊遺物出土状況、第2号井戸、第4号井戸、第37号溝、第37号溝古銭出土状況、第1号塚
- 図版22 グリッド出土細石器、第1号住居跡出土土器
- 図版23 第1号住居跡出土土器
- 図版24 第2号住居跡出土土器、第3号住居跡出土土器
- 図版25 第4号住居跡出土土器、第6号住居跡出土土器、第7号住居跡出土土器
- 図版26 第7号住居跡出土土器、第8号住居跡出土土器、第9号住居跡出土土器
- 図版27 第10号住居跡出土土器、第13号住居跡出土土器
- 図版28 第13号住居跡出土土器
- 図版29 第13号住居跡出土土器、第14号住居跡出土土器
- 図版30 第15号住居跡出土土器、第16号住居跡出土土器
- 図版31 第16号住居跡出土土器
- 図版32 第16号住居跡出土土器
- 図版33 第16号住居跡出土土器
- 図版34 第16号住居跡出土土器、第18号住居跡出土土器
- 図版35 第20号住居跡出土土器、第21号住居跡出土土器
- 図版36 第21号住居跡出土土器、第22号住居跡出土土器
- 図版37 第22号住居跡出土土器、第23号住居跡出土土器、第24号住居跡出土土器
- 図版38 第25号住居跡出土土器
- 図版39 第25号住居跡出土土器、第26号住居跡出土土器、第29号住居跡出土土器
- 図版40 第29号住居跡出土土器、第34号住居跡出土土器、第30号住居跡出土土器、第31号住居跡出土土器、第39号住居跡出土土器
- 図版41 第41号住居跡出土土器、第54号住居跡出土土器、第69号住居跡出土土器
- 図版42 縄文時代土塊出土土器、第1号埋甕

- 図版43 縄文土器展開写真(1)
図版44 縄文土器展開写真(2)
図版45 縄文土器展開写真(3)
図版46 縄文土器展開写真(4)
図版47 縄文土器展開写真(5)
図版48 縄文土器展開写真(6)
図版49 縄文土器展開写真(7)
図版50 第1号住居跡出土土器
図版51 第2号住居跡出土土器、第5号住居跡出土土器
図版52 第5号住居跡出土土器、第7号住居跡出土土器
図版53 第7号住居跡出土土器、第13号住居跡出土土器
図版54 第13号住居跡出土土器
図版55 第13号住居跡出土土器、第14号住居跡出土土器
図版56 第15号住居跡出土土器
図版57 第16号住居跡出土土器
図版58 第16号住居跡出土土器
図版59 第18号住居跡出土土器、第21号住居跡出土土器
図版60 第22号住居跡出土土器、第23号住居跡出土土器
図版61 第24号住居跡出土土器
図版62 第25号住居跡出土土器、第28号住居跡出土土器
図版63 第29号住居跡出土土器、第34号住居跡出土土器

器

- 図版64 第39号住居跡出土土器
図版65 第41号住居跡出土土器、第43号住居跡出土土器
図版66 第43号住居跡出土土器、第67号住居跡出土土器
図版67 縄文時代土壙出土土器(1)
図版68 縄文時代土壙出土土器(2)
図版69 縄文時代土壙出土土器(3)
図版70 縄文時代土壙出土土器(4)
図版71 縄文時代遺構出土土製品(1)
図版72 縄文時代遺構出土土製品(2)
図版73 縄文時代遺構出土石器(1)
図版74 縄文時代遺構出土石器(2)
図版75 縄文時代遺構出土石器(3)
図版76 縄文時代遺構出土石器(4)
図版77 縄文時代遺構出土石器(5)
図版78 縄文時代遺構出土石器(6)
図版79 グリッド出土縄文土器、土製品、石製品
図版80 第184号土壙出土遺物、第1号塚出土遺物
谷畑遺跡
図版81 谷畑遺跡空中写真、第1号住居跡
図版82 第1号住居跡遺物出土状況、第1号住居跡炉跡、第2号住居跡、第1号炉穴、第4号井戸、第1号住居跡出土土器(1)
図版83 第1号住居跡出土土器(2)
図版84 第1号住居跡出土土器(3)
図版85 第1号住居跡出土土器(4)

第1章 調査の概要

1. 調査にいたる経過

埼玉県北足立郡伊奈町は、上越新幹線と同時に計画された新交通システムの開通に伴い、急激な都市化が予想された。埼玉県では、都市化に伴う乱開発を防止し、田園と融和した地域社会の形成を図るための基盤づくりを目的として、上尾都市計画事業伊奈特定土地区画整理事業を計画した。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした各種開発事業に対応するため、開発部局と事前協議を行い、文化財保護と開発事業との調整を進めているところである。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、伊奈新都市建設事務所長より文化財保護課長あて、昭和63年1月6日付け伊都建第587号で、埋蔵文化財の所在について照会があった。これに対し、文化財保護課では、詳細分布調査を行い、それに基づいて9ヶ所の埋蔵文化財包蔵地の所在を、平成元年6月26日付け教文第444号で回答した。取扱いについては、対象地が広範囲であるため、事業計画と調整を図りながら、別途試掘調査を実施することとした。

平成3年度から財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、戸崎前遺跡、向原遺跡の調査が開始されたが、併せて他の地区の第一次調査を当財団が実施し、

今後の調査計画立案のための基礎資料を得ることとした。

原遺跡、谷畑遺跡については、平成4年9月17・18日に第一次調査が実施され、遺構・遺物が検出されたため、第二次調査の必要性が確認された。

発掘調査の実施については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と伊奈新都市建設事務所、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等を中心に協議が行われ、その結果、平成5年5月17日から平成7年3月31日までの予定で発掘調査が実施されることとなり、その旨関係機関に通知した。

発掘調査に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条3第1項の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは同法57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出され、発掘調査が実施された。

なお、調査届に対する指示通知番号は、次の通りである。

平成5年6月29日付け 委保第5の838号

平成5年11月30日付け 委保第5の1680号

平成6年4月25日付け 教文第2-18号

(文化財保護課)

2. 調査の経過

原遺跡、谷畑遺跡は調査時には一括して原遺跡として登録されていた。両者が分離したのは、発掘調査がほぼ終了する段階である。そのため、本節では、原遺跡、谷畑遺跡を一括し、調査経過について説明する。

原・谷畑遺跡の発掘調査は、平成5年5月17日から平成7年3月31日まで行われた。5月から7月上旬まで調査区の囲柵、重機を用いた表土除去から着手された。7月から表土除去と併行して、グリッド杭の設定、遺構確認、遺構精査が開始された。遺構図面の作成は、遺構精査と併行して、随時行った。

当初は調査区のはほぼ中央、後述する原遺跡I区の南半部から調査を始め、中・近世の土壌、溝等の調査を主に行った。その後、縄文時代の遺構の調査を開始する予定であったが、工事計画との調整のため、急遽後に谷畑遺跡に含まれることになる、支台の北東部分の調査を行うよう、伊奈新都市建設事務所から依頼された。そのため8月下旬の時点で、AF軸よりも南側の調査を一時中断し、支台北東部の調査を開始した。支台北東部ではU-W-29-34グリッドが未買収で、調査に着手できないため、この部分を除いて、北東部から南に向かって調査を行った。この区域では、縄文時代前期の住居跡1軒の他、中・近世の土壌、溝が多く検出された。

その後、工事計画上、上越新幹線の西側（後述する原遺跡II区）の調査を先行するよう、再度伊奈新都市建設事務所から要請された。そのため、支台北東部の調査と併行しながらII区の囲柵、表土除去を行い、表土除去が終了した11月下旬から遺構確認にはいった。II区は着手前は林であったため、木根が多数調査区内に存在していた。遺構に影響のないものは、表土除去と同時に抜根したが、遺構に影響のあるものは、人力で抜根することとなり、この作業に多くの時間をとら

れることを余儀なくされた。

3月中旬の時点で、II区の調査がほぼ終了し、再度I区南半の調査に着手した。平成6年度に入り、5月下旬にI区のはばすべての中近世の溝、塚の調査が終了し、6月から縄文時代の遺構の精査に入った。I区においては、AL軸より南側の区域は、平成6年度当初未買収で、調査にはいることができなかった。この区域の表土除去は7月後半から9月上旬にかけて行い、これと併行して、他の区域の縄文時代遺構の精査を行った。AL軸の南側部分の遺構確認に着手できたのは9月中旬であった。グリッド杭設定と併行して、9月下旬から遺構確認に入り、10月からAK-13、14、AL軸の南側の、住居跡集中域の調査を行った。AK-13、14に分布する遺構は包蔵する遺物も多く、深度もあるため、調査にやや時間を要した。

U-W-29-34グリッドの未買収地区の表土除去は平成7年1月下旬から開始、終了したのは2月下旬であった。その後直ちに遺構確認と遺構精査を行った。

2月18日には現地説明会を実施し、地元住民を中心に、269名の参加があった。

3月中旬に空中写真撮影、空中写真測量を行い、すべての作業を終了した。

その後、伊奈特定土地区画整理事業にかかわるこれまでの調査成果をもとに、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、伊奈町教育委員会、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が協議し、埋蔵文化財包蔵地の変更増補を行った。その際、一括して原遺跡として登録されていたものを、遺構・遺物の分布状況から、原遺跡、谷畑遺跡に分割し、それぞれ新しい線引きを行った。これによって、本調査の報告は、原・谷畑の2遺跡に分けて行うこととなった。

3. 調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1 発掘調査(平成5年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 横川 好富
常務理事兼管理部長 柴崎 光生
理事兼調査部長 中島 利治

庶務経理

庶務課長 萩原 和夫
主 査 賛田 清
主 事 菊池 久
経理課長 関野 栄一
主 任 江田 和美
主 事 長滝 美智子
主 事 福田 昭美
主 事 腰塚 雄二

発掘調査

調査部副部長 高橋 一夫
調査第四課長 今井 宏
主任調査員 剣持 和夫
主任調査員 木戸 春夫
調 査 員 村田 章人
調 査 員 宮澤 京子

2 発掘調査(平成6年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 栃原 嗣雄
常務理事兼管理部長 加藤 敏明
理事兼調査部長 小川 良祐

庶務経理

庶務課長 及川 孝之
主 査 市川 有三
主 事 長滝 美智子
主 事 菊池 久
経理課長 関野 栄一
主 任 江田 和美
主 事 福田 昭美
主 事 腰塚 雄二

発掘調査

調査部副部長 高橋 一夫
調査第四課長 酒井 清治
主任調査員 村田 章人

調 査 員 宮澤 京子

3 報告書作成(平成7年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 吉川 國男
常務理事兼管理部長 新井 秀直
理事兼調査部長 小川 良祐

庶務経理

庶務課長 及川 孝之
主 査 市川 有三
主 任 長滝 美智子
主 事 菊池 久
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主 任 江田 和美
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二

整理事業

資料部長 塩野 博
主幹兼資料部副部長 谷 井 彪
専門調査員 宮崎 朝雄
兼資料整理第二課長 村田 章人
主任調査員 村田 章人

4 報告書刊行(平成8年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 吉川 國男
常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
理事兼調査部長 小川 良祐

庶務経理

庶務課長 依田 透
主 査 西沢 信行
主 任 長滝 美智子
主 事 菊池 久
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主 任 江田 和美
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二

報告書刊行事業

資料部長 梅沢 太久夫
主幹兼資料部副部長 谷 井 彪

第二章 遺跡の立地と環境

原・谷畑遺跡は関東平野のほぼ中央、大宮台地片柳支台に位置する。大宮台地の東縁部は芝川、綾瀬川、元荒川などの河川によって複雑に開析されている。原・谷畑遺跡は綾瀬川の右岸に位置する。綾瀬川は現在中川水系に属するが、江戸時代以前の荒川の旧流路に当たる河川である。現在は元荒川の西側を南下して、大宮台地の東部を縦貫する。流路の走行方向は桶川市から伊奈町北半付近では北西から南東で、この付近における綾瀬川兩岸の低地部の幅は約700m前後である。

原・谷畑遺跡は、この綾瀬川の低地部を臨む位置にある。綾瀬川低地部から南西方向に侵入する支谷沿いに有り、標高は13~14mを測る。この支谷の幅は約150m程度、南西に500m程度侵入する。原遺跡はこの支谷のほぼ中央を臨み、谷畑遺跡は開口部左岸に位置する。

この支谷を挟んで対岸には北遺跡、大針貝塚が存在する。北遺跡は原遺跡のほぼ対岸にあたる。1980、1981年度に発掘調査が実施され、縄文時代中期の住居跡が72軒検出された(金子1987)。調査は上越新幹線建設に伴うもので、路線幅に沿ったものであったが、支台基

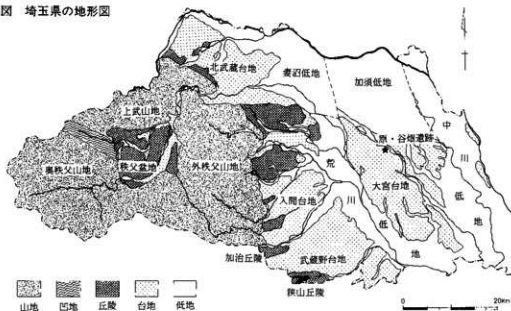
部から中央部にかけて住居跡が密集する状況が把握できた。原遺跡と同様、環状の住居跡集中域を有する大規模な集落である。

大針貝塚は谷畑遺跡のほぼ対岸にあり、1986年に発掘調査が実施された(西口他1990)。この調査では関山II式期の住居跡が2軒検出された。2軒ともヤマトシジミを主体とする住居内貝層を伴う。谷畑遺跡からは関山I式期後半段階の住居跡が1軒検出されているが、貝層は伴っていないかった。

原遺跡・谷畑遺跡と北遺跡・大針貝塚の古地形態の関係は類似している。居住域選択の時期的変化は、周辺資源の獲得方法の変化、集落内における住居占地の決定方法の変化などによるものであろうが、検討に値する事例である。

この他、原・谷畑遺跡の周辺には多数の遺跡が存在する。旧石器時代の遺跡はあまり確認されていないが、久保山遺跡(酒井他1983)でブロックが1ヶ所検出されている。また、向原遺跡では本報告と同じ伊奈特定土地区画整理事業に伴う発掘調査で旧石器時代の良好な資料が検出されている。

第1図 埼玉県の地形図



第2図 原・谷畑遺跡の位置・周辺遺跡分布図



1. 原遺跡 2. 谷畑遺跡 3. 北遺跡 4. 大針貝塚 5. 八幡谷遺跡 6. 相野谷遺跡 7. 戸崎前遺跡 8. 向原遺跡 9. 栗師堂根遺跡 10. 上新田遺跡 11. 小貝戸遺跡 12. 水川神社裏遺跡 13. 西浦遺跡 14. 小室大神前遺跡 15. 大山遺跡 16. 丸山遺跡 17. 志久遺跡 18. 久保山遺跡 19. 赤羽遺跡 20. 伊奈屋敷跡 21. 一二番耕地遺跡 22. 一八番耕地遺跡 23. 三番耕地遺跡 24. 諏訪坂貝塚 25. 十六番耕地遺跡 26. 十四番耕地遺跡 27. 十五番耕地遺跡 28. 秩父山遺跡 29. 谷津下I遺跡 30. 平塚水川遺跡 31. 南南遺跡 32. 明通遺跡 33. 井沼遺跡 34. 榎戸遺跡 35. 栗崎貝塚 36. 横瀬貝塚 37. 間山貝塚 38. 坂堂貝塚 39. 荒川附遺跡 40. 堂山公園遺跡 41. 久台遺跡 42. さくら日遺跡 43. さくら遺跡 44. 下柏間遺跡

本地域では縄文時代の遺跡が多数確認されており、また、学史上著名なものも多い。特に綾瀬川左岸には、関山貝塚、黒浜貝塚群を中心に前期の貝塚群が所在し、関東地方における縄文時代研究の中心的役割を果たした資料を輩出している。関山貝塚は関山式の標式遺跡として古くから知られているが、1971年に発掘調査が行われ、関山式期の住居跡が調査された(住野他1974)。その他栗崎貝塚、坂堂貝塚等、前期の貝塚が多数所在している。綾瀬川右岸には諸磯式期の小貝戸貝塚、前述の大針貝塚が所在するが、全体に貝塚は少ない。貝塚形成の条件が前期後半にいたり、より東側に移行した結果であろう(金子1990)。

縄文時代中期になると綾瀬川右岸には数多くの集落遺跡が営まれるようになる。上記北遺跡の他、戸崎前遺跡(註1)、薬師堂根遺跡、小室天神前遺跡(埼玉県立博物館1981)、大山遺跡(谷井他1979 金子他1982 濱野1989)、志久遺跡(笹森他1976)など、数多くの遺跡が所在する。戸崎前遺跡と薬師堂根遺跡は本報告と同じ事業に伴い調査が行われ、縄文時代中期の集落が検出されている。戸崎前遺跡では前期、及び後期初頭から前葉にかけての集落跡も確認されている。薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡はともに綾瀬川低地を臨む支谷の先端部に位置し、同じ中期集落として原遺跡、北遺跡とどのような関係にあったのか注目される。また、小室天神前遺跡、志久遺跡、大山遺跡、秩父山遺跡(赤石他1978)は原・谷畑遺跡から2~3km南に離れた位置にあるが、いずれも中期から後期初頭にかけての良好な資料が検出された遺跡である。大山遺跡は中期の住居跡が16軒確認され、住居跡は環状に配置されている。

後期中葉から晩期にかけての遺跡は、数を減らす傾向にある。原遺跡からは後期中葉から晩期前葉にかけての資料が出土しているがいずれも断片的である。原・谷畑遺跡の近隣にも当該期の大規模な遺跡は少ない。現在確認されている遺跡では、綾瀬川左岸に位置する井沼遺跡(安岡1960)がもっともまとまった資料

であろう。井沼遺跡は縄文時代後期末から晩期にかけての遺物が多量に出土した遺跡で、出土遺物は関東地方南部における土器編年の基準的資料となっているものである。綾瀬川を上流に遡ると後・晩期の遺跡として著名な桶川市後谷遺跡が所在する。また、後期中葉の遺跡としては葛瀬戸下稻間遺跡(磯崎1980)が、原・谷畑遺跡の北東約3kmの位置にある。また、伊奈氏尾敷跡からは縄文時代後・晩期の木製品の他、丸木船が2艘出土している(青木1984)。その他やや離れた遺跡では、蓮田市に所在する久台遺跡(橋本1984)、ささら遺跡(橋本他1985)、雅楽谷遺跡(橋本1990)、上尾市十四番耕地遺跡(小宮山1994)が後・晩期の遺跡としては著名である。

弥生時代にはいるとさらに集落の形成は衰退し、遺跡数は減少する。その中で前述の小室天神前では後期の住居跡が4軒検出され、良好な資料が得られている。

古墳時代では向原遺跡で同時代初頭の方形周溝墓、住居跡が確認されている(大和他1984)。前述の大山遺跡では古墳時代の住居跡が3軒検出されており、当該地域の古墳時代における代表的な遺跡と言える。古墳時代後期の遺跡は殆ど認められない。

奈良・平安時代の集落は近隣ではごく少なくなる。原・谷畑遺跡でも当該期の資料は殆ど検出されなかった。戸崎前遺跡で平安時代の住居跡が検出されているが、集落として大規模なものではない。古代の集落では大山遺跡で平安時代の住居跡、製鉄炉が検出されていることが注目される。

原遺跡では中世末期から近世初期にかけてのものと考えられる土構がわずかながら検出され、当該地域における開発の一端を示す事例となった。薬師堂根遺跡では中世の墓壇群、溝等が極めて多数検出された。今後資料の分析とともに、本遺跡周辺の地域開発史解明のための貴重な資料となる。

註1 現在(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団にて報告書作成中。

第三章 原遺跡の調査

1. 遺跡の概観

原遺跡は大宮台地片柳支台上に位置する。調査区は上越新幹線の路線を挟んで、大きくI区、II区に分けられる。また、この上越新幹線の建設に伴い、昭和56、58年度に調査が行われている。I区の北側には、谷畑遺跡が存在する。

遺跡が営まれた時代は、縄文時代中期、中・近世が中心で、ごくわずかに他の時代の遺構、遺物が認められる。今回の調査で確認された遺構は縄文時代中期の竪穴住居跡が7軒、縄文時代の土壌が130基、埋葬1基、中・近世の土壌が119基、井戸4基、溝46条、獨立柱建物跡1棟、塚1基、道路跡1条である。

遺構はすべてローム層の上面で検出された。基本層序は、I層 10YR3/3暗褐色土。表土。II層 10YR3/3暗褐色土 旧表土。III-1層 10YR3/2黒褐色土。ローム粒（極少）を含む。III-2層 黒褐色土と10YR3/4暗褐色土粒（中）がブロック状に混じり合う層。IV-1層 10YR3/3 暗褐色土。ローム粒をわずかに含む。IV-2層 10YR3/4 暗褐色土。均質。漸移層だが味強い。

III-1層中に浅間A軽石が含まれており、近世後半に堆積したと判断される。また、谷畑遺跡でのテフラの分析から、本遺跡基本土層III層に該当する黒褐色土中より、浅間C軽石、榛名一二ツ岳火山灰、富士貞観スコリア、浅間B軽石が検出されており、III層が比較的長い時間をかけて堆積したことがわかる。

縄文時代中期の住居跡群は、支台の中央部にあたる、I区南半部に集中する。I区南側に近接する昭和56、58年度の調査においても、縄文時代中期の住居跡が15軒検出されている。昭和56、58年度調査区の南側に接するII区には、縄文時代の遺構はほとんど分布せず、住居跡1軒、土壌が1基存在するだけである。I区と昭和56、58年度調査区の間には、約60m程の未調査部分が存在するため、住居跡分布の平面的な拡がりについて、やや不明な点は残るが、住居跡集中域の南限に

ついては、概ね把握できたといえよう。両調査区の間、I区の住居跡集中域のラインがそのまま延長するとすれば、環状の集中域を形成していた可能性もある。

住居跡集中域は、綾瀬川によって形成された低地から、南西に侵入する支谷に面する位置に形成されている。住居跡集中域の北側には幅40m程の谷が、支谷からさらに西にのびて台地を挟んでいる。調査区内における谷底面の標高は約8m、住居跡集中域の標高は13m前後で、5m程の比高差を持つ。この谷の北側にも、わずかに縄文時代中期の住居跡が分布している。また、谷の北側斜面には、中期末から後期初頭にかけての土器が散布しており、堀之内式期の土壌も存在する。後期の生活域がわずかに支台の先端に向かって移動していると考えられる。

縄文時代の遺構では、フラスコ形土壌、断面円筒形の土壌が検出されているが、その他に径が2～3mの大形の円形土壌が数基検出されている。底面中央がわずかに焼土化、または硬化しているものが多い。性格は不明とせざるを得ないが、出土遺物から中期末葉に帰属するものと考えられる。

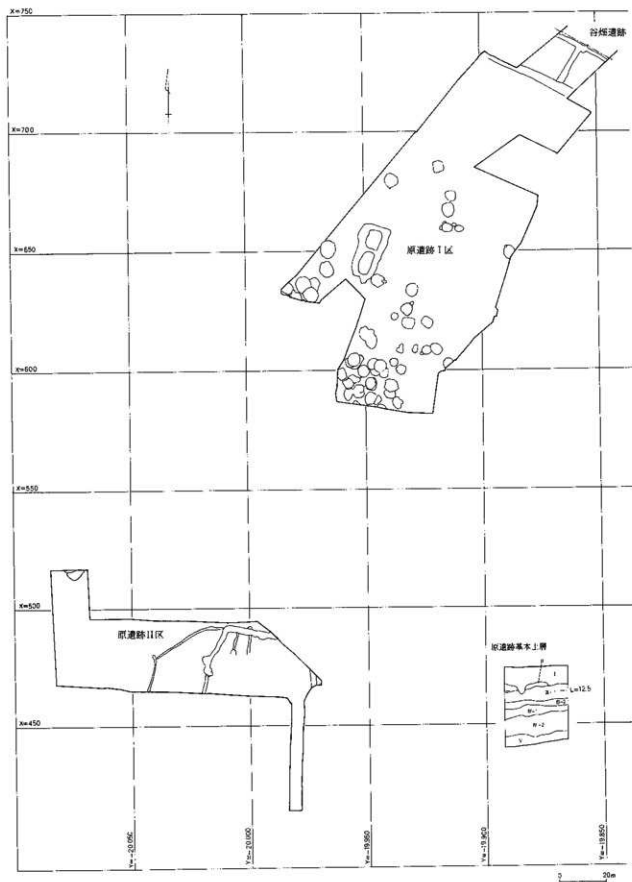
縄文時代の遺物は、土器がほとんどで、石器は比較的少ない。これは、本遺跡が属する地域の特性ともいえよう。特筆すべきものとして、釣り手土器の人面部の破片が検出されている（第215図1）。大宮台地ではきわめてまれな出土例である。グリッドからの出土遺物では、縄文時代前期、後期、晩期の土器もわずかずつ検出されているが、明確にこれらの時期のものとは判断される遺構はない。

中・近世に属する土壌、溝は、I区、II区ともに分布する。土壌では、地下式坑と考えられるものがII区で検出されている。かわりけがまとまって出土しており、墓塚の可能性が高い。II区では区画溝と考えられるものが2条検出された。これら2条の溝は切り合いを有し、わずかながら時期が異なるものである。両者

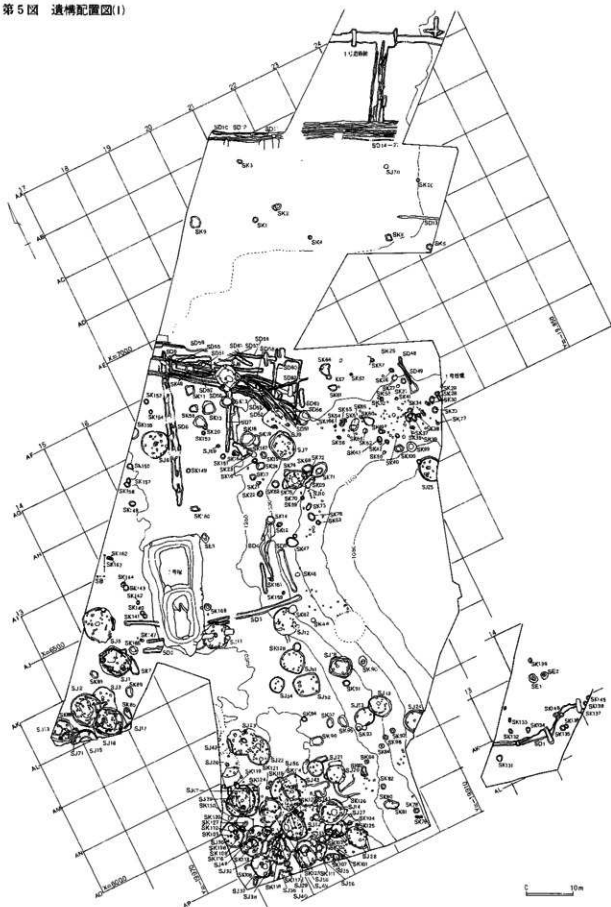
第3図 遺跡周辺の地形図



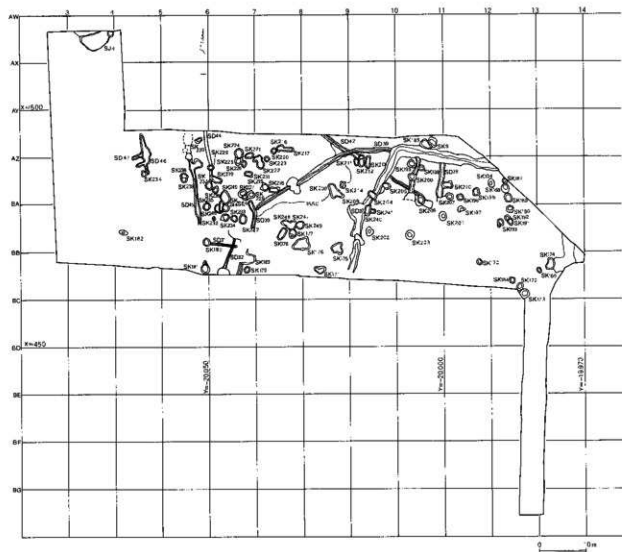
第4図 原遺跡全体図



第5図 遺構配置図(1)



第6図 遺構配置図(2)



ともほぼ同様のプランを有しており、新しい区画(第37号溝跡)は10~20m東側に移動している。第37号溝跡からは、永楽通宝を主体とした古銭がまとめて検出されている。出土遺物から、これらの溝は中世末~近世初期に属すると判断される。I区からは、近世の塚

と考えられる遺構が検出された。長径24mほどの大規模なものである。大きく2時期に分かれるもので、プランも大幅に変更されている。覆土からは、かわらけ、陶磁器等がわずかに検出されている。近隣に伝承等もなく、性格は不明である。

第7区 遺構配置図(3)



2. 遺構と遺物

(1) 旧石器時代

本遺跡の旧石器時代の遺物は原遺跡Ⅰ区南端の縄文時代の遺構が集中するグリッドの東西ANからAP列、南北14から17列にかけて検出された。いずれも縄文時代の遺構を調査中に出土したもので、ほとんどが住居跡や土壌内より検出されたものである。そのため出土層位は不明である。また遺構が密集しローム層を切り込んでいるため、石器のプライマリーな集中は検出できなかった。

製品としてはチャート製の細石核・細石刃が出土している。他にはチャート製の剥片・砕片、黒曜石製の剥片・砕片が検出された。剥片・砕片類は、縄文時代の遺構内から出土していることから、縄文時代の所産のものが混じっている可能性が高い。そこで今回は明確に旧石器時代の所産である細石器類と、それらと同一母岩の可能性の高い剥片を報告するにとどめた。

本遺跡で出土した細石核、細石刃はすべて同一の石材を使用しており特徴的である。石材は赤色を主に灰色が混じる良質のチャート材を使用している。同一の石材は剥片、砕片にも認められた。縄文時代の遺構の密集により石器集中は検出できなかったが、細石刃の生産を行っていた可能性は高い。また同一母岩の可能性が高いが石器や剥片の複合関係は認められなかった。

細石核(1)

底面に自然面を残す。正面の細石刃剥離面は正方形に近い。細かな打面調整はほとんど加えられておらず、正面左方向からと右側縁から為される。正面から側縁にかけて細石刃剥離作業が施される。左側縁には一回

底面より180度方向の異なる、細石刃剥離作業が為されている。正面より右側縁の一部にかけて5条の細石刃剥離が施される。

細石刃(2～7)

2～7は3軒の縄文時代の住居跡内より、散発的に検出されたものである。

3は端部が斜めになる平面形態で、4、5は端部まで直線的な平面形態である。6を除き剥片はほぼ同様の長さを持つ。4、5、6は下端を欠き7は両端を欠く。刃こぼれ状の微細な剥離は2、3、5に見られる。2は裏面より左側縁、3、5は両側縁にみられる。5は両側縁の全体にわたる。

剥片(8～11)

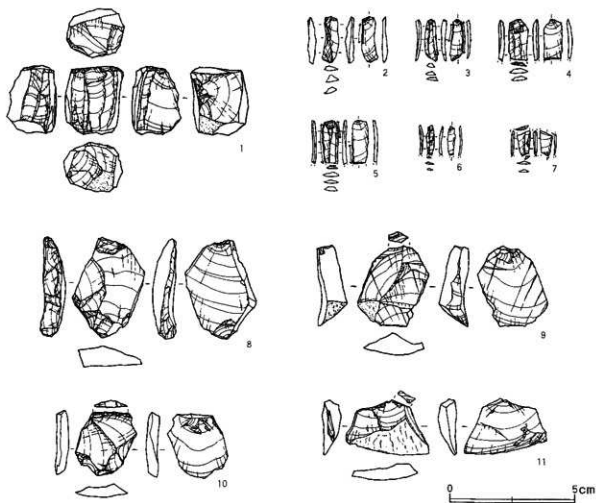
細石核、細石刃と同質のチャート材を使用するもので、同一母岩である可能性が高い剥片を図示した。

8は縦長の剥片で両側縁に面を残す肉厚な剥片である。主要剥離面と正面の剥離は反対方向に施される。側縁には正面側から剥離が施されている。9は正面の一部に自然面を残す肉厚な縦長剥片である。10は薄手の縦長剥片で正面上辺に微細な剥離が施される。また側縁の一部に刃こぼれが見られる。11は横長剥片で正面上辺に刃こぼれ状の微細な剥離が見られる。

8～11はいずれも裏面に主要剥離面を残す。10、11のように剥片の縁辺部分には、刃こぼれ状の微細な剥離が見られる。

いずれも1の細石核よりも平面形が大きくなるもので、細石刃剥離作業のための石核を作り出す過程において発生した剥片の可能性が考えられる。

第8図 グリッド出土細石器



第1表 旧石器観察表

番号	グリッド	石器名	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	AN-15	細石核	チャート	2.70	2.30	1.95	16.20	39号住
2	AP-16	細石刃	チャート	1.95	0.65	0.35	0.33	29号住
3	AN-15	細石刃	チャート	1.65	0.55	0.20	0.16	39号住
4	AN-15	細石刃	チャート	1.65	0.75	0.20	0.28	39号住
5	AP-16	細石刃	チャート	1.70	0.65	0.15	0.25	29号住
6	AN-15	細石刃	チャート	1.15	0.35	0.10	0.04	39号住
7	AP-16	細石刃	チャート	1.00	0.55	0.15	0.06	29号住
8	AO-16	剥片	チャート	3.95	2.90	0.90	9.76	34号住
9	AP-16	剥片	チャート	3.20	2.85	1.05	7.57	56号住
10	AO-16	剥片	チャート	2.50	2.45	0.45	3.16	122上層
11	AP-15	剥片	チャート	2.15	3.25	0.75	4.31	

(2) 縄文時代の遺構

a. 住居跡

第1号住居跡

AJ-14, AK-14に位置する。住居跡集中域の北側に位置する。遺存状態は良好で、壁は50~60cm程残っていた。周溝は2条認められた。柱穴も2列めぐらうで、1回の拡張があったと考えられる。新旧の住居の間で、平面形態に違いはない。同一規格上の拡張であったと考えられる。最終的なプランの長径は6.5m、短径は5.3mを測る。主軸方向はN-24°-Wである。

平面形態は、南壁がわずかにやや開き気味の長方形を呈し、南壁がわずかに外側に膨満する。南壁の部分で周溝が途切れ、柱穴が直線的に並ぶ。恐らくこの部分が入り口であったと推測される。奥壁に近い部分の浅い掘り込みの周囲に、ごくわずかに焼土化した部分が見られ、炉跡がこの掘り込みによって破壊されたものと考えられる。掘り込みの内部に焼土化した部分はなかった。

主柱穴は各壁に沿って並ぶ。各長辺に3または4基、奥壁にはほぼ中央に1基掘り込まれている。炉跡と入り口部の中間部分に柱穴が1基あるが(P32)、この柱穴は非常に深い。西壁奥壁寄りの主柱穴(P6)の周辺には小ピットが散在している。これらのピットの性格は明らかではないが、建築時、または解体時の足場の可能性があらう(関野1938)。

床面はほぼ平坦で水平、中央部には硬化がみられる。

西壁の一部がわずかに外側に広がっており、その部分に対応するように内側の周溝の幅が広がっている。この付近の覆土には、ロームブロックがやや多めに含まれていた。覆土堆積終了後に新たに掘り込まれた可能性もあるが、調査時にはその痕跡は確認できなかった。住居廃絶時の解体にともなって壁が破壊されたとも考えられる。

覆土の下位に炭化材が多めに含まれていたが、床面直上に位置する炭化材は殆ど認められなかった。住居が存立した状態で被災した可能性は低い。

柱穴の上層において柱痕の確認できたものはない。

出土遺物は非常に多く、ドットを確認できたものが3388点を数える。その殆どは土器の小破片で、大形の破片は少ない。石器は、ドットを確認したものを含めて、フレイク・チップが18点、石鏃1点、打製石斧6点、石核2点、石皿7点、磨石が3点が出土している。床面直上から出土したものはわずかに第126図5、7だけである。他はいずれも覆土の遺物である。第9図の断面図は、図版掲載資料のみドットを落としたものだが、これから見る限り、出土遺物に明確な層位差は認められず、住居跡型況時のある一時期に、かなり集中的に廃棄されたものと判断される。

第126図3、8は、各個体に属する破片が一ヶ所から集中して出土しており、廃棄される状況で、かなり個体としてまとまっていたことが考えられる。第125図1、第126図5、6は、接合した破片の出土位置がそれぞれ離れており、すでに多数の破片の状態で持ち込まれたと考えられよう。

上記の事実から、本住居跡は廃絶後、柱の抜き取りが行われ、廃棄された上層部分が火を受けた後、さまざまな廃棄物とともに遺物の堆積が順次行われたというプロセスが想定できよう。

第2号住居跡

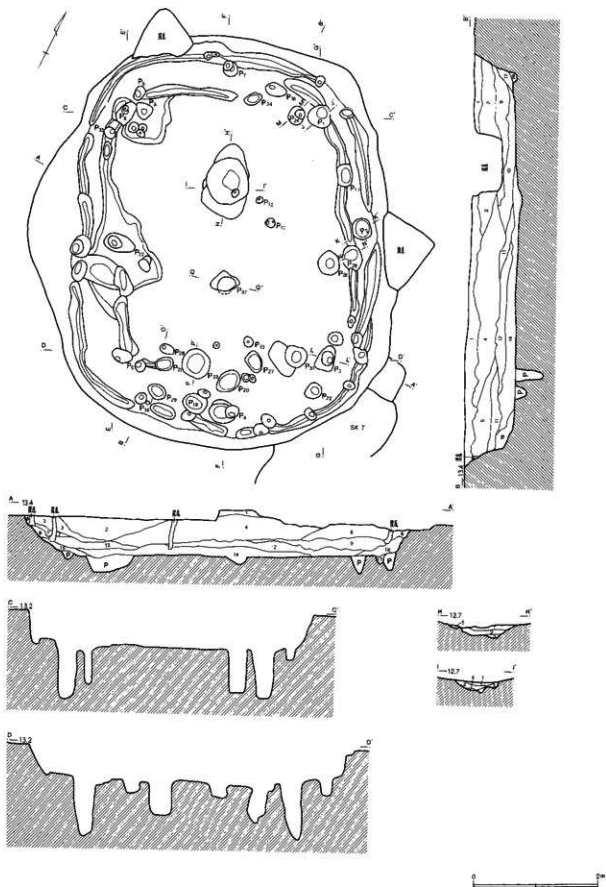
AK-13に所在する。第1号住居跡と同様、住居跡集中域の北側に位置する。ほぼ同一のプランで、1回の拡張がなされたようである。周溝が2条認められ、柱穴も同一軸上で複数認められる。現在残っている掘り込みは浅く、深さ約15~30cmである。長径はおそらく、7m前後であろう。短径は6.5mである。想定される主軸方向はN-28°-Wである。

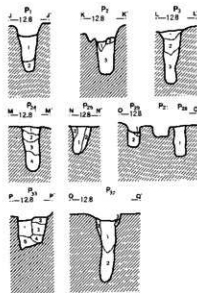
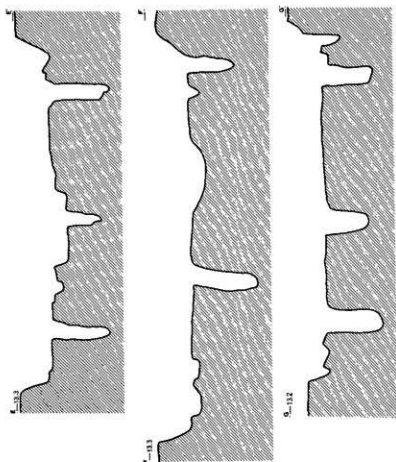
第16号住居跡を切って構築されているが、切り合う部分の壁は、平面では確認できなかった。

ほぼ円形に近い楕円形の平面形態を有し、柱穴、周溝もほぼプランに沿って配置される。

主柱穴の組み合わせはやや不明であるが、配置から見て6本柱穴であろう。柱穴の平均的な掘り込みは50~70cm前後である。断面で、柱痕と考えられる覆土

第9图 第1号住居跡





- 5-2-1
- 1 10783/4 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
 - 2 10783/3 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量、ローム粒 (小) 多量、焼土粒 (極小)・炭化物 (極小) 少量。
 - 3 10783/2 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量、炭化物 (中)・ローム粒 (中) 少量。
 - 4 10782/2 灰褐色土 ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (極小)・炭化物 (極小) 少量。
 - 5 10783/4 暗褐色土 ローム粒 (極小) 多量、炭化物 (極小)・焼土粒少量。
 - 6 10783/4 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量、焼土粒・炭化物 (極小) 少量。
 - 7 10783/4 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量、焼土粒・炭化物 (極小) 少量。
 - 8 10783/4 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (小) 多量、炭化物 (極小) 少量。
 - 9 10783/3 暗褐色土 炭化物 (中)・炭化物 (極小)・ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (極小) 多量。
 - 10 10783/2 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量、ローム粒 (極小) 多量、焼土粒 (極小)・炭化物 (中) 少量。
 - 11 10783/2 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量、炭化物 (中) 少量、焼土粒 (極小) 少量。
 - 12 10782/2 灰褐色土 炭化物 (極小)・ローム粒 (極小) 多量、焼土粒 (極小) 少量。
 - 13 10783/4 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量、ローム粒 (極小) 少量、炭化物 (小)・焼土粒 (極小) 少量。
 - 14 10783/3 暗褐色土 炭化物 (中) 多量、ローム粒 (小) 少量、焼土粒 (極小) 少量。
 - 15 10783/3 暗褐色土 焼土粒 (極小) 多量、炭化物 (小)・ローム粒 (極小) 少量。
 - 16 10783/4 暗褐色土 炭化物 (小) 少量、焼土粒 (極小)・炭化物 (極小) 少量。
 - 17 10783/4 暗褐色土 炭化物 (小)・ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (極小) 少量。
 - 18 10783/4 暗褐色土 炭化物 (小)・ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (極小) 少量。

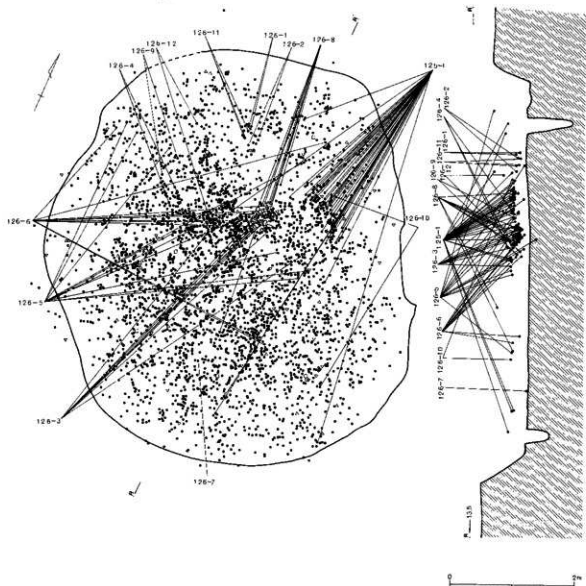
- 5-2-1 伊勢
- 1 10782/2 灰褐色土 炭化物 (極小) 多量、焼土粒 (極小)・灰黄褐色ローム粒 (極小) 少量。
 - 2 10782/2 灰褐色土 焼土粒 (極小) 多量、灰黄褐色ローム粒 (極小) 少量。
 - 3 10783/2 暗褐色土 ハードローム (中) 少量。
 - 4 10783/2 暗褐色土
 - 5 10782/2 灰褐色土 焼土粒 (極小) 少量。

- ピット 1
- 1 10783/4 暗褐色土 炭化物 (極小) 多量、焼土粒 (極小)・ローム粒 (極小) 少量。
 - 2 10784/4 褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
- ピット 2
- 1 10783/2 暗褐色土 炭化物 (極小) 多量、褐色ローム粒 (小)・焼土粒 (小) 少量。
 - 2 10783/2 暗褐色土 炭化物 (極小) 少量、褐色ローム粒 (極小) 多量。
 - 3 10783/4 暗褐色土 炭化物 (極小) 少量、褐色ローム粒少量。
- ピット 3
- 1 10783/2 暗褐色土 炭化物 (極小)・ローム粒 (極小) 多量、焼土粒 (極小) 少量。
 - 2 10783/2 暗褐色土 炭化物 (極小)・ローム粒 (極小) 多量。
 - 3 10784/3 におい黄褐色土 炭化物 (極小) 少量。

- ピット 2-4
- 1 10783/2 暗褐色土 焼土粒 (極小)・ローム粒少量、炭化物 (極小) 少量。
 - 2 10783/3 暗褐色土 炭化物 (極小)・褐色ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (極小) 多量。
 - 3 10783/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (小) 少量。
 - 4 10783/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (中) 多量。
- ピット 2-5
- 1 10783/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (小) 少量。
 - 2 10783/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- ピット 2-8
- 1 10783/2 暗褐色土 炭化物 (極小) 少量、焼土粒 (極小) 少量、褐色ローム粒 (極小) 多量。
- ピット 2-9
- 1 10783/2 黄褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
 - 2 10784/3 におい黄褐色土 褐色ローム粒 (小) 少量、炭化物 (極小) 多量。
- ピット 3-3
- 1 10783/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (小) 少量、炭化物 (極小) 少量。
 - 2 10784/3 におい黄褐色土 炭化物 (極小) 多量、褐色ローム粒 (極小) 少量。
 - 3 10784/4 褐色土 褐色ローム粒 (小) 少量、炭化物 (極小) 少量。
 - 4 10782/2 黄褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
 - 5 10782/2 黄褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- ピット 3-7
- 1 10783/2 灰褐色土 炭化物物なし。
 - 2 10783/2 暗褐色土 ローム粒 (小) 中量。
 - 3 10783/2 暗褐色土 炭化物物なし。



第10図 第1号住居跡遺物分布図



が確認できたものが多く、柱の基部が遺存した状態で、埋没が開始したことを示している。

床面には小さな凹凸が多数あり、小規模な攪乱があったと考えられる。

炉は地床炉で、平面形態はやや乱れた楕円形である。炉の底面ではロームの硬化が見られた。断面図では、炉跡の上部で掘り込みの痕跡が認められるが、詳細は不明である。

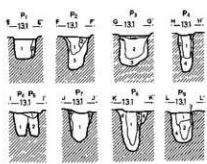
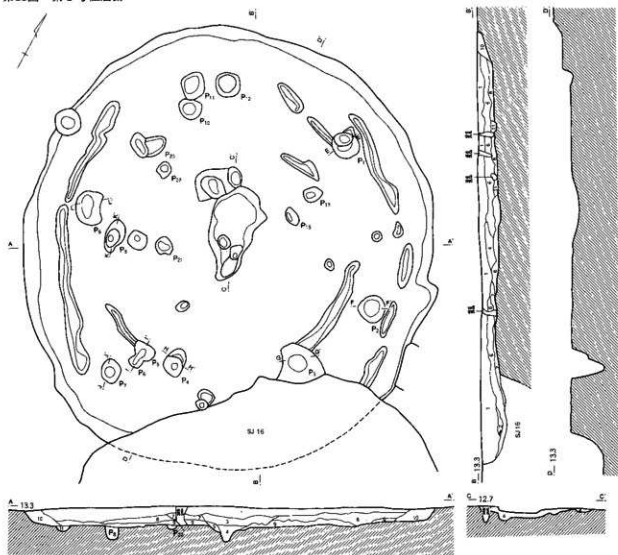
周溝は、拡張が行われたため2重にめぐるが、いずれも不連続で、部分的にしか認められない。

本住居跡は床面のロームが部分的に硬化してぼろぼ

ろになっている。炭化材等はあまり認められなかったが、構築後いずれかの時点で、火災にあっていいる可能性が高い。

遺物はドットが確認できたものは1014点である。そのうち石器が42点。床面出土の遺物は第131図2である。他は覆土出土であるが、掘り込みが浅く、垂直分布の特徴は明らかではない。第130図2の土器は火を受けており、器面は傷み、器形も歪んでいる。第130図1はほぼ全体が残る深鉢であるが、ほぼ一ヶ所からまとも出土している。第131図1, 2も各破片の出土位置が近接しており、埋没が短期間に行われたことを

第11図 第2号住居跡

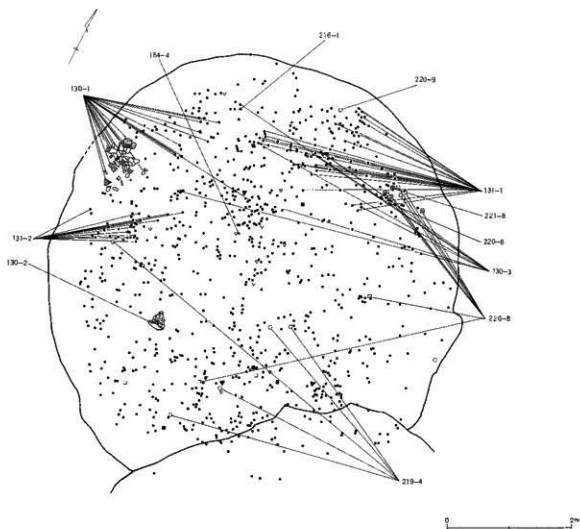


SJ 2

- 1 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)・炭化物(極小)・白色砂(極小)少量。
- 2 10YR2/7 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)・炭化物(極小)少量。
- 3 10YR2/7 暗褐色土 炭化物(極小)多量。褐色ローム粒(小)少量。白色砂(極小)微量。
- 4 10YR2/7 暗褐色土 粘土粒(極小)多量。褐色ローム粒(極小)・炭化物(極小)少量。
- 5 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)・白色砂少量。炭化物(小)微量。
- 6 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。焼土粒(極小)微量。炭化物(極小)多量。
- 7 10YR2/4 暗褐色土 炭化物(極小)・褐色ローム粒(極小)少量。
- 8 10YR2/2 黒褐色土 炭化物(極小)多量。褐色ローム粒(小)・白色砂(極小)少量。
- 9 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)・炭化物(極小)少量。
- 10 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。褐色ローム粒多量。
- 11 10YR2/4 褐色土 炭化物(極小)微量。

- ビット 1
- 1 10YR2/7 暗褐色土 炭化物(極小)多量。褐色ローム粒(極小)少量。
 - 2 10YR2/4 褐色土 炭化物(極小)微量。
- ビット 2
- 1 10YR2/7 暗褐色土 炭化物(極小)多量。褐色ローム粒(小)少量。
 - 2 10YR2/4 暗褐色土 炭化物(極小)微量。
 - 3 10YR2/4 褐色土 風化した褐色ローム粒多量。
- ビット 3
- 1 10YR2/7 暗褐色土 炭化物(極小)多量。焼土粒(極小)・褐色ローム粒(極小)少量。
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 炭化物(極小)・褐色ローム粒(極小)少量。
 - 3 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)多量。
- ビット 4
- 1 10YR2/7 暗褐色土 炭化物(極小)・褐色ローム粒(小)少量。
 - 2 10YR2/4 褐色土 炭化物(極小)微量。
 - 3 10YR2/4 暗褐色土 炭化物(極小)微量。
 - 4 10YR2/4 褐色土 炭化物(極小)微量。
- ビット 5
- 1 10YR2/7 暗褐色土 炭化物(極小)少量。
 - 2 10YR2/4 褐色土 暗褐色土粒少量・炭化物(極小)微量。
- ビット 6
- 1 10YR2/4 褐色土 暗褐色土粒少量。
- ビット 7
- 1 10YR2/7 暗褐色土 炭化物(極小)多量。褐色ローム粒(極小)少量。
 - 2 10YR2/4 褐色土 褐色ローム粒少量。
- ビット 8
- 1 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
 - 2 10YR2/4 褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
 - 3 10YR2/7 暗褐色土 風化した褐色ローム粒多量。
 - 4 10YR2/4 褐色土 暗褐色土粒少量。
- ビット 9
- 1 10YR2/7 暗褐色土 炭化物(極小)多量。褐色ローム粒(小)少量。
 - 2 10YR2/7 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
 - 3 10YR2/4 暗褐色土 風化した褐色ローム粒多量。
 - 4 10YR2/4 褐色土 暗褐色土粒少量。

第12図 第2号住居跡遺物分布図



示していよう。

石器では、磨石2点、石皿1点、凹石18点である。他に礫、不明等の石器がある。

第220図8の石皿は破砕して小片の状態で住居跡内に分布しているが、大部分はまとめて出土している。完形の状態では火を受け、破損したと考えられる。同図9も8に近い位置から出土した。床面にごく近い位置からの出土である。第219図4の磨石も受熱の上、破損している。これらの遺物は本住居跡に本来的に帰属していた可能性が高い。

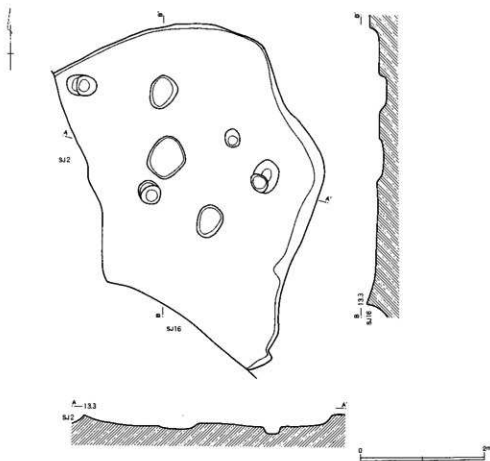
これらの状況から本住居跡はおそらく使用時、また

は廃絶直後に火を受けた可能性が高い。しかし覆土、床面上における炭化物の分布は濃いとはいえず、どのような状況の下で火を受けたのかは不明である。焼失後、後処理が行われた可能性もある。

第3号住居跡

AK-13、AK-14に位置する。第2号住居跡、第16号住居跡と重複しているため、全体は明らかではない。平面形態はやや歪んでいるが、本来は、楕円形、もしくは円形を呈していたと考えられる。壁は浅く、確認面との比高差は10~20cmである。柱穴は6本確認されたが、配内の規則性は不明である。炉は壁の近く

第13図 第3号住居跡



にあり、浅い地床炉である。

遺物は少なく、図示できる遺物は第133図に掲載したもののみである。炉の位置、平面形態などから、本住居跡は、確認できた状況と本来的な形状との間にかんがりの差異がある可能性がある。

第4号住居跡

AW-3に位置する。本遺跡における住居跡の中で、もっとも西に位置する。住居跡集中域の一部を構成するのかわ不明である。

一部が調査区外にかかり、攪乱によって破壊されているため、全容は明らかではない。木の根による攪乱が激しかった。平面形態は恐らく長方形を呈していたと考えられる。柱穴は9基確認された。短軸に沿う3基と東壁中央に位置する1基が主柱穴と考えられる。確認できた壁は浅く、約25cm前後である。炉跡は確認

できなかった。南コーナー付近に浅い落ち込みがあるが、本住居跡に伴うか否かは不明である。周溝はない。

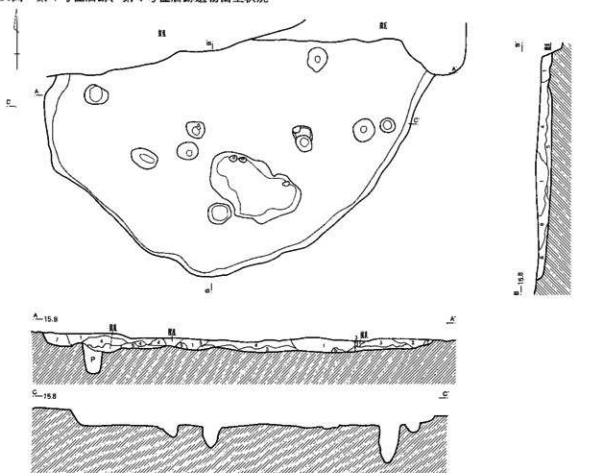
出土遺物は少ない。第134図1の深鉢は、南壁付近の床面に押しつぶされた状態で出土した。個体の約半分ほどが残存している。石器はフレイク・チップ類が多く、11点検出された。他に石鏃2点、打製石斧2点が検出されている。

第5号住居跡

A I-14, A J-14に位置する。住居跡集中域からわずかに北側にはずれた位置にある。隅丸五角形に近い楕円形を呈する。長軸7.5m、短軸6.6mで、本遺跡の住居跡の中では大形の部類に属する。壁は現存する部分で約45cmである。想定される主軸方向はN-0°で、ほぼ真北を向く。SE1、2によって破壊されている。

床面はほぼ平坦である。主柱穴は恐らく6本で、東

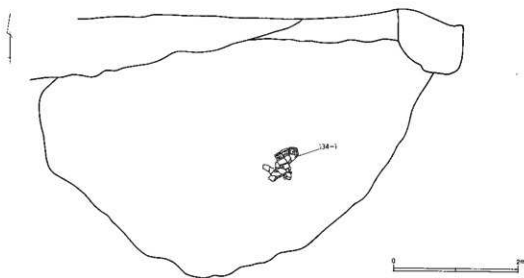
第14図 第4号住居跡、第4号住居跡遺物出土状況



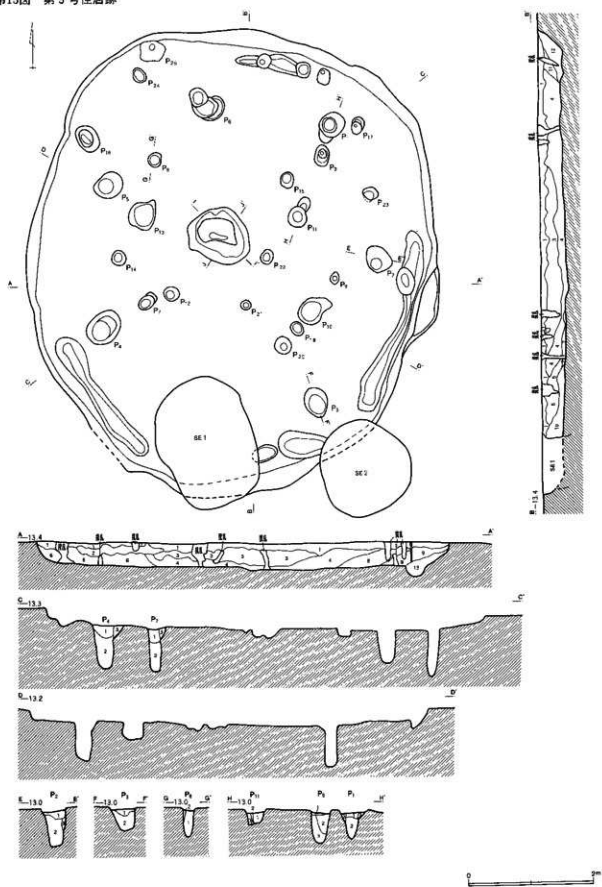
S J 4

- 1 10Y8/2 黒褐色土 風化した褐色ローム粒(小)少量、炭化物・白色粘雑質。
- 2 10Y8/4 暗褐色土 炭化物少量、粘土粘雑質。風化した褐色ローム粒多量。
- 3 10Y8/7 暗褐色土 粘土粒多量、炭化物少量。
- 4 10Y8/2 黒褐色土 炭化物多量、褐色ローム粒(小)少量、粘土粘雑質。
- 5 10Y8/8 褐色土 暗褐色土粒(細小)少量。
- 6 10Y8/3 暗褐色土 褐色ローム粒(小)少量。
- 7 10Y8/6 暗褐色土 褐色ローム粒(小)少量、壁の崩壊上。
- 8 10Y8/4 褐色土 10Y8/6暗褐色ローム粒(細小)少量、壁の崩壊上。

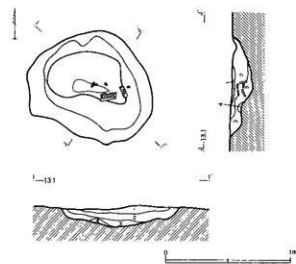
0 2m



第15図 第5号住居跡



第16図 第5号住居跡跡跡



ピット 1

- 1 10Y23/3 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量、白色粒(極小)散見。
- 2 10Y23/2 暗褐色土 褐色ローム粒少量。
- 3 10Y16/6 褐色土

ピット 2

- 1 10Y23/3 暗褐色土 褐色ローム粒(小)少量、白色粒(極小)散見、上部に緑化跡が散見。
- 2 10Y23/2 暗褐色土 褐色ローム粒少量。
- 3 10Y16/6 褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。

ピット 3

- 1 10Y24/4 褐色土 褐色ローム粒少量、炭化物散見。
- 2 10Y16/6 褐色土 褐色ローム粒少量。

ピット 4

- 1 10Y23/3 暗褐色土 ローム粒(極小)少量。
- 2 10Y23/2 暗褐色土 ローム粒(極小)少量。
- 3 10Y16/6 褐色土 褐色ローム粒(極小)散見。

西の壁に沿って直線的に配置される。東壁中央の柱穴の位置にずれがみられる。南壁の膝湾部付近での配置は、破壊のため明らかではない。柱穴の土層で、柱痕の観察されたものはない。

炉はほぼ中央に位置する。掘り込みの浅い地床炉で、底面は焼土化している。平面形態は不整形円形を呈する。炉跡内から、土器片数点と、半分に折れた磨製石斧が1点検出されている(第218図3)。

周溝は1条で、南側の壁に沿って部分的に認められる。

床面上に暗褐色系統の覆土が堆積し、その上位に黒褐色系の土層が認められる。堆積の状況から本住居跡は廃絶後自然堆積によって埋没したものと考えられる。

遺物はドットを確認したものは635点で、うち石器が13点である。住居跡の規模と比較すると出土遺物の

SJ 5

- 1 10Y23/4 暗褐色土 褐色細ローム粒、褐色土粒(中)多量。
- 2 10Y23/3 暗褐色土 炭質褐色ローム粒(極小)少量、白色粒(極小)多量。
- 3 10Y23/2 暗褐色土 炭質褐色土粒(極小)多量、白色粒(極小)少量。
- 4 10Y23/1 暗褐色土 炭質褐色土粒(極小)多量、褐色土粒、炭化物散見、白色粒少量。
- 5 10Y23/0 暗褐色土 炭質褐色土粒(極小)、白色粒(極小)少量、褐色土粒多量。
- 6 10Y24/4 暗褐色土 炭質褐色土粒(極小)少量、白色粒(極小)、褐色土粒多量。
- 7 10Y24/3 褐色土 炭化した炭質褐色ローム粒(小)少量、壁の焼土層。
- 8 10Y23/4 暗褐色土 炭質褐色ローム粒(極小)、炭化跡少量、白色粒(極小)、炭化物散見。
- 9 10Y24/3 におい褐色土 炭化した褐色ローム粒多量、壁の焼土層。
- 10 10Y23/4 暗褐色土 炭質褐色土粒(極小)少量、褐色土粒、炭化跡多量。
- 11 10Y24/4 褐色土 炭化した褐色ローム粒多量、壁の焼土層。
- 12 10Y23/4 暗褐色土 炭質褐色土粒(極小)、炭化跡少量。
- 13 10Y24/3 におい褐色土 炭化した褐色土粒少量。

SJ 5新編

- 1 10Y23/4 暗褐色土 ローム粒(極小)・粘土粒少量、白色粒・黒色土粒散見。
- 2 10Y23/3 暗褐色土 粘土粒(小)多量、ローム粒(極小)少量、白色粒・黒色土粒散見。
- 3 10Y24/4 褐色土 焼土層。
- 4 10Y24/3 褐色土 白色粒散見。

ピット 7

- 1 10Y23/4 暗褐色土 褐色ローム粒(小)少量。
- 2 10Y23/3 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
- 3 10Y24/4 褐色土 褐色ローム粒(小)散見。

ピット 8

- 1 10Y24/2 におい褐色土 褐色ローム粒(極小)散見、暗褐色土粒(小)少量。
- 2 10Y24/4 褐色土 ハードローム(中)少量。

ピット 9

- 1 10Y23/3 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
- 2 10Y23/2 暗褐色土 ハードローム(小)少量。
- 3 10Y23/1 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)散見。

ピット 11

- 1 10Y23/3 暗褐色土 ハードローム(中)少量。
- 2 10Y23/2 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
- 3 10Y24/5 褐色土 ハードローム。

数は少ない。大形の破片も少なく床面出土遺物はほとんどみられなかった。覆土が浅いため、垂直分布についての傾向はつかめないが、平面分布では、住居跡の中央部を中心に、ほぼ前面に散漫に分布する。

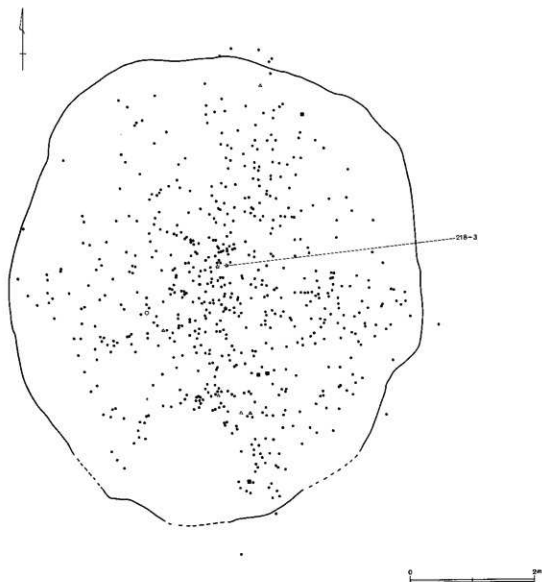
第6号住居跡

AF-16, AF-17, AG-16, AG-17に位置する。住居跡集中域から離れ、支台中央部に位置する。平面形態は第5号住居跡と同様、やや五角形に近い円形を呈する。長軸5.7m、短軸5.7mを図る。壁は20cm程残存している。拡張、改築等の痕跡は認められない。床面は概ね平坦で、全体に硬化している。

主柱穴は壁に沿って配置されている。恐らく6本で構成されていたと考えられる。柱痕の痕跡は認められない。

炉跡は住居跡のほぼ中央に位置する。浅い掘り込みを持つ地床炉である。平面形態は不整形円形で、東側

第17図 第5号住居跡遺物分布図



に付随するような小ピットを有する。このピットは壁、底面ともに焼土化しており、炉跡の一部を構成していたものと考えられる。このピットのさらに東側約70cmの所にごく浅い掘り込みがあり、やはり焼土化している。周溝は認められない。

南壁膨湾部に隣接して埋裏が1基検出されている。胴部下半以下が欠損した深鉢である(第136図1)。口縁部が住居跡の中央部に向くように設置されていた。掘り方は南側がやや広い。

遺物は全体に少ない。住居跡の中央部を中心に、散漫に分布している。ドットを記録して取り上げた遺物は121点で、そのうち石器が12点である。石器ではフレ

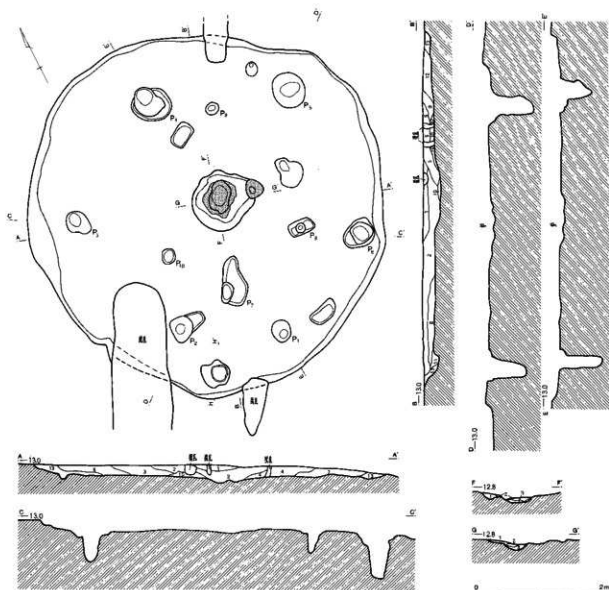
イク・チップ類7点、石皿1点、他は碟、器種不明なものである。第136図2の有孔銚付土器は、床面直上に伏せられた状態で検出された。それ以外はほとんどが覆土層内の遺物である。

第7号住居跡(第7a、第7b号住居跡)

AG-19, AH-19に位置する。支台中央部の谷に面した斜面上に位置する。平面形態は、やや長方形に近い五角形を呈する。長径6.3m、短径5.3mで、壁の残りはよい。もっともよく残っているところで80cmを図る。主軸方向はN-10°-Eであるが、P1と炉跡を結ぶラインが主軸となる可能性もあろう。

床面はほぼ平坦で、中央付近はよく硬化している。

第18図 第6号住居跡



S.J. 6

- 1 10734/4 褐色土 黒色土粒少量、白色粒少量、ローム粒少量。
- 2 10734/3 暗褐色土 黒色土粒少量、白色粒、ローム粒少量。

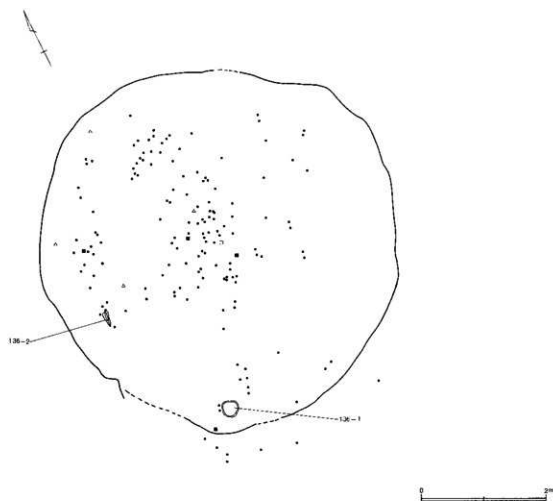
S.J. 6

- 1 10732/3 暗褐色土 ローム粒(極小)、白色粒(極小)、炭化物中量。
- 2 10732/2 黒褐色土 黒色土粒(極小)少量、ローム粒(極小)、白色粒(極小)、炭化物中量。
- 3 10732/3 暗褐色土 ローム粒(極小)、白色粒(極小)、炭化物(極小)中量。1に類似。
- 4 10732/2 暗褐色土 ローム粒(極小)中量。2に似る少量土粒混在少ない。
- 5 10732/2 暗褐色土 黒色土粒(極小)少量。炭化物ほとんどない。
- 6 10732/3 暗褐色土 ローム粒(極小)、白色粒(極小)少量。
- 7 10732/3 暗褐色土 炭化したローム粒(中)、ローム粒(極小)、白色粒(極小)少量。
- 8 10732/2 暗褐色土 炭化したローム粒(中)少量、ローム粒(極小)少量。
- 9 10732/2 暗褐色土 炭化したローム粒(中)、白色粒(極小)少量、ローム粒(極小)少量。
- 10 10732/3 暗褐色土 炭化したローム粒(中)少量、白色粒(極小)、ローム粒(極小)少量。
- 11 10732/3 暗褐色土 ローム粒(極小)中量。
- 12 10732/3 暗褐色土 10734/3 に近い暗褐色土。白色粒(極小)、ローム粒(極小)少量。
- 13 10734/3 赤褐色土 暗褐色土粒(中)少量。

S.J. 6 砂層

- 1 10732/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量、白色粒(極小)少量、焼土粒(極小)少量。
- 2 10734/3 に近い暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量、白色粒(極小)少量、焼土粒(極小)少量。
- 3 7.51234/4 暗褐色土 焼土粒(極小)少量。

第19図 第6号住居跡遺物分布図



拡張、建て替え等の痕跡は認められない。主柱穴は5本で(P1~5)、いずれも深さが70~80cm程のものである。P8~P17はいずれも小ピットで、性格は不明である。主柱穴の土層で、柱痕の痕跡が確認されたものはなかった。

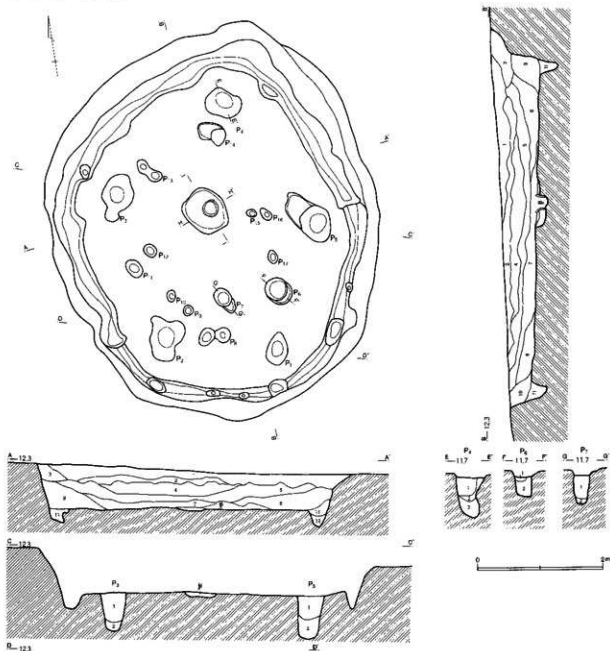
炉跡の位置、柱穴の配置から、南壁が入り口部に相当すると考えられる。炉跡はほぼ中央に位置する。深鉢の口縁部と下半部を打ち欠いた深鉢を炉体として使用している。掘り方は楕円形で、深さは炉体土器の南側がわずかに深い。

周溝は幅約30cm、深さは深い部分で約30cm、浅い部分で15cm程である。西壁と東壁に各1ヶ所、周溝の底

面に、奥壁に向かって深くなる段差が認められる。また、南~南東壁部分の周溝底面には小ピットが散在する。

本住居跡では、炉跡の上位約10~30cmの覆土中からまとめて土器が出土した。第138図に示したものが、当該の個体である。炉体土器とは時期がかなり離れるため、住居跡埋没時に堆積した可能性は低い。住居跡の土層断面では覆土内に明確な遺構は確認できなかったが、住居跡堆積後、人為的な掘削が行われて、土器が残された可能性が高い。調査時には覆土中に遺構を検出することができなかったため性格は不明だが、便宜的に7b号住居跡としておきたい。

第20図 第7号住居跡



S J 7

- 1 7.5YR2/3 暗褐色土 酸化鉄多量、淡黄褐色ローム粒多量、白色粒多量。
- 2 7.5YR2/2 黒褐色土 酸化鉄多量、淡黄褐色ローム粒（極小）、白色粒（極小）多量。
- 3 7.5YR2/4 暗褐色土 酸化鉄多量に多量、淡黄褐色ローム粒（極小）、白色粒（極小）少量。
- 4 7.5YR2/2 黒褐色土 淡黄褐色ローム粒（極小）少量、白色粒（極小）多量。
- 5 10YR2/3 黒褐色土 淡黄褐色ローム粒（極小）少量、白色粒（極小）多量、ハードローム（中）少量。
- 6 10YR2/4 暗褐色土 淡黄褐色ローム粒（極小）、ハードローム（小）少量。
- 7 10YR2/4 暗褐色土 淡黄褐色ローム粒（極小）少量、ハードローム（極小）少量。
- 8 10YR2/4 暗褐色土 淡黄褐色ローム粒（小）、（極小）少量、酸化鉄少量。
- 9 7.5YR2/3 暗褐色土 淡黄褐色ローム粒（小）少量、酸化鉄多量、酸化鉄多量。
- 10 7.5YR2/4 暗褐色土 淡黄褐色土（極小）少量。
- 11 10YR2/3 暗褐色土 淡黄褐色土（極小）少量。
- 12 7.5YR2/4 暗褐色土 酸化鉄少量。

S J 7ピット

ピット 1

- 1 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒（極小）少量。
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土。

ピット 2

- 1 10YR2/3 暗褐色土 炭化物（極小）少量、ローム粒（中）中量。
- 2 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒（中）少量、黄褐色土粒中量。

ピット 3

- 1 10YR2/3 暗褐色土 炭化物（極小）少量、ローム粒（小）中量。
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土。

ピット 4

- 1 10YR2/3 黄褐色土 炭化物（極小）ローム粒（中）少量、ローム粒（極小）中量。
- 2 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒（極小）少量。

ピット 5

- 1 10YR2/3 暗褐色土 炭褐色土粒（極小）少量、ローム粒（小）中量。
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土。

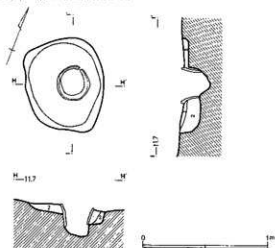
ピット 6

- 1 10YR2/2 黄褐色土 炭化物（極小）少量、ローム粒（小）中量。
- 2 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒（中）少量。

ピット 7

- 1 10YR2/3 黄褐色土 ローム粒（極小）、ローム粒（中）少量、炭化物（小）中量。
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色土。

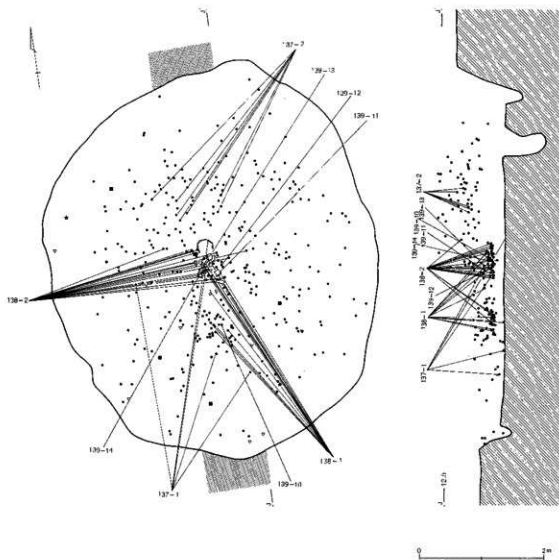
第21図 第7号住居跡炉跡



S J 7 炉跡

- 1 10YR2/3 暗褐色土 細小のローム質・焼土粒・炭化物少量。
 2 10YR2/3 暗褐色土・10YR2/3暗褐色ハーフローム 炭化物・焼土粒等は含まない。

第22図 第7号住居跡遺物分布図

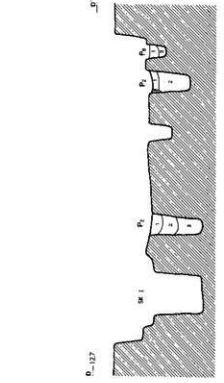
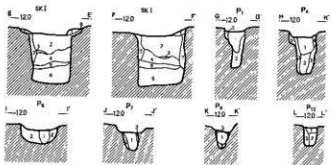
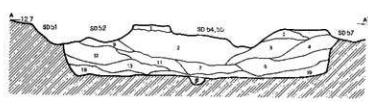
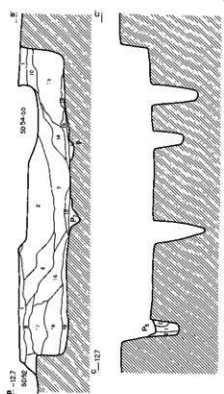
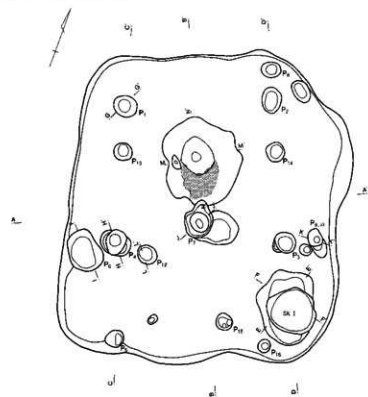


本住居跡出土遺物で、ドットの確認できた遺物は405点である。石器では石鏃2点、打製石斧2点、磨石、石皿各1点が検出されている。全体に散在するのではなく、各個体に属する破片が集中して分布するという傾向がみられる。

第8号住居跡

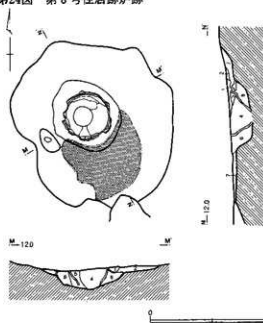
A F-19に所在する。住居跡集中域から北に離れた位置にある。平面形態は、わずかに一端の拡がる長方形を呈する。近世の溝跡に切られているが、掘り込みが深いため、大半は破壊から免れている。壁は約80cm遺存している。長径4.8m、短径4.3mを測る。主軸方向はN-20°-Wである。

第23図 第8号住居跡



- S J 8
- 1 10734/4 褐色土、白色粘多量、炭化したローム粒(中)。
 - 2 10732/2 灰褐色土 ローム粒(極小)少量。
 - 3 10732/2 灰褐色土 炭化したローム粒(小)少量、ローム粒(極小)中量。
 - 4 10732/3 暗褐色土 焼上粒(極小)少量、ローム粒(小)。
 - 5 10734/2 灰黄褐色土 ローム粒(小)中量。
 - 6 10732/2 灰褐色土 焼上粒(極小)少量、ローム粒(極小)中量。
 - 7 10732/2 灰褐色土 ローム粒(小)、炭化物(小)少量、ローム粒(極小)中量。
 - 8 10732/3 暗褐色土 炭化したローム粒(中)少量、ローム粒中量。
 - 9 10732/3 暗褐色土 炭化したローム粒(中)少量、ローム粒中量。
 - 10 10734/3 暗褐色土 炭化したローム粒(中)少量、ローム粒中量。
 - 11 10732/3 暗褐色土 ローム粒(極小・中)少量。
 - 12 10734/2 灰黄褐色土 ローム粒(極小・中)少量。
 - 13 10734/2 灰黄褐色土 ローム粒(極小)少量、F-120ローム(中)中量。
 - 14 10732/3 暗褐色土 ローム粒(極小)少量、ローム粒(小)少量。
 - 15 10734/2 灰黄褐色土 ローム粒(極小)少量、炭化物・焼上粒少量、ローム粒(中)中量。
 - 16 10732/3 暗褐色土 ローム粒(極小)少量、ローム粒(中)少量。
 - 17 10734/2 灰黄褐色土 ローム粒(極小)少量、ローム粒(小)少量。
 - 18 10734/2 灰黄褐色土 ローム粒(極小)少量、ローム粒(小)中量。
 - 19 10734/2 灰黄褐色土 ローム粒(極小)、ローム粒(中)少量、均質な層。

第24図 第8号住居跡炉跡



S J 8 6 跡

- 1 107E3/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 2 107E3/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 3 107E3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (極小) 少量。
- 4 7.107E3/3 暗褐色土 焼土粒 (極小) 少量、中に炭化物 (小) 少量。
- 5 7.107E3/3 暗褐色土 焼土粒 (極小) 少量。
- 6 107E3/4 暗褐色土 焼土粒 (極小) 少量、褐色ローム粒 (極小) 少量、炭化物少量。
- 7 107E3/2 黒褐色土 焼土粒 (極小) 少量。
- 8 107E3/4 におい黄褐色土 暗褐色土粒 (極小) 少量、焼土粒 (小) 少量。

ピット 1

- 1 107E3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 2 107E3/2 におい黄褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 3 107E3/6 褐色土 暗褐色土粒 (極小) 少量。

ピット 2

- 1 107E3/4 暗褐色土 暗褐色土粒 (極小) 少量。
- 2 107E3/2 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (小) 少量。
- 3 107E3/4 褐色土 暗褐色土粒 (小) 少量。

ピット 3

- 1 107E3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量、炭化物少量。
- 2 107E3/4 褐色土 風化した褐色ローム粒 (小) 少量。
- 3 107E3/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。

ピット 4

- 1 107E3/3 暗褐色土
- 2 107E3/3 におい黄褐色土
- 3 107E3/4 におい黄褐色土
- 4 107E3/4 暗褐色土
- 5 107E3/4 褐色土

ピット 5

- 1 107E3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 2 107E3/4 褐色土 炭化炭少量、粘性あり。

ピット 6

- 1 107E3/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 少量、炭化炭少量。
- 2 107E3/2 におい黄褐色土 風化した黄褐色ローム粒 (中) 少量、炭化炭少量。

ピット 7

- 1 107E3/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (小) 少量。
- 2 107E3/4 褐色土 風化した黄褐色ローム粒 (小) 少量。
- 3 107E3/6 褐色土 炭化炭少量。

ピット 8

- 1 107E3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 2 107E3/6 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 3 107E3/4 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。

ピット 9

- 1 107E3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 2 107E3/6 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 3 107E3/4 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量、粘性あり。

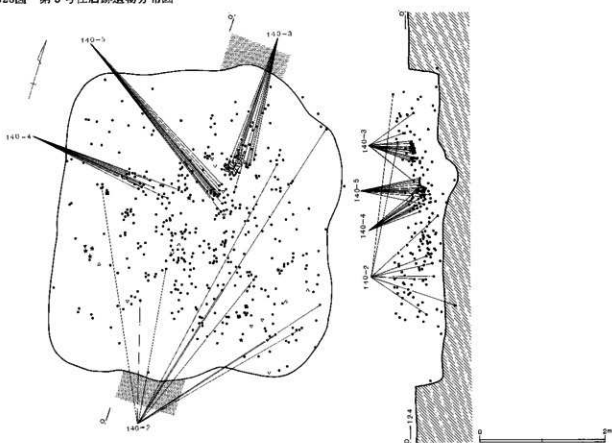
ピット 10

- 1 107E3/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 2 107E3/3 におい黄褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量、しまりなし
- 3 107E3/4 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量、炭化物少量、しまりなし。

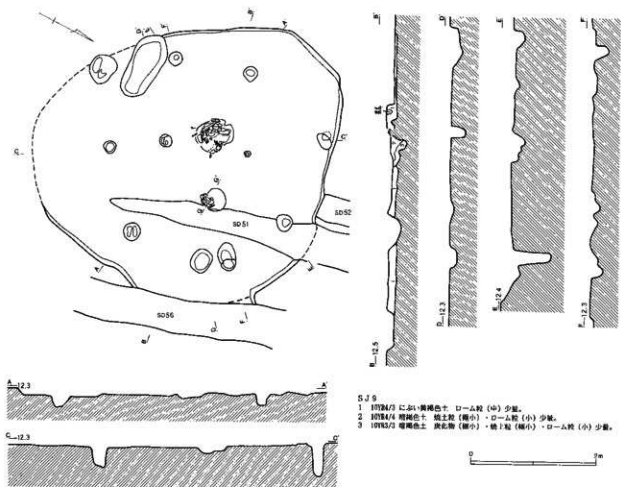
S E 1

- 1 107E3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。
- 2 107E3/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量、炭化物 (極小) 少量。
- 3 107E3/4 褐色土 暗褐色土粒 (極小) 少量。
- 4 107E3/3 暗褐色土 炭化物 (小)・褐色ローム粒少量。
- 5 107E3/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (極小) 少量。
- 6 107E3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (小)・焼土粒 (極小) 少量。
- 7 107E3/4 暗褐色土 風化した褐色ローム粒 (小) 少量。
- 8 107E3/4 褐色土 褐色ローム粒 (小) 少量。

第25図 第8号住居跡遺物分布図



第26図 第9号住居跡



5. J. 9
 1 10YR4/3 におい黄褐色土・ローム粒 (中) 少量。
 2 10YR4/4 暗褐色土・焼土粒 (細小)・ローム粒 (小) 少量。
 3 10YR3/2 暗褐色土・炭灰物 (細小)・焼土粒 (細小)・ローム粒 (小) 少量。



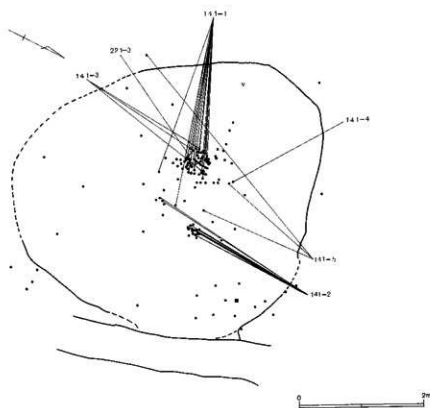
- 明層
 1 10YR3/4 暗褐色土・ローム粒 (細小) 少量。
 2 10YR2/3 黄褐色土・ローム粒 (細小) 少量。
 3 10YR3/4 暗褐色土・ローム粒 (小) 少量。



拡張の痕跡は認められない。主柱穴は8本で (P1, 2, 3, 4, 5, 13, 14, 16)、長辺に沿って、規則正しく配置されている。P3、P4の周囲に柱穴があり、この軸上で柱が移築された可能性がある。本住居跡にも、第1号住居跡同様、炉跡と入り口部分の中間に柱穴が存在する。床面はほぼ平坦で、主柱穴の内側では硬化が認められる。

炉跡は、主軸上の北西寄りに位置する。キャリパー形深鉢の口縁部をが本土器として利用した埋燗炉である。掘り方は比較的大きく、平面形態は不整な楕円形を呈する。長径140cm、短径110cmを測る。中央部が深くなっており、その中にが本土器が据えられている。中央部の掘り込みの南側部分がけが焼土化しており、他の部分は焼土化していない。

第27図 第9号住居跡遺物分布図



掘り方の南東部分に隣接した部分にピットがあるが、これは第1号住居跡等に認められた、住居跡中央部のピットと同じ性格のものと考えられる。本住居跡には周溝は認められない。

南東隅に、床面で確認された土塊状の掘り込みがある（SKI）。断面形態は円筒形で、床面からの深さは80cm程である。底面は平坦で、わずかに南側が低くなっている。堆積土の特徴から、縄文時代に属するものと判断されるが、本住居跡との新旧関係は明らかではない。ただし、本住居跡覆土中で掘り込みが確認できなかったこと、本住居跡埋没終了後の所産とすると、全体の深さが160cm以上となることから、本住居跡使用時、又は廃絶直後の所産と考えたい。

覆土中の遺物量は、住居跡の残りの良さからすると少ないと言える。ドットを確認できたものは507点で、

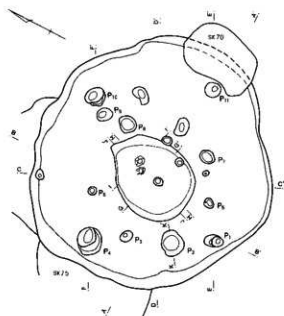
石器ではフリイク・チップ類4点、打製石斧7点、スクレイパー1点が検出されている。覆土中から検出されたものが多い。特に図版掲載資料のほとんどが覆土から検出されている。第140図3～5は、個体に属する破片がまとめて検出されたが、同図2に属する破片は、住居跡全体に散在している。

第9号住居跡

AG-19に位置する。支台中央の谷を臨む斜面上に位置する。確認面から床面までわずか10cm前後しかなかった。上面が攪乱を受けていることにもよろうが、隣接する第7号住居跡が80cm程の壁を有していることからすれば、本来の壁高も低かったものと判断される。

平面形態はやや不安定で、確認された状況と、本来的な形態との間にずれがある可能性がある。確認され

第28図 第10号住居跡



S 2 1 0

- 1 10783/2 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)・白色粒(極小)多量、炭化粒少量。
- 2 10783/3 暗褐色土 褐色ローム粒(極小) 炭塊、白色粒(極小)・炭化粒中量。
- 3 10783/3 暗褐色土 炭化した黄褐色ローム粒多量、白色粒(極小)少量。
- 4 10784/3 濃い黄褐色土 褐色ハードローム(中)多量、炭化した黄褐色ローム粒多量。

ピット 2

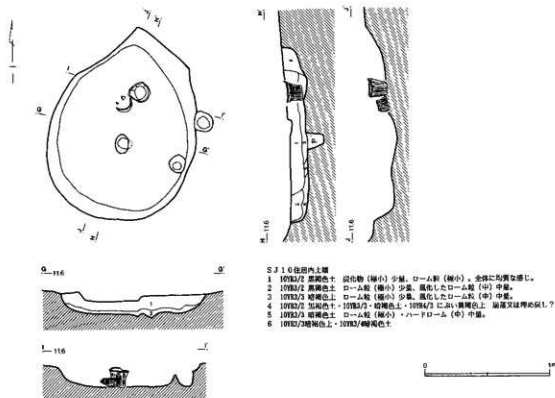
- 1 10783/3 暗褐色土 ローム粒(小)多量、炭化物(極小)中量。
- 2 10783/4 暗褐色土 ローム粒(極小)非常に多量。
- 3 10783/4 暗褐色土

ピット 4

- 1 10783/2 黒褐色土 ローム粒(小)多量、ハードロームブロック(大)中量。
- 2 10783/3 暗褐色土 炭化物(極小)・ローム粒(中)少量。
- 3 10783/3 暗褐色土・10783/4ハードローム(2x2)ブロック



第29図 第10号住居跡内土壌



た形態は不整な円形である。長径5m前後と考えられる。柱穴は平面形態に沿ってほぼ等間隔に配置される。主柱穴は8本、柱穴の深さにはかなり差が認められる。床面は凹凸が激しく、著しい硬化は認められなかった。

炉跡は、土器片と磨石を利用した土器囲い炉で、土器片は1個体分からなる(第141図1)。比較的小さい破片が多数配されていた。炉跡の掘り方はあまり深くなく、規模も土器片の配置される範囲をほとんど越えない。

炉跡の北東約90cmの位置に埋甕が検出された(第141図2)。深鉢の胴部下半が中心だが、口縁部破片も、部分的ながら同じ位置から検出されている。本来、完形かもしくはそれに近い状態で埋設されていたものが、擾乱等により現在のような状況になったものと考えられる。本住居跡には周溝は認められなかった。

住居跡自体の残りが良くなかったこともあり、本住居跡に帰属する遺物は極めて少ない。ドットを確認て

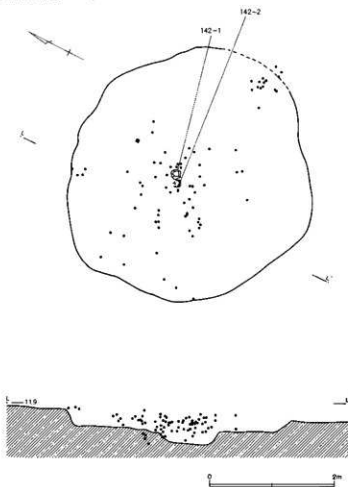
きた遺物は166点で、うち石器では石皿が1点、検出されたのみである。覆土が浅いため、垂直分布については傾向はつかめない。第141図1の炉体土器は、炉跡からわずかに離れた位置に、同一個体に属する破片が分布している。同図2の埋甕も同様で、設置後破損したことを裏付けている。

第10号住居跡

AH-19, AI-19に位置する。支台中央の谷の斜面上にある。平面形態はやや五角形に近い不整円形を呈する。住居跡のはず中央付近に長径150cm、短径100cmほどの楕円形の掘り込みが存在する。炉跡はおそらくこの掘り込みによって破壊されているため、炉跡の正確な位置は不明である。そのため、住居跡の主軸方向は明らかではないが、柱穴の配置、住居跡の平面形態から、第28図の正位の方向と考える。主軸方向はN-68°-Eである。

周囲に複数の土壌(SK70, SK74, SK75)があ

第30図 第10号住居跡遺物分布図



り、これらを壊して本住居跡が構築されている。

規模は、本遺跡の縄文時代の住居跡の中では比較的小さいもので、長径4.2m、短径3.8m程である。壁は約25cm遺存する。壁の立ち上がりはやや緩やかである。拡張の痕跡は認められない。

主柱穴は矩形に配置され、4本、または6本が組み合うと考えられる。柱の移築が行われた可能性はある。周溝は認められない。

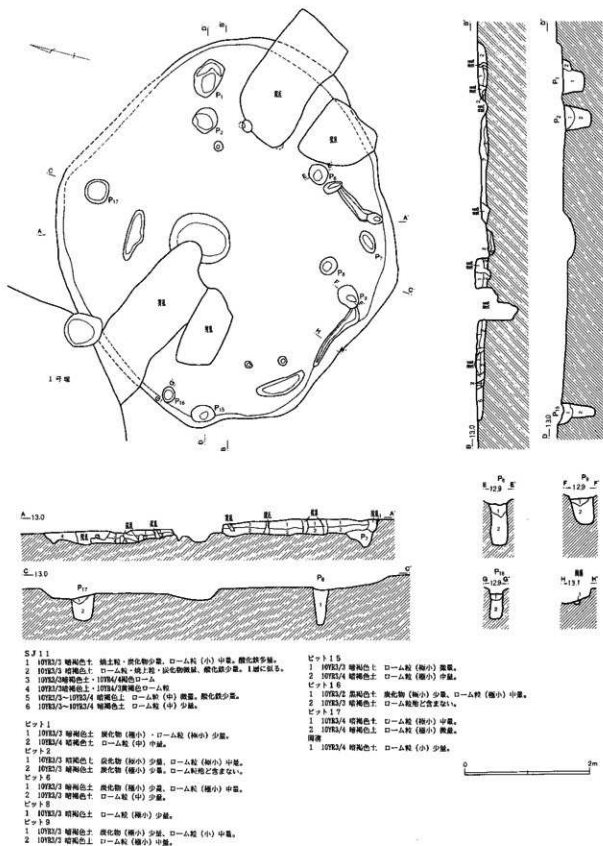
が跡は前述のように、現況では不明である。住居跡中央部に位置する浅い土壌状の掘り込みの位置にあったものと推測される。この土壌状の掘り込みは深さが住居跡床面から約20cm程で、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は黒褐色で、住居跡の覆土と大差ない。平面形態は楕円形である。中央部に径10cmのピットが存在する。

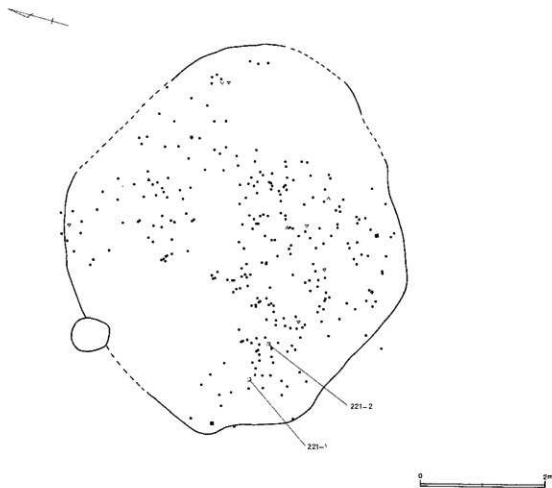
この土壌から第142図1、2の土器が検出された。前

者は、底部が欠損している小形の深鉢で、土壌の北寄りの位置に正立していた。後者は胴部の一部のみが残存する深鉢の破片である。両者は極近接して設置されていた。2点の土器の内部からは遺物は検出されなかった。

この土壌と本住居跡の関係については明確ではない。土層の堆積から見ると、住居跡埋没終了後に掘削が行われた可能性は低い。また、前述のごとく、本住居跡に何らかの炉が存在し、それがこの土壌によって破壊されたとするならば、住居跡の使用が終了し、炉跡が必要とされなくなった時点でこの土壌が掘り込まれたと考えられる。しかし土壌の平面形態の長軸は、想定された住居跡の中心軸とはずれる。これらを勘案すると、両者間に密接な可能性があったのか否かは判断が困難であるが、少なくとも、住居跡の使用が停止した時点からあまり時をおかず、この土壌の掘削と土

第31図 第11号住居跡





器の設置が行われたと考えられる。

遺物は極めて少なく、ドットを確認できた遺物はわずかに80点で、うち石器が1点である。

第11号住居跡

AJ-16に位置する。住居跡集中域のやや東側にある。平面形態は隅丸のやや不整な長方形を呈する。攪乱が著しく、遺存状態は不良であるため、本来的な形態と差がある可能性がある。

長径は約6.0m、短径は5.5mである。床面は攪乱による小規模な凹凸が著しく、硬化面もあまり明確ではなかった。

柱穴は壁に沿って配置されるが、主柱穴の組み合わせは判断できなかった。中央部の掘り込みが皆跡と考

えられるが、木根等による攪乱が著しく、焼土等も確認できなかった。

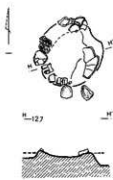
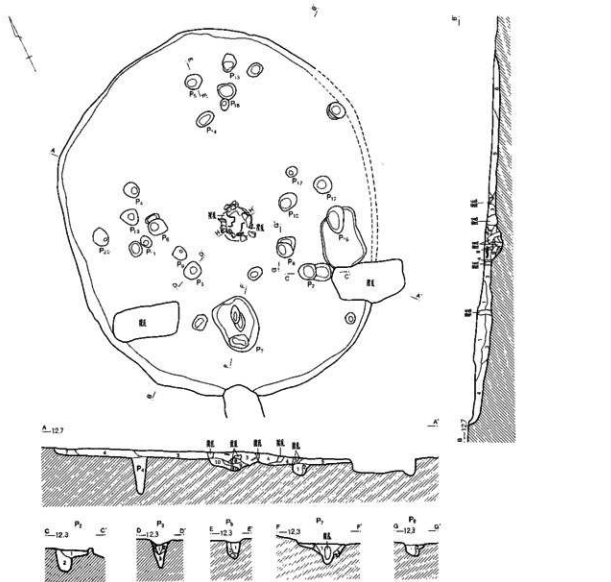
南壁付近に、部分的に周溝状掘り込みが認められるが、明確なものではない。

本住居跡出土の遺物は少なく、ドットを確認できたものは286点である。うち石器はフレイク・チップ類2点、石鏃1点、打製石斧2点、石核1点、石皿1点である。住居跡全体に散漫に分布する。深度が浅いため、垂直分布については傾向がつかめない。

第12号住居跡

AK-17、AK-18に位置する。平面形態は五角形に近い隅丸の長方形を呈する。長径5.7m、短径は不明である。柱穴は小ピットが住居跡内に散在して検出さ

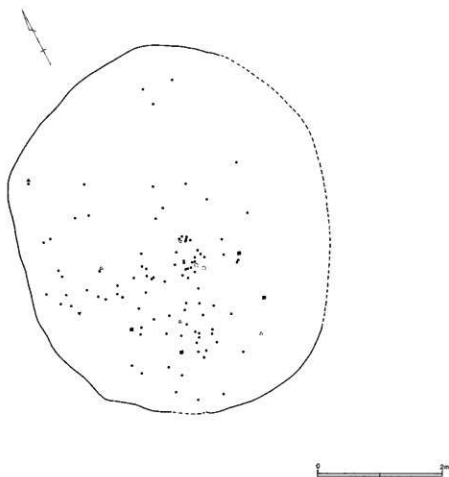
第33図 第12号住居跡



SJ 12

- 1 10123/3 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量, 礫化跡中量。
 - 2 10123/2 黄褐色土 焼上粒 (極小)・ローム粒 (極小) 中量。
 - 3 10123/4 暗褐色土 ローム粒 (小)・礫化跡中量。
 - 4 10123/4 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量, 礫化跡中量。
 - 5 10124/3 濃い黄褐色土 ローム粒 (中) ごくまれ。
 - 6 10123/4 暗褐色土 礫化跡中量。
 - 7 10124/3 濃い黄褐色土 含有物無し。
 - 8 7.5126/5 黄褐色土 灰砂層 (極小) 少量, 焼上粒 (中) 中量。
 - 9 7.5126/6 褐色土 焼上粒 (極小) 中量。
 - 10 7.5126/6 暗褐色土 ローム層 焼裂けたため無し。
- ピット 2
- 1 10121/4 褐色土 淡黄褐色ローム粒 (極小) 多量, 白色粒 (極小) 多量, しまり有り。
 - 2 10125/2 黄褐色土 淡黄褐色ローム粒 (極小) 少量。
- ピット 3
- 1 10123/4 暗褐色土 淡黄褐色ローム粒 (極小) 多量, 礫化跡が少量。
 - 2 10124/4 褐色土 風化した暗褐色土粒 (極小) が多量。
 - 3 10124/4 褐色土 淡黄褐色ローム粒 (極小) 少量。
- ピット 5
- 1 10124/3 濃い黄褐色土 褐色ローム粒 (極小) 微量のみ, しまり有り。
 - 2 10124/4 褐色土 淡黄褐色ローム粒 (極小) 多量, しまり有り。
 - 3 10124/4 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量, しまり有り。
- ピット 7
- 1 10123/3 濃い黄褐色土 淡黄褐色ローム粒 (極小) 微量のみ, 礫化跡少量。
 - 2 10124/4 褐色土 淡黄褐色ローム粒 (極小) 少量, 礫化跡中量。
 - 3 10124/6 褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。
- ピット 8
- 1 10124/3 濃い黄褐色土 淡黄褐色ローム粒 (極小) 少量, ややしまり有り。
 - 2 10123/4 褐色土 黄褐色土粒 (極小) 少量。

第34図 第12号住居跡遺物分布図



れ、支柱穴の配置が不明であり、そのため住居跡の主軸方向についても明確ではない。第33図の図版の正位の方向と考えるが、上下が反転し、北側が入り口部分の可能性もある。柱穴はいずれも径が小さく、掘り込みもあまり深くないものが多い。

が跡は住居跡のほぼ中央に位置する。連弧文系土器の破片(第142図19~24)と、磨石を用いた土器調い炉である。床面検出時にやや掘りすぎてしまったため、炉跡がやや浮いた状況になってしまっている。掘り方は上器片の配置される範囲内のごく浅い掘り込みがあるのみである。周溝は検出されなかった。

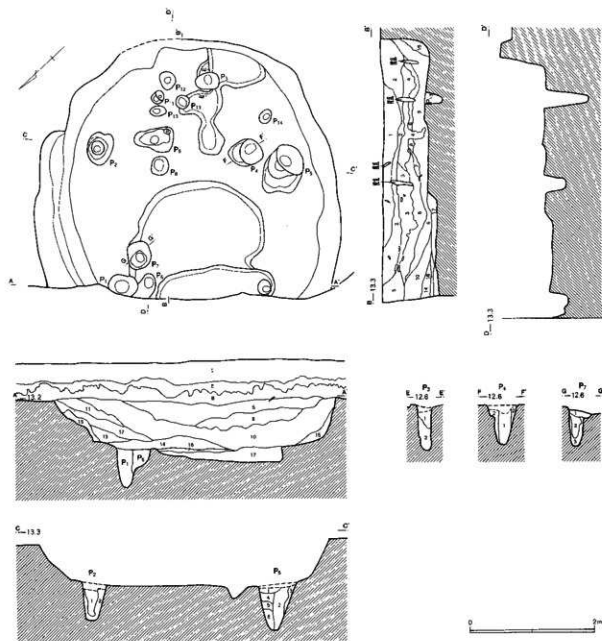
本住居跡出土の遺物は極めて少なく、103点が確認されたにすぎない。住居跡南壁付近に比較的多く分布

する。垂直分布については、覆土が浅いため、傾向はつかめないが、遺物のほとんどが覆土に帰属する。石器ではフレイク・チップ類3点、石鏝1点が検出されたのみである。

第13号住居跡

AK-12に所在する。一部調査区外にかかるため、全体は明らかではない。平面形態はおそらく、長方形の一端が膨満する五角形に近いものであろう。規模はやや小さめで、確認される部分で、両壁間が4.8mを測る。本住居跡は壁の残りが非常によく、約70cm残っている。拡張の痕跡は認められない。また、周溝は認められなかった。壁の立ち上がりは西側でやや緩やかであるが、他は急角度の立ち上がりを持つ。

第35図 第13号住居跡



5 J 13

- 1 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量、白色粒 (細小) 少量。
- 2 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量、炭化物 (細小) 少量。
- 3 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (細小) 多量、炭化物 (細小) 少量、炭化物 (細小) 少量。
- 4 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (細小)・炭化した褐色ローム粒少量、炭化物 (細小) 少量。
- 5 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (細小) 多量、焼土粒 (細小) 少量。
- 6 10YR2/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小) 多量、赤褐色土粒多量。3~8割への層付。
- 7 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小)・焼土粒 (細小) 少量。
- 8 10YR2/2 暗褐色土 10YR2/2と同層上から多量、4から5割への層付。
- 9 10YR2/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小) 多量、焼土粒 (細小) 少量。
- 10 10YR2/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小) 多量、炭化物 (細小) 少量。
- 11 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小)・白色粒 (細小) 少量、炭化物 (細小) 少量。
- 12 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小) 多量、白色粒 (細小) 少量。
- 13 10YR2/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量、炭化物 (細小) 少量。
- 14 10YR4/2 赤い褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量。
- 15 10YR4/4 褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量、しまり有り。
- 16 10YR2/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量。
- 17 10YR2/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (中)・褐色ローム粒 (細小) 多量。

ビツ 2

- 1 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (細小) 少量。
- 2 10YR2/4 暗褐色土 炭化物 (細小)・焼土粒 (細小) 少量、ローム粒 (中) 少量。

ビツ 3

- 1 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。

ビツ 4

- 1 10YR2/2 暗褐色土 炭 (細小) 少量、ローム粒 (細小) 少量。
- 2 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。

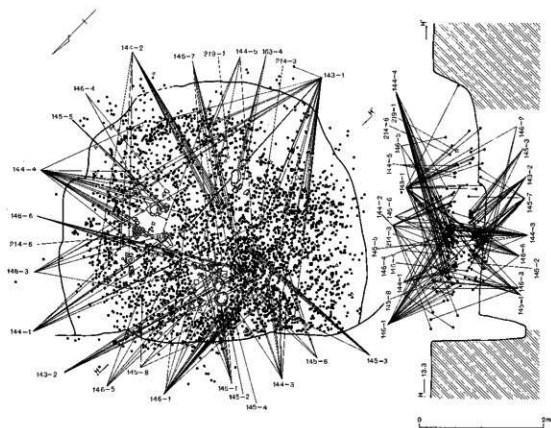
ビツ 5

- 1 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (細小) 多量、炭化物 (細小) 少量。
- 2 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (細小) 少量。
- 3 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。
- 4 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。
- 5 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (細小) 少量。
- 6 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。

ビツ 7

- 1 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (細小) 少量。
- 2 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。
- 3 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。

第36図 第13号住居跡遺物分布図



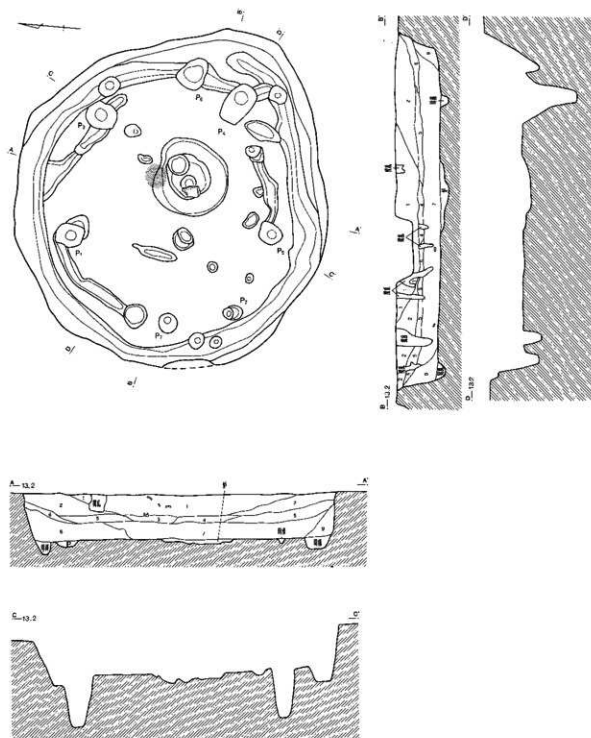
主柱穴はP1, 2, 3, 4, 5, 7, 12で、P1とP6・P7、P4とP5が移築に伴い、新たに掘削されたものと考えられる。

炉跡は検出されなかった。本住居跡にも中央部付近に土壌状の掘り込みが認められる。炉跡はこの土壌によって破壊された可能性が高い。この土壌は一部が調査区外にかかるため、全形は明らかではない。床面からの深さは15cm程で、北東側がさらに5cm程深くなる。

この土壌も覆土調査中には掘り込みが確認できず、土層断面でも覆土中からの掘り込みは確認できなかった。おそらく、住居跡の使用が停止した直後に掘削されたものと考えられる。土壌中からは遺物、焼土等は検出されなかった。

本住居跡からは極めて多くの遺物が検出された。ドットを確認できたものだけで3935点検出されている。石器は、ドットを確認されなかったものを含めて、フレイク・チップ類34点、石鏃3点、打製石斧、磨製石斧各6点ずつ、磨石8点、石皿1点、凹石1点が出

第37図 第14号住居跡

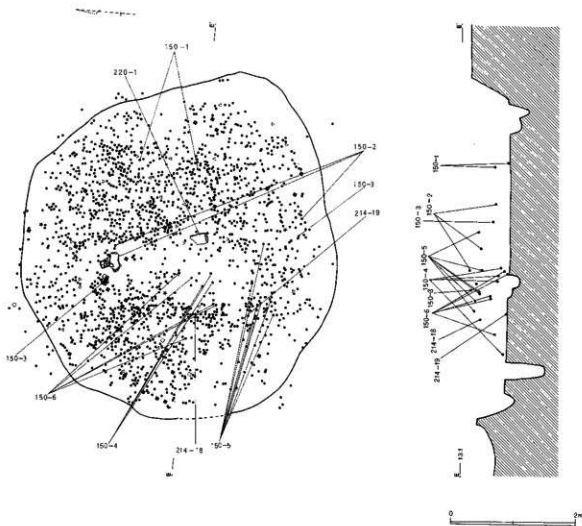


S 3 1 4

- 1 10102/3 黒褐色土 炭化物(極小)少量、ローム粒(極小)・炭化物(極小)中量。
- 2 10102/2 黒褐色土 炭化物(極小)少量、炭化物(極小)・ローム粒(極小)中量。
- 3 10102/3 黒褐色土 炭化物(中)多量、ローム粒(小)多量。
- 4 10102/3 暗褐色土 炭化物(極小)少量、ローム粒(極小)中量。
- 5 10103/4 暗褐色土 炭化物(極小)少量、ローム粒(極小)中量。
- 6 10103/4 暗褐色土 炭化物(極小)・ローム粒(極小)少量。
- 7 10104/3 濃い黄褐色土 ローム粒(中)・炭化物(極小)少量、ローム粒(極小)多量。
- 8 10104/3 濃い黄褐色土 ローム粒(中)多量、炭化物(極小)少量。
- 9 10104/4 褐色土 褐色ロームブロック(大)多量。



第38図 第14号住居跡遺物分布図



土している。

また、本住居跡の覆上下位に完形に近い土器がまわって出土する地点が認められた(第36図)。この地点から出土した土器は第143図2、第145図1～4、7である。この付近の堆積土は黒味が強く、土層断面でも掘り込みに近いラインが確認された。しかし、明確な遺構としてとらえることはできなかった。このことから、住居跡埋没途中で浅い掘削が行われ、土器が廃棄されたか、または、埋没途中で土器と有機物が集中的に廃棄されたものと考えられる。

遺物の出土状況を見ると、わずかな間層を挟んで、覆土の上位と下位にそれぞれ集中が認められる。遺物

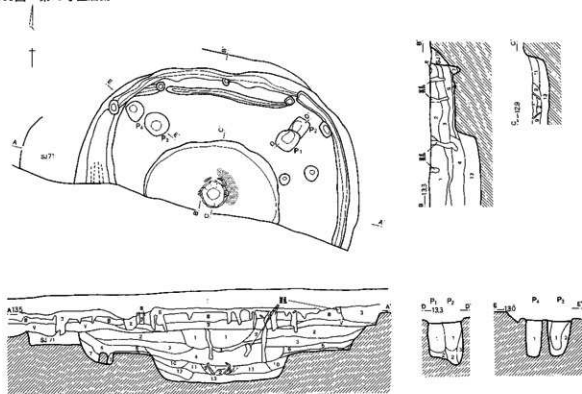
の廃棄が断続的に行われた可能性が高い。前述の土層状掘り込みに含まれる遺物は、下位の集中と重なる位置にある。

特筆すべき遺物として、第219図1の翡翠製小形磨製石斧がある。また、第214図3、4、6、7に掲載したミニチュア土器の底部破片が、覆土上層から集中して出土したことも注目される。

また、本住居跡の西壁上端にわずかに土質の変化が認められた。住居跡等、何らかの遺構が存在する可能性があるが、調査区壁との距離がほとんどないため、平面で遺構の所在は確認できなかった。

第14号住居跡

第39図 第15号住居跡



S J 15

- 1 10YR2/3 灰褐色土 ローム粒 (細小)・炭化物 (細小) 微量。瓦上。
- II 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (細小) 微量。中程度の凝結土。
- III 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (細小) 少量。白色粒 (細小) 微量。
- IV 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒 (細小) 少量。炭化物 (細小) 微量。ローム粒 (細小) 中量。
- V 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (細小) 中量。
- VI 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒 (細小)・炭化物 (細小) 少量。ローム粒 (細小) 中量。
- 2 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒 (細小)・焼土粒 (細小)・炭化物 (細小) 少量。
- 3 10YR2/3 暗褐色土 炭化物 (細小)・焼土粒 (細小) 少量。ローム粒 (細小)。
- 4 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。焼土粒 (小)・炭化物 (小) 中量。
- 5 10YR2/3 暗褐色土 炭化物 (細小)・焼土粒 (細小) 少量。ローム粒 (中) 中量。
- 6 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒 (細小)・炭化物 (細小) 中量。
- 7 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (中) 中量。
- 8 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (細小) 少量。炭化物・焼土なし。
- 9 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒 (中)・焼土粒 (小)・炭化物 (細小) 中量。
- 10 10YR2/4 暗褐色土 ロームブロック (大) 少量。炭化物 (細小)・焼土粒 (細小) 少量。
- 11 10YR2/4 暗褐色土 炭化物 (細小)・焼土粒 (細小) 少量。ローム粒 (中)。
- 12 10YR2/3 暗褐色土 炭化物 (細小)・ローム粒 (小)・風化したローム粒中量。
- 13 10YR2/3 灰褐色土 ローム粒 (中)・焼土粒 (細小) 少量。炭化物 (細小) 中量。

S J 15 9号

- 1 10YR2/3 灰褐色土 焼土粒 (細小)・炭化物 (細小)・ローム粒 (細小) 中量。
- 2 10YR2/3 にかい黄褐色土 炭化物 (細小) 少量。焼土粒 (細小) 中量。

ピット 1

- 1 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (中) 少量。炭化物 (細小) 少量。

ピット 2

- 1 10YR2/3 暗褐色土 炭化物 (細小) 少量。ローム粒 (中) 中量。

- 2 10YR2/3 にかい黄褐色土 炭化物 (細小) 少量。

- 3 10YR2/4 暗褐色土 炭化物 (細小) 少量。

ピット 3

- 1 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (中) 中量。

- 2 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒 (細小)・炭化物 (細小) 少量。

ピット 4

- 1 10YR2/3 暗褐色土 炭化物 (細小) 少量。

0 2m

AO-16に所在する。平面形態は、隅丸の方形に近い。主軸方向はN-81°-Eである。南東壁の隅がやや強く外側に張り出している。長さ5.6m、短径5.3mを測る。壁の残りは良好で、約70cm残存している。

主柱穴はおそらく6本で構成されていたと考えられる(P1, 2, 3, 4, 5, 7)。いずれも壁のわずかに内側に配置される。住居跡中央付近に小ピットが散在するが、本来的なものではないと考えられる。

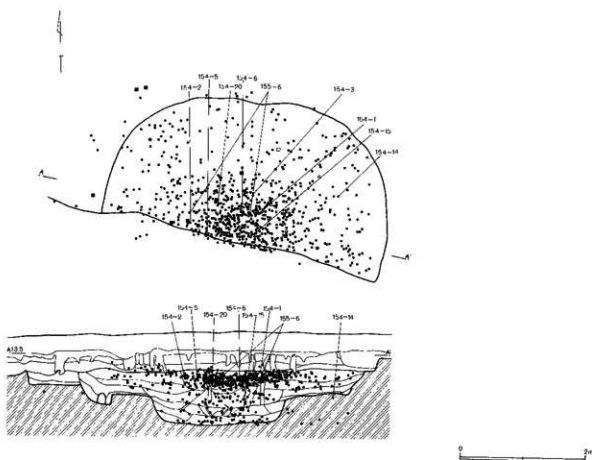
が跡は中央やや奥壁に近い位置に設置される。ごく浅い掘り込みで、中央部がさらに窪み形態である。掘り方の北側の壁が部分的に焼土化しているが、全体に焼土化してはいない。掘り方の中央やや西側に石皿が

遺存していた。焼土の分布からみて、本来炉体土器が設置されていた可能性がある。

床面はほぼ平坦であるが、あまり硬化してはいない。周溝は壁の下端に1条通っており、その内側に部分的に不連続な周溝が認められた。しかし、柱穴の移築の痕跡は認められず、住居跡の拡張があった可能性は低いと考えられる。周溝は比較的大きいもので、幅が30-45cm、深さは20cm前後の規模を持つ。

本住居跡出土の遺物は、比較的多く、ドットを確認したのもだけで1947点である。うち石器は、フリイク・チップ類12点、石鎌5点、磨石1点、石皿2点、凹石1点である。

第40図 第15号住居跡遺物分布図



遺物は住居跡ほぼ全域に分布する。ドット凶断面図では図版掲載資料のみ載せたが、他の遺物もほとんど覆土中位から上位にかけて分布していた。

土器では、第150図1, 4, 6が床面に近い位置で検出されたが、他は覆土中位からの出土で、埋没途中に廃棄されたものである。また、注目すべき遺物としては第214図19, 20の耳飾りが出土している。この2点は、大きさ、形状からおそらく対をなすものと考えられる。

第15号住居跡

AK-12, AK-13に所在する。住居跡集中域の北側に位置する。約1/2が調査区外にかかるため、全形は明らかではない。おそらく長方形に近い平面形態を有すると考えられる。第71号住居跡を壊して構築されている。深さは約50cmである。周溝は北西～北東壁で2条、南東壁で1条確認された。周溝の幅は20cm程度

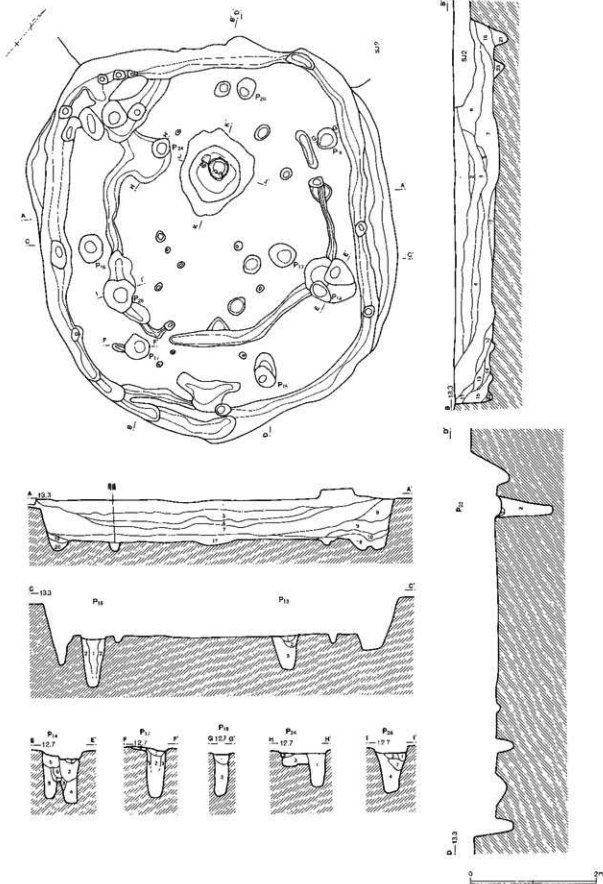
ある。柱穴の配置は不明である。

第71号住居跡との重複部分が多いため、本住居跡床面で検出された柱穴のうち第71号住居跡に帰属していたものがある可能性が極めて高いが、調査時に分離できなかったため、ここでは便宜的にそのすべてを本住居跡帰属とする。P1, 2, P3, 4は、同じ機能を有する柱の移築に伴う柱穴と考えられる。これらの状況から、本住居跡は少なくとも1回の拡張があったと考えられる。

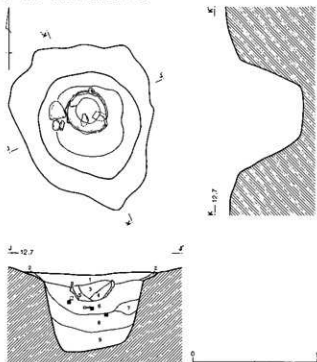
本住居跡の炉跡は極めて特異な構造を有している。床面中央を長径200cm、床面から60cm程の規模で掘り込み、黒色土で埋めた後、上面にロームを部分的に充填してその中央に炉体土器を据え付けている。炉体土器はキャリパー形深鉢の口縁部を用いたもので(第153図1)、ユニークな文様を有している。

炉体土器東側の床面が焼上化している。この土壌内

第41図 第16号住居跡



第42図 第16号住居跡炉跡



ピット13

- 1 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (小) 中量。
- 2 10183/3・10183/4暗褐色土 ローム殻 (中) 中量。
- 3 10183/4 暗褐色土 ハードローム (中) 少量。人糞の痕跡が認められる。

ピット14

- 1 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量。
- 2 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量、ローム殻 (中) 中量。
- 3 10183/4 におい黄褐色土 堆土のわずら。
- 4 10183/3 におい黄褐色土 ハードローム (中) 中量。
- 5 10183/4 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。
- 6 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。
- 7 10183/4 におい黄褐色土 ロームの痕跡のみ。
- 8 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。

ピット15

- 1 10183/2 黒褐色土 ローム殻 (細小)・炭化物 (細小) 少量。
- 2 10183/2 暗褐色土 炭化したローム殻 (中) 少量。

ピット17

- 1 10183/3 暗褐色土 含有物不明なし。
- 2 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (小) 少量。
- 3 10183/4 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。
- 4 10183/4 暗褐色土

SJ118

- 1 10182/3 黒褐色土 炭化物 (細小) 少量、ローム殻 (細小)・焼土殻 (細小) 中量。
- 2 10182/2 黒褐色土 炭化物少量、ローム殻 (細小)・焼土殻 (細小) 中量。
- 3 10182/2 黒褐色土 ローム殻 (細小)・焼土殻 (細小) 少量、炭化物 (細小)・ローム殻 (中)・焼土殻 (中) 少量。
- 4 10182/2・10182/3黒褐色土 ローム殻 (細小) 少量、焼土殻 (細小) 少量。
- 5 10182/2・10182/3黒褐色土 ローム殻 (細小) 少量、焼土殻 (細小) 少量。
- 6 10182/3・10182/3黒褐色土 ローム殻 (細小)・炭化物 (細小) 少量、焼土殻 (細小) 少量。
- 7 10182/2 黒褐色土 ローム殻 (小) 少量、炭化物 (細小)・焼土殻 (細小) 少量、ローム殻 (中) 少量。
- 8 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (細小)・焼土殻 (細小)・炭化物 (細小) 少量。
- 9 10182/2 黒褐色土 ローム殻 (細小)・焼土殻 (細小) 少量、炭化物 (細小) 少量。
- 10 10182/4 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量、焼土殻 (中) 少量。
- 11 10182/4 暗褐色土 ローム殻 (中)・炭化物 (中) 少量。
- 12 10182/3 暗褐色土 炭化物 (細小)・焼土殻 (細小) 少量、ローム殻 (細小) 中量。
- 13 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (細小)・炭化物 (細小) 少量。
- 14 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。
- 15 10182/4 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。
- 16 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。
- 17 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量。
- 18 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (中)・ローム殻 (小) 少量。
- 19 10182/4 暗褐色土 ローム殻 (小) 少量。
- 20 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量。
- 21 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 中量。
- 22 10182/4 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。
- 23 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量。

SJ116炉跡

- 1 10183/2 黒褐色土 ローム殻 (細小)・炭化物 (細小) 少量。
- 2 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量。
- 3 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量、焼土殻 (細小) 少量。
- 4 10183/3暗褐色土 灰・灰プロック 焼土殻 (細小) 少量。
- 5 10183/3 暗褐色土 ハードローム (中) 少量、焼土殻 (細小) 少量。
- 6 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量、灰に多量、炭土 (細小)・炭化物 (細小) 少量。
- 7 10183/3暗褐色土 黄褐色土ローム殻
- 8 10182/1 黒褐色土 炭化物少量。
- 9 10182/3暗褐色土・ローム殻 (小)

ピット18

- 1 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量。
- 2 10183/3 暗褐色土 ローム殻 (細小) 少量。

ピット19

- 1 10183/3 暗褐色土 含有物不明なし。
- 2 10182/3 暗褐色土 ローム殻 (小) 少量。

ピット24

- 1 10182/3 暗褐色土 炭化物 (小) 少量、ローム殻 (小) 中量。
- 2 10182/4 暗褐色土 ローム殻 (中) 中量。
- 3 10182/4 暗褐色土 ロームプロックが底にありう。

ピット25

- 1 10183/4 暗褐色土 ローム殻 (中) 中量。
- 2 10183/4 暗褐色土 ローム殻 (中) 少量。
- 3 10183/4におい黄褐色土・ハードローム
- 4 10183/4におい黄褐色土・ハードローム

の黒色上は水洗を行ったが、微細遺物は検出されなかった。

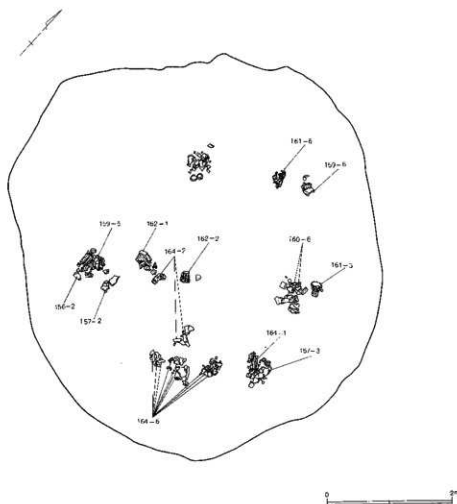
また、土層断面では、炉跡の上位において、炉跡下の土層とほぼ対応するような掘り込みが確認されている。この掘り込みは、住居跡の埋没が開始した直後(覆土3)と、埋没完了時(覆土1)の2段階にわたって行われており、いずれも炉跡とほぼ重なる位置にある。遺物はこれらの土壌状の掘り込みの内部から集中して出土している(第40図)。

これら覆土中における土壌状掘り込みの性格について明確なことを述べることはできない。またこれらの土壌状掘り込みは住居跡焼絶後、覆土堆積途上に営まれたものであって、本住居跡と直接的な機能的関係は

有していないと言えよう。しかし、土壌が再度にわたって炉跡上に重なる位置に掘削されていること、炉跡本体が特異な形状を有していることから見て、これらの土壌は、本住居跡と何らかの間接的な関連を有していたと考えたい。本住居跡では土層断面で土壌サンプルを採取し、リン・カルシウム分析を委託して行っている。その結果は付篇第2節で詳述されているが、周辺の土壌に比べ、わずかに土壌内のリン・カルシウムの値が高くなっている。

本住居跡出土の遺物は前述のように、住居跡覆土内の土壌状の掘り込み部分から出土しているものが多い。調査時には覆土内の土壌は確認できなかったため、遺物の帰属を区分することはできないが、遺物出土位

第43図 第16号住居跡遺物分布図(1)



置のドットからある程度推測することは可能である。

本住居跡出土の遺物でドットが確認されたものは811点で、うち石器はフレイク・チップ類3点、打製石斧3点、磨製石斧1点、磨石1点、凹石1点である。

第18号住居跡

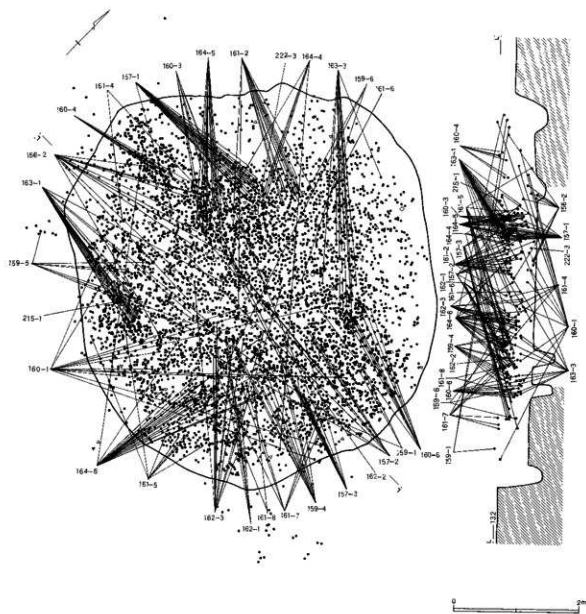
AK-13に位置する。第1号住居跡等とともに、住居跡集中域の北側に所在する。平面形態は、一端がわずかに膨湾する長方形を呈し、膨湾する壁に向かってわずかに両長辺が開き気味となる。本住居跡は比較的人形で、長径6.3m、短径5.2mを測る。壁の残りは良好で、60cm残存している。第2号住居跡に一部破壊されている。主軸方向はN-42°Wである。

周溝は2条検出されており、1回の拡張があったと考えられる。内側の周溝から判断すると、拡張前の住居は、3～4m程の小規模なものであった。周溝内部のピット群が、拡張前の住居の支柱を構成する柱穴と考えられる。

拡張後の支柱は6本で構成されていたと考えられる。P14、15、16、17、18と北西隅の柱穴群がそれに該当しよう。P26の性格は不明である。P14はほぼ同じ位置で移築されたものであろう。北西隅の柱穴群は第1号住居跡奥壁で検出された柱穴群と同様のものであろう。

床面はほぼ平坦で、全体にわたってよく硬化してい

第44図 第16号住居跡遺物分布図(2)



る。

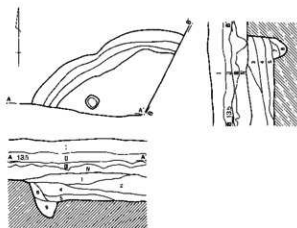
炉跡の位置は奥壁に寄っている。本住居跡の炉跡も、第15号住居跡同様、やや特異な構造を有している(第42図)。径約90×80cm、深さ約60cm程の「掘り方」を有し、黒~暗褐色土で充填した後に、やや変形的な器形と装飾を持つキャリパー形茶鉢(第156図1)の口縁部を据えて、炉体としている。第15号住居跡とは異なり、掘り方上面にローム充填はみられない。その外縁は、緩やかな傾斜の落ち込みとなっている。底面の径は上

面に比べやや小さい。底面はわずかに傾斜するが、凹凸はなく平坦化されている。「掘り方」の周辺で、焼土化している部分は認められなかった。

また、「掘り方」覆土中に石皿の破片と礎が設置されていた。「掘り方」内からは、七器片も出土しており、第158図1のように住居跡の覆土と接合している個体もある。「掘り方」覆土は水洗を行ったが、微細遺物は特に検出されなかった。

本住居跡は極めて多量の遺物を有しており、今回の

第45図 第17号住居跡



S.J.17

- I 1000/1 赤褐色土 ローム殻(小)・炭化物(小)少量。
 II 1000/2 赤褐色土 白色殻(極小)少量、ローム殻(極小)・炭化物(極小)中量。
 III 1000/3 赤褐色土 中程度の埋蔵土。
 IV 1000/4 赤褐色土 炭化物(極小)少量、ローム殻(極小)中量。
 1 1000/5 暗褐色土 ローム殻(極小)少量。
 2 1000/6 赤褐色土 ローム殻(極小)・炭化物(極小)中量。
 3 1000/7 赤褐色土 ローム殻(極小)・炭化物(極小)少量。
 4 1000/8 赤褐色土 炭化物(極小)少量、ローム殻(極小)中量。
 5 1000/9 暗褐色土 炭化物少量、ローム殻(中)中量。
 6 1000/10 暗褐色土 ローム殻(中)・炭化物(極小)少量。
 7 1000/11 暗褐色土 炭化物(極小)・ローム殻(極小)少量。
 8 1000/12 暗褐色土 ローム殻(極小)少量。
 9 1000/13 暗褐色土 ローム殻(中)少量、炭(極小)少量。



調査で検出された住居跡の中では、もっとも遺物量が多い遺構である。特に、完形に近い土器が覆土中位に散在しており、実測可能な個体が56点出土している。これらの個体は、接合する破片が近接して検出される例が多く、原形に近い状態を保った形で本住居跡に廃棄されたと判断される。その中で、第156図2、第160図1は、同一個体に属する破片が広い範囲に散在する例である。

これらの土器を含め、ドットを確認した土器が5619点である。うち石器はフレイク・チップ類43点、石鏃6点、打製石斧14点、磨製石斧1点、磨石7点、石皿6点、凹石5、敲石1点、円盤形石器1点が検出された。

遺物は覆土中位から上位にかけて間断なく、極めて密に分布している。垂直分布では間隙は見いだせない。

注目すべき遺物としては、第215図1の釣り手器人面部の破片がある。出土位置は覆土最上位で、本住居跡の埋没終了に近い時点で遺棄されたものである。

覆土は水平に堆積しており、堆積中に土層の掘削等の行為は行われなかったようである。

第17号住居跡

AL-13、AL-14に位置する。住居跡の大部分が調査区外に位置するため、全容は明らかではない。壁は35cm残存している。周溝は壁際に1条検出された。柱穴は1基のみ確認されたが、深さは20cm程度、径も小規模なものである。

住居跡出土の遺物は少なく、ドットを確認できたものは20点で、すべて土器破片であった。図示できるものは第169図1～4のみである。

第18号住居跡

AL-18、AM-18に位置する。遺跡中央の谷に向かう傾斜地の落ち際に所在する。平面形態は、南東壁がわずかに膨湾する縦長の台形で、整った形状を持つ。規模はやや小さめで、長径4.8m、短径4.2mを測る。壁は55cm残存している。

周溝は東側の壁で2重に巡っている。外側の周溝は南東壁で途切れており、この壁に入り口があった可能性が高い。主軸方向はN-54°Wである。

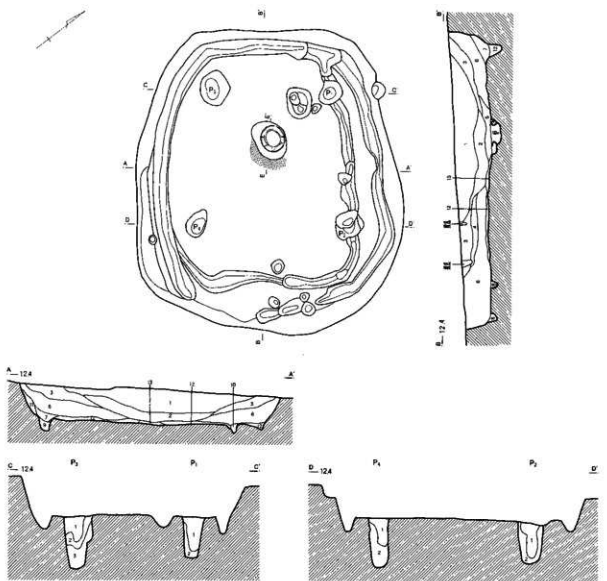
主柱穴は4基で、入り口近くに小ピットが散在する。周溝の状況から東側に拡張した可能性があるが、P1、P2に該当する主柱の拡張前の痕跡は確認できなかった。それゆえ、拡張の有無については断定できない。炉跡は主軸上の奥壁に近い位置に設置されている。掘り方は長径約60cm、短径約50cmの楕円形で、床面から15cm程の深さを持つ。その中心に、直線的に外傾する頸部を有する鉢形土器の口縁部破片を逆位に据えて、炉体としている。掘り方の入り口側床面部分が焼土化している。

床面はほぼ水平であるが、あまり硬化は認められない。

覆土の堆積は中央部がやや急な傾斜となっているが、埋没終了後の再掘削によるものではないと判断された。

本住居跡出土の遺物は比較的少量であった。ドットを確認できたものが613点で、うち石器はフレイク・チップ類2点、石鏃1点、打製石斧1点、磨石1点が

第46図 第18号住居跡



S J 1 8

- 1 19192/2 黒褐色土 炭化物 (極小) 少量、ローム粒 (小) 中量。
- 2 19192/3 黒褐色土 炭化物 (極小)・焼土粒 (極小) 少量、ローム粒 (小) 中量。
- 3 19192/4 黒褐色土 炭化物 (極小) 少量、ローム粒 (小)。
- 4 19193/2 暗褐色土 炭化物 (極小) 少量、ローム粒 (極小) 中量。
- 5 19193/3 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量、炭化物 (極小)・焼土粒 (極小) 少量。
- 6 19193/4 暗褐色土 炭化物 (極小) 少量、ローム粒 (中) 中量。
- 7 19192/4 暗褐色土 ローム粒 (小) 少量。
- 8 19192/4 暗褐色土 風化したローム粒 (極小) 少量。
- 9 19193/4 暗褐色土 風化したローム粒 (極小) 少量、黒色土粒 (極小) 少量。
- 10 19192/2 黒褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
- 11 19192/4 暗褐色土 ローム粒 (極小) 中量。
- 12 19192/4 暗褐色土 ローム粒 (極小)・黒色土粒 (極小) 少量。
- 13 19192/4 暗褐色土 焼土粒 (極小) 少量、炭化物 (極小) 少量。

ピット 1

- 1 19192/3 黒褐色土 炭化物 (極小)・ローム粒 (小) 少量、ローム粒 (極小) 中量。
- 2 19192/3 暗褐色土 ローム粒 (極小)・炭化物 (極小) 少量。

ピット 2

- 1 19192/3 黒褐色土 炭化物 (極小) 少量、炭化物 (極小) 中量。
- 2 19192/3 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
- 3 19194/4 褐色土 炭化物 (小) 少量。

ピット 3

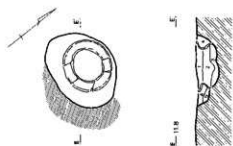
- 1 19192/3 黒褐色土 炭化物 (極小) 少量、ローム粒 (極小) 中量。
- 2 19192/3 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
- 3 19194/4 褐色土 炭化物 (小) 少量。

ピット 4

- 1 19192/3 黒褐色土 ローム粒 (小) 少量。
- 2 19192/3 暗褐色土 ローム粒 (小) 少量。



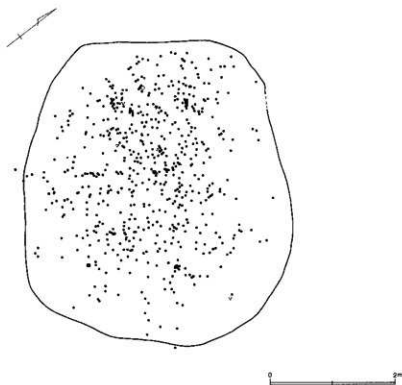
第47図 第18号住居跡炉跡



- SJ18炉跡
- 1 10782/2 黒褐色土 炭化物(極小)・焼土粒(極小)少量、ローム粒(極小)多量。
 - 2 10782/3 黒褐色土 炭化物(極小)少量、焼土粒(小)・ローム粒(極小)中量。
 - 3 10782/4 黒褐色土 焼土粒(中)少量、炭化物(極小)少量、焼土粒(極小)中量。
 - 4 10782/5 黒褐色土 焼土粒(極小)少量、炭化物(極小)少量。
 - 5 10782/6 黒褐色土 焼土化したローム粒(中)多量。



第48図 第18号住居跡遺物分布図



検出された。遺物は住居跡全体に散在している。

第19号住居跡

AM-18, AM-19, AN-18, AN-19に位置する。平面形態は隅丸の五角形で、長径5.6m、短径5.0mを測る。深度は約30cm程である。

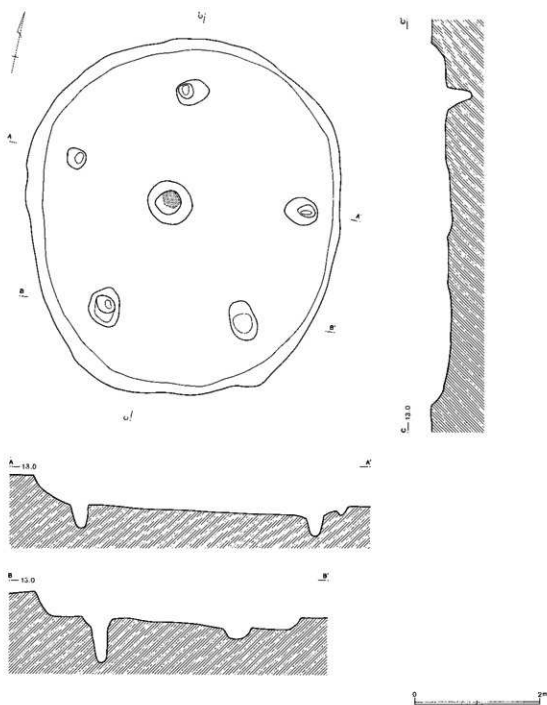
柱穴は5基確認された。それぞれ住居跡平面形態の屈曲部に、ほぼ対応する位置に掘り込まれている。想定される主軸方向はN-23°-Wである。

床面は西から東に向かってわずかに傾斜している。貼り床はなく、あまり硬化もしていない。間溝は確認されなかった。

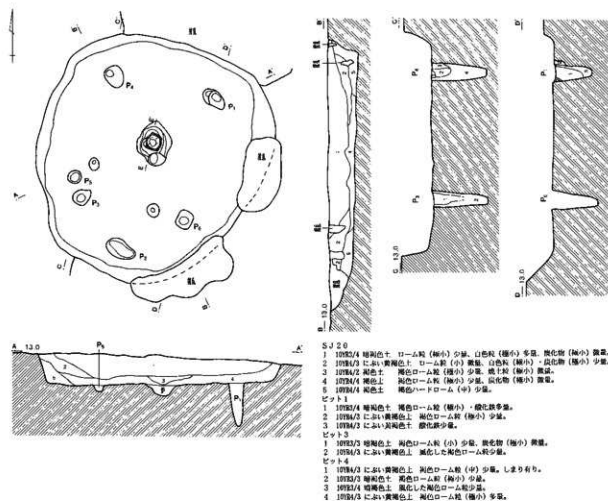
炉跡は住居跡のほぼ中央に設置されていた。径約70cm、深さ8cmの円形の掘り込みで、中央部がわずかに焼土化した地床炉である。

本住居跡出土の遺物は比較的少なく、土器破片が約600点ほど検出されている。石器では打製石斧1点、磨

第49回 第19号住居跡



第50図 第20号住居跡



S J 20

- 1 10782/4 暗褐色土 ローム粒 (細小) 少量、白色粒 (細小) 多量、炭化物 (細小) 微量。
- 2 10782/3 におい黄褐色土 ローム粒 (中) 微量、白色粒 (細小)・炭化物 (細小) 少量。
- 3 10784/4 褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量、焼土粒 (細小) 微量。
- 4 10784/4 褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量、炭化物 (細小) 微量。
- 5 10784/4 褐色土 褐色ハードローム (中) 少量。

ピット1

- 1 10783/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小)・炭化物少量。
- 2 10784/3 におい黄褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量。
- 3 10784/3 におい黄褐色土 炭化物少量。

ピット3

- 1 10783/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (小) 少量、炭化物 (細小) 微量。

ピット4

- 1 10784/3 におい黄褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量、しまり有り。
- 2 10783/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量。
- 3 10783/4 暗褐色土 炭化した褐色ローム粒少量。
- 4 10784/3 におい黄褐色土 褐色ローム粒 (細小) 少量。

石2点が検出されている。

第20号住居跡

AN-17, AO-17に位置する。平面形態は隅丸方形を呈する。P2と炉跡を結ぶラインが主軸であったと考えられる。その方向はN-18°-Eである。壁の一部は擾乱によって破壊されている。規模は小さく、長径3.9m、短径3.7mを測る。壁は45cm残存している。周溝はなく、拡張の痕跡は認められない。

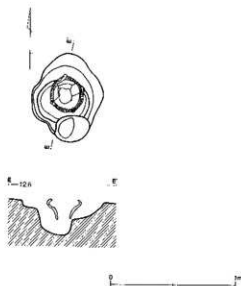
主柱穴は4基で(P1, P3, P4, P6)、移築の痕跡はない。柱穴の土層断面には、柱底と考えられる堆積の状況が認められた。

炉跡は、主軸上のやや奥壁に設置されている。掘り

方は楕円形で、口縁部が強く屈曲する重圏文系深鉢の上半部を炉体としている(第174図1)。炉体土器の下部にはさらに円形の掘り込みがある。

本住居跡からは第174図2、3、第175図1など、覆土中位から完形に近い個体が出土している。第175図2は床面に近い位置から検出された。しかし、出土遺物の全体量は少なく、ドットを確認できた遺物は383点のみである。石器では打製石斧5点、敲石1点が検出されている。遺物は住居跡全域にほぼ散在している。ドット図断面には図版掲載資料のみ掲載したが、他の遺物も覆土中位から上位にかけて、間断なく分布している。

第51図 第20号住居跡炉跡



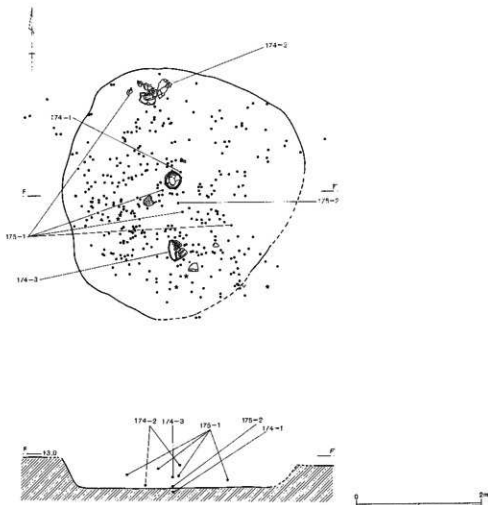
第21号住居跡

AN-19に位置する。平面形態は隅丸の五角形を呈する。本住居跡も第20号住居跡と同様小規模なもので、長径3.4m、短径3.4mを測る。壁の残りは比較的良好で、約55cm残存している。周溝はなく、支柱穴の状況から、拡張はなかったと考えられる。

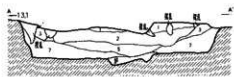
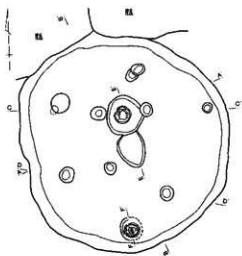
南壁際に埋塞が設置されていた。円形の掘り方を有するもので、無文の浅鉢を使用している。口縁部がわずかに住居の中心に向かうように傾いている。ほぼ完形に近い。

支柱穴は5基で、平面の屈曲部にそれぞれ対応する位置に配置されている。炉跡周囲に小ピットが認めら

第52図 第20号住居跡遺物分布図

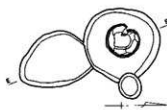
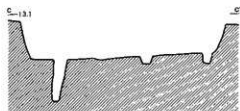


第53図 第21号住居跡



S J 2 1

- 1 10703/A 暗褐色土 ローム粒 (極小) - 黒色粒少量。
- 2 10702/C 暗褐色土 黒色粒 (極小) 少量、炭化物の沈着少量。
- 3 10703/A 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
- 4 10703/C 互角色土 黒色土粒 (極小) 少量、ローム粒 (小) 中量。
- 5 10702/C 暗褐色土 黒色土粒 (極小) 少量、ローム粒 (小) 中量。
- 6 10703/C 暗褐色土 黒色土粒 (極小) 少量、ローム粒 (極小) 中量。
- 7 10704/D におい黄褐色土、ローム粒 (中) 少量。



S J 2 1 跡

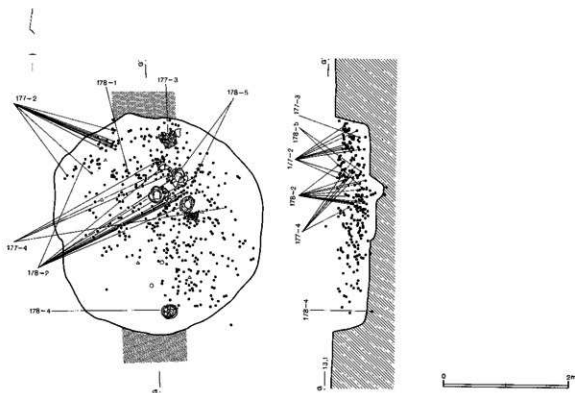
- 1 10703/A 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量、焼土粒 (小) - 炭化物 (中) 微量。
- 2 10703/C 暗褐色土 含有物となし、灰質土上。
- 3 10703/C 暗褐色土 焼土粒 (極小) 多量、褐色ローム粒 (極小) 微量。
- 4 10704/A 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 微量。
- 5 10704/D におい黄褐色土、ローム粒 (極小) 少量。
- 6 10704/D におい黄褐色土、風化したローム粒 (中) 中量。

埋蔵

- 1 10704/D におい黄褐色土、褐色ローム粒 (極小) 微量。



第54図 第21号住居跡遺物分布図



れたが、性格は不明である。

炉跡は主軸上の奥寄りに設置される。径60cm程の円形の掘り方があり、そのやや下部に炉体が設置されている。炉体土器はキャリパー形深鉢の口縁部で、床面から約10cm程下がった位置にある。掘り方には焼土粒が多く含まれていた。

掘り方に付随するように、長径約50cm程の掘り込みが住居跡中央部に検出された。断面図では明らかではないが、床面精査時の所見から、炉本体の掘り方よりも古いものであると判断される。炉の移築に伴う痕跡の可能性もあろう。

本住居跡からは出土した遺物は、ドットが確認されたもので、496点である。うち石器はフレイク・チップ類5点、打製石斧、磨製石斧各1点、磨石3点が検出されている。

土器は比較的残りの良いものが多く、特に住居跡北半の覆土中位から、完形に近い個体が数点検出されている。住居跡南西域からは遺物はわずしか検出され

なかった。垂直分布では床面直上に位置するものは少ないが、覆土下位から上位にかけて間断なく分布している。

第22号住居跡

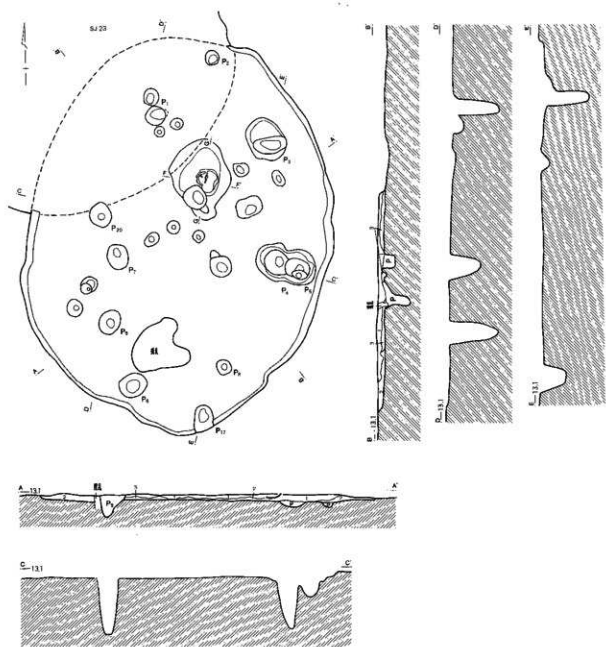
AM-16, AN-16に位置する。第23号住居跡に約1/4程破壊されている。平面形態は楕円形を呈する。長径約6.2m、短径約4.8mで、壁の残りは悪く、約10cm程しか残存していない。

主柱穴はおそらく8本であろう。P1, P2, P3, P4, P6, P8, P9, P20がそれに該当すると考えられる。拡張、移築の有無については明確ではない。

床面は微細な攪乱のため、やや凹凸があるが、比較的平坦化されている。周溝は確認されなかった。

炉跡は主軸上の北寄りの位置にある。不整楕円形の、やや大きめのプランを持つ埋燬炉である。炉体土器は円筒形深鉢で、主として胴部中位が用いられている。炉体の下部はやや掘り窪められている。炉体土器の南側に隣接してピットが掘られているが、土層地積の状

第55図 第22号住居跡

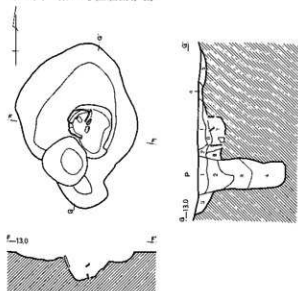


S J 22

- 1 10YR3/3 暗褐色土 ローム状(中)・炭化物・硝子類・白色粒(極小)少量、ローム粒(極小)少量。
 2 10YR3/4 紅褐色土 ハーブ・フラスコ(中)少量、炭化したローム粒(中)少量。
 3 10YR3/4 暗褐色土 ローム状(中)少量、結核の炭化したもの。

0 2m

第56図 第22号住居跡伊跡

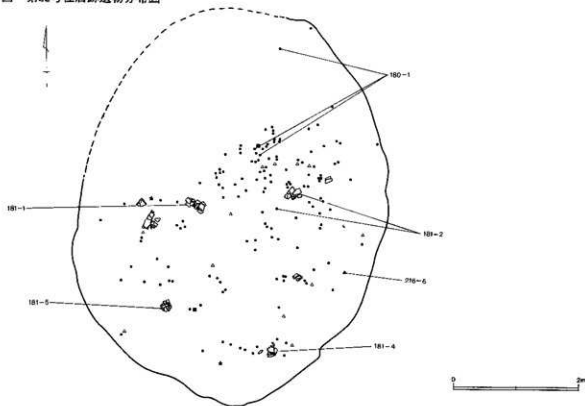


S J 2 2 伊跡

- 1 10702/3 黒褐色土 粘土粒(極小)少量, 褐色ローム粒(極小)・炭化物散見。
 - 2 10702/3 黒褐色土 焼けた褐色ローム粒(中)少量, 白色粒(極小)・多量, 粘土粒(極小)少量。
 - 3 10702/3 黒褐色土 褐色ローム粒(小)少量。
 - 4 10703/4 暗褐色土 粘土粒(極小)少量。
 - 5 10704/4 褐色土 焼けた褐色ローム粒(小)少量。
 - 6 10704/4 褐色土 焼けた褐色ローム粒(小)少量。
 - 7 10702/3 黒褐色土 粘土粒(小)・褐色ローム粒(極小)少量。
 - 8 10703/3 暗褐色土 粘土粒(極小)・褐色ローム粒(極小)少量。
- 伊跡内ドット
- 1 10702/3 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量, 粘土粒(極小)少量。
 - 2 10702/3 暗褐色土 粘土粒(極小)・褐色土(極小)少量, 炭化物(極小)少量。
 - 3 10703/4 暗褐色土 褐色ローム粒(小)少量。
 - 4 10704/4 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。



第57図 第22号住居跡遺物分布図



況から、炉跡埋没後に掘削されたものと判断された。

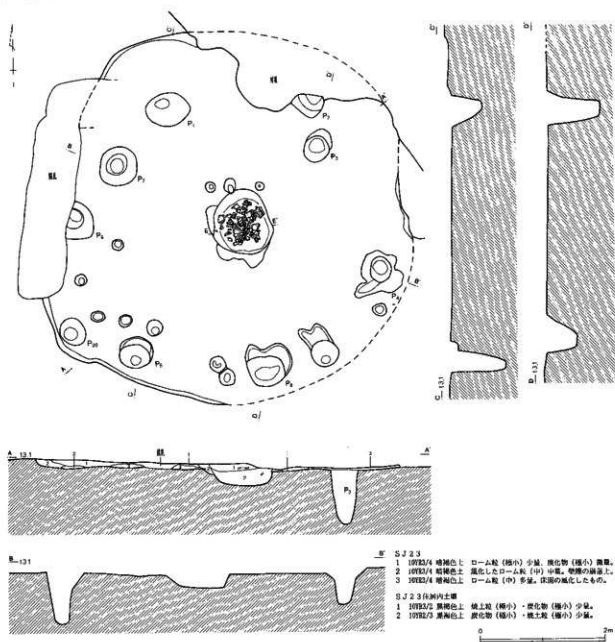
本住居跡から出土した遺物は比較的少量であった。ドットが確認されたものは196点である。しかし、完全に近い個体が比較的多く、いずれも床面に接する状態で出土している。また、フレイク・チップ類が14点と多いことも注目される。フレイク・チップ類は、炉跡周辺と、南東壁寄りから多く検出されている。その他、石鏃が1点、打斧が2点出土している。

本住居跡自体には、炭化材の分布など、被災した痕跡は認められなかったが、第181図3, 4は二次的な被熱を受けている。遺物出土状況から、住居跡使用時、または、廃絶後少なくとも遺物が残された状態で焼失した可能性がある。

第23号住居跡

AM-15, AM-16に位置する。第22号住居跡を切って構築された。平面形態はやや隅丸の方形を呈する。長径5.9m、短径5.8mを測る。壁の残りは薄く、10cmのみ残存している。

第58図 第23号住居跡



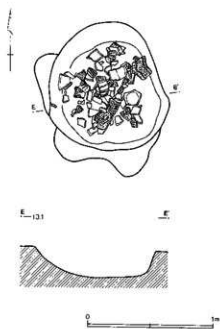
主柱穴は7本で、P1, 3, 4, 5, 6, 7, 8がそれに該当する。柱穴の移築の痕跡は確認されなかった。住居跡南半部に小ピットが散在するが、性格は不明である。周溝は認められなかった。

本住居跡も、廃絶後に炉跡に人の手が加わっている。住居跡のはほぼ中央に土器片と焼土粒が密に含まれる土層が存在する。位置関係等から、この土層によって、本住居跡の炉跡が破壊された可能性が極めて高い。住居跡の壁の残りが不良なため、埋没がどの程度進行し

た段階で掘削が行われたかは明らかではないが、覆土の一部が本土壤によって切られているため、埋没開始後掘削されたことは明らかである。

前述のように、本土壤には多量の土器片が含まれていたが、そのすべてが火を受けていた。また、覆土には焼土粒が含まれ、土層の壁、底面もわずかながら焼土化していた。これらの状況から、本土壤は住居跡埋没開始後、覆土中から炉跡を掘り抜くように掘削され、土器片が充填された後、火がかけられたと考えられる。

第59図 第23号住居跡内土壌



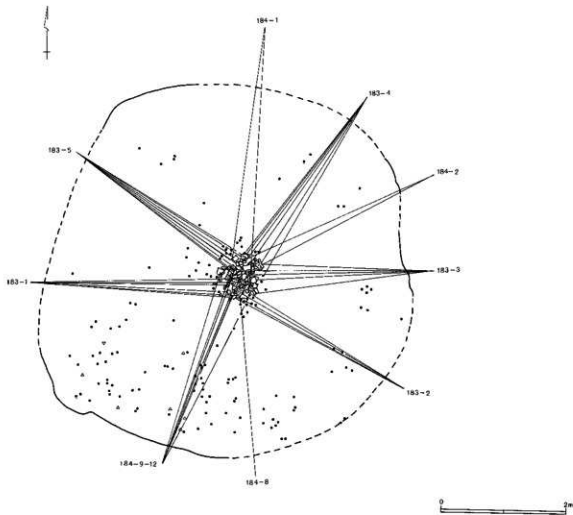
この土壌から出土した土器は、実測可能な個体が5
個体分と、その他個体識別の可能な資料が4点である。
本土壌と土壌外出土の土器で、接合したものはない。

この土壌の掘削が、住居跡の埋没開始後行われたこ
とは明らかであり、住居跡の本来的な機能と直接的な
関連があったとは考えられない。しかし、が跡を直接
掘り抜き、土器を充填し火を用いるという行為は、住
居廃絶に伴う行為である可能性は高い。

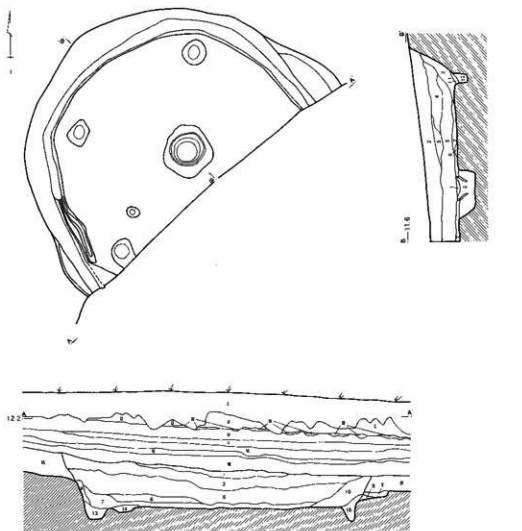
これら土壌から出土したものを含め、本住居跡から
出土した遺物は、ドットを確認したもので、425点であ
る。石器ではフリイク・チップ類が16点である。遺物
は住居跡南西域に比較的多く分布し、フリイク・チッ
プ類も同様の傾向を示す。上記の土壌出土のものを除
くと、住居跡中心部からの出土遺物は少ない。

第24号住居跡

第60図 第23号住居跡遺物分布図



第61図 第24号住居跡



S J 24

- 1 黄土
- II 10722/1 黒色土 白色粒(細小)【FA記号】少量。
- III 黄褐色磁器(FA)不連続に分布。
- IV 10721.7/1 黒色土、ごく少量の磁器の分布。
- V 10722/1 黒色土、含有物となし。わずかに灰が混入する。
- VI 10722/1-10722/1 黒色土、層相的に別るべき部分。含有物となし。
- VII 10722/1 黒褐色土、酸化鉄がわずかに沈着する。含有物となし。
- VIII 10722/1 黒褐色土 ローム粒(細小)少量。
- IX 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)少量。ローム粒の割合が層よりわずかに多い。
- X 10722/2 黒褐色土 風化したローム粒【中】。
- XI 10722/2 黒褐色土・黄褐色ローム粒

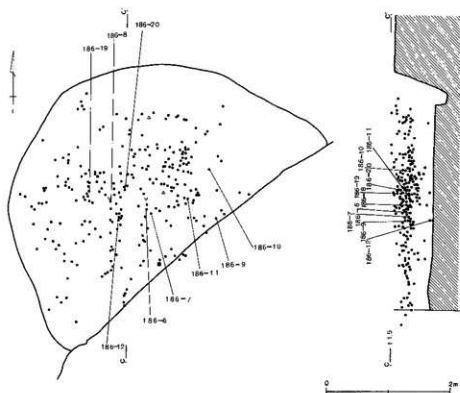
0 2m

- 1 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)少量。
- 2 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)少量。
- 3 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)少量。
- 4 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)少量。
- 5 10722/2 黒褐色土 ローム粒(小)少量。
- 6 10722/2 黒褐色土 ローム粒(小)少量、ローム粒(中)少量。
- 7 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)・【中】少量。
- 8 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)少量、ローム粒(中)少量。
- 9 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)・【中】少量。
- 10 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)少量、ローム粒(中)少量。
- 11 10722/2 黒褐色土 ハードロームの混れ込み。
- 12 10722/2 黒褐色土・ハードローム
- 13 10722/2 黒褐色土・ハードローム
- 14 10722/2 黒褐色土 ローム粒(中)少量。
- 15 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)・【中】少量。

S J 24 砂層

- 1 10722/2 黒褐色土 ローム粒(細小)少量。
- 2 10722/2 黒褐色土 黄土粒(細小)・酸化鉄(細小)少量。

第62図 第24号住居跡遺物分布図



AN-19に位置する。住居跡集中域からやや東に離れた位置にある。遺跡内の谷を臨む緩やかな斜面上にある。標高11m強の位置にあり、本遺跡の中では、第25号住居跡に次いで低い位置に占地されたものである。住居跡の約1/2が調査区外にかかるため、全形は不明である。掘り込みは深く、壁は75cmを測る。平面形態はおそらく、五角形に近いものと考えられる。

主柱穴は3基確認されている。おそらく、5本の柱穴で構成されていたと考えられる。

周溝は1条で、住居跡の壁直下に掘り込まれている。床面は丁寧に平坦化されており、中央付近には硬化が見られる。

炉跡は埋篋炉で、おそらく住居跡のほぼ中央付近に位置するのであろう。掘り方はやや大きめで、径約80cmの円形である。深さは約30cmで、炉体土器は掘り方覆土の中央に設置されている。掘り方の壁に焼土化した部分は認められなかった。やや大形のキャリパー形

深鉢の口縁部破片を炉体として用いている。

本住居跡から出土した遺物は、ドットを確認したものが267点と、比較的少量である。

遺物は覆土中位から集中して検出されている。

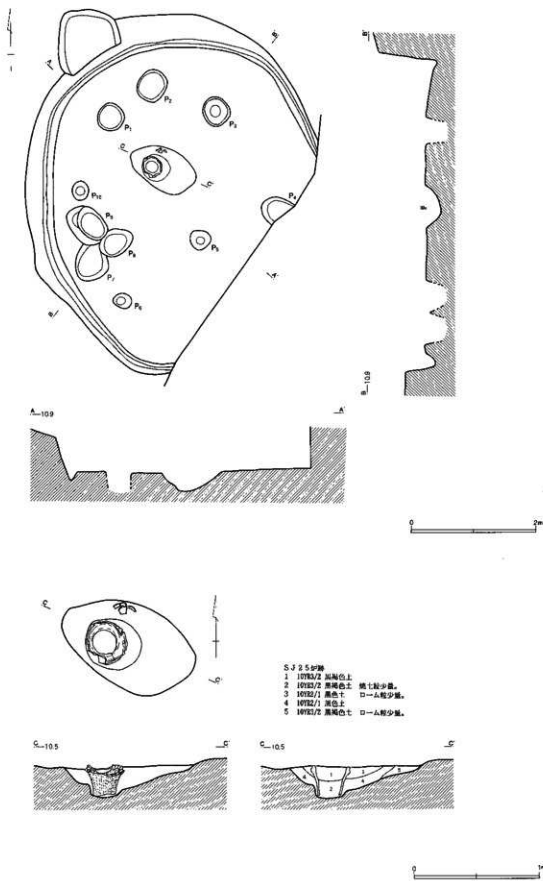
床面から出土しているものは第186遺12と、他に図示不可能な小破片がわずかにあるだけである。出土土器で完形に近いものは炉体土器のみで、他はいずれも破片である。

覆土は自然堆積の様相を呈しており、遺物もこれと対応するように、レンズ状の堆積をなしている。住居跡断絶後、再掘削等が行われず、埋没の過程で遺物の廃棄、または流入があったものと推測される。

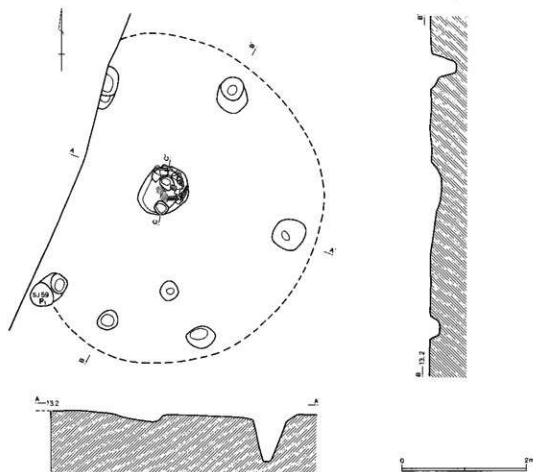
第25号住居跡

A I-22, A J-22に位置する。本遺跡内の谷に向かう斜面上に位置し、谷を挟んで第24号住居跡と向かい合う位置にある。標高10.50m前後の位置にあり、本遺跡で検出された住居跡の中では、最も低い位置に占

第63図 第25号住居跡



第64図 第26号住居跡



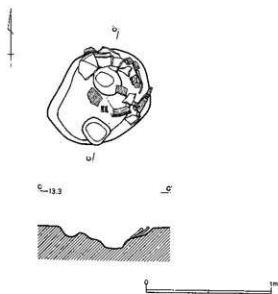
地されている。

住居跡の約1/3が調査区外にかかる。壁は確認できる部分で約70cm残存しており、長径は約6m前後と推測される。両側縁が膨らみ隅丸長方形のプランを有すると思われる。

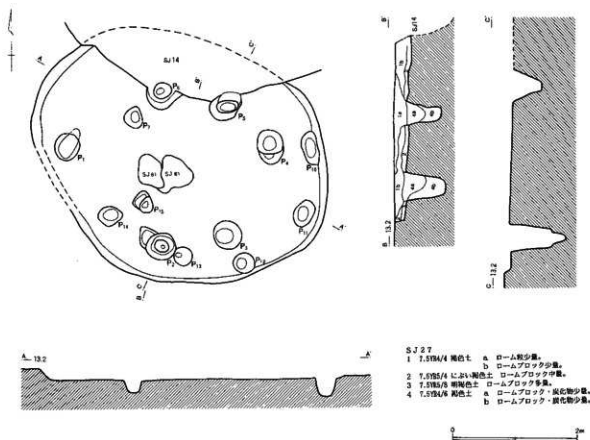
主柱穴は7基確認された。(P1, 2, 3, 4, 7, 8, 9)。P7, 8, 9は、同じ機能を有する柱の移築の痕跡と考えられ、主柱は5ないし、6本で構成されていたと考えられる。

周溝は1条で、壁直下に巡る。床面は平坦で、全体にわたってよく硬化している。

炉跡は住居跡のやや北寄りに設置されている。楕円形の掘り方を有する埋燵である。掘り方の径は110×70cmで、掘り込みは浅い。口縁部がわずかに外反



第65図 第27号住居跡



する円筒形の深鉢を炉体とし（第187図1）、炉体の直下部分だけわずかに深く掘り込まれている。

本住居跡は比較的多量の遺物を含んでいた。16点の実測可能な土器の他、破片も多数出土しているが、出水がひどく、図化できなかった。出土位置はいずれも覆土中位に集中していた。石器では打製石斧が5点出土している。

第26号住居跡

AM-15に位置する。本住居跡は表土直下に炉体が検出されたもので、壁の掘り込みは確認されなかった。炉跡の存在と、柱穴の配置から、住居跡の存在と平面形態が推定された。

柱穴は6基確認されたが、いずれも浅い。円形の配置を取る。柱穴の配置から、住居跡の平面形態も円形に近いものではなかったかと推測される。径は5m前後と推測される。周溝は確認されなかった。

炉跡は、土器囲い炉で、大形のキャリバー形深鉢の破片によって構成されている（第190図1）。本住居跡出土の遺物は極めて少なく、炉跡以外からは、ごくわずかな出土を見たのみである。石器では石皿が1点出土している。

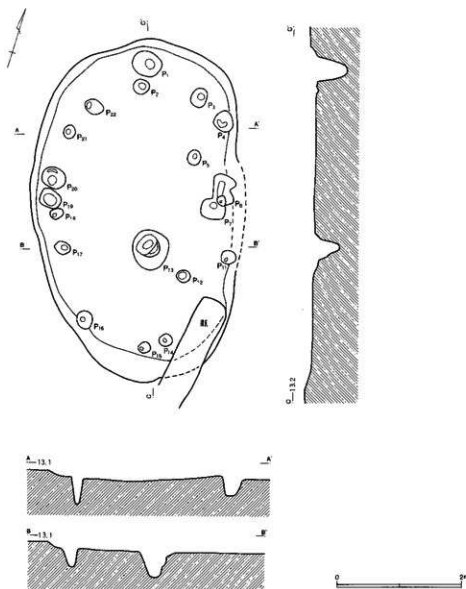
第27号住居跡

AO-16、AO-17、AP-16、AP-17に位置する。第14号住居跡と重複する。平面形態は、おそらく楕円形に近いもので、やや不整である。周溝は確認されなかった。壁は25cm残存している。長径4.9mを測る。短径は4m前後であろう。

柱穴は16基確認されたが、主柱穴の構成ははっきりしない。

炉跡は確認されなかった。住居跡中央部に柱穴が重複する箇所があるが、これに破壊されたという痕跡も特に認められなかった。床面は軟弱で小規模な凹凸が

第66図 第28号住居跡



ある。

覆土は他の住居跡に比べ、明るい色調のものが堆積していた。

本住居跡出土の遺物は極少量で、図示可能なものはなかったが、阿玉台式の土器が少量みられ、本住居跡の所属時期も阿玉台式期と考えられる。

第28号住居跡

A P-17に位置する。平面形態は長楕円形である。長径5.4m、短径3.4mを測る。壁の深度は、20cmである。想定される主軸方向はN-18°-Wである。周溝は検出されなかった。

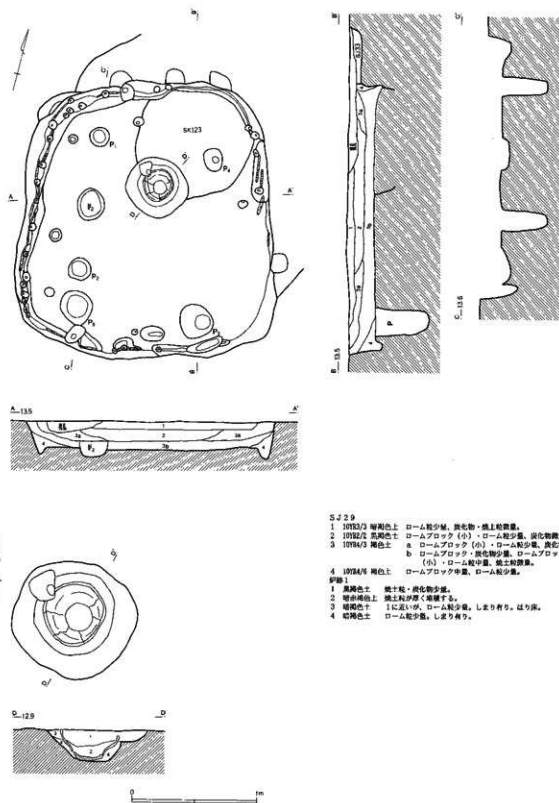
柱穴は主軸上にやや大きめのものが2基配置され、

他に小さめのものが規則的に配置される。これら小規模な柱穴は円形に近い配置となり、住居跡の掘り込みとややずれるようにも見えるが、複数の住居跡が重複している痕跡は認められなかった。

本住居跡からは炉跡は検出されなかった。柱穴、周溝等の状況から、拡張、建て替えがあった可能性は低いと考えられる。

本住居跡出土の遺物は極めて少なく、土器で図示可能なものは第193図1～11にあげたものだけで、他は小破片がわずかに見られただけである。石器では、フレイク・チップ類が1点、打製石斧・磨製石斧が各1点出土している。土製品では第214図24の耳栓が出土

第67図 第29号住居跡

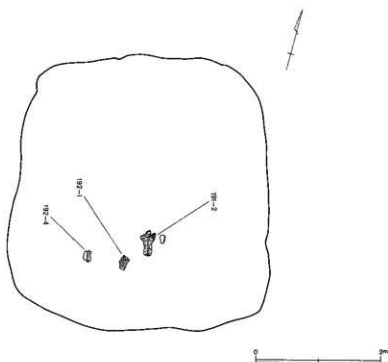


S J 29

- 1 10132/3 黄褐色土 ローム粒少量、炭化物・焼土粒微量。
- 2 10132/2 黄褐色土 ロームブロック(小)・ローム粒少量、炭化物微量。
- 3 10134/3 褐色土 a ロームブロック(小)・ローム粒少量、炭化物微量。
b ロームブロック・炭化物少量、ロームブロック(小)・ローム粒中量、焼土粒微量。
- 4 10134/4 褐色土 ロームブロック中量、ローム粒少量。

説明:

- 1 黄褐色土 焼土粒・炭化物少量。
- 2 暗赤褐色土 焼土粒が厚く堆積する。
- 3 暗褐色土 1に近いが、ローム粒少量、しまり有り、ほり跡。
- 4 暗褐色土 ローム粒少量、しまり有り。



している。

第29号住居跡

AP-16に位置する。平面形態は隅丸の台形を呈する。南側の壁はわずかに湾曲している。北壁はほぼ直線的で、東西の壁も南壁に向かって開くが、形状は直線的である。第123号土壌の埋没終了後、貼り床をして住居跡を構築している。第33号住居跡の埋没終了後、その一部を破壊して構築されている。長径4.3m、短径3.9mを測る。壁の残りは良好で、40cm前後残っている。主軸方向はN-14°-Wである。

周溝は1条検出された。東壁の南半は掘削されず、南壁は部分的に掘削されている。周溝の底面には小ピットが規則的に配置されている。また、周溝の底面にはごく狭く、やや深い溝がさらに掘り込まれている(図中網掛け部分)。この中には、ごく柔らかいローム状の覆土が堆積していた。性格は不明だが、これは、住居跡側壁を立上げるための溝であった可能性がある。

炉跡は、住居跡の主軸上北寄りの部分に構築されている。大形のキャリバー形深鉢の口縁部を炉体土器と

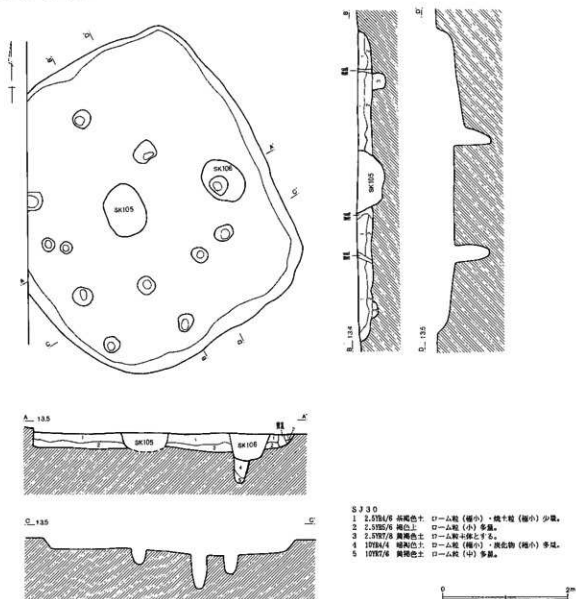
して用いている。掘り方は径約90cmで、炉体はほぼ中央に設置されている。

炉跡西側にピットがあり、覆土に炭化物、焼土が含まれていたため、炉跡と考えた。しかし、掘り込みは覆土中から行われており、本来的に本住居跡に帰属していたと考えることは難しい。覆土中に貼り床等はなく、二次的に住居として使用された痕跡はない。埋没進行途上において、一時的に炉的な使用がなされたピットであったと考えられる。

柱穴は中規模のものが5基あり、これが柱柱を構成するものと考えられる。その外縁に小ピットが散在する。これは支柱的な機能を有していた可能性がある。東壁際には柱穴の所在はまばらである。柱穴と周溝の状況から、拡張、大規模な建て替えが行われた可能性は低い。

本住居跡からは完形に近い土器が3点出土している。第191図2のキャリバー形深鉢は、ほぼ完形で、覆土中位から出土している。他に有孔銅付土器、浅鉢の破片が検出された。出土状況から見て、短期間のうちにまとまって廃棄されたものと考えられる。石器では、

第69図 第30号住居跡



- S330
 1 2.5YR4/6 黄褐色土 ローム粒(細小)・焼土粒(細小)少量。
 2 2.5YR5/6 褐色土 ローム粒(小)多量。
 3 2.5YR7/8 黄褐色土 ローム粒中体とする。
 4 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒(細小)・炭化物(細小)少量。
 5 10YR7/6 黄褐色土 ローム粒(中)多量。

フリイク・チップ類6点、打製石斧3点、磨石1点が検出されている。

第30号住居跡

AN-14, AN-15, AO-14, AO-15に位置する。住居跡集中域の北東にあたる。平面形態は長方形を呈し、長径4.9m、短径4mを測る。壁は20cm程残っている。一部が調査区外にかかる。主軸方向はN-36°-Wである。

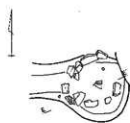
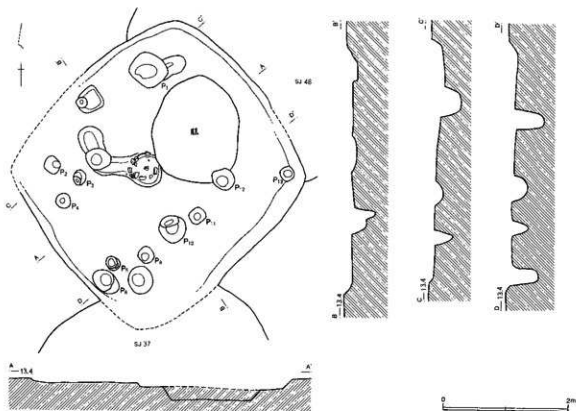
柱穴は小規模のものが住居跡中央部付近に散在するが、その配置に規則性を認めることは難しい。

炉跡は現存していない。住居跡中央部に第105号土壌が存在するため、本土壌に炉が破壊されている可能性もある。本土壌は住居跡の埋没終了後、覆土上面から掘削されている。本遺跡では、この例以外にも炉跡が破壊されたり、構築前に床面が深く掘られる例があり、それらを勘案すると、本住居跡の事例もこれらに類するものの可能性がある。

周溝は検出されなかった。柱穴等の状況から、拡張等はなかったと判断される。

床面は住居跡北半、東半が「やや下がり気味である。

第70図 第31号住居跡



K-133



- 1 1019E/4 黄褐色土 粘土質(砂小)・炭化物(砂小)少量。しりあり。
- 2 1019B/3 黄褐色土 1より黄色。しりあり。



床面は非常に堅い。

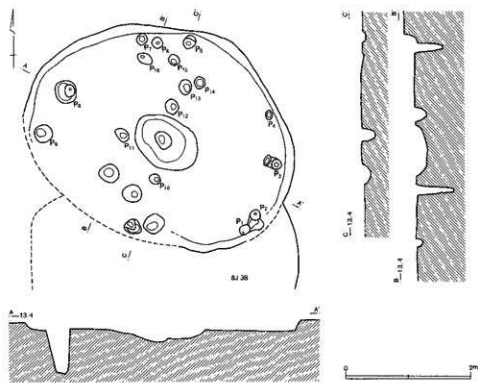
本住居跡出土の遺物は極めて少ない。本住居跡の所属時期は、ごく少量検出された遺物から、加曾利E I式以前のものと考えられる。

第31号住居跡

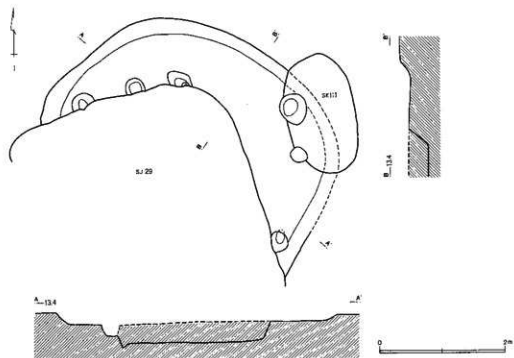
AO-15に所在する。平面形態はやや歪んだ矩形を呈する。第37、48号住居跡と重複する。長径4.1m、短径3.9mを測る。主軸の方向は断定できないが、柱穴の配置から、北東から南西にかけての軸が該当すると考えられる。

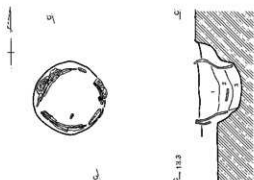
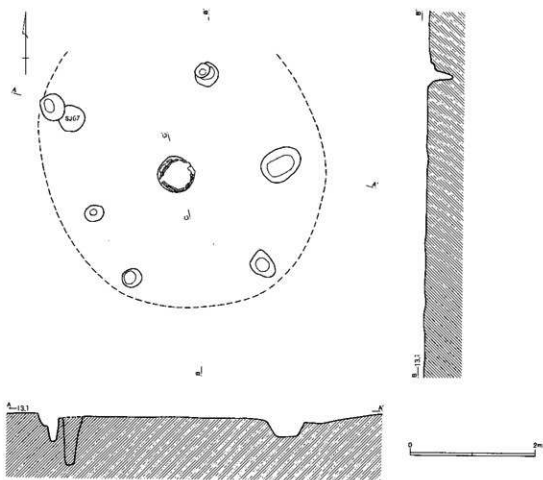
柱穴は南東壁と北西壁に直線的に沿うように掘削さ

第71図 第32号住居跡



第72図 第33号住居跡





S.7.3.49跡

- 1 10YR2/7 暗褐色土 ローム殻・炭化物・焼土質少量。
- 2 10YR3/7 暗褐色土 ロームブロック・炭化物・焼土質少量。
- 3 10YR4/4 褐色土 焼土殻・ロームブロック少量。

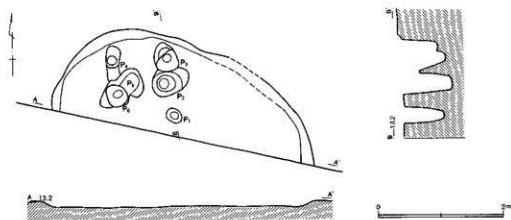
れていた。主柱はおそらく4または6本で構成されていたと考えられる。北東付近では柱穴は確認できなかった。

炉は住居跡ほぼ中央に設置されていた。径50cm程の土器用い炉である。炉体は2個体分の土器の破片からなっている。炉跡の一部は擾乱によって破壊されている。掘り方は径にはほぼ一致するが、西側に向かって、掘り方の一部が溝状にのびている。

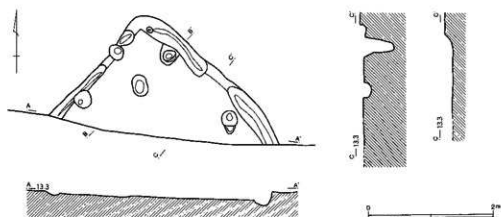
周溝は確認されなかった。柱穴等の状況から、拡張等は行われなかったと考えられる。

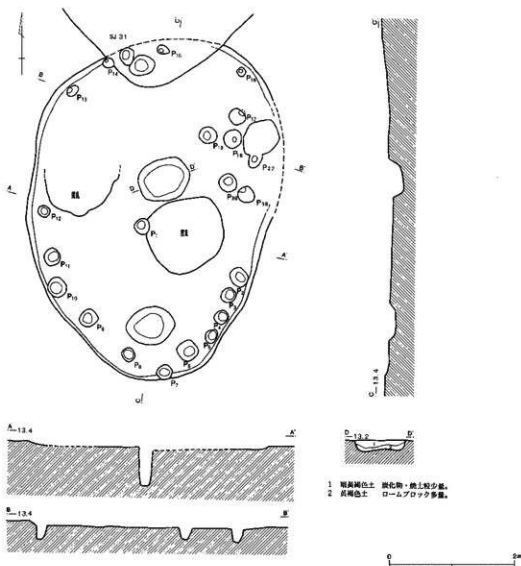
本住居跡からは、ごくわずかの遺物の出土を見たのみで、第196図6、7の炉体土器がほぼ唯一のものであ

第74図 第35号住居跡



第75図 第36号住居跡





る。

第32号住居跡

A0-15に位置する。平面形態は楕円形を呈する。第38号住居跡と重複するため、プランの一部は不明である。長径4m、短径は3m前後と推測される。住居跡の遺存状態は不良で、壁は15cmほどが確認されただけである。

炉跡は明確なものはないが、住居跡中央部に土塊状の掘り込みが存在する。長径110cm、短径80cm程の楕円形の掘り込みで、中央部がわずかに窪む。焼土等は確認できなかった。炉跡かまたは炉を破壊した痕跡の可能性があろう。

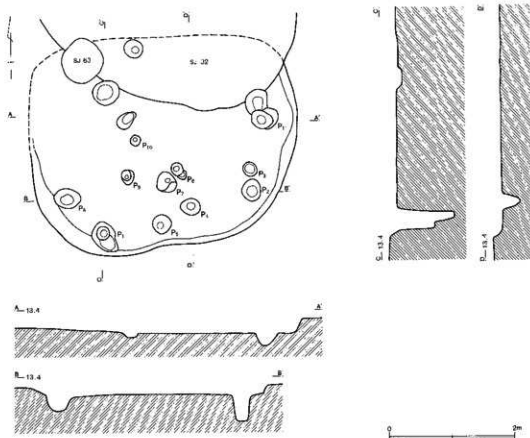
柱穴は20基確認された。主柱構成は明確ではないが、住居跡中央部の短軸上に並ぶように小規模な柱穴が存在し、また、長軸上の両壁際に柱穴がある。これらの柱穴のいずれかによって主柱が構成されていたと考えられる。

床面はほぼ平坦である。全体に非常に堅い。周溝は確認されず、拡張等の痕跡は認められなかった。

本住居跡からは、図示可能なものは出土せず、縄文土器の小破片がわずかに検出されたのみであった。検出された破片に阿玉台式のものがみられ、本住居跡も該期のものと考えられる。

第33号住居跡

第77図 第38号住居跡



AO-16、AP-16に位置する。第29号住居跡、第111号土壌と重複しており、床面、プランとも、約1/2程が残っているのみである。推定される平面形態は、兩丸の長方形で、長軸は4.6mである。壁は浅く、12cmが確認された。また、壁の立ち上がりは弱く、傾斜が緩やかである。

柱穴は5基確認されているが、住居跡の中央部が破壊されているため、柱穴の配置は不明といわざるを得ない。炉跡も残っていない。

周溝は確認されず、拡張等の痕跡も認められなかった。

本住居跡出土の遺物は極めて少なく、第196図8、9に掲載した土器破片以外は、小破片がわずかに検出されたのみである。

第34号住居跡

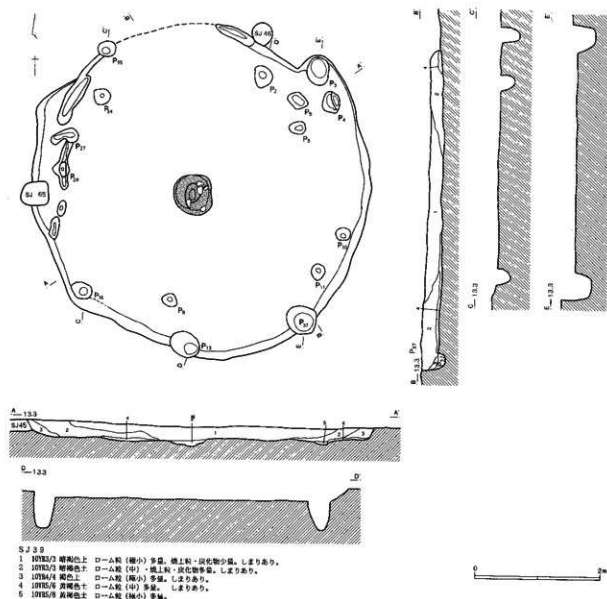
AO-16に位置する。本住居跡は壁の掘り込みが確認できず、炉跡と柱穴の配置によって、確認されたも

のである。それゆえ平面形態は明確ではないが、柱穴の配置から、円形に近いものであった可能性が高い。住居跡の径は4.5m前後と推測される。

本住居跡は第40号住居跡と重複する。調査時には、本住居跡の炉体土器が第40号住居跡の張り出し部に位置する埋葬ではないかという仮説も検討された。土器が所在する位置からは判断がつかず、他に判断する証左の検出につとめたが、最終的には決着がつかなかった。ここで第34号住居跡の炉体とした根拠は、覆土中に焼土粒が認められたこと、本個体が柄鏡形住居に属するとした場合、型式学的に古相と認められることによる。

しかし、炉体土器としてはやや掘り込みが深いという感がある。また、柄鏡形住居の出現が本個体の所属時期にあたるか否かは中期末の編年と関連して微妙な問題である。ここでは、第34号住居跡の埋葬として報告するが、別案の解釈も成立しうることを付言してお

第78図 第39号住居跡



きたい。

柱穴は6基確認された。これらが主柱を構成していたと考えられる。

炉跡は住居跡のほぼ中央に設置されていた。大形のキャリバー形深鉢の上半部分を炉体の本体部分に用いている(第194図1)。さらにその口縁部付近の周囲に、他の個体の土器片を貼り付けるようにして炉体全体が構成されている。掘り方の深度は約30cmを測る。炉体土器の内部には暗褐色系の覆土が堆積していた。

床面はほぼ平坦で、フラットである。周溝は確認されなかった。

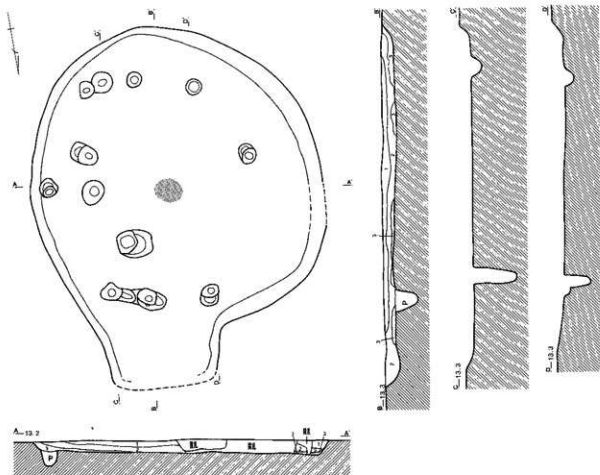
柱穴等の状況から、拡張、移築等があった可能性は低い。

本住居跡出土遺物では、炉体土器が注目される。他には炉体土器と同時期のものと考えられる土器破片が少量検出されている。第195図は炉体土器の上半部に貼り付けるように添えてあったものである。

第35号住居跡

A P-16に位置する。住居跡の約半分ほどが調査区外にかかるため、平面形態等については不明な点が多い。おそらく楕円形のプランを持つものと考えられる。壁の残りは不良で、約8cmが残っているのみである。

第79図 第40号住居跡



S340

- 1 100%R/4 粘褐色土 ローム粒(細小)多量、しまり、粘りあり。
 2 100%R/6 黄褐色土 ローム粒(細小)多量、壁土粒・炭化物少量、しまり、粘りあり。
 3 100%R/8 黄褐色土 ローム粒(中)多量、しまり、粘りあり。

また、壁の立ち上がりは弱く、傾斜は緩やかである。

柱穴は6基確認されたが、主柱を構成するもの、全体の配置等については不明である。いずれも50~80cm程の深さを有する。

床面はほぼ平坦で、周溝は確認されなかった。

本住居跡出土の遺物は極めて少なく、図示可能なものは検出されなかった。阿玉台式に属すると思われる土器の小破片がごく少量検出されたのみである。

第36号住居跡

AP-15に位置する。全体の約半分以上が調査区外にかかるため、全容は明らかではないが、平面形態は矩形に近いものと推測される。壁の残りは悪く、12cm

を測るのみだが、壁に沿って1条周溝が確認された。周溝は部分的に途切れている。

柱穴は4基確認されたが、主柱の構成、柱穴全体の配置については不明である。が跡は確認されなかった。床面はほぼ平坦である。

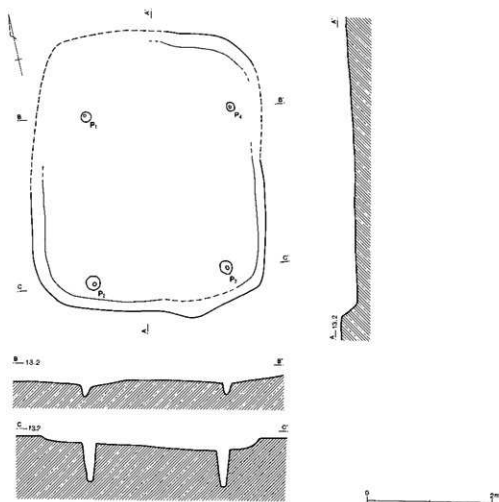
周溝、柱穴の状況から、拡張、移築等がなされた可能性は低いと考えられる。

本住居跡出土の遺物は極めて少なく、図示可能なものはなかった。加曾利E式の小破片がごく少量検出されたのみである。

第37号住居跡

AO-15, AP-15に位置する。平面形態はやや歪

第80図 第41号住居跡



んだ楕円形を呈する。第31号住居跡に一部破壊されるため、長径の正確な値は不明だが、5.5m程である。短径は3.9mである。壁の残りは悪く、15cm程である。主軸方向はN-5°-Eである。

柱穴は壁に沿うように配置されている。特に住居跡南半部の壁際には密に分布している。また、東壁の中央部にやや集中してみられる。主柱穴、壁柱穴などの機能的な位置づけについては明確にはできない。住居跡の中央部やや南寄りに1基柱穴が認められる。

炉跡は、長軸上の中央やや北寄りに設置されている。東西にやや長い楕円形の土壇で、覆土に焼土粒が含まれていた。床面等の焼土化は顕著ではない。

床面は北半部にかけて緩やかに高くなっている。全体に硬化がみられる。周溝は認められなかった。柱穴の配置等から、拡張、移築が行われた可能性は低い。

本住居跡出土の遺物は極めて少ない。阿玉台式に属する土器の小破片と、打製石斧の破片が2点検出されている。

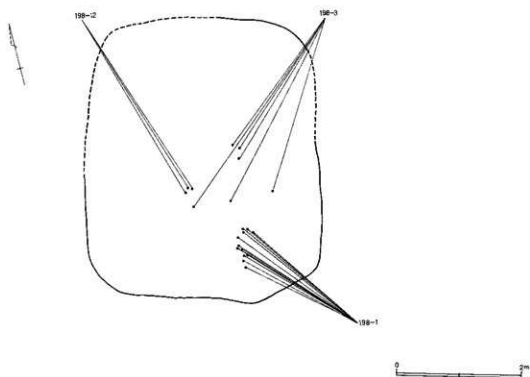
第30号住居跡

AO-15, AP-15に位置する。第30号住居跡と重複するため、プランの一部は不明であるが、おそらく、隅丸の長方形を呈すると考えられる。長径は4.5m、短径は3.8m前後であろう。壁の深度は、南側で20cm程で、西側ではほとんど確認できない。

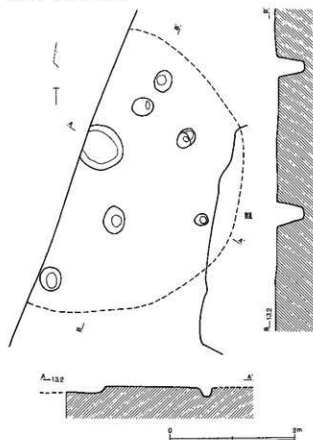
柱穴は12基確認された。分布に一定の規則性を見いだすことは難しいが、南壁、東壁では壁際に等間隔に配置されている。西半、北半部では散在する程度で、主柱の構成は明らかになっていない。

炉跡は検出されなかった。床面上で焼土化している部分も認められなかった。床面はほぼ平坦である。周

第81図 第41号住居跡遺物分布図



第82図 第42号住居跡



溝は認められなかった。

柱穴の配置等から、拡張、移築等が行われた可能性は低い。

本住居跡出土の遺物はきわめて少なく、縄文土器の小破片がわずかに検出されたのみである。

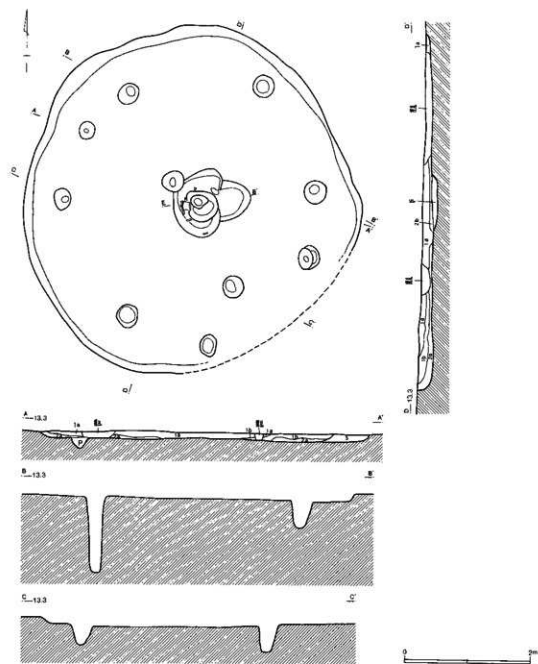
第39号住居跡

AN-15に位置する。平面形態はやや角張った円形を呈する。本遺跡の中では、比較的大きい部類の住居跡で、長径5.3m、短径5.1mを測る。壁は25cm程残っている。

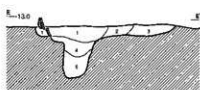
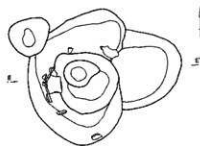
柱穴はいずれも壁際に所在する。規模も小さなものが多く、主柱を構成する柱穴の認定は難しい。

北壁から西壁にかけて、周溝が検出された。周溝は不連続なもので、幅20～80cm程のものが断続的に掘削されている。南壁、東壁には周溝は認められなかった。炉跡は、住居跡のほぼ中央に位置する。径60cm程の円形の掘り方を持つ。中央部がやや窪んでいる。

第83图 第43号住居跡



第84図 第43号住居跡炉跡



- S J 43
- 1 1973/4 暗褐色土 a ロームブロック・ローム粒・粘土粒少量、
b ローム粒少量。
 - 2 1974/7 におい黄褐色土 a ロームブロック少量、
b ロームブロック・粘土粒少量。
 - 3 1973/3 暗褐色土 ローム粒・粘土粒・炭化物少量。
- S J 43 炉跡
- 1 1973/4 暗褐色土 粘土粒・ローム粒 (微小) 少量、しりみあり。
 - 2 1973/3 暗褐色土 粘土粒・ローム粒 (微小) 少量。
 - 3 1973/5 黄褐色土 ローム粒 (中)・ローム粒 (微小) 少量、粘土粒少量、しりみあり。
 - 4 1974/7 黄褐色土 粘土粒・ローム粒 (微小) 少量、しりみあり。
 - 5 1974/6 褐色土 粘土粒は所と含まない、しりみあり。

床面はほぼ平坦である。周溝、柱穴等の状況から、拡張、移築が行われた可能性は低い。

壁際には褐色土が堆積し、住居跡中央部には、暗褐色系の覆土が堆積している。堆積の状況から、本住居跡は自然堆積によって埋没が完了したと考えられる。

本住居跡出土の遺物は、土器では実測可能な深鉢が1点、他に小破片が比較的多く検出されている(第197図)。土製品では第214図23の耳栓が出土した。石器ではフレイク・チップ類3点、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨石4点、凹石3点が検出されている。

第40号住居跡

AO-16に位置する。第34、50号住居跡と重複する。平面形態は柄鏡状を呈する。西壁がわずかに張り出ししており、張り出し部は主軸からやや東側にずれる位置にある。長径は5.7m、短径は4.7m、壁は20cm程残っている。主軸方向はN-171°-Wである。壁の立ち上がりは弱く、傾斜は緩やかである。

前述のように本住居跡と第34号住居跡は重複し、第

34号住居跡の炉体土器が、本住居跡の張り出し部埋没の可能性がある。当該土器がいずれの住居跡に属するかは調査時に両者の可能性が検討され、判断のための証左の検出につとめたが、最終的には決着がつかなかった。ここでは、第34号住居跡の炉体土器として報告するが、本住居跡埋没の可能性があると付言する。

柱穴は12基確認された。住居跡の壁に沿ってほぼ円形に配置されている。炉跡は住居跡のほぼ中央に位置する。掘り込みは認められず、住居跡の床面が約40cmの円形の範囲で、焼土化しているのみである。周溝は認められなかった。

床面はほぼ平坦である。床面の直上にはローム粒を含む黄褐色土が不連続に堆積していた。その上位の堆積土は極めて水平に堆積しており、本住居跡が自然堆積によって埋没が完了した可能性が高い。

本住居跡出土の遺物はごくわずかで、土器では第196図10-16に掲載したもの以外は、ごく少量の小破片があるのみである。石器ではフレイク・チップ類2点、打製石斧3点、細石核1点が検出されている。

第41号住居跡

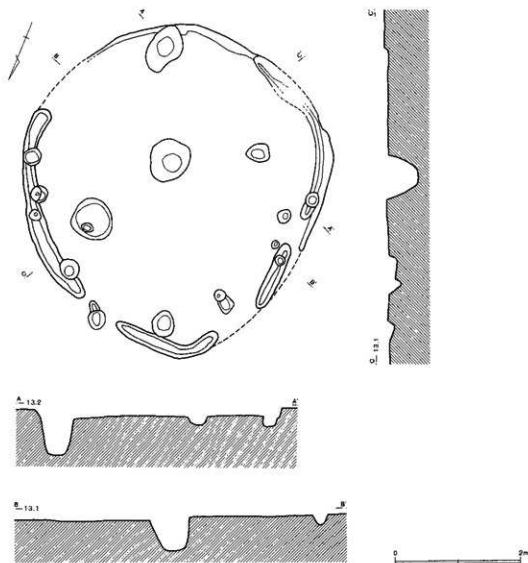
AN-16、AO-16に位置する。攪乱等により、住居跡の平面形態の一部は不明であるが、隅丸の長方形を呈する。長径は4.5m、短径は3.7mを測る。壁の遺存状況は不良で、東壁、南壁で25cm程が残存しているが、北側では立ち上がりは確認できなかった。主軸方向はN-13°-Eである。

柱穴は4基検出された。住居跡の4隅に規則的に配されているが、住居跡のプランに比べ、柱穴配置の中心はわずかに南側にずれているようである。P1、4は浅く20cm程で、P2、3は深く、70cm程の深度をもつ。径はいずれも小さい。

床面は北と西に向かってわずかに高くなっている。

炉跡、周溝は検出されなかった。これらの状況から、本住居跡は拡張、移築等は行われなかったと考えられる。

本住居跡からは、実測可能な土器が3個体出土して



いる。第198図3の個体はやや広い範囲から出土しているが、同図1、2に帰属する破片は極めてまとまって検出された。完彩に近い状態を持ち込まれたものと考えられよう。いずれも住居跡中央からやや南寄りの位置から検出された。出土状況から、これらの個体は短期間に廃棄されたものと考えられる。その他本住居跡からは、第198図に示したような遺物が出土している。

第42号住居跡

AM-15に位置する。住居跡の約1/2が調査区外にかかるため、平面形態などの全容は明らかではない。推定される径は、5 m前後である。本住居跡は柱穴の

配置によって確認されたもので、壁の立ち上がりは全く確認できなかった。

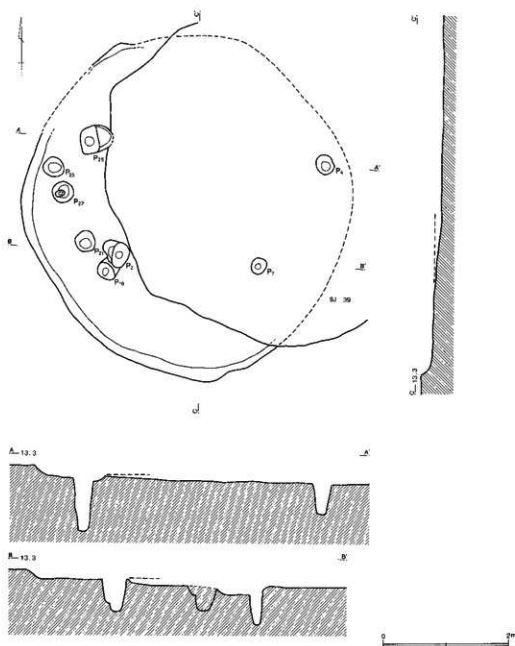
柱穴は6基確認されたが、配置に規則性を見いだすことは難しく、主柱の構成は不明である。

住居跡の中央部に該当すると考えられる位置に土壇状の掘り込みが認められる。径70cmほどの楕円形のもので、深さは10cm程度である。覆土に焼土等も確認されなかったが、本土壇が穿跡、または、穿跡を破壊した土壇の可能性もある。

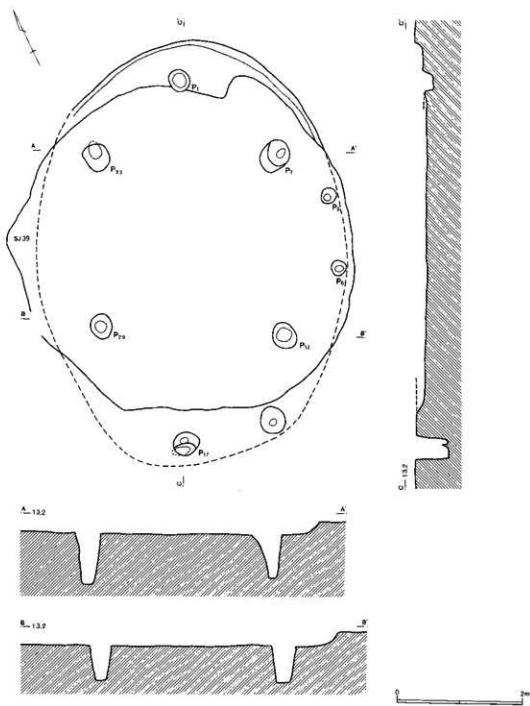
床面はほぼ平坦である。周溝は確認されなかった。

本住居跡からはごくわずかの土器破片が検出されたのみで、第200図1～3に図示可能なものを掲載した。

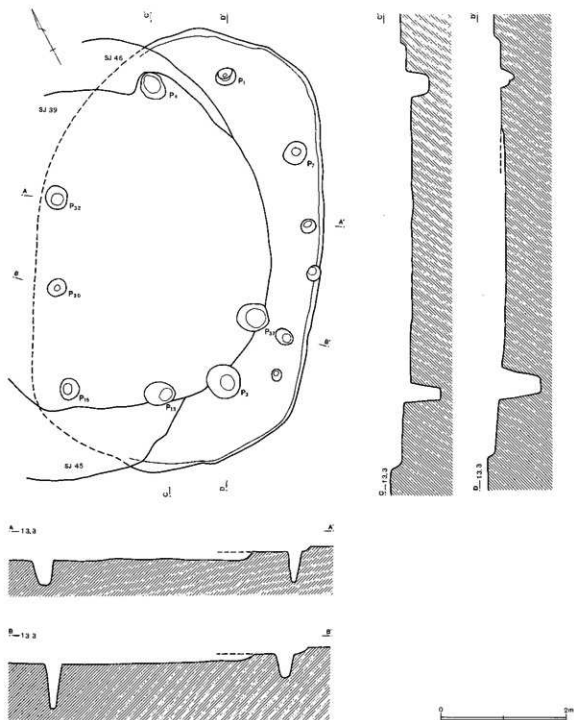
第86図 第45号住居跡



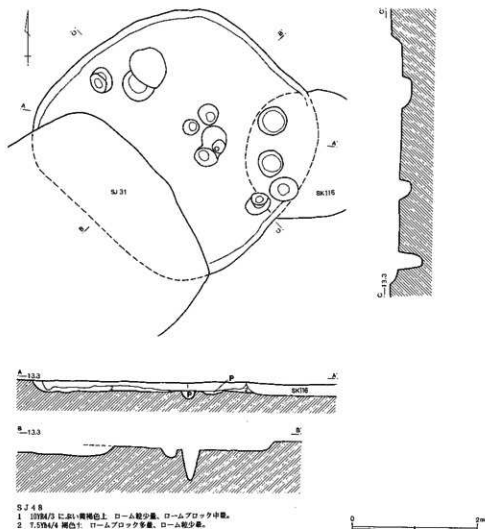
第87図 第46号住居跡



第88圖 第47号住居跡



第89図 第48号住居跡



第43号住居跡

AN-16、AO-16に位置する。平面形態は円形を呈するが、東側の壁の一部が角張っている。長径5.6m、短径5.2mを測る。壁は南壁、東壁で良く残っており、15cmほど確認されたが、北壁は8cmほど残存していたのみである。

柱穴は、壁に沿って円形に配置される。壁から約30~50cmほど離れた位置に、比較的規則的に配されている。また、住居跡中央部に近い位置で1基確認された。

炉跡は住居跡の中央部に設置されている。不整な形状の掘り方の一部に土器片が配された土器製の炉である。掘り方の中央部がピット状に掘削されているが、

炉跡との関係については不明である。土層の観察では、炉跡より古いのが、または同時に営まれたものと考えられた。

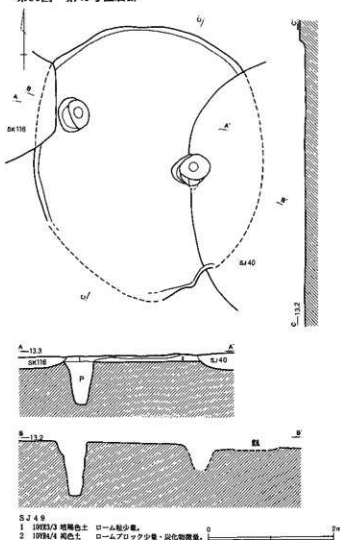
覆土の観察によれば、本住居跡は埋没完了まで極めて自然に堆積が進行したと考えられる。

本住居跡からは、土器ではやや大形の破片がまとめて検出されている(第199図)。第199図1は炉体土器である。石器では第218図2、11の磨製石斧が検出された。

第44号住居跡

AN-16、AO-16に位置する。平面形態はやや歪んだ楕円形を呈する。北壁部分がわずかに張り出し、屈曲が強くなっている。長径5.3m、短径4.9mを測る。

第90図 第49号住居跡



壁はほとんど残っておらず、南壁付近で、6cm程確認されたのみである。

南壁の一部を除いて、周溝が断続的に巡っている。周溝の規模は幅、深度とも20cm程である。周溝の内部にピットが散在する。

住居跡中央やや南側に、径約60cm程の掘り込みが存在する。深度は50cm程で、位置、規模から見て、炉跡、もしくは炉跡を掘り抜いた土壌と考えられる。壁、底面に顕著な焼土化は見られないため、明確な判断は難しいが、住居跡内に他に炉跡と考えられる施設が検出されなかったため、本土壌が炉跡に関連する施設であった可能性は高いと考えられる。

柱穴の配置に規則性を見いだすことは難しい。主柱穴の同定も困難である。上記土壌の北東側に、やや大

きめのピットが認められる。その他のピットは小規模で、配置は北側に偏っている。

床面はほぼ平坦で、水平である。柱穴、周溝の状況から見て、拡張、移築等があった可能性は低いと考えられる。

本住居跡出土の遺物は少ないが、第215図2に掲載した、小形の土偶が検出されたことが注目される。土器では第200図4、5に掲載したもの以外では小破片が少量検出されたのみである。

第45号住居跡

AN-15に位置する。住居跡の大半が第39号住居跡と重複しているため、全容は明らかではない。残存している部分から推定すると、径約5.5m程の、円形に近いプランを有する住居跡と考えられる。壁は30cm程確認されている。第39号住居跡の床面が、本住居跡の床面より低い位置にあり、調査時に、両者の関係がつかめなかったため、一括して掘り上げた。そのため、本住居跡の床面は重複していない部分のみ観察可能であった。

柱穴は8基確認された。住居跡の西側にやや集中して掘削されている。東半部には2基のみ観察された。

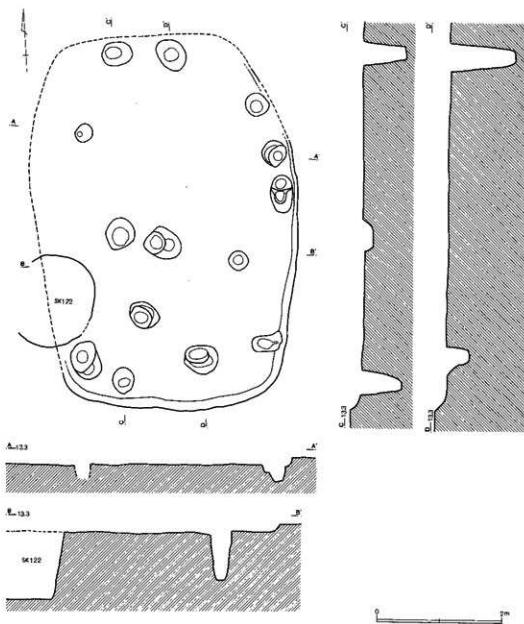
炉跡は確認できなかった。第39号住居跡によって破壊された部分に、ごく浅いものが構築されていたと考えられる。周溝は確認できなかった。

本住居跡出土の遺物は少なく、土器では第200図6-10に掲載したもの以外では、小破片がごく少量検出されたのみである。石器ではフレイク・チップ類1点、打製石斧の破片1点、スクレイパーの破損品1点が検出されている。

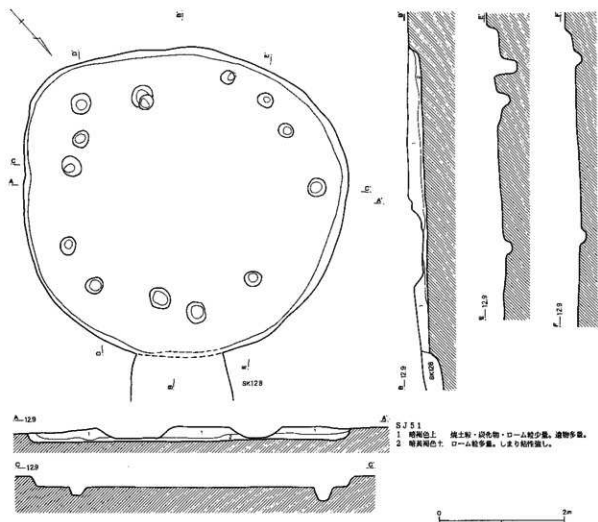
第46号住居跡

AN-15に位置する。本住居跡も第39号住居跡によって、その大半が破壊されており、全容は明らかではない。残存している部分から推測すると、おそらく径6.5m程の長楕円形を呈すると考えられる。壁は北側のみで確認されたが、12cm程が残存していた。南側の壁は柱穴の配置から推定した。主軸方向はN-25°Eである。

第91図 第50号住居跡



第92図 第51号住居跡



柱穴は住居跡の壁際と推測される位置に9基確認された。西側のP 1, 5, 6がやや小規模なもので、他は比較的深く掘削されている。おそらくこの6基が主柱を構成したものと考えられる。

炉跡は確認されなかった。第39号住居跡によって破壊されたものと考えられる。また、周溝も確認できなかった。

床面のほとんどが破壊されていたため、状況は明らかではない。

本住居跡は重複部分が多く、本来的な覆土がほとんど残っていなかったため、本住居跡に帰属すると判断された遺物は極めて少ない。柱穴から阿玉台式に属すると考えられる破片がごく少量認められたのみである。住居跡の時期の判定の根拠はこれらの遺物に頼ら

ざるを得ないが、本住居跡の所属時期も該期のものと考えられる。

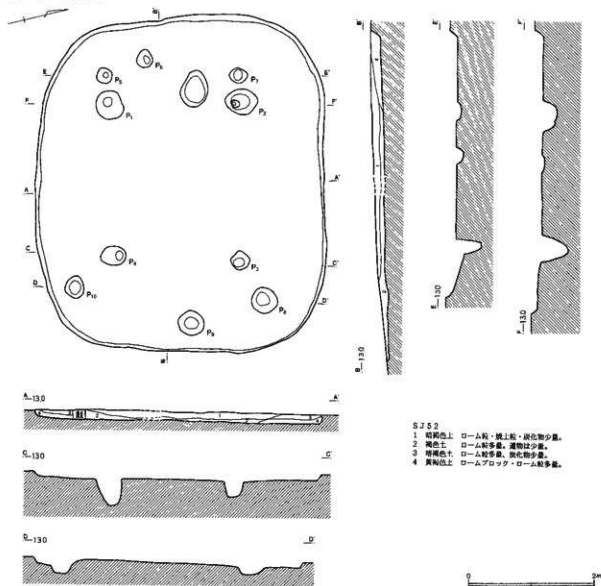
第47号住居跡

AN-15に位置する。第39号住居跡、第46号住居跡によって破壊されている。残存部分から推定すると、おそらく長径7m、短径約4.5m程の楕円形を呈すると考えられる。東側の壁のラインは直線的で、楕円の両端はやや丸みを帯びる。西側の壁は残存していないが、柱穴の配置から、やはり直線的なものであったものと推定される。

他の住居跡と重複していない部分では、壁は12cm程残存している。主軸方向はN-28°-Eである。

床面については、本来の床面が観察された部分が少ないので、詳細は不明である。柱穴は13基確認されて

第93図 第52号住居跡



いるが、他の住居跡との重複が激しく、帰属についてはやや不明点がある。調査時の所見によれば、第88図に示したものが本住居跡に帰属するものと考えられた。壁に沿って比較的等間隔に掘削されているが、東壁にはやや密に、小規模なものか検出された。

炉跡は確認できなかった。第39号住居跡によって破壊されたものと考えられる。周溝も確認されなかった。

本住居跡出土の遺物は少量で、第200図11～15に掲載した土器以外は、小破片がわずかに検出されたのみである。

第48号住居跡

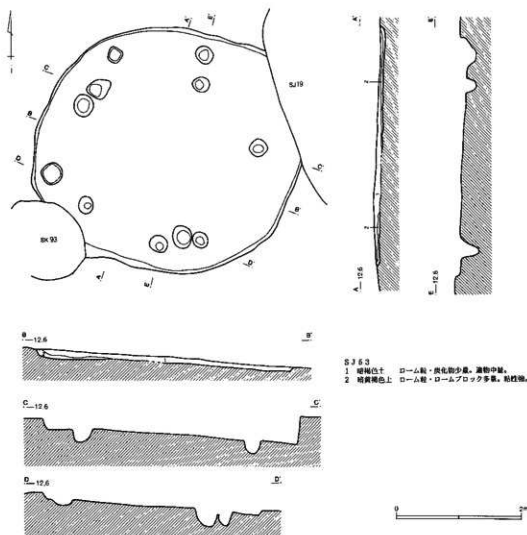
AO-15に位置する。第31号住居跡、第116号土壌と

重複しており、一部形状等については不明点がある。特に南西側の壁は破壊されており、また、柱穴が確認できなかったことから、壁の形状は不明である。しかし、他の壁の形状が比較的直線的であることから判断して、径3.9m程の隅丸方形を呈すると考えられる。壁は重複のないところで、18cmが確認されている。

柱穴は住居跡の北西-南東を結ぶ中央軸上に散在する。他に住居跡北東隅に3基のピットが散在する。主柱穴の構成は明らかではない。炉跡、周溝は確認できなかった。

本住居跡からは、第214図21, 22の耳栓が出土している。法量・胎土・型式学的特徴は類似しており、この

第94図 第53号住居跡



2点是对をなすものと考えられる。土器では第200図16～19の破片が出土している。

第49号住居跡

AO-15に位置する。第40号住居跡、第116号土壌によって破壊されている。壁は北半部分で確認できたのみである。壁の深度は約10cmを測る。東半部、南半部分では壁は確認できなかったが、北半部の壁が比較的整った円形を示すため、全形は隅丸の円形を呈していたものと推測される。ただし、南側でごく一部確認された部分から、やや南側が張り出すものと思われる。長径は約4.3m、短径は3.7m前後であろう。

柱穴は2基確認された。未確認のピットが所在した可能性もあるが、この2基が主柱穴を構成した可能性

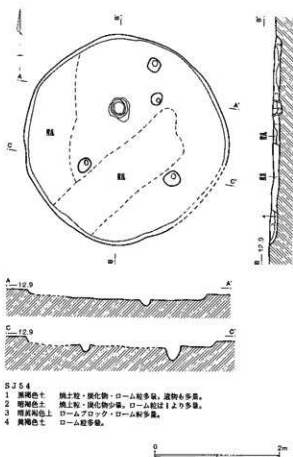
が高い。炉跡、周溝は確認できなかった。

床面はほぼ平坦で、水平である。覆土も比較的レベルに近い堆積を呈しており、本住居跡が廃絶後、埋没完了まで堆積が自然に進行したことを示している。

本住居跡出土の遺物はほとんどなく、阿玉台式に属する土器の小破片がごく少量検出されたのみである。

第50号住居跡

AO-16に位置する。本住居跡は南～東半部分で壁が確認されたが、他の部分では掘り込みは確認できなかった。それ故、柱穴の配置から住居跡の全形を推定している。推測される平面形態は長方形で、長径5.9m前後、短径4.3m前後と推測される。東側の壁は中央やや北よりの部分がわずかに膨湾する。主軸方向はほぼ



北を向き、N-5°-Eである。

柱穴は北壁、南壁に近い部分に6基、東壁に沿って4基確認された。その他、住居跡中央部付近に5基確認されている。北壁際には2基並存し、南壁際には4基が直線的に配置される。これら南北壁際のものはいずれもかなりの深度を有し、支柱穴を構成していたものと推測される。西側の壁付近には柱穴は確認できなかった。中央部付近のものはいずれも深度は浅い。

周溝は確認されなかった。また炉跡も確認されなかった。床面はほぼ平坦で水平である。

本住居跡出土の遺物は第200図20-28に掲載した土器が検出されている。他には小破片がごく少量検出されたのみである。

第51号住居跡

AL-17、AL-18に位置する。住居跡集中域から北東にわずかに離れた位置にある。平面形態は隅丸の

台形を呈する。南西側、南東側の壁が特に直線的で、北側の壁がわずかに丸みを帯びている。長径4.9m、短径4.8mを測る。壁は25cm残存している。

北東部でごく浅い土壌と切り合っている。このため、柄鏡状を呈するが、調査時の所見、遺物の時期から、柄鏡形住居跡ではなく、重複と判断した。

ほぼ全形が確認できたが、炉跡は検出できなかった。床面は平坦で、焼土化している部分も特に認められなかった。周溝も確認されなかった。

柱穴は住居跡の壁から約50cm前後の所に比較的等間隔に掘削されている。規模は小さく、深度はいずれも20cm前後と浅いが、これらが支柱穴的な機能を有していたと推測される。

覆土はほぼ平坦に堆積しており、本住居跡が自然堆積によって埋没が完了したことを示している。

本住居跡出土の土器は第201図1-9に掲載したものの以外では、小破片がごく少量検出されたにすぎない。石器では打斧の破片が1点検出されている。

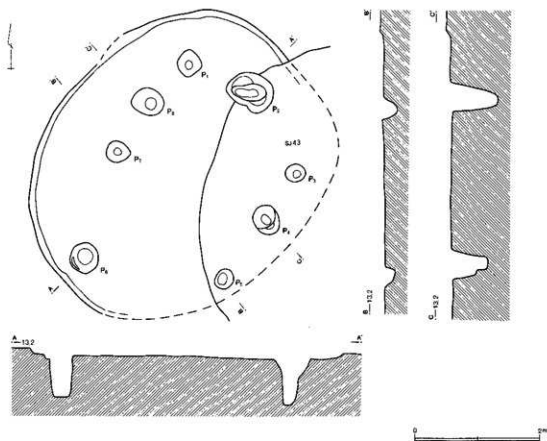
第52号住居跡

AL-17、AL-18、AM-17、AM-18に位置する。住居跡集中域から北東にわずかに離れた位置にある。隅丸長方形の整った平面形態を有する。東側の壁がわずかに広がっている。長径5.3m、短径4.6mを測る。壁は東側のみ、やや残りが悪く、5cm程であるが、他の壁では15cm前後が残存している。主軸方向はN-77°-Wである。

柱穴は11基確認された。住居跡中央に4基、これら4基のやや外側に各1基ずつ、主軸上に2基という配置である。深度は、南壁に沿ったものか約50cm程あるが、他は10-30cmと浅いものが多い。支柱穴はP1、2、3、4が該当すると考えられるが、深度が浅いので、支柱穴との同定にはやや疑問が残る。いずれにしても矩形の配置によって上屋の支持が行われるという構成であったであろう。P5、6、7、8、10は移築、拡張に伴う柱穴の痕跡の可能性がある。

炉跡、周溝は確認できなかった。床面はほぼ平坦で、水平である。

第96図 第55号住居跡



覆土は全体に水平に堆積しており、住居跡廃絶後、埋没完了まで、新たな掘削等が行われた痕跡はない。

本住居跡出土の遺物は少なく、土器では第201図5～10に掲載したもの以外では、小破片がごく少量検出されたのみである。石器は検出されなかった。

第53号住居跡

AM-18、AN-18に位置する。住居跡集中域から東側に離れた位置にある。第19号住居跡、第93号土塼と重複する。おそらく本住居跡が壊されている。

隅丸長方形の平面形態を有し、長径は4.1m、短径は3.8mを測る。壁は8cm程残存している。

柱穴は11基確認されたが、いずれも深度は浅く、20～30cm前後のものが多い。配置はやや不規則で、南、西側に密に分布する。主柱の配置ははっきりしないが、矩形の構成を持つと考えられる。

炉跡、周溝は検出されず、柱穴の配置も不揃いな

め、調査時に、住居跡としての認定にやや問題が残るものとされた遺構である。

床面は平坦であるが、東側が低くなっている。

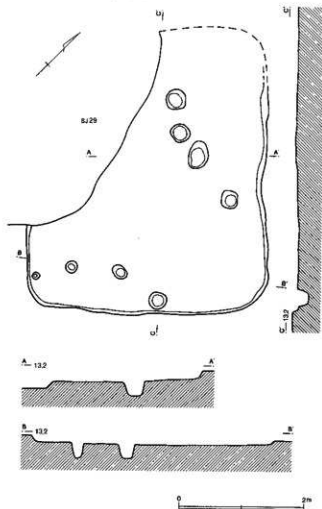
本住居跡からは、縄文土器の小破片がごく少量検出されたのみで、図示可能なものは出土しなかった。所属時期については不明とせざるを得ない。

第54号住居跡

AL-17に位置する。住居跡集中域から北東にわずかに離れた位置にある。平面形態はわずかに屈曲を持つ円形を呈する。形態は比較的整っている。径は約3.3mと、本遺跡の中では小規模な住居跡である。壁は10cm程残存している。床面下まで、一部攪乱が及んでいる。

柱穴は4基確認されている。深度は浅い。炉跡が住居跡中央やや北寄りの位置に設置されている。深鉢形土器の上半部が炉体土器として利用されている（第

第97図 第56号住居跡



201図14)。周溝は確認されなかった。柱穴の配置等から、拡張、移築があった可能性は低い。

本住居跡の出土遺物は、炉体土器以外は土器の小破片が検出されたのみである（第201図14～20）。

第55号住居跡

AN-16に位置する。第43号住居跡と重複し、約1/3程、平面形態が不明である。北西壁はやや丸みを帯びている。南東壁は残存していないが、柱穴の配置から同様の形状を取るものと推定される。南西壁は幅が2.5m前後と推測され、北東壁に比べ丸みが強い。残存部分から、隅丸の長方形のプランを有すると推測される。長径は5mを測る。壁は6cm程残存している。主軸方向はN-44°-Eである。

柱穴は8基確認された。配置はやや不安定であるが、住居跡の長軸上の壁際にやや規模の大きい、深度のあ

るものが1基ずつ掘削されており、これが主柱穴を構成すると考えられる。P4、8もそれぞれ60、80cm程の深度を持っており、主柱穴を構成する可能性が高い。

炉跡は検出されなかった。周溝も確認されなかった。床面は、残存部分の観察によれば、平坦ではほぼ水平である。

本住居跡からは、ごく少量の勝坂式に属する破片が出土したのみであった。

第56号住居跡

AP-16に位置する。第29号住居跡に破壊され、壁も一部残存していないため、平面形態等の一部が不明である。残存部分から、隅丸の長方形を呈すると推測される。確認できた壁の形状は整っており、いずれも直線的である。長径は4.5m前後、短径は3.8m前後であろうと推測される。壁は残存部分で15cmを測る。主軸方向はN-45°-Wである。

柱穴は8基確認された。南東壁の中央に1基、南側の隅に3基集中する。北側の隅には柱穴は確認できなかった。その結果、長軸上に集中するような配置となる。主柱穴の配置の構成は不明である。深度はいずれも浅く、20～30cm前後である。

炉跡、周溝は検出されなかった。床面はほぼ水平で、平坦である。

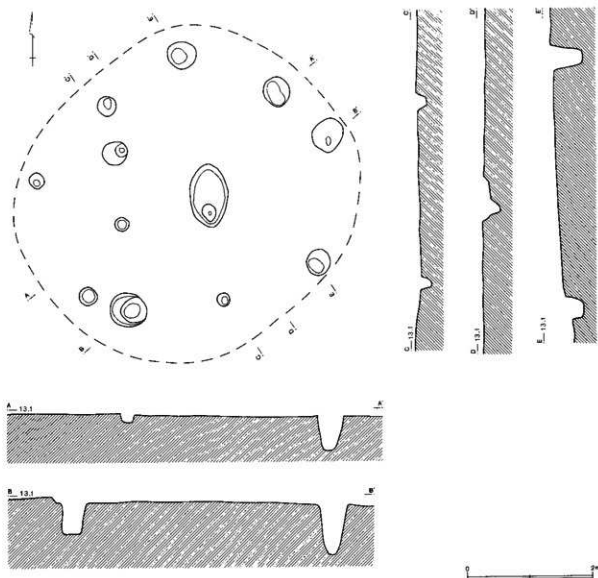
本住居跡出土の遺物はほとんどなく、土器では小破片がごく少量検出されたのみで、石器では磨石の破片が1点検出されている。住居跡の所属時期については不明とせざるを得ない。

第57号住居跡

AO-16に位置する。本住居跡は掘り込みが全く検出されず、柱穴の配置から規模と範囲を推定した。平面形態はおよそ隅丸の方形を呈する。長径は5.5m前後、短径は4.8m前後と推測される。

柱穴は11基確認された。外側に深度、規模の比較的大きいものが配置される。北西壁際に3基並列し、北東壁、南西壁際には2基ずつ配置される。南東壁際には小規模なものが2基認められた。全体の配置はやや不規則である。

第98図 第57号住居跡



住居跡中央部で土塊状の掘り込みが検出された。プランは長径100cm、短径60cm程の楕円形で、南側の立ち上がりに近い部分に小ピットがある。焼土等は特に検出されなかったが、位置、形状から、炉跡、もしくは炉跡が破壊された土壌の可能性がある。

周溝は確認できなかった。床面はほぼ平坦で、水平である。

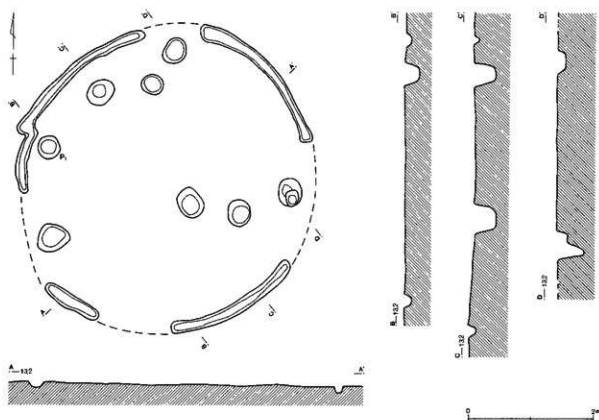
本住居跡出土の遺物は少量で、土器では第201図21、22に掲載したものを以外は、小破片がごく少量検出されているのみである。石器ではフレイク・チップ類2点、打製石斧の破片が1点検出されている。

第58号住居跡

AN-15、AN-16、AO-15、AO-16に位置する。本住居跡は周溝と柱穴のみが検出されたもので、壁の立ち上がりは検出されなかった。そのため、周溝の配置から、全形を推測している。推測される平面形態は南西壁側がわずかに膨湾する楕円形で、長径5.1m、短径4.8mと推測される。膨湾する南西壁際に周溝が巡らないことから、南西壁に入り口が設定されていた可能性がある。

柱穴は8基検出された。北西壁際に4基並存する。膨湾部に1基あり、他に東側の隅に3基散在する。南側には柱穴は確認できなかった。配置はやや不規則で、深度はいずれも浅く30-45cm程である。支柱の配置の

第99図 第58号住居跡



構成は不明である。

周溝は不連続で、特に南西壁で途切れている。規模は小さく、幅20cm、深度10cm程である。炉跡は確認されなかった。床面はほぼ平坦で、水平である。

本住居跡出土の遺物はほとんどなく、土器の小破片がごく少量検出されたのみである。

第59号住居跡

AM-15、AN-15に位置する。本住居跡は掘り込みは確認できず、柱穴の配置から平面形態を推定した。推測される平面形態は、長軸6.7m、短軸4.7m前後の長楕円形である。

柱穴は6基確認された。そのうちP1、2、3、4、5が主柱を構成したものと考えられる。P3に対向する位置で柱穴は確認できなかったが、本来掘削されていた可能性が高いため、推定される位置に破線で記入した。深度はいずれも深く、70~100cmを測る。

炉跡、周溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦で、

水平である。

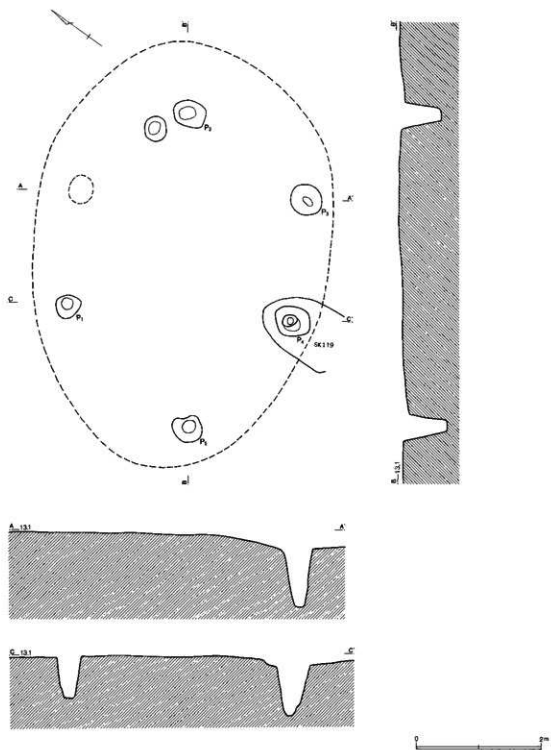
本住居跡出土の遺物はほとんどなく、阿玉台式に属する土器の小破片がごく少量検出されたのみである。本住居跡の所属時期は阿玉台式期と考えられる。

第60号住居跡

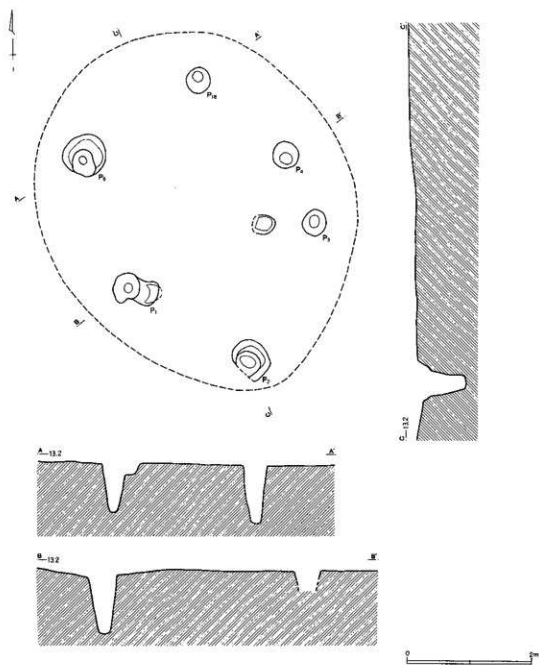
AN-15、AO-15に位置する。本住居跡は掘り込みが確認されず、柱穴の配置、組み合わせから、平面形態を推定した。推測される平面形態は楕円形で、長径は5.9m、短径は4.9m前後と考えられる。

柱穴は7基確認された。P1、2、3、4、6、18の6基が主柱を構成するものと考えられる。P2がやや離れた位置にあり、このピットが長軸上に位置するのか、また長軸と平行する位置でP3と対向するのか、現状では明らかにできない。その他配置は比較的規則的であるが、P3、4の間隔がやや詰まっている。これら6基のピットはいずれも70~100cm程の深度を有する。

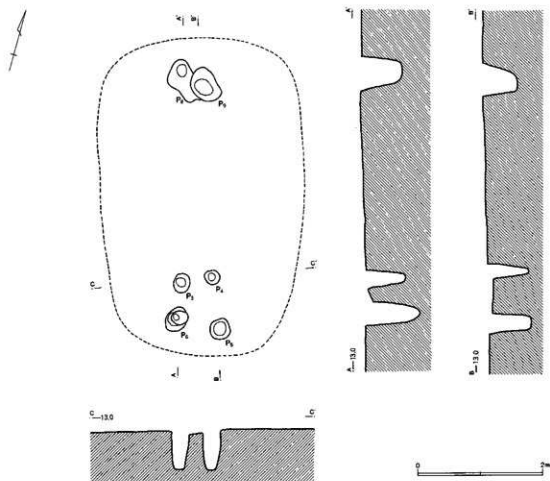
第100図 第59号住居跡



第101図 第60号住居跡



第102図 第61号住居跡



が跡、周溝は確認できなかった。床面はほぼ平坦で、水平である。

残存状況が良好ではないため、詳細は不明であるが、拡張、移築等が行われた可能性は低い。

本住居跡出土の遺物はほとんどなく、阿玉台式の土器の小破片がごく少量検出されたのみである。石器では打製石斧の破片が2点検出されている。

第61号住居跡

AP-17に位置する。本住居跡は掘り込みが確認できず、柱穴のみが検出されたものである。主軸方向はN-17°-Wである。

柱穴の配置は、2基1対のものが3組で構成されている。P3, 4とP8, 9で当初構成され、拡張によって、P5, 6が掘削されたと考えられる。各対の中心が主軸となるような柱穴配置であろう。P3, 4の間

隔は極めて狭く、掘り込みの上端は重複している。他の対になる柱穴の間隔はやや広めである。推定される長径は約5m、短径については不明とせざるを得ない。

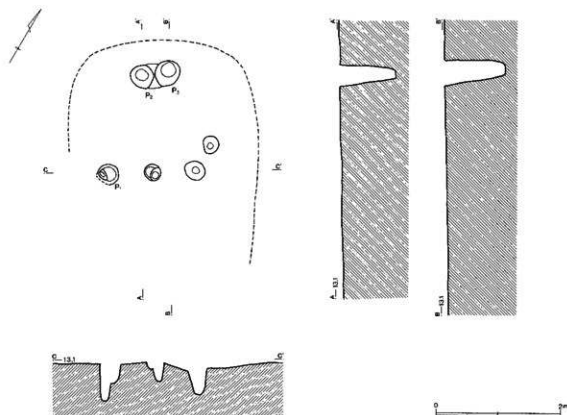
各柱穴とも50~70cm程の深度を有しており、覆土は黒味の強い黒褐色土であった。

床面はほぼ平坦で水平である。炉跡、周溝は確認されなかった。

本住居跡は柱穴のみ確認され、柱穴から遺物が出土しなかったため、本住居跡に明確に帰属すると判断される遺物はない。

第62号住居跡

AP-16、AP-17に位置する。本住居跡は掘り込みが確認されず、柱穴の配置のみによって、その存在が推定されたものである。住居跡存在の根拠となったものは、前述の第61号住居跡、後述する第64号住居跡、



第66号住居跡に見られた、2基1対の柱穴が2または3組配置されるという構成と同様の柱穴配置（P2, 3）が観察されたことである。P2, 3の覆土はともに黒味の強い黒褐色土で、本住居跡同様の配置を持つ他の住居跡の柱穴の覆土と共通している。このことも本遺構が住居跡であることの根拠となっている。

本住居跡では、これと対になる柱穴群が検出されなかったため、住居跡の規模については不明である。

本住居跡では上記の柱穴の他に4基の柱穴が検出されている。2個1対の柱穴を持つ他の住居跡では、このように住居跡の中央にピットが散在する例は認められなかったため、本住居跡に帰属するか否かの判断は難しいが、現段階では本住居跡に帰属すると判断した。

床面はほぼ平坦であるが、東側がやや低くなっている。硬化は特に認められなかった。

本住居跡は柱穴のみで確認されたため、本住居跡に帰属すると判断された遺物はきわめて少なく、土器の

小破片がごく少量認められたにすぎない。

第63号住居跡

AO-15に位置する。本住居跡は掘り込みが検出されず、柱穴の配置から住居跡の存在と、その平面形態を推定した。平面形態は円形に近いものと考えられる。規模は5.5m前後であろう。

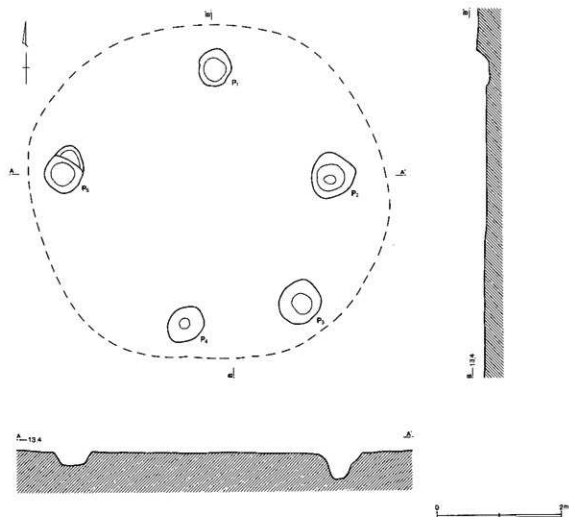
柱穴は5基検出された。西側のピットがわずかに離れた位置にあるが、配置は全体に規則的で、ほぼ均等に配置されている。深度はいずれも浅く、20～35cm程である。柱穴の径はいずれも50cm前後と大きく、断面形は掘り鉢状を呈するものが多いことが特徴的である。周溝、炉跡は確認されなかった。床面はほぼ平坦で、水平である。

本住居跡に帰属すると判断された遺物はなかった。

第64号住居跡

AO-15に位置する。本住居跡は掘り込みが確認されず、柱穴の配置のみによってその存在と平面形態が

第104図 第63号住居跡



推定された。平面形態は長楕円形、または長方形を呈すると考えられる。長径は6.5m前後であろう。主軸方向はN-47°-Eである。

柱穴は2基1対のものが2組で、これらが支柱穴を構成するものと考えられる。多数の住居跡と重複するため、柱穴の組み合わせにやや問題を残す。黒味の強い黒褐色土という覆土の特徴、他の住居跡の柱穴配置から、配置の構成を判断した。第61号住居跡、第66号住居跡と同様の柱穴配置をとる。柱穴の深度は南西側列のものが深く、北東側列のものが浅い。北東側の1対の間隔がわずかに広い。

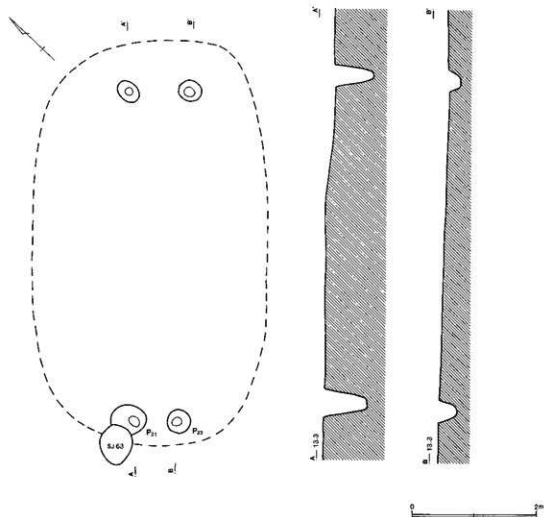
床面は北東端に向かってやや下がっている。炉跡、周溝は確認されなかった。

本住居跡出土の遺物はごく少量で、土器の小破片が検出されたにすぎない。

第65号住居跡

AN-15に位置する。本住居跡は掘り込みが確認されず、柱穴の配置のみによってその存在が推定された。柱穴の配置は不安定で、他にも本柱穴群と組み合うものが存在した可能性がある。そのため、平面形態についての明確な推測を行い難く、平面形態の推定線を記入していない。

本住居跡に伴うと判断された柱穴は5基である。配置、構成については不明な点が残るが、矩形に近い構成を持っていたと考えられる。深度は深く、いずれも70～80cm前後である。



炉跡、周溝は確認されなかった。床面は、平坦では
ば水平である。

本住居跡出土の遺物はほとんどなく、土器の小破片
がごく少量検出されたにすぎない。

第66号住居跡

AO-15に位置する。本住居跡は掘り込みが確認さ
れず、柱穴の配置からその存在と平面形態が推定され
た。柱穴は2基1対のものが2組掘削される形態のも
のである。柱穴の位置から、長楕円形、または隅丸長
方形の平面形態が考えられる。長径は6m前後であろ
う。

柱穴は前述のとおり4基確認された。深度は80~90
cmで、整った形態である。覆土は黒味の強い黒褐色土
である。柱穴配置の構成や覆土の特徴は、第61号住居

跡、第64号住居跡と同じであるが、対をなす2基のピッ
トが、2組とも非常に近接していることが本住居跡の
特徴である。掘り込みの上端はいずれも重複している。

炉跡、周溝等は検出されなかった。床面はほぼ平坦
で、水平である。

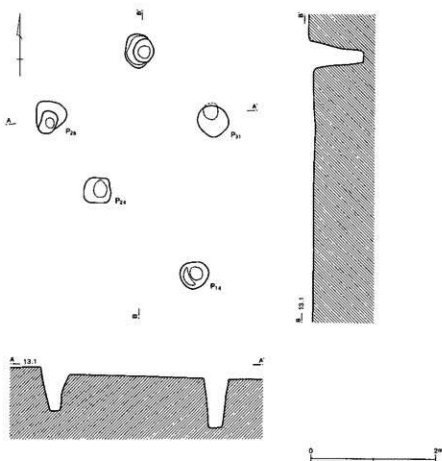
本住居跡出土の遺物はほとんどなく、阿玉台式土器
の小破片がごく少量検出されたのみである。

第67号住居跡

AN-15、16、AO-15、16に位置する。本住居跡
は掘り込みが確認されず、柱穴の配置によってその存
在と平面形態が推定された。隅丸長方形に近い平面形
態を有していたと考えられるが、詳細は不明である。
長径は6m、短径は4.6m前後であろう。

柱穴は10基確認された。北東壁際に3基並列する。

第106図 第65号住居跡



長軸上の東半部に2基並んでいる。西側のコーナーには柱穴が認められなかった。P1-7はいずれも80-110cm程の深度を有しており、主柱穴になる可能性が高い。ただし、上記のように柱穴の配置はやや不規則で、どのように組み合って構成されていたかは不明である。

炉跡、周溝等は不明である。床面は平坦で、ほぼ水平である。

本住居跡出土の遺物は柱穴から検出された土器の破片が中心となる(第202図)。P1, 3, 5の各柱穴からそれぞれ比較的多量の土器が検出されている。

第68号住居跡

AN-16に位置する。本住居跡は掘り込みが確認されず、柱穴の配置によってその存在が推定された。柱

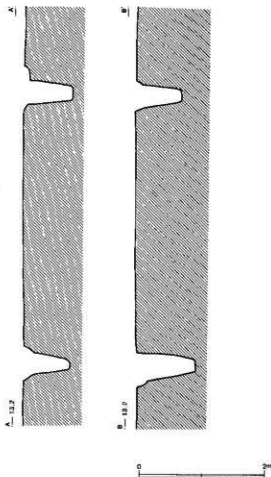
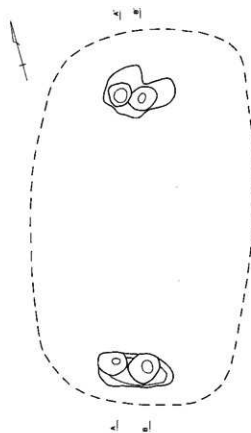
穴は2基1対のものが1組で、都合2基が確認されたにすぎないが、その配置と覆土の状況から、第61号住居跡、第64号住居跡、第66号住居跡と同様の構成を持つものと考えられた。2基1対の1組しか確認できなかったため、本住居跡の規模等については不明とせざるを得ない。

対をなす柱穴どうしは、非常に近接している。深度はいずれも70cm程で、掘り込みの上位に段差が見られる。掘り込み面では2つの柱穴が重複し、プランを共有している。覆土は黒味が強く、この点でも、他の類似した構成を持つ住居跡と共通している。

炉跡、周溝は確認できなかった。床面は平坦で、ほぼ水平である。

本住居跡出土の遺物はなかった。住居跡形態から本住居跡の所属時期は阿玉台式期と考えられる。

第107図 第66号住居跡



第69号住居跡

A1-17に位置する。本住居跡は掘り込みが確認されず、炉跡と、その周囲の状況から、住居跡の存在が推定された。柱穴が確認できなかつたため、その形状、規模については不明とせざるを得ない。炉跡を中心に、確認面上面がやや硬化しており、床面を構成していたと考えられる。硬化範囲の外周は明確なものではなかつた。

炉跡は、土器片を利用した土器囲い炉である。掘り方はほぼ円形で、そのやや内側に土器片を並べている。内傾するように配置されている破片が多かつた。掘り方の壁は焼土化しており、覆土には焼土粒が含まれていた。

本住居跡出土の遺物は炉跡出土のものに限られる。炉体土器は第203図1、2で、大形のやや特異な形態を

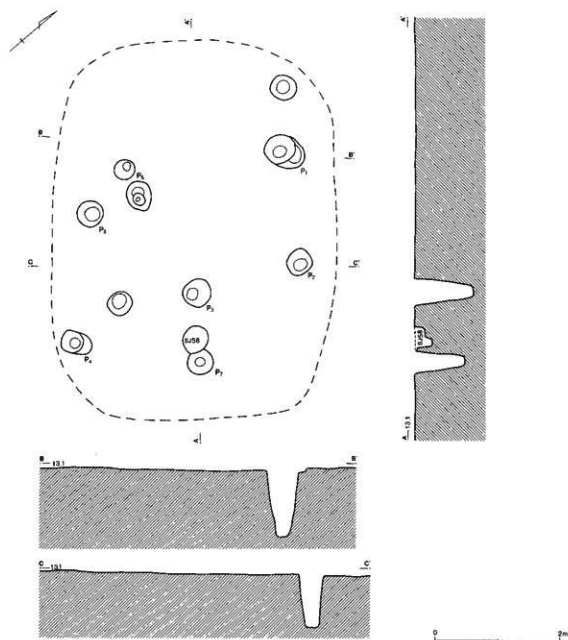
持った土器である。口縁部と底部の破片から成っており、胴部の破片は検出されなかつた。これら2点の土器は、胎土、整形、型式学的特徴が極めて類似している。口縁部の傾きと、底部破片の開き具合からは、これらを同一個体として器形を推定することは困難であるが、別個体とする根拠は全くない。ここでは、同一個体と判断した。

第70号住居跡

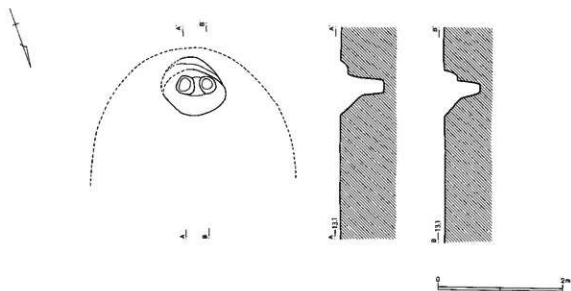
AV-24に位置する。本住居跡は炉跡とその周囲の状況、ピットからその存在と規模が推定された。規模については、柱穴が1基のみであること、床面の硬化範囲が明確ではないことから、不明とせざるを得ない。

炉跡は中央部に位置する。径80cm程の円形の掘り方を有する。炉体は土器片によって構成されるが、土器片の配置は不規則で、整ったものではない。しかし、

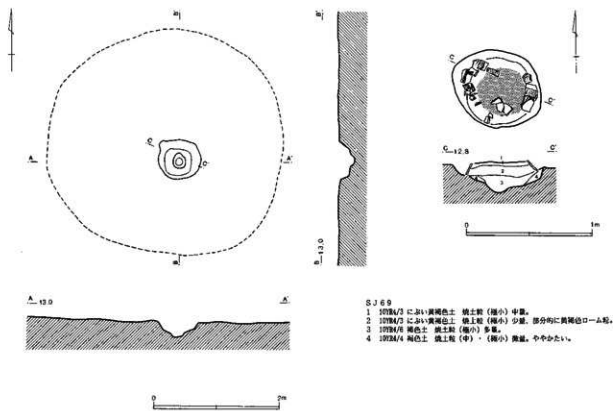
第108図 第67号住居跡



第109図 第68号住居跡



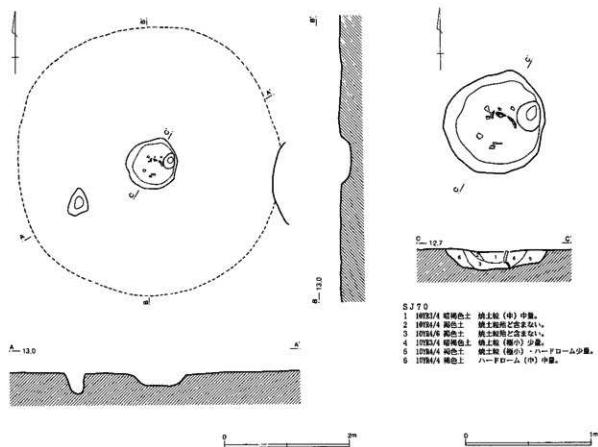
第110図 第69号住居跡



S J 69

- 1 1978a/2 に近い黄褐色土 焼土層 (層小) 中量。
- 2 1978a/2 に近い黄褐色土 焼土層 (層小) 少量。部分均に黄褐色ローム層。
- 3 1978a/4 黄褐色土 焼土層 (層小) 多量。
- 4 1978a/4 黄褐色土 焼土層 (中)・(層小) 微量。やや少ない。

第111図 第70号住居跡



北側の破片は正立して並んでおり、これらが炉体を構成したと判断される。掘り方は炉体の規模に比べてかなり大きい。掘り方が掘削された後、比較的多量の土によって埋められ、その後炉体が置かれて炉が構築されている。

柱穴は1基のみ確認された。深度は35cmと浅いものである。

本住居跡出土の遺物は炉跡出土のものに限られる。第204図1に示したように、キャリパー形深鉢の胴部破片である。

第71号住居跡

AK-12、AK-13に位置する。第15号住居跡によってそのほとんどが壊され、また約1/2以上が調査区外にかかるため、詳細は不明である。平面形態は矩形に近いものと推定される。壁は17cm程残存している。規模等は不明である。

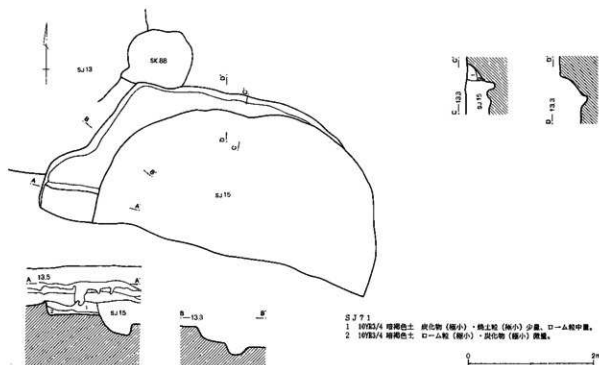
第15号住居跡との重複部分が多いため、第15号住居跡の柱穴のうちいくつかは本住居跡に帰属する可能性が極めて高いが、その分離は調査時にできなかったため、不明とせざるを得ない。ここでは、便宜的にそのすべてを第15号住居跡に帰属させておく。重複部分以外においては、柱穴は確認できなかった。

炉跡、周溝等は確認できなかった。床面の状況についての詳細は不明である。調査区壁にかかる部分に段差があり、北側が約10cm低くなっている。

本住居跡は、その大半が第15号住居跡によって破壊されているため、本住居跡に帰属すると判断される遺物はなかった。

b. 土壌

本遺跡平成5、6年度の調査では、縄文時代の土壌が130基検出されている。土壌が分布する範囲は、住居



跡が主に分布する部分の他に、住居跡の分布が比較的薄い部分(A、G、H-20-22)にも多く認められ、住居跡とは異なる分布傾向を示している。

各土壌の所在するグリッド、規模等については第2-4表を参照していただきたい。ここでは、特徴的なもののみ記述を行う。

第1号土壌

径120cm程の小形の土壌である。平面形態は整った円形で、壁の立ち上がりは垂直に近い。遺物は検出されなかった。

第5号土壌

平面形態、断面形態とも不整形な土壌である。底面にも小ピット状の窪みが散在している。本土壌からは第207図1-3の土器が出土している。

第6号土壌

第5号土壌同様、平面形態、断面形態があまり整っていない。底面に小ピットが散在する。覆土から第207図4-11の土器が検出された。本遺跡において後期初頭の遺物を含む数少ない遺構である。

第7号土壌

第1号住居跡に切られている。長楕円形のプランを有し、南側の壁がやや張り出している。深度は20cm程である。覆土は、暗褐色土から黄褐色土系の明るいものである。底面には小さな凹凸がある。遺物は縄文土器の小破片がごく少量検出されたのみである。

第8号土壌

第185号土壌に切られている。平面形態は不整な楕円形で、確認面からの深度は、20cmと浅い。壁の立ち上がりは非常に緩やかで、皿状の断面形を呈する。

本住居跡からは、2個体の土器が検出された。いずれも、完形ではないが、大形の破片で、第205図1は土壌の底面に一部接する状態で出土した。同図2は土壌底面からやや浮いた状態で出土している。深度が浅いため、覆土の堆積状況から本土壌の埋没過程について言及することは困難であるが、埋没途中における再掘削の痕跡はなく、これらの個体は極めて短期間のうちに廃棄されたものと考えられる。

第9号土壌

平面形態は不整な円形で、北側がやや張り出している。深度は20～30cm前後で、底面には小規模な凹凸が多く見られる。形状から小形住居の可能性も考えられたが、底面にピット、炉跡等はなく、貼り床も存在しない。住居跡の可能性は極めて低い。

北側の壁に近い部分に第205図3の深鉢が、据えてあるような状態で検出された。上半部と底部は欠損している。また、第205図4の深鉢底部の破片も検出されている。後期初頭の所産と考えられる。

本土壌は住居跡集中域、他の土壌の分布域から離れた位置にある。中期末葉から後期にかけて、集落の占地に変化があったことを示す遺構である。

第10号土壌

円形の平面形態を有する土壌で、径は270cmと大きい。壁面はわずかにオーバーハングしており、プラスチック土壌の変種とも考えられる。壁上位には崩れによると考えられる段がわずかに見られる。底面は平坦で、硬化が見られる。底面の中央部はごくわずかに火を受けているようで、硬化が認められる。

遺物は加曾利E式の小破片がごく少量検出されたのみである。

第13号土壌

円形の平面形態を有する土壌で、径は310cmと、大きめである。断面形は円筒形を呈する。壁の上位には、崩れによると見られる段を有する。底面は平坦化されており、硬化が見られる。

覆土の堆積は、自然堆積とは考えにくい状況を示している。人為的な埋め戻しが、埋没途中に再掘削があった可能性がある。

遺物は第207図8～11の土器、第222図2の石皿が検出されている。いずれも覆土中から検出された。これ以外では小破片がごく少量検出されたのみである。

第14号土壌

やや小形の、断面円筒形の土壌である。壁の上位には、崩れによると考えられる段があり、底面は平坦化されている。

第18、19号土壌

第18号土壌は第19号土壌を壊して造られている。第19号土壌は楕円形の平面形態を有し、深度は15cmと浅いものである。

第18号土壌は平面形態が円形で、径は約3mと大形の土壌である。深度は70cm程である。断面形は板形で、壁の立ち上がりは緩やかである。底面は比較的平坦であるが、極わずかの凹凸が見られるが、全体にわたって硬化が認められる。底面の中央やや北寄りの部分が30～50cmの範囲で焼土化していた。

覆土の下位には非常にきめの細かい土層が堆積しており、これは他の土壌にはあまり見られない特徴である。

遺物は第208図に掲載した土器と、第221図4の石皿が検出された。いずれも覆土中位からまともな状態で検出されている。

第20号土壌

径が2m程の大形の土壌である。平面形態は円形で、深度は浅い。南側にわずかに張り出し部を持つ。平面、断面での土層の検討から、この張り出し部と他の部分との間に新旧関係はないと判断した。

第27号土壌

比較的小形の円筒形の土壌である。形状は良く整っている。壁の立ち上がりはしっかりしており、崩れもほとんど見られない。底面は平坦化され、硬化が認められる。

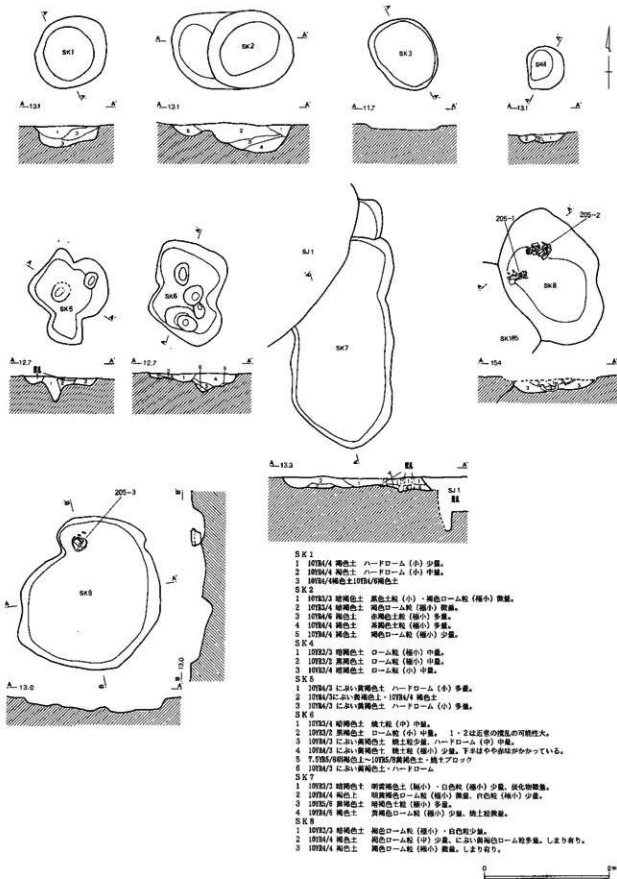
第33号土壌

フラスコ形の土壌である。確認面における径は120cmと比較的小さい。深度は150cm以上であるが、湧水のため、底面の検出は困難で、その本来的な形態は不明とならざるを得なかった。覆土の上位は自然堆積と考えられるが、下位については、崩れの他、人為的な営為が関与した可能性が高い。

第48号土壌

径180cmの比較的大形の土壌である。断面形は円筒形で、整った形状を有する。底面も平坦化されており、硬化が見られる。覆土はレンズ状の堆積をなす土層が主体を占め、全体としては自然に埋没が完了したものと

第113図 縄文時代の土壇(1)



SK 1

- 1 10784/4 褐色土 ハートローム (小) 少量。
- 2 10784/4 褐色土 ハートローム (小) 中量。
- 3 10784/4 褐色土 10784/6 褐色土

SK 2

- 1 10782/3 暗褐色土 褐色土 (小)・褐色ローム粒 (極小) 微量。
- 2 10782/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 微量。
- 3 10784/6 褐色土 赤褐色土粒 (極小) 少量。
- 4 10784/4 褐色土 赤褐色土粒 (極小) 少量。
- 5 10784/4 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。

SK 4

- 1 10782/3 暗褐色土 ローム粒 (極小) 中量。
- 2 10782/2 黒褐色土 ローム粒 (極小) 中量。
- 3 10782/4 暗褐色土 ローム粒 (小) 中量。

SK 5

- 1 10784/3 におい黄褐色土 ハートローム (小) 少量。
- 2 10784/2 におい黄褐色土・10784/4 褐色土
- 3 10784/2 におい黄褐色土 ハートローム (小) 少量。

SK 6

- 1 10782/4 暗褐色土 黄土粒 (中) 中量。
- 2 10782/2 暗褐色土 ローム粒 (小) 中量。 1・2は定常の復元の可能性大。
- 3 10782/2 におい黄褐色土 黄土粒少量、ハートローム (中) 中量。
- 4 10784/2 におい黄褐色土 黄土粒 (極小) 少量。下層はやや赤味がかった。
- 5 7, 10785/8 暗褐色土～10785/9 黄褐色土・黄土ブロック
- 6 10784/2 におい黄褐色土・ハートローム

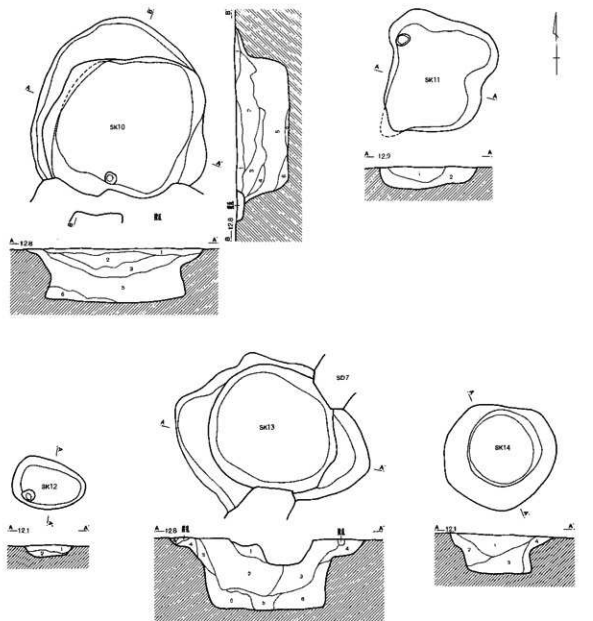
SK 7

- 1 10782/3 暗褐色土 明黄褐色土 (極小)・白色粒 (極小) 少量。炭化物微量。
- 2 10784/4 褐色土 明黄褐色ローム粒 (極小) 微量。白色粒 (極小) 少量。
- 3 10782/6 暗褐色土 明褐色土粒 (極小) 少量。
- 4 10784/6 褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 少量。黄土粒微量。

SK 8

- 1 10782/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小)・白色粒少量。
- 2 10784/4 褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。におい黄褐色ローム粒少量。しまり有り。
- 3 10784/4 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 微量。しまり有り。

第114図 縄文時代の土塚(2)



SK10

- 1 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・白色粘質土、黒褐色土粒多量。
- 2 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒・黒色粘質土。
- 3 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒多量、黒色粘質土。
- 4 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒・黒色粘質土、多量。
- 5 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(中)少量、黒色粘質土。
- 6 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(中)少量、黒色粘質土。

SK11

- 1 10YR4/4 褐色土 白色粘(極小)、酸化鉄少量、黒色土粒(極小)・ローム粒(極小)少量。
- 2 10YR4/6 褐色土 ローム粒少量、酸化鉄少量、黒色土粒(極小)・白色粘質土。

SK12

- 1 10YR4/4 褐色土 褐色ローム粒多量。
- 2 10YR4/4 褐色土 暗褐色土粒(中)少量。

SK13

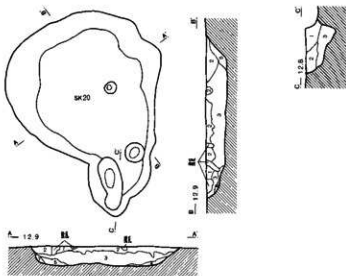
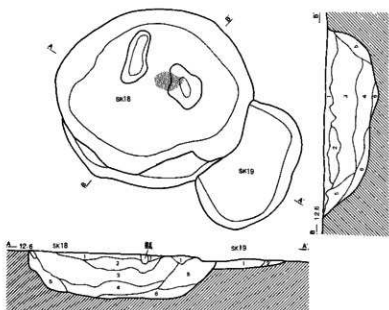
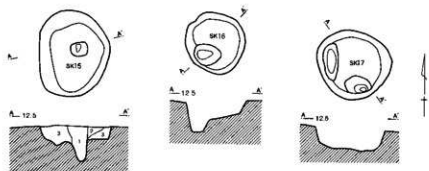
- 1 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(極小)少量、酸化鉄(中)・黒色土粒(極小)少量。
- 2 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒(極小)・(中)褐色土粒(極小)・酸化鉄(極小)少量。
- 3 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(中)・褐色土粒(極小)少量、ローム粒(極小)少量。
- 4 10YR4/4 褐色土 褐色土粒(極小)少量、ローム粒(中)少量。
- 5 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(極小)・酸化鉄少量。
- 6 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(中)少量、ローム粒(極小)少量、黒色土粒(極小)・酸化鉄(極小)少量。

SK14

- 1 10YR2/3 暗褐色土 淡黄褐色ローム粒(極小)・白色粘(極小)・酸化鉄少量。
- 2 10YR4/4 褐色土 淡黄褐色ローム粒(極小)少量、酸化鉄少量。
- 3 10YR2/6 暗褐色土 淡黄褐色ローム粒(中)少量。
- 4 10YR2/4 褐色土 暗褐色土粒(極小)少量。

0 2m

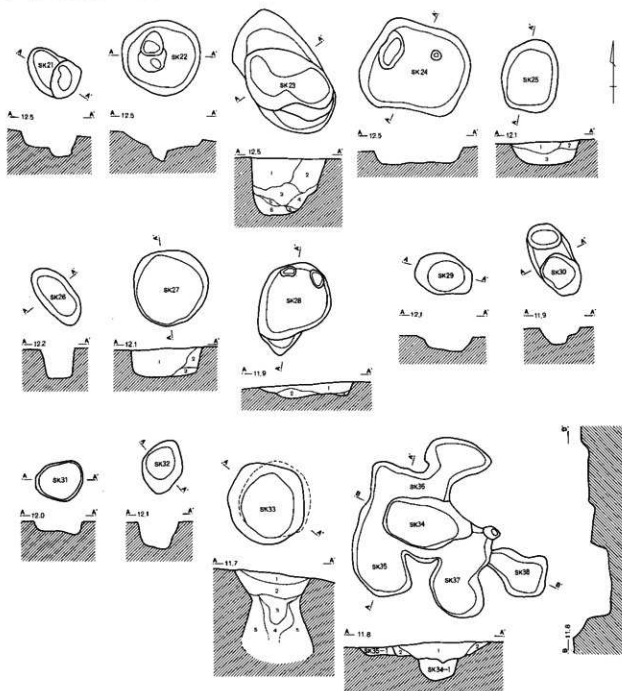
第115図 縄文時代の土坑(3)



- SK15
 1 107K/4 粘褐色土 淡黄褐色ローム粒(極小)散在、礫化痕多量。
 2 107B/4 褐色土 礫化痕多量。
 3 107B/4 褐色土 褐色ハーフローム(中)散在、礫化痕多量。
 SK16
 1 107K/4 粘褐色土 ローム粒(極小)散在。
 2 107K/3 粘褐色土 ローム粒(極小)少量。
 3 107K/3 粘褐色土 ローム粒(小)散在、ローム粒(極小)少量。
 4 107K/3 粘褐色土 ローム粒(中)少量、赤の粘り土質。
 5 107K/3 粘褐色土 ローム粒(中)散在、ローム粒(極小)少量。
 6 107K/3 粘褐色土 ローム粒(極小)散在、赤の粘り土質。
 SK17
 1 107K/3 粘褐色土 ローム粒(小)少量、ローム粒(極小)散在。
 2 107B/3 粘り粘褐色土 ローム粒(極小)少量。
 SK18
 1 7.57B/4 褐色土 礫土層(極小)中量。
 2 107K/4 粘褐色土 ローム粒(極小)少量。
 3 107K/3 粘褐色土 ローム粒(中)・粒上層(極小)散在。
 4 107K/4 粘褐色土 均質粘土。壁面厚土。
 5 107K/4 粘褐色土 ハーフローム(中)少量。
 6 107B/4 107B/4粘褐色土
 7 107K/4 粘褐色土 ローム粒(極小)中量。



第116図 縄文時代の土壇(4)



S K 23

- 1 10732/4 暗褐色土 ローム粒(中)散在、ローム粒(細小)散在。
- 2 10732/3 暗褐色土 ローム粒(中)散在。
- 3 10732/2 暗褐色土 ローム粒(細小)散在、ローム粒(中)少量。
- 4 10734/4 褐色土 ローム粒(細小)散在。
- 5 10732/3 暗褐色土 黒褐色土粒少量、ローム粒(細小)散在。
- 6 10734/3 に近い黄褐色土 ローム粒(中)多量、黒褐色土粒少量。

S K 25

- 1 10734/4 暗褐色土 ローム粒(細小)少量。
- 2 10734/4 褐色土 白色土(細小)少量。
- 3 10734/3 に近い黄褐色土 黄褐色ローム粒(細小)多量、中粒性あり。

S K 27

- 1 10732/3 暗褐色土 ローム粒(中)少量、ローム粒(小)多量。
- 2 10734/3 に近い黄褐色土 ローム粒(中)少量、黒褐色土粒散在。
- 3 10732/3 暗褐色土 ローム粒(細小)少量。

S K 28

- 1 10732/3 暗褐色土 ローム粒(細小)少量。
- 2 10732/4 暗褐色土 ローム粒(中)少量。
- 3 10734/3 に近い黄褐色土 ローム粒(中)少量。

S K 35

- 1 10732/3 黒褐色土 炭化物(細小)少量、ローム粒(中)中量。
- 2 10732/3 黒褐色土 炭化物(細小)少量、ローム粒(中)中量。
- 3 10732/2 黒褐色土 炭化物(細小)少量、ローム粒(小)中量。
- 4 10732/3 暗褐色土 ローム粒(細小)少量。
- 5 10734/3 に近い黄褐色土 ローム粒(細小)少量。

S K 34

- 1 10732/3 暗褐色土 ローム粒(中)少量。

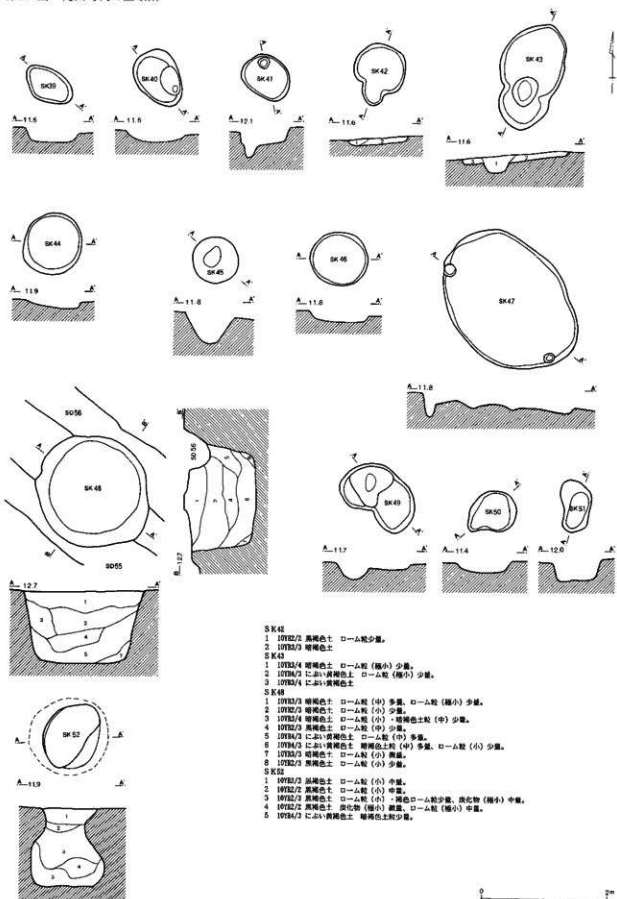
S K 36

- 1 10734/3 に近い黄褐色土 ローム粒(細小)少量。

S K 38

- 1 10732/4 暗褐色土 ローム粒(中)少量。
- 2 10734/3 に近い黄褐色土 10734/4のローム粒(中)多量。

第117図 縄文時代の土壇(5)



SK40

1 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒少量。

2 10YR3/3 暗褐色土

SK43

1 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(微小)少量。

2 10YR4/3 赤い黄褐色土 ローム粒(微小)少量。

3 10YR3/4 赤い黄褐色土

SK48

1 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(中)多量、ローム粒(微小)少量。

2 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(小)少量。

3 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(小)・暗褐色土粒(中)少量。

4 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒(中)少量。

5 10YR4/3 赤い黄褐色土 ローム粒(中)多量。

6 10YR4/3 赤い黄褐色土 暗褐色土粒(中)多量、ローム粒(小)少量。

7 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒(小)豊富。

8 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(小)少量。

SK52

1 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(小)少量。

2 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(小)少量。

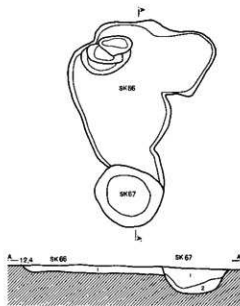
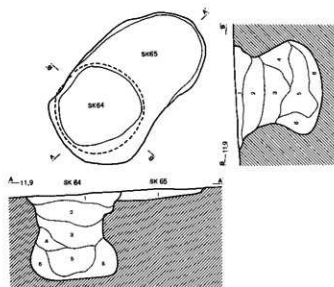
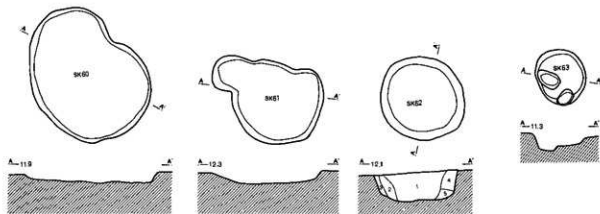
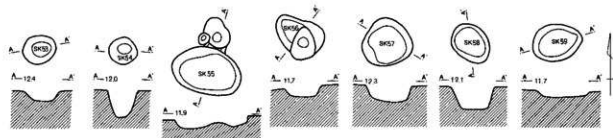
3 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(小)・褐色ローム粒少量、炭化物(微小)少量。

4 10YR2/2 黒褐色土 炭化物(微小)豊富、ローム粒(微小)少量。

5 10YR4/3 赤い黄褐色土 暗褐色土粒少量。

0 2m

第118図 縄文時代の土壇(6)



SK50

- 1 107K3/2 黒褐色土 褐色ローム粒(小)少量、白色粒(極小)多量。
- 2 107K3/2 黒褐色土 褐色ローム粒(小)少量、酸化した黒褐色ローム粒多量。
- 3 107K4/4 褐色土 107K3/2 黒褐色土と少量。
- 4 107K4/4 に近い黄褐色土 褐色ローム粒(極小)多量。
- 5 107K3/2 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。

SK54

- 1 107K3/2 黒褐色土 ローム粒(極小)中量。
- 2 107K3/3 黒褐色土 ローム粒(中)、炭化物(中)少量。
- 3 107K3/3 黒褐色土 炭化物(極小)少量、ローム粒(中)中量。
- 4 107K4/2 に近い黄褐色土 炭化物(中)、ローム粒(小)少量。
- 5 107K2/2 黒褐色土 ローム粒(極小)、炭化物(極小)少量。
- 6 107K3/3 黒褐色土 ローム粒(極小)少量。

SK55

- 1 107K4/2 に近い黄褐色土 ローム粒(極小)少量。

SK56

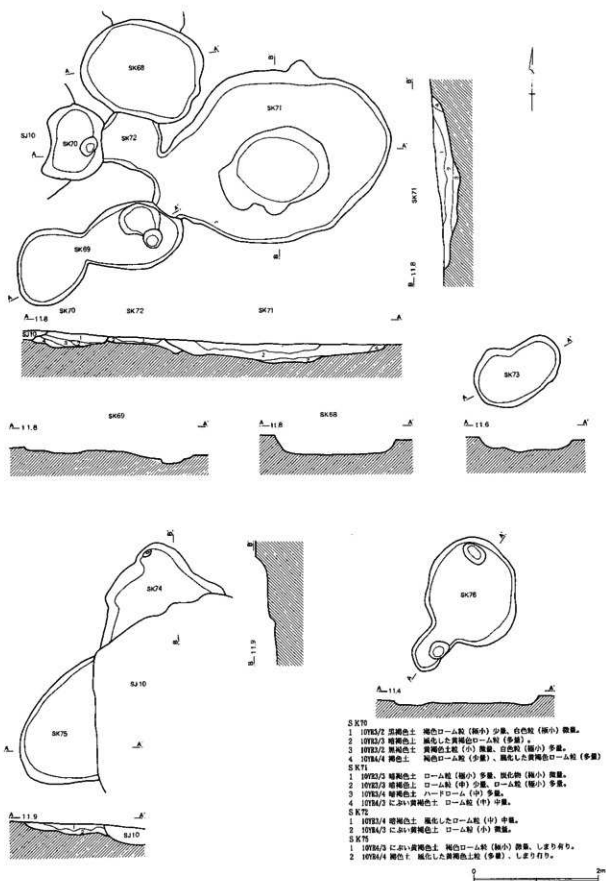
- 1 107K4/2 黒褐色土 ローム粒(中)に多い黄褐色ローム粒少量。

SK57

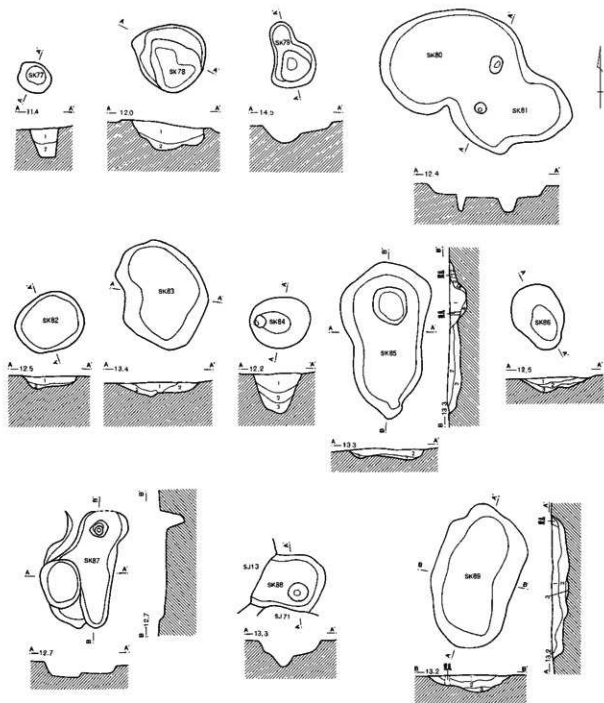
- 1 107K3/3 黒褐色土 ローム粒(中)少量、ローム粒(極小)少量。
- 2 107K4/2 に近い黄褐色土 ローム粒(中)少量。



第119図 縄文時代の土塚(7)



第120図 縄文時代の土壇(8)



S K77

- 1 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒 (極小)・酸化鉄少量。
- 2 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒 (極小)少量。

S K78

- 1 10YR2/1 黒色土 ローム粒 (小)・酸化鉄少量、炭化物 (極小) 微量。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 赤色土粒多量、ローム粒中量。

S K80

- 1 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒 (極小)・炭化物 (極小) 微量、酸化鉄多量。

S K81

- 2 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (極小)・炭化物 (極小) 微量、酸化鉄多量。

S K82

- 1 10YR4/3 赤褐色土 褐色ローム粒 (小) 微量、白色粒 (極小) 多量、酸化鉄少量。

S K83

- 2 10YR4/6 褐色土 風化した褐色ローム粒 (小) 少量、酸化鉄少量。

S K84

- 1 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (極小) 少量。

S K85

- 2 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量。

S K86

- 3 10YR2/3 暗褐色土 風化したローム粒 (中) 中量。

S K85

- 1 10YR3/3 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小) 微量、白色粒 (極小) 少量、しまり有り。

S K87

- 2 10YR3/4 暗褐色土 褐色ローム粒 (小) 微量、白色粒少量、しまり有り。
- 3 10YR4/4 褐色土 風化した褐色ローム粒 (小) 少量。
- 4 10YR4/6 褐色土 暗褐色土粒多量。

S K88

- 1 10YR2/3 暗褐色土・10YR4/2に赤い暗褐色土。

S K89

- 2 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (極小) 中量。

S K89

- 3 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒 (中) 中量。

S K89

- 1と3とも酸化鉄多量。

S K89

- 1 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒 (極小)・炭化物 (極小) 中量。

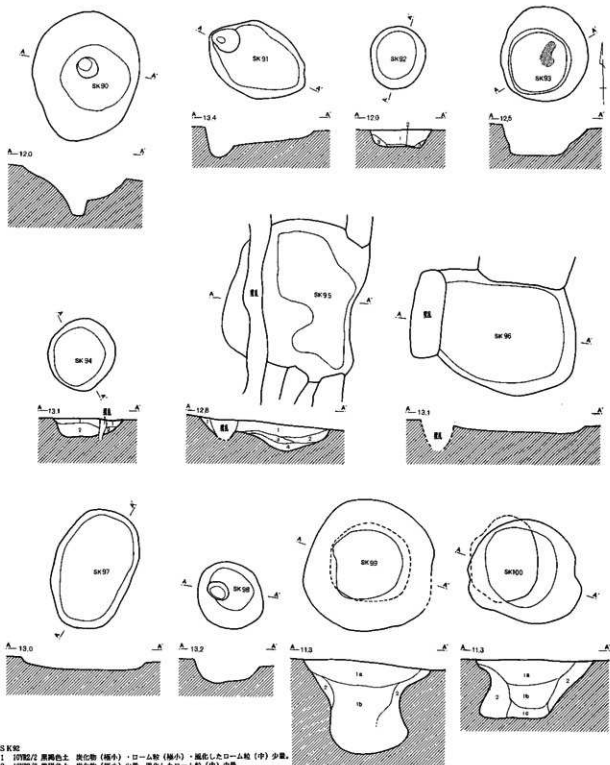
S K89

- 2 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒 (極小)・炭化物 (極小) 中量。

S K89

- 3 10YR3/4 暗褐色土・10YR4/3 赤い暗褐色土

第121図 縄文時代の土器(9)



SK90

- 1 107B2/2 黄褐色土 炭化物(極小)・ローム粒(極小)・扁平したローム粒(中)少量。
- 2 107B2/2 黄褐色土 炭化物(極小)少量、扁平したローム粒(中)少量。
- 3 107B2/2 暗褐色土 扁平したローム粒(中)少量。

SK94

- 1 107B3/4 暗褐色土 ローム粒(極小)少量。
- 2 107B3/3 暗褐色土 炭化物(極小)・ローム粒(極小)少量、炭化鉄(極小)少量。

SK95

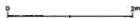
- 1 107B3/3 暗褐色土 ローム粒(極小)・炭化物(極小)少量。
- 2 107B3/4 暗褐色土 ローム粒(極小)少量、炭化物(極小)少量。
- 3 107B3/3 暗褐色土 ローム粒(極小)少量。
- 4 107B2/3 黄褐色土 ローム粒(中)少量。

SK99

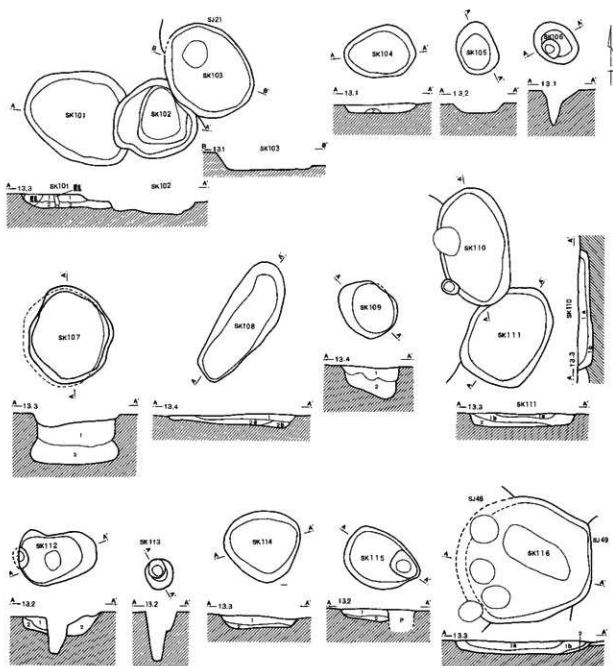
- 1 7.57B3/3 暗褐色土 a ローム粒多量、炭化物少量。
- b ローム粒中量、ロームブロック少量。

SK100

- 1 7.57B3/3 暗褐色土 a ローム粒多量、炭化物少量、遺物含有。
- b ローム粒中量、ロームブロック少量。aに比して深い。
- c ロームブロック少量。
- 2 107B2/3 暗褐色土 ロームブロック中量、ローム粒少量。



第122図 縄文時代の土坑(0)



SK101

- 1 暗褐色土 ローム粒(極小)少量、粘性あり、しまりあり。
- 2 褐色土 ローム粒(極小)多量、しまりあり。

SK104

- 1 褐色土 ローム粒(極小)少量、粘性あり。
- 2 黄褐色土 ローム粒主体。

SK107

- 1 暗褐色土 ローム粒(中)少量、しまりあり。
- 2 暗褐色土 ローム粒(極小)中量。

SK108

- 1 暗褐色土 炭化物・ローム粒(極小)少量。
- 2 暗褐色土 a 炭化物・ローム粒(極小)少量。
b 炭化物・ローム粒少量。

SK109

- 1 暗褐色土 褐色土
- 2 暗褐色土 黄褐色土

SK110

- 1 暗褐色土 a ローム粒少量、ロームブロック少量、しまり有り。
- 2 暗褐色土 b ローム粒少量、ロームブロック多量。

SK111

- 1 7.5B2/4 暗褐色土 a ローム粒・粘土粒少量。
- 2 7.5B2/4 褐色土 b ローム粒・ローム小ブロック少量、ロームブロック散在。

SK112

- 1 7.5B2/4 褐色土 ローム小ブロック少量。
- 2 7.5B2/4 褐色土 ロームブロック・ローム小ブロック少量。

SK112

- 1 暗褐色土 褐色土 ローム粒・炭化物(極小)中量、しまり有り。
- 2 暗褐色土 黄褐色土 ローム粒(極小)少量。

SK114

- 1 暗褐色土 暗褐色土 ローム粒(中)中量。
- 2 暗褐色土 におい黄褐色土 ロームブロック中量。

SK115

- 1 暗褐色土 暗褐色土 ローム粒少量。
- 2 暗褐色土 におい黄褐色土 ロームブロック。

SK116

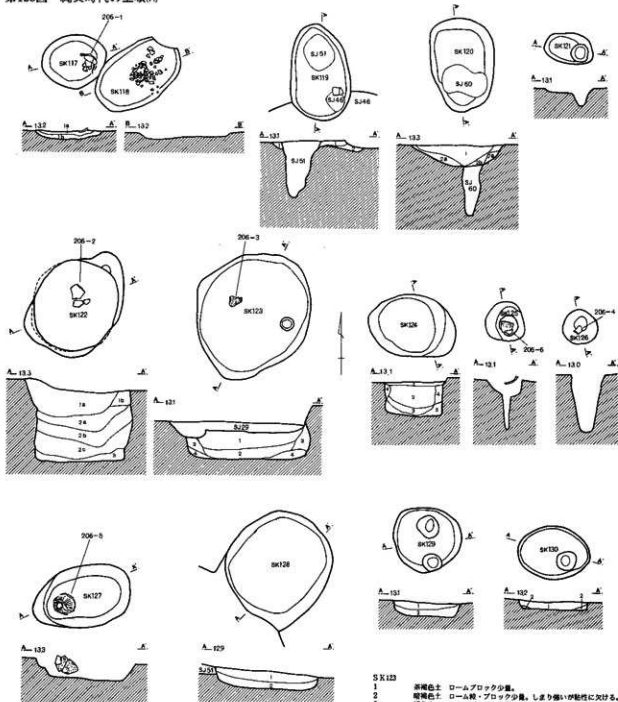
- 1 7.5B2/4 暗褐色土 a ローム粒少量、ロームブロック散在。
- 2 7.5B2/4 におい黄褐色土 b ローム粒・ローム小ブロック少量、粘土粒散在。

SK116

- 1 7.5B2/4 暗褐色土 a ローム粒少量、ロームブロック少量。
- 2 7.5B2/4 におい黄褐色土 b ローム粒多量、ロームブロック少量。



第123図 縄文時代の土坑(1)



SK117

- 1 10YR2/4 暗褐色土 a. ローム粒・炭土粒少量。
b. ローム粒・ロームブロック少量。

SK119

- 1 10YR6/3 褐色土 ローム粒(極小)多量。しまりあり。
2 10YR6/4 黄褐色土 ローム粒(小)多量。しまりあり。

SK120

- 1 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒・ローム小ブロック少量。
2 10YR4/4 褐色土 a. ロームブロック少量。ローム粒・炭化物少量。
b. ロームブロック少量。

SK122

- 1 10YR2/3 黄褐色土 a. ローム粒多量。粘土粒・炭化物少量。ローム小ブロック少量。
b. ローム粒少量。炭化物少量。

2 10YR4/3 赤い黄褐色土

- a. ローム粒・ロームブロック・黄褐色土粒少量。
b. ローム粒。ローム小ブロック・ロームブロック・粘土ブロック少量。炭化物少量。

c. ロームブロック・粘土ブロック少量。褐色ブロック・炭化物少量。ローム小ブロック少量。

3 T.5YR2/2 黒褐色土

- ロームブロック・ローム小ブロック・炭化物少量。

SK123

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量。
2 暗褐色土 ローム粒・ブロック少量。しまり強い粘性に欠ける。
3 褐色土 ロームブロック多量。粘性土に多い。
4 暗褐色土 ローム粒少量。しまり、粘性共に強い。

SK124

- 1 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒(中)多量。(S47の盛り土)しまりあり
2 10YR4/4 褐色土 ローム粒(小)少量。
3 10YR4/4 褐色土 ローム粒(中)少量。2層より明るい。
4 10YR6/3 黄褐色土 ローム主体とする。
5 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒(中)少量。4層より暗い。

SK125

- 1 暗褐色土 粘土粒・炭化物・ローム粒少量。
2 黄褐色土 しまり強。

SK129

- 1 10YR4/4 褐色土 ローム粒少量。
2 10YR4/6 褐色土 ロームブロック少量。

SK130

- 1 10YR4/4 褐色土 ローム粒(極小)多量。
2 10YR2/4 暗褐色土 ローム粒(中)多量。



第2表 縄文時代土壇観察表(1)

土壇名	所在グリッド	長径(m)	短径(m)	深度(m)	主軸方向
SK1	AC-21	1.22	1.09	0.34	N-50'-W
SK2	AC-21	1.89	1.23	0.44	N-83'-E
SK3	AB-21	1.20	0.98	0.08	N-31'-W
SK4	AD-22	0.70	0.66	0.12	N-27'-E
SK5	AE-24	1.41	1.13	0.01	N-19'-E
SK6	AE-23	1.44	1.04	0.21	N-18'-E
SK7	AK-14	3.28	1.58	0.21	N-4'-E
SK8	AY-10	2.22	1.51	0.11	N-12'-W
SK9	AC-19・AC-20	2.41	2.17	0.32	
SK10	AF-18	2.84	2.84	0.74	N-22'-W
SK11	AF-18	1.81	1.50	0.35	N-14'-W
SK12	AI-18	1.14	0.78	0.16	N-76'-W
SK13	AF-18	3.23	2.08	1.11	N-73'-W
SK14	AI-18	1.82	1.72	0.61	N-24'-W
SK15	AH-19	1.35	1.10	0.34	N-0
SK16	AH-18	0.96	0.94	0.48	N-82'-W
SK17	AH-18	1.16	1.06	0.34	N-90'-W
SK18	AG-18・19	3.00	2.95	0.73	N-69'-W
SK19	AG-18・19	2.80	1.22	0.18	N-59'-W
SK20	AF-18・AG-18	3.30	2.30	0.32	N-9'-W
SK21	AH-18	0.94	0.62	0.36	N-51'-W
SK22	AH-18	1.23	1.16	0.40	N-70'-W
SK23	AH-18	2.08	1.18	0.92	N-31'-W
SK24	AH-18	1.60	1.38	0.23	N-65'-W
SK25	AH-22	1.12	0.88	0.37	N-12'-E
SK26	AG-22	1.06	0.54	0.48	N-36'-W
SK27	AG-22・AH-22	1.20	1.16	0.43	N-8'-W
SK28	AH-22	1.50	1.11	0.22	N-7'-E
SK29	AH-23	0.90	0.64	0.24	N-76'-W
SK30	AH-22	1.21	0.66	0.25	N-26'-W
SK31	AH-22	0.78	0.62	0.20	N-74'-E
SK32	AH-22	0.83	0.64	0.42	N-17'-E
SK33	AH-22	1.29	1.26	1.30	N-54'-W
SK34	AH-22	1.50	0.44	0.60	N-66'-W
SK35	AH-22			0.12	
SK36	AH-22	2.42		0.30	
SK37	AH-22				
SK38	AH-22				
SK39	AI-22	0.85	0.56	0.19	N-51'-W
SK40	AI-21	0.96	0.70	0.20	N-32'-W
SK41	AH-22	0.88	0.63	0.38	N-53'-W
SK42	AI-21	0.92	0.82	0.10	N-18'-E
SK43	AI-21・AH-21	1.71	1.02	0.26	N-21'-E
SK44	AK-18	0.99	0.94	0.09	N-3'-W
SK45	AK-18	0.76	0.72	0.49	N-42'-W
SK46	AJ-18	0.92	0.84	0.12	N-0
SK47	AJ-18	2.48	1.82	0.18	N-49'-W
SK48	AE-18	1.98	1.76	1.12	N-54'-W
SK49	AH-21	1.22	0.68	0.28	N-40'-W
SK50	AI-21	0.84	0.68	0.17	N-49'-E
SK51	AH-21	0.76	0.42	0.32	N-18'-E
SK52	AH-21	1.08	0.84	1.24	N-39'-E
SK53	AG-21	0.53	0.44	0.18	N-80'-E
SK54	AH-20	0.43	0.46	0.42	N-89'-E

第3表 縄文時代土壌観察表(2)

土 壌 名	所 在 グリッド	長 径 (m)	短 径 (m)	深 度 (m)	主 軸 方 向
SK55	AH-20	1.14	0.76	0.16	N-74'-W
SK56	AH-20	0.84	0.58	0.16	N-54'-W
SK57	AG-22	0.78	0.76	0.27	N-59'-W
SK58	AH-21	0.69	0.53	0.38	N-47'-W
SK59	A I -19	0.80	0.58	0.10	N-72'-E
SK60	AH-21	2.26	1.60	0.12	N-39'-W
SK61	AG-21	1.87	1.26	0.20	N-58'-W
SK62	AH-19	1.44	1.30	0.46	N-52'-W
SK63	A J -19	0.88	0.78	0.18	N-6'-W
SK64	AH-21	1.30	1.08	1.32	N-46'-E
SK65	AH-21	2.80	1.50	0.16	N-46'-E
SK66	AG-21	2.33	2.20	0.40	N-3'-E
SK67	AG-21	1.08	0.92	0.12	N-75'-W
SK68	AH-19	1.94	1.52	0.26	N-83'-E
SK69	A I -19	2.75	0.51	0.16	N-71'-E
SK70	AH-19	1.18	0.86	0.22	N-15'-E
SK71	A I -19・20	3.84	2.72	0.31	N-79'-E
SK72	A I -19	0.96	0.84	0.10	N-0
SK73	A I -19	1.48	0.80	0.22	N-62'-E
SK74	AH-19			0.18	
SK75	AH-19			0.16	
SK76	A I -19	2.26	1.56	0.11	N-34'-E
SK77	A I -23	0.52	0.46	0.48	N-70'-W
SK78	AP-18	1.16	1.03	0.43	N-62'-W
SK79	AP-18	1.06	0.59	0.27	N-13'-W
SK80	AP-18	3.20	1.88	0.24	N-71'-W
SK81	AP-18				
SK82	AO-18	1.08	0.94	0.20	N-58'-E
SK83	A J -13	1.78	1.31	0.24	N-11'-W
SK84	AN-18	0.97	0.80	0.61	N-68'-E
SK85	AK-14	2.44	1.22	0.22	N-0
SK86	AN-18・AO-18	1.08	0.82	0.24	N-26'-W
SK87	AO-18	1.82	1.18	0.08	N-9'-E
SK88	AK-12	1.00	0.84	0.22	N-75'-W
SK89	AK-14	2.24	1.32	0.26	N-17'-E
SK90	AM-19	2.06	1.68	0.66	N-11'-E
SK91	AM-18	1.71	1.14	0.24	N-60'-W
SK92	AN-19	1.01	0.88	0.26	N-14'-E
SK93	AN-18	1.46	1.36	0.50	N-0
SK94	AM-17	1.10	1.02	0.30	N-45'-W
SK95	AN-18	2.36	1.93	0.40	N-13'-E
SK96	AN-17	2.14	1.68	0.10	N-82'-W
SK97	AN-17	1.94	1.28	0.20	N-19'-E
SK98	AN-18	1.03	1.01	0.32	N-7'-E
SK99	A I -21・22	2.10	1.96	1.46	N-15'-E
SK100	A I -21	1.82	1.54	0.93	N-72'-W
SK101	AP-16	1.47	1.45	0.21	N-74'-W
SK102	AP-16	1.46	1.23	0.20	N-85'-E
SK103	AP-16	1.58	1.26	0.28	N-36'-W
SK104	AO-17・AP-17	1.10	0.80	0.13	N-85'-E
SK105	AO-14・15	0.81	0.61	0.15	N-28'-W
SK106	AO-15	0.76	0.60	0.56	N-44'-W
SK107	AP-16	1.52	1.34	0.66	N-5'-W
SK108	AP-15	2.06	0.82	0.22	N-35'-E

第4表 縄文時代土壌観察表(3)

土壌名	所在グリッド	長径(m)	短径(m)	深度(m)	主軸方向
SK109	AO-15	1.00	0.78	0.48	N-47°-W
SK110	AP-16	1.90	1.11	0.24	N-11°-W
SK111	AP-16	1.67	1.27	0.21	N-34°-E
SK112	AO-15	1.24	0.78	0.52	N-70°-E
SK113	AP-16	0.48	0.43	0.78	
SK114	AO-16	1.20	1.13	0.18	N-73°-E
SK115	AO-16	1.20	0.88	0.18	N-58°-W
SK116	AO-15	2.19	0.23	0.20	N-80°-W
SK117	AO-15	1.05	0.85	0.12	N-76°-E
SK118	AO-15・16	1.48	0.92	0.10	N-51°-E
SK119	AN-15	1.53	0.95	0.11	N-3°-W
SK120	AO-15	1.18	1.00	0.33	N-5°-W
SK121	AN-16	0.77	0.46	0.30	N-82°-W
SK122	AO-16	1.84	1.29	1.29	N-42°-E
SK123	AP-16	2.14	1.86	0.30	N-24°-E
SK124	AN-15	1.42	0.98	0.54	N-75°-W
SK125	AP-17	0.62	0.60	0.80	N-10°-W
SK126	AO-17	0.56	0.53	0.94	N-80°-E
SK127	AO-15	1.58	1.00	0.30	N-74°-E
SK128	AM-17・18	1.70	1.62	0.28	N-44°-E
SK129	AO-15	1.04	1.02	0.23	N-76°-E
SK130	AN-15	1.14	0.86	0.14	N-77°-W

と考えられる。

本土壌からは第209図11の土器が検出されている。

第52号土壌

確認面における径は90cm、深度は130cmの、やや小形のフラスコ形土壌である。底面は平坦化されている。断面の上位に括れ部がある。断面形はやや歪んでおり、崩れ等によって、本来的な形状が変容したものと考えられる。

第62号土壌

径135cm程の土壌である。平面形態は整った円形で、断面形態は円筒形を呈する。壁はわずかに閉き気味で、深度は浅い。覆土の堆積から、人的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

第64号土壌

第65号土壌を壊して掘削されたフラスコ形土壌である。括れ部は壁の上位は約1/3程度部分にある。底面は緩やかに湾曲している。覆土上位は自然に堆積したものであろう。覆土下位の埋没過程については判断は難しい。

第68～72号土壌

第10号住居跡の東側に群在する土壌群で、いずれも深度20～30cm程の浅いものである。

第68号土壌は楕円形の平面形態を有する。他の土壌との新旧関係は不明である。第69号土壌は2つの土壌が重複している可能性が高いが、一括して番号を付している。他の遺構との新旧関係は不明である。

第70号土壌は第10号住居跡に切られており、第72号土壌を切って掘削されている。楕円形の平面形態を有する。壁の立ち上がりは緩やかである。第71号土壌は第72号土壌を切って掘削されている。径2.7×3.8m程の大形の土壌である。壁の立ち上がりは非常に緩やかで、皿状の断面形を有する。底面の中央部分に径1.7×1.1m程の楕円形の窪みがある。比高差は10cmと、わずかに緩やかである。径は大きい。柱穴が全く検出されず、壁の立ち上がりが極めて緩やかで、床面にも小規模な凹凸があるなど、住居跡である可能性は極めて低い。第72号土壌は第70、71号土壌に切られている。小規模な土壌である。

これらの土壌群は、第72号土壌のみ、やや明るい色調の覆土が堆積していたが、他の土壌の覆土は類似し

ている。また、第71号土壌は規模が他の土壌に比して大きい。それ以外の部分では壁や底面の状況等、これらの土壌群には共通性が強い。重複する部分があるため、互いに時期差があることは確実に、また性格等は不明とせざるを得ないが、類似した機能を持ったものと推測される。

第74、75号土壌

両者とも第10号住居跡に切られている。壁の傾斜が緩やかであること、深度が浅いこと等、前述の第68～72号土壌と類似した特徴を持っている。第10号住居跡との重複部分が多いため、両者とも本来の形状等については明確ではない。深度は第10号住居跡床面に及んでいない。両者とも、第68～72号土壌と同様の性格を有していたと考えられる。

第88号土壌

楕円形の平面形態を有する。壁の立ち上がりは緩やかで、底面の形状はやや歪んでいる。上層の堆積状況から、自然堆積によるものと思われる。

第93号土壌

径150cm程の円形の土壌である。壁の立ち上がりはわずかに傾斜を持ち、開き気味である。底面の中央やや北東寄りの部分が径30cm程不整形な形で焼土化していた。

第99号土壌

径2m、深度160cmのフラスコ形土壌である。括れ部は壁の中位にある。壁の崩れのためか、断面形態はあまり整っていない。

本土壌からは比較的少量の土器が検出されている(第210図、第211図1～7)。いずれも覆土中位から上位にかけて散在していたものであるが、いずれも堀之内I式に属するもので、一括性の強いものと考えられる。後期前葉以降の遺構は今回の調査では他に検出されておらず、本土壌が現在のところ唯一のものである。

第105号土壌

径60×80cm程の小規模な土壌である。深度も15cm程のものであるが、加曾利EⅢ式の土器が比較的まとまって出土している(第211図8～12)。

第107号土壌

径160cm程の小形のフラスコ形土壌である。括れは非常に弱く、断面形は円筒形に近い。壁の下位部分がわずかにオーバーハングしている。

第113号土壌

柱穴状のごく小さな土壌である。確認できなかった住居跡の柱穴を構成する可能性もあるが、ここでは土壌として扱う。本土壌からは第205図6の土器が検出された。

第117号土壌

深度が15cm程の極めて浅い土壌である。平面形態は円形、壁の立ち上がりは緩やかで、皿状の断面形を呈する。東端から第206図1に掲載した土器がまとまって出土している。

第118号土壌

第117号土壌と近接している。平面形態は楕円形で、深度は浅い。土壌の底面から覆土にかけて、比較的少量の遺物が検出された。出土した遺物は第205図7の、キャリパー形深鉢下半部と、第212図1～5の破片が出土している。

第118号土壌

本土壌は第46号、第51号住居跡に破壊されている。深度の浅い、楕円形の土壌である。

本土壌からは第212図6～9の土器がまとまって検出された。

第120号土壌

断面円筒形の土壌である。平面形態は正円に近い楕円形である。本土壌の覆土中位から、第206図2の深鉢が検出された。

第122号土壌

深度が120cmの円筒形の土壌である。壁の立ち上がりは垂直で、崩れはほとんどない。各土層の堆積はフラットで、自然堆積と考えられる。

本土壌から、第212図10～12に示した土器が検出されている。

第123号土壌

第29号住居跡によって上半部分を破壊された土壌

である。覆上の観察からは、住居跡構築にあたって人為的に埋められたという痕跡は認められなかった。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、部分的にわずかにオーバーハングしている。

底面から、第206図3に示した、完形に近い深鉢が出土している。

第124号土壌

小形の、断面円筒形の土壌である。断面形態は整っており、癖の崩れは見られない。底面は平坦化されている。

第125号土壌

径50cm程の、ピット状の小形土壌である。底面の中央に柱穴状のピットが掘り込まれ、底面から50cmの深度を持つ。覆土中位から第206図6に示した土器が検出された。

第126号土壌

径55cm程のピット状の小形土壌である。深度は100cmと深い。住居跡の柱穴を構成する可能性もあるが、単独の土壌と判断した。覆土中位から第206図4に示した土器が検出された。

第127号土壌

平面形態は楕円形で、壁の立ち上がりは緩やかである。底面はほぼ平坦で、水平である。プランの西端近くに伏襲が設置されていた。第206図5に示したもので、ほぼ完形に近いが、底部が欠損している。

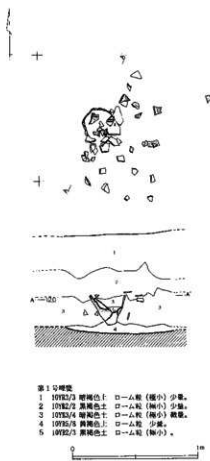
確認面直下で伏襲が検出されるという状況から、本来的な深度はさらにあつたと考えられる。本遺跡において本土壌と形状が類似するものはいくつかあるが、伏襲等を伴うものは他には類例がない。本土壌は墓瘞の可能性が極めて高いと言えるだろう。

c. 埋襲

第1号埋襲

AG-23に位置する。調査区の壁において、確認された。しかも谷の覆上中であり、本来の遺構掘り込み面よりも約30cm程下位を確認面として設定したため、

第124図 第1号埋襲



- 第1号埋襲
- 1 10YR3/3 暗褐色土 ローム層 (極小) 少量。
 - 2 10YR2/2 黄褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
 - 3 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
 - 4 10YR5/5 黄褐色土 ローム粒 少量。
 - 5 10YR2/3 黄褐色土 ローム粒 (極小)。

単独の埋襲か、何らかの遺構に伴うものかどうか不明である。調査区の壁を精査したが、貼り床、柱穴等は見られなかったため、住居跡に伴うとは考えられない。

掘り方等は確認できず、暗褐色土の中に埋設されている。埋襲内部の覆土は、その上位については周辺の自然層と判別がつかないような状況であった。

埋設されていた土器は、第213図1に示した深鉢である。上半部は破損しているが、底部は欠損していない。

本来的な遺構の掘り込み面と考えられるレベルに、埋設土器と同一個体の破片が分布していた(第213図2~9)。このレベルで、特に焼土等の分布は観察されず、住居跡等他の遺構に属するという根拠は認められなかった。

(3) 縄文時代の遺物

a. 縄文土器

第1号住居跡出土土器 (第125図～第129図)

第125図1は深鉢の胴部である。おそらくキャリパー形をとると思われる。胴部上半がわずかに括れ、下半が膨湾し、底部に向かってすぼまる。頸部無文帯がわずかに観察できる。地文はR L単節縄文で、縦位方向に施文されている。意匠は3本1組、または2本1組の沈線によって描かれている。意匠は、弧線と垂線によって基本的な単位が構成されている。垂線の末端と、一部の弧線中で、沈線が蕨手状にごく小さな渦巻きをなす。本個体は第1号住居跡内の比較的広い範囲に分布していた。

第126図1、2はともにキャリパー形深鉢の口縁部で、器形、裝飾、成形、胎土の特徴等も互いに類似したものである。第126図1は、口唇部が肥厚せず、先端がやや薄くなる。口縁部文様帯の上下端は1条の隆帯で区画される。文様帯内には、上下の区画に接する渦巻文を、2条1組の斜位隆帯でつなぎ意匠が描かれている。胴部は地文のみで、L R単節縄文が縦位に施文される。第126図2は、口縁部が開き気味で、口唇部は肥厚していない。口縁部文様帯には、上下の区画に接する渦巻文が2単位残っている。付随する隆帯から、横S字文の両端が残存したと思われる。2個の渦巻文間には横位の隆帯があり、文様帯下端の区画隆帯との間に、ごく狭い区画を形成している。胴部には3本1組の垂線が施文されている。沈線施文の工具は半截竹管と推測される。

第126図3は口縁部無文の深鉢で、口縁部は緩やかに開く。口唇部は特に肥厚していない。無文帯の外表面は剥片の刃部のような工具で削りが施されている。胴部文様帯の上端区画線は、1条の隆帯でなされている。この隆帯は断面が三角形で、側面がやはり板状の工具で削り取られている。胴部文様帯は、2条1組の垂線、1条の蛇行状垂線が交互に施文されるもので、各々6単位施文される。2条1組の垂線と文様帯上端区画隆帯の交点上には、2個1対のボタン状の粘土粒が添付

される。この手法は本遺跡出土土器の中では類例に乏しい。地文はR L単節縄文の縦位施文である。縄文は隆帯施文後に施されている。

第126図4は小形の深鉢である。頸部の括れ等は弱い。口縁部文様帯は狭く、渦巻文と縦位の短沈線列によって構成される。沈線列の施文工具は半截竹管である。地文はR L単節縄文がわずかに観察される。

第126図5は小形の深鉢で、口縁部が外傾し、胴部が張る器形である。口縁部の一端が山形になっているが、おそらく1単位の波状となると思われる。口縁部は無文で、屈曲部に交互刺突文が1条巡っている。また、胴部中央に2条1組の沈線列が横位に巡っている。地文はR燃りの擦糸文である。

第126図6は櫛歯状工具による条線文のみが施文される深鉢である。口唇部上端が平坦化されている。口縁部がわずかに膨湾し、口唇部に至る。二次加熱を受けており、器壁が粗れ、形にも歪みが見られる。接合する破片間で、色調が明らかに異なるものがいくつかあり、破砕後火を受けたと判断される。

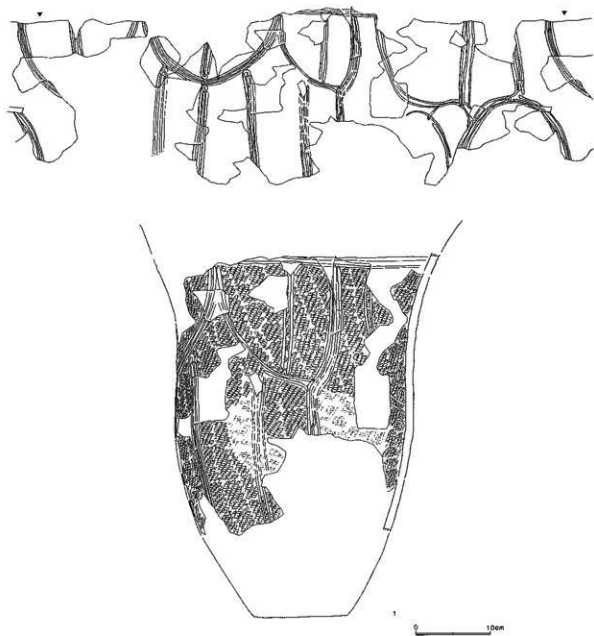
第126図7は口縁部が外反しながら開く深鉢で、全面にR Lの0段多条による施文がなされている。0段は4条である。口唇部の内面が肥厚する。

第126図8は、口縁部が無文で、胴部が地文のみ施文される深鉢である。胴部上位でわずかに屈曲し、口縁部が内傾する。無文帯の下端には1条の沈線が施されているが、施文は不連続である。成形はあまり丁寧ではなく、部分的に粘土帯の接合痕が観察される。地文はR L単節縄文で、縦位に施文される。

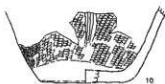
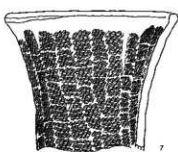
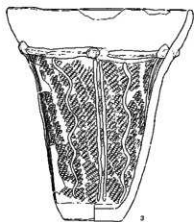
第126図9～12は、胴部のみ、または底部の破片である。10、11は3条1組の垂線を持つ。11は地文がL Rと思われる。12は胴部下半に重圏文が施文される。

第127図1～13はキャリパー形深鉢の口縁部破片である。いずれも口縁部文様帯の幅が狭く、文様帯の区画線に渦巻文が接するものが多い。3は頸部無文帯を持つ。2は渦巻文の下端が隆起している。1と5の地文はR燃り。9は縦位の沈線列である。10、11は渦巻きつなぎ弧文で、地文はともに無節のLである。

第125図 第1号住居跡出土土器(1)

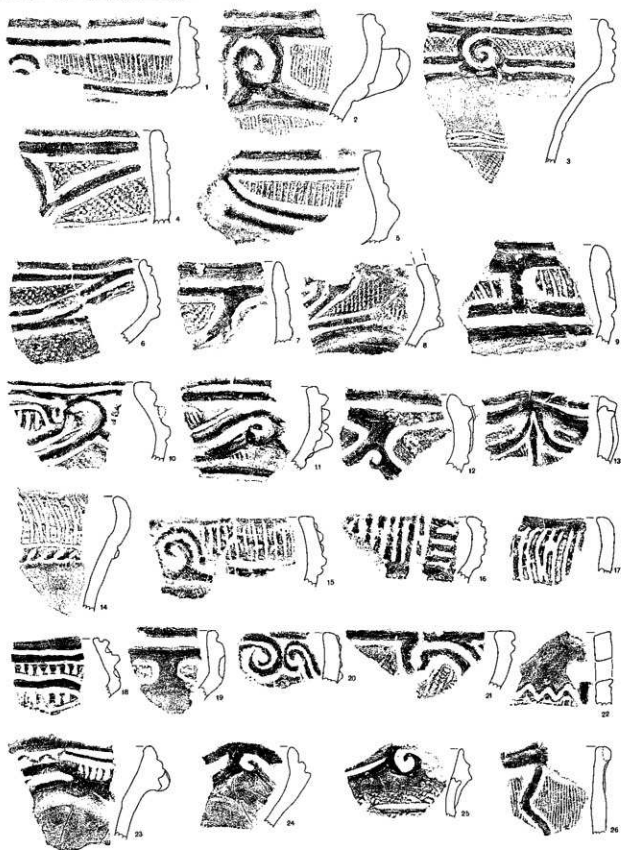


第126图 第1号住居跡出土土器(2)

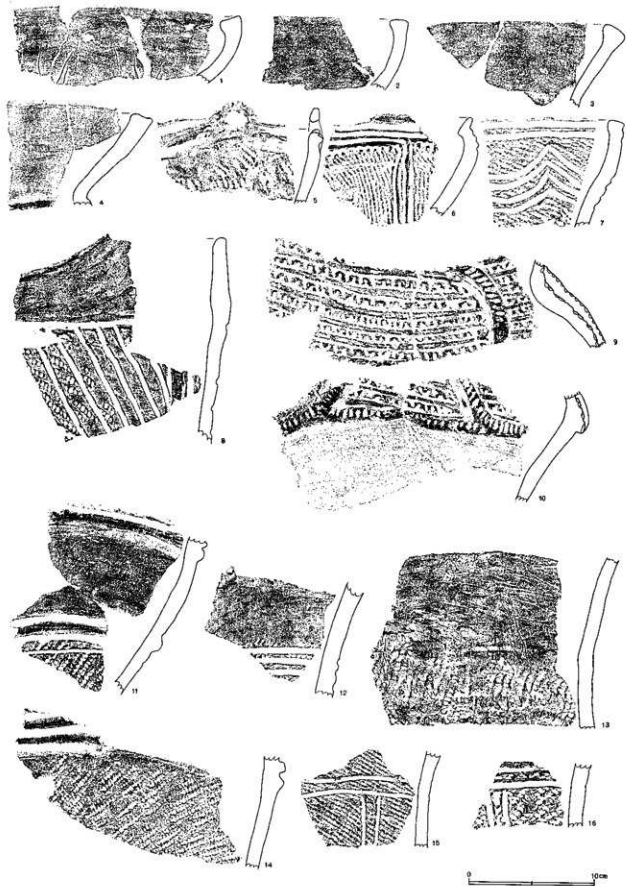


0 10cm

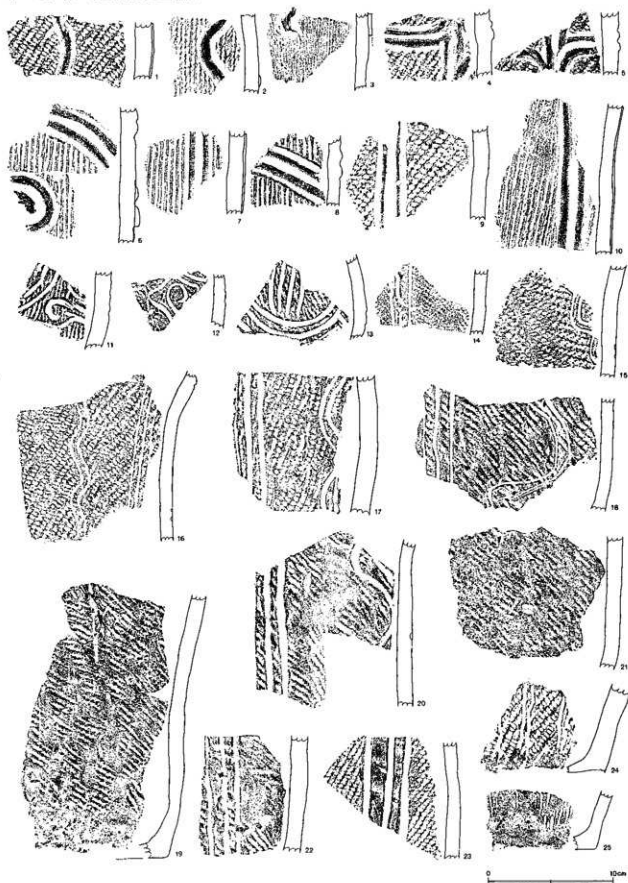
第127図 第1号住居跡出土土器(3)



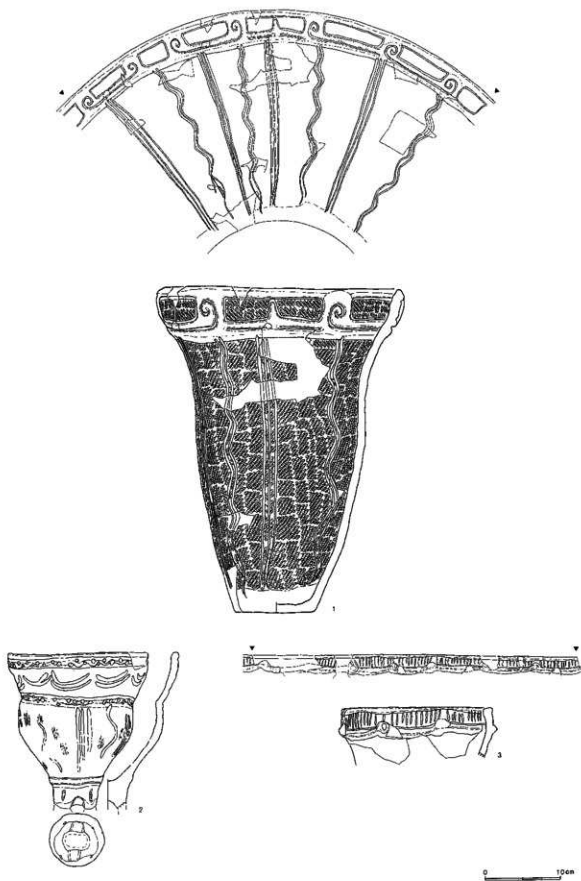
第128图 第1号住居跡出土土器(4)



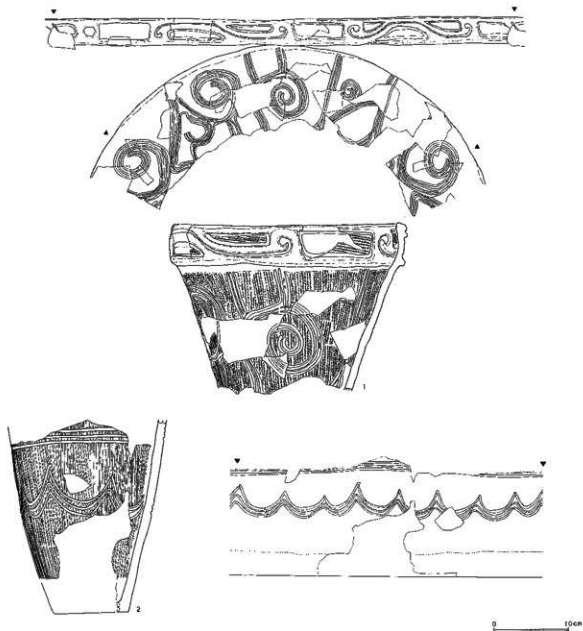
第129図 第1号住居跡出土土器(5)



第130图 第2号住居跡出土土器(1)



第131図 第2号住居跡出土土器(2)



第127図14～17は口縁部に沈線列が施文されるもの。口唇部に区画はなく、文様帯の上端は開放されている。14は頸部無文帯があり、その区画には、刻み列を有する隆帯が用いられている。15も無文帯が認められ、口縁部文様帯には渦巻文がある。16は縦位と横位の沈線列が交互に施文されるもの。

第127図18～22は小形の深鉢を集めた。20は小形の渦巻文が施文される。21は口唇部に直接接するように2条1組の隆帯による意匠が描かれている。22は口縁部が無文で、波状をなす。口縁下に波状沈線が施文される。地文は櫛歯状工具による条線である。

第127図23～24は口縁部が反転する深鉢である。23は口唇部内に交互刺突文、縦位の短沈線が施される。24、25は波頂部に口唇部上の沈線の末端がのび、頂点で蕨手状の渦巻文を構成する。

第127図25は波状口縁の小形の深鉢で、口唇部には隆帯が貼付され、肥厚している。波頂部から1条の蛇行状隆帯が垂下する。地文はR然り。

第128図1～4は口縁部が無文帯で、開く器形の深鉢。いずれも口唇部が肥厚する。

第128図5は口唇部に2条の隆帯を有し、突起には貫通孔がある。地文は無筋のL。第128図6は鉢形に開き、口唇部が強く屈曲して開くもの。胴部は沈線によって、縦位に区画される。胴部の上端、区画線の下位に、竹管文による連続刺突が施される。器形、装飾とも、本遺跡では類別に乏しい。第128図7は連弧文が施される深鉢。口縁部は緩やかに開く。連弧文は4条1組の沈線で描かれる。地文は無筋のL。第128図8は波状口縁の深鉢で、胴部には斜位の沈線列が施文される。地文にはRL単筋縄文が横位に施文される。

第128図9、10は同一個体である。意匠は交互刺突文が重畳して施されるものである。文様帯を縦断するように、弧状の隆帯が背合わせに貼付される。隆帯上には刻み列が施される。文様帯の下位に無文帯がある。無文帯部分のカーブから、器形はおそらく、口縁部が外傾し、肩が張る深鉢と考えられる。

第128図11～16は胴部破片で、頸部の状況のわかる

もの。11、12は頸部無文帯が施されている。15、16は頸部は素文帯となる。両者とも2条1組の垂線が認められる。

第129図1～10は深鉢の胴部破片で、隆帯による装飾を持つもの。1～3は蛇行状垂線、4、5は同一個体で、2条1組による文様が横位に展開する。6～8も同一個体で、地文は条線。2条1組の隆帯による渦巻文と縦位の区画線が施されている。

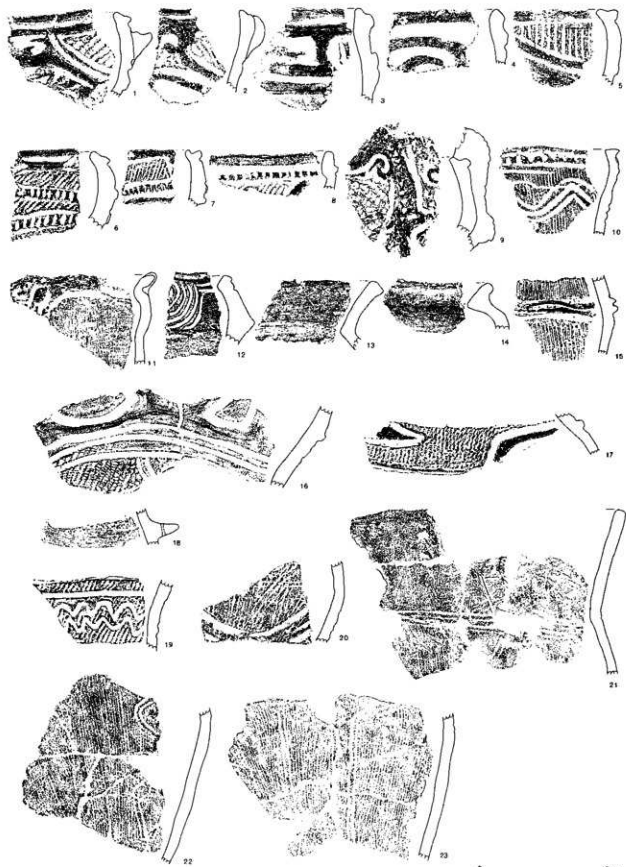
第129図11～18、20、22、23は深鉢の胴部破片で、沈線による装飾を持つもの。3条1組の垂線と蛇行状垂線が組になるものが多い。11、12は沈線文の一部が渦巻文を構成するもの。14は2条1組の沈線の内部に小単位のクランク状沈線が縦位に連続して施される。18は沈線間が明らかに磨消されているが、他は磨消は見られない。

第2号住居跡出土土器 (第130図～第132図)

第130図1はほぼ完形に近いキャリパー形の深鉢である。口縁部は開き気味で、頸部は緩やかにすばまり、わずかに胴部が膨らむ。成形は丁寧である。幅の狭い口縁部文様帯を持ち、胴部には2条1組の蛇行状垂線と、3条1組の垂線が各4単位施文される。口縁部文様帯は渦巻文で区画されるが、渦巻文の向きが対向する形と、同方向で順次施文される部位があり、それに伴い隆帯間の沈線が連続すると不連続になる部分とがある。渦巻文で区画された部分で、1ヶ所、文様帯下端隆帯から棘状の隆帯が上方にのびるというモチーフがある。その下位の部分で、隆帯間の沈線が途切れている。地文はRL単筋縄文で、口縁部は横位、胴部は縦位に施文される。本個体は全体の施文順序がわかりやすい。胴部縄文→口縁部縄文→口縁部文様→胴部文様という順序で装飾が行われている。底部には使用による磨耗痕は確認できなかった。

第130図2は曾利系の台付鉢である。頸部で括れ、口縁部が開く。台部の過半は欠損している。本個体は強い二次加熱を受けたらしく、器形は歪み、器面はひどく粗れている。そのため、文様についても、不明な点がある。口唇部、頸部括れ部に交互刺突文が施文され

第132図 第2号住居跡出土土器(3)



ているが、この交互刺突はやや崩れており、整っていない。その間を2条1組の沈線による下向き弧線文が断続的に施文されている。この弧線文は、一部で密着するなど、あまり整ったものではない。胴部には3条1組の沈線による垂線、1条の沈線による蛇行状垂線が4単位施される。地文は、ごく部分的にしか観察できないが、L燃りの燃糸文である。

第130図3は小形のキャリパー形深鉢で、渦巻つなぎ弧文系のモチーフに縦位の沈線列が加わるものである。沈線列は生乾きの状態で施文されており、調整されていない。本来渦巻文となる部分は、中央に窪みを持つボタン状の粘土粒貼付で表現されている。

第131図1はキャリパー形の深鉢で、口縁部は直線的に立ち上がる。胴部も直線的に開く。口縁部文様帯は幅が狭い。両端が渦巻文となる2条1組の隆帯文が2単位施される。2単位のうち1つは横S字文、1つは半角状に両端の渦巻の向きが異なるものである。それぞれ、文様帯の上下端区画線に按ずるように施文されているため、矩形、三角形の区画がでる。胴部には3条1組の沈線による渦巻文が大きく3単位、その間を斜位のモチーフでつなぎ、縦位に区画するようなラインにそれぞれ連結している。地文はL燃りの燃糸文である。

第131図2は連弧文が施される深鉢の胴部である。地文は櫛歯状工具による条線で、その上に3条1組の沈線による連弧文が施される。連弧文の上位には3条1組の沈線の横位に施される。底部には磨耗度は認められなかった。

第132図1～8はキャリパー形深鉢の口縁部破片である。1、2は渦巻つなぎ弧文系のモチーフが施される。いずれも弧文部が張り出している。1の地文は0段多条。3は縦位の沈線列で区画内が充填されるもの。5の地文はL燃りの燃糸文である。6～8は口縁部文様帯内の隆帯上に刻み目列が施されるものである。モチーフは不明であるが、地文原体等からそれぞれ別個体と判断される。10は連弧文が施される深鉢で、口唇部直下に刺突列が施文される。地文は櫛歯状

工具による条線である。11は地文に条線が施される深鉢で、突起の下位に渦巻文が認められる。13、14は頸部無文の鉢形土器。15の胴部中位の隆帯間には角押文に近い連続刻みが施されている。16はキャリパー形深鉢の頸部と考えられる。17は鉢形土器の肩部。18は小形の有孔刺付土器である。21～23は同一個体で、頸部が直線的に開く深鉢である。頸部は無文で、胴部に竹管による文様が施文される。意匠の全体は明らかではないが、蛇行状の垂線、区画をなすと思われる垂線が認められる。地文は浅い条線である。

第3号住居跡出土土器 (第133図)

本住居跡からの出土土物は比較的少量である。第133図1はキャリパー形の深鉢口縁部で、狭小な口縁部文様帯を有する。口縁部文様帯には上下端を斜位に結ぶ隆帯と、その間に配された小単位の渦巻文が施される。口縁部文様帯内の地文は櫛歯状工具による、比較的密な条線である。幅広い頸部無文帯を持つ。

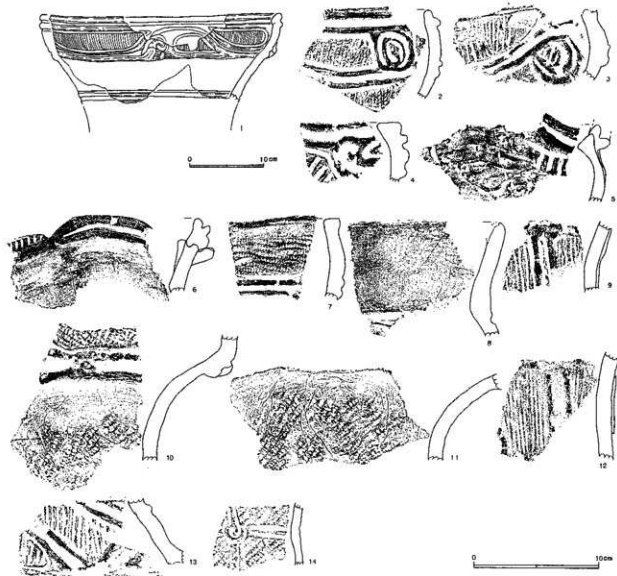
2～4はキャリパー形深鉢の口縁部破片である。2、3は1同様、2条1組の隆帯によって渦巻文を中心とした文様が描かれている。地文はL燃りの燃糸文である。6は口縁部が外反する深鉢で、頸部は大きく無文となる。口唇部に沈線と刻み目列を持つ。13はおそらく、鉢形土器の肩部であろう。2条1組の隆帯による文様と、縦位の沈線列を持つ。14は小形深鉢の胴部破片で、格子目状に沈線が施され、交点に小さな渦巻文が施文される。地文は沈線のRL単節縄文の縦位施文である。

第4号住居跡出土土器 (第134図)

第134図1は本住居跡床面に押しつぶされたような状態で検出されたものである。口縁部はほぼ直線的に外傾し、頸部にほとんど括れを持たない。口唇部端面は矩形となる。口縁部文様帯上にわずかに無文部が作り出される。口縁部文様帯には長方形の区画と小さな矩形の区画が交互に配され、後者の区画内に渦巻文が1条の隆帯で施文される。幅の広い頸部無文帯が隆帯で区画され、胴部には隆帯による懸垂文が施文される。

本住居跡からは、他には極微細な破片が検出された

第133図 第3号住居跡出土土器



のみである。

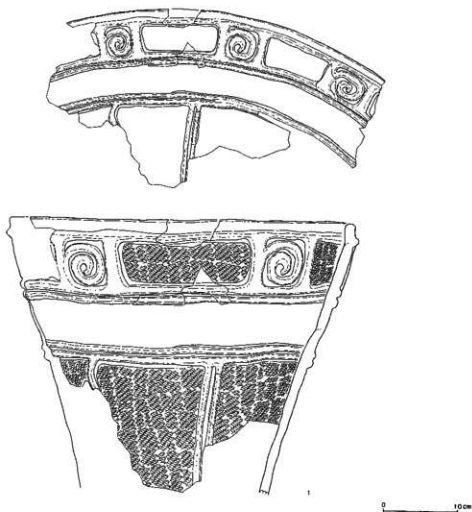
第5号住居跡出土土器 (第135図)

第135図1～4は同一個体で、連弧文系深鉢である。頭部が割れ、わずかに内湾しながら開く口縁部を持つ。頭部に文様帯を区画する平行沈線が施される。地文はRL単筋縄文の縦位施文である。5～7も同一個体で、やや変形しているが、連弧文系の変種であろう。口縁部が平画され、ごく緩やかな波頂部に渦巻文、重圈文が施文される。施文は雑である。横位の分帯が特徴的で、さらに下部にも施文が重なるが、詳細は不明である。8～13はキャリパー形深鉢である。口縁部が直立に近い器形をとる。12は頭部無文帯を持っている。文

様の詳細が明らかなものはないがいずれも2本1組の隆帯を用いている。隆帯の縁辺は沈線状になってつけられている。10はやや特異な文様を持つ。14～19は粗製の深鉢で、14は口縁部に無文部を持つ。末端は肥厚している。16の地文はLr無筋のややほどこたものを横位に施文したものである。17は櫛歯状工具による細かい条痕が施文されている。18、19は同一個体で、無文だが、比較的大きめの貫通孔を有する。20は深鉢の胴部で、懸垂文が施文されるもの。21、22は同一個体で、櫛歯状工具による地文の上に、横位の区画線と、波状沈線が施文されている。

第6号住居跡出土土器 (第136図)

第134図 第4号住居跡出土土器



第136図1は、第6号住居跡の入り口埋壁である。住居跡覆土出土の破片との接合はなかった。口縁部が短く直立し、胴部が丸まっている。内面はナデの後、横方向のミガキが施されている。口縁部は無文帯で、口縁部以下に直接懸垂文が施文されている。3条1組の垂線が均等に6単位割り付けられている。地文は0段多条のRL単節縄文で、縦位に施文されている。2は、有孔罎付土器の口縁部破片である。本個体は第6号住居跡の床面直上から検出された。罎はやや上向きで、丁寧に成形されており、端面の屈曲部ははっきりと作り出されている。口縁部はこくわずかに内傾する。推定される径は相当に大きい。

3、4は隆帯による渦巻文が施文される深鉢、5は口縁部に無文帯を有する、やや小形の深鉢である。覆

土上層からの出土。7～9は同一個体で、深鉢の胴部である。地文が羽状縄文となる。羽状縄文は、RL単節縄文を施文方向を変えることによって構成されている。頸部無文帯をもつ。10はやや小形の深鉢で、歯状T具による条痕を地文に持つ。同図12は4条1組の沈線による波状文がみられる。連弧文系深鉢の頸部であろう。

第7号住居跡出土土器 (第137図～第139図)

本住居跡は、遺構の節で記述したように、住居跡埋没の過程で、異なる遺構が存在した可能性が高く、暫定的に第7a号、第7b号とすることにした。図版掲載資料のうち、第7a号住居跡に帰属すると考えられるものは、第137図1、第139図1～9である。他の資料は第7b号住居跡に帰属すると考えられる。

第135図 第5号住居跡出土土器



第137図1は炉体土器で、口縁部、底部が欠損しているが、胴部はほぼ全周する資料である。胴部の文様帯の上部は、上端に刻み目列を持つ隆帯によって区画されているようである。文様帯の内部は、基本的には刻み目を持つ隆帯によって大きく4分割される。そのうち1単位は、幅が小さく、いわゆる副文様帯的な構成となる。分割された各単位の内部は、刻み目列を有する隆帯によって区調となるラインが引かれ、その間を沈線列、連続刺突、刻み目列等で充填するという方法で、全体の意匠が描かれる。文様帯を分割する隆帯は、2単位について確認できるが、1つは上端にスプーン状の張り出しを持ち、1つは上半で枝分かれし、蛇行する。隆帯の下部は棘状に突き出す部分を持つものが2単位確認できる。各隆帯の断面は蒲鋸形を呈し、両脇には沈線を有するものが多い。

縦位隆帯によって分割された施文単位を展開図左側の単位からA、B、C、Dと仮に符号を付すことにする。Dは副文様帯的な狭小な文様帯である。A、Bは左側の分割隆帯に三角形の意匠が付随する。Aでは右側の分割隆帯に向かって、水平な隆帯が走るが、Bでは三角形の上側の隆帯がわずかに屈曲を持ちながら、文様帯下端に向かう。A、Bとも下半部に沈線列、上半部に刻み目列と沈線文が充填される。文様帯の上半部には、Aでは短沈線によって区切られた、背の低い隆帯の列(振幅の小さい蛇行状隆帯の退化したもの)、Bでは鋸歯状の沈線文が施文される。Cは中央に円形の隆帯文があり、それを中心として文様帯の対角線上に隆帯が貼付される。Dは横位に分帯され、下部には縦位の沈線列、中央部に蛇行状沈線と隆帯、上部に沈線文が施される。

文様帯区画隆帯の上部にR燃りの燃糸文が施文されている。

第139図1は深鉢の口縁部破片で、非常に厚手の個体である。口唇端部からやや下がった位置に大振りの指頭疔痕のある隆帯が巡る。2も外傾する口縁部で、口唇部の内側に刻み目列がある。3は円筒形の鉢形土器で、全体に沈線文による意匠が展開する。小さな半

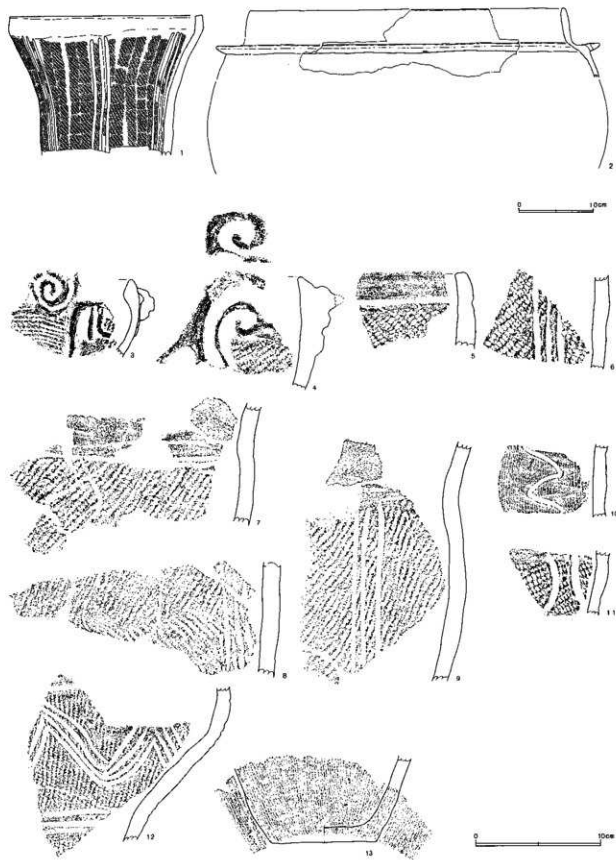
円形のモチーフの内部に刻みに近い短沈線が充填された単位が、パネル状の意匠の内部に施文される。4、5は同一個体で、山形の突起を持つ深鉢である。器面はよく磨かれている。上面に刻み目列を持つ隆帯によって渦巻文その他の文様が描かれている。6の頸部文様はやや乱れている。地文はR燃りの燃糸文。

第137図2は重圏文が施される小形の深鉢である。重圏文はおそらく4単位で、器面がかなり乾いてから施文されている。文様帯区画隆帯は、断面形が三角形である。頸部無文帯下に4条の沈線が5巡り、胴部にはRL単節縄文が縦位に施文されている。覆土上層からの出土。

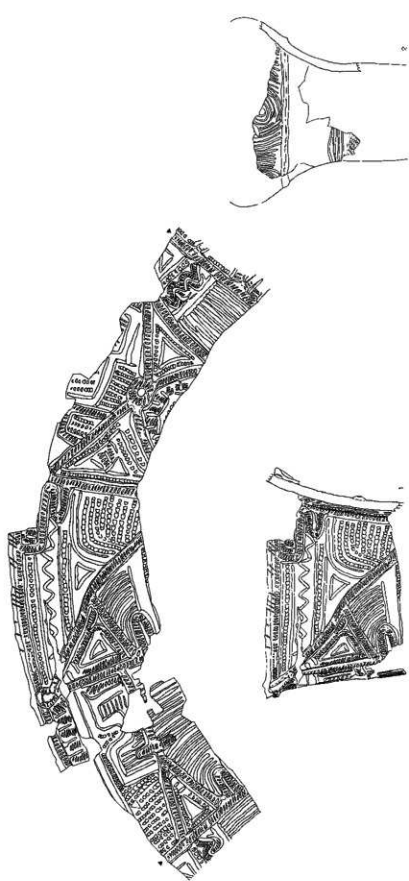
第138図1はキャリパー形深鉢で、覆土の中央部付近からまとまって検出されたものである。頸部のくびれは弱く、口縁部は直立する。口縁部文様帯には渦巻文と2条1組の隆帯が組み合い、区画が形成される。隆帯の両端はなでられ、断面形は蒲鋸形を呈する。頸部には2帯の文様帯が設定され、その内部には3条1組の沈線による波状文が施されている。それぞれの区画も3条1組の沈線文による。胴部には、やはり3条1組の沈線による蛇行状懸垂文と直線的な垂線が施文されている。地文はLR単節縄文だが、波状文の施文される部位までは横位に、その下位では縦位に施文され、そのため、一部羽状縄文状を呈している。接合する破片間で、色調の全く異なるものがあり、破砕してから受熱した痕跡とみられる。A1-17グリッドから出土した破片が同一個体として含まれている(実測図左端の胴部破片)。

第138図2はいわゆる大柄渦巻文の施文される深鉢で、口縁部と底部が欠損している。意匠は基本的には3条1組の沈線文によって描かれている。胴部のはば中央に並列する渦巻文と弧線文が描かれ、各渦巻の下端から垂線が下がる。渦巻の連結の仕方には変異があり、一定ではない。渦巻同士が直接接するもの、弧線文で連結される部分等が認められる。渦巻文と弧線文の交点では、3条の沈線のうち、1条の末端が蹠手状の小さな渦巻となる。地文はL燃りの燃糸文である。

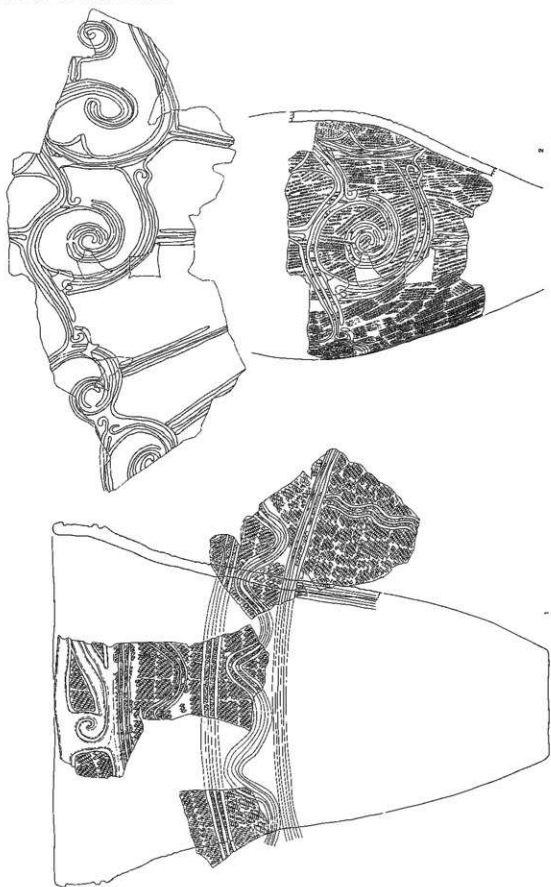
第136図 第6号住居跡出土土器



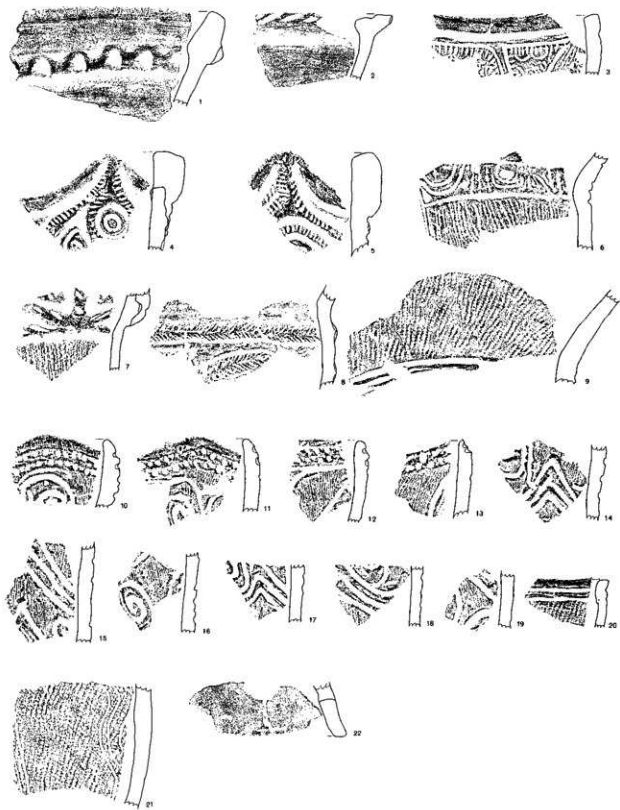
第137图 第7号住居跡出土土器(1)



第138図 第7号住居跡出土土器(2)



第139图 第7号住居跡出土土器(3)



1と同様、接合する破片間で、色調が違い、破砕後変色したことを示している。

第139図10-19は同一個体で、やや小形の連弧文系深鉢である。地文はごく細かい条痕文で、沈線文による波状文と、渦巻文が描かれている。口唇部直下には2条の刺突列が施される。口縁部は緩やかな波状を呈し、波頂部に渦巻が位置するようである。沈線は深めで、やや特異な仕上がりである。小破片のため、全体の構成は明らかではない。22は台部の破片で、貫通孔を有する。

第8号住居跡出土土器(第140図)

第140図1はキャリパー形深鉢の口縁部で、本住居跡の炉体土器である。頸部無文帯を有し、その下端区画隆帯以下が欠損している。口縁部文様帯には2条1組の隆帯による下向きの弧文が連続し、文様帯上端との交点に小さな渦巻隆帯が貼付される。渦巻の中心は大きく張り出している。渦巻の中心から文様帯の下端にかけて、3条の小さな垂下隆帯が施文されている。意匠はほぼ正確に5単位で、地文はR L単節縄文で縦位施文である。

2は覆土出土だが、破片が住居跡の広い範囲にわたって分布していた。3-5が比較的まとまって検出されたのに比べて対照的である。2は浅鉢で、頸部以下が欠損している。口唇部に細い2条の沈線が巡り、頸部の括れ部に交互刺突が施文されている。

3は連弧文系の小形深鉢である。3単位の波状口縁で、頸部は緩やかに内湾する。胴部の中央部が括れ、胴部下半から直線的に底部に向かう。口唇部直下に交互刺突文が巡る。文様帯は3条1組の沈線により、括れ部で大きく2帯に分帯され、上部の文様帯が3条1組の波状沈線によって2細分される。波状沈線文の上下には2条1組(1単位だけは1条の沈線による)の弧線文が向かい合わせに施文される。ただし正面図やや右側の部分だけ1ヶ所この弧線文が欠落している。波状沈線は口縁部の波状口縁と対応するように描かれている。波頂部下では波状文の頂部は緩やかなカーブを描き、波底部では波状文の頂部は鋭角になっている。

胴部には蛇行状懸垂文と垂線がそれぞれ2単位施文されているが、蛇行状垂線の1単位のみ2条1組の沈線で描かれ、他は3条1組という組み合わせを持つ。地文はR L単節縄文で、すべて横位施文というきわめて特異な施文方向による。底部には使用による磨耗痕がわずかに認められる。

4は連弧文系深鉢の胴部下の個体である。3条1組の沈線文による波状文が描かれている。上部2条の波状線は頂部が鋭角だが、下段の沈線は波頂部も緩やかな弧を描いている。地文はR L単節縄文の縦位施文である。内面には炭化物が付着している。底部には磨耗は認められない。底部外面には網代痕があるが調整によってほとんど消されている。

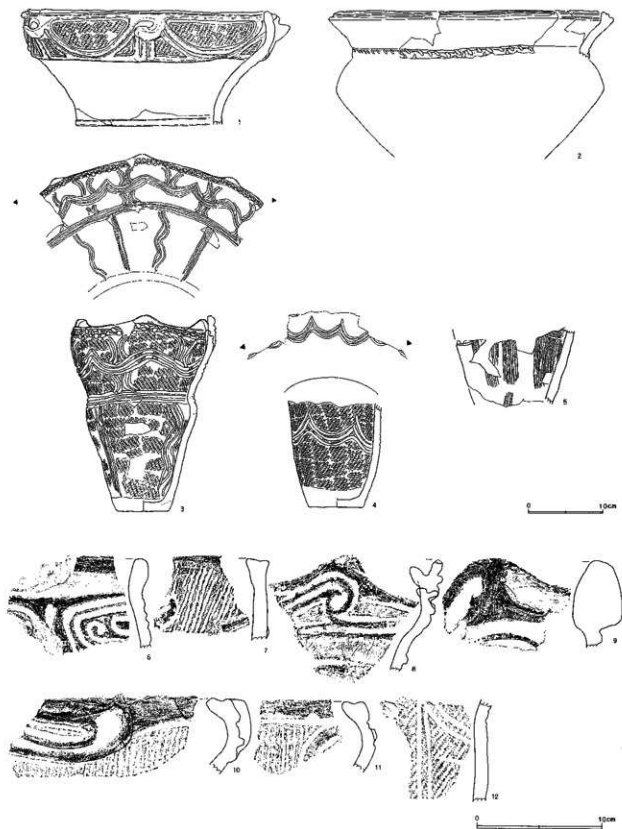
5は胴部みの破片。櫛歯状工具による条痕文の上に、ごく細い沈線と、波状文が描かれている。施文は器面の乾燥が進んでから行われている。

6は深鉢で、口縁部文様帯には区画内に沈線文によって渦巻が描かれている。7は文様帯の構成が明らかではない。L撚りの捻糸文の上に隆帯が貼付されている。8はキャリパー形の深鉢で、2条1組の隆帯による文様が描かれているが、全体の構成は明らかではない。10はR撚り捻糸文の上に2条1組の隆帯によって意匠を展開するもの。12は深鉢の胴部で、懸垂文の間に何らかの文様が描かれるもの。地文はR L単節縄文の縦位施文である。

第9号住居跡出土土器(第141図)

台付土器が組成に加わっていることが特徴といえる。第141図1は炉体土器である。キャリパー形深鉢の胴部と口縁部の破片のみが残存している。口縁部が緩やかに内湾し、胴部に括れを持つ。口縁部文様の復元にはやや不明な点があるが、胴部破片に残る意匠等から、展開図のように復元した。磨消縄文を伴う波状の構成に円形の意匠が配されるものと考えられる。胴部以下には縦長の弧線が施文され、内部に磨消を持つ。沈線は重ね引きによって施文される。地文はR L単節縄文が横位、縦位に施されている。縄文は基本的には沈線文以前に施文されているが、立面図中央の円形意

第140图 第8号住居跡出土土器



匠の左上部は沈線後に縄文が施文されている。

2は埋裏で、口縁部の一部と胴部下半が残存している。口縁部が緩やかに内湾するキャリバー形深鉢で、胴部上半には櫛歯状工具による条痕文、下半にはLR単節縄文が斜位に施文されている。底部はわずかに張り出しを持つ。内面調整は横方向のケズリで、ミガキ等は認められない。

3は底部破片、4、5は台部である。底部はわずかに張り出すような形態を持つ。3の地文はLR単節縄文である。4はLR無節の地文を持つ。括れ部外面は強くなでつけられている。4、5とも、台部の端面は使用による磨耗が認められる。

6は波状口縁の深鉢で、弧状のモチーフが磨消縄文とともに描かれている。7はキャリバー形深鉢の口縁部で、口唇部直下に無文帯がある。9は浅鉢の可能性がある。12は薄手の個体で、地文は櫛歯状工具による条痕文である。

第10号住居跡出土土器 (第142図1~9)

第142図1、2は住居跡中央部に掘り込まれた土壇の内部から検出されたものである。1は口唇部一端に山形の突起を有する小形の深鉢で、底部が欠損している。胴部の下半がわずかに膨らむため、胴部の下部に屈曲を有する器形であったと考えられる。口唇部端面に1条の沈線が施されているが、端面にミガキが施される際に部分的につぶれている。口唇部の外面には粘土帯が貼付され、張り出している。この張り出しは、山形の突起下で張り合わされている。口唇直下には1条の沈線があり、さらにその下位に鋸歯状の沈線文が施される。沈線の切り合いから、山形突起の部分が起点とみられる。体部には櫛歯状工具による条痕文が縦位に施文される。内面にはミガキ調整が施されているが、径が1cm以下の円形の剥落が多数認められる。

2は全体の一部のみに残存しているため、器形や装飾について不明な部分が多いが、小形の深鉢であろう。地文はR燃りの燃糸文である。

3は深鉢で、山形の突起を有する。突起下には縦位の2条1組の隆帯があり、その両方の隆帯とも上面に

刻み目列を有する。地文はRL単節縄文の縦位施文。口縁部内面にも隆帯が貼付されている。4も口縁部の突起下に縦位隆帯があり、その上面に刻み目がある。口縁部には無文帯が画されている。無文帯下位の区画は刺突列が施される。櫛形文系と関連を有する深鉢であろう。8はキャリバー形深鉢で、口縁部文様帯には2条1組の隆帯で矩形の区画が描かれている。地文はL燃りの燃糸文である。隆帯の交点にはボタン状の突起が貼付されている。大木式系との関連を伺わせるものである。

第11号住居跡出土土器 (第142図10~16)

第142図10は器台の破片である。貫通孔がある。無文で、台の端面には磨耗痕が認められる。11は口縁部突起のみの破片で、内外面ともに渦巻文が施文されているが、刻み目を持つ隆帯と沈線文の施文位置が内面と外面で対照的になっている。12は小形深鉢で、口縁部に無文帯が画される。ごく細い縦位沈線で器面が分割されているが、意匠の構成は不明。地文はR燃りの燃糸文である。

第12号住居跡出土土器 (第142図17~24)

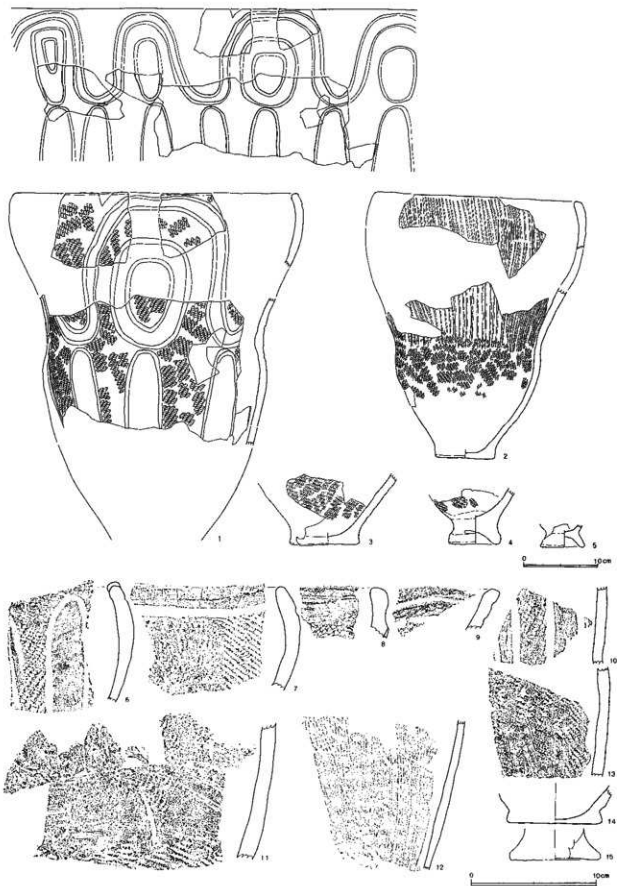
第142図17は無文の鉢形土器。頸部がわずかに外反しながら直立する。口唇部端面は内側が丸みを持ち、外側ではわずかに稜を持つ。18は直線的に外傾する口縁部を持つ個体。口縁部には櫛歯状工具による小単位の弧状のモチーフが連続して縦位に施文されている。頸部に括れを持ち、この括れに隆帯と沈線が施文される。色調は赤褐色で、やや薄手である。

19~24は同一個体。炉体土器である。連弧文系の変種であろう。器形はおそらく頸部がわずかに括れるもので、横位にいくつか分帯されるものと思われる。19は口縁部で平行沈線と鋸歯文が施される。20、21から、波状沈線と渦巻文が組み合うものと推測される。地文はRL単節縄文が縦位に施文されている。沈線の内部はナデによって整えられている。

第13号住居跡出土土器 (第143図~第149図)

本住居跡からはきわめて多くの遺物が検出された。第143図1、2は直立する口縁部を有する深鉢で、頸部

第141图 第9号住居跡出土土器



がキャリパー状に膨らむもの。1は口縁部に眼鏡状の橋状突起を有する。突起の上端両側で、口唇部がわずかに波状となる。頸部の文様帯は下端が刻み目列が施されて隆帯で画されている。頸部文様の基本的な構成は、左下がりの隆帯と渦巻文の組み合わせによるが、渦巻文の描き方、区画内の文様要素のあり方にそれぞれわずかの差異がある。単位も橋状突起下で、他と異なるとられ方がされている。隆帯状には例外なく刻み目列が施されるが、その列が部分的に2列になっている。隆帯の両端は沈線処理されているが、1ヶ所押し引き文が用いられている（展開図右端の渦巻文下部）。この単位では沈線による充填も行われており、やや異色な構成となる。渦巻文の中心は円形突起、円形刺突、沈線による渦巻文の差異がある。地文はR燃りの燃糸文。

2は第145図1~4、7と同様、住居跡覆土内の掘り込みと考えられる部分から集中して検出されたものである。頸部にはS字文が隆帯によって5単位連続して施文され、その間を2条の弧状隆帯で接続する。S字状隆帯の上面は2列の三角押し引き文が施される。押し引きの方向はS字の変曲点で変わるが、これはどの単位でも同様の傾向を持っている。頸部文様帯の上端区画は2条の三角押し引き文、下端は1条の隆帯で画される。地文はR L単節縄文が斜位に施文されたもの。

第144図はキャリパー形に近い器形をとるもの。1は1単位の大形眼鏡状突起を口縁部に有する。口唇部端面は内削ぎ状を呈する。胴部はやや張っている。口縁部には2条1組の隆帯によって、S字文風のモチーフが描かれている。2条の隆帯間には平坦面が作り出されていることが特徴的である。胴部には沈線によって鋸歯状文が描かれ、この末端が垂下し、胴部を縦位に分割しているようであるが、詳細は明らかではない。地文はL燃りの燃糸文。

2はおそらく4単位の突起を持つ深鉢である。わずかに内湾しながら開口縁部を持つ。口唇部端面は内面に向かって肥厚している。口縁部文様帯には無文地上に隆帯で蛇行状のモチーフ、渦巻文等が描かれて

いるが、全体の構成は明らかではない。突起下には渦巻文が位置するようである。蛇行文は1条の隆帯による。胴部には3条1組の蛇行状態垂文と1条の垂線が施文されている。胴部の地文はR L単節縄文で、縦位施文である。

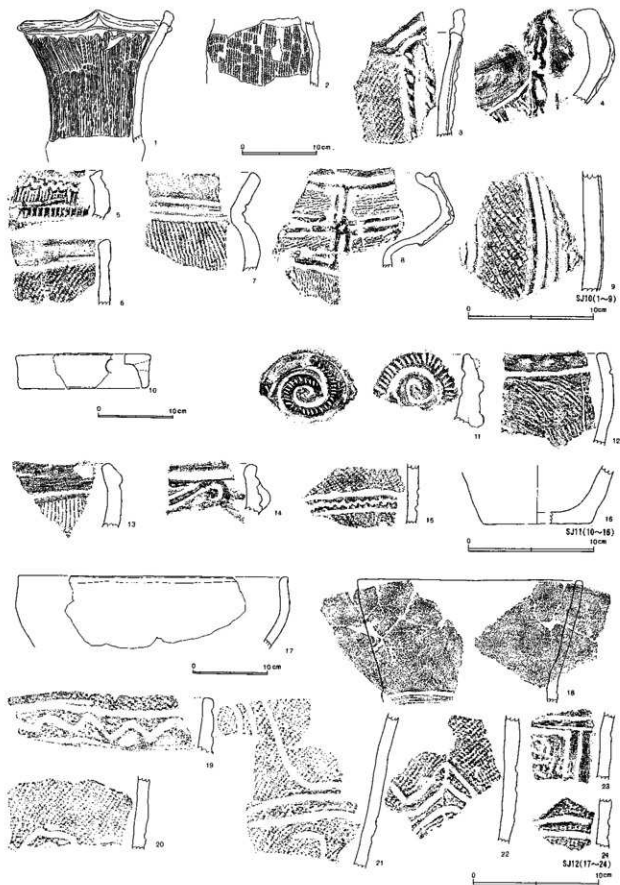
3もおそらく4単位の突起を持つ深鉢で、長い胴部が特徴的である。口唇部端面上には沈線が施されている。突起下は隆帯で区画され、三角形の無文部が作り出されている。口縁部文様帯には隆帯で渦巻文その他の文様が描かれているが、欠損のため、不明な点が多い。突起の下部で渦巻をとるようである。文様帯の下端は2または3条の沈線で区画されるが、胴部にはL燃りの燃糸文による地文が施文されるのみである。内面の胴部下半に炭化物の付着が認められる。

4は口縁部が強く内湾する深鉢で、口縁部文様帯には2条1組の隆帯によって渦巻文とそれをつなぐモチーフが描かれている。隆帯は背が低く、幅も狭い。文様帯の下端は2条の隆帯で画される。地文はR L単節縄文の縦位施文である。

5は欠損が多く、詳細は不明だが、口縁部に1単位以上の突起を有する。口唇部内面に肥厚帯を持つ。突起には渦巻文が施される。口縁部文様帯には2条1組の隆帯によるクランク文が描かれる。地は縦位、斜位の沈線列で充填される。胴部には3条1組の沈線文が垂下する。地文はR L単節縄文である。

第145図1~4、7は第143図2とともに覆土内の掘り込みと考えられる部分からまとまって検出されたものである。第145図1は円筒形の小形深鉢で、ごくわずかの欠損があるのみで、ほぼ完形に近い。1単位の非対称の把手が口唇部から直立する。把手の基部には貫通孔がかけられる。口唇部は内面にわずかに肥厚する。底部から口唇部にかけてごくわずかに内湾しながら外傾する。文様帯は胴部の中央に位置し、文様帯の上位に1条の沈線が施文される。文様帯の下位は無文で、粗いミガキによって調整されている。底部には磨耗はみられない。内面胴部下半に炭化物の付着痕がある。文様は沈線、押し引き文で構成され、1ヶ所にL R単

第142图 第10·11·12号住居跡出土土器



節繩文が施文されている(展開図右寄り)。文様帯を縦位に区画する単位は、あまりはっきりとはしていない。展開図矢印部分のみが「下向き」の「コ」の字状の区画とその左側の縦位・横位の沈線の組み合わせという、他と異なる構成を持っている。いわゆる副文様帯的な位置づけを持つものと思われる。その他の部分は基本的には縦位の構成と斜位の構成が組み合わせるので、三叉文が部分的に組み込まれ、押し引き文と短沈線で充填されている。上端の区画はほぼ1条の沈線でなされているのに対し、下端の区画線は、文様帯内部に展開する意匠文の一部が重なりながら構成している。

2は台付鉢の台部が欠損しているもの。台部以外はほとんど完形に近い状態で検出された。口唇部はわずかに外屈する。体部はわずかに屈曲を持ち、底部に至る。頸部は無文で、体部上半に文様帯が位置する。地文はL撚り0段の撚糸文で、胴部下半のみに施文される。文様は1本引きの沈線で描かれ、部分的に押し引き文が用いられる。縦位の単位が横位に連続して文様が構成されているが、その単位は部分的に明確でないところがある。比較的小きな単位が連続するといえよう。各単位は、鋸歯文と三叉文、沈線列等で構成されている。展開図の中央付近の単位のみ、押し引き文で、三角形のモチーフが描かれている。文様帯上端は1条の沈線で画される。下端の区画線は第145図1と同様、文様帯内部に展開する意匠文の一部と連結するものか横位に重なることで構成され、見かけ上、2条の沈線で画されるようになっている。展開図の右から2番目の単位中央にある鍵の手状モチーフの末端が文様帯下端で屈曲し、大きく下端を巡る。その屈曲部と、下端における末端とを、わずかに右下がりの線が結ぶ。そしてその上下に同じく右下がりの沈線が充填されることで、下端の区画が完成している。

第145図1と2は文様帯内における分割の手法、意匠構成の手法等が非常に似通っており、製作から廃棄に至るまで、きわめて関連性の強い関係にあった個体と考えられる。

3は小形の鉢形土器で、口縁部が欠損している。ま

た、肩部に凹形の剝落痕があり、把手(橋状か?)等が欠落したものと思われる。残存部上端には文様帯下端の区画が残っている。矢羽状の短沈線が横位に連続している。ここからわずかに段差を介して胴部に至る。胴部にはL撚りの撚糸文がきわめて密に施文されている。底部には使用による磨耗痕が認められる。

4は口縁部が欠損した小形の鉢形土器である。文様帯下端の隆帯(上面に刻み目を持つ)がわずかに観察されるが、詳細は明らかではない。地文はL撚りの撚糸文。底部付近は磨り消されている。内面に器面調整に伴う粘土層が多数付着している。

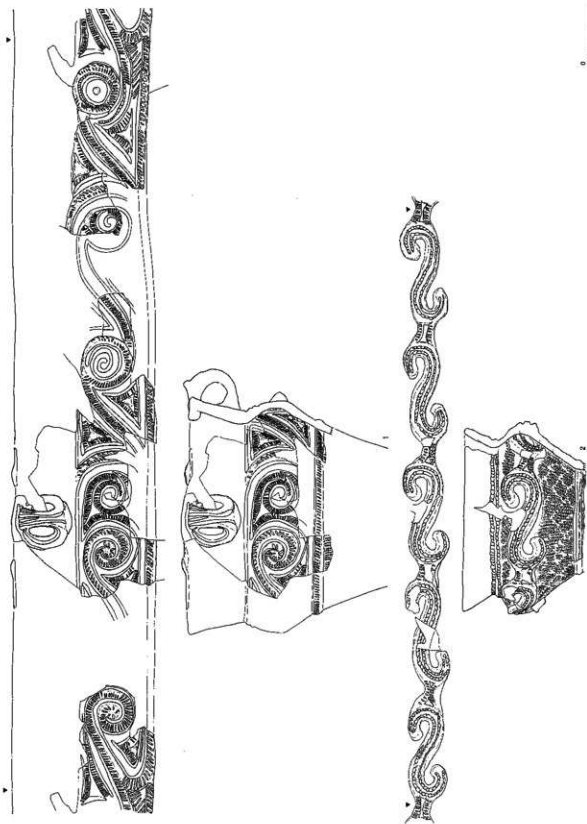
5、6は小形の鉢形土器である。5はほぼ完形で、コップ形を呈するもの。口唇部がわずかに外屈する。櫛歯状工具による条痕文が縦位に施文される。口縁部と底部付近は無文のまま残される。底部には磨耗痕は認められない。6は口唇部外面に隆帯が1条貼付され、隆帯上には指頭玉痕が連続して施される。胴部は外反し、底部に至るようである。地文はL撚りの撚糸文である。成形は不良。

7は1、2とともに検出されたもので、やや大形の浅鉢である。口縁部が内屈する。内面に肥厚帯を有する。頸部付近に幅広で平坦な隆帯による文様を描かれる。S字文、渦巻文の一部が認められるが、不明な点が多い。底部外面に使用による磨耗痕が認められる。

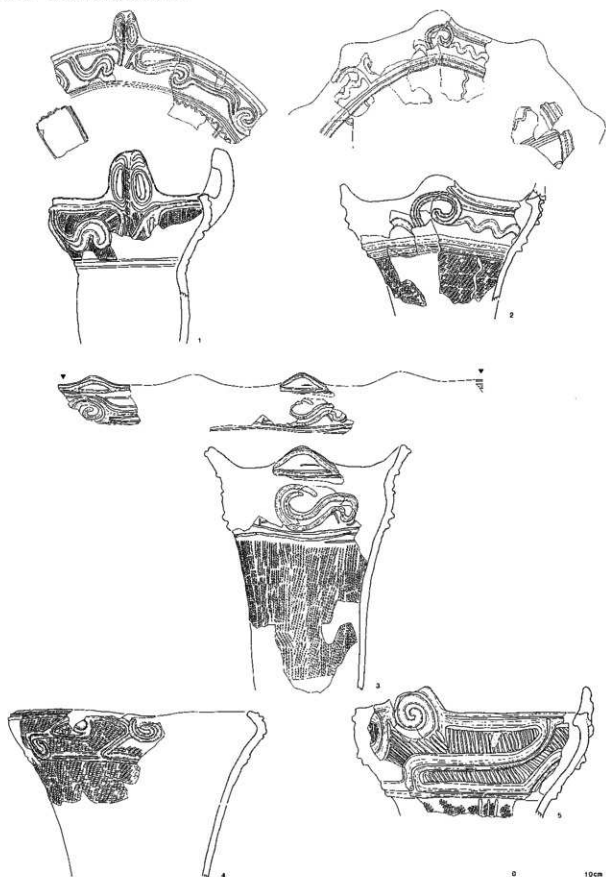
8も浅鉢で、口縁部付近のみ残っている個体である。口縁部は外傾し、頸部に屈曲を持つ。胴部中央、最大形の位置が強く屈曲する。口唇部突起を有する。口唇部上面には、2条の沈線が施され、口唇部突起の縁で連結している。沈線は口唇部突起の間をつなぐように描かれていたと思われる。

第146図1はやや大形の深鉢。口縁部と底部は欠損している。文様帯下端の2条隆帯と意匠の一部が残っているが、詳細は不明である。意匠を構成する隆帯上には沈線が施され、部分的に小単位の蛇行文が変形した交互刺突が認められる。地文はL撚りの撚糸文で、斜位に施文される。胴部には区画隆帯から2条1組の隆帯垂下が認められるが(展開図両端)、どのような意

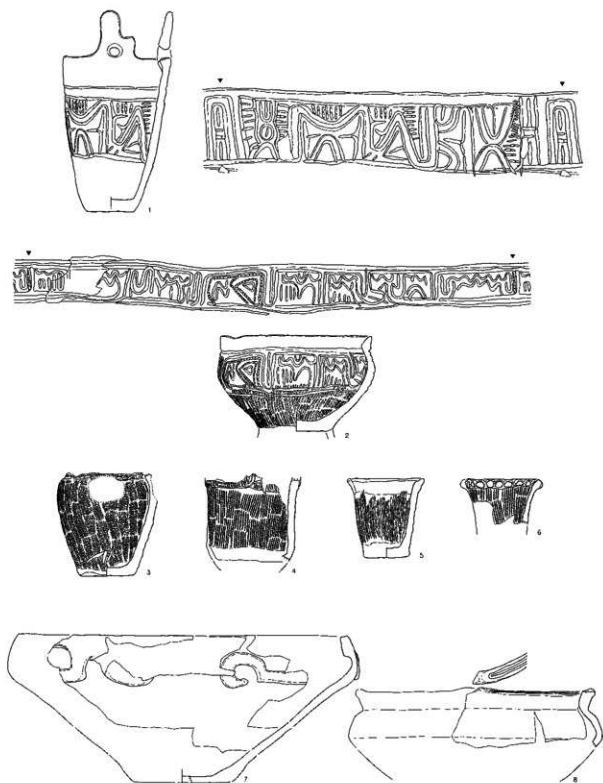
第143图 第13号住居跡出土土器(1)



第144図 第13号住居跡出土土器(2)

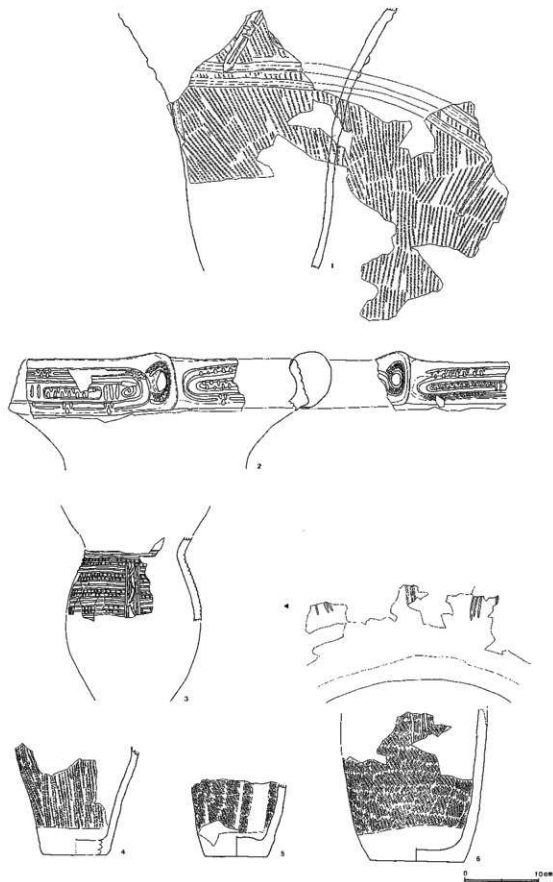


第145图 第13号住居跡出土土器(3)

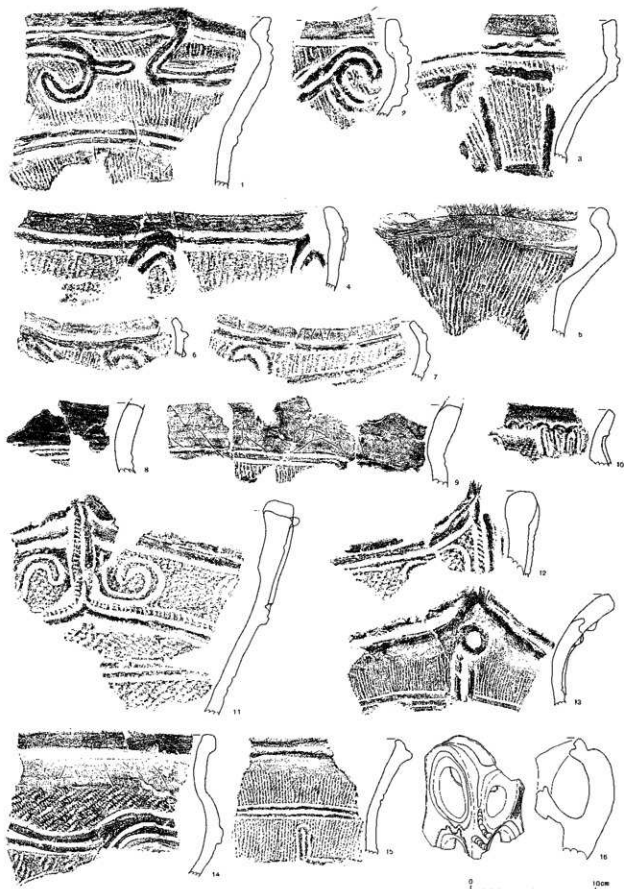


0 10cm

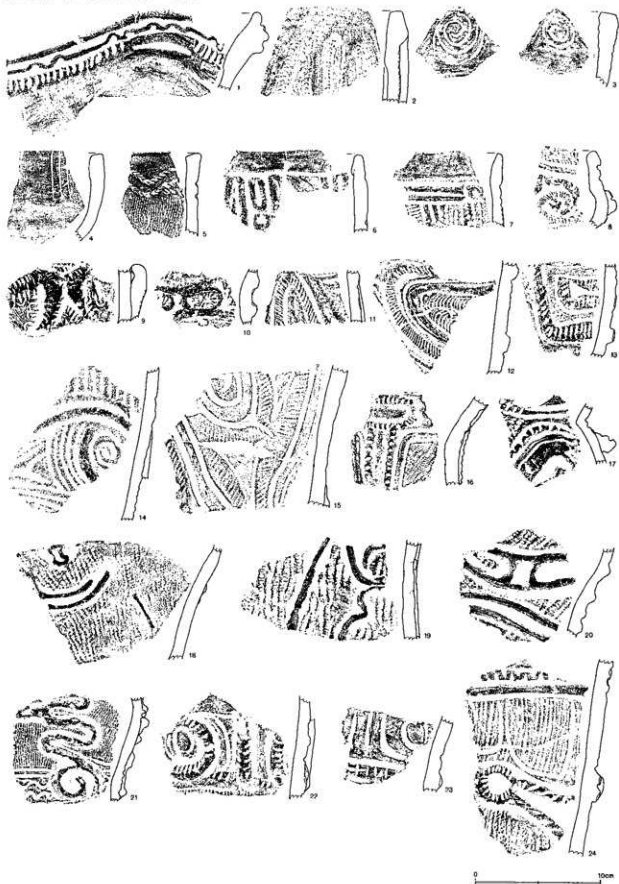
第146図 第13号住居跡出土土器(4)



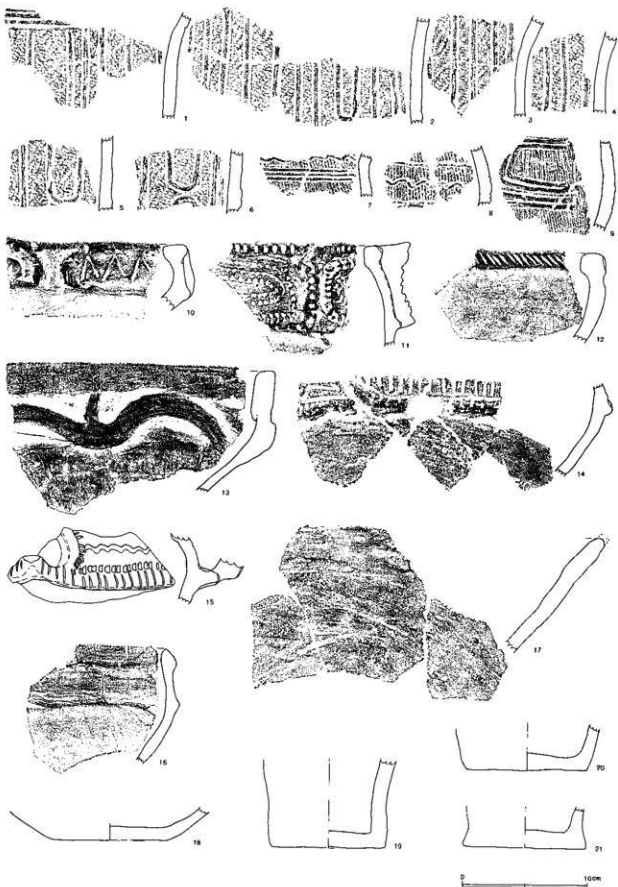
第147图 第13号住居跡出土土器(5)



第148图 第13号住居跡出土土器(6)



第149图 第13号住居跡出土土器(7)



匠を取るのかは不明である。

2は口縁部のみ破片。深鉢と考えられる。おそらく4単位と思われる耳状の突起が付く。この突起上左側には重圏文と円形の窪みに加えられる。突起間に横長の楕円形モチーフが配される。このモチーフは大きく3条の沈線によって重圏文的に描かれ、沈線間に部分的ではあるが、器面に対し斜め上下方から交互刺突が加えられる。文様帯の上下端には短沈線によって、部分的に交互刺突風の装飾が施される。沈線と交互刺突の施工工具は、直径2mmほどの円形竹管である。

3はおそらく曾利系との関連の強い鉢形土器で、外傾する口縁部が付されていたものと思われる。胴部は断面が鋭角の沈線が横位に重ねられ、2条おきにへら状工具による刻み目に加えられる。縦位の区画が1単位観察されるが、おそらく4単位であったと思われる。この縦位の区画は鋸歯状の隆帯とその両側の細い隆帯によって構成されている。中央の鋸歯状隆帯は、直線的な隆帯が貼付された後にへら状工具により、左右斜位に切れ、鋸歯が作られるという、特異な手法に因っている。

4～6は底部破片である。6は3条1組の懸垂文下端が確認できる。地文はRL単節縄文の横位施文である。擬口縁が観察された資料である。

第147図1～7はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、5以外は口縁部文様帯を有する。1, 2は口唇部がわずかに外屈するもので、両者とも2条1組の隆帯によって単位文が描かれている。地文は1がR撚り、2がL撚りの撚糸文である。3は口唇部直下に隆帯による鋸歯文が巡る。体部上半に比較的幅広い隆帯による文様帯が描かれる。6, 7は同一個体。1, 2と同様、2条1組の隆帯によって、渦巻状のモチーフが描かれる。11, 12は同一個体。波状口縁で、口縁部は肥厚している。波頂部から隆帯が垂下し、意匠文と連結する。隆帯のうち1条に刻みに加えられる。13も波状口縁で、口縁部は強く外反する。波頂部から隆帯が垂下する。波頂部付近にボタン状突起が貼付される。地文はL撚り撚糸文。14は頸部が張る深鉢で、最大径の位

置に2条1組の隆帯によって、文様帯が描かれる。口縁部に肥厚帯が巡る。

第148図1は大波状口縁の深鉢で、口唇部端面に蛇行状隆帯が施される。2は阿玉台系の突起。3は小形の深鉢で、波状口縁のもの。波頂部の内外面に渦巻文を持つ。4は小形の鉢で、口縁部に縦位の沈線文を持つ。この沈線は断続的に施されるようである。5は小形の深鉢。地文はR撚りの撚糸文。口縁部に押し引き文によって、波状文が施される。6, 7は小形の円筒形深鉢で、パネル文的な構成を持つもの。11～13, 15, 22～24はやや大形の深鉢で、刻み目列が施された隆帯によって、基本的な文様帯が描かれるものである。11, 12は区画の構成が整っているが、他はやや崩れがみられる。24は円文を中心に隆帯がのびる。胴部文様帯の上端には交互刺突による小単位の鋸歯文が1条巡っている。16は胴部がすぼまる深鉢で、楕円文から、縦位に垂下する隆帯によって胴部が分割されている。18～21は地文上に隆帯が貼付され、文様帯展開するもの。21は渦巻文から、蛇行する隆帯が上方にのびる。

第149図1～6は同一個体。おそらくキャリパー形深鉢の胴部破片で、竹管文によって縦位の構成と、上下に向き合う縦長の弧状モチーフが連続して描かれている。地文はRL単節縄文の縦位施文。7, 8も同一個体で、ごく細い竹管による鋸歯文等が横位に巡っている。地文はL撚りの撚糸文。9も竹管によって、文様帯が描かれている。

10～16は鉢または浅鉢である。10は口縁部が直立し、口唇部は肥厚する。口縁部に楕円形の区画がなされ、その内部に鋸歯文が描かれている。11も文様帯の区画取りは10と同様であるが、口唇部、隆帯上に刻み目が施される。13は口唇部内面に板状の肥厚帯が貼付され、外面に幅広い隆帯による曲線文が描かれる。17は擬口縁を有する大形の破片。

第14号住居跡出土土器（第150図～第152図）

第150図1はキャリパー形深鉢で、頸部無文帯下端以下が欠損している。口縁部文様帯には隆帯による小さな渦巻文が4単位、口唇部から下向きに施され、そ

の渦巻をつなぐように、2条1組の隆帯による弧文が貼付される。この弧文の下端は、文様帯区画隆帯に接するため、弧文の下位にも区画ができることになる。文様帯下端はごく低い隆帯によって区画される。口縁部文様帯の地文はRL単節縄文の横位施文であるが、口唇部に近い部分はナデによって消されている。

2は胴部がすぼまり、頸部が外反するやや小形の深鉢。完形に近い資料である。口縁部には4単位の突起が付くが、このうち2単位が現存している。大きめの箱状突起と、やや小めの耳状の突起が交互に付くものと思われる。箱状突起には貫通孔が開けられる。各突起下には橋状把手が、文様帯の下端にかけて付される。口縁部文様帯は楕円文による区画が連続するもので、下端は2条の隆帯で画される。この隆帯間の沈線末端は蕨手状の渦巻文となる。胴部文様帯は縦位に3単位に分割される。中央に渦巻文を有する区画が2単位、2条の隆帯で縦位区画を連結するものが1単位という構成である。渦巻文の下端から垂下する隆帯は単位ごとに本数が異なっている。地文はRL単節縄文の縦位施文。底部外面に磨耗痕は認められない。胴部下内面には炭化物の付着が認められる。

3も箱状把手を有する深鉢である。把手の橋状部分には蕨手状の沈線文が施されている。また、把手の左面には貫通孔の周囲に沈線が施文される。口縁部文様帯には楕円区画が配されるが、区画を構成する隆帯、上端区画隆帯上にも蕨手状の沈線文が施される。楕円区画内には沈線列が充填される。沈線の施文工具は円形竹管である。

4は口縁部がやや外反するもので、頸部に屈曲を持つ深鉢。口縁部には上向きの弧文が隆帯によって施される。隆帯上には刻み目が加えられる。頸部は素文帯的な構成となり、胴部との境界に3条の沈線が巡る。地文はr燃りの燃糸文。沈線の工具は半截竹管である。

5は浅鉢で、口縁部が外反するもの。頸部の括れは浅い沈線状になる。この個体は、第16号住居跡出土の破片が1点接合したことが注目される。6は鉢で、頸部は無文。口唇部は肥厚する。頸部下端に交互刺突文

が1条巡る。この交互刺突文が部分的に切れる箇所があり、胴部の文様展開と関連すると思われる。

第151図1~4は勝坂式終末から中鉢式系統の手法を受け継ぐもの。刻み日隆帯や沈線文による充填等がみられる。5は渦巻文と沈線列が組み合うもの。6も同様だが、三角形の区画が交互に配されることが特徴的である。

8~18、20は加曾利E式系キャリバー形深鉢口縁部である。いずれも2条1組の隆帯によって文様が描かれる。9の地文はL燃りの燃糸文。10は糸痕文である。20の構成は第150図2と類似している。19は大波状口縁の深鉢で、口唇部に装飾を持つ。

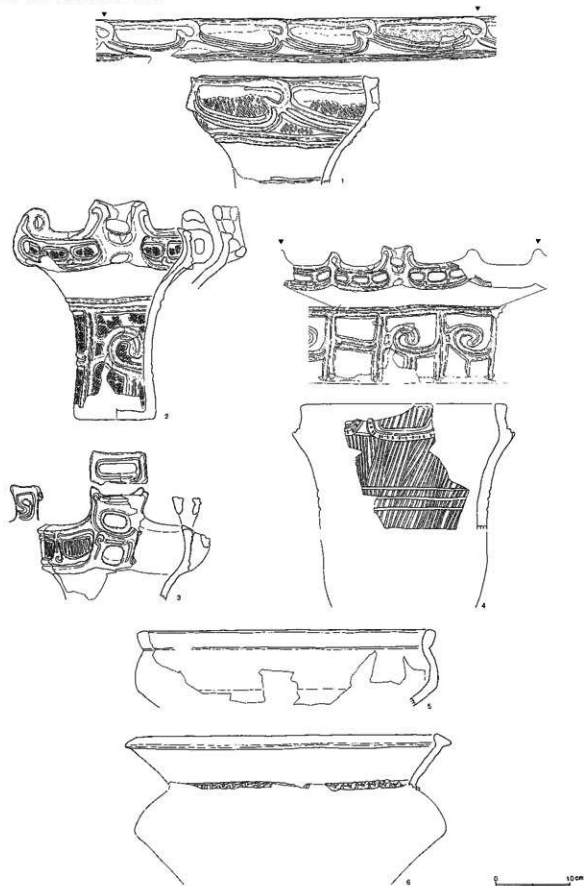
第152図1~3は浅鉢。1は結節沈線によって弧状のモチーフが描かれる。3は擬口縁を有するもので、幅広の隆帯によって渦巻文等が描かれている。4~6は口縁部に無文帯を有する深鉢。6には、区画の内部に矢羽状沈線が充填される。7~9は粗製の深鉢である。10~15は深鉢の胴部破片。10は頸部素文帯の部分で、鋸歯状沈線がみられる。

17~21は同一個体。深鉢の胴部で、RL単節縄文施文後、櫛歯状工具による糸痕が施される。

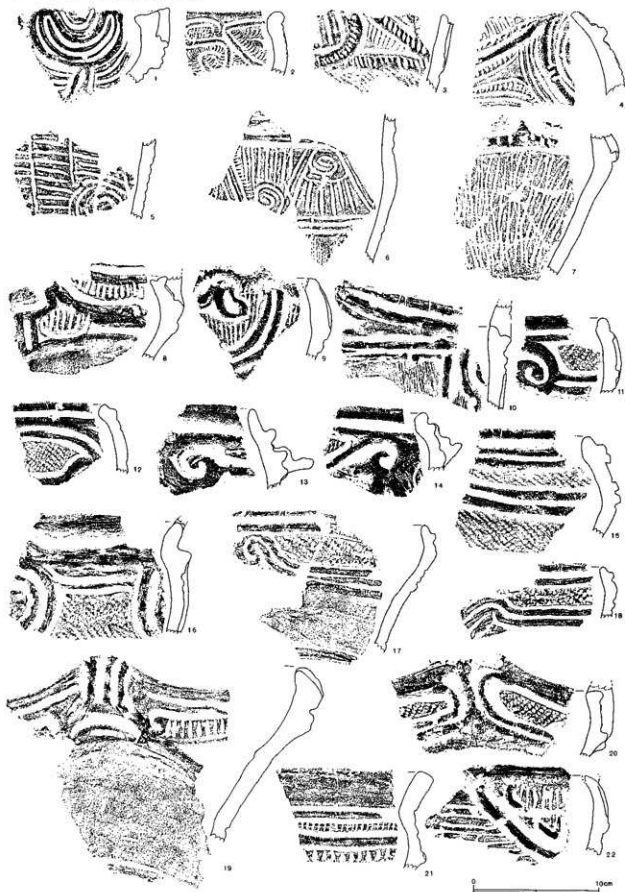
第15号住居跡出土土器 (第153図~第155図)

第153図1は炉体土器。キャリバー形土器の頸部以下が欠損している。口縁部に4単位の突起が付くが、2単位のみ現存している。突起は貫通孔を有する耳状のもので、斜位に傾く。文様帯下端にかけて橋状把手が付く。口縁部文様帯は隆帯による区画の内部に、縦位沈線列が充填されるという手法で構成される。この区画は楕円、やや変形した楕円等である。隆帯には部分的にスリット状の沈線がはいり、下端の区画隆帯上面には、片端、または両端が蕨手状渦巻を持つ沈線が施文される。文様帯内の区画隆帯の1つは、勝坂式的な色彩を持つ蛇行状の隆帯である。この隆帯は幅広、平坦なものである。また、展開図左側の楕円区画の構成も、勝坂式からの系譜を色濃く残すものである。地文はL燃りの燃糸文である。胴部には縦位の隆帯がわずかに認められ、その間隔から、胴部には渦巻文と懸

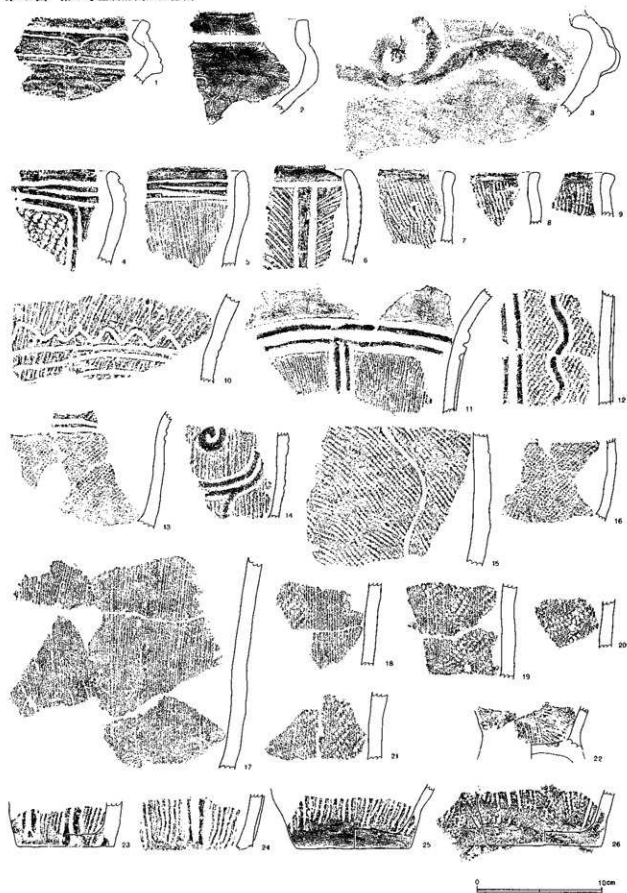
第150図 第14号住居跡出土土器(1)



第151图 第14号住居跡出土土器(2)



第152図 第14号住居跡出土土器(3)



垂文が施文されていたものと考えられる。

第154図1～5はキャリバー形深鉢口縁部である。

1, 2は渦巻文が文様帯幅全体に及ぶもの。5は小区画が渦巻文でなされ、区画内部に刺突が施される。6は口縁部に刺突を持つ隆帯が巡るもので、頸部は弧線が充填される。7, 8は大波状口縁の深鉢、7には、幅の狭い文様帯があり、縦位の短沈線が充填される。11, 12は口縁部が無文帯となる平縁深鉢。14は鉢、または深鉢の肩部文様帯の部分。交互刺突、刻み目を持つ隆帯で区画され、内部に渦巻文等が施文される。15は深鉢の頸部素文帯で、鋸歯文と平行沈線が組み合うもの。20は曾利系の土器で、肩に粘土紐貼付による格子目状のモチーフが描かれる。第155図1～5は深鉢の胴部破片。6, 7は鉢形土器で、7の口唇部には交互刺突風の施文がされる。

第16号住居跡出土土器（第156図～第168図）

本住居跡からはきわめて多量の遺物が検出された。

第156図1は炉体土器である。4単位の口縁部突起を有する。突起はすべて欠損している。口縁部は短く直立し、頸部は長く直線的に外傾する。口縁部文様帯は幅が狭い。口縁部の形状に合わせて4単位に大きく分割され、さらに8単位に細分されている。上端には2条の隆帯が貼付されるが、展開図下端付近の区画では、この2条隆帯間の間隔が広がり、しかも末端が鍵の手状に屈曲して、クランク文風の区画を作り出している。波頂部の下位に当たる区画は、互いに変異を持ち、立面図正面の区画では、渦巻文が描かれている。波底部に当たる区画では、隆帯が耳状に張り出している。区画の内部は櫛歯状工具による条痕で充填される。条痕の走る方向は様々で、区画に沿うもの、縦位に連続するもの等がある。頸部には無文地上に隆帯が垂下している。口縁部文様帯の各区画の下端から垂下し、頸部下端の隆帯上に乗るような形で貼付されている。いずれもわずかに蛇行するが、展開図左端から2条めの隆帯のみ、中央で屈曲する。下端の末端はいずれも小さく屈曲し、頸部下端の隆帯と接続している。この頸部下端の隆帯は、加曾利E式系に通常みられるものに比

べ、幅が広く、平坦で、異質な印象を与える。頸部の無文地は、軟質工具によるナゲ調整のみで、これも特異な手法である。また、この無文部には展開図右寄りに図示したように、何らかのヘラ状のものの先端（剥片かチップ?）が回転してきた痕跡がある。胴部の地文はRL単節縄文の縦位施文である。

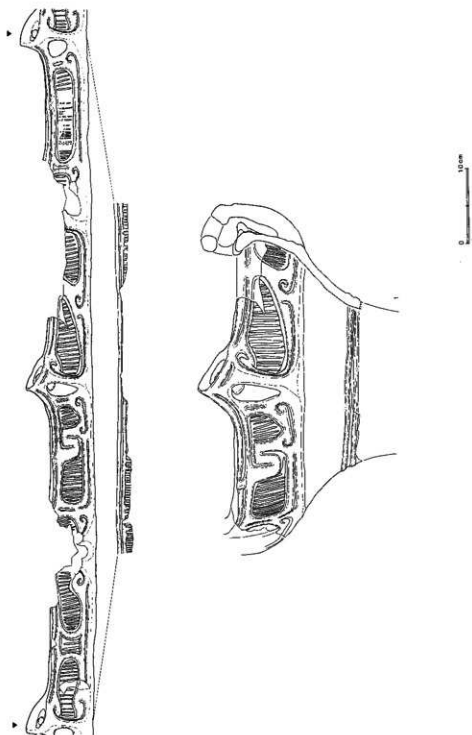
2はキャリバー形深鉢で、胴部下半が欠損している。口縁部には3単位の環状突起と同単位の小突起が付く。小突起の左面には渦巻文が描かれる。口縁部文様帯には小突起を起点としたクランク文が3単位あり、このクランク文は2条1組の隆帯で描かれ、隆帯の脇は沈線処理される。このうち2単位は環状突起から垂下する隆帯と接続するが、1単位は接続せず、当該部分に剣先状の小突起が付く。各クランク文の間には下端区画線より、右上方に向かう剣先状の隆帯が描かれている。地文はRL単節縄文の縦位施文。内面には円形の小刻落が多い。

第157図1～3はいずれもキャリバー形深鉢。1は口縁部に3単位の渦巻文が隆帯で描かれるもの。各渦巻文は独立している。口縁部の渦巻部は外側にやや張り出している。隆帯の断面形状は半円形から、三角形に近く、非常に丁寧に調整され、両脇は沈線処理されている。渦巻文右端の弧状モチーフから、各渦巻文の右側に口縁部突起があったようで、おそらく、環状の構成を持つものであったと考えられる。地文はRL単節縄文の縦位施文。胴部は地文のみである。

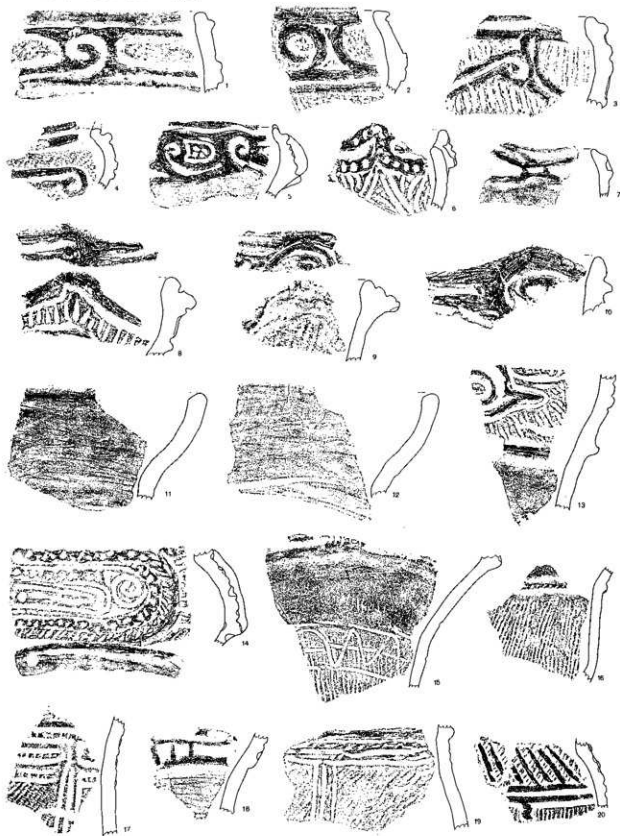
2は4単位の口縁部突起を持つもの。やや簡素な箱状突起と耳状の突起が交互に貼付される。口縁部文様帯はやや幅が広い。モチーフは横S字文と、弧線文が連結するもので、2条1組の隆帯で描かれる。突起下ではこれと連結し、この連結部分は構状となる。文様は上下の区画線と接するため、内部は区画文化化している。地文はL燃りの燃糸文。

3は3単位の突起を持つもの。簡素な箱状突起である。このうち1つは他の2単位よりも大きい2条1組の隆帯によってクランク状、S字状のモチーフが描かれる。各モチーフが上端区画線と接する部分では

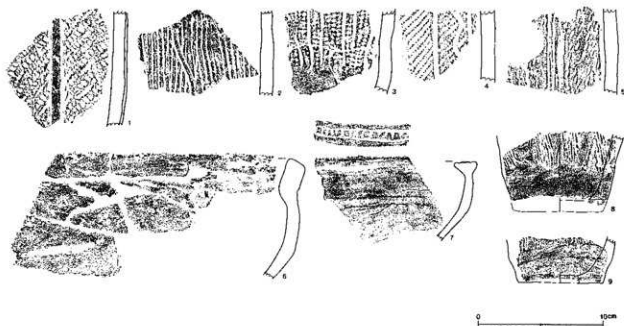
第153図 第15号住居跡出土土器(I)



第154图 第15号住居跡出土土器(2)



第155図 第15号住居跡出土土器(3)



隆帯間の沈線が渦巻文を描く。地文はRL単節縄文。文様帯の区画線は口縁部突起に対応する位置でわずかに山形になっており、口縁部文様との関連性が強い。頭部無文帯があり、下端は3条1組の沈線で画される。胴部には沈線による文様があるが、詳細は不明。

第158図1はキャリパー形深鉢の胴部破片である。胴部は縦位の区画で4単位に分割されている。この区画は2条の隆帯によるが、それぞれ異なる構成を持っている。立面図中央のものは、管列式に多用されるもので、中央に鋸歯状の隆帯が貼付される。その右側のものは矢羽状の刻み目を持ち、左側のものは特に隆帯上に加飾はない。他の1つは2条隆帯の片方だけに刻み目が施される。分帯された内部には2条1組の沈線、隆帯で、田の字状の区画がされるが、詳細は不明である。田の字状の区画をする沈線は断絶する部分があり、大木式系との関連が伺われる。地文はR撚りの燃糸文。頭部無文帯を有する。本個体に属する破片の大部分は住居跡覆土から検出されたが、炉跡掘り方から検出された破片が接合している。炉跡が住居跡使用時のものであるならば、本住居跡使用時には既に破損したもので、住居跡廃絶後にさらに本住居跡に廃棄されたこと

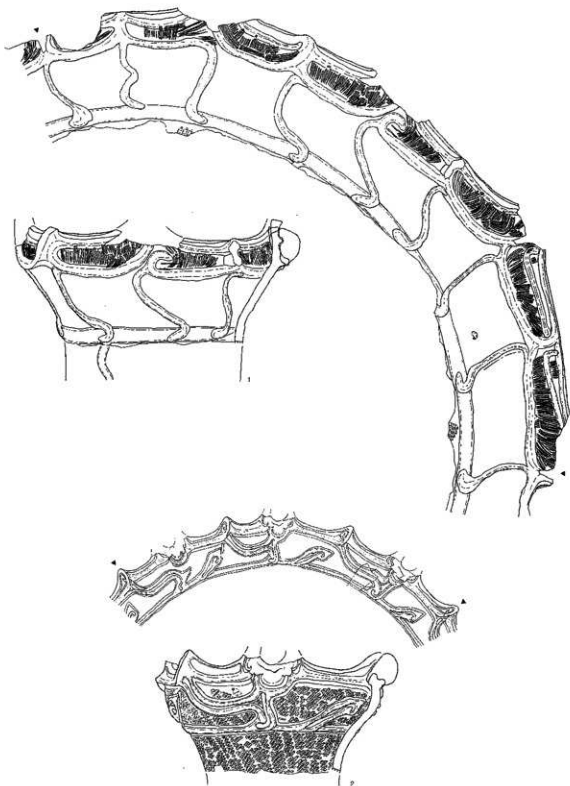
になる。

第159図もキャリパー形深鉢である。1は小形の深鉢で、4単位の口縁部突起を持つもの。1単位が大形で、下部は1条の橋状となり、蕨手状の沈線が施文される。突起下部は眼鏡状となる。この大形の突起には内外面に縦位の沈線列が施される。他は小形で、特に、大形の突起と対向する位置にあるものは、口縁部文様の渦巻文がわずかに突起状となる程度である。割付も大形のを正面に、3単位である。口縁部文様帯は狭小で、1条の隆帯による楕円形の区画が描かれる。隆帯の両脇には半截竹管による沈線がある。頭部無文帯を有する。地文はLR単節縄文の縦位施文である。

2は口縁部文様帯に2条1組の隆帯によるS字文と、それを連結する弧線が描かれるもの。左側のS字文の下端は、やや剣先状となる。頭部無文帯があり、地文はRL単節縄文の縦位施文である。

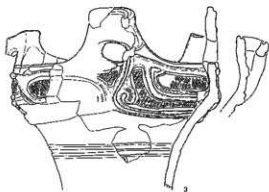
3も小形の深鉢で、1端に橋状の把手があったか剥落している。この突起の基部には渦巻文が描かれている。口縁部文様帯は狭小で、楕円区画が、隆帯と沈線によって描かれている。地文はRL単節縄文の縦位施文。

第156号 第16号住居跡出土土器(1)



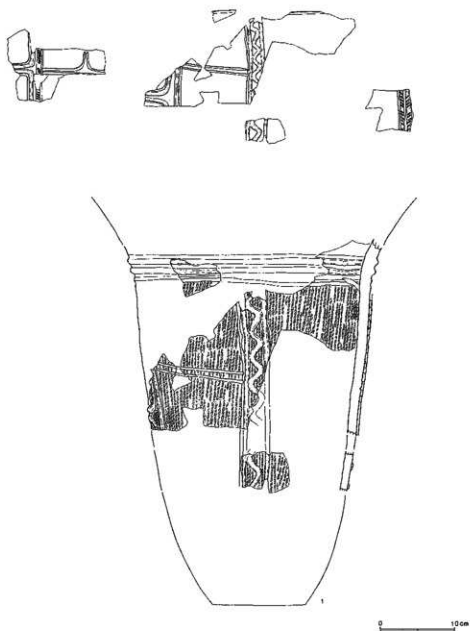
0 10cm

第157図 第16号住居跡出土土器(2)

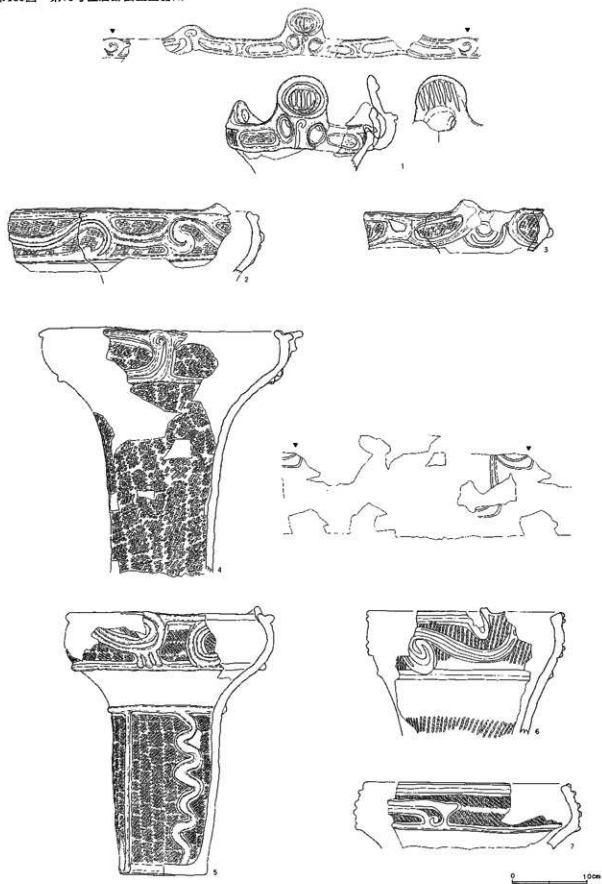


0 10cm

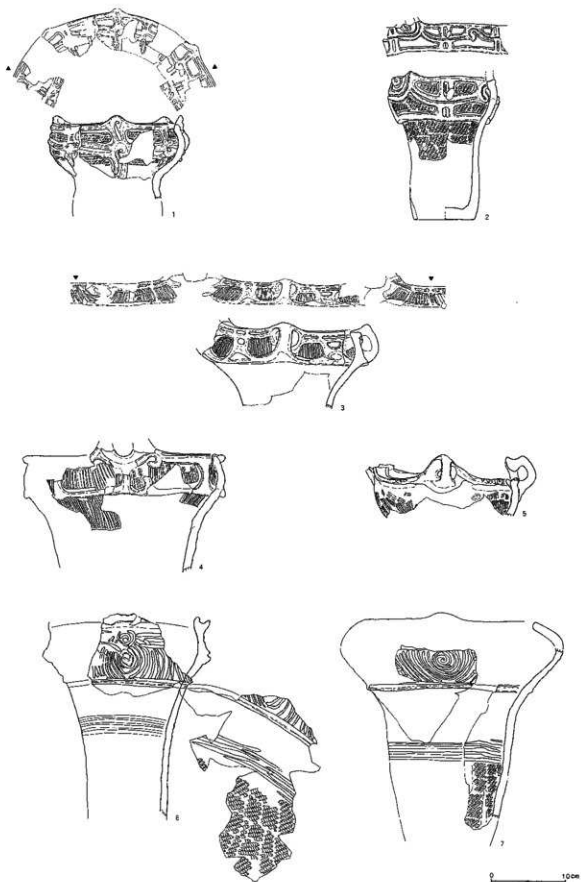
第158图 第16号住居跡出土土器(3)



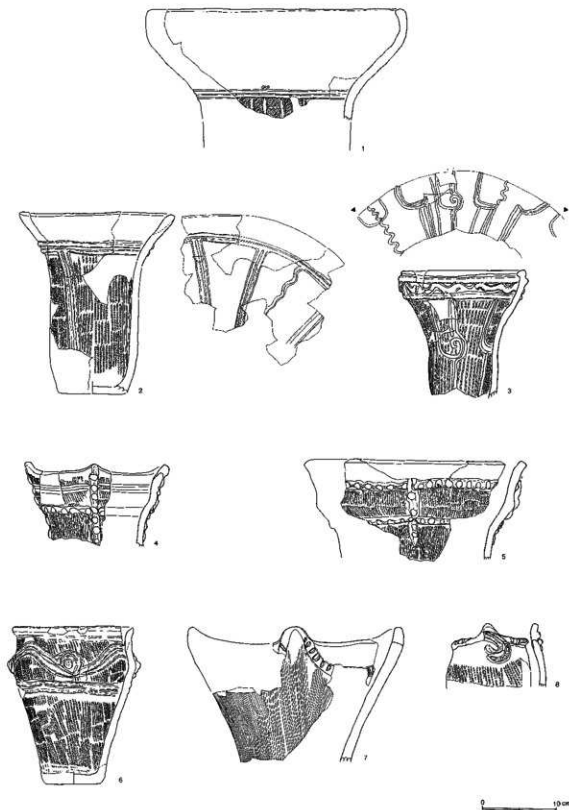
第159図 第16号住居跡出土土器(4)



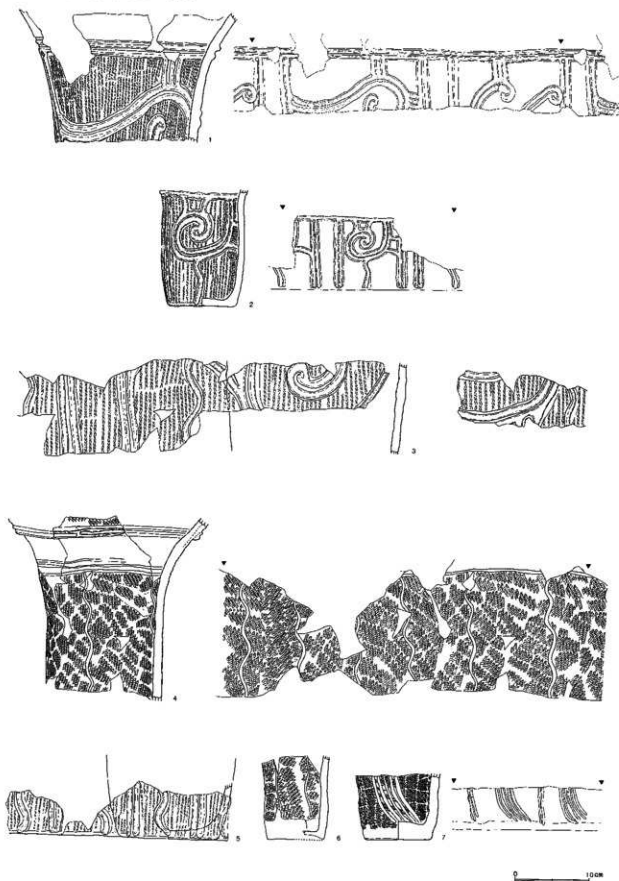
第160图 第16号住居跡出土土器(5)



第161図 第16号住居跡出土土器(6)



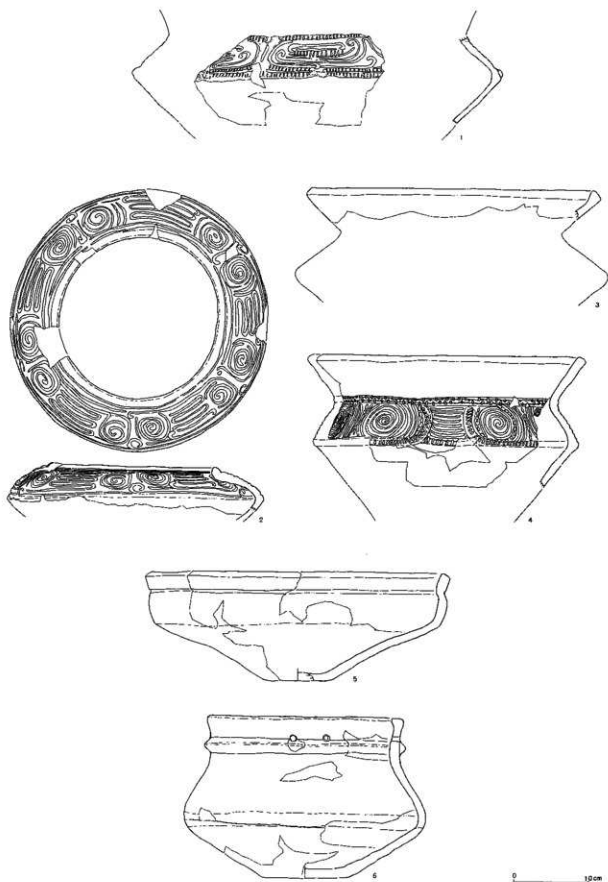
第162图 第16号土层出土土器(7)



第163図 第16号住居跡出土土器(8)



第164图 第16号住居跡出土土器(9)



4は直線的な胴部を持つ深鉢である。口縁部は欠損が多く、文様についての詳細は不明だが、1帯で区画が行われるものようである。胴部は下端近くまでほぼ全周するが、2条1組の沈線による懸垂文が1単位のみ描かれるという、特異なものである。曾利式の胴部文様に近いものかもしれない。地文も特異で、直前段反燃りのRRLがわずかにほどこけたもので、縦位に施文されている。

5は口縁部は欠損が多いが、底部まで現存するもの。口縁部には横S字文的なモチーフが2条1組の隆帯で描かれ、下端区画隆帯との間に付加的な隆帯で連結される。頸部無文帯を有し、胴部には1条隆帯による直線的な垂線と、蛇行状垂線が各3単位ずつ施文される。この懸垂文は胴部下端にまで達し、その結果、胴部は6単位に区画されるようになる。地文はRL単節縄文の縦位施文。

6は口縁部に横S字文が2条1組の隆帯で描かれるもの。地文はL撚りの燃糸文。頸部無文帯を有するが、この無文帯の下端には区画線がない。

7は口縁部下端で屈曲するもので、文様帯には剣先状の突起を伴うクランク状のモチーフが描かれる。地文はRL単節縄文の横位施文で、頸部無文帯を有する。

第160図1～5は小形のキャリパー形深鉢。1は口縁部文様帯の構成がやや特異なもの。口縁部突起は3単位である。口縁部の屈曲部に横S字文的な2条隆帯が一巡し、口唇部との間に縦位の隆帯が貼付される。下位には、2条1組の短い隆帯が垂下する。下端は明確には区画されない。胴部はごく一部のみ現存するが、隆帯と沈線による何らかの意匠が展開する。沈線の施文工具は半截竹管である。胴部は中央で膨らむようである。地文はL撚りの燃糸文。

2は少なくとも1単位の口縁部突起を持つが、欠損している。口縁部文様帯には横S字文、弧線、付加的縦位線が隆帯で表現される。地文はRL単節縄文の縦位施文。破片断面で1ヶ所、擬口縁が観察される。胴部内面には円形の剝落痕が多数認められる。

3は口縁部が強く内屈するもの。口縁部には大形の突起、小形の突起が各2単位貼付されていたが、大形のは両方とも欠損し、基部のみ確認できる。突起はすべて橋状の把手を持つ。口縁部文様帯は狭小である。口縁部には2条1組の隆帯による、ごく小さな楕円区画が巡り、その下部に楕円区画と円形の区画がほぼ交互に1条巡っている。この区画の内側は縦位の沈線列で充填される。施文工具の先端は鋭い。この縦位沈線は隆帯貼付後施文されている。頸部無文帯は幅が広い。

4は欠損が多いが、4単位の突起を有していたようである。突起に付随して、小さな渦巻状の隆帯が貼付される。楕円区画が1条口縁部文様帯に巡るもので、地文は幅広の条痕文である。

5は3単位の橋状把手を持つもの。2単位のみ現存している。口唇部に刻み目を有し、口縁部には櫛齒状工具による条線文が施文されるのみである。

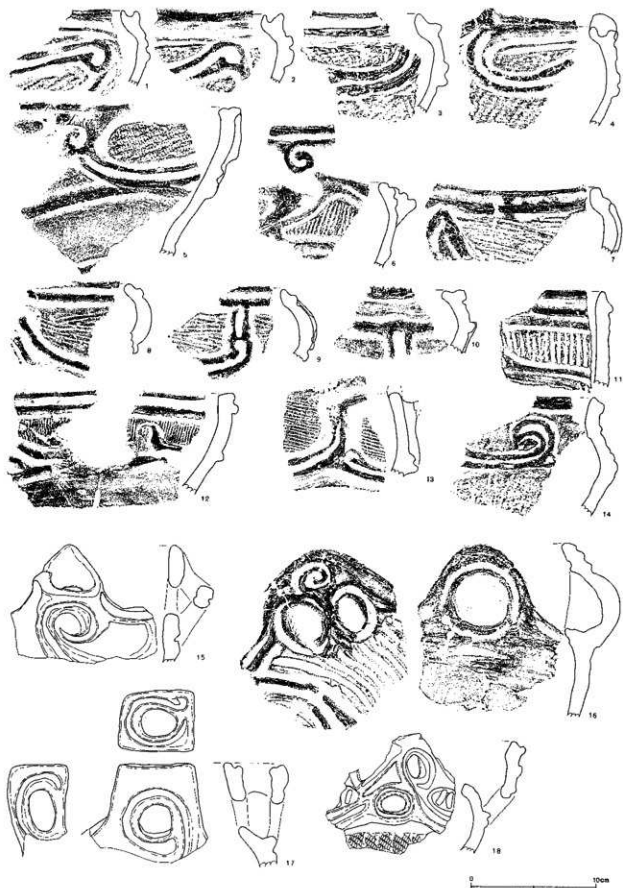
6、7は重圏文が口縁部に施文されるもの。6は頸部無文帯を有し、胴部はRL単節縄文の地文のみである。胴部上端の区画は末端のかみ合わない沈線群によって行われる。重圏文の施文は器面の乾燥が進んでから行われている。

7は重圏文がおそらく4単位施文されるもの。下端は1条の隆帯で画される。幅の広い頸部無文帯を有し、この下端は6と同様、末端がかみ合わない沈線群で、画されている。胴部にはRL単節縄文が地文として用いられる。重圏文は6と同様、器面の乾燥が進んでから施文されている。

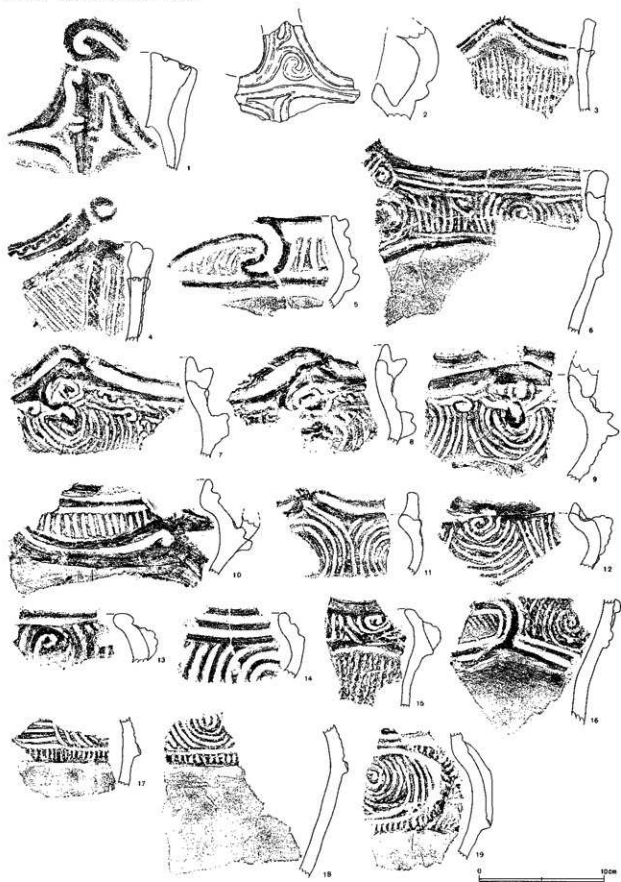
第161図1は口縁部が無文となる深鉢で、口縁部は大きく内湾し、口唇部がごくわずかに肥厚する。胴部に半截竹管の内面による縦位線が認められるもの。地文はRL単節縄文の縦位施文である。

同図2も口縁部無文の深鉢で、口縁部は比較的直線的に外傾する。胴部には隆帯による懸垂文が描かれる。地文はL撚りの燃糸文。

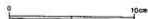
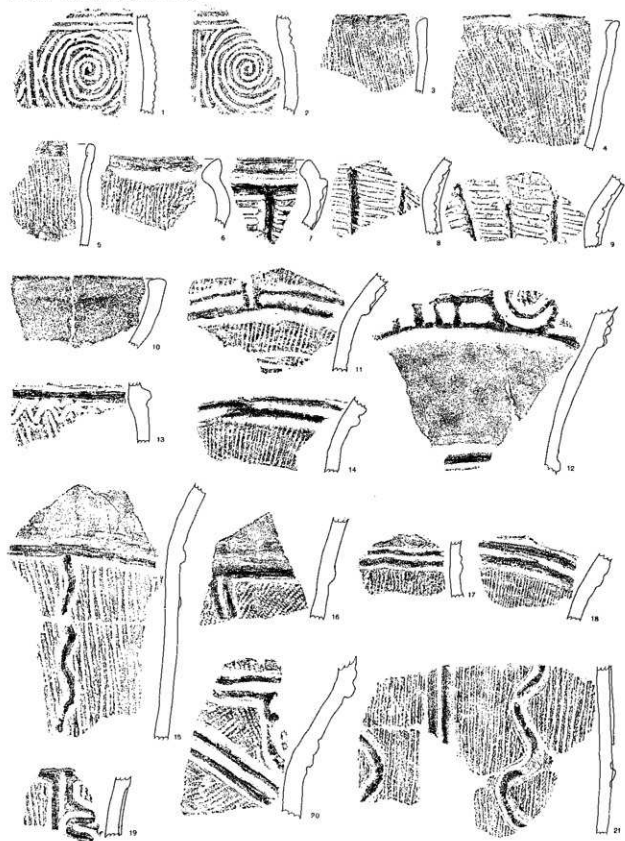
3は口縁部に鋸歯状の隆帯が巡る深鉢で、胴部には沈線による渦巻文、曲折文、蛇行状懸垂文が描かれて



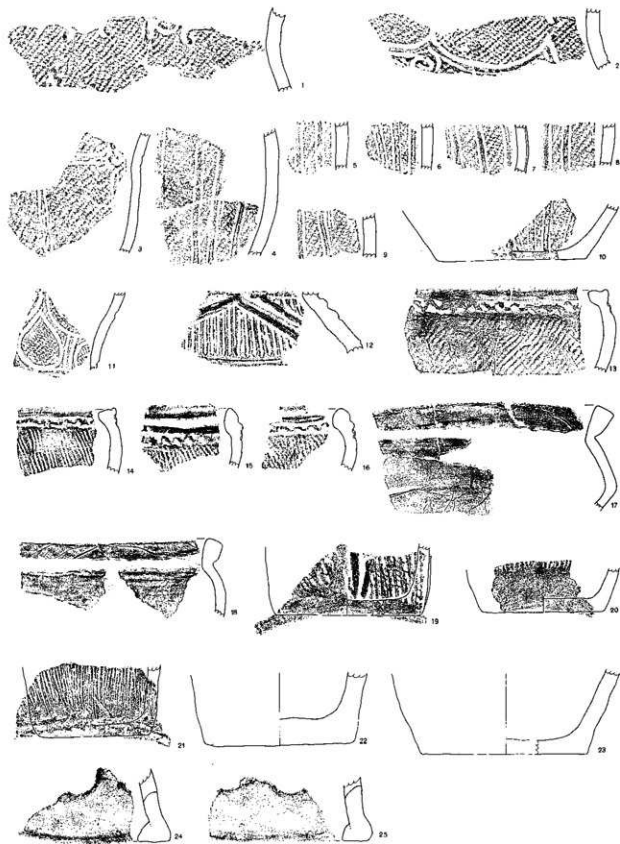
第166図 第16号住居跡出土土器(1)



第167图 第16号住居跡出土土器02



第168図 第16号住居跡出土土器(13)



いる。口縁部の鋸歯状隆帯は貼付後、その両脇が幅2～3mmの沈線などでざられている。胴部文様における単位間の連続性は弱い。地文はL撚りの燃糸文。

4、5は頸部から胴部にかけて直行する隆帯が貼付されるもので、隆帯上には指頭瓦底が連続して施される。器形はいずれも頸部でわずかに膨らみ、口縁部が直線的に外傾する。4は4単位の突起を持つと思われる。図上では明らかではないが、図右側の突起はB突起風に、2つの頂部を持つ。頸部上端に2条の平行沈線が施される。隆帯は縦走するものが先に貼付され、その後、頸部下位の横走隆帯が巻かれる。地文は鋸歯状工具による条痕文で、地文施文後、隆帯貼付という手順をとる。

5は平坦口縁で、口縁部に無文帯を有する。4は頸部上端が沈線であったが、5では隆帯が巻かれる。地文は鋸歯状工具による条痕で、4とは逆に、隆帯貼付後地文が施文される。

6は頸部が膨らみ、口縁部がわずかに外屈する小形の深鉢で、底部まで現存する。口唇端部は尖り気味で、内面にわずかに段差を持つ。頸部脇湾部に、2条1組の隆帯による波状文が巡る。波状文の波底部には渦巻文が突起を伴って施される。波状はほぼ正確に4単位となる。地文はR撚りの燃糸文。底部には磨耗痕が認められる。

7は4単位波状口縁の深鉢。胴部は強くすぼまる。波頂部から八の字状に隆帯が垂下し、波底部に無文帯を画しながら、口縁部を巡る。隆帯上には刻み目が施される。地文は鋸歯状工具による条線文。

8は樽形の器形を持つ小形の深鉢。口縁部に1単位の突起を持ち、この突起から鍵の手状の隆帯が垂下する。隆帯上には刻み目がある。口唇部にも1条、刻み目のある隆帯が巡る。地文はL撚りの燃糸文。

第162図1、2は胴部にS字文、渦巻文等の文様が展開するもの。いずれもキャリパー形深鉢の胴部と思われる。1は頸部無文帯中位から上部と、胴部下半以下が欠損する。胴部には2単位の横S字文が展開し、その間に幅の狭い縦位の区画が2単位置かれる。S字文

は上位の区画に付加的隆帯で連結される。縦位区画隆帯の上端は小さく蕨手状の渦巻を持つものがある。地文はL撚りの燃糸文。欠損の形態から、炉体上器として使用されていたものが廃棄されたとも考えられる。

2は底部から頸部下端まで現存するもの。1と同様、2単位の主要文様展開部と縦位の区画が交互に置かれる。主要文様のうち、1単位は欠損が多く不明だが、残る1つは文様帯上位の区画から垂下する渦巻文に付加的隆帯が付くもので、下端から底部にかけて、蛇行状の垂線を持つ。隆帯脇はなぞられているが、明確な沈線となっている箇所は少ない。地文はL撚りの燃糸文。

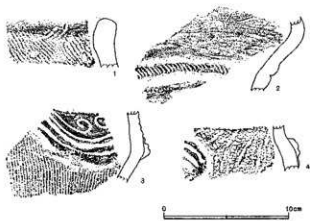
3も胴部に渦巻文が展開するものだが、欠損部分が多い。1、2と同様の文様帯分割によると思われる。地文はL撚りの燃糸文。

4はキャリパー形深鉢の口縁部が欠損しているもの。頸部無文帯があり、上位の区画は、結節のある2条隆帯による。胴部無文帯には蛇行状垂線が6単位施文される。地文はR L単節縄文だが、施文単位の終了位置が、施文方向が徐々にずれることが確認できる資料である。展開図左側に施文の終点がある。

5～7は胴部下半の資料で懸垂文が施されるもの。6は蛇行状垂線が6単位施文される。7は4条1組の右下に流れる沈線群と、2条1組の垂線が交互に施文されるものである。

第163図は素文の深鉢と、胴部下半の資料である。1は口縁部文様帯を有するが、おそらく6単位の橋状把手を有する深鉢である。隆帯上には横位の短沈線が引かれる。2はキャリパー形の深鉢。口唇部直下に1条のやや幅広い沈線が巡り、その下位に不安定な沈線が巡る。地文はR撚りの燃糸文。3は底部から口唇部にかけてほぼ直線的に外傾する深鉢。頸部がごくわずかに膨らむ。口唇部外面に1条の隆帯が貼付される。地文はR L単節縄文の斜位施文であるが、横位の単位間にわずかに間隙を持って施文される。4は小形の深鉢。頸部に屈曲を有する。屈曲のやや下位から地文が施文され、その上位は無文のまま残される。5も小形の深

第169図 第17号住居跡出土土器



鉢で、胴部下半のみ現存する。地文は櫛歯状工具による条線で、頸部に2条の沈線が巡る。6は深鉢の胴部で、外反して開く。頸部に1条の隆帯が巡る。地文は無節1撚りの捲糸文である。

7～15は胴部下半から底部にかけての資料である。12は隆帯による懸垂文、14は沈線による懸垂文の一部が残っているが、他は地文のみの資料である。10はRLR複節縄文で、底部に網代痕が残存している。

第164図には浅鉢と鉢を掲載した。1は頸部が外傾するものだが、肩部のみ現存する。文様帯の上下区画は刻み目帯によってなされる。文様帯は縦位の沈線や、山形の沈線で区画され、内部には長楕円形のモチーフ、弧線文等が施文される。下端区画には突起が作り出される。2は無類の浅鉢。胴部中央が強く張り出して屈曲する。口唇部はやや尖り気味に収まる。肩部には5単位の対になる渦巻文と、蛇行状沈線が施文される。対の渦巻文を構成する沈線は、左側が時計回り、右側が逆時計回りに外部に向かう。対の渦巻文の間には、縦位の沈線や、蕨手状沈線が充填される。文様帯の下端には、対の渦巻文の中間に端を発する一端に小渦巻きを持つ沈線が5単位連続している。3は鉢の口唇部のみ現存する資料。4は外傾する頸部を持つ鉢で、肩部に渦巻文を有する。文様帯の上位区画は、円形竹管による交互刺突でなされる。刻み目を持つ隆帯で大きく区画された中に、渦巻文が施されている。渦巻文には押し引きが伴う。5は頸部がわずかに外傾す

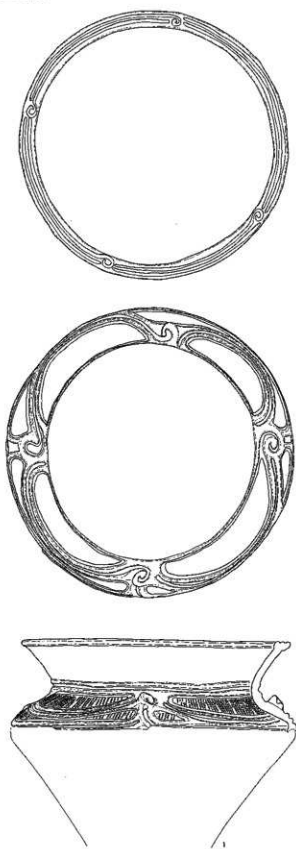
る浅鉢。口唇部内面はわずかに板状に肥厚する。頸部下端に1条の沈線が巡る。胴部中央に括れがある。6は有孔鐔付の鉢形土器。口唇部は内側にわずかに肥厚する。胴部やや下位に最大径があり、強く張り出している。頸部に断面三角形の鐔が巡り、その上位に2個1対の貫通孔がおそらく4単位開けられる。底部には使用による磨耗痕が認められる。

第165図はキャリパー形深鉢の口縁部破片。1～14は2条1組の隆帯によって渦巻つなぎ弧文、クランク状モチーフが施されるもの。1～4は同一個体で、口唇部が2条の隆帯で構成される。比較的薄手で、胎土に鉄分を多く含む個体である。8、9は同一個体で、地文はL撚りの捲糸文。15～18は橋状、箱状等の突起をもつもの。16は眼鏡状の構成となり、口唇部には重圏文が施されると思われる。

第166図1は山形の突起で、頂部、側面に蕨手状の沈線が施文される。3は波状口縁の深鉢で、素文のもの。4も波状口縁を持ち、波頂部から2条1組の隆帯が垂下する。この隆帯は一方が刻み目を持ち、他は持たない。口唇部状には交互刺突文が施される。5、10はキャリパー形深鉢であるが、文様帯の間を短沈線で充填するもの。本住居跡出土資料の中では類例が少ない。6～9、11～16は重圏文が施される深鉢。7～9は同一個体。14は重圏文を構成する沈線が大きく、口唇部の作りが加曾利E式系のキャリパー形深鉢に類似する。16は隆帯によるクランク文と重圏文が組み合うもの。地文はRL単節縄文である。17～19は同一個体で、肩部に重圏文を持つ鉢。刻み目隆帯による区画がなされる。

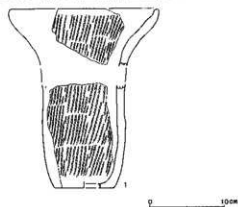
第167図1、2は同一個体で、胴部に重圏文を有するもの。3、4も同一個体で、櫛歯状工具による条線を持つ深鉢。口唇部がわずかに外傾する。7～9は同一個体で、胴部に縦位隆帯が貼付され、その間を横位の沈線で充填するもの。口唇部には無文帯があり、頸部で強く屈曲する。地文はL撚りの捲糸文。11～18はキャリパー形深鉢の頸部破片。11、14は同一個体。13は頸部に鋸歯状の沈線を持つ。19は輪状の屈曲部を持つ隆帯が垂下する深鉢。

第170图 第18号住居跡出土土器(1)

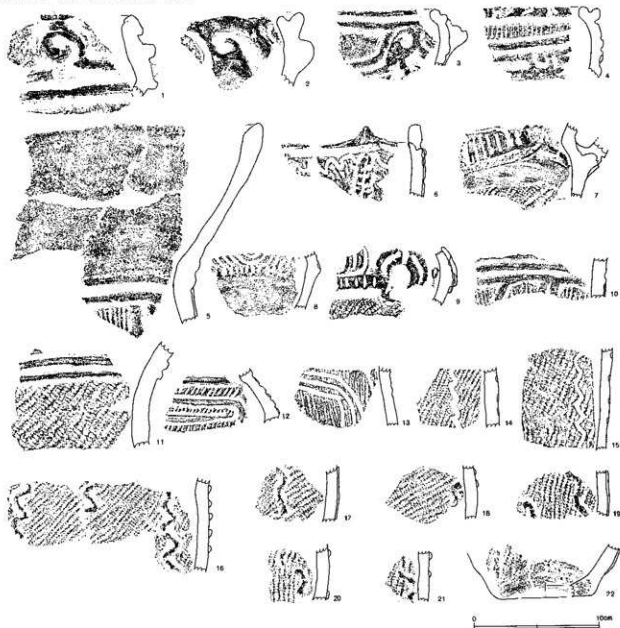


0 10cm

第171図 第18号住居跡出土土器(2)



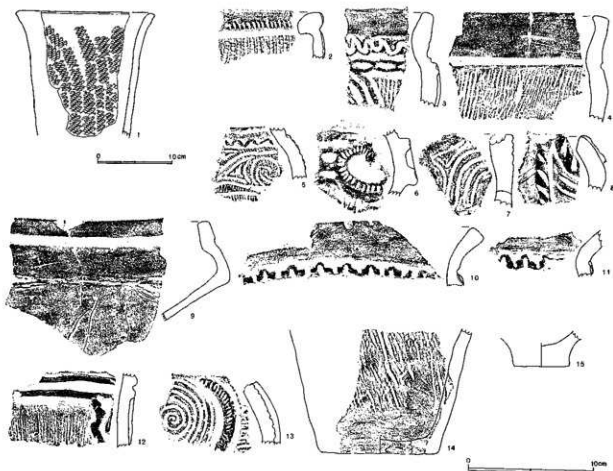
第172図 第18号住居跡出土土器(3)



第168図 1, 2は同一個体で、連弧状の波状文に渦巻文が伴う胴部破片である。3は胴部に田の字状のモチーフが幅かれ、蕨手状の渦巻文を伴うもの。4-10は同一個体で、半截竹管によって縦位のラインが密に引かれるもの。12は鉢の肩部であろう。13-16は口縁部に1条の交互刺突帯を持つもの。口唇部の断面形に変異がみられる。24, 25は同一個体で、台部の末端部の資料。貫通孔を有する。

第17号住居跡出土土器 (第169図)

本住居跡出土の遺物は極めて少なく、土器では、第



169図に掲載したもの以外では、ごく少量の小破片があるのみである。1は口縁部がわずかに外反する深鉢。地文はL燃りの燃糸文である。2は深鉢の頸部。胴部上端に区画隆帯が認められる。3は頸部に渦巻文を持つ鉢、4は胴部の上位に隆帯による文様が描かれるが詳細は不明である。

第18号住居跡出土土器 (第170図～第172図)

第170図1は炉体土器。鉢形土器の胴部が欠損したものである。頸部が直線的に外傾する。口唇端部が平坦化され、上面に4単位の戴手状渦巻文と、沈線文が施される。このうち3単位は外側の沈線が、1単位は内側の沈線が渦巻に連なる。そのため、1ヶ所構成がずれ、平行沈線文のみの単位が生じている。肩部には4単位の渦巻つなぎ弧文が施文される。渦巻部は突起状に張り出している。渦巻の下位に区画線と連結する隆帯が貼付されるものが3単位あり、そのうち2単位

は矩形、1単位は右下がりの構成を取る。他の単位では、隆帯が貼付されていない。欠損部は、擬口縁のネ方面となる。

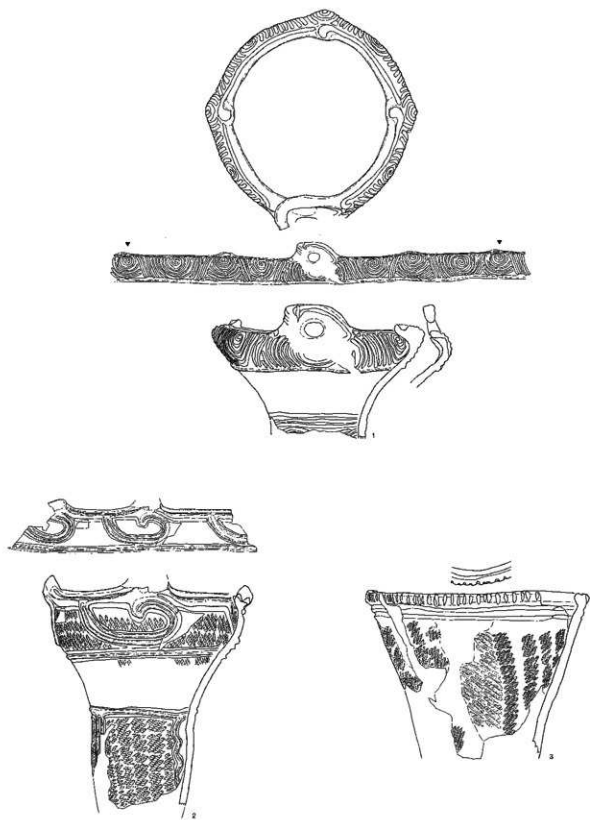
第171図1は口縁部が朝顔形に開く小形の深鉢で、L燃りの燃糸文がほぼ全面に施文されるもの。

第172図1～4はキャリパー形深鉢の口縁部破片。4の地文はL燃りの燃糸文である。5は口縁部無文の深鉢。地文は条線で、隆帯による懸垂文が描かれる。6は小形の深鉢で、口唇部に突起を持ち、刻み目を持つ隆帯が垂下する。7～12は頸部の破片、13～21は胴部破片。14、15は同一個体で、振れ幅の小さい蛇行状垂線が施される。16～22も同一個体で、隆帯による、これも振れ幅の小さい蛇行状垂線が貼付される。

第19号住居跡出土土器 (第173図)

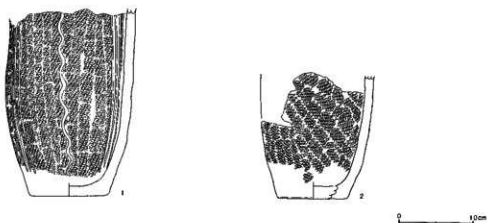
第173図1は頸部が緩やかに外反し、口唇部に至る小形の深鉢。地文はRL単節縄文。2は口唇部が内面

第174図 第20号住居跡出土土器(1)



0 10cm

第175図 第20号住居跡出土土器(2)



に肥厚し、外面に刻み目を持つ。地文は押し引き文である。3には頸部に連鎖状隆帯と、鋸歯文が施される。4も口縁部無文の深鉢で、地文はL燃りの捺糸文。5、6は鉢の頸部破片。5には刻み目を持つ隆帯で、渦巻、三叉文状のモチーフが施文される。7は突起の一部で、沈線による曲線文が展開するが、全容は不明。8は口唇部と波頂部下に刻み目隆帯が貼付される深鉢。9は無文の浅鉢で、口唇部はわずかに肥厚し、内傾する。

第20号住居跡出土土器 (第174図～第176図)

第174図1は炉体土器。胴部がごく細く、口縁部の内屈が強い。口縁部に4単位の突起が付く。うち1単位は橋状となり、中心に貫通孔を持つが、その橋状部分が欠損している。突起に対応する位置に重圏文が描かれ、その間をさらに斜位の沈線群と重圏文で埋めている。口唇部には突起を結ぶ沈線が描かれ、末端が蕨手状渦巻文となる。頸部無文帯を持ち、この下端区画は3条の沈線でなされる。胴部にも重圏文が展開する。施文は器面の乾燥が進んでから行われている。内面には弓形の剥落痕が多数認められる。

2はキャリバー形深鉢で、口唇部には4単位の突起があったと思われる。突起間は沈線で連結される。口縁部文様帯には2条1組の隆帯によって鍵の手状のモチーフが断続的に施文される。頸部無文帯を有し、胴部には2条1組の隆帯による垂線と、1条隆帯によ

る蛇行状垂線が描かれる。地文はRL単節縄文。

3は口縁部が直線的に開く深鉢。口唇部内面が肥厚し、口唇部上に1条の沈線が巡る。外面には刻み目が連続する。胴部は地文のみであるが、地文は2種類の原体によっている。0段多条のRL単節縄文と、Lr無節縄文が縦位に施文されている。

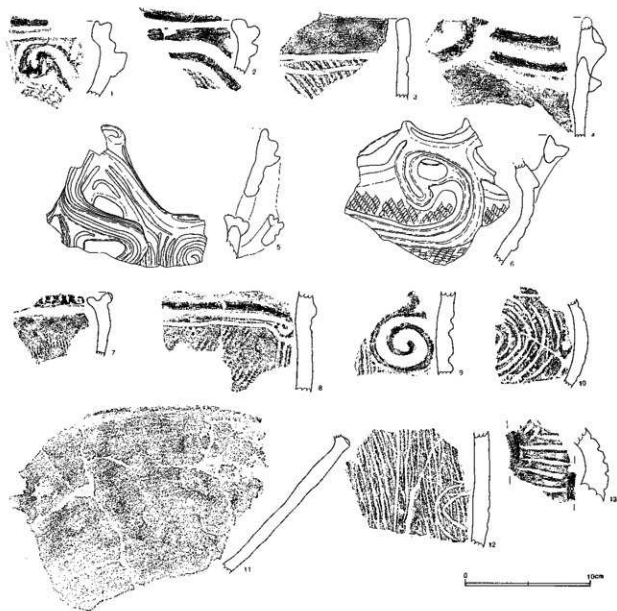
第175図は深鉢の胴部下半の資料。1は3条1組の垂線と、1条の蛇行状垂線が交互に施文されるもので、各4単位施文される。2は地文のみで、Lr単節縄文が斜位に施文される。

第176図1, 2, 6は加曾利E式系キャリバー形深鉢の口縁部破片。6は突起から渦巻文が垂下し、口縁部文様と連結する。4は無文で、口唇部に2条の隆帯が巡る。5は重圏文を口縁部に持つ。山形突起の左側縁辺から発した隆帯がS字状となり、橋状把手を構成している。7は小形の深鉢で、口唇部外面に刻み目を持つ。8, 9は深鉢の胴部。13は橋状部の破片で、横位の沈線を持つ。

第21号住居跡出土土器 (第177図～第179図)

第177図1は炉体土器。頸部素文帯を持つ深鉢で、口縁部には2条1組の隆帯による横S字文が4単位連続する。S字文の連結部には付加的な隆帯が貼付される。S字文は上下の区画に接するため、地文部は区画化する。4単位のうち3つの単位ではS字文の中央部が結節し、盛り上がっている。地文はL燃りの捺糸文。

第176図 第20号住居跡出土土器(3)



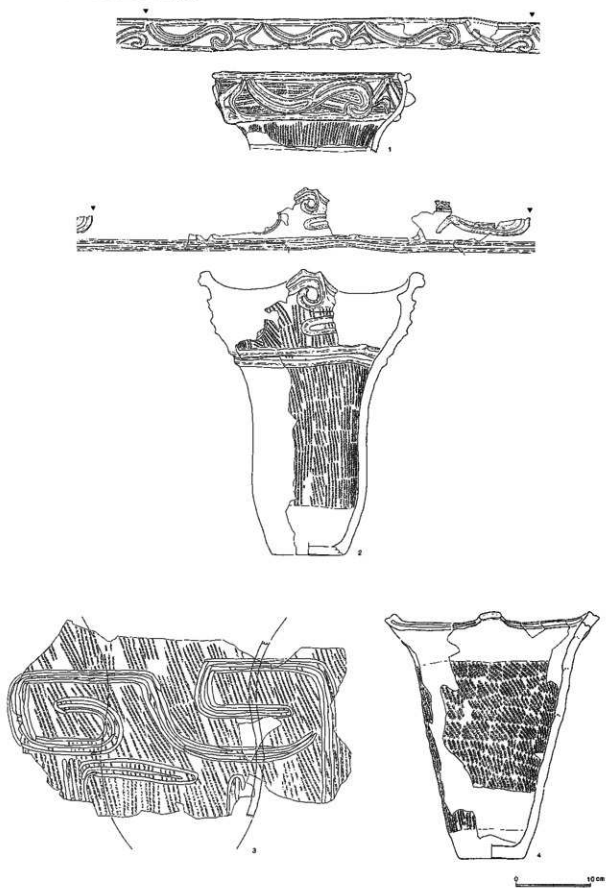
2は波状口縁となる深鉢。欠損が多く、口縁部文様の詳細は不明であるが、単位文的なモチーフが展開している。口唇部には交互刺突文が巡らしい。頸部は2条隆帯で区画されるが、この隆帯の間はやや広く、無文となっている。胴部は地文のみ施文される。

3は胴部下位が彫らも深鉢。頸部以上が欠損している。胴部には3条1組の沈線で、クランク状の曲折文が展開する。地文はL燃りの燃糸文。4は4単位の突起を有する深鉢。口縁部はわずかに外反し、胴部は直線的である。突起は山形で、上端に短沈線が施される。

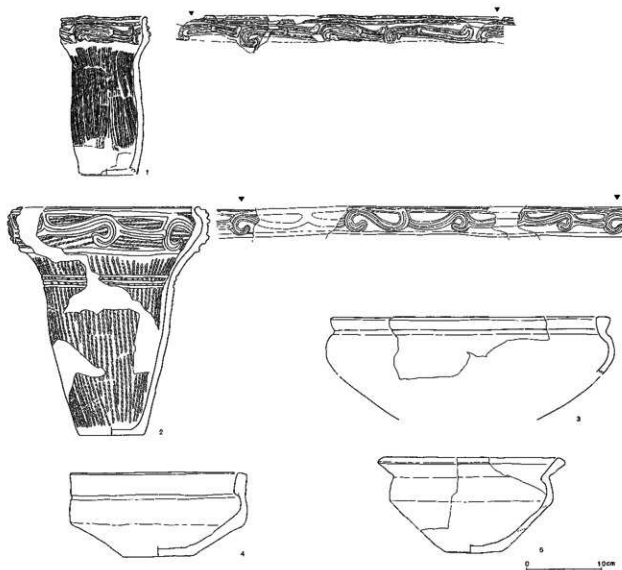
口縁部は無文で、地文との間に明確な区画はない。地文はRLR複節縄文で、斜位に施文される。

第178図1は小形のキャリパー形深鉢。胴部は細長く中位でわずかに膨湾する。口縁部は小さく外反する。口縁部には横S字文が4単位施文される。S字の中央部で隆帯が小さく弧状になり、中央の沈線は途切れる形となる。1単位だけ、この弧線が逆向きとなる。S字左側の渦巻が1単位だけ大きくなる。口縁部文様帯下端には区画はない。屈曲部の下位は無文であるが、これは、地文が施文されない部分として残ったもの。

第177图 第21号住居跡出土土器(1)



第178図 第21号住居跡出土土器(2)



地文は歯歯状工具による条線。

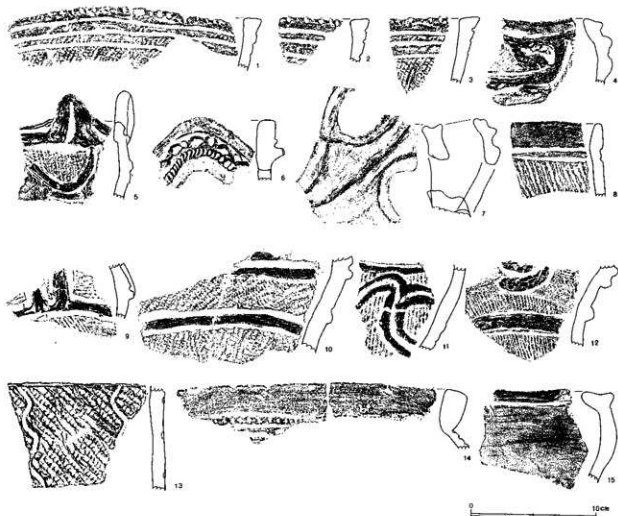
2はキャリパー形深鉢で、口縁部にはS字文が横位に連結している。頸部素文帯を持ち、胴部は地文のみである。底部には磨耗痕が認められる。3～5は鉢形土器。3は口唇部が短く直立し、胴部が膨らむもの。口唇部は外側に肥厚する。4は埋甕。ほぼ完形の鉢である。口唇部は直立し、内面が板状に肥厚する。括れ部に1条沈線が巡る。胎土には大きな砂礫を含んでいる。5は口縁部が外傾するもの。括れが強く、胴部にも弱いながら屈曲を持つ。赤色顔料が部分的にわずかに残っている。底部には磨耗痕が認められる。

第179図1～3は同一個体。口縁部が直線的に開く

深鉢で、口唇部に小さな刻み目を持ち、口縁部に3条の沈線が巡る。4、5はキャリパー形深鉢の口縁部。6は大波状口縁の深鉢で、口唇部に交互刺突文が施される。7は貫通孔を持つ突起。9～12は深鉢の頸部である。13は深鉢の胴部で、蛇行状垂線が施される。14は浅鉢で、頸部に刺突が巡る。15は無文の個体だが、深鉢のようて、地文無文のキャリパー形の可能性がある。

第22号住居跡出土土器 (第180図～第182図)

第180図1は炉体土器。円筒形の深鉢で、口縁部が小さく肥厚する。頸部は無文となり、胴部中央と、下位に文様が展開する。胴部中央の文様は上面に刻み目を



持つ隆帯、押し引き文、鋸歯状連続刻みが並列して、横位に連続するS字状モチーフが4単位施文される。下位には左下がりの菱形を連続して描き、その内部に左下がりの線を鋸歯状の連続刻みによって表現している。菱形の交点は部分的に円形に肥厚し、突起状となる。

第181図1は阿玉台式系の深鉢で、胎土に多量の雲母を含んでいる。口縁部に山形の突起を持ち、頸部が括れ、胴部はわずかに膨らんで底部に至るようである。口縁部突起は縦長の肥厚帯となり、隆帯中央に窪みが増えられる。口唇部にはやはり隆帯が廻る。口縁部と胴部上位に各1条の刻み目列が施される。胴部上位の刻み目列は一部、起点と終点が重複している(立面図左側)。施文の順序は土器を上側からみて逆時計回りで

ある。頸部括れ部にごく細い刻み目が2単位ある。胴部の刻み目の約3cm程下に爪形が認められるが、これは刻み目を施す際につけられた爪形であろう。

2はキャリパー形を呈する深鉢。平坦口縁で、わずかに外屈する。口縁部と胴部に文様を持つ。いずれも隆帯と押し引き文によってモチーフが描かれる。口縁部には楕円形の区画が右下がりの隆帯によって2分されたものが、横位に連続する。隆帯の接合部は、接合面を残して突起状となる。突起の右側には円形の刺突がある。押し引きは、刺突を連続するものと、角押文的なもの2種による。胴部には口縁部文様下端の隆帯に接続する隆帯が斜行し、胴部中央で渦巻状となって反転する。この渦巻部は口縁部の隆帯接合部と同様、突起状に張り出している。隆帯の両端には2種

の押し引き文が施され、胴部中央にも刻み目列が1列巡る。頸部と胴部の押し引き施文時に残されたと思われる爪形が認められる。

3は頸部が括れ、胴部が彫らむ小形の鉢。口唇部外面と口縁部下端に隆帯を巡らし、その間を隆帯が鋸歯状に貼付される。隆帯上には刻み目がある。隆帯の両脇はなでつけられ、わずかに窪んでいる。頸部の無文帯を介し、胴部には口縁部と同様のモチーフが展開する。受熱し、器形に歪みが生じている。

4は小形の深鉢で、口縁部に橋状把手、扇形の突起を有する。この個体も受熱している。口唇部上にはへら状工具で刻み目が加えられる。2列の角押文的な押し引きで楕円状のモチーフが描かれる。口縁部文様帯の下端は上面に刻み目のある隆帯でなされる。押し引きは先端の割れた竹管でなされている。

5は深鉢の胴部下半の資料。現存する部分はほぼ直立している。上面に刻み目のある隆帯が巡り、その両脇に刺突列が施される。隆帯の上位に押し引き文によって描かれた山形のモチーフの一部が確認できる。

第182図1はキャリパー形を呈する深鉢の口縁部。楕円区画文を持つ。胎土に雲母を含む。2は山形の口縁部突起を持つ深鉢。4は口縁部の突起の一部であろう。5～7は同一個体で、隆帯と爪形が用いられる深鉢。8も同様のモチーフで、雲母を含む。9は円筒形の胴部を持つ深鉢の破片。縦位の隆帯が貼付される。雲母を含む。この破片は胎土分析を行っている。10、11は同一個体。深鉢の胴部で、隆帯と沈線文によって意匠が構成される。隆帯の接合部は小さな蛇行状となる。13、14は口縁部破片で、細かな爪形を持つもの。15は上面に刻み目を持つ隆帯で、円形の区画がなされ、その周囲に爪形文が連続する。16はパネル文的意匠を残すもの。隆帯は背の低いものである。17はごく細い沈線と爪形によって区画が構成されるもの。

第23号住居跡出土土器 (第183図、第184図)

本住居跡出土土器のほとんどは住居跡中央の土壇状の掘り込みから検出されたものである。第183図1

～3はいずれも連弧文系深鉢で、1、2は口縁部の資料である。1は頸部が長く、直線的に立ち上がるもの。口唇部直下に3条の沈線が巡り、その下部に3条1組の沈線による波状文が描かれる。括れ部にも3条の沈線が巡るが、波状文からこの区画沈線に向かって蛇行状の垂線が降りている。粘土帯の接合痕がよく観察できる資料で、受熱し、器面は粗れている。地文はLR単節縄文である。

2は口縁部が内湾するもの。1と同じく、口唇部直下に3条の沈線が巡る。2条1組の沈線による波状文の一部が観察できる。地文はRL単節縄文で、受熱し、器面は粗れている。

3は波状文を持つ深鉢の胴部破片。胴部上半が彫らむ。波状文が2段観察できる。上段は3条1組の沈線、下段は4条1組(一部5条1組)の沈線による波状文である。上段のものは割付の末端を不規則な沈線でつないている。下段の波状文は波頂部が尖るもので、上から見て逆時計回りに施文されている。地文はRLR複節縄文である。

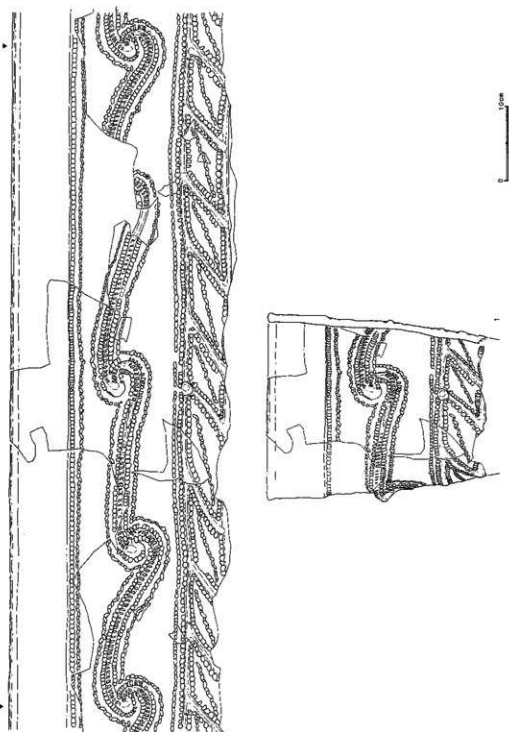
4、5は深鉢の胴部下半の資料。4は地文のみ観察されるもの。5は大形の個体で、3条1組の沈線による垂線と2条1組の沈線による蛇行状垂線が施文される。

第184図1～5は連弧文系深鉢の口縁部破片。2は口縁部が屈曲し、縦位区画と、横位、斜位の連結線が施文される。9～12は同一個体で、加曾利E式系の深鉢。地文はRLR複節縄文である。胴部に懸垂文を持つ。13～17は連弧文系深鉢の胴部破片。波状文とそれに付随するモチーフが認められる。15、16は同一個体である。18は懸垂文を持つ。破片上端は楕円縁である。

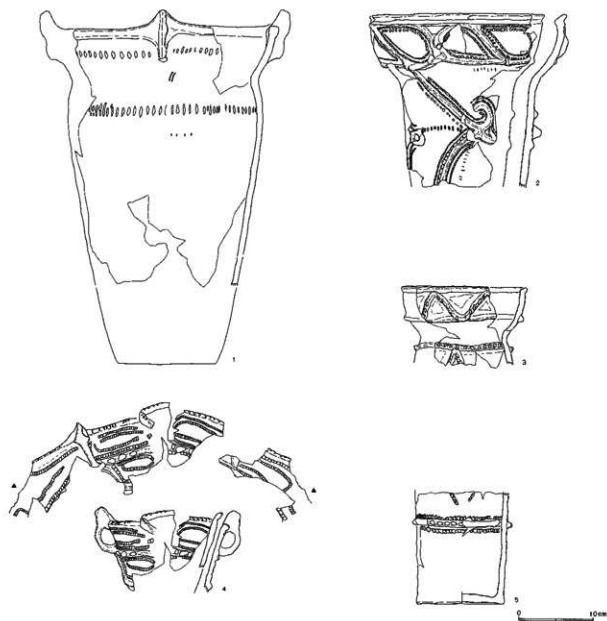
第24号住居跡出土土器 (第185図、第186図)

第185図1は炉土器。大形のキャリパー形深鉢の口縁部である。平垣口縁で、口縁部はわずかに外屈する。文様帯上端は1条の隆帯、下端は、へら状工具による刻み目列を持つ隆帯で区画される。下端隆帯の両脇はナデによって、地文が消されている。文様は2条

第180图 第22号住居跡出土土器(I)



第181図 第22号住居跡出土土器(2)



1組の降帯によるS字文と、それを連結する蛇行状のモチーフ、さらに、十字形のモチーフが描かれている。文様を構成する降帯は断面形が半円形、もしくは薄鉢形を呈している。地文はL燃りの燃糸文。

第186図1～6は押し引き文、交互刺突文、パネル文等を持つもの。6は刻み目隆帯によって渦巻、区画が描かれ、沈線が充填されている。胎土には砂粒を多く含んでいる。7は環状の把手を持つ口縁部無文の深鉢。8～11は加曾利E式系のキャリパー形深鉢。8、9は同一個体である。12は大波状口縁の深鉢で、口唇端

に交互刺突文を持つ。15は竹管により、弧状のモチーフが頸部に施文されるもの。19、20は無文の浅鉢。24は底部破片であるが、底部外面に先端の尖った工具により、乱れた格子目状の線が引かれている。

第25号住居跡出土土器 (第187図～第189図)

第187図1は炉体土器。口縁部がわずかに開き、胴部は寸胴気味である。口唇部に4単位の突起を持つと思われる。2単位が現存し、1つは耳状、1つは環状となる。口縁部の文様帯は狭小で、太めの降帯により、区画がなされる。突起間の中央で交互刺突状の刻み目

第182図 第22号住居跡出土土器(3)



が入り、分断される。地文はL燃りの捺糸文。胴部上半に0段多条のLrの丘痕が認められる。

2は口縁部が直線的に開く深鉢で、頸部がわずかに膨満している。口縁部の環状突起は1単位のみ現存しているが、おそらく4単位構成と思われる。口縁部には菱形の区画があり、その内部に沈線による渦巻文が描かれている。胴部には2条1組の隆帯で田の字状の区画がなされる。縦位の隆帯には棘状のモチーフが付随する。地文はL燃りの捺糸文。

3はキャリパー形の深鉢だが、頸部の括れは弱い。口唇部の先端はわずかに尖り気味である。口縁部には2条1組の隆帯による渦巻文が認められる。胴部はRL単節縄文の地文のみである。4もキャリパー形深鉢。頸部無文帯を持つ。2条1組の隆帯によるS字文が横位に連結する。胴部には隆帯による懸垂文が描かれている。地文はL燃りの捺糸文。5は口縁部に地文のみが施され、頸部に文様を持つ鉢形土器。口唇部の先端

は尖り気味に内屈する。頸部の文様は連鎖状隆帯が横位に施文されるもので、この隆帯上にはへら状工具による刻み目が加えられる。

6は口縁部無文の小形深鉢。口縁部は外反し、胴部は直線的である。口唇部端面は角張っており、ごくわずかに肥厚する。胴部文様帯上端にはおそらく4単位の突起があり、突起間は右端が渦巻となる沈線が施文される。胴部はこの突起と対応するように縦位に区画がなされる。突起下には2条1組の隆帯、その間は2条1組の沈線が垂下し、さらに横位の区画がなされる。縦横の区画の交差部には蕨手状の沈線が描かれている。地文は0段多条のRL単節縄文である。

第188図1, 2は頸部が張る深鉢である。1は地文がL燃りの捺糸文、2は櫛歯状工具による条線である。2の口唇部直下には1条の沈線が認められる。3は深鉢の胴部で、縦位の隆帯が認められるが、意匠の構成は不明。

4はほぼ完形の鉢。ボウル形を呈する。口唇部はわずかに折り返され、内側に肥厚する。5は口縁部が外傾して立ち上がる鉢。胴部には4単位の突起が貼付される。突起には渦巻文が施文される。6は鉢または浅鉢の底部。7～10は深鉢の底部で、7～9は隆帯による懸垂文が施文される。

第189図1は炉跡掘り方から検出されたものである。キャリパー形深鉢で、渦巻文の間を蛇行状隆帯で連結する。2は縦位沈線で文様が充填されるキャリパー形深鉢。3は上面に沈線を持つ隆帯が貼付される。7, 8は装飾性の高い突起で、同一個体と考えられる。9は波状口縁で、突起に隆帯が垂下するもの。10は口縁部に区画文を有し、内部に押し引き文による文様が描かれている。11もが跡掘り方出土土器で、交互刺突状の短沈線により、蛇行状のモチーフが描かれている。

第26号住居跡出土土器 (第190図)

第190図1はが体土器で、大形の深鉢である。キャリパー形だが、頸部の括れは極めて弱く、胴部は寸胴である。頸部下に擬口縁のネガ面が観察される。口縁部文様帯は狭小で、下端の区画隆帯断面は上方に向かいわずかに張り出している。文様帯は渦巻文で区画され、区画の内部には縦位～弧状の沈線で充填される。胴部には3条、もしくは4条1組の沈線による垂線が施される。地文はR L単筋縄文。

第28号住居跡出土土器 (第193図1～11)

第193図1～4は加曾利E式系のキャリパー形深鉢の口縁部破片である。5は口縁部に弧状の隆帯が貼付されるもの。6は頸部で、隆帯に結節状の区画がある。9は鉢の頸部で、綾杉状に近い交互刺突が巡る。

第29号住居跡出土土器 (第191図、第192図、第193図12～33)

第191図1はが体土器で、大形のキャリパー形深鉢である。頸部から口縁部にかけて外反気味に広がり、口唇部は肥厚する。口唇部肥厚部外面は無文帯となり、1条の沈線を介して口縁部文様帯に至る。口縁部文様帯には8単位の渦巻つなぎ弧文が2条1組の隆帯で描

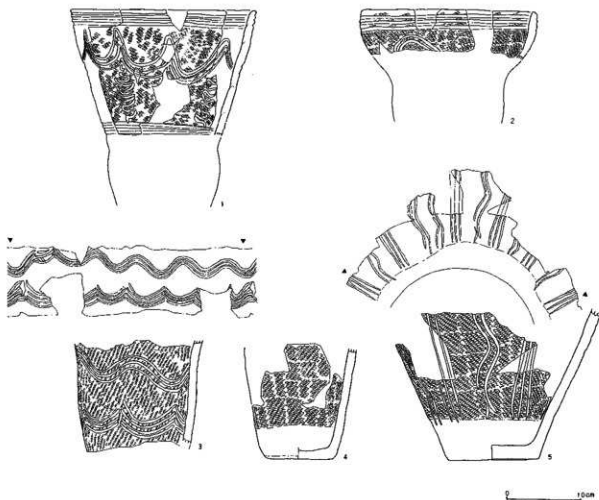
かれる。弧文の上端は区画沈線に接し、下端は区画隆帯との間にごく短い隆帯が3列(1ヶ所は4列)縦走して連結している。頸部無文帯を有し、胴部には3条1組の沈線による垂線と、蛇行状垂線が交互に施文されている。地文はR L単筋縄文で、ややほだけ気味の縄である。

第191図2は覆土出土のほぼ完形のキャリパー形深鉢である。胴部上半ですぼまり、下半はごくわずかに膨らんで底部に至る。口縁部文様帯には2条1組の隆帯による横S字文状モチーフが4単位連続する。頸部無文帯を有し、胴部には2条1組の垂線が5単位垂下する。懸垂文の間に1段の結節が縦位に回転施文されていることが、極めて特徴的である(展開図中では周囲と異なる網で示してある)。

第192図1, 2は鉢で、頸部が外傾するもの。1は肩部が現存している。上下端を上面に刻み日のある隆帯で区画され、円文と矩形の区画が交互に配される。矩形の区画内部には縦位の沈線が充填され、さらにそれを横断する横位の沈線が施文される。2は頸部のみ現存する。器形は1に類似するが、胎土が異なっている。3も同様の器形を持つと思われる鉢の胴部破片である。頸部括れ部に指頭による窪みが交互刺突状の構成で施文される。肩部には2個1対の突起があり、それと連なる蕨手状沈線が横走する。この上下に短沈線が縦位に充填され、1と同様の構成となる。突起下には弧線が描かれ、その内部には交互刺突が充填されている。4は小形の有孔鈔付土器である。鈔の隆帯は先端が尖り気味で、隆帯の基部が穿孔されている。漆が塗布されていた痕跡が認められる。

第193図12～33は木住居跡出土土器の拓影図である。12～14は同一個体で、口縁部にごく細かい押し引き文状の沈線を持つ鉢。口唇部が強く内湾する。15～17はキャリパー形深鉢の口縁部で、渦巻文を持つ。19は口縁部無文の深鉢。20は隆帯で、単位文的なモチーフが施文される。23, 24は無文の浅鉢で、口唇部が板状に肥厚する。25は胴部中央に横位の区画を持つもので、地文はR L R複筋縄文。26～32は同一個体

第183図 第23号住居跡出土土器(1)



であるが、小破片が多く、全体の構成には不明な点が残る。地文は櫛歯状工具による横走の条線で、竹管によって細かく蛇行する線が引かれる。

第30号住居跡出土土器 (第196図1~5)

第196図1は恐らく4単位の山形突起を持つ小形の深鉢。上面に刻み目を持つ隆帯が突起から垂下し、隆帯間をつなぐようにS字状の沈線が施文される。2はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、口縁部突起下には隆帯が垂下し、さらに斜位の隆帯が観察される。地文は0段多条のRL縄文。3、4はキャリパー形深鉢の口縁部。4は沈線が区画するもので、磨消縄文手法を伴う。

第31号住居跡出土土器 (第196図6、7)

第196図6、7は炉跡出土土器。いずれも無文の鉢で、6は頸部が割れ、口縁部が外傾する。7は口唇部が肥

厚、頸部が直立する。

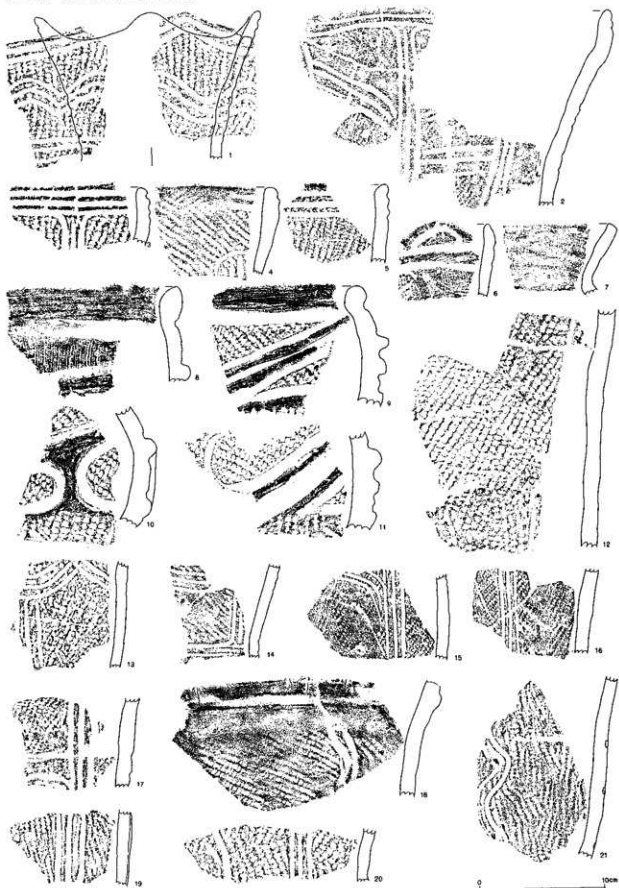
第33号住居跡出土土器 (第196図8、9)

第196図8、9は同一個体で、磨消縄文による矩形の区画と蕨手状沈線文が施文される。器形は硬直化しているが、キャリパー形を呈している。

第34号住居跡出土土器 (第194図、第195図)

第194図1、4、第195図掲載の破片は炉体土器で、1が中心にあり、その周囲に3、4、第195図の土器が貼りつくような状況で検出された。1は大形のキャリパー形深鉢で、口唇部と胴部下半を欠いている。括れ部を境に意匠が2段に分かれる。上段は羊角状の渦巻文が大きく2単位施文される。施文手法は幅の広い指書きのような凹線状沈線が2条1組になり、その中央にごく幅の狭い突出部が形成され、文様を描いている。下段には弧線が観察されるが、意匠は不明である。

第184図 第23号住居跡出土土器(2)





地文はLR単節縄文で、施文単位は非常に密である。2は小形の台付鉢で、台部貫通孔がある。3、4は深鉢で、磨消縄文による装飾を持つ。3は口縁部が小さく内凹する。4は硬直化した波状文が端切れ、磨消を伴う。両者とも口縁部に無文帯を持つ。

第195図掲載の拓影図もが体土器の一部である。2～6は同一個体。1は口縁部のみ地文施文方向が横位である。磨消縄文が発達する。

第39号住居跡出土土器 (第197図)

第197図1は口縁部に栴川区画と渦巻文が交互5単位に施文されている。栴川区画の下端がそのまま口縁部文様帯の下端となるため、口縁部文様帯下端は直線とならない。渦巻文の左端を起点として2条の沈線が垂下する。地文はRL単節縄文で、隆帯貼付以前に施文されているが、部分的に隆帯貼付後にも施文が行われている。2～5は混入であろう。4、5は同一個体。6、7も同一個体で、口縁部に渦巻文と栴川区画文を持つ深鉢。口縁部には突起があり、表面に沈線による渦巻文を持つ。1と同様、渦巻文を起点として胴部の懸垂文が写りかされる。11は口縁部に2段の円形刺突列が2帯にわたって施される深鉢で、胴部に上位には磨消

縄文帯による波状文もしくは渦巻文を持つ。円形刺突は上下でややずれながら巡る。連弧文系の刺突と関連を持つのであろう。13～15は連弧文系土器の破片。

第40号住居跡出土土器 (第196図10～16)

第196図10、11は連続爪形文を持つもの。12～16はキャリバー形深鉢で、12は磨消縄文による波状文を持つ。13は磨消帯が波状構成、または渦巻文となるもの。14、15は同一個体で、無文地上に沈線で垂線、波状文等が施文される希な例である。

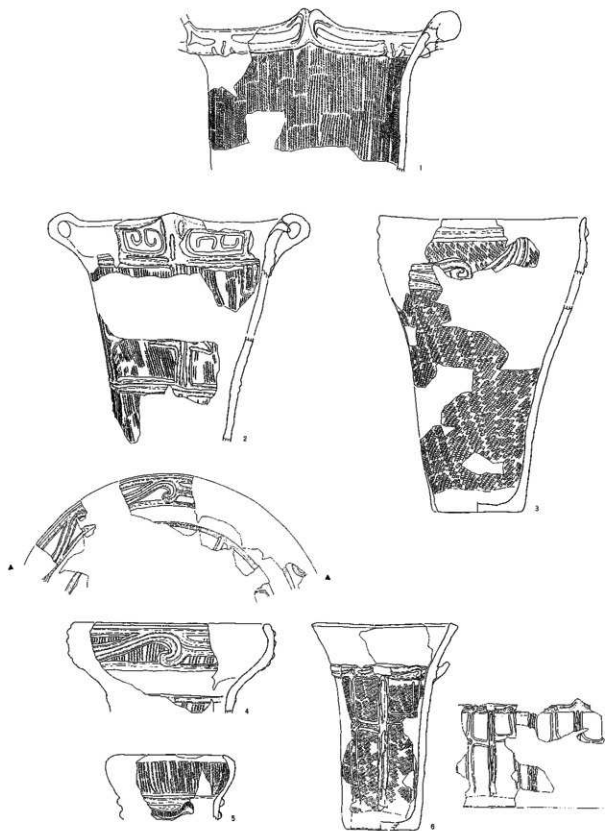
第41号住居跡出土土器 (第198図)

第198図1は幅広の沈線による振幅の大きな波状文が舌れ部の上位に施文され、胴部下半には上向きの弧線文が施文される。下半には1単位蕨手状渦巻文が施文されている。さらに1単位、縦位の沈線のみ確認され、その上端が欠損しているが、これも蕨手状渦巻文になる可能性がある。地文はRL単節縄文だが、一部櫛歯状工具による緩かな波状の条線が施文されている(展開図中では周囲と異なる網で示してある)。2は深鉢の胴部下半の資料。幅が広く、上面がやや窪んだ隆帯による懸垂文が施される。3は口縁部が外反し、体部が球形になるもの。双耳壺になる可能性がある。11

第186図 第24号住居跡出土土器(2)

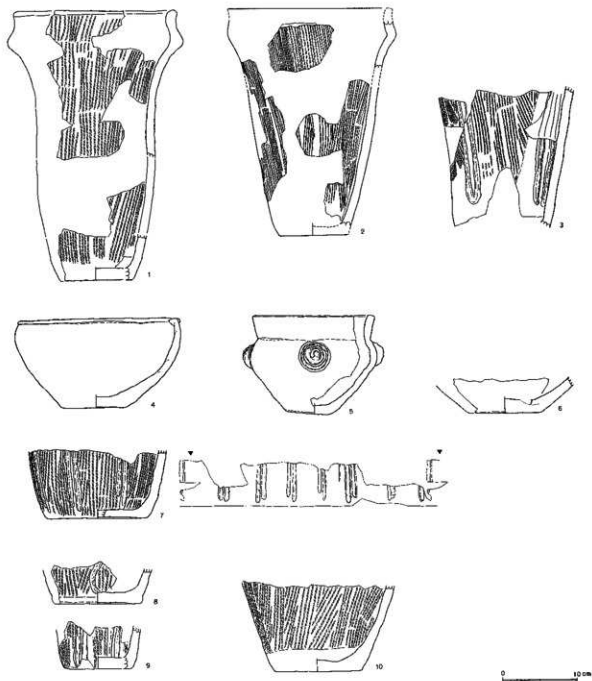


第187图 第25号住居跡出土土器(1)

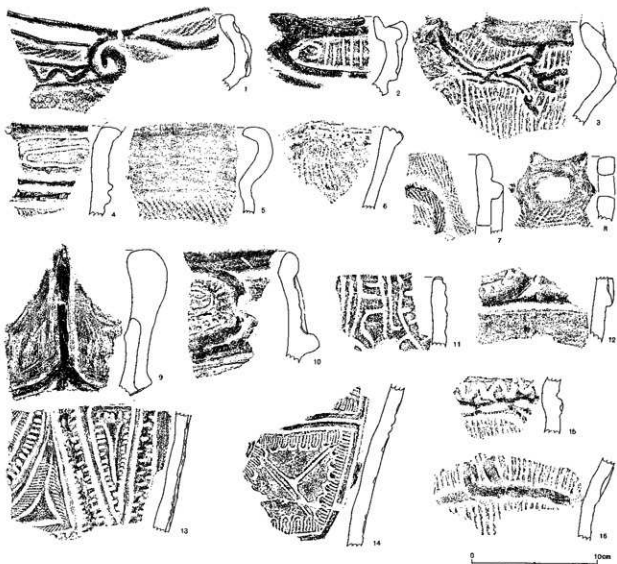


0 10cm

第188図 第25号住居跡出土土器(2)



第189図 第25号住居跡出土土器(3)



縁部は無文で、下端の区画は断面が三角形の、張り出し状の隆帯である。胴部には蕨手状渦巻文と弧線文が交互に施文される。地文はRL単節縄文である。

4, 5はキャリパー形深鉢の口縁部。文様帯が狭小で、渦巻文が区画を構成する。6, 7は波状口縁の深鉢で、口縁部直下に刺突列を持つ。山形の磨消縄文が認められる。8~10は深鉢。11は同図3と同様の器形を持つと思われる。12は管糸系の深鉢胴部で、胴部に綾杉状の沈線が施文される。13は櫛歯状工具による条線を持つ。14, 15は深鉢胴部で、磨消縄文を伴う。

第42号住居跡出土土器 (第200図1~3)

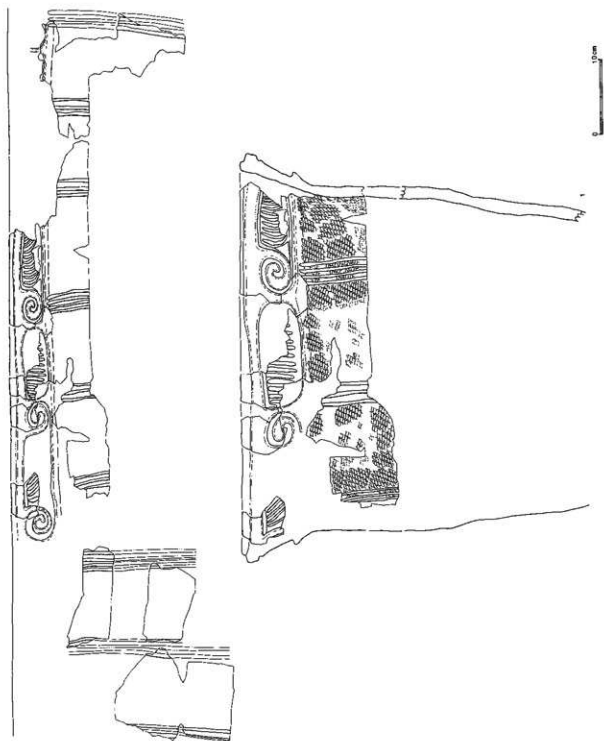
1は口縁部無文の深鉢。2は深鉢で、口縁部下端に

短沈線が縦位に施される。3は深鉢の頸部で、隆帯が巡る。

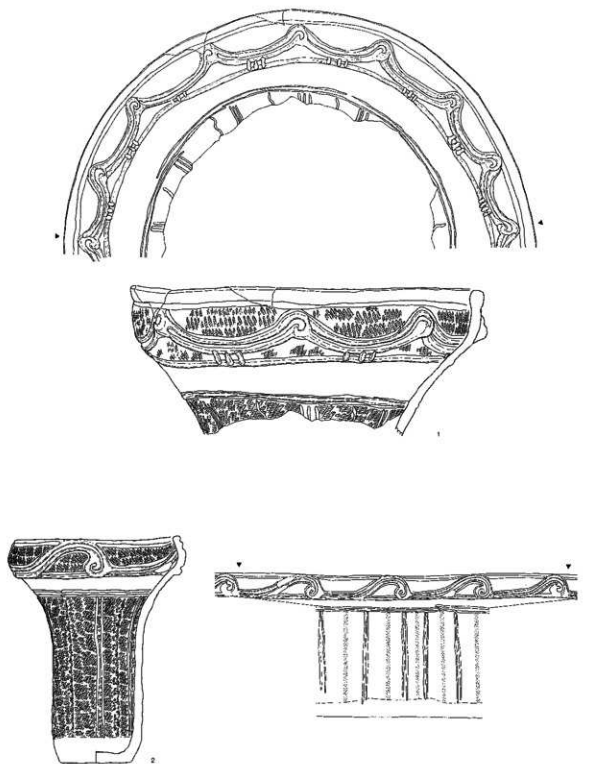
第43号住居跡出土土器 (第199図)

第199図1は大形のキャリパー形深鉢口縁部破片で、狭小な口縁部文様帯に渦巻文と楕円区画が交互に施文される。区画内には沈線列がRL単節縄文地文の上に施文されている。5, 6とともに炉跡を構成していたものである。2~4はキャリパー形深鉢の頸部。5は深鉢胴部で、磨消縄文を伴う懸垂文が施文される。地文は0段多条のRL縄文である。6も深鉢胴部である。7の地文はL撚りの摺糸文。8, 9は同一個体で、櫛歯状工具による条線の地文の上に半截竹管による波

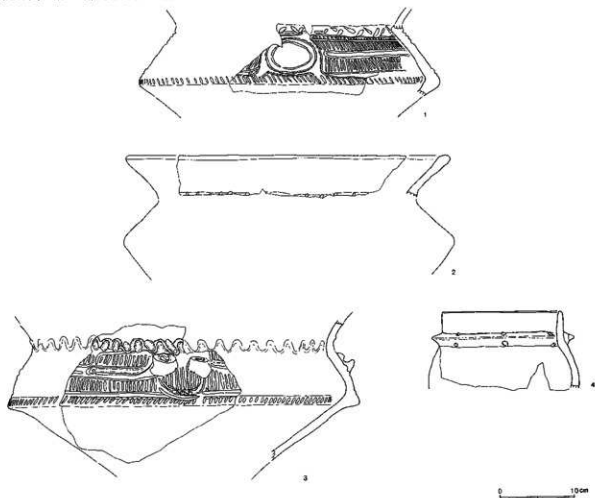
第190図 第26号住居跡出土土器



第191图 第29号住居跡出土土器(1)



第192図 第29号住居跡出土土器(2)



状文が縦位に施文される。

第44号住居跡出土土器 (第200図)

いずれも竹管による爪形文を伴う。4は深鉢口縁部で、5は縦走する隆帯の両脇に爪形文と鋸歯文が施文されている。

第45号住居跡出土土器 (第200図6~10)

第200図6には沈線によって崩れた交互刺突状のモチーフがみられる。7は刻み目列が認められる。8は口縁部突起で、渦巻文を伴う。9は底部で、雲母を含んでいる。10はキャリパー形深鉢の口縁部で渦巻文と区画文が施文される。

第47号住居跡出土土器 (第200図11~15)

第200図11は爪形文が施文され、雲母を含んでいる。12は隆帯上に絞形状の刻み目が施されるもの。13~15はキャリパー形深鉢である。

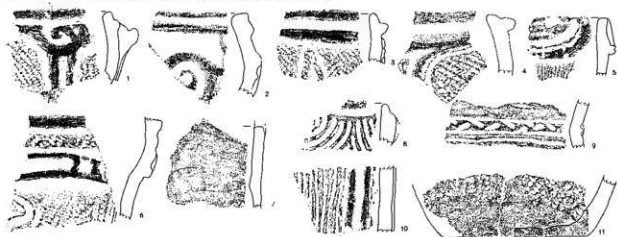
第48号住居跡出土土器 (第200図16~19)

第200図16は小形の鉢で、口縁部に2条の沈線と、爪形文が横位に施文される。17は深鉢の口縁部突起で、凹形の窪みを持つ。突起下端から隆帯が垂下し、口縁部に連なる。口縁部には沈線が充填される。18は文様帯の上端が画された深鉢胴部。渦巻文が認められる。19は小形の深鉢で、2条の隆帯が口縁部下に巡る。

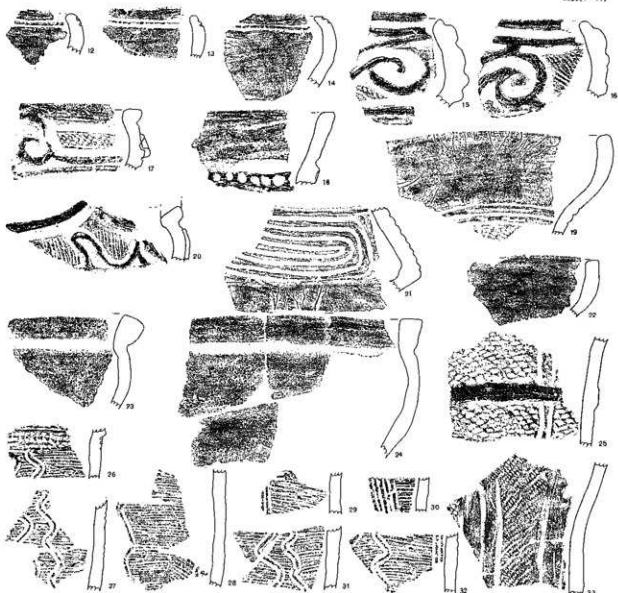
第50号住居跡出土土器 (第200図20~28)

第200図20は眼鏡状の口縁部突起。21、22も口縁部の突起部分である。刻み目列を有する。23は頸部が張り出す深鉢で、口縁部に大柄な蛇行状の隆帯が表現されている。25は深鉢で頸部に大きく張り出す隆帯が貼付される。口縁部に刻み目を持つ。口縁部区画内には鋸歯文が施文される。26、27は同一個体。縦走する隆帯上にRL縄文が施文される。28は深鉢胴部で無文のもの

第193图 第28号住居跡出土土器・第29号住居跡出土土器(3)



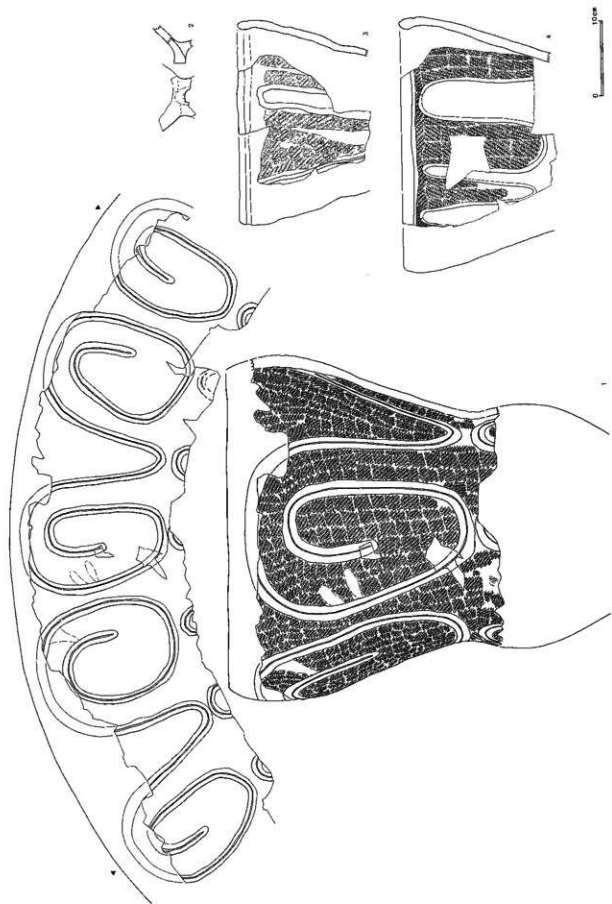
S.28(1-11)

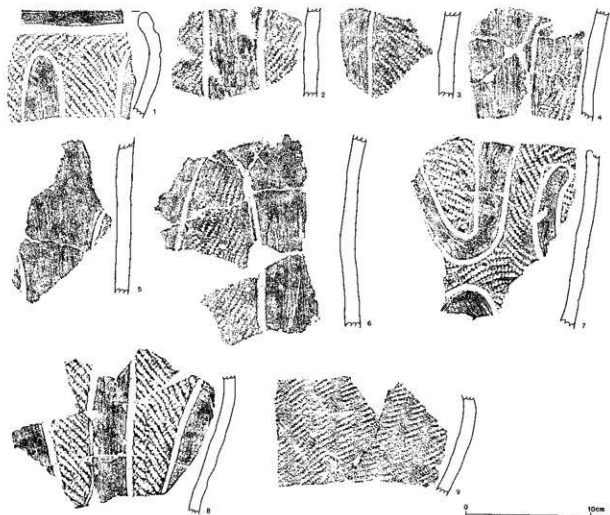


S.29(12-33)



第194図 第34号住居跡出土土器(1)





の。頸部に隆帯を持つ。

第51号住居跡出土土器 (第201図1~9)

第201図1は装飾性の高い突起で、内外面、左右の平坦面いずれにも蛇行状隆帯、刻み目等の装飾がなされている。口縁部には突起から垂下する蛇行状隆帯と横走る蛇行状隆帯が施文される。2は口縁部突起で、頂部が欠損している。上面に刻み目のある隆帯が施文される。3も深鉢の口縁部で、隆帯上に刻み目が施されるもの。4は口縁部突起で内外面に装飾を持つ。5、6も深鉢で、いずれも口唇部に細かな刻み目に加えられる。6は口縁部下に口唇部と同様の装飾を持つ隆帯があり、これが区画をなしている。7は鉢と思われる。沈線で渦巻文等が施文される。8、9は深鉢の頸部で、8は2条1組の隆帯による波状文が、9は隆帯による

重圏文が施文される。

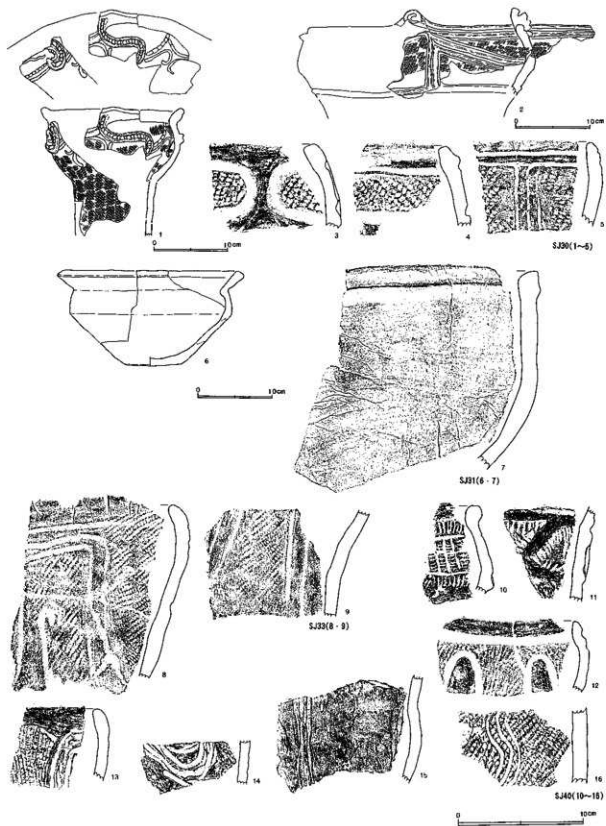
第52号住居跡出土土器 (第201図10~13)

第201図10は深鉢口縁部で隆帯、押し引き文が施文されるもの。11は鉢または深鉢で、頸部がやや肥厚して外傾する。頸部括れ部に隆帯があり、隆帯上に刺突と連続刻み目が施文される。12は器形は不明だが、多喜窪タイプの胴部と思われる。13は深鉢頸部で、2条1組の隆帯による区画が認められ、区画状に交互刺突により蛇行状の部分を作り出されている。

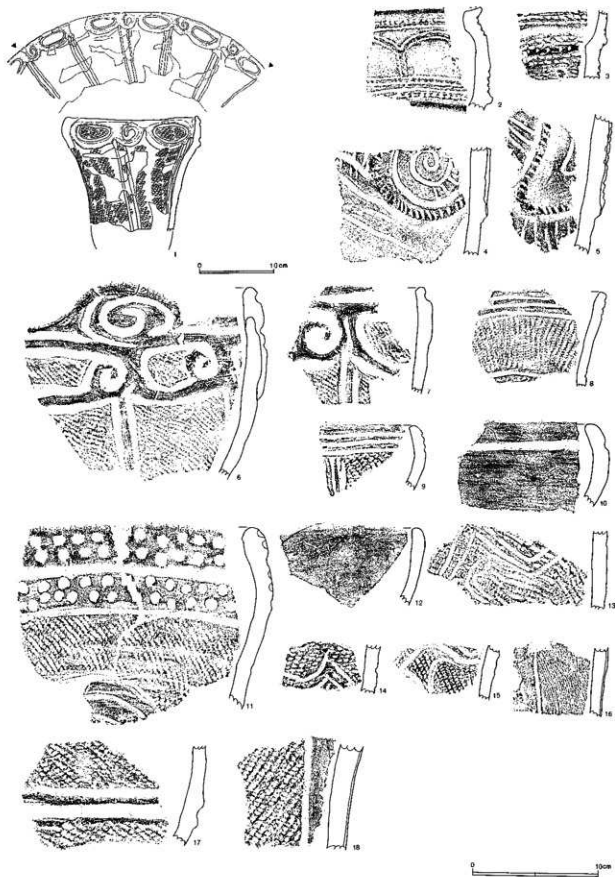
第54号住居跡出土土器 (第201図14~20)

第201図14は炉体土器で、口縁部が外傾し、頸部が括れる。口唇部端面は平坦化され、わずかに肥厚する。胴部上半がわずかに膨らむ。括れ部は2条の沈線で画される。胴部はLR単節縄文の横位施文という希な手

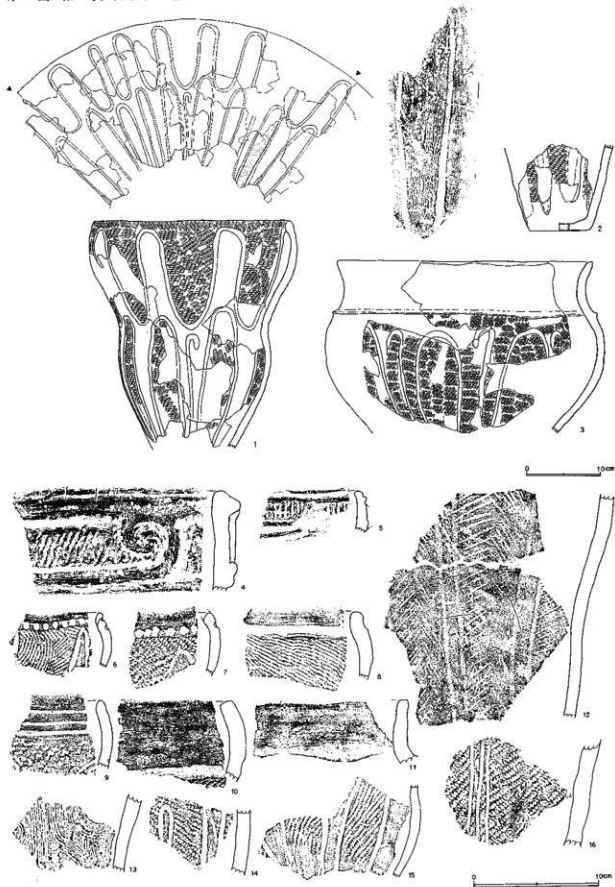
第196図 第30・31・33・40号住居跡出土土器



第197图 第39号住居跡出土土器



第198図 第41号住居跡出土土器



第199图 第43号住居跡出土土器



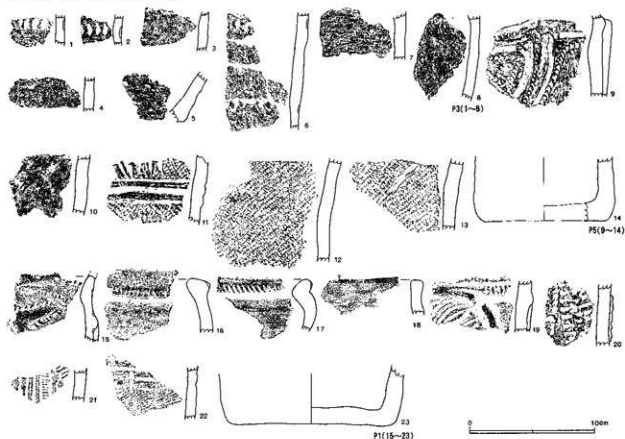
第200図 第42・44・45・47・48・50号住居跡出土土器



第201图 第51·52·54·57号住居跡出土土器



第202図 第67号住居跡出土土器



法による。15は阿玉台式系深鉢の口縁部突起頂部で、端面に細かな刻みを持つ。16は鉢で、頸部に屈曲を持つもの。口唇部は肥厚する。隆帯による大きな鋸歯文が描かれ、その両脇に押し引き文が施文される。胎土に雲母を含む。17はキャリパー形深鉢の口縁部。単位的な意匠が展開すると思われる。18は浅鉢、19は深鉢の頸部で、隆帯による区画がある。20は阿玉台式系深鉢の突起で、双頂部の1端が欠損したもの。押し引き文が施文される。

第57号住居跡出土土器 (第201図21, 22)

第201図21はキャリパー形深鉢の口縁部に近い部分。渦巻つなぎ弧文が施文される。22は深鉢の胴部上半に2条1組の隆帯による渦巻文が施文されるもの。隆帯上には刻み日がある。

第67号住居跡出土土器 (第202図)

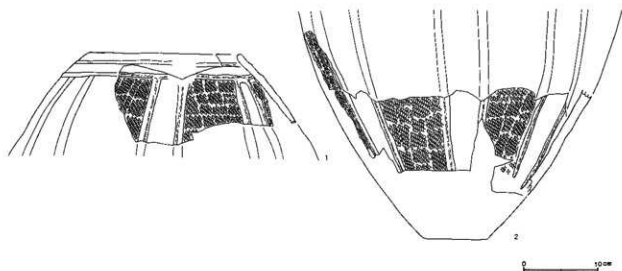
第202図掲載の拓影図はすべて本住居跡の柱穴出土である。1~8がP3、9~14がP4、15~23がP1から検出された。1~6は同一個体。無文地上に爪形文が

横位に施文される。雲母を含む。9は深鉢で、弧状に垂下する隆帯上に刻み日を持つ。区画された内部も連続刺突で充填される。10は無文で、胎土に雲母を含む。12, 13は同一個体で、R L単筋縄文が縦位に施文される。14は無文の底部破片。15は深鉢口縁部で、隆帯による装飾を持つ。隆帯両脇には刻み日が加えられる。胎土に雲母を含んでいる。16は口唇部が肥厚し、口唇部下に刺突列を持つ深鉢。17は口唇部に刻み日を持つ。18はやや外反する口縁部を持つ深鉢。19, 20は隆帯による装飾を持つ。

第69号住居跡出土土器 (第203図)

第203図1, 2はいずれも炉体土器である。この両者が同一個体であるかどうかは極めて微妙であるが、同一個体と判断した。ただし、器形の復元は困難で、両者を別々に掲載した。口縁部は平坦と考えられるが、何らかの突起を有するか、小さな波状を呈するかもしれない。口縁部には2条の隆帯が巡り、下位の隆帯から隆帯による磨消帯が縦走して垂下する。地文はR L

第203図 第69号住居跡出土土器



単節縄文である。器壁は薄く、焼成は良好である。

第70号住居跡出土土器（第204図）

第204図1は炉体土器で、大形の深鉢胴部破片である。幅広の沈線による磨消縄文帯が縦走る。地文はRL単節縄文である。

第5号土壌出土土器（第207図1～3）

第207図1は無文の口縁部。2の底部は端部が張り出している。3は磨消帯が垂下するキャリパー形深鉢の底部。

第6号土壌出土土器（第207図4～7）

第207図4は深鉢の口縁部で、破片の下端に沈線が認められる。5、6は沈線間に刺突列を有するもの。7は刺先状モチーフの磨消縄文である。いずれも称名寺式に属する。

第8号土壌出土土器（第205図1、2）

第205図1は頸部捫れ部以上が欠損しているが、おそらく、外傾する頸部を有するものと思われる。最大径は胴部の下半にある。頸部に3列の円形刺突列が巡る。胴部には6単位の縦走る隆帯が貼付され、その上面に小さな弧状の刻みか連続して加えられる。隆帯間には3条1組の沈線が垂下する。沈線間には磨消が加えられる。地文は0段多条のLR縄文である。2は頸部が無文で、外傾する深鉢。口縁は平坦である。頸

部に3条の沈線を有する。胴部上端に1列の円形刺突列が巡り、胴部には3条1組の垂線と1条の蛇行状垂線が交互に施文される。

第9号土壌出土土器（第205図3、4）

第205図3は深鉢の胴部で、地文のみが施文されるもの。地文はLR無節である。内面には多数の円形の小剥落痕が認められる。4は深鉢の底部で同じく地文のみ観察される。地文はLR単節縄文である。底部端部はやや張り出している。

第13号土壌出土土器（第207図8～11）

第207図8～10はキャリパー形深鉢の口縁部。8は口唇端部に耳状の突起を持つ。口縁部には相対する弧状の沈線が施文される。9、10の口縁部文様帯は狭小で、9は渦巻文と区画が交互に施文される。11は橋状把手が剥落している。

第18号土壌出土土器（第208図）

第208図1、2は同一個体。キャリパー形深鉢で、口縁部文様帯が狭小なもの。渦巻文と区画が交互に配されると思われる。区画内部には縦列沈線が充填される。胴部の上位には3条1組の沈線による波状文が巡る。口縁部文様帯に近い位置に櫛歯状工具による条線が施文され、その下位にRL縄文が施文される。3～5は大柄な隆帯によって口縁部に区画等の文様が配される深鉢。4は補修孔を持つ。6～10は口縁部文様帯を持

第204図 第70号住居跡出土土器



たないキャリパー形深鉢で、口縁部には無文帯、沈線、刺突列が巡る。6は磨消縄文を伴う。11は微隆起による区画状のモチーフが施される深鉢。口縁部が直立する。12は橋状把手が欠損している。13～20は胴部破片で、磨消縄文、微隆起等で文様が描かれるもの。19は微隆起によって上下2段の構成の文様が描かれる。21～23は櫛歯状工具による条線を地文とするもの。

第20号土壘出土土器 (第207図12～21)

第207図12は環状の把手を持つ深鉢である。把手上面にも地文が施文される。13, 14は深鉢口縁部。15～19は深鉢胴部で、磨消縄文手法によって弧線文等が描かれるもの。20は櫛歯状工具により、波状の構成の地文が描かれる。

第26号土壘出土土器 (第209図1～5)

第209図1～3は同一個体。口縁部に斜位の沈線を持つ深鉢。4, 5も同一個体で、深鉢の底部である。

第29号土壘出土土器 (第209図6)

第209図6は口縁部無文帯を有する深鉢で、地文はR L単節縄文が口縁部付近は横位、以下は縦位に施文される。

第30号土壘出土土器 (第209図7)

第209図7は大洞B C系の鉢の頸部である。

第33号土壘出土土器 (第209図8～10)

第209図8, 9は同一個体で沈線による曲線文の描かれるもの。10は口唇部に円形の突起を持ち、磨消縄文による装飾が施される。

第48号土壘出土土器 (第209図11)

第209図11は大形のキャリパー形深鉢口縁部。渦巻

文と区画が交互に配される。

第67号土壘出土土器 (第209図12, 13)

第209図12, 13は同一個体で、胴部に横位の区画があり、その下位にごく細い沈線で弧線文系のモチーフが施文される深鉢。薄手である。

第71号土壘出土土器 (第209図14, 15)

第209図14は円形の貫通孔を有する深鉢の口唇部突起。15も深鉢の山形突起で、外面には上面に刻みを持つ隆帯が、内面にはボタン状突起が貼付される。

第78号土壘出土土器 (第209図16)

第209図16は胴部に懸垂文とそれに付随するモチーフを持つもの。地文はL燃りの熱糸文である。

第80号土壘出土土器 (第209図17～19)

第209図17は深鉢の口唇部突起で、内外面に刻み目を持つ。18は胴部に隆帯による区画を持つもの。19も胴部に隆帯によって文様が展開するもの。地文はL燃り熱糸文施文後、一部にR L縄文が施文される。

第81号土壘出土土器 (第209図20, 21)

第209図20は櫛歯状工具による地文を持つ。21の頸部区画は隆帯間に結節を持つもの。

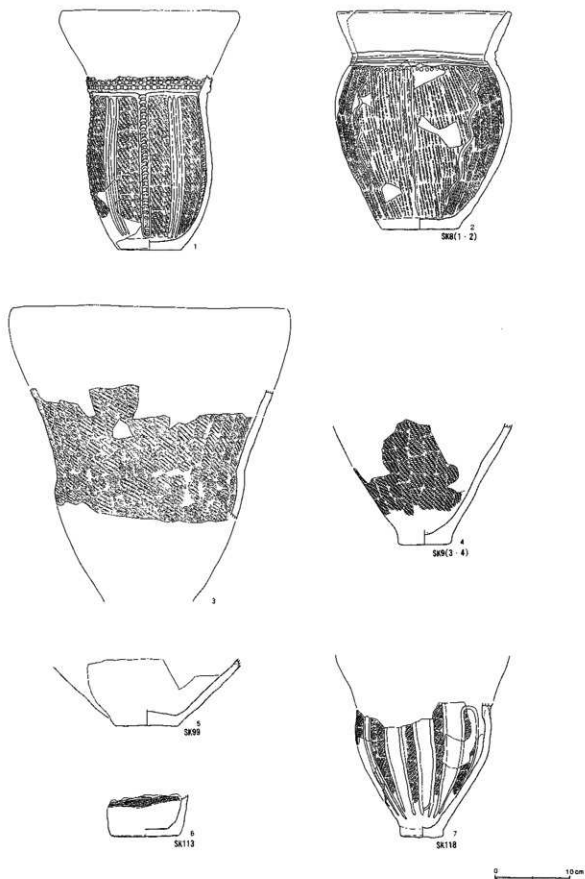
第83号土壘出土土器 (第209図22)

第209図22は口縁部に連続爪形文と鋸歯文が巡る。頸部は強く屈曲する。口唇部に突起を持つが欠損している。

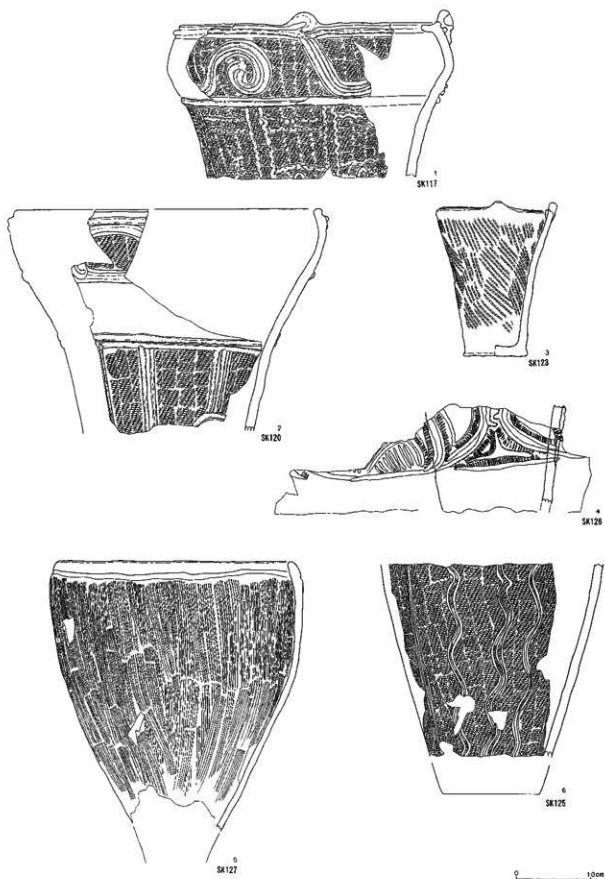
第99号土壘出土土器 (第205図5, 第210図, 第211図)

本土壘からは堀之内1式の資料が小破片ながらまよって検出されている。第205図5は無文の底部破片。第210図1～3は口唇部がわずかに屈曲する深鉢。1,

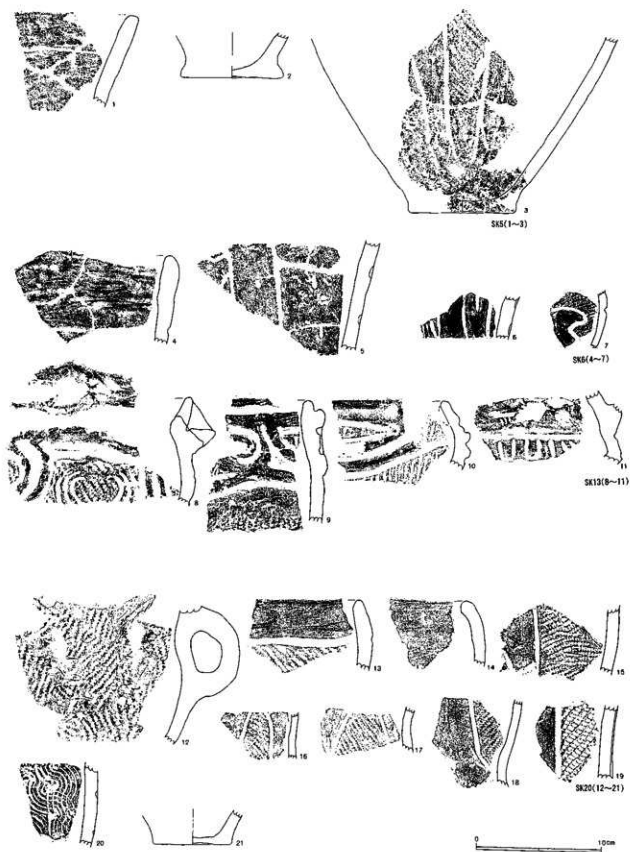
第205図 縄文時代土壇出土土器(1)



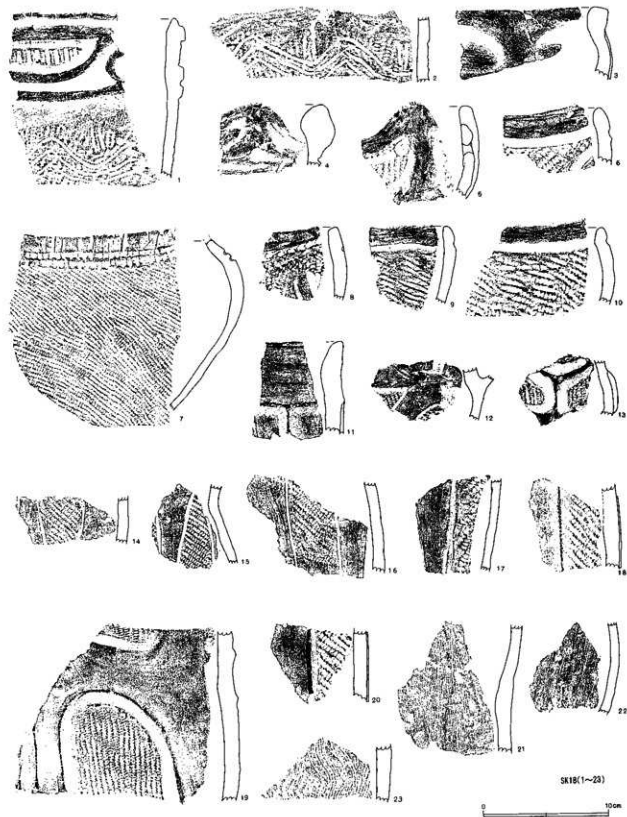
第206図 縄文時代土壇出土土器(2)



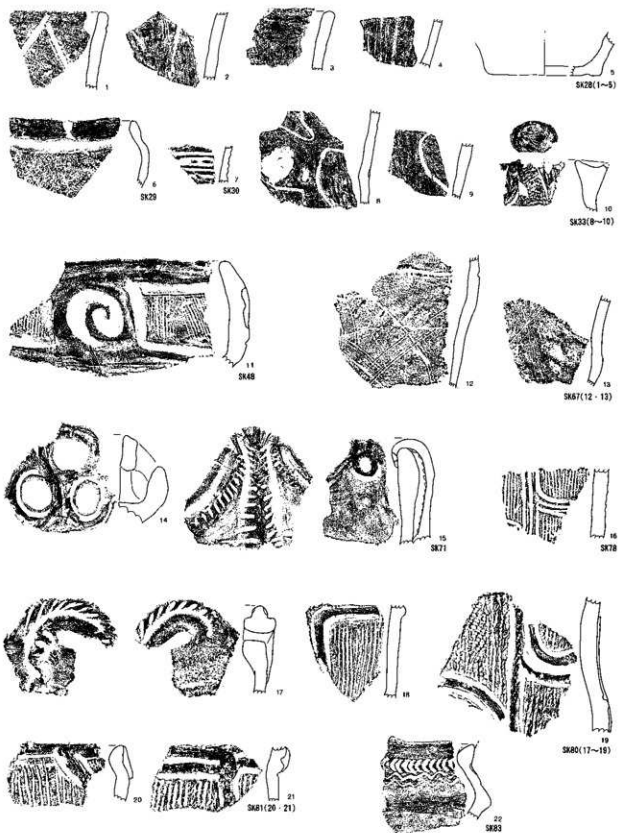
第207図 縄文時代土壙出土土器(3)



第208図 縄文時代土壙出土土器(4)

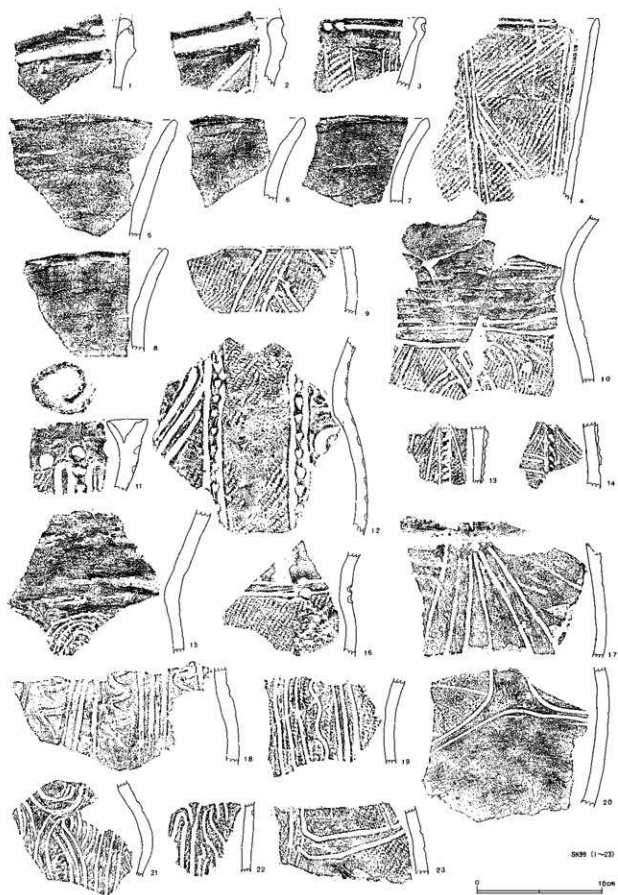


第209図 縄文時代土壇出土土器(5)

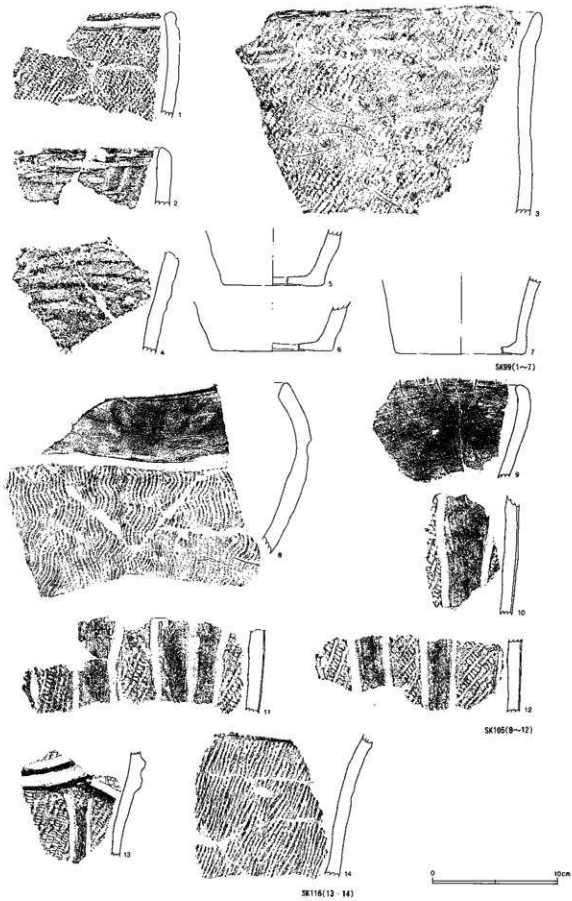


0 10cm

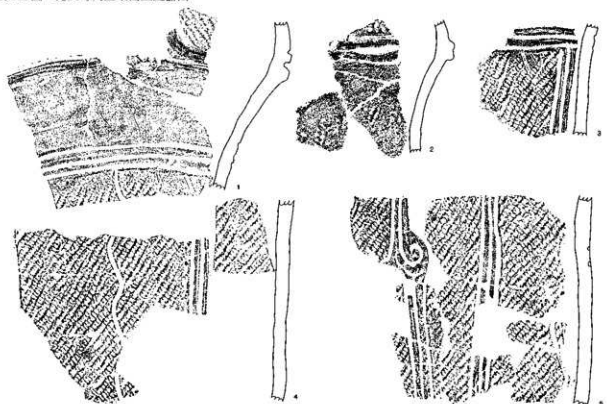
第210圖 縄文時代土壇出土土器(6)



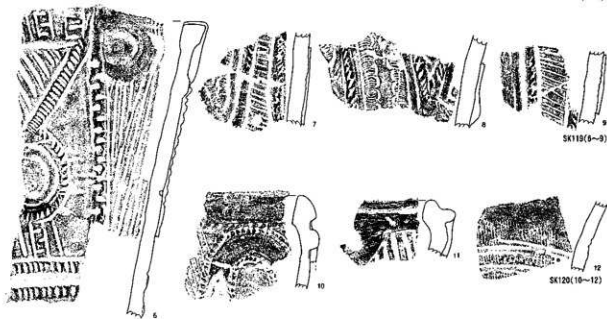
第211図 縄文時代土壇出土土器(7)



第212図 縄文時代土壇出土土器(8)

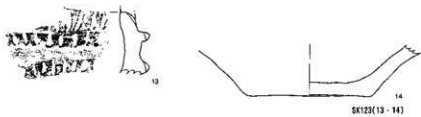


SK118(1-5)



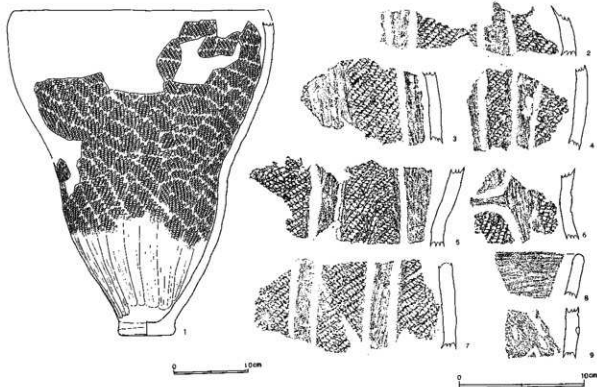
SK119(6-9)

SK120(10-12)



SK123(13-14)

0 10cm



2は口唇部直下に大めの沈線が巡り、1, 3には口唇部に刺突が認められる。3には磨消縄文が伴う。4は口縁部が直線的に開くもの。口唇部先端が尖る。胴部には直線で縦位、斜位の3条1組の沈線が施文される。6～10は同一個体である。5も同様の器形で、無文の口縁部が外反して開く深鉢。9, 10の胴部には縄文地文の上に沈線で斜位の沈線群が施文される。11は口唇部突起で、頂部に円形の窪みを持つ。突起下には縦位の刺突列と沈線による弧状のモチーフが施文される。12は縦位の沈線群とそれを連結する斜位の沈線群、曲線文が施文されるもの。縦位の沈線間には刺突列が施される。13, 14は縦走する隆帯上に刻み目が加えられ、隆帯間を斜位または鋸歯状の沈線が充填するもの。15, 16は頸部が括れる深鉢。15は頸部に区画がなく、胴部には沈線群で曲線的なモチーフが施文される。16は区画を持ち、刺突が認められる。17は無文地上に沈線群が施文されるものだが、破片上端に擬口縁をもち、擬口縁上に刻み目が加えられている。18, 19は縦走する直線の沈線と蛇行状沈線が組み合うもの。21,

22は弧線が連続状に展開し、その間を沈線群が充填するものである。20, 23は大柄な文様が展開するが構成は不明である。第211図1, 3はLR単節縄文が横位に施文される深鉢。1は口唇部下に沈線が巡る。2は無文の深鉢で、4と同様、器面に粗くなでつけられた調整痕がある。5～7は底部で、7は端部が張り出している。

第105号土壇出土土器 (第211図8～12)

第211図8は口縁部に無文帯を持ち、胴部には櫛歯状工具による波状の条線が施文される。9は口唇部がわずかに内曲するもの。10～12は同一個体で、磨消縄文帯が縦走する。11の磨消帯の内部に縦位の沈線があり、蕨手状沈線文の一部と考えられる。

第113号土壇出土土器 (第205図6)

第205図6は深鉢底部で、胎上に雲母を含んでいる。現存部分の上端に木口状の工具を用いて、緩やかな波状の沈線群を描いている。

第116号土壇出土土器 (第211図13, 14)

13は深鉢頸部で、口縁部文様帯の下端が弧状となる。

湯巻文の下端と考えられる。14はL熱りの熱糸文が施文される。

第117号土壌出土土器 (第206図1)

第206図1は口縁部文様帯に2条1組の隆帯による横S字文が施文される。隆帯脇の沈線は半截竹管による。胴部にはRL単節縄文の地文施文後、半截竹管によるコンパス文が2条1組で縦位、横位に施文される。この竹管文は口縁部文様帯にも施文されている。胴部中央で、この竹管文が逆U字形を取る部位があり、何らかのモチーフが展開すると思われる。

第118号土壌出土土器 (第205図7、第212図1～5)

第205図7はキャリパー形深鉢胴部下半で、現存部分上端に擬口縁を持つ。底部端部はわずかに張り出している。磨消帯が縦走するが、一部弧状になっており、H字状になる可能性がある。第212図1～3は深鉢頭部、1は無文帯を持つ。4、5は胴部で、3条1組の沈線による垂線を持ち、5には蕨手状沈線文が施されている。

第119号土壌出土土器 (第212図6～9)

第212図6は口縁部が直線的に開く深鉢。口縁部以下直接的に交互刺突を持つ隆帯、上面に刻み目を持つ隆帯等で区画がなされ、パネル文的な文様が描かれる。区画内は円文を中心に、沈線列が充填される。7～9は同一個体で、6と同様の文様帯構成を持つ。受熱し、歪みが激しい。

第120号土壌出土土器 (第206図2、第212図10～12)

第206図2は頭部の括れが緩やかなキャリパー形深鉢。頭部無文帯の幅が広い。口縁部文様帯には隆帯による区画が描かれているが、欠損が多く、全体は不明である。胴部には隆帯による懸垂文と湯巻文が描かれている。第212図10は阿玉台式系の深鉢で、胎土に雲母を含んでいる。口唇部端部は肥厚し、隆帯による文様を持つ。隆帯脇に連続押し引き文が施文される。

第123号土壌出土土器 (第206図3、第212図13、14)

第206図3はほぼ完形の小形深鉢。2単位の山形突起を持つ。口唇部状に不安定な沈線が1条認められる。第212図13は鉢の口縁部で、2条1組の隆帯が巡り、隆

帯上には刻み目が加えられている。

第125号土壌出土土器 (第206図6)

第206図6は深鉢胴部で3条1組の垂線と、2条1組の蛇行状垂線を持つ。地文はRL単節縄文。

第126号土壌出土土器 (第206図4)

第206図4は勝坂式系鉢形土器の胴部。胴部文様は大きく2単位となり、分割線と思われる部分の下位に三叉文が施される。三叉文の上位はやや隆帯上に盛り上がり、短沈線が交互に入り組んでいる。胴部文様帯下端は1条の施文単位で区画するのではなく、各文様意匠からつながる線が水平に配され、見かけ上1条の区画となっている。

第127号土壌出土土器 (第206図5)

第206図5は大形の深鉢。土壌に伏麦状に設置されていた。底部は欠損している。口縁部は内湾する。口縁部に無文帯があり、下端はやや広めの沈線で画される。沈線以下は全面櫛歯状工具による条線が施されている。

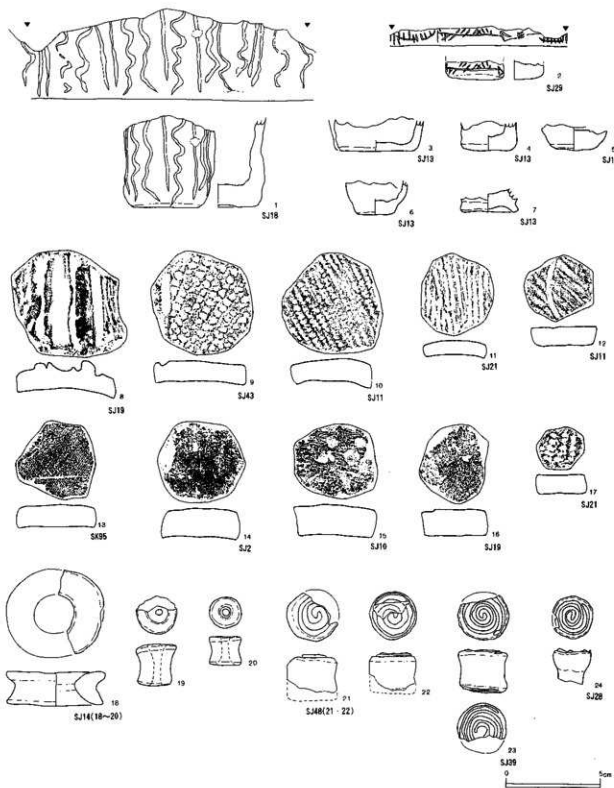
第1号埋壺出土土器 (第213図)

第213図1は口縁部が緩やかに内湾するキャリパー形深鉢。口唇部は欠損している。胴部下半は底部から上方に向かうケズリによって成形され、その痕跡がそのまま残されている。胴部中央から上位にかけてはRL単節縄文のみが施文される。底部端部は張り出している。2～9は1の掘り込み面に散在していた破片。2～7は同一個体。磨消帯が縦走する深鉢。6など、沈線が弧状となる部分がある。8は無文の口縁部。9は刺突を持つ称名寺式の破片。

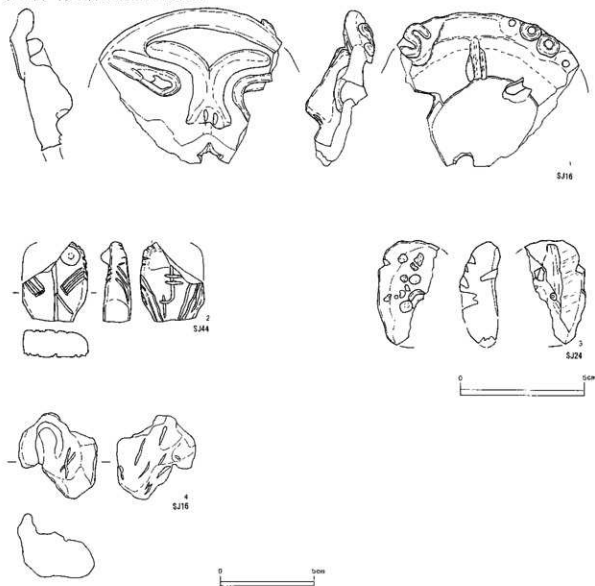
b. 土製品 (第214図、第215図)

第214図1～7はミニチュア土器である。1は深鉢を模したものの胴部である。胴部の中央がわずかに括れる。懸垂文が先端の鋭い工具による沈線で描かれる。直線と蛇行状の垂線の組み合わせによる。胎土にはほとんど砂粒を含まない。第18号住居跡出土。2は底部で、へら状工具による刻み目、ごく細い沈線群によつ

第214図 縄文時代遺構出土土製品(1)



第215図 縄文時代遺構出土土製品(2)



て不規則な文様が描かれている。第29号住居跡出土。3, 4, 6, 7は第13号住居跡からまとめて検出されたものである。いずれもミニチュア土器の底部である。3がやや大形、4, 6, 7は手びねり状で、7の端部は張り出し、高台状となる。5は第1号住居跡出土で、やはりミニチュア土器の底部である。

第214図8～17は土製円板。8は隆帯が施文されている破片を利用している。9～11は地文上に沈線を持つもの。13～16は無文のもの。

第214図18～24は耳栓。18～20は第14号住居跡から検出されている。18は環状の大形のもの。約1/2が欠損している。成形後あまり形を整えずに焼成している。

19, 20は対をなすものと考えられる。小形で、断面の中央がやや窪む筒形を呈する。中央に貫通孔がある。20は漆が塗布された痕跡がある。21, 22は第48号住居跡出土で、これも対をなすと考えられる。両者とも片面の平坦面のみ現存し、この面には渦巻文が施文されている。23は第39号住居跡出土。両平坦面に渦巻文が施文される。24も平坦面に渦巻文が施されるが、形態が21～23と異なり、中央部に括れを持つ。

第215図1は第16号住居跡覆土上層から検出された人面部の破片。おそらく、釣り手土器の釣り手頂部につけられていたものと考えられる。中空で、2枚の粘土板を張り合わせて作られている。顔面部上端は粘土

帯が貼付されて肥厚する。眉から鼻は隆帯がY字状に貼付されて表現されている。鼻孔は下方からの刺突によって表現される。眼の周囲にも細目の隆帯が貼付される。口脣の上端はへう状工具によって刻まれる。下端は欠損し、現存していない。内面には頭部裝飾の一部が残存している。鬚状のものを表現したと考えられる裝飾が平形、蛇行状の隆帯貼付によってなされる。円形の隆帯の中心は刺突によって深く窪んでいる。頭部内面の中央に上方からの刺突痕があるが、これは鬚の表現に伴うものであろう。図中網掛けで示した部分は、貼合せか'はかれた部分である。

2は小形の土偶。胴部のみ現存する。矩形の胴部で、下端が括れている。乳房は粘土粒の貼付で表現され、1単位のみ現存する。胴部表面中央に縦位の沈線が引かれ、その両側に3条1組の斜位の沈線とそれを連結する短沈線が施文される。背面には中央に鍵の手状の沈線が引かれ、それと交差する短沈線が施文される。また、胴部下端の括れに沿うように斜位の沈線が引かれる。沈線はいずれも非常に細い。

3は、楕円形の平面形を有し、背面が平坦な土製品。表面には刺突がランダムに加えられる。背面には1条の沈線がある。背面の平坦面には擦痕が認められる。4は焼粘土塊である。砂粒をほとんど含まず、成形時の亀裂が多数残っている。

c. 石器 (第216図～第222図)

第216図1～18は石鏃である。石鏃は比較的小形のものが多く、2のみ、やや大形になるようである。石材は黒曜石とチャートによるものがほとんどである。7は調整剝離によって、微細な凹凸が全面にわたって施されているものである。13～16はごく小形の石鏃。16は素材の剥片の剝離面を大きく残し、縁辺に急角度の調整を加えただけのものである。18は凹部が明確に作り出されていない。19はチャート製のポイント。20はスクレイパーであろう。21は頁岩製で、小形の打製石斧の破損品と考えられる。22、23はやや大きめの剥片を素材としたスクレイパーで、調整によって円形に

近い形態を作り出している。22の側縁の一端には擦痕がみられる。

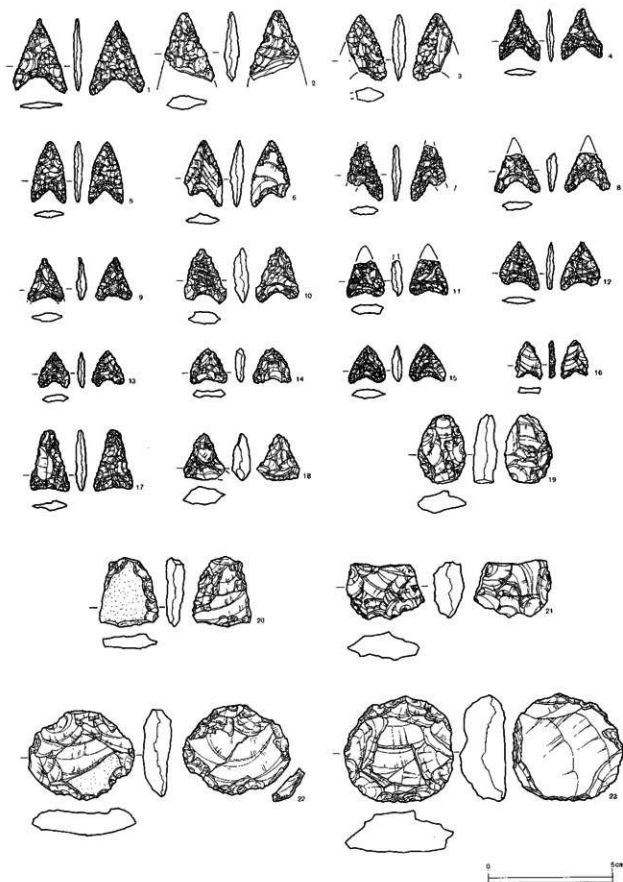
第217図は打製石斧である。打製石斧の石材は、粘板岩、砂岩、安山岩によるものが多い。形態は、刃部がやや広がるものが一般的で、一部短冊形を呈するものもある。刃部が広がるものは、基部に近い部分がわずかに括れを持つものもある。

1は自然面を大きく残すもの。背面にはほぼ全面に加工が及ぶ。2は刃部が一部欠損している。扁平な素材を用いている。3はやや小形で、基部と正面、背面の中央付近に擦痕が観察される。基部の擦痕は非常に細かい。4は括れ部が磨耗痕が認められる。5は全体に調整が粗く、周辺にも細かい剝離が認められない。6は刃部に、刃部から基部に向かって細かい擦痕がみられ、括れ部には磨耗痕が認められる。7は細身で薄い打斧で、正面の刃部から中央部にかけて細かい擦痕が認められる。特に正面の各剝離面の末端部は、磨耗が著しい。8は片面に大きく自然面を残すもので、その全面に粗い擦痕が観察される。9は一部破損しているが、おそらく楕円形を呈すると考えられる。全体に調整は粗く、細かな剝離は認められない。10は基部のみで刃部は大きく破損している。11は刃部と側縁の一部に敲打痕を持つ。また正面の一部に擦痕が認められる。12は短冊形を呈していたと考えられる。13も刃部に擦痕を有する。

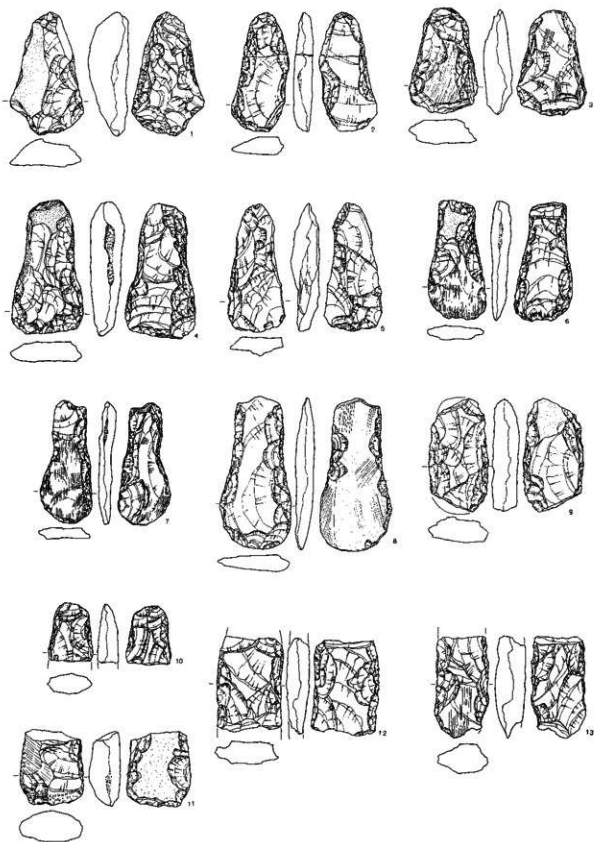
第218図1～14は磨製石斧。砂岩製のものが大半を占める。破損品が多く、形態についてはやや不明な点が多い。10～14は未製品、もしくは、再加工程途のものと考えられる。

1は断面がわずかに角張っており、基部に敲打痕が認められる。刃部に近い部分が大きく破損しているが、この破損面の周囲に敲打痕が施されており、何らかの再加工程が施されかけたものと推測される。2はほぼ完存しているもので基部と側縁の一部に敲打痕が観察され、その他は全体にわたって研磨が施され、特に、刃部は方向を変えながら研磨され、丁寧に仕上げられている。3は棒状の磨製石斧の破損品。基部に使用時

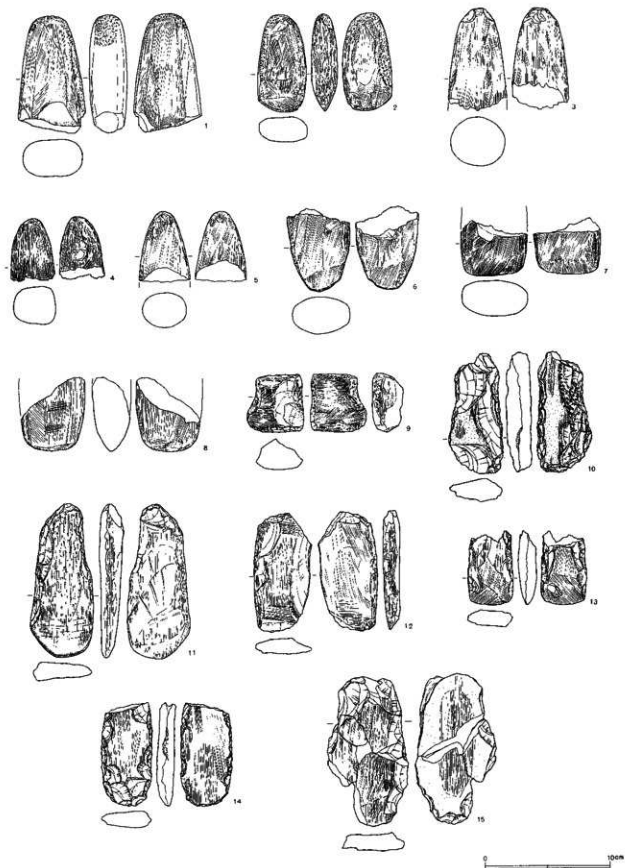
第216図 縄文時代遺構出土石器(I)



第217図 縄文時代遺構出土石器(2)



第218図 縄文時代遺構出土石器(3)



の欠損と思われる剥離痕が認められる。4、5とも基部のみ残存する破損品で、断面は片厚に近いもの。5の基部には敲打痕が残っている。6、7は基部が欠損しているもの。6は刃部に近い側縁に敲打痕が残っている。

9は磨製石斧に分類することは適当ではないかもしれない。緑色岩製で、縁辺部は敲打と研磨によってわずかに抉りか作り出されている。正面と背面は全面に研磨が施されている。調整剥離→敲打→研磨という手順で製作されているが、本来的な形態がどのようなものであったのか、不明である。10は側縁に大きく剥離が施され、剥離面上に敲打痕が認められる。自然面と剥離面の境界部分には研磨が施されており、新たな整形の途上であったと考えられる。11も同様で、正面のほぼ全面に敲打と研磨が施されている。基部に近い部分に抉りかがあり、抉りを構成する剥離面はまだ残されたままである。側縁は全体に縦方向の研磨が施され、正面、背面の境界はほぼ取り除かれている。背面もほぼ全面にわたって研磨が施されているが、旧剥離面による凹凸を消すまでには至っていない。12は正面に大きな剥離面があり、側縁に調整剥離がみられる。そしてほぼ全面にわたって研磨が施されている。敲打痕は認められない。13は砂岩製で、比較的形態の整ったものである。正面、背面とも中央付近は研磨が施されているが、両側縁に剥離痕があり、この部分には研磨が施されていない。わずかに剥離の末端にかかるように研磨がなされているだけである。14は基部が欠損している。正面、背面とも研磨が施されているが、刃部と両側縁には研磨が施されず、調整剥離がそのまま残っている。側縁には一部敲打痕が認められる。

第218図15はホルンフェルス製の砥石である。縁辺部が剥離によって整えられている。正面、背面の中央部に擦痕があり、わずかに凹んでいる。

第219図1～3は小形磨製石斧である。1は翡翠製で、一部しか残存していないが、きわめて精巧に作られ、研磨は丁寧である。おそらく、刃部が開く形態を有していたであろう。2は蛇紋岩製で、刃部が広がる

形態を持つ。3は粘板岩製のものである。基部が欠損し、刃部も再加工によって形が崩れている。

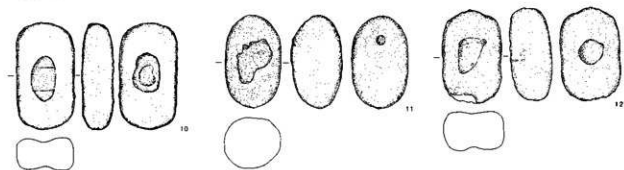
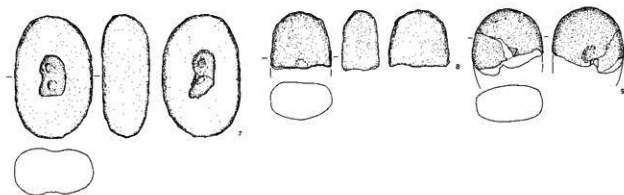
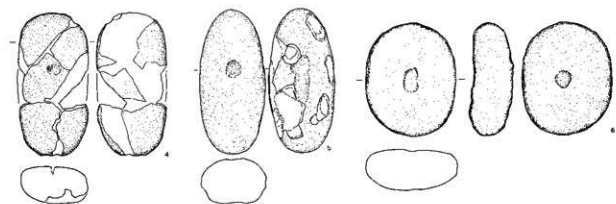
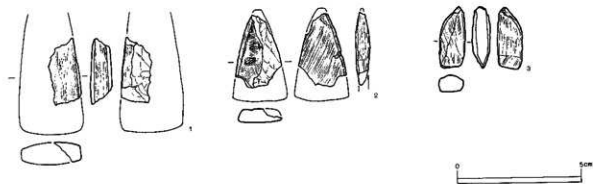
第219図4～12、第220図1～6は磨石である。第219図4～12、第220図1、2は一面または両面に凹みを有する。形態は楕円形のものかほとんどで、あまり厚みのないものが多い。安山岩、砂岩によるものが大半を占める。第219図4は火を受けて破損している。5も火はねによる欠損が認められる。第220図3～6は磨石に分類したが、欠損のため本来的な形態が不明であり、分類もやや不分明である。

第220図7は敲打石で、中央部が膨らみ棒状の形態を持つ。端部の片方は欠損して不明だが、残存している端部には敲打痕が顕著に認められる。緑色片岩製。

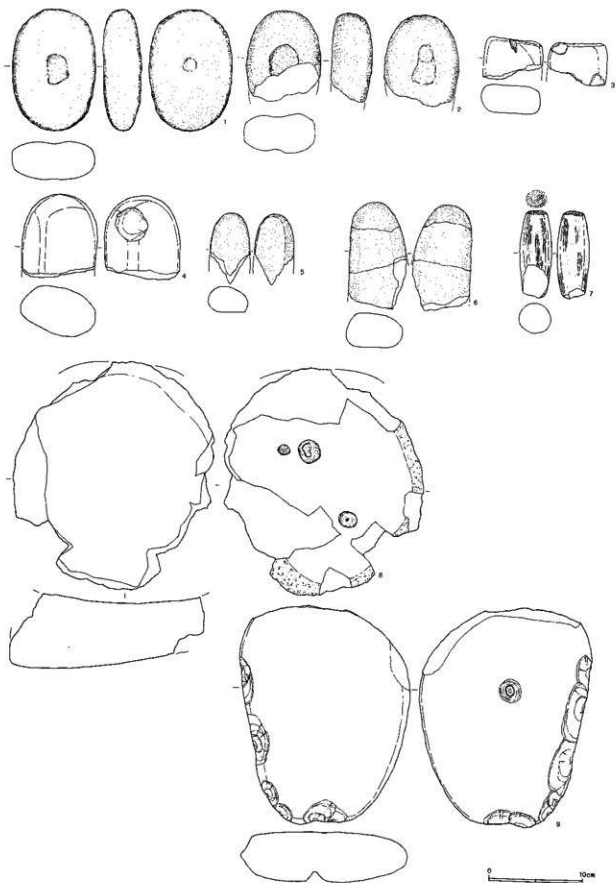
第220図8、9、第221図1～6、第222図に石皿を掲載した。石皿は片岩、安山岩製のものが多く、一部、斑れい岩、閃緑岩製のものがみられる。

第220図8、9はともに第2号住居跡から出土したものの。8は小片に破損した状態で検出された。側面に敲打痕が認められる。9は壁に近い部分から出土したものの。背面中央部に凹みがある。側縁は大きな剥離によって形が整えられている。第221図1～4はともに安山岩製で、中心が大きく湾曲して窪み形態のものである。いずれも底面の外側に複数の凹みを持つ。5は砂岩製の石皿で、第16号住居跡の炉跡掘り方から、礫とともに出土した。第222図1は第14号住居跡の炉跡に設置されていたもので、非常に大形の石皿である。片岩製で、一部欠損しているが、この状態で使用されていたものと推測される。大形の片岩の周囲を打ち欠いて整形しており、一部に研磨痕も認められる。2～5は片岩、緑泥片岩製の石皿である。2は中央が湾曲して窪みのもの。外面に複数の凹みを持つ。3は第16号住居跡出土のもので、覆土中のもので接合した。周囲は剥離と敲打によって整形されている。内面はほぼ全面にわたって磨耗している。外面には凹みがみられる。接合した2つの破片のうち、大きなものには、破損後その破断面にさらに敲打が加えられている。また、両者の破断面を境に内面の湾曲のカーブがわずかに異

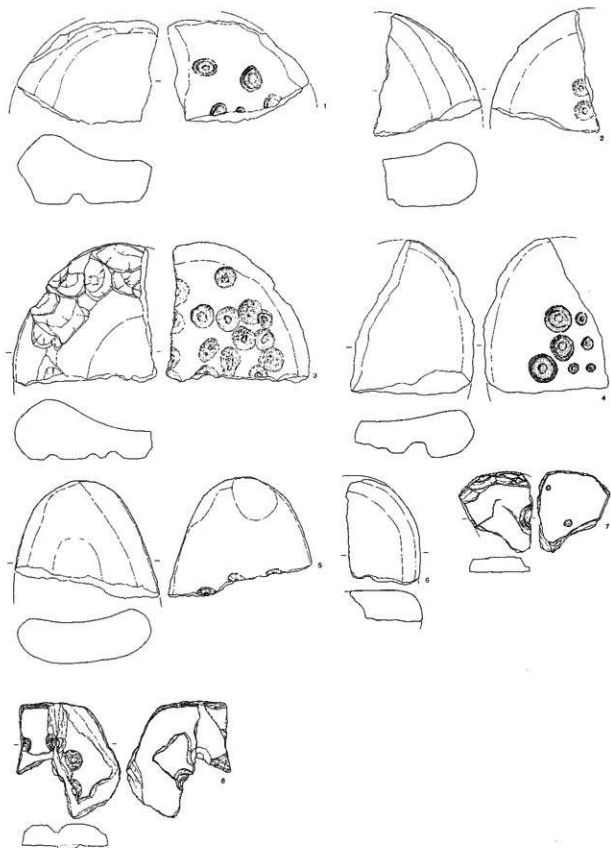
第219図 縄文時代遺構出土石器(4)



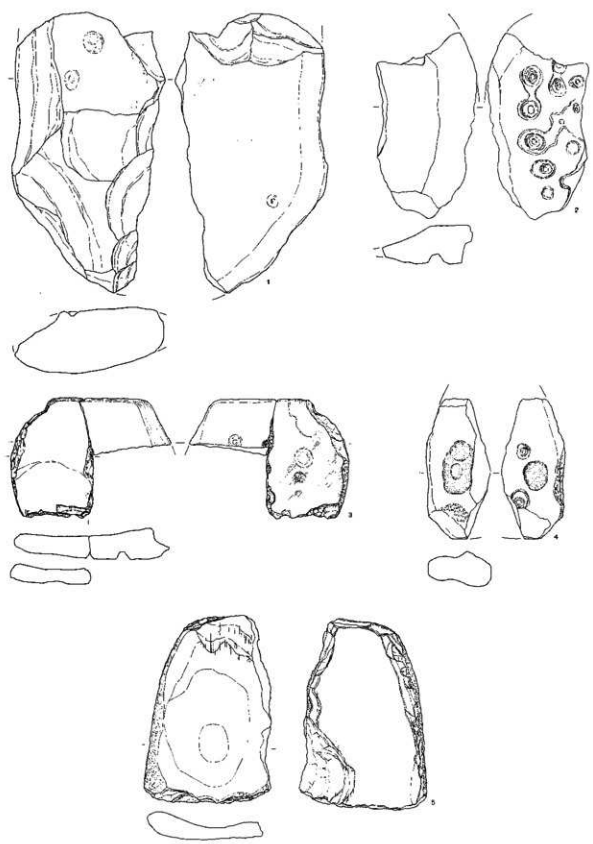
第220図 縄文時代遺構出土石器(5)



第221図 縄文時代遺構出土石器(6)



第222図 縄文時代遺構出土石器(7)



0 10cm

第5表 遺構出土石器観察表(1)

図版番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 材	備 考	
第216図1	SJ2	石鏃	2.90	2.10	0.25	1.07	黒曜石	マイクロト同一母岩?	
第216図2	SJ16	石鏃	(2.70)	(2.00)	0.60	2.03	赤チャート		
第216図3	SJ18	石鏃	2.60	1.50	0.50	1.59	チャート		
第216図4	SJ12	石鏃	2.00	1.60	0.30	0.50	黒曜石		
第216図5	SJ4	石鏃	2.45	1.35	0.30	0.72	黒曜石		
第216図6	SJ22	石鏃	2.60	1.50	0.50	1.16	赤チャート		
第216図7	SJ1	石鏃	(2.25)	(1.30)	0.35	0.65	チャート		
第216図8	SJ13	石鏃	(1.50)	1.80	0.40	0.76	チャート		
第216図9	SJ16	石鏃	(1.70)	1.40	0.35	0.52	黒曜石		
第216図10	SJ7	石鏃	2.15	1.70	0.60	1.37	黒曜石		
第216図11	SJ13	石鏃	(1.40)	1.50	0.40	0.79	黒曜石		
第216図12	SJ19	石鏃	1.85	1.50	0.30	0.59	黒曜石		
第216図13	SJ16	石鏃	1.40	1.20	0.25	0.30	黒曜石		
第216図14	SJ4	石鏃	1.40	1.45	0.35	0.71	チャート		
第216図15	SJ16	石鏃	1.40	1.45	0.40	0.53	黒曜石		
第216図16	SJ15	石鏃	1.50	1.05	0.20	0.29	黒曜石		
第216図17	SJ14	石鏃	2.40	1.50	0.40	1.08	チャート		
第216図18	SJ16	ポイント	1.80	1.65	0.70	1.93	チャート		
第216図19	SJ1	ポイント	2.75	1.90	0.95	4.97	チャート		石鏃未製品か
第216図20	SJ14	スクレイパー	2.75	2.30	0.75	5.07	チャート		
第216図21	SJ7	打製石斧	2.20	3.05	1.20	8.83	頁岩		
第216図22	SJ12	スクレイパー	3.50	4.20	1.20	17.89	チャート		
第216図23	SJ16	スクレイパー	4.20	4.30	1.80	40.80	頁岩		
第217図1	SJ1	打製石斧	9.80	5.80	3.20	163.88	砂岩		
第217図2	SJ8	打製石斧	9.40	4.50	1.45	77.11	ホルンフェルス		
第217図3	SJ16	打製石斧	8.30	5.40	2.25	112.32	粘板岩		
第217図4	SJ1	打製石斧	10.60	5.60	2.70	174.75	砂岩		
第217図5	SJ1	打製石斧	10.10	4.60	2.30	97.55	安山岩		
第217図6	SJ1	打製石斧	9.40	4.60	1.60	83.10	粘板岩		
第217図7	SJ11	打製石斧	9.60	4.15	1.25	51.92	粘板岩		
第217図8	SJ11	打製石斧	12.00	5.70	1.45	115.12	砂岩		
第217図9	SJ15	打製石斧	8.90	4.80	2.10	116.73	粘板岩		
第217図10	SJ13	打製石斧	(4.60)	3.55	1.65	33.39	粘板岩		
第217図11	SJ19	打製石斧	5.90	5.00	2.50	111.05	ホルンフェルス		
第217図12	SJ15	打製石斧	(7.50)	5.25	1.80	101.83	砂岩		
第217図13	SJ16	打製石斧	8.10	4.35	2.40	116.75	安山岩		
第218図1	SJ39	磨製石斧	(9.25)	5.35	3.00	271.18	蛇紋岩		
第218図2	SJ43	磨製石斧	7.65	3.90	2.00	106.92	砂岩		
第218図3	SJ5	磨製石斧	(8.10)	4.60	3.85	192.05	砂岩		
第218図4	SJ13	磨製石斧	(4.85)	3.50	3.00	73.06	砂岩		
第218図5	SJ13	磨製石斧	(5.60)	4.00	2.70	84.65	砂岩		
第218図6	SJ13	磨製石斧	6.55	4.95	2.90	129.45	砂岩		
第218図7	SJ13	磨製石斧	(4.40)	5.25	2.75	68.93	安山岩		
第218図8	SJ21	磨製石斧	(5.80)	(4.90)	3.00	84.57	砂岩		
第218図9	SJ21	磨製石斧	4.55	4.45	2.40	72.05	緑色岩		
第218図10	SJ13	磨製石斧	9.50	4.30	2.00	90.53	粘板岩	未製品?	
第218図11	SJ43	磨製石斧	12.10	5.00	1.90	151.43	緑色岩		
第218図12	SJ22	磨製石斧	9.35	4.60	1.30	80.76	頁岩		
第218図13	SJ13	磨製石斧	(5.80)	3.60	1.40	38.42	砂岩		
第218図14	SJ13	磨製石斧	(8.15)	4.00	1.45	64.88	片岩	未製品?	
第218図15	SJ20	砥石	11.85	6.30	1.40	119.46	ホルンフェルス		

第6表 遺構出土石器観察表(2)

図版番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
第219図1	SJ13	磨製石斧	(2.60)	(1.20)	(0.85)	2.90	翡翠	折れ
第219図2	SJ5	磨製石斧	(2.90)	(1.80)	0.55	3.24	蛇紋岩	折れ
第219図3	SJ15	磨製石斧	2.40	1.00	0.70	2.67	粘板岩	小形
第219図4	SJ2	磨石	15.10	7.10	4.00	523.43	安山岩	
第219図5	SJ2	磨石	15.20	7.00	4.70	723.08	安山岩	受熱
第219図6	SJ16	磨石	11.90	9.50	4.70	794.17	安山岩	
第219図7	SJ7	磨石	13.00	8.30	5.10	733.94	安山岩	
第219図8	SJ16	磨石	(6.00)	6.40	4.00	249.77	安山岩	
第219図9	SJ21	磨石	(7.00)	7.60	3.80	269.60	安山岩	
第219図10	SJ21	磨石	11.20	6.20	3.30	471.24	砂岩	
第219図11	SJ39	磨石	9.80	6.00	5.50	460.81	砂岩	
第219図12	SJ16	磨石	9.80	6.20	4.50	414.57	閃緑岩	
第220図1	SJ29	磨石	12.80	8.80	4.10	731.88	砂岩	
第220図2	SJ39	磨石	(9.60)	7.80	4.30	454.52	石英斑岩	
第220図3	SJ13	磨石	(4.40)	6.25	2.90	136.38	閃緑岩	
第220図4	SJ12	磨石	(8.90)	8.10	5.40	577.49	安山岩	
第220図5	SJ5	磨石	(7.50)	4.25	2.70	103.33	砂岩	折れ
第220図6	SJ2	磨石	(11.20)	6.10	3.60	403.76	安山岩	
第220図7	SJ20	敲石	9.30	3.35	3.10	164.97	緑色片岩	
第220図8	SJ2	石皿	24.00	(20.50)	7.80	4080.00	閃緑岩	
第220図9	SJ2	石皿	23.10	18.20	5.20	3730.00	炭い岩	
第221図1	SJ11	石皿	(10.90)	14.30	7.30	1437.56	安山岩	
第221図2	SJ11	石皿	(12.90)	(11.40)	6.60	1034.96	安山岩	
第221図3	SJ9	石皿	(14.90)	(15.30)	6.30	1427.96	安山岩	
第221図4	SK18	石皿	(16.20)	(13.20)	5.00	967.15	安山岩	
第221図5	SJ16	石皿	(12.50)	(15.20)	5.50	1034.24	砂岩	
第221図6	SJ12	石皿	(11.25)	(7.70)	(3.40)	438.58	閃緑岩	
第221図7	SJ13	凹石	8.60	7.70	1.55	151.56	片岩	
第221図8	SJ2	凹石	(12.20)	(11.00)	2.60	383.49	片岩	
第222図1	SJ14	石皿	29.50	16.00	7.10	3.68	片岩	壁に設置
第222図2	SK13	石皿	(19.50)	10.70	4.10	1106.90	片岩	
第222図3	SJ16	石皿	12.70	8.80	2.00	372.57	片岩	
第222図4	SJ39	石皿	14.90	6.70	4.00	471.36	片岩	
第222図5	SJ1	石皿	(20.00)	(13.60)	2.80	1128.40	緑泥片岩	

っており、破断後さらに大きな破片が、石皿として使用されたことを示している。4は破損が著しく、本来の形態が明らかではない。側縁の一部に破損後敲打を加えられた痕跡が認められる。5は外面に凹みが認められないものである。内外面とも磨耗が著しい。周辺は敲打を加えられて整形されている。背面左側の側面と正面下端は、破断後、剥離と敲打によって再整形されている。正面右側の内面縁部は平らに研磨さ

れ、さらに破損した状態における内面の中心に窪みの中心が移され、現在の状態となっている。本来、より大きな石皿であったものが、破損後再加工された例である。

第221図7, 8は凹石と分類した。石皿に非常に近いが、磨耗面がみられないものをまとめた。いずれも片岩製で、縁部は剥離と敲打によって整形されている。複数の凹みを有する。

(4) グリッド出土遺物

a. 縄文土器

本遺跡のグリッド出土土器は、その分布の傾向から、AK-13、14グリッド(第224、225図)、A I-12~A L-14グリッド(第226図)、I区中央の谷南側(AK~A P軸東側)(第227~229図)、I区中央の谷北~東側(A H軸周辺)(第230、231図)の、ほぼ4つの区域にそれぞれ集中が認められる。II区からは、縄文土器はごくわずかが検出されたのみである。AK-13、14グリッドには、住居跡集中域と重複して形成された遺物包含層が存在し、多数の遺物が検出された。A I-12~A L-14グリッドは遺物が比較的少ない。I区中央の谷南側(AK~A P軸東側)も、住居跡集中域の東半に位置し、グリッド出土の遺物はこれらの住居跡と重複する位置から検出されたものが多い。I区中央の谷北~東側(A H軸周辺)は、前期、後晩期の土器など、本遺跡では検出例の少ないものがわずかずながら出土している。拓影図は、これらの地区ごとに掲載し、実測図はグリッドを一括して掲載した。グリッド出土遺物を記述するに際して、以下のように土器群を大別し、必要に応じて細分、個別の記述を行う。

第I群土器…前期の土器を一括する。

第II群土器…勝坂式~加曾利E I式直前段階のものを一括する。

第III群土器…加曾利E式のキャリパー形深鉢。口縁部文様帯を持つものを一括する。E I式からE III式にかけて極めて漸移的に変化するため、破片では判別困難なものが多い。ここでは群としては時期差を設定せず、個々の記述の中で触れることにする。

第IV群土器…加曾利E式のその他の深鉢形土器。粗製深鉢、口縁部無文深鉢や、口唇部に狭小な文様帯を持つ大波状口縁の深鉢などが存在する。E I式からE II式にかけて発達する形態である。

第V群土器…加曾利E III式キャリパー形深鉢の口縁部文様帯を持たないものを一括する。

第VI群土器…速気文系土器。

第VII群土器…加曾利E式の鉢、浅鉢、その他の器種。

第VIII群土器…加曾利E式の胴部破片、加曾利E式、後期初頭の底部破片。

第IX群土器…後期初頭~堀之内式。

第X群土器…後期後葉~晩期。

第I群土器(第226図1、第227図1、2、第230図1~4)

いずれも諸磯り、C式に含まれ、他の時期のものはほとんど検出されなかった。第226図1、第227図1、第230図1、2は諸磯り式、後二者は同一個体である。第227図2、第230図3、4は諸磯りC式、4は突起頂部、内面にも集合沈線文を持つ。

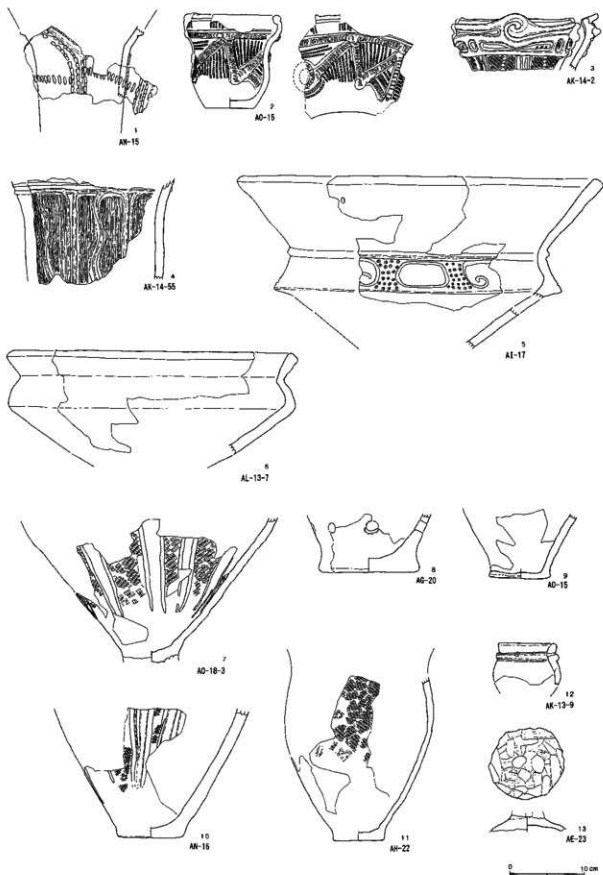
第II群土器(第223図1、2、第224図1~9、第225図11~16、第226図2~8、第227図3~20、第231図16~19)

本群に属するものは、グリッド出土土器の中では比較的少ない。AK~A P軸東側に比較的多く分布する。勝坂式後半に属するものがほとんどである。第223図1は阿玉台式系の小形深鉢で、胴部のみ現存している。Y字状の隆帯がおそらく4単位配される。隆帯縁には刺突が連続し、横位に連続爪形文が加えられる。胎土には雲母を多量に含む。2は口縁部が内湾し、頸部が括れる小形の鉢。口縁部は上下端を隆帯で画し、5条の押し引き列を縦位に、間隔を開けて施文している。胴部には上面に刻み目を持つ隆帯が大きな鋸歯状に貼付され、空間は押し引き文で充填される。

第224図1、2は口縁部に押し引き文が1条廻り、2は胴部に縦位の沈線が施されるが、これは半截竹管によっている。第224図4は無文で、折り返し口縁を持つもの。口径が小さく、頸部は外反する。所属時期は不明だが、本群に含まれると思われる。6は口縁部に三角形区画を持ち、胴部に縦位区画が認められる。7は縦位区画の内部に結節沈線が充填される。いずれも隆帯上には細かい刻み目が施されている。新道式新段階から墓内I式のものであろう。7は胎土に雲母を含む。9は口唇部に貼付された突起状装飾の一部と考えられる。

第225図11~16は同一個体で、新道式に属する。本遺

第223図 グリッド出土縄文土器(1)



跡からの検出例は少ない。口唇部に突起を持ち、突起からやや斜めに隆帯が垂下し、隆帯に沿って複列の押し引き文が施文される。隆帯で区画された内部には、押し引き文と刺突列が充填される。文様は半截竹管で施文される。結節沈線、区画内に充填される刺突はすべて同一の工具が用いられている。隆帯上にも刻み目を持つ。隆帯に沿う押し引き文は鱗状のモチーフとなる。

第226図2は平縁で、口唇部が強く内屈し、三叉文、交互刺突文が施文される。五領ヶ台式直後から落沢式に伴うものと考えられる。同図5は阿玉台式の鉢。肩部に鋸歯状の隆帯を持つ。III式に伴うと考えられる。同図6は口唇部突起を持ち、口縁部には三角押し引き文が施文される深鉢。勝坂式の終末に位置づけられよう。

第227図3は中期初頭のもの。口縁部が開き、胴部が円筒形となる深鉢。頸部には押し引き文の連続施文により、無文部との間に三角形の意匠を作り出している。胴部にも押し引き文が充填される。五領ヶ台式の終末から落沢式にかけてのものであろう。4は口唇部が強く外反する鉢。体部にはRL縄文が施文される。やはり落沢式のものと思われる。同図7は口唇部に貼付された突起状の装飾の一部と思われる。端部に円文、交互刺突文が認められる。同図14~17はいずれも胎土に雲母を含んでいる。

第230図5は阿玉台式の波状口縁深鉢。口唇部は丸みを帯びて肥厚する。波頂部からおそらく渦巻きを構成する隆帯が垂下し、隆帯脇には押し引き文が加えられる。阿玉台III式。7, 8は円筒形の小形の深鉢。胴部に縦位構成の文様が施文される。9は阿玉台III式の鉢形土器。胎土に雲母を含んでいる。口唇部は短く外屈し、肩部に連続する弧状の隆帯が貼付される。隆帯上には爪形文が施文され、隆帯に沿って一部に弧線文が沈線で施される。口唇部の外側端部にも刺突が加えられる。

第231図17~19は同一個体。断面三角形の隆帯が貼付され、その両脇に押し引き文が加えられる。胎土に

雲母を含んでいる。阿玉台II式と考えられる。

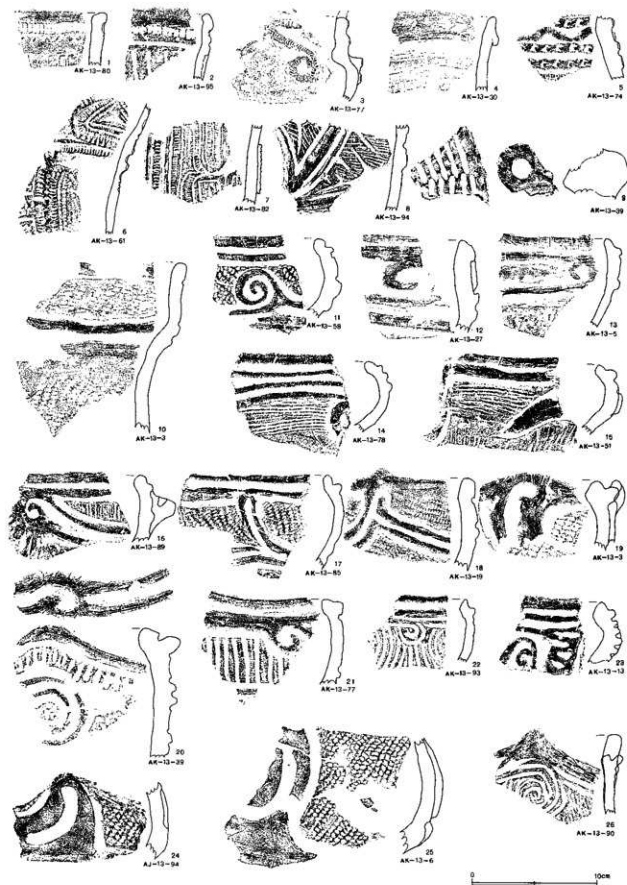
第III群土器(第223図3, 4, 7, 10, 第224図10~25, 第225図1, 2, 5~10, 第226図9~14, 21, 第227図21~25, 第228図1~9, 第229図1~6)

本遺跡のグリッド出土資料の中で、主体を占める。E I式最古段階と考えられるものは、グリッドからはほとんど出土してはならず、E I式新段階からE II式にかけてのものが多い。第223図3は小形のキャリパー形深鉢。おそらく4単位の渦巻状の突起を持ち、それを中心に横位に隆帯が巡る。口縁部文様帯は狭小で、この隆帯によって2分割される。胴部には4条1組の沈線が垂下する。地文は0段多条のLR縄文。E II式古段階のものであろう。4はキャリパー形深鉢の胴部で、隆帯による懸垂文を持つ。地文は楕円状工具による条線である。

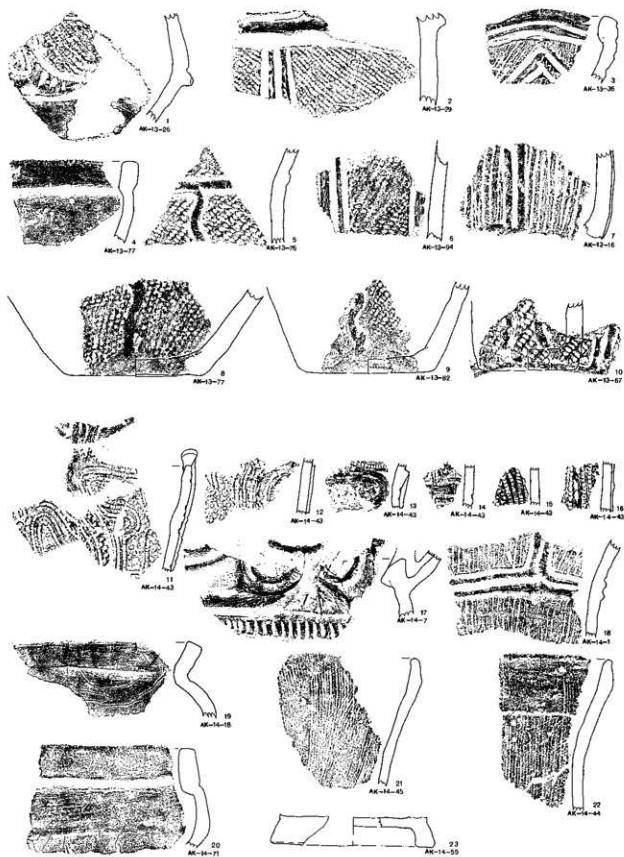
第227図25は口唇部に交互刺突帯を持ち、口縁部文様帯には2条1組の沈線により、渦巻文が施文される。E I式古段階のものであろう。

本遺跡のグリッドからは口縁部文様帯が狭小化し、隆帯による渦巻文が区画を構成するもの(第224図11, 第226図12, 第227図21, 22)、渦巻つなぎ弧文が展開するもの(第224図16, 第226図9, 10)が主体を占める。モチーフの主要部分が欠損しているため、全容は不明であるが、第224図17, 18, 第228図2, 3もこれに含まれよう。地文は縄文のものがやや卓越するようである。第226図10, 第228図2は渦巻文の上端と文様帯上端区画線の間を短い隆帯と沈線で連結したものの。第228図3は2条1組の隆帯によるS字状モチーフと思われるが、隆帯間に沈線列を組み込むという手法が取り入れられている。第224図16は渦巻部が外側に大きく張り出している。第224図20は波状口縁で、文様帯上端に刻み目列が、口唇面に渦巻文が施文される。第227図21は渦巻つなぎ弧文となる可能性があるが、渦巻文右端からのびる隆帯が別の意匠を構成するようである。渦巻は大きく外側に張り出し、渦巻文と文様帯上端の間は短い隆帯で連結される。渦巻文と弧文の下端がそのまま頸部無文帯上端の区画となっている。

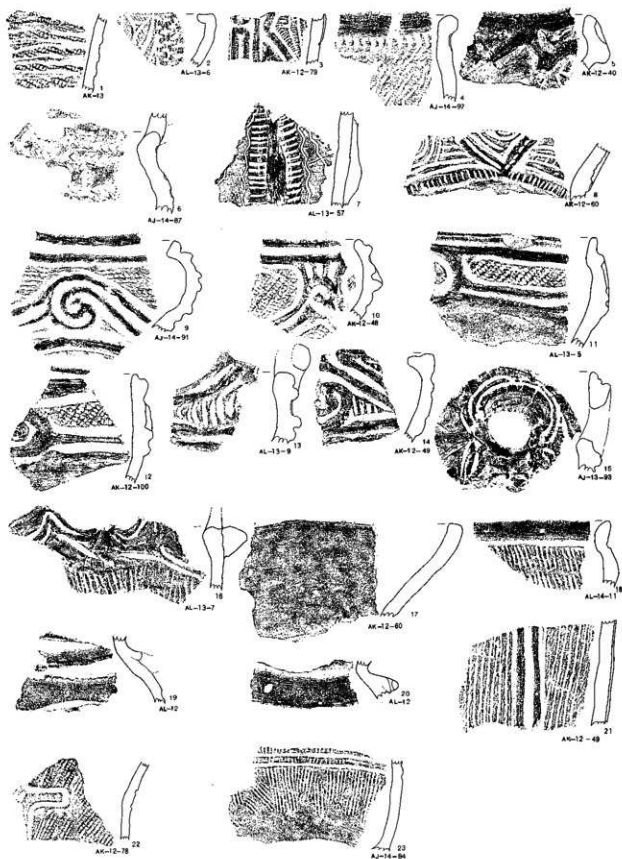
第224図 グリッド出土縄文土器(2)



第225図 グリッド出土縄文土器(3)

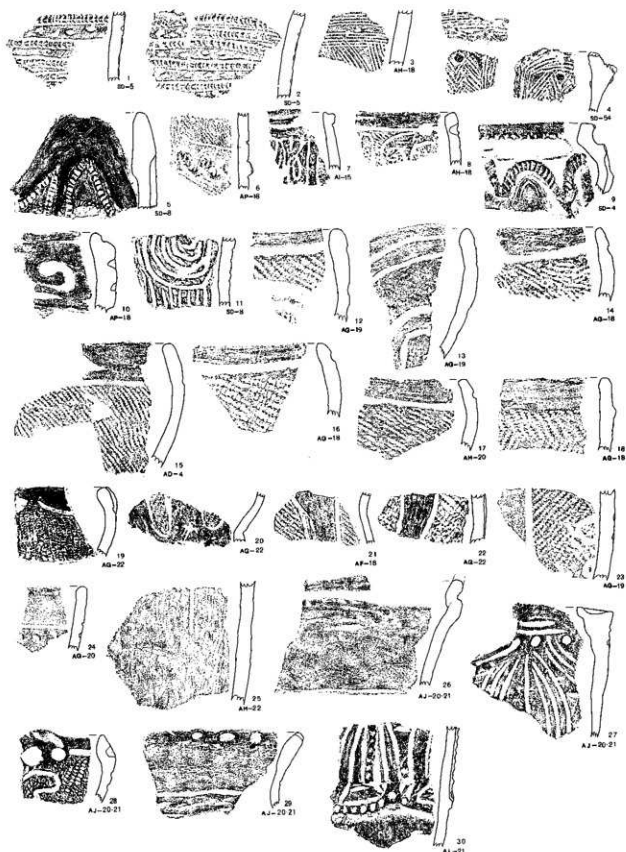


第226図 グリッド出土縄文土器(4)

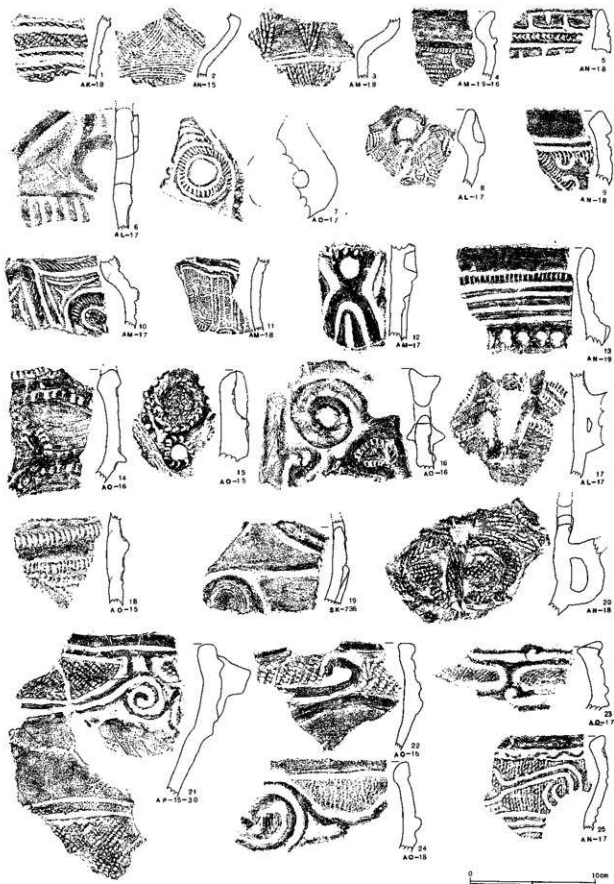


0 10cm

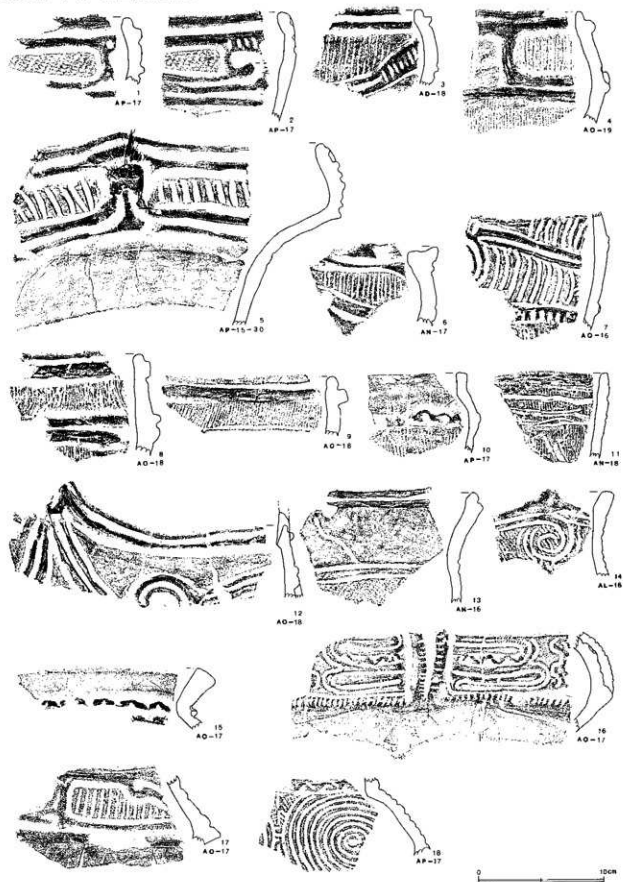
第227図 グリッド出土縄文土器(5)



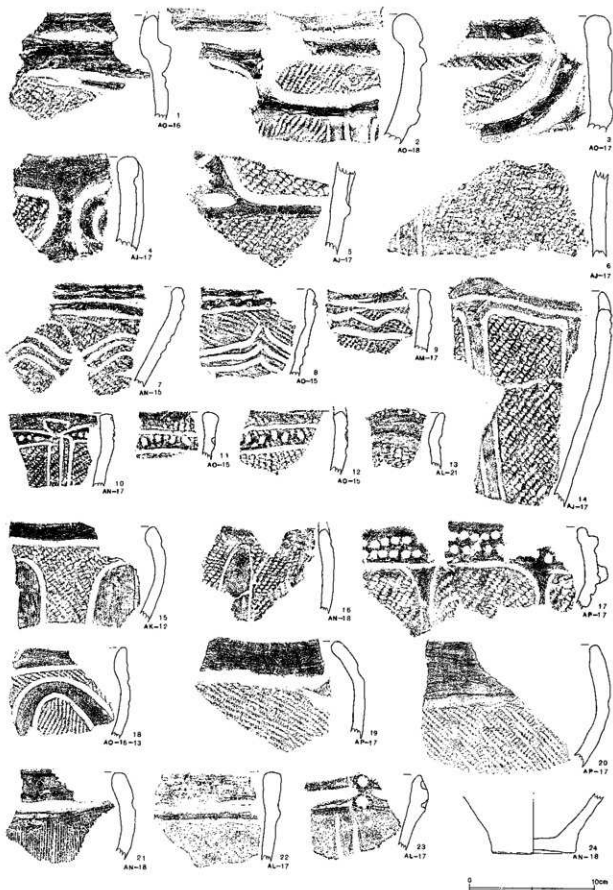
第228図 グリッド出土縄文土器(6)



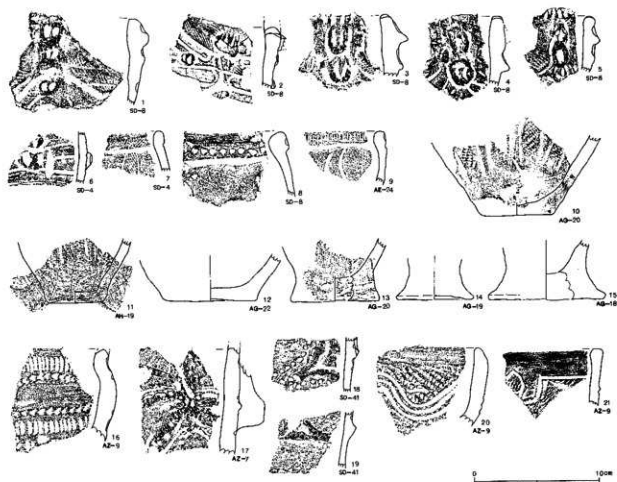
第229図 グリッド出土縄文土器(7)



第230図 グリッド出土縄文土器(8)



第231図 グリッド出土縄文土器(9)



口縁部文様帯に縦位の沈線列が施文されるもの(第224図21、第228図5~7)、重圏文系のものも一定の割合を占める(第224図22)。第228図5は狭小の口縁部文様帯に沈線が充填され、区画は縦位の隆帯による。幅広い頸部無文帯を持つ。第224図22は重圏文の弧線が対向する位置に小さな渦巻文が施文される例である。

第224図12、13、第226図11、第227図23、第228図1、2は文様帯の狭小化が進んだもの、隆帯脇の沈線が発達し、沈線による区画が収束する手法が発達したもので、加曾利E I式新段階からE II式のものである。頸部無文帯を有するものとそうでないものがある。第224図12、13は1条の扁平な隆帯によって渦巻文が施文されるもの。13は口縁部文様帯内部が無文のままで、ナデ調整のみが加えられている。

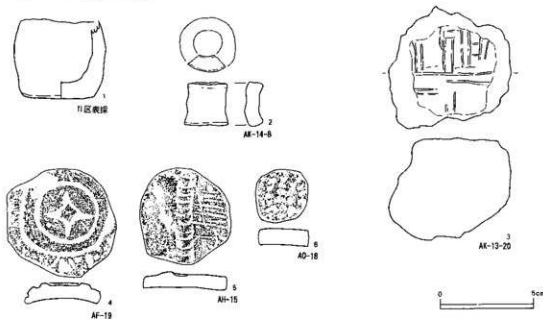
第224図19、24、25、第229図2~5は隆帯が幅広く

なり、沈線による区画がさらに発達したもので、後出のものである。第224図24、25は同一個体。第229図2は胴部の懸垂文が認められるが、磨消を伴う3条1組の沈線が垂下するものである。第229図4~6は同一個体である。胴部にはやはり磨消を伴う沈線が垂下する。おそらく3条1組である。

第IV群(第224図26、第225図17、20、21、第226図15~17、第228図10~14)

第224図26、第228図14は波状口縁で、波頂下に沈線で渦巻文が施文されるもの。口縁部は外反し、胴部が膨らむ。第225図20、21は粗製の深鉢。櫛歯状工具による条線が施される。加曾利E I式新段階からE II式に伴う。第226図17は口縁部に無文帯を持つ深鉢、加曾利E I式新段階のものであろう。第228図10は頸部に隆帯が1条巡るもの。12は波状口縁で、2条1組の、扁

第232図 グリッド出土土製品



平な隆帯により渦巻文が施文される。波頂部から渦巻文に向かって垂下する隆帯が認められる。文様帯の内部は無文のままである。加曾利E1式古段階のものと思われる。13は波状口縁で、口唇部に文様帯を持つ。波頂部に渦巻文を伴うものであろう。

第V群(第225図3、第229図15~22、第230図12~23)

第225図3、第229図18、第230図12は2条沈線間を磨り消したもので波状文が描かれている。連弧文系土器と同様の文様帯構成を取る可能性もある。口縁部に無文帯を持つもの、無文帯内に1条の沈線を持つものがある。第229図18は口唇部が極小く外反する。同図16は胴部破片で、擬口縁を持つ。17は平縁で、口縁部に刺突列を持つ。刺突列帯の下位には上向き弧線が描かれ、その間が磨り消されている。第230図13は2条1組の沈線による渦巻文が描かれるもの。波状口縁で、口縁部は大きく湾曲する。第229図19~21、第230図14~17は口縁部無文帯を持つもの。意匠文を伴うか否かは不明。第229図22、第230図18は直線的に開く器形で、微隆帯によって口縁部無文帯が画されている。第230図19は緩やかな波状口縁を持ち、口縁部に無文帯が画されるもの。無文帯下端に沈線が波頂部で収斂し、その部分がわずかに肥厚する。第230図20~23は胴部

破片。

第VI群(第229図7~13)

第229図7、8は3条沈線による波状文が描かれるもので、8は口縁部の沈線間に刺突列を持つ。9は口縁部文様帯に鋸歯状の沈線を持つもので、連弧文系のやや変形したもの。10は波状口縁で、矩形に近い弧線が大きく縦位に施文され、その間が磨り消されるもの。11~13は口縁部文様帯に刺突列を持つもので、やはり、連弧文系の変形したもの。12、13は同一個体である。

第VII群(第223図6、7、12、第225図1、4、19、22、第226図19、20、第228図15~18)

第223図6は頸部が大きく外傾する浅鉢で、肩部に渦巻文、区画文を交互に配する文様が施文される。区画の間は竹管先端による円形の刺突が加えられる。補修孔を有する。所属時期が下る可能性がある。6は無文の浅鉢で、口唇部がわずかに肥厚する。砂粒が極めて多い。

第225図1は鉢の肩部と思われる。4、19、22は無文の浅鉢で、19は口唇部が大きく外反する。第228図15は鉢の口唇部。頸部の括れ部に交互刺突を持つ。16は肩部文様で、上面に刻み目を持つ隆帯によって区画される。意匠は沈線による流水状のモチーフで、内部に

交互刺突を持つ。17は隆帯による区画内部に縦位の沈線列が充填される。18は交互刺突帯の下位に重圏文が施される。

第223図12は小形の有孔罌付土器。口唇部断面は丸く、口唇部下に1条の隆帯を持つ。貫通孔は外面から内面にかけて開けられている。第226図19、20は同一個体。19の下端には沈線による弧状の意匠の一部が認められる。19は罌の先端が剥落し、接合痕がみられる。

第Ⅷ群(第223図7~11、第225図5~10、23、第226図21~23、第229図24、第230図11、第231図10~15)

第223図7はキャリパー形深鉢の胴部下半の資料と思われる。磨消帯が縦走するもの。沈線の工具先端は粗く、やや深めの施文である。底部は小さく、小形の台が付くようである。受熱し、やや歪んでいるが、胴部下半としては開く角度が大きい。キャリパー形と異なる器形を取る可能性もある。8、9は深鉢の底部で、8は貫通孔を有するもの。10もキャリパー形深鉢の胴部下半の資料で、縦位の磨消帯を持つ。11は頸部が緩やかに括れる深鉢。地文のみ観察された。下半はミガキによって調整されている。

第225図5~10は第Ⅲ群、または第Ⅳ群の底部である。隆帯による懸垂文が施文される。同図23は台部で、上端は剥落している。第226図22は棘状の突起が磨消縄文によって描かれている。第230図11は沈線による渦巻文が描かれるもので、縦位の垂線と組み合っている。第231図10、11は磨消縄文による懸垂文、または弧線文の下端が認められる。同図13~15は底部の下端が張り出すもので、中期終末から後期初頭にかけてのものであろう。

第Ⅸ群(第223図13、第229図23、第230図24~30)

第223図13は蓋形土器と考えられるもの。周囲を打ち欠いて円形に整えている。頂部に環状のつまみが付いていたよう、剥落痕が2ヶ所にある。内外面とも粗いケズリによって調整されている。胎土には砂粒が多く含まれている。時期については問題が残るが、後期前葉のものと考えられる。

第229図23は口唇部に太い沈線が通り、縦列する刺

突を持つ深鉢。第230図24は称名寺Ⅱ式の深鉢口縁部で、刺突列が認められる。25は深鉢胴部で、やはり称名寺Ⅱ式のもの。26~30は埴之内Ⅰ式。26は無文の頸部が外反する深鉢。27は波頂部に、上面に窪みのある突起が作られ、突起の下部には刺突が加えられる。波頂部から対弧文的な沈線が垂下する。28は蕨手状の懸垂文を有するもの。29は口唇部に刺突を持つ。30は深鉢胴部の文様帯下端の部分。上面に刺突を持つ隆帯で下端が区画される。以下は無文となる。区画内には斜位の沈線列が充填される。

第Ⅹ群(第231図1~9)

本遺跡からは極めて少量の検出をみたのみで、Ⅰ区中央の谷東側のグリッドから集中して検出されている。出土した資料は断片的であるが、深鉢に限られ、他の器種は検出されなかった。図示したものを以外はほとんど当該時期の資料はない。

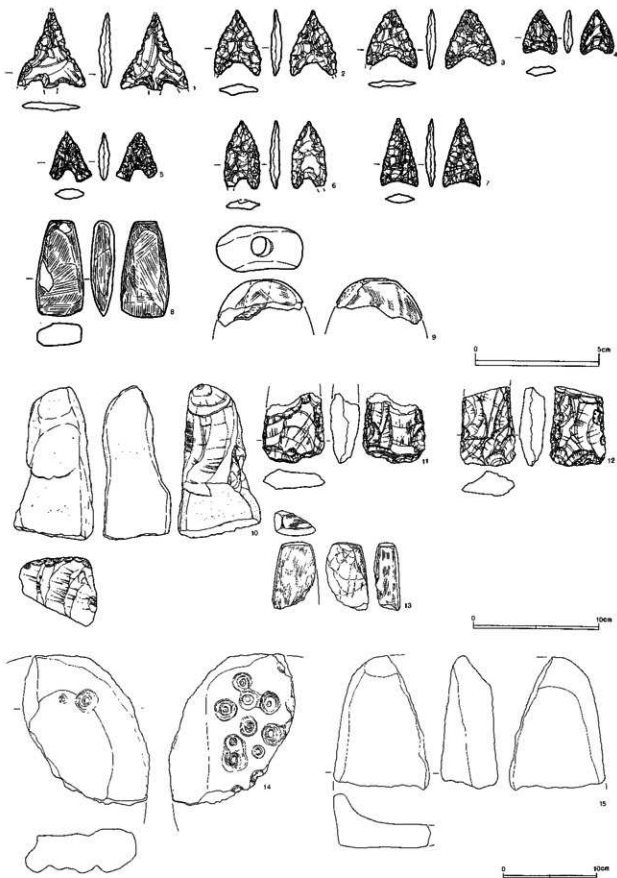
第231図1~5は安行式波状口縁深鉢である。1、2は安行2式で、2は後半のもの。3~5は魚尾状の突起頂部に縦位の沈線が施される。3、5は安行3a式後半のものであろう。4は安行3b式に属する。6は深鉢胴部で、2と同一個体の可能性がある。7~9は安行系粗製深鉢で、安行2から3a式に伴う。7は弧線文が磨消縄文で描かれ、口唇部にも縄文が施文される。8は口唇部に刺突列が加えられる。

b. 土製品

第232図1は第Ⅱ区で表採された小形土器である。無文で、厚手のもの。2は小形の耳栓である。全面ミガキ調整が加えられ、成形は良好。3~5は土製円板。3は重圏文の中央に菱形のモチーフが沈線で描かれている。2は竹管による押し引きと条線が組み合うもの。6は焼き粘土塊である。色調は明黄褐色から赤褐色。特に成形はされていないが、一面が平坦化され、網代の圧痕が認められる。素地土の保管時の状況を示すものであろう。

c. 石器

第233図 グリッド出土石器



第7表 グリッド出土石器観察表

図版番号	出土位置	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
第233図1	AJ-14	石鏃	(3.00)	2.70	0.45	1.99	ホルンフェルス	
第233図2	AB-21	石鏃	(2.60)	1.85	0.45	1.37	不明	受熱
第233図3	AJ-17	石鏃	(2.30)	2.00	0.35	1.09	黒曜石	
第233図4	AJ-14-94	石鏃	1.70	1.30	0.35	0.63	チャート	
第233図5	AI-18	石鏃	1.90	1.60	0.40	0.71	黒曜石	
第233図6	AM-16	石鏃	(2.70)	1.40	0.35	1.29	チャート	受熱
第233図7	AL-17	石鏃	2.70	1.45	0.35	1.06	チャート	
第233図8	AA-27	磨製石斧	3.80	1.90	0.90	10.39	蛇紋岩	
第233図9	AK-14-71	垂飾	(1.80)	(3.40)	1.80	8.40	翡翠	折れ
第233図10	AG-19	スタンプ形石器	12.10	6.50	5.30	426.00	砂岩	
第233図11	AK-12-50	打製石斧	(5.50)	5.00	2.30	70.17	結核岩	
第233図12	AK-14-3	打製石斧	6.30	4.40	2.05	63.68	ホルンフェルス	
第233図13	AK-13-68	磨製石斧	(5.20)	3.15	2.00	41.45	砂岩	
第233図14	AF-17	石皿	(15.80)	(13.30)	4.50	1181.35	片岩	
第233図15	AG-22	石皿	(14.20)	10.10	6.00	502.40	安山岩	

遺構外出土の石器はわずかで、図示したもの以外では、打製石斧、磨製石斧の破損品がわずかにみられる程度である。

石鏃 (第233図1～7)

遺構出土のものと同様、無茎のものが多く、1は茎部を持つもので、本遺跡では本例のみの出土である。鉤に近い部分がわずかに張り出す特異な形態を有している。2は火を受けており、火はねがみられる。3は黒曜石製で非常に薄手のものである。6はチャート製である。火を受けたように、火はねが認められる。7は基部の挟りが浅いもの。チャート製である。

小形磨製石斧 (第233図8)

蛇紋岩製で全体に研磨が施されている。基部にわずかに欠損がみられる。

垂飾 (第233図9)

破損品で、おそらく楕円形を呈していたものと考えられる。平坦面には研磨痕が認められるが、顕著ではなく、原石の形態を大きく変えてはいないと考えられる。端部から穿孔されているが、その方向は、推定さ

れる正中線からわずかにずれている。石材は翡翠だが、火を受けているため白濁している。

スタンプ形石器 (第233図10)

本遺跡からはこの1例のみ検出されている。砂岩製で、基部に近い部分に擦痕が認められる。底面の1辺には調整刻痕が加えられ、形態を整えている。

打製石斧 (第233図11, 12)

いずれも破損品である。11は大きな剝離による成形後、側面に細かな剝離が施されている。12は基部に向かってわずかにすばまる形態を持つ。

磨製石斧 (第233図13)

定角式磨製石斧の破損品である。全面に研磨が施されていたようであるが、背面が多量に欠損しているため、詳細は不明である。

石皿 (第233図14, 15)

14は外面に複数の凹みを有する。内面にも1つの凹みがある。15は安山岩製で、内面の磨耗が著しい。壁と底面との屈曲が強い。

(5) その他の時代の遺構・遺物

a. 土壌

今回の調査で検出された、中・近世に属する土壌は118基である。各土壌の位置、規模等は、第8～10表に記載した。土壌は共存する遺物を有するものが少ないため、時期・機能を明確にしうるものは少数である。そのためここでは、土壌の平面、断面形態を主たる基準として群別し、代表的なもののみ記述を行う。

中・近世の土壌はその形態からいくつかの群に区分が可能である。ここでは、5つの群に分類する。

第I群

平面形態が円形で、比較的小規模なもの。深度も浅いものが多い。覆土は黒褐色系のもので多いようである。第131～154、159、161～163、169、170、177、179、180、187、191～193、220、243号土壌が含まれる。規模は、直径が概ね1m前後で、深さが20cm程のものがほとんどである。これらの土壌からは遺物がほとんど検出されず、詳細な所属時期、機能等については不明とせざるを得ない。I区に多く分布する傾向がみられる。近世後半から近代以降にかけての遺構に切られており、概ね近世前半の所産と考えられる。

第II群

平面形態が円形で、やや規模が大きく、深度も深いもの。第155、165、168、173、181、188、189、194、196、199～204、206、211、223～229、234～237、242、249号土壌が含まれる。II区に多く分布する傾向がみられる。全体に遺物に乏しく、時期等の明らかなものは少ない。

第173号土壌はII区BB-12に位置する。一部は調査区外にかかるが、ほぼ円形で、1.5mの深度を有する。中位に段を有し、底径は小さい。第173号土壌の覆土中位から、第244図2の板碑が検出されている。地下式坑ではないが、所在位置から、第172、184号土壌と関連するものかもしれない。

II区には第37～39号溝が所在するが、第II群に属する土壌で、これらと重複するものは、いずれも溝埋没後に掘削されている。第37～39号溝は近世初期以前の

所産と考えられるため、これらの土壌はそれ以降のものとして判断される。

第III群

平面形態が円形で、深度の深いもの。地下式坑になるもの。第172、184号土壌が含まれる。

第172号土壌は断面が円筒形で、深度はきわめて深い。底面に段差があり、さらに下がるということが確認されたが、調査区外に延びるため、安全確保のため、精査不可能であった。本土壌からは、第244図1の板碑が覆土中位から検出されている。第172号土壌と第173号土壌は近接しており、覆土最上層では重復が認められた。土層の観察では第173号土壌が新しい。

第184号土壌は開口部の平面形態は円形で、規模も小さいが、150cm程の深度を持つ。開口部から東、北側に向かって、1辺が2m程の長方形の地下施設を有する。この地下施設の東側に小さな張り出し部を持つ。床面は極めて丁寧に平坦化されている。また、残存している壁は垂直に近い立ち上がりを持つ。天井部はすべて崩落している。

第184号土壌からはかわかけ、板碑、古銭等多量の遺物が検出された。遺物の分布は開口部付近に集中している。図示した遺物はいずれも底面に近いレベルから検出されている。遺物はいずれも覆土中に散乱したような状態で検出された。覆土上位からはかわかけの小破片が検出されている。形態、出土遺物から墓塚としての機能が想定されよう。

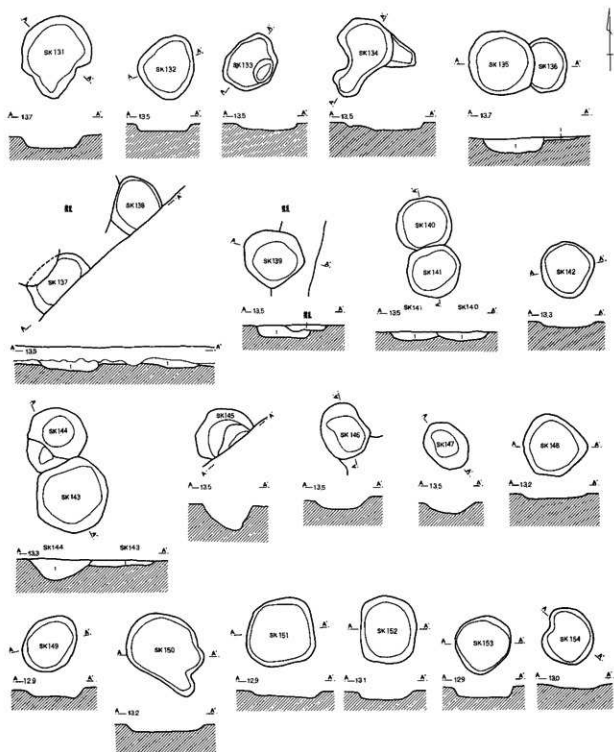
第IV群

平面形態が長方形、矩形のもの。第178、183、190、210、212、213、214、215、216～219、221、230～233、238～241、246～247号土壌が含まれる。II区に多く分布する。深度は比較的深いものが多い。形態から、墓塚の可能性もあるが、遺物の伴うものに乏しく、性格は明らかではない。第183号土壌は長径が3m以上ある規模の大きなものである。底面は緩やかな曲面を持つ。本土壌からは第244図3～7の遺物が検出された。

第V群

上記の4群に含まれないもの。平面形態の不整形な

第234図 中・近世土塚(1)

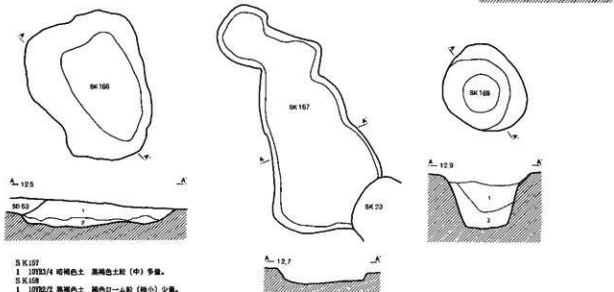
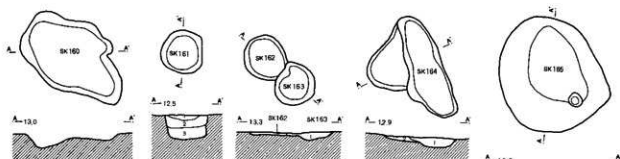
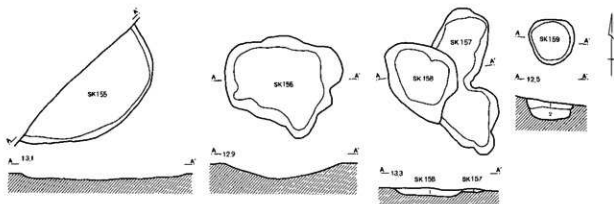


- SK 135
 1 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土粒(小)多量。
 SK 136
 1 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土粒(中)多量。
 SK 137
 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色ソフトローム(中)・暗褐色ソフトローム(中)少量。
 SK 138
 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色ソフトローム(極小)多量。
 SK 139
 1 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色ハードローム(中)多量。
 SK 140
 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(小)多量。

- SK 141
 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(中)少量。(極小)少量。
 SK 143
 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(中)少量。暗褐色土粒(極小)少量。
 SK 144
 1 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色粘質ブロック(極小)少量。

0 2m

第235図 中・近世土坑(2)

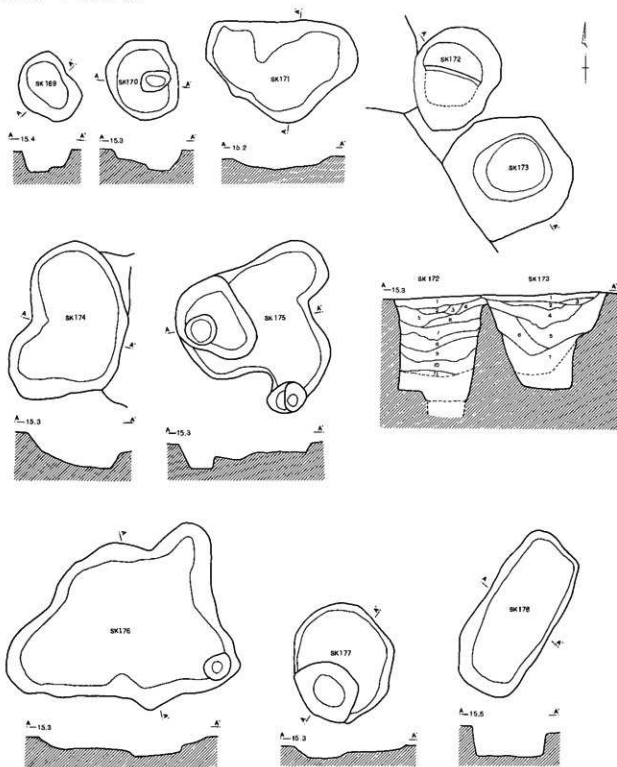


- SK157
1 10YR2/4 暗褐色土 黒褐色土粒(中)少量。
SK158
1 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
SK159
1 10YR2/1 黒褐色土 暗褐色土粒(極小)少量, 白色粒少量。
2 10YR2/1 黒褐色土 黒色土粒・暗褐色土粒(小)、酸化鉄(少)を混む。
SK161
1 10YR2/2 黒褐色土 黒色土粒(中)少量, 暗褐色土粒(小)少量, 酸化鉄少量。
2 10YR2/1 黒褐色土 黒色土と黒褐色土のラミナ, 白色粒少量。
3 10YR2/1 黒褐色土 黒色土粒, 暗褐色土粒, 酸化鉄を混む。
SK162
1 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(中)少量。
SK163
1 10YR2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(中)少量。
SK164
1 10YR2/2 黒褐色土 酸化鉄ブロック(極小)、白色粒少量。
2 10YR2/3 暗褐色土 黒褐色土粒(中)少量。

- SK165
1 10YR3/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量, 酸化鉄・白色粒少量。
2 10YR4/4 暗褐色土 赤褐色土(中)少量, 白色粒少量, 酸化鉄少量。
3 10YR4/6 暗褐色土 褐色ローム粒(極小), 酸化鉄少量。
4 10YR4/6 暗褐色土 暗褐色土粒(小)少量。
SK166
1 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土(小)、白色粒(極小)、酸化鉄少量。
2 10YR2/6 黄褐色土 黄褐色土粒(中)、暗褐色土粒(小)少量, 黒褐色土粒(小)少量。
SK168
1 10YR2/1 黒色土 ロームブロック(中)少量, 暗褐色土粒少量。
2 10YR2/1 黒色土 ローム粒(極小)少量, 暗褐色土粒少量。



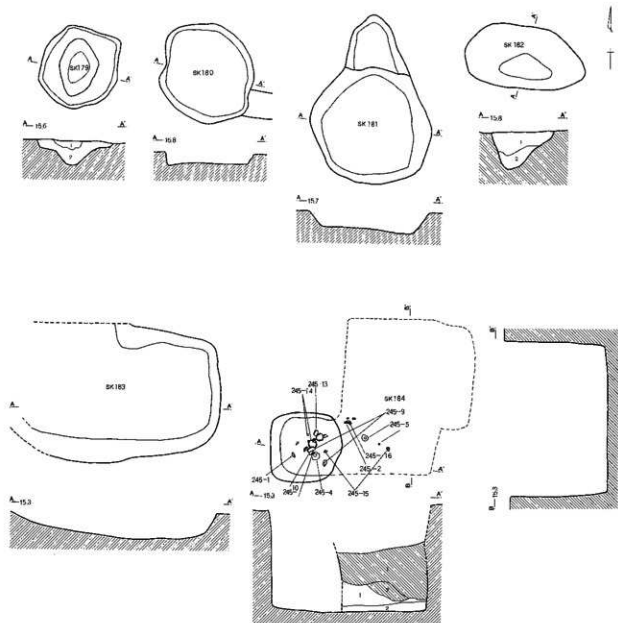
第236図 中・近世土壘(3)



- S K172**
- 1 10Y3/2 暗褐色土 ローム粒 (極小)。
 - 2 10Y3/2 暗褐色土 ハードロームブロック (中) 散見。
 - 3 10Y3/2 暗褐色土 ハードロームブロック (中) 炭化したソフトロームブロック多量。
 - 4 10Y3/2 暗褐色土 ローム粒 (極小) 多量。
 - 5 10Y3/2 暗褐色土 ハードロームブロック (小)・ローム粒 (極小) 多量。
 - 6 10Y3/2 暗褐色土 ハードローム、ソフトローム中量。
 - 7 10Y3/2 基褐色土 暗褐色土ブロック (中) 多量、ハードローム粒 (極小) 散見。
 - 8 10Y3/2 基褐色土 暗褐色土ブロック (中)、均質な層。
 - 9 10Y3/4-1 基褐色土 ローム ハードローム中量。
 - 10 10Y3/2 基褐色土 ハードローム粒 (極小) 散見、均質な層。
 - 11 10Y3/2 基褐色土 同4/4-4/8ロームブロック (大)

- S K173**
- 1 10Y3/2 暗褐色土 砂 (極小) 多量。
 - 2 10Y3/2 暗褐色土 砂 (極小) 多量。
 - 3 10Y3/2 暗褐色土 砂 (極小)、ローム粒 (極小) 少量。
 - 4 10Y3/2 暗褐色土 炭化したロームブロック (中)・砂 (極小) 散見。
 - 5 10Y3/2 暗褐色土 炭化物等も含まない。
 - 6 10Y3/2 暗褐色土、灰(小)暗褐色土、ローム粒 (極小) 散見。
 - 7 10Y3/3-3/4 暗褐色土 ハードローム粒 (極小)。

第237図 中・近世土壇(4)



SK179

- 1 10Y36/9 褐色軟質土 褐色ハードロームブロック、褐色土粒少量。
- 2 10Y32/4 暗褐色土 褐色ハードローム粒(中)少量。

SK182

- 1 10Y32/4 暗褐色土 褐色ローム粒(細小)少量。
- 2 10Y32/2 当層位土 褐色ハードローム粒(小)、風化の激しい褐色ローム粒と黄褐色土粒が混じる。

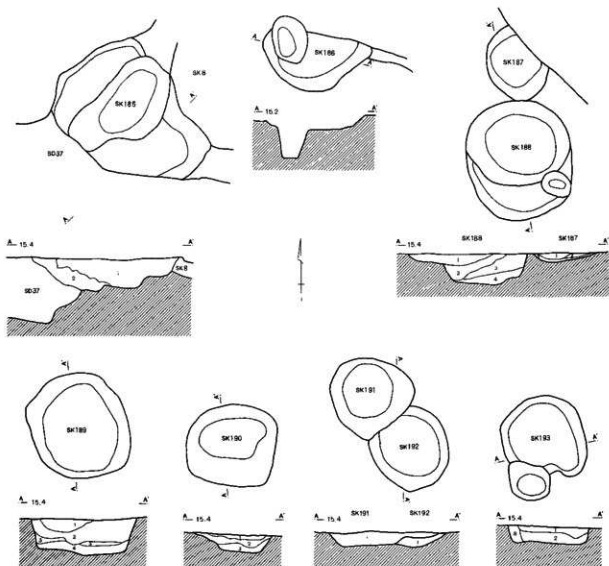
SK184

- 1 10Y32/2 暗褐色土 ローム粒(細小)多量。
 - 2 10Y32/3 暗褐色土 ロームブロック(中)多量。
- * 土層は天井板が入りまくる層位のため、土層との境界は場所により不整合をなす。

- 1 10Y32/3 暗褐色土 カワラタは現上から多く出土
- 地層1 ハードローム(壁)、周辺に比べレベルがやや下がっている。
- 2 ハードロームが崩壊しボロボロになった部分。



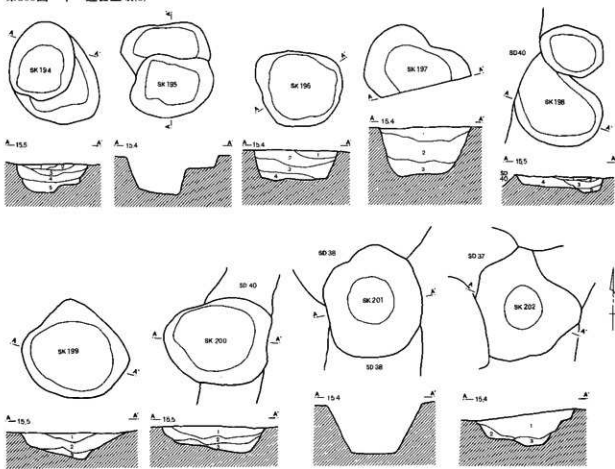
第238図 中・近世土壌(5)



- SK185
 1 197K3/4 暗褐色土 白色粒、褐色ハーフローム粒(中)多量、黒色土粒(中)少量。
 2 197K3/4 暗褐色土 白色粒、褐色ハーフローム粒(中)多量。
- SK187
 1 197E2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
 2 197E2/3 暗褐色土 褐色ローム粒(中)、黒褐色土粒(小)。
 3 197B4/6 褐色土 黒褐色土粒(極小)少量。
- SK188
 1 197E2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(小)少量。
 2 197B4/5 褐色土 黒褐色土粒(極小)少量、黒褐色ハーフローム(小)少量。
 3 197E2/3 暗褐色土 褐色ローム粒(中)少量。
 4 197B4/6 褐色土 褐色ハーフローム粒(中)少量。
- SK189
 1 197E2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
 2 197E2/3 暗褐色土 黒褐色土粒(小)、褐色ローム粒(小)多量。
 3 197E2/3 暗褐色土 褐色土粒(極小)少量。
 4 197B4/6 褐色土 白色粒(中)、褐色ハーフローム粒多量。
- SK190
 1 197E2/3 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
 2 197E2/3 暗褐色土 黒褐色土粒(小)、褐色ローム粒(小)多量。
 3 197B4/6 褐色土 黒褐色土粒(小)少量。
- SK191
 1 197E2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)少量、黒色土粒(極小)少量。
- SK192
 1 197E2/2 黒褐色土 褐色ローム粒(極小)多量。
- SK193
 1 197E2/1 黒色土 褐色ソフトローム(中)多量。
 2 197E2/1 黒色土 褐色ソフトローム(極小)少量。
 3 197E2/1 黒色土 褐色ソフトローム(極小)多量。



第239図 中・近世土壙(6)



SK 194

- 1 1972/3 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)・白色炭粒。
- 2 1974/2 におい黄褐色土 褐色ハードローム(中)少量、褐色ソフトローム(小)少量。
- 3 1974/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
- 4 1974/2 におい黄褐色土。
- 5 1974/2 褐色土。

SK 195

- 1 1974/4 褐色土 黒褐色土粒(小)少量。
- 2 1972/3 黒褐色土 褐色ローム粒(小)少量。
- 3 1972/2 黒褐色土 褐色ローム粒(小)少量、褐色土粒(極小)少量。
- 4 1974/4 褐色土。

SK 197

- 1 1972/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
- 2 1974/2 におい黄褐色土 褐色ローム粒少量、暗褐色ハードローム(小)少量。
- 3 7. 1974/4 暗褐色ハードローム(中)少量。

SK 198

- 1 1972/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
- 2 1972/3 暗褐色土 褐色ローム粒(小)少量。
- 3 1972/2 暗褐色土 褐色ロームプロット(中)。
- 4 1974/4 褐色土 暗褐色土粒(極小)少量。
- 5 1972/3 暗褐色土 暗褐色土粒(極小)少量。

SK 199

- 1 1972/3 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
- 2 1972/2 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量、褐色土粒(極小)少量。
- 3 1974/4 褐色土 暗褐色ハードローム(中)少量。

SK 200

- 1 1972/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)・黒褐色土粒(小)少量。
- 2 1972/2 暗褐色土 褐色ローム粒(中)少量。
- 3 1974/4 褐色土 白色粒(中)、褐色ハードローム少量。

SK 202

- 1 1972/4 暗褐色土 褐色ローム粒(中)少量。
- 2 1972/4 暗褐色土 暗褐色ハードローム(中)少量。
- 3 1974/4 暗褐色土 暗褐色ハードローム(中)少量。

ものが多い。深度も様々で、時期、機能を推定できるものはほとんどない。

b. 土壙出土遺物

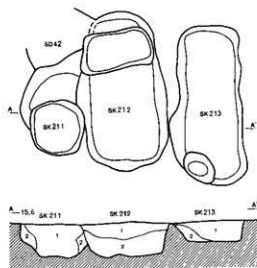
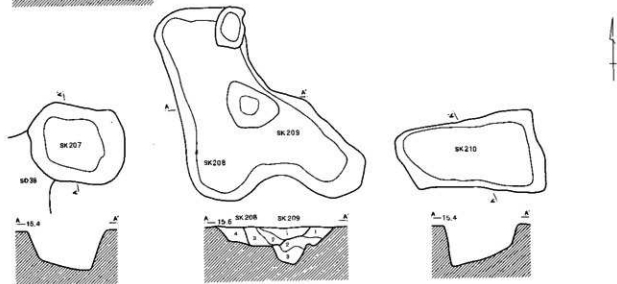
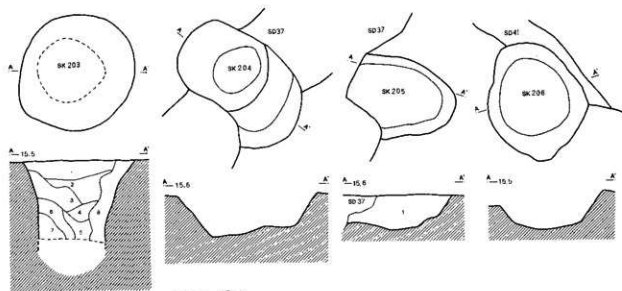
第24図1, 2は板破片である。1は第172号土壙出土である。右端に周囲の区画を構成する直線的な掘り込みがあり、蓮台の一部が観察される。蓮台の影り込みは深い。2は第173号土壙出土。背面は剥落してい

る。

第24図3～7は第183号土壙出土遺物である。3は中央部が穿孔され、底部には回転糸切り痕がある。鈍い橙色を呈する。4はかわらけ。底部に回転糸切り痕を有する。鈍い橙色を呈する。3, 4とも器壁は極めて薄い。5, 6は内耳の熔烙である。5は2割ほどが残存している。黒褐色を呈し、口唇部端部が強く外屈する。胴部中に粘土帯の接合痕が認められる。底部



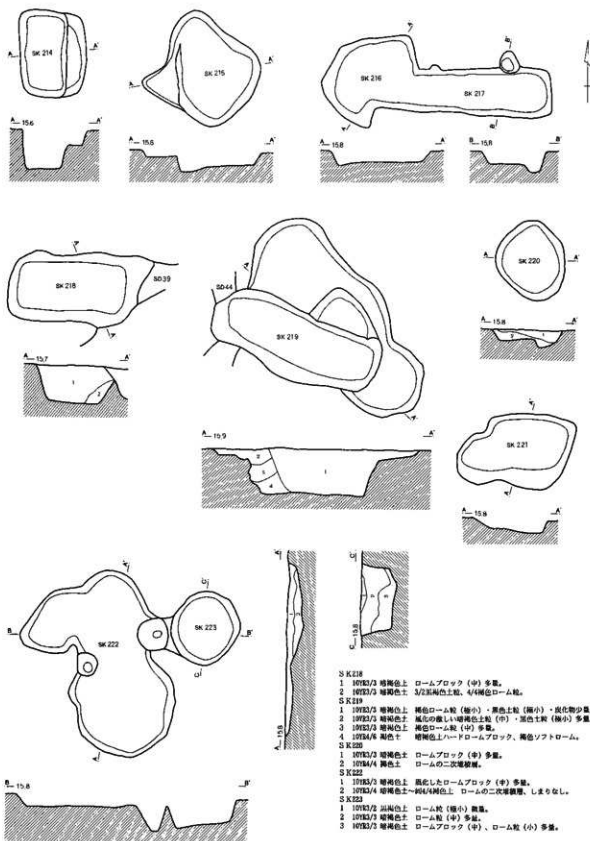
第240図 中・近世土壌(7)



- SK 203
 1 10YR3/3 褐色ローム粒 (微小) 散見。
 2 10YR3/2 褐色ローム粒 (微小) 散見。
 3 10YR3/2 褐色ローム粒 (微小) 散見。2層よりしまっている。
 4 10YR3/2 褐色ローム粒 (微小) 少量。
 5 10YR3/2 褐色ローム粒 (微小) 少量。しまりなし。
 6 10YR3/4 褐色ハードローム (中) 散見。
 7 10YR2/2 褐色ローム粒 (微小) 散見。しまりなし。
 8 10YR3/3 褐色ローム粒 (微小) 少量。褐色ハードローム (中) 散見。しまりなし。
- SK 204
 1 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土粒 (中) - 褐色ローム粒 (中) 少量。
- SK 205
 1 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒 (微小) 少量。炭化物散見。
 2 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒 (中) - 黒褐色土粒 (中)。
 3 10YR3/2 暗褐色土 ローム粒 (小) 散見。
 4 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色ロームブロックと混じり合う。
- SK 206
 1 10YR3/2 暗褐色土とロームブロックが混じり合う。
 2 10YR4/4 褐色ローム粒。黒腐土。
 3 10YR2/2 暗褐色土 ローム粒 (微小) 散見。
- SK 211
 1 10YR3/2 暗褐色土 ロームブロック (微小)。
 2 10YR2/2 黒褐色土 同(4)褐色ローム粒。管の腐屑上。
- SK 212
 1 10YR2/2 暗褐色土 ロームブロック (微小) 散見。
 2 10YR4/3 同(4)黄褐色土 黒褐色土ブロック (中)。
- SK 213
 1 10YR3/2-2/2 黄褐色土 ロームブロック (中)。
 2 10YR4/2 黒褐色土 ロームブロック (中) - 褐色土ブロック (中) 散見。

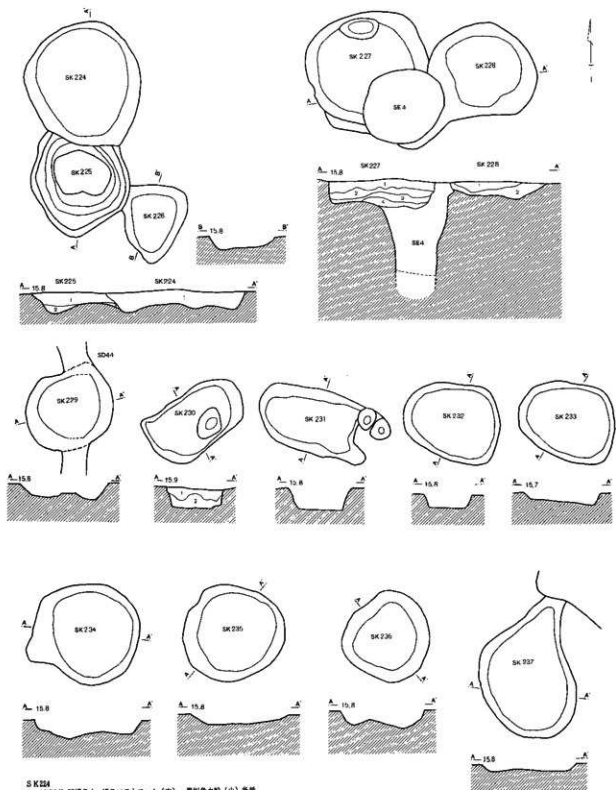


第241図 中・近世土坑(8)



- SK 218
 1 1973/3 暗褐色土 ロームブロック(中)多量。
 2 1973/3 暗褐色土 3/2系褐色土粒、4/4系ローム粒。
- SK 219
 1 1973/3 暗褐色土 褐色ローム粒(微小)・黒色土粒(微小)・炭化物少量。
 2 1973/3 暗褐色土 風化の激しい暗褐色土粒(中)・黒色土粒(微小)多量。
 3 1973/3 暗褐色土 褐色ローム粒(中)多量。
 4 1974/6 褐色土 暗褐色土・ハードロームブロック、褐色ソフトローム。
- SK 220
 1 1973/3 暗褐色土 ロームブロック(中)多量。
 2 1974/4 褐色土 ロームの二次堆積層。
- SK 221
 1 1973/3 暗褐色土 風化したロームブロック(中)多量。
 2 1973/4 暗褐色土 褐色土・褐色土粒 4/4系ロームの二次堆積層、しまりなし。
- SK 222
 1 1973/2 土褐色土 ローム粒(微小)少量。
 2 1973/3 暗褐色土 ローム粒(中)多量。
 3 1973/3 暗褐色土 ロームブロック(中)、ローム粒(小)多量。

第242図 中・近世土壌(9)



S K 224

1 10YR2/3 暗褐色土 褐色ソフトローム(中)・黒褐色土粒(小)多量。

S K 225

1 10YR2/3 黒褐色土 褐色ソフトローム(小)・灰褐色土粒(中)多量。
2 10YR2/4 暗褐色土 褐色ソフトローム(中)多量、黒褐色土粒(小)少量。
3 10YR2/4 暗褐色土 黒褐色土粒(極小)少量。

S K 227

1 10YR2/2 暗褐色土 ロームブロック(中)多量。
2 10YR2/3 暗褐色土 ロームブロック(大)多量。
3 10YR2/3 暗褐色土 ロームブロック(中)多量。
4 10YR2/4-4/4 ロームの二次堆積。

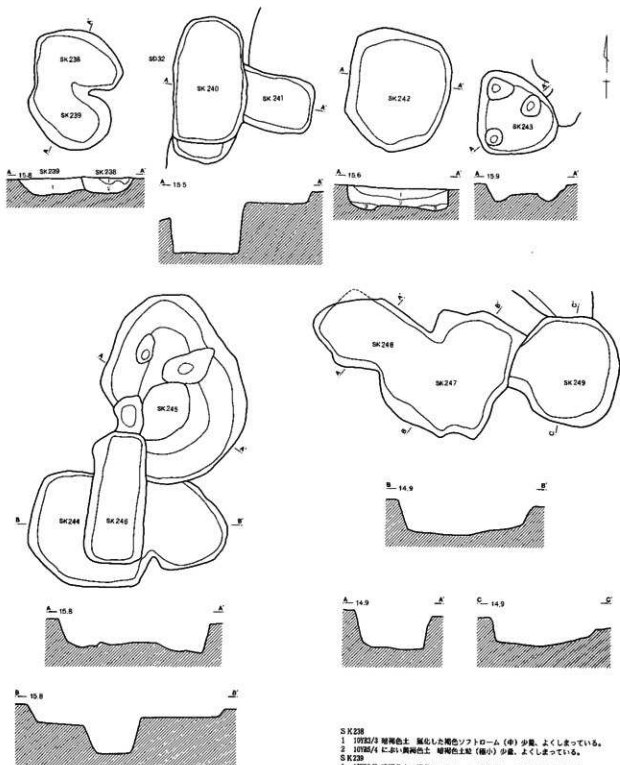
S K 228

1 10YR2/3 暗褐色土 ロームブロック(小)。
2 10YR2/3 暗褐色土上と10YR4/4褐色ローム。

S K 230

1 10YR2/4 暗褐色土 褐色ローム粒(極小)少量。
2 10YR2/3 暗褐色土 褐色ローム粒(小)多量、黒色土粒(小)少量。

第243図 中・近世土壌(0)



SK 236

1 10YR2/3 暗褐色土 風化した褐色ソフトローム (中) 少量、よくしまっている。

2 10YR2/4 におい黄褐色土 暗褐色土殻 (極小) 少量、よくしまっている。

SK 239

1 10YR2/3 暗褐色土 褐色ソフトローム (中) 多量、黄褐色土粒 (中) 少量。

SK 242

1 10YR2/3 暗褐色土 ロームブロック (中) 多量。

2 10YR2/2 黄褐色土 ロームブロック (中) 多量。

3 10YR2/4 暗褐色ローム ハートロームの二次堆積、ブロック (中)。



第8表 中・近世土壌観察表(1)

土壌名	所在グリッド	長径(m)	短径(m)	深度(m)	主軸方向
SK131	AK-13	1.15	1.00	0.18	
SK132	AJ-13・AK-13	1.02	0.90	0.10	
SK133	AJ-13	0.93	0.76	0.09	
SK134	AK-13	1.30	1.30	0.12	
SK135	AK-14	1.04	1.00	0.22	
SK136	AK-14	0.86		0.04	
SK137	AK-15			0.09	
SK138	AK-15			0.03	
SK139	AI-14	1.00	0.88	0.18	
SK140	AJ-15	0.92	0.88	0.12	
SK141	AJ-15	0.88	0.86	0.12	
SK142	AI-15	0.90	0.87	0.08	
SK143	AI-15	1.19	1.17	0.10	
SK144	AI-15	1.06	0.94	0.33	
SK145	AK-15			0.35	
SK146	AK-14	0.87	0.70	0.16	
SK147	AJ-15	0.82	0.60	0.18	
SK148	AG-16	1.00	0.92	0.06	
SK149	AG-17	0.97	0.78	0.15	
SK150	AG-16	1.42	1.05	0.10	
SK151	AG-18	1.10	1.04	0.10	
SK152	AF-17	1.06	0.80	0.13	
SK153	AG-18	0.90	0.83	0.15	
SK154	AF-17	0.93	0.84	0.04	
SK155	AF-16			0.06	
SK156	AF-18	1.88	1.44	0.24	
SK157	AG-16	2.35		0.04	
SK158	AG-16	1.22	1.02	0.11	
SK159	AH-17・AJ-18・AK-18	0.62	0.62	0.32	
SK160	AH-17	1.87	1.20	0.22	N-43°-W
SK161	AJ-18	0.69	0.66	0.39	
SK162	AH-15		0.66	0.04	
SK163	AH-15	0.68	0.63	0.12	
SK164	AG-18	1.72	0.69	0.15	N-26°-W
SK165	AJ-14	1.73	1.58	0.34	
SK166	AG-20	2.38	1.80	0.42	N-31°-W
SK167	AG-18・AH-18	3.88	1.32	0.24	N-28°-W
SK168	AJ-16	1.42	1.25	0.82	
SK169	BB-13	1.10	0.85	0.32	
SK170	BB-11	1.19	1.10	0.32	
SK171	BB-8	2.05	1.82	0.19	
SK172	BB-12	1.72	1.30	(1.70)	
SK173	BB-12	1.85	1.80	1.50	
SK174	BB-13	2.40	1.77	0.55	N-0°
SK175	BA-8・BB-8	2.60	2.35	0.38	
SK176	BA-7	3.50	2.64	0.33	N-67°-E
SK177	BA-7	1.75	1.50	0.16	
SK178	BA-7	2.65	1.19	0.48	N-28°-E
SK179	BB-6	1.30	1.24	0.38	
SK180	BA-5	1.57	1.48	0.21	
SK181	BB-5	2.65	1.94	0.34	N-0°
SK182	BA-4	1.94	0.98	0.60	N-80°-W
SK183	BB-6・BA-3		2.12	0.38	
SK184	BB-12	3.22	2.45	1.66	
SK185	AY-10			0.82	

第9表 中・近世土壌観察表(2)

土 壌 名	所 在 グリッド	長 径 (m)	短 径 (m)	深 度 (m)	主 軸 方 向
S K186	A Z -11			0.67	
S K187	A Z -12			0.15	
S K188	A Z -12	1.87	1.67	0.49	
S K189	A Z -12	1.69	1.54	0.57	
S K190	BA -12	1.43	1.30	0.27	
S K191	BA -12	1.35	1.29	0.20	
S K192	BA -12		1.22	0.20	
S K193	BA -12	1.69	1.35	0.25	
S K194	A Z -11	1.70	1.28	0.49	
S K195	A Z -11	1.50	1.40	0.60	
S K196	A Z -11	1.43	1.20	0.48	
S K197	BA -11			0.72	
S K198	A Z -10			0.28	
S K199	A Z -10	1.70	1.42	0.40	
S K200	A Z -10	1.66	1.37	0.40	
S K201	BA -11	1.77	1.56	0.76	
S K202	BA -9			0.55	
S K203	BA -10	1.83	1.82	(1.40)	
S K204	A Z -9	2.22	1.40	0.65	
S K205	A Z -9			0.50	
S K206	A Z -10・BA-10	1.80	1.65	0.60	
S K207	A Z -11	1.56	1.19	0.60	
S K208	A Z -8			0.56	
S K209	A Z -8			0.30	
S K210	A Z -11	2.34	1.30	0.62	N-90°-E
S K211	A Z -9			0.52	
S K212	A Z -9	2.52	1.43	0.53	N-3°-W
S K213	A Z -9	2.52	1.16	0.32	N-0°
S K214	A Z -8	1.38	1.05	0.62	
S K215	A Z -7	1.60	1.42	0.33	
S K216	BA -6			0.22	
S K217	A Y -7		0.65	0.33	
S K218	A Z -7	2.15	1.20	0.55	N-90°-E
S K219	A Y -7・A Z -6	3.64	2.30	0.72	N-38°-E
S K220	A Y -7	1.27	1.10	0.26	
S K221	A Y -6	2.02	1.25	0.23	
S K222	A Y -7・A Z -7	2.97	2.00	0.26	N-8°-W
S K223	A Y -7・A Z -7	1.16	1.10	0.56	
S K224	A Y -6	2.06	1.70	0.28	
S K225	A Z -6		1.58	0.30	
S K226	A Z -6	1.24		0.20	
S K227	A Z -6	1.90	1.82	(1.50)	
S K228	A Z -6	2.54	1.60	0.24	
S K229	A Z -6	1.43	(1.24)	0.24	
S K230	A Y -5	1.65	0.93	0.30	N-55°-E
S K231	A Z -6	2.08	1.02	0.35	N-70°-W
S K232	BA -6	1.55	1.25	0.20	
S K233	BA -6	1.60	1.23	0.18	
S K234	BA -6	1.87	1.62	0.30	
S K235	BA -5	1.64	1.54	0.17	
S K236	A Z -6	1.45	1.40	0.28	
S K237	A Z -6		1.60	0.12	
S K238	A Z -5	1.46		0.22	
S K239	A Z -5		0.96	0.25	
S K240	BA -6	2.33	1.18	0.97	N-2°-W

第10表 中・近世土壌観察表(3)

上 堀 名	所在グリッド	長 径 (m)	短 径 (m)	深 度 (m)	主 軸 方 向
S K 241	BA-9		0.92	0.18	
S K 242	BA-6	2.00	1.86	0.38	
S K 243	AZ-4・AZ-5	1.50	1.28	0.26	
S K 244	AZ-6・BA-6	3.17	1.78	0.33	N-90°-E
S K 245	AZ-6	3.00	2.26	0.53	N-0°
S K 246	AZ-6・BA-6	2.08	0.95	0.77	N-5°-E
S K 247	BA-7	2.10	1.46	0.55	
S K 248	BA-7		1.25	0.56	
S K 249	BA-7		1.72	0.38	

付近には成形時の指頭圧痕が認められる。6は約1/2程残存している個体で、量は5に近い。胴部の立ち上がりか5に比べ緩やかで、口唇部の外屈はない。やはり粘土帯の接合痕が認められる。7は土製品の型の破片と思われる。正面図上半には楕円形の突起がある。側面はいずれも平坦に仕上げられ、上部には溝状の窪みを有する。内部は大きく窪んでおり、指紋が観察される。素地土はかわらけと類似している。

第245図は第184号土壌出土遺物である。この土壌は地下式竈的な構造を有するもので、遺物は開口部付近の底面近くから集中して検出された。出土状況から一括性の高いものと考えられる。1は永楽通寶。2、3は板神破片で、2は蓮台と種子の一部が認められる。側縁部が残存しており、区画を構成する線が認められる。3は年銘の一部が認められるが詳細は不明である。

4~16はかわらけである。いずれも底面に回転糸切り痕を有する。4、5はほぼ完形に近い。5は糸切り痕の上に直線的な押捺痕が認められる。4、5とも胴部中位に屈曲があり、口縁部に向かってわずかに外傾する。この屈曲部にろくろ使用に伴う凹部が形成されている。6~11は口縁部が外傾しながら直線的に立ち上がるもの。8、9は口縁部がわずかに内湾し、口唇部が尖り気味となる。9は糸切り後、押圧を受け、底部中央が直線的に張り出している。10は底部が薄い。10、11とも体部の厚みは比較的厚い。12~16は器高が低く、体部は直線的に立ち上がるもの。体部は厚いものが多い。体部外面にろくろ成型時に凹部が形成されている。13、14、16は内面口縁部付近に屈曲を持ち、口唇部先端に向かって尖り気味となる。胎土は鉄分の

含有量が大きく3分できる。鉄分を多く含むものが7、10、13、16、中程度なのが6、11、12、14、あまり含まないものが4、5、8、9である。型式学的特徴とのゆるやかな関連が認められる。

17はゴケ皿で、美濃の大窯の製品と考えられる。高台を有し、灰褐色の釉がかけられている。内面にトチンの跡が認められる。18は天目茶碗。口唇部付近が緩やかに屈曲する。黒色の釉が施されている。

これらの遺物は16世紀後半から17世紀にかけてのものと考えられる。

c. 井戸

今回の調査では4基の井戸が検出された。いずれも素堀で、深度の浅いものが多い。土壌との差異は明確ではないが、形態、覆土の特徴から、井戸と判断した。第1号井戸と第2号井戸は隣接しているが、他は離れており、分布に傾向は特に認められない。

第1号井戸

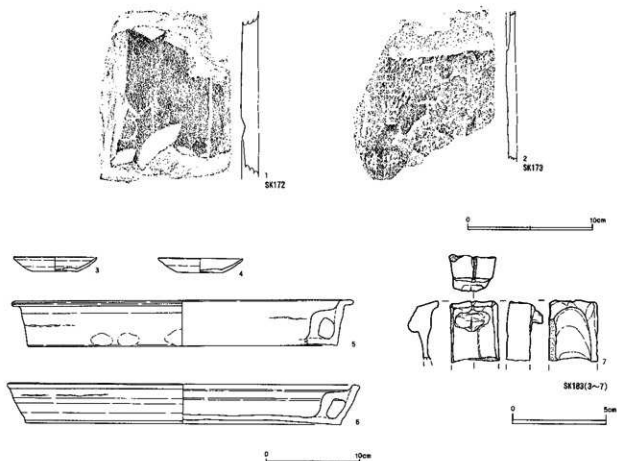
A J-14に位置し、第5号住居跡を破壊して掘られている。長径2m、短径1.3mを測る。深度は浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。土壌との差異は明確ではないが、調査時の所見では、周囲に存在する土壌に比べ、覆土に粘性があることから、井戸と判断した。

遺物は少量の縄文土器破片以外にはなく、時期等を明らかにすることは困難である。比較的 naturally 埋没が完了したようである。

第2号井戸

A J-14に位置する。第5号住居跡を破壊している。遺物は少量の縄文土器破片以外にはなく、時期を明ら

第244図 中・近世土壌出土遺物(1)



かにすることは困難である。第1号井戸と隣接するが、覆土の特徴はあまり類似していない。

第3号井戸

A I-17に位置する。確認における形状は南北に長い楕円形で、長径2.05m、短径1.45mを測る。底径は0.8mである。壁の立ち上がりは下位では直立しているが、上位では大きく開いている。深度は0.8mと浅く、土壌との判別は困難であるが、覆土の大半に砂層がラミナ状に混入し、かなり長期間にわたって滞水していた可能性が高いことから、井戸と判断した。遺物は検出されなかった。

第4号井戸

A Z-6に位置する。第227号土壌、第228号土壌に切られている。平面形態はほぼ円形で、長径1.35m、短径1.15mを測る。II区で検出された井戸はこの1基のみである。深度は2mを越え、完掘できなかった。

壁は上位でわずかに開き気味となるが、ほぼ直立している。覆土は細かく分層が可能で、ある段階から、自然に埋没が進行したようである。

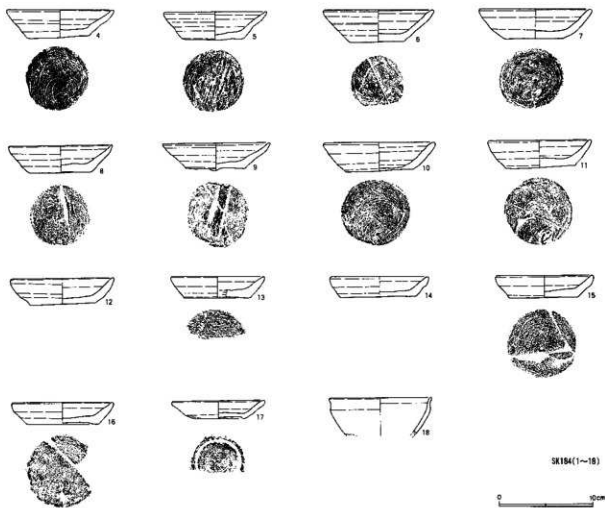
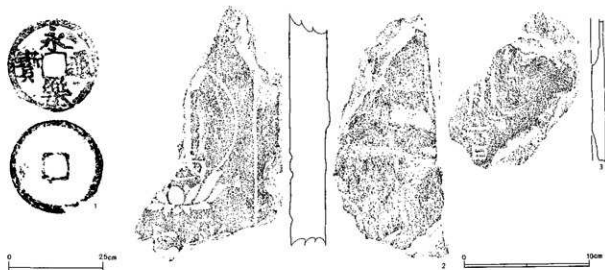
d. 溝

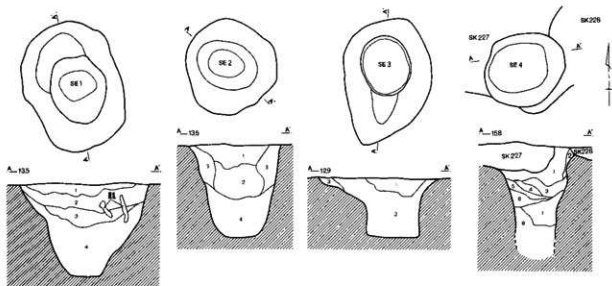
本遺跡から検出された溝は、その機能がおそらく水利に関わるものがほとんどであると考えられるが、恒常的に水が流れていたと考えられるような堆積を持ったものはない。第37号溝と第38号溝はほぼ同様の区画同士で切り合っており、水利以外に区画の機能を持ったものと考えられる。第37-42号溝が中世末から近世初期にかけて営まれたものと考えられるもの他、掘前時期の明確なものはない。ただし、覆土の特徴から、近世以降に埋没したものがほとんどと考えられる。

第1号溝

AK-13, 14, AJ-14に位置する。両端が調査区

第245図 中・近世土壌出土遺物(2)





SE1

- 1 1973/2 黒褐色土 暗褐色粘質土粒 (極小) 少量。
- 2 1974/6 褐色粘質土 黄褐色土粒 (中)・粘褐色土粒 (中) 少量。
- 3 1972/2 黒褐色土 黄色ローム粒 (極小) 微量。
- 4 1972/2 黒褐色土 暗褐色土粒 (極小) 少量。

SE2

- 1 1973/2 黒褐色土 黄色ローム粒 (極小) 少量。
- 2 1973/2 黒褐色土 黄色ローム粒 (極小) 少量。
- 3 1974/6 褐色土 黄褐色土粒 (中) 微量。
- 4 1972/2 黒褐色土 暗褐色土粒 (小) 少量。しまり悪い。

SE3

- 1 1972/2 黒褐色土 暗褐色土粒 (極小) 微量。
- 2 1972/2 褐色土 黒色の濃い黄色ローム粒 (中) 微量。砂層がラミナ状に堆積。
- 3 1974/6 褐色土 褐色土粒 (小) 微量。

SE4

- 1 1973/2 暗褐色土 黄褐色土粒 (中) 少量。ローム粒 (中) 中量。
- 2 1973/2 暗褐色土 壁の礫片。
- 3 1973/2 黒褐色土 ローム粒 (極小) 中量。
- 4 1973/2 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
- 5 1973/2 暗褐色土 風化したローム粒 (小) 少量。比較的均質な層。
- 6 1973/2 暗褐色土 ローム粒 (極小) 少量。比較的均質な層。
- 7 1972/2 黄褐色土 ローム粒 (極小) 微量。均質な層。しまり悪い。
- 8 1972/2 黒褐色土 ローム粒 (中) 中量。

外にかかり、全容は不明である。ほぼ東西に走るが、検出位置のほぼ中央で、クランク状に屈曲する。平面形態、幅員は不安定で、深度は約15cmで浅い。近世後半以前には埋没が完了している。

第2号溝

AJ-15に位置する。調査区の内部で確認できた部分はきわめてわずかで、全貌は不明である。形状は比較的整っている。深度は40cm近くあり、壁の立ち上がりもほぼ直立している。遺物は検出されなかったが、覆土の特徴から近世の所産と考えられる。

第3号溝

AK-16, 17, 18に位置する。ほぼ直線的に東西方向に走る溝。深度も約40cmでほぼ一定している。幅員は約1mである。東側の末端の立ち上がりは急角度で、この位置で延長が終了している。延長の方向は、等高線とほぼ直交し、I区中央の谷に向かって延びている。

I区中央の谷に関連する水利上の機能を有していたと考えられる。

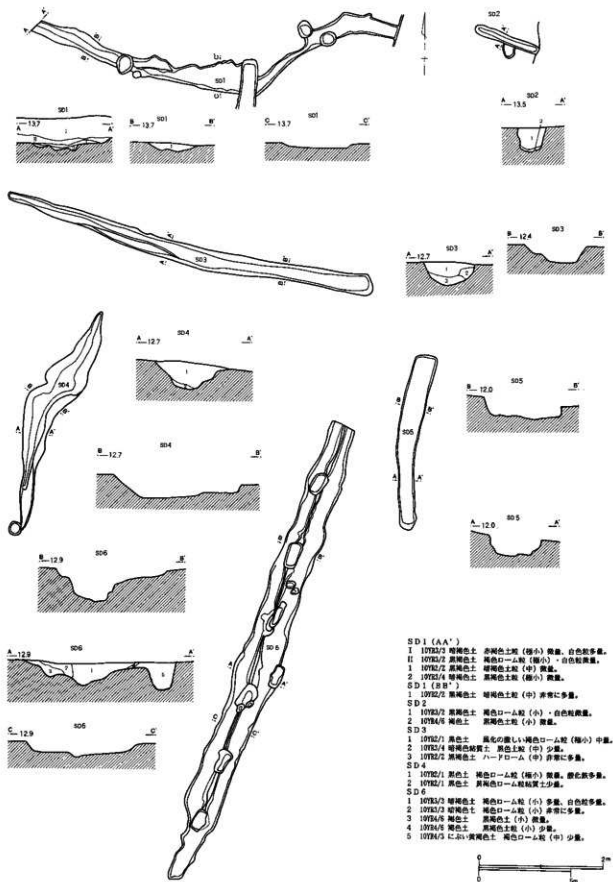
第4号溝

AJ-18, AJ-18に位置する。標高12mの等高線とほぼ並行する位置で確認された。形態は不安定で、等高線に沿うということが意識されたものと考えられる。覆土の特徴から、近世初期の所産と考えられる。

第5号溝

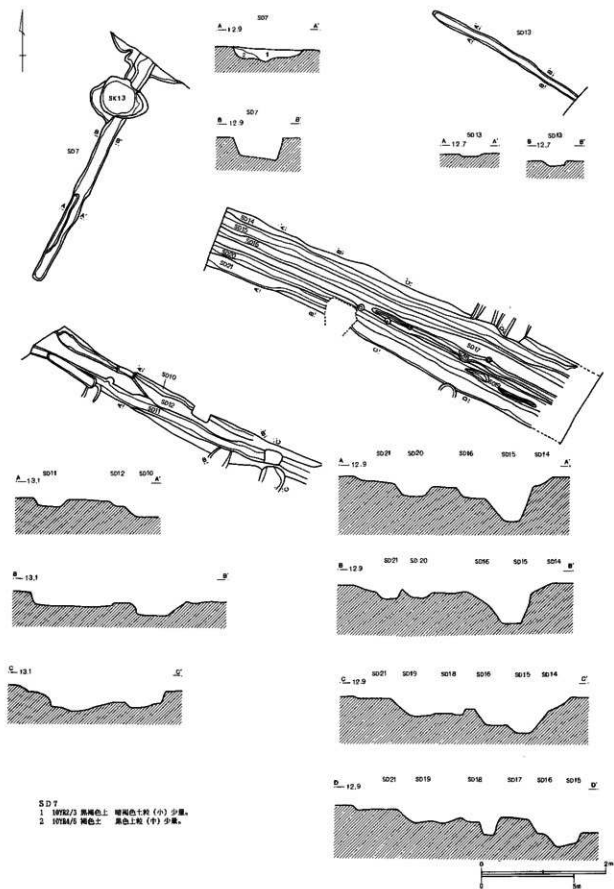
AJ-18, AK-18に位置する。第4号溝と平行する位置にある。確認された延長は約9.2mである。幅は北半が広く1.2mを測り、南半は狭く0.85m程である。壁の立ち上がりは全体にしっかりとおり、直立している。第4号溝に比べ、形態が整っている。この溝も等高線に沿う方向に延長しており、第4号溝とともに、谷との区画等、谷と非常に強い関連を持った溝と考えられる。土層断面図は掲載しなかったが、全体に黒味

第247図 溝(1)



- S D 1 (A A')
- 1 10722/2 暗褐色土 赤褐色土層 (極小) 少量, 白色粒少量。
 - II 10722/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (極小)
 - 1 10722/2 暗褐色土 暗褐色土層 (中) 少量。
 - 2 10722/4 暗褐色土 暗褐色土層 (極小) 少量。
- S D 1 (B B')
- 1 10722/2 暗褐色土 暗褐色土層 (中) 非常に多量。
- S D 2
- 1 10722/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (小), 白色粒少量。
 - 2 10724/4 褐色土 暗褐色土層 (中) 少量。
- S D 3
- 1 10722/2 褐色土 風化の強い褐色ローム粒 (極小) 中量。
 - 2 10722/2 暗褐色粘質土 褐色土層 (中) 少量。
 - 3 10722/2 暗褐色土 P-2ローム (中) 非常に多量。
- S D 4
- 1 10722/1 褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。棕色粒多量。
 - 2 10722/2 褐色土 異褐色ローム粒粘質土少量。
- S D 6
- 1 10723/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (小) 多量, 白色粒多量。
 - 2 10723/2 暗褐色土 褐色ローム粒 (小) 非常に多量。
 - 3 10724/4 褐色土 褐色土層 (小) 少量。
 - 4 10724/4 褐色土 暗褐色土層 (小) 少量。
 - 5 10724/2 赤い黄褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。

第248图 沟(2)



の強い覆土が堆積していた。所属時期については明らかにし得ないが、第4号溝と同時期乃至は近接した時期の所産と考えられる。

第6号溝

AE-AH-17に位置する。北東-南西方向に走る溝。第51号溝と重複する。北側の端部は、AE-18に一部かかると思われる。延長は約30m程あり、2条の溝がほぼ重複して走る。東側の溝が新規に掘り直されたものである。2条の溝の中央土手状の部分にはほぼ等間隔に土塊状の掘り込みを持つ。近世の後半段階に埋没したものと考えられる。

第7号溝

AF-18、AG-18に位置する。南西から北東方向にのび、第51-63号溝群に接続する。ほぼ直線的で、幅員もほぼそろっている。遺物は出土していない。

第10-12号溝

AA-21、AB-21、22に位置する。第14-21号溝群に隣接し、平行して走る。延長方向は北西-南東方向でほぼ直線である。プランの特徴も類似しており、一連のものと考えられる。いずれも直線的に走り、幅員も一定している。深度は第10号溝がやや深いが、他は30cm程である。遺物は出土していない。掘削された位置は現況の土地利用における区割にほぼ沿ったものである。近世後半から近代にかけてのものと考えられる。

第13号溝

AD-23、AE-23、AE-24に位置する。深度10-15cm程の浅い溝。幅員も30cm程と狭いが、平面形態は直線的で、規格的なものである。延長方向は第10-12号溝、第14-21号溝と平行している。遺物は出土していないが、第10-12号溝と同様、現況での土地利用における区割にほぼ沿ったものであり、近世後半から近代にかけての所産と考えられる。

第14-21号溝

AB-22-24、AC-23、24に位置する。第10-12号溝と隣接し、平行して走る。直線的に走り、幅員もほぼ一定している。第15号溝が最も深く、約70cmの深

度を持つ。第19-21号溝は比較的浅い。遺物は出土していないが、第10-12号溝同様、現況の土地利用における区割にほぼ沿ったものであり、近世後半から近代にかけてのものと考えられる。

第10-12号溝、第13号溝、第14-21号溝は支台をほぼ横断する方向に走っている。東端は調査区外のため、明らかではないが、延長方向には綾瀬川から侵入する支谷があり、溝はこれに向かっていると考えられる。これらの溝には明確に水が流れていたことを物語る痕跡はないが、水利に関わる機能を有していたと推測される。

第31、32号溝

BA-6、BB-6に位置する。両者は交差するが、第32号溝が浅い。両者とも小規模なもので、幅員は20cm程度である。覆土は暗褐色から褐色で、近世後半以降のものと考えられる。

第37号溝

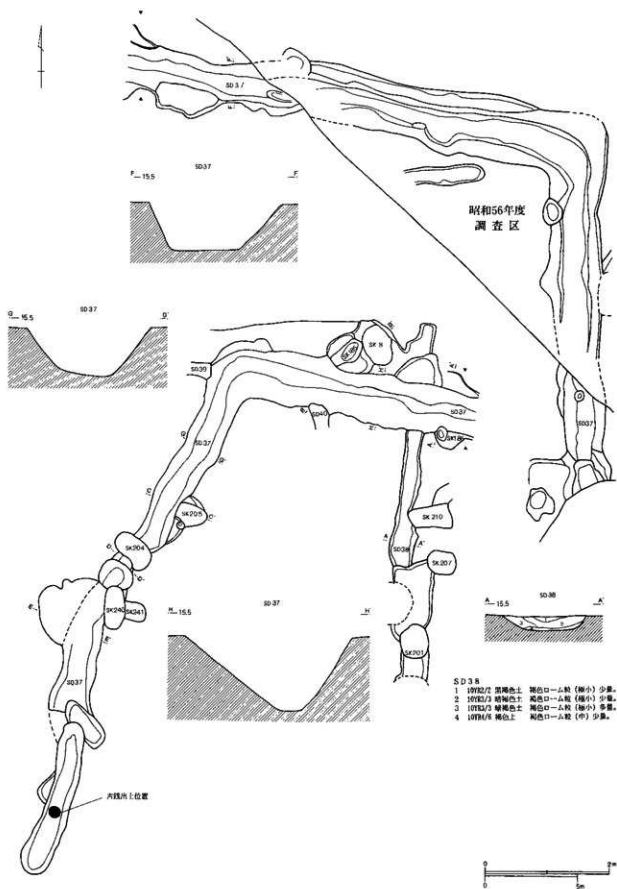
AY-9-11、AZ-9、10、BA-9、13、BB-9、13に位置する。昭和56年度調査時に第4号溝として調査されたものと一連のものである。一部が調査区外にかかるため、全形は明らかではないが、一隅が隅切り状となる矩形を呈する。1辺が35m前後になると考えられる。区画を目的としたものと考えられ、形状、位置が類似し、同等の機能を有すると考えられる第39号溝から瓦が検出されたことなどから、屋敷跡等に付属するものと考えられる。しかし、本溝跡によって区画された内部から、建物跡等の痕跡を示す遺構、遺物は検出されなかった。

壁は斜めに立ち上がり、底部幅は場所により異なる。そのため、断面形態はV字状の部分、台形状の部分があり、一定していない。深度は深いところで1.2mを測る。

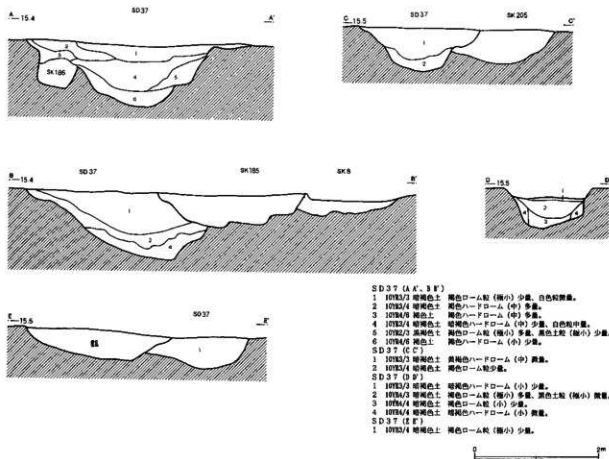
覆土は暗褐色系のもので、ローム粒を多量に含んでいる。堆積状況から、一括の埋め戻しとは認められないが、ロームを多く含むことから、整地作業を伴って埋められたものと考えられる。

本溝の一端所から古銭がまとまって検出された(第

第249图 溝(3)



第250図 溝(4)



255図)。古銭は覆土中位の径50cm程の範囲に集中していたが、周囲に新たな掘削の痕跡または、容器上のももの痕跡は認められなかった。他には本遺構に明確に伴う遺物は検出されなかった。本溝が営まれた時期は出土貨幣から、近世初期に属すると考えられる。

第38号溝

AZ-10, 11に位置する。第37号溝に切られている。ほぼ南北方向に走る。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、第39, 49号溝と関連を持っていたものと考えられる。幅130cm、深度20cm程の規模を持つ。第37号溝に切られているため、近世初期以前のものと考えられる。

第38, 40号溝

AY-8, 9, AZ-7, 8, 10, BA-6, 7に位置する。第37号溝に切られているため、両者の関係

にやや不明な点が残るが、一連の区画であると考えられる。第37号溝とほぼ同様の区画を構成し、第37号溝とは東西方向に約30m程ずれた位置にある。

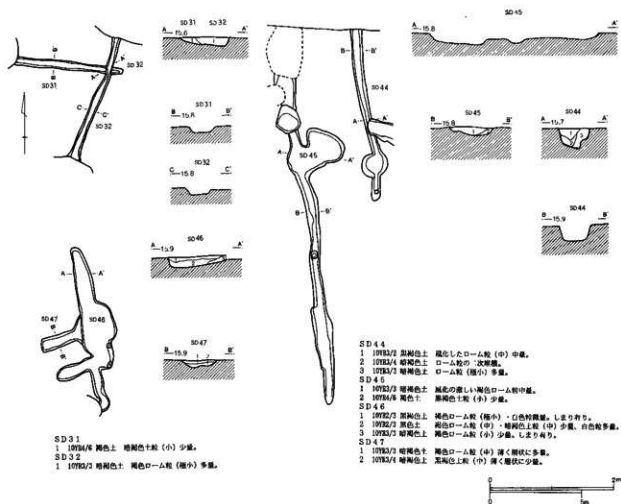
幅員はほぼ一定している。第37号溝に比べて狭く、80cm程で、深度も50cm程度である。その位置、区画の方向性から、第37号溝と同等の機能を有しながら、時期的に遡るものである可能性が高い。

第39号溝からは第259図掲載の陶器と瓦が検出されている。第37号溝に切られているため、近世初期以前の所産であることは明らかである。

第41, 42号溝

AY-8, 9, AZ-9, 10に位置する。第39号溝に切られている。北西-南東方向にのびる。深度は15cm程である。途中確認できない部分があるが、両者の延長方向はほぼ一致しており、一体のものであったと

第252図 溝(6)



考えられる。ほぼ直線的にのびるが、調査区外にかかるため全形、性格等については不明な点が残る。水利よりも区画の機能を有していたものと考えられる。近世初期以前のものであることは明らかであるが、掘削の時期については明らかにし得ない。第37、39、40号溝とは、延長方向から見る限り関連は認められない。第39、40号溝等の区画が設定される以前の土地利用形態を示すものであろう。

第44号溝

AY-5、6、AZ-6に位置する。ほぼ南北にのびる小規模な溝である。幅約50cm、延長は9mである。第45号溝と近接し、延長方向もほぼ一致している。壁は急角度に立ち上がり、底面は一定の幅を確保している。出土遺物はなく、掘削の時期については不明であるが、覆土の特徴から、近世後半に下る可能性は低い。

第45号溝

AY~BA-5に位置する。第44号溝に隣接し、ほぼ同様の延長方向を有する。規模もほぼ同様である。出土遺物はなく、掘削の時期については不明である。黒褐色土の土層を含まないことから、第44号溝よりもやや新しいものと考えられる。

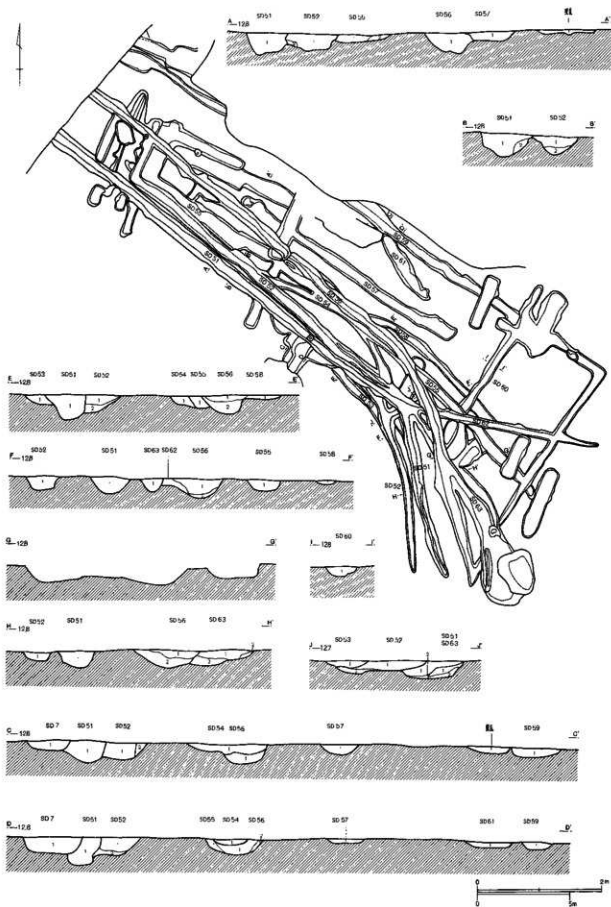
第46、47号溝

AY-5、AZ-5に位置する。小規模な溝の重複したもので、性格は不明である。近世後半の所産と考えられる。

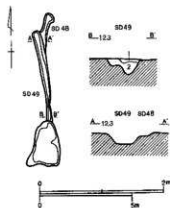
第48、49号溝

AG-22、AH-22に位置する。両者はほぼ同様のプランで重複する。第49号溝が新しい。小規模な溝で、延長は8m程、幅は50cm程である。南側の末端が土壌状に広がる。延長方向は、I区中央の谷に向かってお

第253图 溝(7)



第254図 溝(8)



り、水利に関する機能を有していたと考えられる。遺物は検出されなかった。近世前半の所産と考えられる。

第51～63号溝

AE-17-20, AF-18-20, AG-19, 20に位置する。北西-南東方向に延びる溝群で、調査区I区中央の谷に接続する意図を持ったものと考えられる。重複が著しく、同時期に使用された溝の条数は不明であるが、複数の溝がセットになって機能を果たしていたものと思われる。確認面ではAG-20の位置で途切れているが、谷の覆土中位のレベルでさらに延長していたものと考えられる。

延長方向は北西-南東方向で、東端に近い部分が南側に湾曲する。第59・60号溝は東端で南に向かって直角に曲がり、他の溝群の延長方向と接している。第62号溝はこれと方向を異にし、谷の北縁部の方向に延びている。

これらの溝は、深度が30cm前後で幅員は50-80cm程度である。規模はほぼ同一といえる。

おそらく、調査区中央の谷に水を落とす機能を有していたものであろう。図示できなかったが、溝底面の両端には小規模な凹凸があり、それが左右交互に配されているように観察される箇所が認められた。掘削の

SD 4 9

1 10782/1 黒褐色土 ローム殻(極小)・酸化鉄の沈着土(極小)少量。
2 10784/1 赤褐色土 黒色土層少量。酸化鉄の沈着土(極小)少量。

SD 5 1

1 10782/3 暗褐色土 酸化した褐色ローム殻・白色粒(極小)少量。炭化物微量。
2 10783/3 暗褐色土 褐色ロームブロック(大)中量。

SD 5 2

1 10782/3 暗褐色土 褐色ローム殻(小)・白色粒(極小)少量。炭化物微量。
2 10783/3 暗褐色土 褐色ローム殻(中)少量。

SD 5 3

1 10783/3 黒褐色土・10784/4褐色ローム殻。

SD 5 4

1 10782/3 黒褐色土 褐色ローム殻少量。白色粒(極小)少量。

SD 5 5

1 10782/2・22黒褐色土(中) 前後のブロック状に凝りじり層。ローム殻(中)少量。
2 10783/2 黒褐色土・10784/4褐色ローム殻。

SD 5 6

1 10782/3 黒褐色土 酸化した褐色ローム殻少量。シルト質の黒褐色土殻少量。
2 10783/3 黒褐色土 暗褐色土殻(極小)少量。炭化物微量。

SD 5 7

1 10782/4 暗褐色土 褐色ローム殻(極小)少量。

SD 5 8

1 10783/2 黒褐色土 褐色ローム殻(小)・白色粒(極小)少量。

SD 5 9

1 10783/2 黒褐色土 褐色ローム殻(小)・白色粒(極小)少量。

SD 6 0

1 10782/2 黒褐色土 褐色ローム殻(極小)少量。

SD 6 1

1 10783/2 黒褐色土 ローム殻(小)少量。

SD 6 3

1 10782/2 黒褐色土 褐色ローム殻(小)・白色粒(極小)少量。粘性あり。
2 10783/2 黒褐色土 褐色ローム殻(中)少量。

際の利用の用法に由来するものであろう。明確に伴う遺物は検出されなかった。近世前半から近代にかけて使用されたものと考えられる。

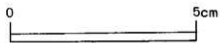
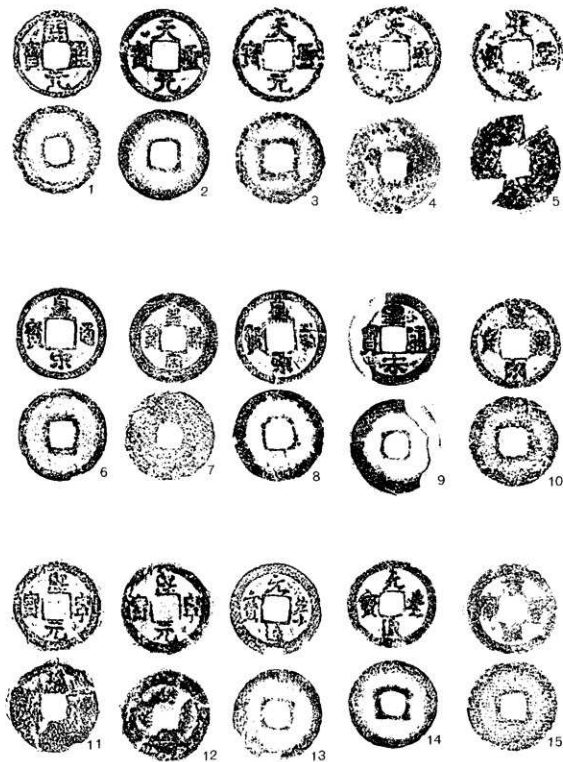
e. 溝出土遺物

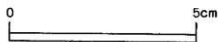
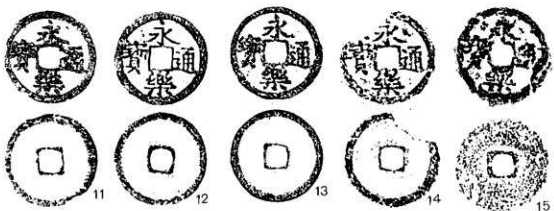
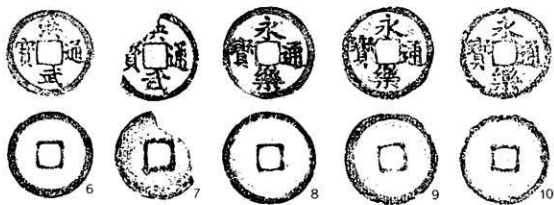
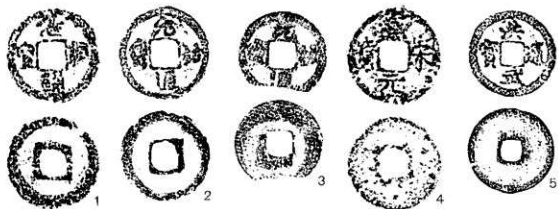
第256, 257図、第258図1-5は第37号溝から出土した古銭である。溝の覆土中位のはぼ一ヶ所からまとまって出土している。図示した36枚が含まれていた。種別の詳細は第11表を参照していただきたい。開通元寶2、天聖元寶4、皇宋通寶5、「照」寧元寶2、元豐通寶3、元祐通寶3、聖宋元寶1、洪武通寶3、永樂通寶9、□平通寶1、嘉○通寶1、不明2という内訳である。第256図1と7は付着した状態で出土したが、他は特に密着した状態ではなく、ごく狭い範囲に集中していたという状態である。

第258図6は第37号溝出土であるが、出土位置が不明のもの。背文が認められる。「落」であろう。

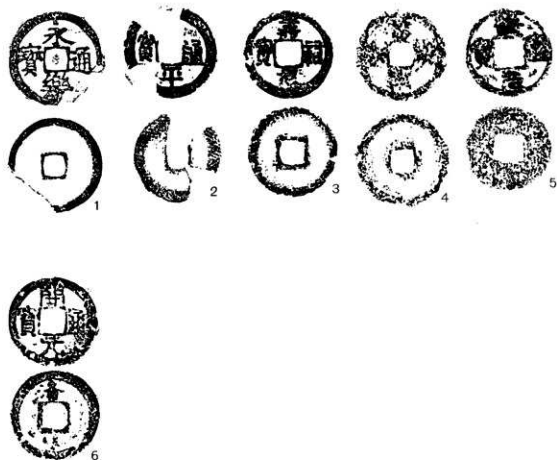
第259図1-3は第39号溝出土遺物である。1は口縁部が直線的に開く鉢で、破片下端に接合痕を有する。胎土は暗灰色で、表面は黒褐色を呈する。恐らく在地産の陶器である。2, 3は平瓦。中世末期から近世初期の所産と考えられる。

第256図 第37号溝出土古銭(1)



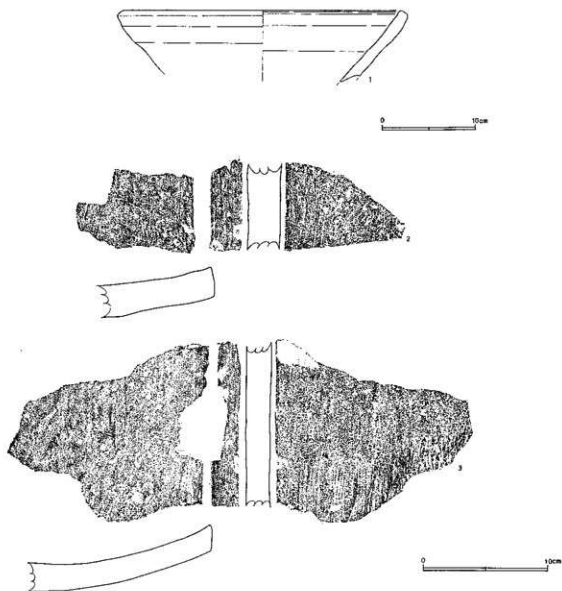


第258図 第37号溝出土古銭(3)



第11表 第37号溝出土古銭観察表

図版番号	出土遺構	種別	背文他	図版番号	出土遺構	種別	背文他	図版番号	出土遺構	種別	背文他
256-1	SD37	開通元寶		256-13	SD37	元豐通寶		257-10	SD37	永樂通寶	
256-2	SD37	天聖元寶		256-14	SD37	元豐通寶		257-11	SD37	永樂通寶	
256-3	SD37	天聖元寶		256-15	SD37	元豐通寶		257-12	SD37	永樂通寶	
256-4	SD37	天聖元寶		257-1	SD37	元(祐)通寶		257-13	SD37	永樂通寶	
256-5	SD37	天聖元寶		257-2	SD37	元祐通寶		257-14	SD37	永樂通寶	
256-6	SD37	皇宋通寶		257-3	SD37	元祐通寶		257-15	SD37	永樂通寶	
256-7	SD37	皇宋通寶		257-4	SD37	聖宗元寶		258-1	SD37	永樂通寶	
256-8	SD37	皇宋通寶		257-5	SD37	洪武通寶		258-2	SD37	□平通寶	
256-9	SD37	皇宋通寶		257-6	SD37	洪武通寶		258-3	SD37	蒜門通寶	
256-10	SD37	皇宋通寶		257-7	SD37	洪武通寶		258-4	SD37	不明	
256-11	SD37	熙寧元寶		257-8	SD37	永樂通寶		258-5	SD37	不明	
256-12	SD37	熙寧元寶		257-9	SD37	永樂通寶		258-6	SD37	開通元寶	「浴」



再掘削による重複があるため本来の断面形帯は失われている部分が多いが、底面付近に段を持つ箱葉研状のものであったと考えられる。

第1期の掘り込み覆土には浅間A軽石が全く含まれていない。第2期の掘り込みには覆土下層に同軽石が含まれ、中位には非常に多く含まれることから、第2期は近世後半に営まれたものと断定できる。第1期の掘り込みはそれ以前であることは確実だが、構築された時期については明らかにし得ない。含まれる遺物は板碑破片、中世から近世初期のものと思われる古銭があることから、近世初期以降の所産と考えられる。

本遺構の性格を限定することは困難である。第1期と第2期の掘り込みは一部を共有しながらも平面形態に違いがあり、一連の機能を有し続けていたか否かすら、明らかではない。塚という項目のもとに記述を行ったが、盛土の存在についてもやや不明な点が残る。また、溝で区画された内部に何らかの施設があった可能性も考えられる。

しかし、古銭、かわらけ、仏飯器等が多数検出されていること、また、日常雑器的な遺物があまり検出されなかったことから、第1期から第2期にかけて、何らかの信仰に関わる機能を有していた可能性が高い。

本遺構では第1期、第2期の溝とも人為的に大規模な埋め戻しが行われた痕跡は確認されていない。覆土にロームは含むが、堆積状況からは自然堆積に近い形で埋没が進行したと考えられる。しかも、数度にわたる再掘削が行われた痕跡があり、これは、溝が果たしていた機能が自然堆積によって失われかけた時に、その機能回復のために行われたものと考えられる。

第1期から第2期への移行に際しても埋没の単位の大きな土層はあるが、明確な埋め戻しの痕跡は捉えられない。

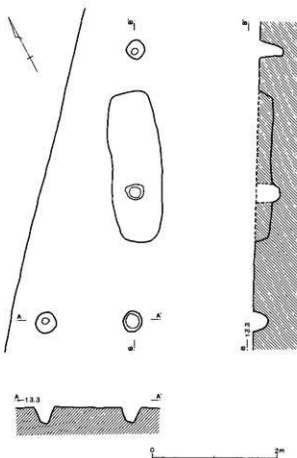
いずれにしても出土遺物以外では、このように数次にわたって区画の維持を目的とした掘削が行われたことが、機能推定の数少ない根拠となるであろう。

本遺構からかわかけ、陶磁器、板破片、古銭等が検出されている。第213図1～5はかわかけ。1、2はやや大形のもの。口唇端部が丸みを帯び、1は体部中央に屈曲を持つ。底部には回転糸切り痕が認められる。2は体部がわずかに内湾する。第1期の溝出土。3、4はやや小形で口唇端部は丸みを帯びる。3は体部中央付近に屈曲があり、口縁部に向かってわずかに外屈する。5は口唇部が欠損している。第2期の溝出土。本遺構出土のかわかけは、胎土に鉄分をほとんど含まない。

6は灯明受皿である。にぶい赤褐色の釉が内面には全面、外面は体部の上半までかかっている。器壁は非常に薄い。内面の体部中央付近に、断面三角形の受け口状突帯がある。この突帯には油溝と思われる溝がある。外面の体部やや上位に重ね焼きの痕跡が認められる。残存率は約4割程度である。第2期の溝から検出されている。

7は小波状の口縁を持つ皿である。ほぼ全面に釉がかかる。口唇部が外反し、先端が薄くなる。釉の色調は灰赤褐色で、底部内面に部分的に釉がかからない部位がある。第2期の溝から検出された。8は志野焼の皿である。灰色の釉がほぼ全面にかかる。体部は中央に屈曲を持ち内湾する。口唇部は、丸みを帯びて外反する。釉の表面は非常にきめが細かい。17世紀の所産

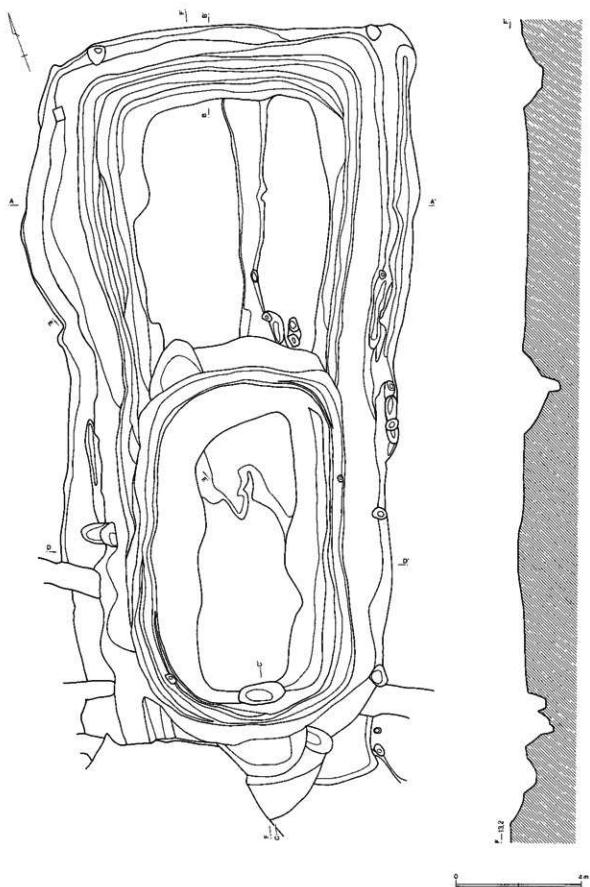
第260図 第1号直立柱建物跡



であろう。第1期の溝から出土している。9は高台付きの灰釉皿である。体部は内湾し、口縁部が弱く外反する。口唇端部は丸みを帯びている。高台は小さく、端部は内前ぎである。釉はややオリーブ色に近い灰色である。釉は内面には全面、外面には高台端部と底部以外、ほぼ全面にかけられている。17世紀の所産であろう。第2期溝のほぼ南端から検出されている。

10は小波状の口縁をもつ皿である。体部には波状と対応するように縦位の凹凸が付けられ、器体全体が波打つような形態を持つ。内面全体と、外面の体部下半まで釉がかけられている。外面の釉はオリーブ色を帯びた灰色、内面は地が淡黄色で、上半は灰オリーブ色である。器体の波状と対応するように上半の釉の下端は波打っている。第2期の溝から出土している。11は碗である。ほぼ全面に灰褐色の施釉がされている。口唇部は尖り気味で、体部下半ほど厚みが増す。第1期

第261图 第1号塚(1)



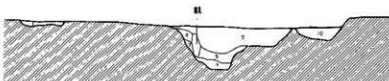
第262図 第1号塚(2)

A-132

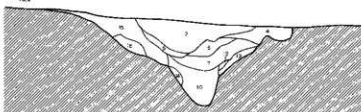


第1号塚 (A A')

- 1 10782/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (小) 多量。
- 2 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。バリス多量。
- 3 10782/4 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。
- 4 10782/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 散在。
- 5 10782/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (小) 多量。
- 6 10784/4 褐色粘質土 黒褐色土粒 (中) 少量。
- 7 10782/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 多量。
- 8 10782/4 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 非常に多量。
- 9 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 多量。
- 10 10782/3 黒褐色土 ハードローム (H) 非常に多量。

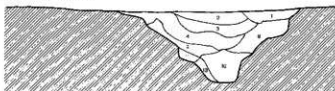


B-132



第1号塚 (B D')

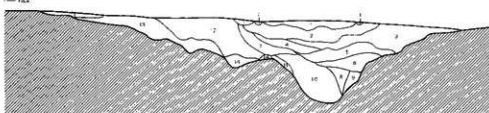
- 11 10784/4 褐色粘質土 黒褐色土粒 (小) 少量。バリス多量。
- 12 10782/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 多量。中粒形あり。
- 13 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 多量。しまりなし。
- 14 10782/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 少量。中粒形有り。
- 15 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 多量。
- 16 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 多量。



第1号塚 (E E')

- 1 10782/2 黒褐色土 ローム粒 (極小) 褐色土粒 (極小) 散在。粘粒あり。
- 2 10782/3 黒褐色土 ローム粒 (中) 少量。
- 3 10783/3 褐色粘土 ローム粒 (極小) 少量。
- 4 10783/3 褐色粘土 ローム粒 (中) 少量。粘粒有り。
- 5 10782/3 黒褐色土 ローム粒 (中) 多量。

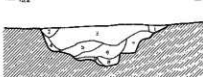
E-132



第1号塚 (F F')

- 6 10782/3 黒褐色土 ローム粒 (中) 非常に多量。
- 7 10783/3 褐色粘土 ローム粒 (小) 散在。
- 8 10782/4 褐色粘土 ローム粒 (中) 多量。
- 9 10782/3 褐色粘土 ローム粒 (中) 多量。
- 10 10783/4 褐色粘土 ローム粒 (極小) 散在。
- 11 10782/3 褐色粘土 褐色土粒 (小) 多量。
- 12 10783/3 褐色粘土 褐色ローム粒 (中) 多量。
- 13 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 多量。
- 14 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。
- 15 10782/3 黒褐色土 粘粒 (極小) 多量。
- 16 10782/3 黒褐色土 粘粒 (中) 多量。

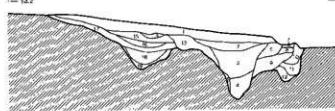
G-132



第1号塚 (G G')

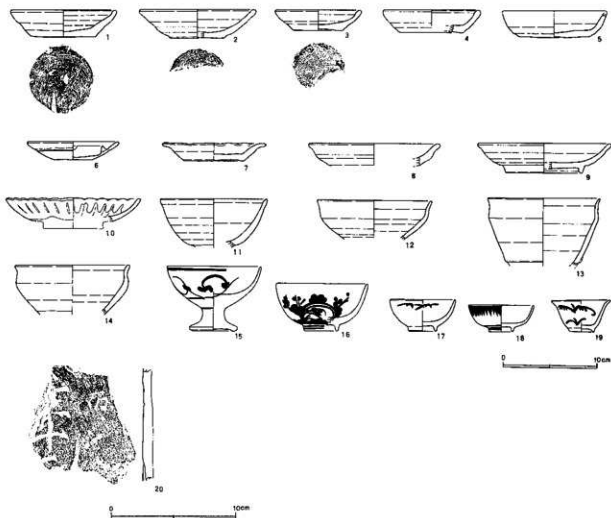
- 1 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。バリス多量。
- 2 10782/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (小) 多量。
- 3 10782/2 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。
- 4 10782/2 黒褐色土 ローム粒 (中) 少量。
- 5 10784/4 褐色粘質土 黒褐色土粒 (中) 少量。
- 6 10782/3 黒褐色土 ローム粒 (極小) 少量。
- 7 10782/3 黒褐色土 ローム粒 (中) 粘粒有り。
- 8 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (極小) 多量。
- 9 10782/3 黒褐色土 褐色ローム粒 (中) 少量。

G-132



- 8 10783/4 褐色粘土 ローム粒 (中)。
- 9 10782/4 褐色粘土 ローム粒 (中)。
- 10 10783/4 褐色粘土 ハードローム。ローム粒多量。バリスなし。
- 11 10782/4 褐色粘土 ローム粒 (小) 散在。バリスなし。
- 12 10783/4 褐色粘土 ハードローム。ローム粒多量。バリスなし。
- 13 10782/4 褐色粘土 ローム粒 (小) 多量。バリス多量。
- 14 10782/4 褐色粘土 ローム粒 (中) 多量。バリス多量。
- 15 10782/4 褐色粘土 ローム粒少量。ロームブロック (大) 中層。バリスなし。
- 16 10783/4 褐色粘土 ロームブロック (大)。ローム粒多量。バリスなし。
- 17 10782/4 褐色粘土 ローム粒少量。ロームブロック (大) 中層。バリスなし。
- 18 10782/4 褐色粘土 ロームブロック (大)。ローム粒アサリ。バリスなし。
- 19 10782/4 褐色粘土 ローム粒 (中) 少量。ロームはブロックパンに粘着したもの。





の溝から出土している。

12～14は天目形の碗。13は器高が高いが、12、13は低い。12は器壁は薄く、口唇部端面は尖り気味となる。内面は全面、外面も体部下半まで施釉されている。釉は鈍い赤褐色を帯びる。第2期の溝南端より検出された。13も12同様、内面全体、外面は体部下半まで施釉される。釉は黒褐色を帯びる。頸部の屈曲は弱い。第2期の溝出土。14も施釉部位は12、13と同様である。胎土がやや黒味が強い。第2期の溝から検出されている。

15～19は磁器で、いずれも染め付けである。15は台を持つ小形の碗で、台の端部は削り出しによって作られた低い高台を有する。台部底面と端部には釉がかけられていない。仏飯器と思われる。16は小形の碗。黒、

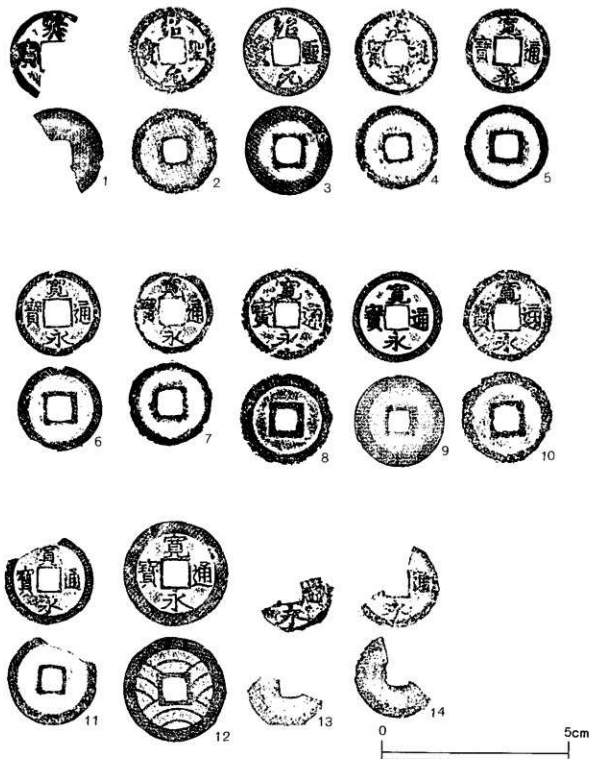
青2色の釉で梅樹、梅花が描き分けられている。高台を持ち、高台内面にも青色の釉で輪が描かれている。17、18は小形の碗で、いずれも高台を持つ。17は笹の葉状のモチーフが紺色の釉で描かれる。第2期の溝南端より出土。18は口縁部に逆三角形のモチーフが連続して描かれる。15～18は第2期の溝南端から検出された。

19は口縁部が外反する猪口状の器。小さな高台を持ち、外面には紺色の釉で草本と思われるモチーフが描かれている。第2期の溝出土。

20は板碑破片。「丙」の字が確認できる。

第264図は本遺構出土の古銭である。古銭は特にまとまりを見せず、遺構全体に散漫に分布している。天型元寶1、聖型元寶2、洪武通寶1、寛永通寶10とい

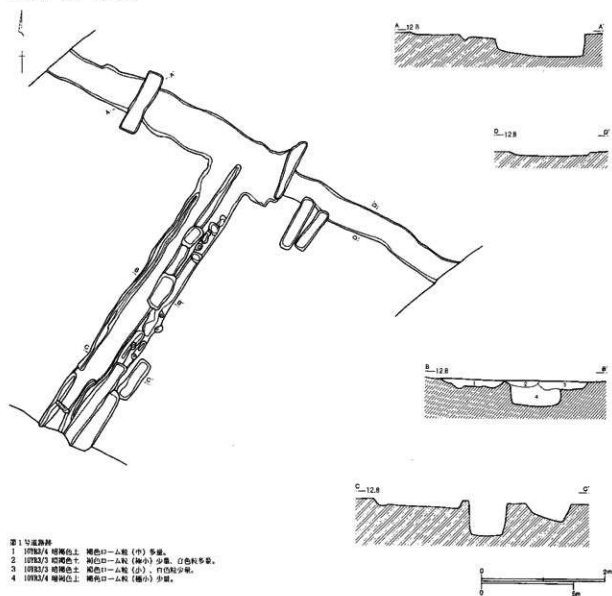
第264図 第1号塚出土遺物(2)



第12表 第1号塚出土古銭観察表

図版番号	出土遺構	種別	背文他	図版番号	出土遺構	種別	背文他	図版番号	出土遺構	種別	背文他
264-1	第1号塚	天聖元寶		264-6	第1号塚	寛永通寶		264-11	第1号塚	寛永通寶	
264-2	第1号塚	紹聖元寶		264-7	第1号塚	寛永通寶		264-12	第1号塚	寛永通寶	吉海波文
264-3	第1号塚	紹聖元寶		264-8	第1号塚	寛永通寶		264-13	第1号塚	寛永通寶	
264-4	第1号塚	洪武通寶		264-9	第1号塚	寛永通寶		264-14	第1号塚	寛永通寶	
264-5	第1号塚	寛永通寶		264-10	第1号塚	寛永通寶					

第265図 第1号道路跡



う内訳である。

h. 道路跡

第1号道路跡

本遺跡の北端に位置する。Z-24、AA-24-26、AB-26グリッドに位置する。周囲よりも約10cm程下がった位置に硬化面が連続する。底面は非常に小規模な凹凸が不規則に認められる。通常の溝とは覆土の特

徴、底面の形状が異なるため、道路跡と判断した。北西～南東にかけて1条、それに接続するものが1条確認された。第14号溝に接続し、その南西側には延びていない。

遺物がほとんど検出されなかったため、所属時期についてはつまびらかにし得ないが、覆土の特徴、前記の区割との関連から、近世以降まで使用されていたものと考えられる。構築の時期は不明である。

第IV章 谷畑遺跡の調査

1. 遺跡の概観

本遺跡は従来原遺跡と一括してとらえられていたものであるが、今回の調査の結果、遺跡のまとまりとして両者は異なる遺跡と認識した方が適切であるということから、谷畑遺跡として原遺跡から分離したものである。

本遺跡は、原遺跡が立地する支台の先端に位置し、綾瀬川によって開折された低地を臨む位置にある。調査区の南東側には、この低地から南入する支谷が伸び、谷の一部が北東端の調査区内で検出されている。今回の調査は支台の延長方向にはほぼ沿う形で調査区が設定されているため、支台縁辺の状況のみが明らかになっている。支台の中心部はやや削平を受けているようで、調査区の北東側では支台中心部である調査区外に向かって、やや平坦になる。標高は支台の中心部で約12m前後で、谷は10.5m前後である。

基本土層の傾向は原遺跡とはほぼ同様で、谷の部分では関東ローム層の上位に灰黄褐色系のシルト質の土壌が堆積し、その上位に黒褐色土、暗褐色土が堆積する。台地部では、関東ローム層上に暗褐色の漸移層があり、その上位に旧表土、表土が堆積する。谷の堆積土中には付属で詳述するように、テフラの堆積が観察された。浅間A軽石、富士箱根スコリア、榛名二ツ岳火山灰、浅間C軽石が検出されている。検出された位置から、支谷の埋没はほぼ一定の速度で進行し、中世にはかなり埋没が進んでおり、近世後半にはほぼ現地地形に近い形になっていたと判断される。

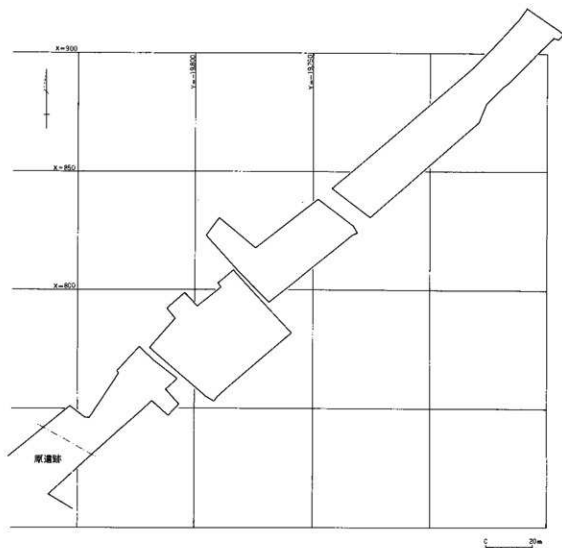
今回の調査では、縄文時代の住居跡2軒、縄文時代の土城19基、炉穴1基、中近世以降のものと考えられる土城27基、井戸跡4基、溝11条が検出された。縄文時代の住居跡は1軒が前期関山式期のもので、他の1軒は所属時期不明である。グリッドには縄文土器の散布が認められた。

全体に遺構の分布は薄く、遺物も前期の住居跡以外からはあまり検出されなかった。支台中央部から基部にあたる原遺跡は縄文時代中期の集落であり、多量の中期の土器が検出されたが、本遺跡は隣接しているにも関わらず、中期の土器、特に原遺跡の中心的な時期である中期後葉の時期のものはほとんど検出されていない。谷畑遺跡からは原遺跡ではあまり検出されなかった後期中葉から後葉にかけての土器が少量検出されている。ただし、当該時期のものと断定できる遺構は検出されなかった。

縄文時代前期の住居跡は調査区の北東端に位置する。本遺跡の南東側約300mの、やはり支台の先端に当たる位置に大針貝塚が所在し、本遺跡の前期住居跡と時間的に近接する住居跡が検出されている。両遺跡の関係がどのようなものであったのか、注目される。

他の縄文時代の遺構も全体に調査区の北東に集中しており、南西側にはあまり分布していない。中近世以降の遺構は調査区全体に散漫に分布しており、分布に傾向は見いだせない。支台の縁辺部にあたるため、集約的な土地の利用は行われなかったものと思われる。

第266図 谷畑遺跡全体図

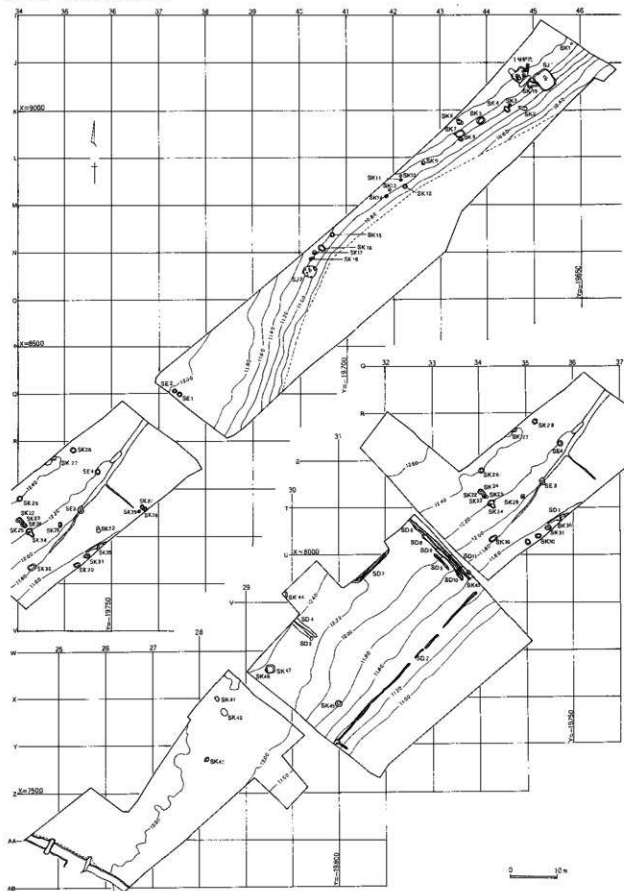


谷畑遺跡基本土層



- 1 1973/7 暗褐色土 表土、焼土粒・炭化物中量、f層との境界は不明。
 II 沖積土
 IIa 1971/7/1 黒色土 日土層底縁のブロック、褐色部の層中厚、均質で粘質性、中にAa-bの平直なラッパ状に結核、日土層との境界より約1mの上段にスコリアが厚さ3cm程度で平直なラッパ状に結核。
 IIb 1973/4-1973/6の泥、凝厚約1-2cm、均々平直なラッパ状に結核、粘質のみに均質、粘下アツク。
 IIc 1972/7-1973/2の泥質土、礫化泥、IIc-1 (1972/1) とIIc-2 (1972/2) に区別。
 IIc 1973/7 黄褐色土 粘質土。
 IIc O=△層
 IIc 1972/7-1973/2の暗褐色土-に白い黄褐色土 粘土層底縁のO=△層中量。
 IIc 1973/7 暗褐色土

第267図 谷畑遺跡遺構配置図



2. 遺構と遺物

(1) 縄文時代

a. 住居跡

第1号住居跡

I-45に位置する。本遺跡が所在する支台の東縁にあり、入江状に谷が入り込む斜面上に構築されている。平面形態は隅丸の長方形で、長径は4.4m、短径は3.6mを測る。主軸方向はN-40°-Wである。壁の残りは、良好な部分で約60cm程である。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、特に東側の壁で傾斜が目立っている。

本住居跡は谷に位置していたため、プランの確認が困難であり、特に斜面下方の部分で、一部不明な点があった。そのためサブトレンチを設定したため、住居跡の一部がそれによって壊されている。

柱穴は5基検出された。配置は非常に不規則で、主柱穴の構成は不明である。住居跡の中央付近に4基掘削されているが、深度はいずれも浅い。周溝は認められなかった。

炉跡は、中央やや北寄りに構築されている。深鉢の破片を用いた土器囲い、長楕円形の掘り方を有する。炉体は掘り方の北端に位置し、大形の破片が底面に刺さり、立つような状態であった。その周囲にやや小さめの破片が立てかけられたような状態で検出された。炉体は2個体分の土器から構成されている。第273図2、5に図示した深鉢がそれぞれである。掘り方の南端にはピット状の落ち込みがあるが、覆土の観察から、これは炉が埋没してから掘り込まれたものと考えられる。

炉の周囲の床面には硬化がみられる。床面は全体に水平を保っているが、やや凹凸が見られる。

住居跡の南半部中央に溝状の落ち込みが観察された。土層断面での所見によれば、この落ち込みは、覆土の下位部分からの掘削によって形成されたもので、本住居跡が廃絶後のものである。その性格等については明らかではない。

本住居跡からは、実測可能な土器が7個体と、その他比較的多量の土器が出土した(第273-275図)。遺物

は住居跡の奥壁近くから多く出土し、そのほとんどが覆土中位から検出され、床面出土の遺物はほとんどない。

石器類はほとんど出土しなかったが、住居跡内から小円礫が多数検出された。これらの円礫は、覆土中位に散在するように含まれており、その分布に規則性はみられなかった。住居跡周辺にこれらの円礫の供給源となるような微地形は考えられず、また、本遺跡の、他の遺構の覆土にこれら小円礫が含まれる例がないことから、何らかの人為的な営為によって持ち込まれたものと考えられる。

第2号住居跡

N-40に位置する。本遺跡の位置する支台の東縁にあり、谷に向かう斜面上に営まれた住居跡である。

長径2.8m、短径2.6mと、非常に小規模なもので、一般的な住居跡の規格から外れる。しかし、炉跡、柱穴を備えており、居住の痕跡があることから、住居跡と認定した。

平面形態は不整な円形で、壁は約20cmほど残っている。炉跡は中央に位置する。長径65cm、短径45cm程の楕円形の掘り方で、15cm程の深度を有する。炉体はなく、底面、壁面が部分的に焼土化している。炉跡の西端にはピットがある。

柱穴はいずれも深度が浅く、主柱の構成は明らかではない。深度はP1が20cm、P2が14cm、P3が12cm、P5が17cmである。

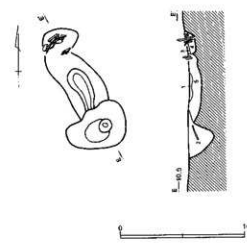
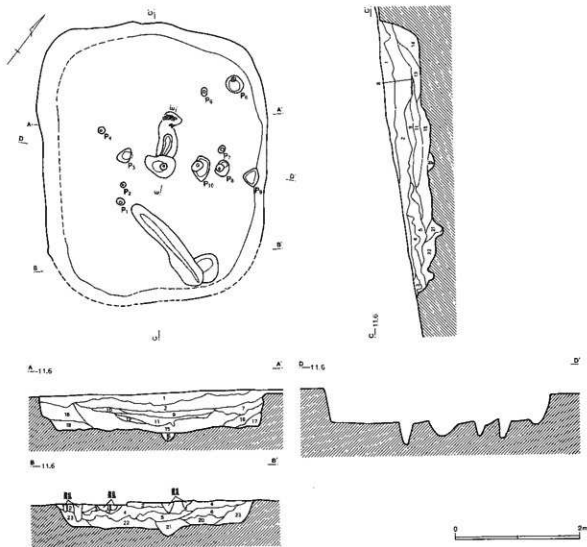
床面の硬化はあまり認められない。床面は東側に向かってわずかに傾斜している。

本住居跡からは、図示の不可能な縄文土器の小破片がわずかに出土したに過ぎない。よって本住居跡の所属時期は不明とせざるをえない。

b. 土壌

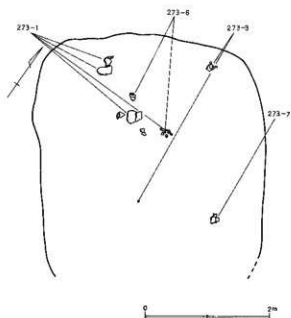
本遺跡からは19基の縄文時代の土壌が検出された。いずれも小規模なもので、図示可能な遺物を含むものはない。時期については明確なものはないが、覆土の

第268図 第1号住居跡



- S J 1
- 1 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 中量。
 - 2 10YR2/3 暗褐色土 10YR3/4暗褐色ローム粒 (中)・黄褐色ローム粒 (極小) 中量。
 - 3 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 中量。
 - 4 10YR2/3 暗褐色土 10YR2/2 黒褐色土・黄褐色ローム粒 (小) 中量。
 - 5 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 多量。炭化物 (極小) 少量。
 - 6 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土粒 (中) 少量。ローム粒粒と含まない。
 - 7 10YR2/2 黒褐色土 10YR2/3 暗褐色土・黄褐色ローム粒中量。
 - 8 10YR2/6 弱黄褐色ローム土 10YR2/2 暗褐色土が厚さ 5mm以下で、フミナ状に互層して埋着する層。
 - 9 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 中量。
 - 10 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 中量。
 - 11 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4 褐色土の互層。各薄層はかなり不連続に埋着。
 - 12 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 多量。炭化物 (極小) 微量。
 - 13 10YR2/2 に多い黄褐色土
 - 14 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 多量。
 - 15 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (小) 多量。
 - 16 10YR3/3 暗褐色土 10YR2/2 に多い黄褐色土 10YR2/4 褐色土 黄褐色ローム粒少量。
 - 17 10YR2/2 に多い黄褐色土
 - 18 10YR2/3 暗褐色土 10YR2/2 に多い黄褐色土 10YR2/4 褐色土 黄褐色ローム粒少量。
 - 19 10YR2/3 に多い黄褐色土 しまりなくボソボソとした土層。
 - 20 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 少量。
 - 21 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 少量。
 - 22 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (極小) 少量。
 - 23 10YR2/3 に多い黄褐色土 10YR2/3 暗褐色土 各ブロックの境界は非常に無秩序的。黄褐色ローム粒 (極小) 中量。
- S J 1 4F層
- 1 7.5YR2/3 緑褐色土 織土粒 (中) 多量。
 - 2 7.5YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (極小) 多量。織土粒少量。
 - 3 7.5YR2/2 黒褐色土 ローム粒 (小) 多量。酸化した織土粒少量。
 - 4 10YR2/4 に多い黄褐色土 織土粒少量。
 - 5 5YR1/6 明赤褐色土 かなり塊状になった土。 (伊集) 所々に暗褐色土粒中量。

第269図 第1号住居跡遺物分布図



特徴から、縄文時代に帰属するものと判断した。形態に規格性のあるものは少なく、遺物もほとんど伴わないため、性格についても不明とせざるを得ない。規模等は第13表に譲り、特徴的なもののみ記述する。

第1号土壌

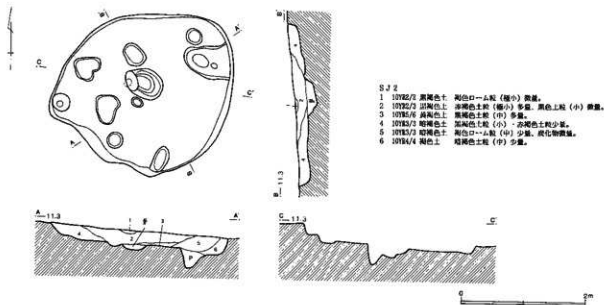
平面形態が円形で、北側に突出部を有する。深度は浅い。暗褐色系の覆土を持つ。底面の一部が焼土化しており、その周囲にも土壌の硬化がみられた。ごく微少な土器破片が少量検出されている。縄文時代前期以前の所産と考えられる。

第2号土壌

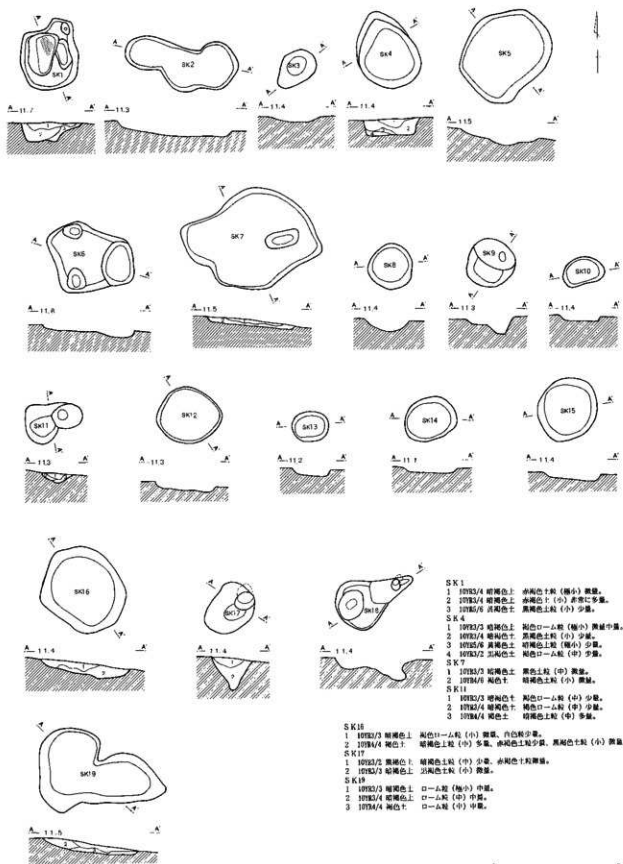
やや不整な長楕円形の平面形態を持つ。複数の土壌が重複している可能性がある。深度は浅く、遺物は検出されていない。

第4号土壌

第270図 第2号住居跡



第271図 縄文時代土壇



第13表 縄文時代土壌観察表

土壌名	所在グリッド	長径(m)	短径(m)	深度(m)	主軸方向
SK 1	I-45	1.18	0.98	0.32	N-23°-E
SK 2	J-44	1.82	0.68	0.22	N-80°-W
SK 3	J-44	0.72	0.48	0.08	N-51°-E
SK 4	J-44	1.26	0.94	0.26	N-18°-W
SK 5	K-43	1.51	1.26	0.18	N-44°-E
SK 6	K-43	0.96	1.03	0.06	N-68°-W
SK 7	K-43	2.26	1.61	0.09	N-84°-W
SK 8	K-43	0.75	0.69	0.15	N-0
SK 9	L-42	0.87	0.71	0.13	N-35°-E
SK 10	L-42	0.68	0.42	0.08	N-81°-E
SK 11	L-42	0.92	0.54	0.16	N-68°-E
SK 12	L-42	1.08	0.92	0.11	N-81°-E
SK 13	L-41	0.58	0.49	0.09	N-86°-E
SK 14	L-41	0.84	0.70	0.08	N-88°-W
SK 15	M-40	1.04	0.93	0.01	N-66°-W
SK 16	M-40	1.44	1.19	0.21	N-36°-W
SK 17	M-40・N-40	0.88	0.64	0.51	N-51°-E
SK 18	N-40	1.29	0.82	0.19	N-59°-E
SK 19	J-45	2.06	0.79	0.14	N-79°-W

ほぼ円形の土壌で20cm程の深度を有する。壁の立ち上がりはわずかに開き気味となる。暗褐色系の覆土を持つ。遺物は検出されなかった。

第7号土壌

不整形な平面形態を持つ。深度は浅い。複数の土壌が重複した可能性があるが、土層の堆積からは、その痕跡は見いだせなかった。底面は比較的平坦で、東半部に小さな落ち込みがある。遺物は検出されなかった。

第8号土壌

径が60cm程度の小規模なものである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は丸みを帯びる。遺物を含んでいない。

第12号土壌

ほぼ円形の平面形態を有する。深度は極めて浅く、10cm前後である。壁の立ち上がりは垂直に近いが、本来の掘り込み面はさらに上位にあると考えられ、その形態については不明とせざるを得ない。遺物は含まない。

第15号土壌

ほぼ円形の平面形態を有する。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はほぼ平坦である。深度は浅く、遺物は検出されなかった。

第16号土壌

楕円形の平面形態を有し、深度は20cm程である。壁の立ち上がりは緩やかである。暗褐色系の覆土を持つ。

第18号土壌

ビット状の掘り込みを持つ。この掘り込み部分はややオーバーハンクしており、埋没後の攪乱の可能性が高い。

第19号土壌

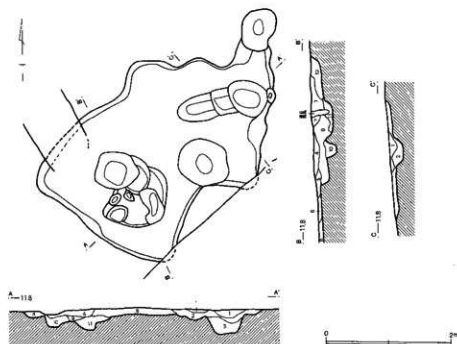
不整形の、複数の土壌が重複しているかのような平面形態を有するが、土層の堆積では重複は確認できなかった。壁の立ち上がりは緩やかである。

c. 炉穴

第1号炉穴

J-44に位置する。周囲から約10cm程下がった不整形な落ち込みの中に、ビット状の掘り込みが複数重複している。全体の長軸は約4m、短軸は2.4mである。ビット状の掘り込みは南西部に1ヶ所、中央部に1ヶ所、北東部に1ヶ所、北端部に1ヶ所認められる。このうち、南西部のものが重複が著しい。ビット状の掘り込みの深度はいずれも浅く、不整形の落ち込み底面から10~30cm程の深度しか持たない。南西部のビット

第272図 第1号炉穴



1号炉穴

- 1 10YR2/3 暗褐色土 粘土質の比重多量。
- 2 10YR2/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒 (中) 少量。
- 3 10YR2/4 褐色土 黄褐色ローム粒 (中) 中量。
- 4 10YR2/3 暗褐色土 粘土質 (極小) 中量。
- 5 10YR2/3 暗褐色土 粘土質 (極小) 黄褐色ローム粒 (中) 中量。
- 6 10YR2/4 暗褐色土 粘土質の比重多量。
- 7 10YR2/3 暗褐色土 粘土質 (極小) 少量、黄褐色ローム粒 (中) 中量。
- 8 10YR2/4 暗褐色土・10YR2/4褐色土 粘土質 (小) 少量。
- 9 10YR2/4褐色土・10YR2/4暗褐色土
- 10 10YR2/4褐色土・10YR2/4暗褐色土 褐色土の割合が高い。
- 11 10YR2/4褐色土・10YR2/4暗褐色土 褐色土の割合が多量に高い。

状掘り込みの底面は受熱によってわずかに硬化が認められるが、焼上化はしていない。

他のピット状の掘り込みも焼土は観察されず、不連続、乃至は漸移的に底面、壁面の硬化が認められる程度であった。全体に継続的に高温にさらされていないと思われる。

本遺構からは混入と思われる前期土器の小片が覆土上位に含まれていたのみで、本遺構に明確に伴う遺物は検出されなかった。

d. 住居跡出土土器

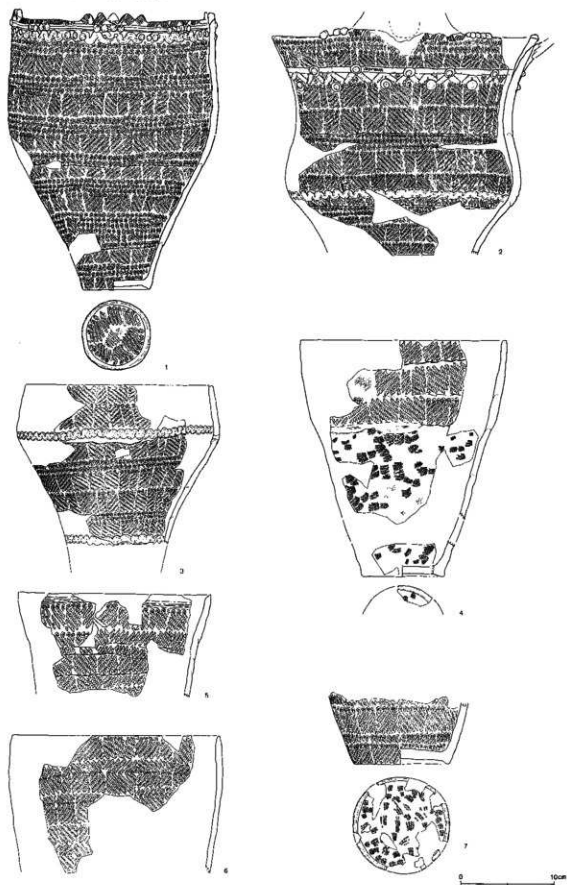
第1号住居跡出土土器 (第273図～第275図)

本住居跡からは前期関山式に属する土器が比較的多量出土している。炉体土器以外はいずれも覆土からの出土である。第273図1は胴部が膨らみ、口縁部が直立する深鉢。体部の下半はわずかに外反する。口唇端部

は明確に内削ぎとなる。平坦口縁で、口唇部に4単位の突起を持つ。各突起は山形の粘土粒を5個連ねたもので、表面にヘラ状工具によって鋸歯文が描かれている。突起部以外の口唇部外面にも同様の施文が行われる。口縁部には半截竹管によって、平行沈線と波状文が施文された後、4個の粘土粒が上下交互に配される。体部には0段多条のL R、R L縄文による羽状縄文とループ文が上下交互に施文される。胴部下半ではループ文の段の幅が広くとられている。底部はわずかに高台状になり、外面には胴部と同じ縄文が施文される。成形は確認されただけで3段に分けて行われ、下方から成形→縄文施文→粘土帯積み上げ→縄文施文という手順で、製作が進行している。内面は幅の広い工具によるミガキ調整が丹念に行われている。

2は炉体土器。1と同様の手順で成形、施文が行われている。確認されただけで3段に分けて行われてい

第273図 第1号住居跡出土遺物(1)



る。口唇部の一部が欠損しているが、注口部を持つ深鉢と考えられる。頸部は強くすぼまり、胴部下半が張り出す。底部付近は欠損しているが、外反して底部に至るものと考えられる。平緑で、注口部は山形を呈していたものと思われる。注口部の両端には粘土粒が貼付されていた。波状部分にはヘラ状工具による鋸歯状の刻み目に加えられる。体部のほぼ全面に地文が施文され、文様帯は頸部、胴部下半に設定される。頸部の文様帯には半截竹管による平行沈線と鋸歯文が描かれ、鋸歯文の頂部と底部に各1単位おきに粘土粒が貼付される。また、半截竹管による平行沈線内部にヘラ状工具による連続刻み目がかく部分的に加えられている(図正面やや左側)。胴部下半の文様帯には半截竹管によるコンパス文に加えられる。地文は0段多条(8条?)のLR、RL縄文による羽状縄文で、ループ文を伴う。成形時の段は、胴部下半の張り出しの上下に認められる。

3は覆土広範囲に分布していたもの。口縁部が内湾する深鉢で、胴部下半が欠損している。口唇部端面は内削ぎで、平緑である。頸部の屈曲部に半截竹管によるコンパス文を持ち、その上下には0段多条(8条?)の羽状縄文が施文される。コンパス文は胴部下半にも施文される(破片下端)。2条のコンパス文に挟まれた部分の地文はループ文を伴う。頸部の最大頸部まで成形し、施文を行い、その後口縁部を成形している。補修孔を持つ。

4は平緑の深鉢。頸部に屈曲を持ち、口縁部はわずかに内湾する。底部はわずかに上げ底となる。成形は大きく2段階に分けられる。胴部中位の屈曲部まで成形する。上位の地文施文後、この接合部を強く建てつけている。胴部上半は0段多条(6条?)の羽状縄文が施文される。ループ文は一部の単位に用いられるのみである。胴部下半は貝殻背圧痕文で、下位から上位に向かって施文されている。底部外面にも貝殻背圧痕文が施文される。内面はナデ調整のみである。

5は2とともに炉体に用いられていたもの。平緑の深鉢で、粘土帯の積み上げ痕が3段認められる。下位

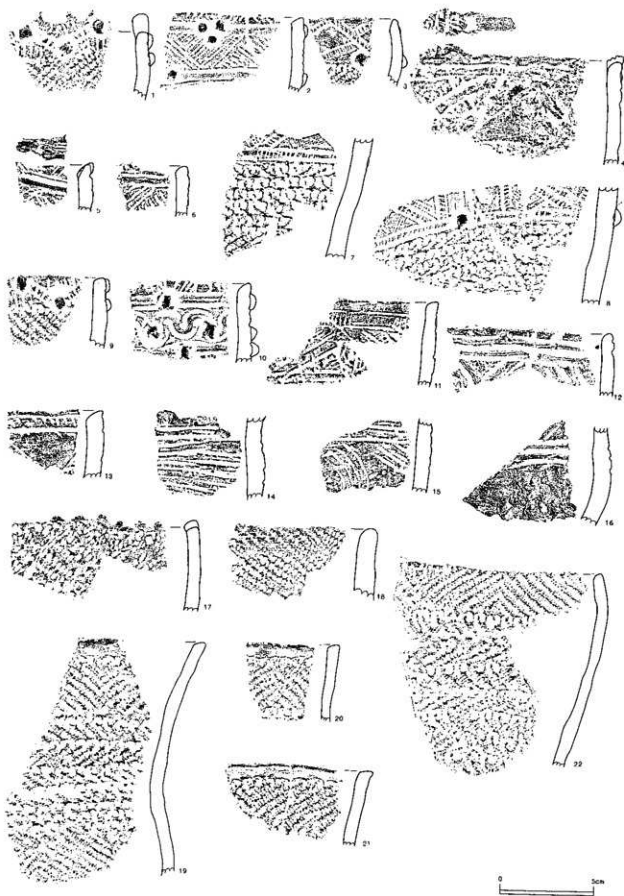
の2段では、施文と積み上げは交互に行われている。最上位の段では施文は一括して行われている。頸部に屈曲を持ち、口縁部が外反する。口唇部端面は強い内削ぎで、先端が尖り気味となる。口唇部直下はナデによる無文帯が作り出される。胴部には羽状縄文が横位に施文され、一部にループ文を伴う。

6は砲弾型の平緑深鉢。口唇部端面は内削ぎとなる。ほぼ全面に地文が施文されている。地文はRL、LRの結束第一種による羽状縄文である。羽状の条によって菱形の構成が描き出されている。内面調整はヘラ状工具によるミガキである。

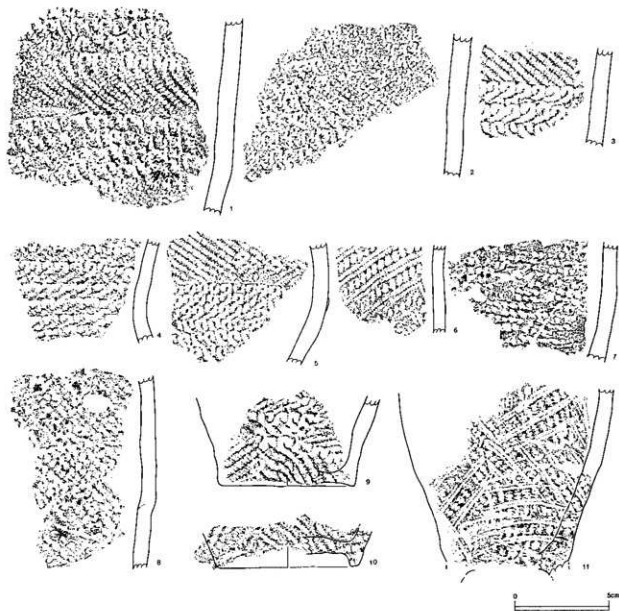
7は深鉢の底部。上げ底状を呈する。胴部にはRL、LR単節の羽状縄文が施文され、多段のループ文が伴う。底部外面には貝殻背圧痕文が施文される。底部外面中央にやや大きめの貝殻で、ランダムに施文し、その後周囲に小形の貝殻で、丁寧に、図の上位に腹縁を向ける形で施文を重ねている。

第274、275図は第1号住居跡出土土器の拓影図である。第274図1-16は口縁部文様帯を有するもの。2は口唇部に鋸歯状の刻み目を持ち、口縁部には沈線による鋸歯文が施文される。3-9は刻み目帯による文様が描かれるもので、5-8は同一個体。平緑の深鉢で、口縁部に鋸歯文を持ち、刻み目帯による文様が頸部に施文される。体部には多段のループ文が展開する。口唇部内面にも刻み目に加えられる。9は刻み目帯外部にも連続刻み目が施されるもの。粘土粒貼付を伴う。10は半截竹管によるコンパス文が施文され、粘土粒貼付を伴うもの。口唇部外面にはやや崩れた鋸歯状の刻み目に加えられる。11は半截竹管により、粗雑な直線文が施文される。刻み目を伴うが、施文は規則的ではない。12にはやや大柄な沈線で、鋸歯文と弧文が施文される。13は口唇部直下に刻み目帯が施文される深鉢。口唇部端面は内削ぎとなる。17は口唇部に粘土粒貼付による加飾が行われた深鉢。19は平緑の深鉢で、0段多条(8条)の羽状縄文が施文される。ループ文を伴う。20-22は同一個体で、頸部がすぼまり、口縁部が外反する深鉢。平緑で、口唇部はやや内削ぎとなる。

第274図 第1号住居跡出土遺物(2)



第275図 第1号住居跡出土遺物(3)

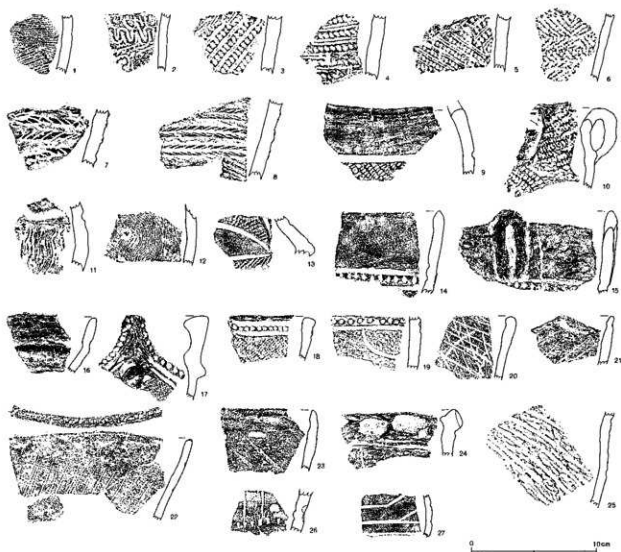


0段多条(8条?)の羽状縄文が施文される。多段のループ文を伴う。

第275図は深鉢の胴部、及び底部破片である。1～5は多段のループ文を伴う。6は直前段異条の縄で、0段多条のLR、RLをLに撚りあわせたものである。8は原体不明。前々段合撚りの複節縄文と思われるが断言できない。9～11は底部で、いずれも小さな台が付く。11は6と同種の原体が用いられる。

e. グリッド出土遺物(第276図)

第276図1は外面にやや密な条痕が横位に施され、内面にも条痕を持つ。早期後半条痕文系土器。2～6は関山式で、2は半截竹管によるコンパス文が横位に施文される。3、4は同一個体。原体は直前段合わせ撚りの異条斜縄文で、LRとRLをLに撚り合わせたもの。5は直前段合わせ撚りの異条斜縄文を羽状に用いている。6はループ文を伴う羽状縄文である。7、8は浮文が貼付されたもので、諸磯C式。9、10は中期末に属する。9は口縁部に無文帯を持つ深鉢で、波状口縁のもの。10は橋状把手を持つもので、把手上に



も縄文が施文される。11, 12は同一個体で、櫛歯状工具による条線が波状構成に施文される。13~16は後期中葉に属するもの。13はいわゆる箕盤玉形の鉢形土器で、加曾利B 2またはB 3式のものであろう。14, 15は平線の深鉢で、突起を持つタイプである。内面に2条の沈線が巡る。加曾利B 3式に属する。16は無文の鉢形土器。加曾利B 3式と思われる。17, 18は口唇部に列点文を持つ深鉢。17は波状口縁で、突起下に瘤状の貼付がなされる。18は平線の深鉢で、口唇部に突起を持つようである。19は深鉢の胴部で、弧線が磨消

縄文を伴って施文される。17~19は加曾利B 3式であろう。20~22は格子目状、または綾杉状の条線を持つ深鉢。22は口唇部端面に刻み目が施される。23は口縁部内面に凹線を持つ。24, 25は加曾利B 3式の粗製深鉢。24は口唇部に指頭瓦痕を持ち、25は胴部に縄文施文後条線が施される。26は深鉢の頸部。加曾利B 3式と思われる。27は黒色に研磨された無文地上に沈線が施文されるもので、朱が塗布されている。晩期中葉のものと考えられる。

(2) その他の時代

a. 土壌

本遺跡の、縄文時代以外に属する土壌は、共存遺物が出土したものはなく、遺物等から時期が判明したものはない。しかし、覆土の特徴から、中世以降のものと考えられ、そのほとんどが近世に属すると考えられる。ここでは原遺跡の中・近世土壌の分類に準じて分類し、記述する。規模等の詳細は第14表を参照していただきたい。

これら・中近世の土壌はN列以北とS・T列に集中する傾向を持つが、分布は全体に散漫である。機能について明確なものはなく、長期にわたって利用されたと考えられるものもない。集約的な土地利用がなされなかった区域と考えられる。

第I群

平面形態が円形で、比較的小規模なもの。深度も浅いものが多い。第21、24、26、28、29、33、38、39、40、41、43号土壌が含まれる。第21、26、28号土壌は、10cm前後の深度しかもないが、平面形態は整っている。壁の立ち上がりもやや開き気味だがしっかりとしており、人為的な土壌であると判断される。第26号土壌は黒褐色の覆土を有し、近世初期以前のものと考えられる。

第II群

平面形態が円形で、規模の大きいもの。第42、45号土壌が含まれる。第42号土壌は深度は15cm程と浅いが、径は1.5m程あり、壁の立ち上がりも明瞭である。底面はほぼ平坦で暗褐色の覆土を持つ。近世後半以降のものであろう。

第III群

平面形態が円形で、規模が大きく、深度の大きいもの。本遺跡からは検出されなかった。

第IV群

平面形態が長方形、矩形のもの。第22、36、46、47号土壌が含まれる。規模には大小がある。第22号土壌は長径が1.5m程で深度も浅いが、第36号土壌は非常に深く、また第47号土壌は一辺が2m程である。第36

号土壌は上方に開き気味の壁を有する。覆土は3層に分層され、黒褐色系のものである。墓塚の可能性もあるが遺物は伴出しなかった。第22号土壌も黒褐色の覆土を持ち、近世初期以前のもと考えられる。

第V群

上記の4群に含まれないもの。平面形態の不整形なものが多い。深度も様々で、時期、機能を推定できるものはない。第30、31号土壌は規模、形態が類似し、位置も近接していることから、ほぼ同様の機能を有していたものと考えられる。いずれも黒～黒褐色の覆土を持つため、近世初期以前のもと考えられる。第35号土壌は第1号溝を壊して掘削している。覆土の特徴から、近世初期以前のもと考えられる。

b. 井戸

本遺跡からは4基の井戸が検出された。深度はいずれも井戸としては浅く、1.5m前後のものが多い。しかし、平面、断面の形態等から井戸と判断した。

第1号井戸

Q-37に位置する。平面形態はほぼ円形で、直径は1mである。深度は約1mで、壁は直立する。覆土は5層に分層され、ほぼ水平に堆積する。本遺構から2個のかわかけが検出されている(第280図1, 2)。第280図1, 2とも、やや薄手で、底部には回転糸切り痕を有する。底部外面がわずかに盛り上がり、厚みも増している。口唇部端面は丸みを帯び、体部は直線的に外傾する。両者とも色調は浅黄褐色で、胎土には鉄分の粒子をあまり含まない。これらのかわかけは覆土中位に伏せられた状態で出土している。本遺構はここでは井戸として報告するが、墓塚の可能性もあろう。

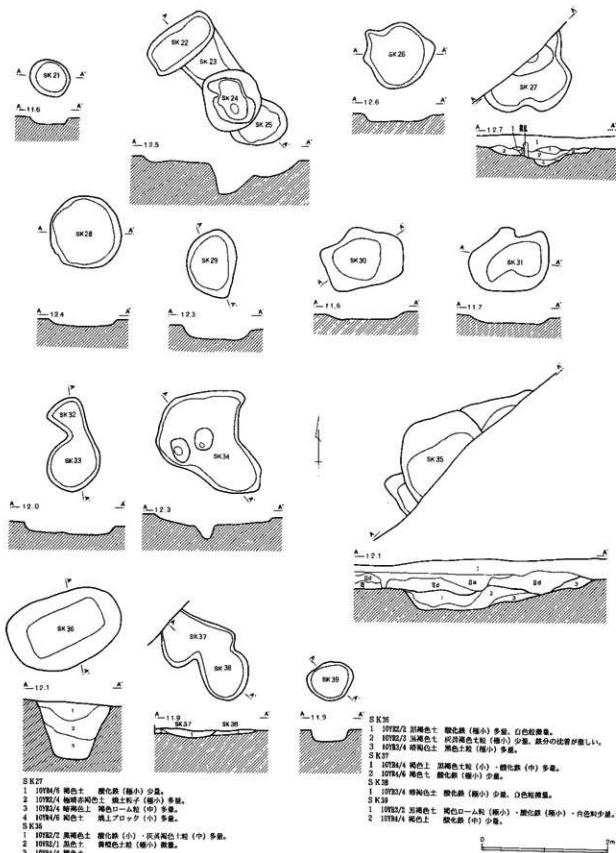
第2号井戸

P-37に位置する。規模、形態は第1号井戸とほとんど同じである。遺物は検出されなかった。

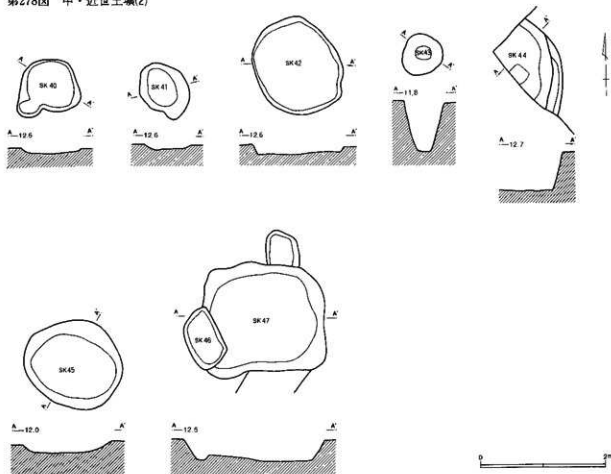
第3号井戸

S-35に位置する。確認面における平面形態は不整形円形である。長径1.5m、短径1.15mを測る。壁の上半部がやや拡がり、断面形態は朝顔形を呈する。底面は

第277図 中・近世土壌(1)



第278図 中・近世土壌(2)



平坦ではなく、凹凸が認められる。

土層注記には記載しなかったが、全体に砂粒を多く含んでいる。覆土は下半で細分されており、埋没の初期には自然にそれが進行したことを示している。上半では人為的な埋め戻しが行われたように、焼土粒を含む層の厚い覆土が堆積している。

覆土中位から緑泥片岩の破片が検出された。覆土は黒味が強く、中世にさかのぼるものと思われる。

第4号井戸

R-35に位置する。平面形態はほぼ円形で、深度は115cm程である。開口部に向かってやや開く断面形態を持つ。底面は平坦化されている。覆土下層はほぼ一括して埋め戻されたように、分層できなかった。本遺構からは遺物は検出されなかった。

c. 溝

溝で、遺物から時期の判明したものはない。覆土の特徴から、いずれも中世から近世に属するものと考えられる。第1号溝以外は、南北軸から約45度ずれた延長方向を持ち、本支台全体の土地利用に規制を受けていたものと考えられる。

第1号溝

T-35で検出された。延長方向は標高11.6mの等高線とはほぼ一致している。調査区外にかかるが、延長は5m程の小規模なものである。深度は約15cmで幅は30cm弱である。第35号土壌に切られている。遺物は検出されなかった。第35号土壌が近世初期以前のもと考えられることから、中世から近世初期のものと考えられる。

第2号溝

U-33、V-32、33、W-31、32、X-30、31、Y-31に位置する。標高約11.4mの等高線と平行する。一

第14表 中・近世土壌観察表

土壌名	所在グリッド	長径(m)	短径(m)	深度(m)	主軸方向
S K21	J-45	0.64	0.55	0.12	N-50°-E
S K22	S-34	1.16	0.60	0.09	
S K23	S-34		0.75	0.12	
S K24	S-34	0.97	0.92	0.60	
S K25	S-34			0.30	
S K26	S-34	1.15	1.02	0.12	
S K27	R-34			0.29	
S K28	R-35	1.13	1.13	0.10	
S K29	S-34	1.07	0.80	0.22	
S K30	T-35	1.27	0.95	0.10	
S K31	T-35	1.34	1.06	0.13	
S K32	S-35		0.56	0.14	
S K33	S-35		0.78	0.16	
S K34	S-34	1.96	1.58	0.40	
S K35	T-35			0.30	
S K36	T-34	1.81	1.18	0.93	
S K37	T-34		0.88	0.10	
S K38	S-36		0.76	0.40	
S K39	S-36	0.74	0.60	0.18	
S K40	Y-28	1.11	0.97	0.08	
S K41	X-28	0.96	0.75	0.10	
S K42	X-28	1.48	1.35	0.16	
S K43	U-33	0.66	0.64	0.80	
S K44	U-29			0.60	
S K45	X-30, 31	1.57	1.38	0.18	
S K46	W-29	1.00	0.60	0.32	
S K47	W-29	1.97	1.74	0.35	

定のレベルで画するように掘削されている。谷の斜面上で検出されており、本来の掘り込み面はさらに高い位置にあったと思われる。底面に近い部分のみ確認できた。

走行方向は北東-南西方向で、ほぼ直線的に掘削されている。Y-31付近にこれと直交する方向の枝線的な溝が付随し、南東方向に3m程延びている。主要部分は確認されただけで42m程あり、かなり規模の大きなものである。枝線的な溝はこれに直交し、谷へ向かっている。走行方向から、水利的な機能を有していたものと考えられる。

遺物は検出されなかったが、近世に属すると考えられる。

第3、4号溝

V-30に位置する。両者はほぼ平行に走り、調査区外にかかる。走行方向は北西-南東で、直線的である。幅は両者とも80cm前後で、深度は第3号溝が30cm、第4号溝が25cmを測る。両者とも底面でごく小規模な

ビットが確認された。

走行方向は等高線と直交するものであるが、南東端部における立ち上がりもはっきりとしており、この端部で延長は終了するものと考えられる。壁は比較的直立に近い。遺物は検出されなかった。近世以降のものと考えられる。

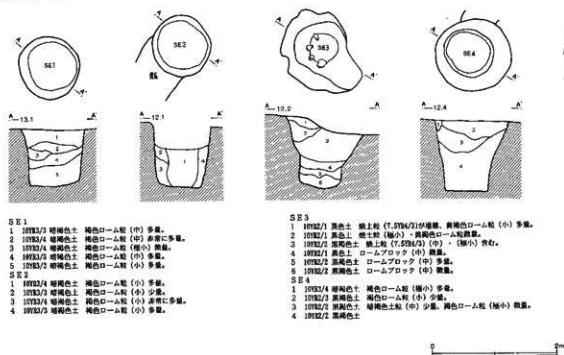
第5、6、8-11号溝

T-32, 33, U-33に位置する。第5号溝のみやや離れた位置にあるが、他は重複し、一連のものの再掘削によって形成されたものと思われる。

延長方向は北西-南東で、第3号溝、第4号溝とはほぼ平行している。等高線とは直交する方向で、直線的に掘削されている。標高11.6m付近で南東の端部となる。走行方向、掘削位置からみて、第2号溝と一連のものとして機能を呈していたものと考えられる。水利に関わる溝であったと推測される。

規模は確認される部分で18m程あり、深度は標高の高い位置では30-40cm程である。南東の端部付近では

第279図 井戸



第280図 第1号井戸出土遺物



ごく浅くなり、立ち上がりも不明瞭になる。谷覆土中でさらに延長しているものと考えられる。

遺物は検出されなかった。覆土は黒色土系のものが堆積しており、近世初期に遡る可能性があるが、現況での土地利用の区割に沿って掘り込まれており、近世後半から近代にかけて使用されていたものと考えられる。

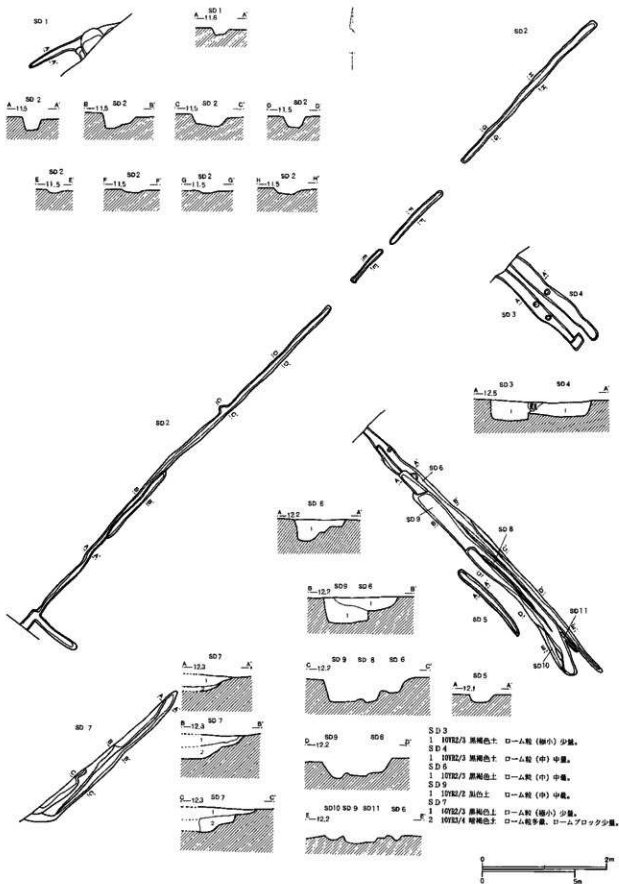
第7号溝

T-31, 32, U-31, 32に位置する。調査区の壁に沿って検出された。調査区外にかかる部分が多く、全容は不明である。確認された範囲では、走行方向は北東-南西で、約11m程である。幅は約1mで深度は約40cmである。

確認された部分の両端で、調査区外(谷の上方)に向かって屈曲している。

現況での土地利用形態に沿った形で掘削が行われており、遺物は検出されなかったが、近世後半から近代にかけて利用されていたものと思われる。

第281図 溝



第V章 結語

1. 原遺跡

原遺跡は、縄文時代中期後半を主体とした環状集落遺跡となること今回の調査で明らかになった。当該期の調査例は、県内県外を問わず数多く行われており、資料的には極めて恵まれていると言えよう。土器論、集落論等の研究も活発である。しかし、資料の豊富さによって、かえって個々の事例間の差異と類似性の有り方が不分明になり、個々の資料の説明に際し、各分野において再検討が迫られている状態である。このような状況下で、当報告における結語としては、調査成果としての一括出土例の再録と、それをもとにした、現段階において取り合えず妥当と考えられる土器の段階区分による時間軸の設定を行い、今後の分析のたたき台としたい。また、今後の検討によって該期の研究に資するであろうと思われる、具体的事実の再録と展望を行い、報告の結語としたい。

(1) 縄文時代中期の土器

縄文時代中期の土器編年研究の成果と諸問題については、先学による検討が数多くなされておられ、ここで触れる必要はないであろう。基本的な型式学的変化の方向性については、概ね論の一致を見ている。しかし前述のように、資料の増加に伴い、従来の編年観だけでは説明が困難な状況が生まれつつある。これは、編年のための資料操作上の技術的な問題というよりも、土器群の時間的・空間的変異をどのような視点から説明することが、現状において妥当なのかということが問い返されているためと思われる。

当該期の資料は、住居跡出土等の一括資料が非常に豊富で、なおかつ、土器群にみられる「系統性」は極めて多様である。地域間の意匠の交換と、それが土器群の中で受容される様態の複雑さが、土器の上に端的に表現されているともいえる。各「系統」における個々の型式学的変化は極めて漸移的かつ流動的であるため、区分における細部の問題や、個々の資料の位置づけ等では、論者間で不一致も認められる。

このような状況における段階設定のためには、一括資料をもとにした分析が蓄積されねばならないであろう。ここでは本遺跡の出土事例に基づき、一括資料間にどのような型式学的差異が認められるのか、それが他の遺跡の資料と比較した場合、どのような段階設定が可能なのかを検討したい。

第I段階

第22号住居跡を基準とする。藤内I式、阿玉台II式の新段階にあたる。今回の調査で組成が明らかになった住居跡は、この住居跡のみで、他にいくつか同時期の遺物が検出された住居跡が散見される。本段階以前の資料もグリッド出土資料等からは散見されるが、遺構としてまとまってとらえられるのは本段階からである。

棒状工具による結節沈線、隆帯上の刻み、押圧が発達する。2、3は阿玉台式であるが、爪形文が横位に連続施文されるなど、勝坂式との関係が認められるものである(山口1990)。1は抽象文に類似するモチーフが横位に連続するなど、やや変容は認められるが、勝坂式的な文様帯構成を持つ。3の連続三角文とともに、本段階の特徴をよく示している。この住居跡からは、破片ながらパネル文を持つ土器が出土している。原遺跡昭和56、58年度調査区(以下「旧報告」)における第3号住居跡(細田1985)、北遺跡第55、59、61号住居跡と同段階である。子と清水92、117号住居跡出土土器群の構成が、本住居跡出土資料と類似性が強い(子と清水貝塚発掘調査団1978)。

第II段階

第7a号住居跡出土資料を基準とする。井戸尻I式にあたる。6はパネル文的な意匠構成、副文様帯を設定する器面分割などが認められるが、隆帯上の加飾表現、各装飾要素の表現などに藤内式のそれからは変化が認められる。しかし、この段階もやはり今回の調査ではまとまった遺構に乏しく、本遺跡における様相は

明確ではない。旧報告第1号住、北遺跡54住、63住が該当する。

第III段階

第10号住居跡、第13号住居跡覆土下層出土土器を基準とする。井戸尻Ⅱ式、中峠式にあたる。本段階の設定において、当報告で問題になるのは、第13号住居跡における覆土の解釈であろう。第III章第2節で記したように、本住居跡は厚い覆土を有し、遺物はその下層と上層に分かれた包含されていた。特に下層出土遺物は覆土埋没途上において一括して廃棄された可能性が高く、上層出土遺物の埋没時との間に時間差があることは明らかである。問題は上層出土遺物との型式学的な段階差の問題である。ここでは上層出土土器との間に段階差を認め、上層出土土器を次段階のものとした。型式学的な根拠は、下層出土土器は7、9、10等いわゆる中峠式系、勝坂式系のものからなり、加曾利EⅠ式のキャリバー形深鉢が含まれないことによる。

しかし、否定的な根拠も認められる。吹上貝塚3号住(栗原他1959)、北遺跡50号住等では加曾利EⅠ式古段階に伴って9のような円筒形小形深鉢が伴出しており、その他、中峠式の土器が加曾利EⅠ式に伴出することは多くの事例が示している。事実北遺跡でも8は第13号住覆土上層から加曾利EⅠ式キャリバー形深鉢と共伴している。

9、10の2個体はその施文手法、文様帯構成などに共通性が強く、出土状況からも同一段階のものとしてよいだろう。この2個体が井戸尻Ⅱ式に伴うか否かが一つの基準となろう。北遺跡66号住、貫井南15号住(安孫子1974)等で降帯表現を伴わない小形円筒形深鉢が伴出しており、これらの土器が井戸尻Ⅱ式段階に伴う可能性はある。しかし、木曾呂表2号住(並木他1978)、狐塚3号住(秋間 服部1971)など、中峠式段階では降帯表現を伴うものが主体的であることは間違いない。

このように、本遺跡においてはこの段階と次段階の型式学的区分は極めて漸移的であり、いずれとも判断の付かぬ部分があるが、先に述べた根拠により、第13

号住居跡覆土下層を本段階の基準の一つとしたい。

第IV段階

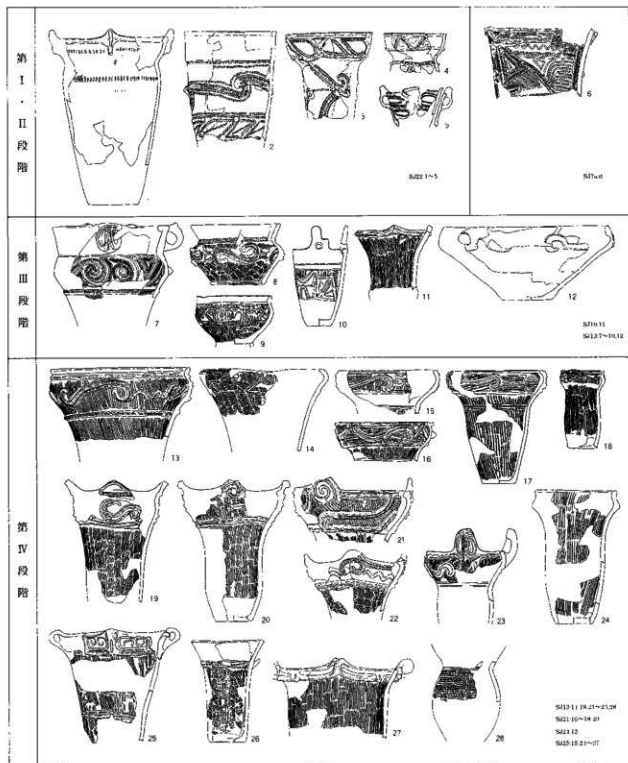
第13号住居跡上層、第21号住居跡、第24号住居跡、第25号住居跡出土土器群を基準とする。埼玉編年のIXa期にほぼ相当する(谷井他1982)。第21号住居跡出土土器はこれらの土器群のなかでは、型式学的にやや新相である。これを基準とする段階が設定されるか、もしくは第V段階に属する可能性があるか、一段階設定するには、他遺跡との比較においても根拠が弱いと判断した。また、2条1組隆帯の作出方法、S字文の中間部を区切る手法など、第V段階の土器群との型式学的差異も認められる。そこで本段階に含め、全体を一つの段階にした。

13はキャリバー形深鉢としてはほぼ完成されたもので、上下に区画線を持ち、その内部に2条1組の隆帯による単位文が施文される。ただし下端隆帯の刻みは前段階の手法を受け継ぐものであろう。15もキャリバー形深鉢として整ったものであるが、共伴する土器は24~27など、加曾利EⅠ式古段階のものである。16、17は頸部素文帯を持つ。17は15と同様S字文の間を弧状の隆帯で連結する。これは本段階の、いわゆる武蔵野型キャリバー形深鉢(谷井1987)に多く認められるモチーフである。武蔵野型キャリバー形深鉢はこれ以降本遺跡の主体的な類型となる。

第13号住居跡上層出土土器は、中峠式の土器を含み、キャリバー形深鉢にもその形態に変異が大きい。17、23はいわゆる下総型(谷井1987)のキャリバー形深鉢で、口縁部文様帯の幅が広く、口唇部突起等が発達するものである。同住居跡からは第147図の拓影図など、加曾利EⅠ式キャリバー形土器が伴出しており、14~16、18、19が同じ段階の異なる類型となる可能性は極めて高い。

25、26は文様帯の構成は異なるものの、体部に共通して矩形の区画を持つものである。25では不明だが、26では下端に区画は持たない。その点から、懸垂文との類似性が強いが、体部を縦位に分割する構成はこの段階に多く認められるもので、これ以降衰退する。24

第282図 原遺跡出土土器変遷図(1)



は本段階の粗製深鉢であるが、子和清水B—2号住等、共伴する例は多く認められる。形態は前段階の深鉢から受け継ぐものであり、本段階以降も一つの類型として組成に加わっていく。27の口唇部裝飾は岩の上23号住例（栗原他1973）と共通するものである。第25号住居跡出土土器群の構成は岩の上23号と類似性が強い。28は曾利I式系の鉢である。

本段階と同段階の一括資料は多数存在する。旧報告4号住、8号住、北遺跡7号住、50号住、花積貝塚2A号住（城近他1970）、北塚屋第2号住（西井他1985）、岩の上第21、23号住、舟山5号住（谷井他1980）、花影2号住（谷井他1974）、古井戸J—140号住（宮井1989）、子和清水B—2号住等が相当しよう。

第V段階

第14、15、16、18、20号住居跡出土土器が基準となる。本遺跡で多くの住居跡が営まれた時期の一つである。ただし、今後の検討によっては2時期分かれるか、または再編される可能性がある。

本段階は、加曾利E I式に位置づけられる。キャリパー形深鉢には武藏野型、下総型の系統をそれぞれ引くものが混在する。29、30は前者で、33—48は後者である。31、32はその中間的な様態を示す。

下総型はこの段階において、文様帯と器形との関係が前段階から大きく変容する。前段階では頸部拵れ部までが口縁部文様帯であったのに対し、口縁部文様帯の幅が狭小化し、頸部には無文帯が置かれる。文様帯は内周する部分には限られる。これは武藏野型キャリパー形深鉢との関係の中で生じた変化であろう。

両者とも口縁部文様帯の意匠はクランク文、S字文、楕円区画文等、変異がある。口縁部文様帯では、前段階に比べ、意匠を構成する隆帯鵝の沈線が発達し、文様の区画化が進行する。隆帯が文様帯内で独立する単位的意匠はほとんど見受けられなくなる。

頸部無文帯はその有無が混在する。口縁部の突起、把手も下総型では前段階同様発達している。

武藏野台地型では、口唇部外面に1条の隆帯が貼付され、文様带上端の区画を構成するものが多い。この

隆帯は上方に向かうため、口唇部に幅の広い凹線が施されるようにも見える。この口唇部裝飾は本段階において盛行するものである。

40は第16号住居跡の炉体土器であるが、特異な文様帯、並びに文様構成を取る土器である。頸部に垂下する隆帯は阿玉白式からの承襲を引くものとも考えられるが、さらに検討が必要である。44は口縁部無文の深鉢で、形態を変えながら、次段階以降に続くものである。43はあまり類型を知らないが、共伴関係から、本段階に含めた。

46は曾利系の重圏文土器が加曾利E I式に取り込まれたもので、本段階に伴う。48の鉢形土器と同形態の鉢は、本段階に多く共伴し、次段階以降にも継続する。

キャリパー形深鉢で胴部文様が明らかなものを第285図に掲載した。本段階における胴部渦巻文は、器面の縦位分割を基本として、それに埋め込まれる形で横位に施文される。第285図4のように曲折文もあるが、器体上を横位に連結するモチーフはない。これは本段階以降の胴部文様との大きな違いである。38、44、47等にみられるように、胴部を縦位に分割し、その内部に渦巻文を描き、分割線との間をつないだり、渦巻文から懸垂文を派生させる構成が主流である。特に縦位分割では、勝坂式における副文様帯的な構成がみられることは注目される。

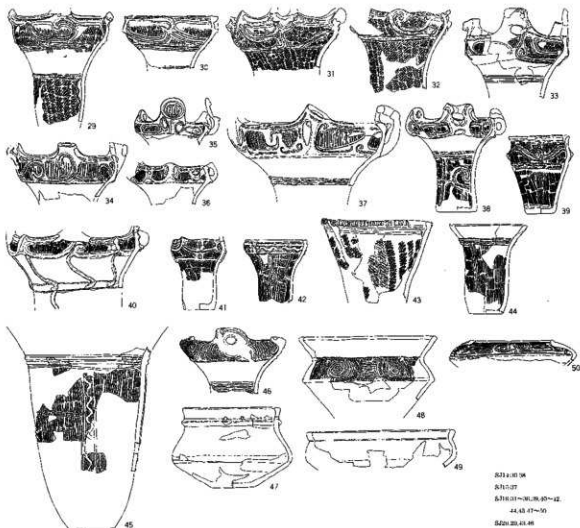
第14号住居跡と第16号住居跡は所在位置が離れているにもかかわらず、土器破片の接合例がある（第150図5）。埋没時がきわめて近かったことを推測させるもので、各住居跡出土土器群が同一段階に設定される傍証になろう。

本段階と同じ段階の住居跡は北遺跡には比較的多く存在するが、旧報告ではほとんど見あたらない。北遺跡では第15、16、29、48、49、52、53、57、67号住居跡が本段階に相当しよう。

第VI段階

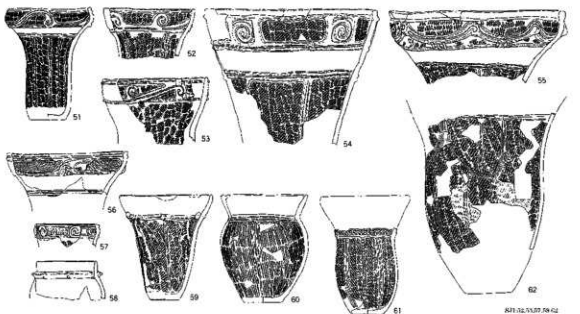
第1号住居跡、第3号住居跡、第4号住居跡、第29号住居跡出土土器を基準とする。本遺跡においてはあ

第V段階



30.1.10.16
 31.1.17
 32.1.17~20.36.40~42
 44.43.47~50
 50.20.23.41

第VI段階



50.12.15.17.19~22
 51.19. 51.11
 52.25.25.28 52.26.40.41

まり顕著な時期ではない。前段階との型式学的類似性は強く、個々の土器においては再編されるかもしれない。

本段階の資料はあまり多くはないが、加曾利E式系の変容の中では重要な段階と言える。個々の土器では前後の段階との型式学的類似性が強いが、土器群の構成に着目すると加曾利E式の構成に大きな変化が起きた段階である。キャリパー形深鉢は武蔵野台地型にはば統一され、前段階まで一定の組成を占めていた下総台地型がほとんどみられなくなる。土器群内における変異の幅は、この段階では武蔵野台地型のキャリパー形深鉢内部における変異がその範囲として機能している。次段階では連弧文系が組成に加わるので、土器群構成の中に、見かけ上大きな対立軸が再び設定されることになる。

個々の土器では文様帯の狭小化が進む。隆帯脇の沈線が完全に一般化し、文様帯内の区画化が進行する。キャリパー形深鉢において前段階と顕著に異なる部分は口唇部装飾で、口縁部文様帯上端の隆帯が簡略化され、口唇部上の凹線がみられなくなる。口唇部の表現はそれに伴い平板になる。第1号住居跡では破片で認められるが、連弧文土器は殆ど共伴しない。

52、53、57、59、62は第1号住居跡出土資料である。キャリパー形深鉢においては、前段階と比べ上記の変化が生じていることが明らかである。59は口縁部無文の深鉢で、前段階から続くものである。本資料の頸部には粘土粒の貼付がみられることが特徴的である。貫井南14号住居に類似があり、右耕地29号住、北遺跡38号住等で隆帯上に装飾を持つものが出土している。板東山9号住では頸部下端に蛇行状の隆帯が施されるものが出土している。頸部無文の深鉢は、頸部装飾が発達する曾利系土器と強い脈絡を有するため、頸部装飾にやや加曾利E式とは異なる表現が取られるものと思われる。

51、55、58は第29号住居跡出土土器である。51も口唇部装飾は簡略化し、文様の区画化が進んでいる。55はいわゆる渦巻つなぎ弧文であるが、本遺跡ではあま

り盛行しない。このため、時間的変化を追うことは困難であるが、口唇部装飾、隆帯表現、胴部懸垂文等から、本段階に伴うものとして問題はないであろう。54は第4号住居跡出土で、共伴資料がない。口縁部文様は完全に区画化し、渦巻文が独立している。渦巻文は前段階における胴部文様のように、縦位の分割線から派生している。通常の渦巻文が施文原理上に占める位置とは全く異なっている。口唇部の作出方法、口縁部文様帯における区画文化の状況、胴部懸垂文、隆帯等の型式学的特徴から、本段階のものとする。本資料と極めて類似した資料が鶴ヶ島市新右衛門遺跡から出土している（早川他1993）。

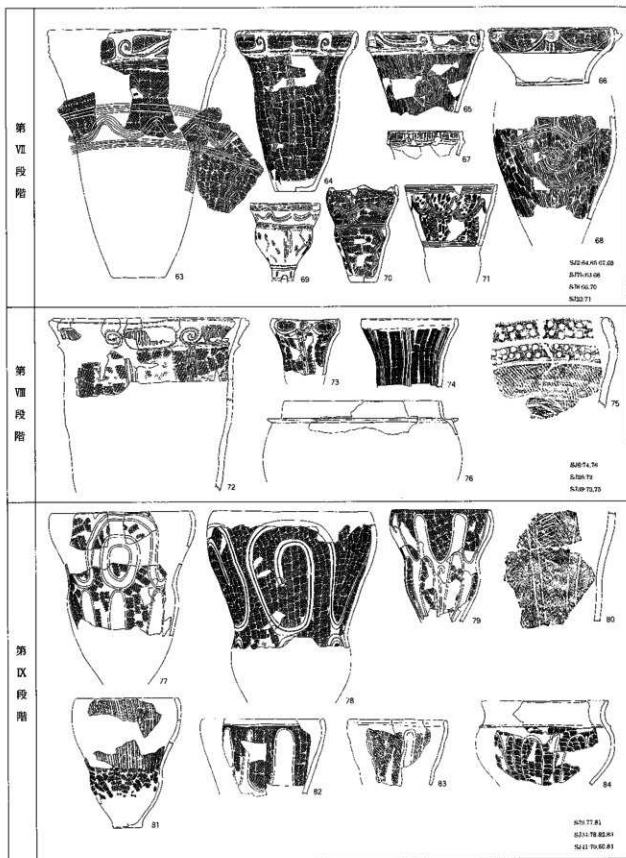
胴部渦巻文では第285図に見られるように縦位の分割が明確でなくなるものが見られる。胴部文様を持つものが少ないため積極的な根拠とはいえないが、前段階との差異として挙げられよう。

本段階と同段階の資料は北遺跡38号住、40号住、65号住、68号住、右耕地遺跡29号住、北塚屋遺跡38号住、岩の上遺跡1号住、板東山遺跡9号住、12号住、16号住、古井戸遺跡J-11号住、J-12号住、J-82号住、貫井南遺跡14号住等がある。

第VII段階

第2号住居跡、第5号住居跡、第7b号住居跡、第8号住居跡、第23号住居跡、第43号住居跡、第8号土壙出土土器を基準とする。連弧文土器が共伴することが大きな特徴である。加曾利E式系のキャリパー形深鉢は前段階とあまり大きな変化はみられない。前段階同様、武蔵野台地型の深鉢が主体を占め、口縁部文様帯には区画化された文様が展開する。連弧文土器はこの時期に本地域に大量に進出し、土器群の重要な構成要素となる。63、69は第7b号住居跡出土資料。63は胴部上半に波状文が2帯施文されるが、施文法は連弧文土器と極めて近いものである。64、65、67、68は第2号住居跡出土で、キャリパー形深鉢の口縁部文様の装飾手法は相互の類似性が非常に強い。これは63にも共通するが、隆帯による渦巻文と隆帯脇の沈線の、図と地の関係が逆転し始める。渦巻文を構成する隆帯と、文

第284图 原遺跡出土土器変遷図(3)



様帯区画隆帯との接続部における隆帯の表現は、渦巻文間の沈線による区画に沿うように表現され、いわば区画沈線が優先して意匠が構成されている。この区画化という方向は第V段階以降継続する動きで、各段階ごとに幅があるため、個々の土器においては区画化の発速度にばらつきがあらうが、本遺跡における一括資料の検討の中では上記の変化がほぼ認められる。

本遺跡における連弧文土器は、量的には一定の位置を占めるが、やはり客体的な存在である。連弧文系の内部における型式学的な変異は比較的少ない。波状文のみで構成されるものが主体であり、東北方面の連弧文系のように渦巻つなぎ弧文を沈線で表現するもの、交互刺突文が縦位に施文されるもの等は見あたらない。また、これは連弧文系には一般的な特徴であらうが、隆帯表現を伴うものはない。

胴部文様では渦巻文が相互に連結されるものが主流で、第V段階のような構成は全く見られなくなる。縦位の描線も認められるが、渦巻文から懸垂文的に派生するもので、器体の分割を意図したものではなくなる。

本段階の遺構は原遺跡日報告、北遺跡では比較的少ない。日報告第2号住、第6号住、北遺跡第24号住が相当する。他の地域では極めて多数の一括資料が存在するが、近隣では大山遺跡第2号住、第6号住の資料があげられる。

第VIII段階

第6号住居跡、第12号住居跡、第26号住居跡、第39号住居跡出土土器を基準とする。本遺跡ではあまり明確でない段階である。連弧文土器が変容し、波状文間に磨消を伴うようになる。キャリアー形深鉢の胴部懸垂文も磨消縄文を伴うものが一般的になる。キャリアー形深鉢の口縁部文様は、沈線が幅広になり、隆帯と隆帯脇の沈線という分離が不明確になる。それに伴い、隆帯が独自に図を構成するものがなくなり、沈線とともに区画を構成するものが顕著となる。

72は第26号住居跡の炉体土器。共存資料はない。他の基準資料よりもやや後出かもしれない。口縁部の渦巻文の単位化が進み、胴部の懸垂文も磨消を伴う。74、

76は第6号住居跡出土。74は埋壊である。口縁部文様帯が欠如するもので、胴部懸垂文は磨消を伴わない。型式学的特徴が少ないが、この段階においた。共存資料には、渦巻文が単位化した深鉢、構成の崩れた連弧文土器がある。

73、75は第39号住居跡出土。73は口縁部文様帯の下端が弧状となる。この手法は、関東地方北部地域ではかなり早い段階でみられるようであるが、本地域では前段階まではあまりみられない。75は連弧文土器の変容したものである。磨消縄文を伴い、口縁部には交互刺突文が退化した刺突列が施される。

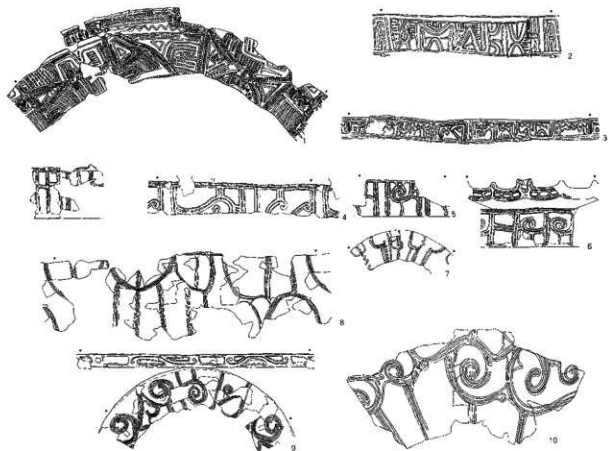
これらの特徴はいずれも前段階の土器群にはみられなかったものである。

本遺跡ではこの段階の遺構はあまり多くないが、北遺跡では比較的多く認められる。第27号住、第30号住、第34号住、第35号住、第37号住、第38号住、第39号住、第56号住等がある。原遺跡日報告では第9号住が相当しよう。近隣の遺跡では大山遺跡第7号住、小室天神前遺跡第1号住、志久遺跡第10号住がある。小室天神前例はやや後出かもしれない。この他、花影遺跡第1号住、北家屋遺跡第36号住、古耕地遺跡第52号土城出土土器等がある。

第IX段階

第9号住居跡、第33号住居跡、第34号住居跡、第41号住居跡、第69号住居跡、第18号土城、第20号土城、第1号埋壊出土土器を基準とする。遺構としては少なくはないが、遺物を多く出土する遺構は少ない。

深鉢は口縁部が大きく膨湾する器形が主流となり、文様は、沈線による波状文、微隆起線による渦巻文等が主体となる。本遺跡では口縁部文様帯を持つ深鉢は極めて少数で、第41号住居跡、第18号土城にわずかにみられるのみである。括れ部を境に波状文等が胴部の上下に展開するものが多い。本遺跡において深鉢の主流を占める形態は、前段階から大きく変容し、継続的な変化が辿れないように見える。これは本遺跡において、第VIII段階の資料が断片的であることに由来するのであろう。



第34号住居跡出土資料は炉体土器として共存していたもので、一括性は極めて高い。微隆起線による羊角状のモチーフを持つものと、磨消を伴うやや硬直した波状文を持つ深鉢が共存している。

本段階の周辺を巡っては、近年編年の研究が盛んに行われ、活発な議論が交わされているが、論者間の不一致は大きい(柳澤1995他 谷井 細田1995)。この不一致は前述の通り、資料操作上の技術的問題ではなく、土器群の型式学的変異を説明する視点の違いが浮き彫りになっているためと考えられる。本遺跡の当該期の資料はあまり恵まれてはいないが、上記のように一括性が極めて高いものが存在する。これらを型式学的に区分することは可能であるが、出土状況に照らせば細分は困難であり、同一の段階と捉えたい。

以上、遺構出土土器を中心に、本遺跡出土土器群の

段階設定を行った。これは基本的には原遺跡における土器群の段階設定であって、これが地域の編年、さらには広域の編年とどのような関係になるかは、さらなる分析を必要とする。あえて型式名称との照合を行うとすれば、第IV段階が加曾利EⅠ式古段階、第V段階が同新段階となろう。第VI段階は従来加曾利EⅠ式新段階と加曾利EⅡ式古段階とされたものが含まれるが(谷井他 1982)、ここではⅡ式古段階としたい。第VII段階は同中段階、第VIII段階は従来同Ⅱ式新段階と同Ⅲ式が含まれるが、Ⅱ式の新段階としたい。第IX段階は同Ⅲ式である(註1)。

前述の段階設定は、逐一の指摘は行わないが、従来の段階区分と見解を異にしている部分も多々ある。ここでの段階設定は、周辺資料をある程度念頭に置きながら本遺跡、並びに関連資料における一括性から、共存関係を持つ可能性が高いものをまとめたものであ

る。型式学的分析は十分とは言えないため、地域並びに広域編年への展望は不透明であるが、報告の結語としてまとめ置くこととする。

(2) その他の遺物

本遺跡では第16号住居跡より、釣手土器の人面部破片と思われる資料が出土している。住居跡覆土最上層出土であるため、当該住居跡に伴うものではない。同一個体の破片は検出されなかった。本資料を釣手土器の人面部破片と考えた根拠は、頭部が粘土板を貼り合わせる手法で作られ、中空であること、さらに顔面の表現が扁平であることによる。勝坂式には口唇部上に人面部を伴う深鉢が関東西部、中部地方を中心に多数認められるが、これらは通常顔面中央部が突出する表現が取られる。

本資料は断片的なものであり、どのような土器の一部になるか不明な点がある。しかし、いずれにしても中期の人面部破片の資料は県内では、下加遺跡（山形1988）等にわずかに見られるにすぎない。今後研究を進める上で貴重な資料の追加となった。

本遺跡からは、土偶も1点検出されている。第44号住居跡覆土からの出土である。頭部、脚部は欠損しているが、胴部は3/4程度残存している。共伴する土器が断片的であるため、所属時期については不明な点が残るが、概ね勝坂式の終末であろう。胴部側面から腹部にかけて、沈線を用いて矩形の装飾を施すものは、県内では藤棚遺跡（岩井1970）に類例がある。これを含め、胴部側面の沈線文は、中部、関東地方の土偶に通用の手法であり、本資料もこの系譜に連なるものである。背面の鍵の手状のモチーフは、中期小形土偶において多く用いられる小形の渦巻文が硬直化したものであろう。腹面、背面とも本資料の装飾と類似したものが、遠く愛知県船塚遺跡（大橋他1968）（註2）から出土している。

ここで再録した資料は断片的なものではある。が、言うまでもなく縄文時代中期における地域間交渉を背景として生み出されたものであり、上記のような簡略な資料探索によってもそれは容易に裏付けられる。今

回の調査における成果として特筆されよう。

(3) 住居跡内土壌

本遺跡の縄文時代中期住居跡で、比較的多く認められた事例に、炉を構築、または廃絶する際に、土壌状に大きく掘削を行うというものがある。これは本遺跡の第III段階から第VII段階までに及ぶ。この掘削は炉構築時（S J 15、16）と、廃絶時（S J 1、10、13、23、30）に分けられる。

この掘削に伴い、土器等の遺物の埋納が伴うものに次のような類型が認められる。

土器・礫の埋納：S J 10、16

土器片集積・焼成：S J 23

この他、第13号住居跡、第15号住居跡のように覆土堆積途上において、住居跡内部に土壌を伴うものもある。また、第16号住居跡では、炉跡下の「掘り方」出土の破片と、覆土中位から出土した破片が接合している（第158図1）。

本遺跡で構築時に掘削を伴うものは本遺跡では第15号住居跡、第16号住居跡の2例である。これらの住居跡はいずれも拡張または建て替えを伴っている。このことから、炉体下の土壌は住居跡の建て替え時に旧炉跡を処理するために行われたという可能性もあろう。隣接する北遺跡では、第30号住居跡、第49号住居跡、第55号住居跡が、炉跡の規模からみてが構築時に掘削を伴った可能性がある。これらの住居跡は明確に拡張等は認められないが、柱穴の配置からその可能性は考えられる。

しかし、原遺跡では明確に拡張を伴いながら、主軸通常の炉跡を持つ住居跡も多数存在する。この点は上記の仮説では説明がつかない。

第16号住居跡のように、同一個体の土器破片が炉跡「掘り方」と住居跡覆土から出土するという事例は、どのような解釈が可能であろうか。炉跡構築時に既に破損した土器があり、何らかの理由で一括廃棄されず、順次本住居跡に廃棄されたとも考えられよう。また、本住居跡で確認された炉跡が、住居が機能していた時のものではなく、住居廃絶後に二次的に構築された「擬

製的」な炉の可能性もあろう(小杉1985)。これは調査時に確認できなかったのが、単なる推測にすぎないが、「擬製的」な炉と仮定すれば、居住停止に至った住居の処理に関わって炉が構築され、その際礫と破片が埋納される。その後継続的な遺物廃棄時に同一個体が覆土中に廃棄されたというプロセスが考えられよう。

第10号住居跡、第23号住居跡等、炉跡の廃絶に伴い、遺物の埋納を伴うものは、炉の機能の一時的、または永続的な停止を居住者が確認するための作業であったという仮説も立てられようが、そうであれば集落内においてこれらの事例がさらに多数認められなければならないであろう。やはり何らかの非一般的な事情で、

炉廃絶に伴いこのような行為が必要とされた可能性が高いと考えられる。

隣接する北遺跡では、前述のように炉構築時に掘削を伴った可能性のある住居跡は数例存在するが、炉を掘り抜く事例、並びに遺物を埋納する事例は殆ど認められない。これらの差異が、全面調査ではないという資料の不足に由来するものか(原遺跡においても事例はあくまで少数である)、尚集落間の性格の差異に基づくものか、ここでは判断できない。特に、このような事例の機能的な意味が明らかにされない限り、特定は困難であろうが、今後住居論において検討に値する事例であると思われる。

2. 谷畑遺跡

本遺跡の調査において縄文時代前期開山式期の住居跡が1軒確認され、この遺構から開山式期の良好なセツトが得られた。

谷畑遺跡第1号住居跡出土土器群は、深鉢を中心とした組成を持ち、片口の注口を有するものもこれに加わる。出土状況は、覆土中位を中心とし、床面出土のものは炉体土器が唯一である。覆土出土のものには明確な層位差は認められず、ほぼ一括出土の土器群と捉えられる。

開山式土器については現在複数の編年案が提出され、4段階から5段階の変遷が考えられている。未だ意見の一致は見えていないが、型式学的変遷の方向については論者の間で大きな差異はない。

本遺跡第1号住居跡出土土器群の型式学的特徴としては、以下のことを挙げる事ができる。

- ・波状口縁を伴わない。
- ・口唇部断面の形態は、内削ぎ状となるものが多い。
- ・粘土粒の貼付文を伴うが、円形竹管文は伴わない。
- ・口縁部文様は鋸歯文が主体で、菱形状のモチーフ

3. まとめ

今回の調査では、原遺跡において縄文時代中期の集落跡、中世末から近世初期にかけての開発の痕跡が明

等は見られない。破片では梯子状沈線文(荒井他1983 佐々木1983)がわずかに認められる。また、半截竹管を用いた平行沈線文もわずかに認められる。

・地文は多段のループ文が主体となる。撚りは0段多条が多いが、単節の縄も伴出する。また、異条斜縄文もわずかながら認められる(第275図6、11)。

本遺跡では単一の一括資料が得られたのみで、本遺跡における変遷等については確認できない。現在までに得られている知見に基づけば、開山I式の新しい段階に位置づけられる。

近隣で開山式土器の良好な資料としては、蓮田市開山貝塚、伊奈町大針貝塚出土土器が挙げられよう。開山貝塚出土資料は開山I式に位置づけられており、大針貝塚出土資料は同II式に位置づけられる。本遺跡出土土器群とこれらの資料との型式学的差異は明瞭であり、本土器群がこれらの中間に位置づけられる可能性は極めて高い。大宮古地東縁部のものとしては、この段階の基準的資料となるであろう。

らかにされた。谷畑遺跡においては、縄文時代前期の住居跡が検出されている。いずれの資料も当該時期の

研究、地域開発史にとって新たな知見を加えるものである。

今回の報告では検討が及ばなかったが、縄文時代中・後期における遺跡間の関係を検討する上では、当該地域は極めて良好なフィールドとなりつつある。今回の調査は伊奈特定土地地区画整理事業に伴うものである。当事業にかかる調査では、巻頭でも触れたように戸崎前遺跡・薬師堂祖遺跡等においても縄文時代中・後期の資料が得られている。これまでに報告された著名な遺跡群の資料と合わせ、上記課題の解明に資する資料が今後さらに蓄積されるであろう。これらの資料の検討によって縄文時代中・後期における大宮台地東縁という地域性・並びに遺跡群の展開過程の解明が進展することを期待したい。

註1 これら土器型式名の付与に関する議論は今後の編年研究にとって第一義的な意味は持たなくなるであろう。編年にとって重要なことは、各段階を構成すると判断された単位間の整合性であって、呼称の問題ではない。中期土器群の広域編年を目指した仕事において、型式名とは別に段階名を付与することが一般的であったことは、当時既に問題化していた型式名の混乱を避ける意味もあつたであろうが、該期のように広域の土器を視野に入れることが編年研究上特に要請される分野における必然的な方向性であつたと思われる(鈴木他 1980 谷井他 1982)。

註2 原典未見。八重樫他1996所収。

引用文献

- 青木英代子他 「赤羽・伊奈氏屋敷跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第31集 1984
- 赤石光實他 「秩父山遺跡」 上尾市文化財調査報告 第5集 1978
- 秋間健郎 服部敬史 「東京都孤塚遺跡の調査」 長野県考古学会誌 第11号 pp.1-21 1971
- 安孫子昭二 「貫井南」 小金井市貫井南遺跡調査会 1974
- 荒井幹夫他 「打越遺跡」 富士見市文化財報告 第28集 1983
- 磯崎一他 「下栢間遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第42集 1980
- 岩井住男他 「膳櫃」 鳳翔 第7号 1970
- 大橋勤他 「船塚遺跡」 豊田市教育委員会 1968
- 金子直行他 「大山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第17集 1982
- 金子直行 「北・八幡谷・相野谷」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第66集 1987
- 金子浩昌 「奥東京湾元荒川・綾瀬川谷における縄文前期貝塚の形成」『大針貝塚・浮谷貝塚』 pp.126-131 1990
- 栗原文藏他 「岩の上・雄子山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第1集 1973
- 小杉康他 「原町西貝塚発掘調査報告書」 古河市史資料集 第9集 1985
- 小宮山克巳 「十四番耕地(第3次調査) 菅谷北城遺跡 東町二丁目遺跡」 上尾市文化財調査報告 第42集 1994
- 子和清水貝塚発掘調査団 「子和清水貝塚」 松戸市教育委員会 1978
- 埼玉県立博物館 「小室天神前遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書 1981
- 酒井清司他 「久保山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第29集 1983
- 佐々木保俊 「関山式土器について」 『人間・遺跡・遺物 わが考古学論集Ⅰ』 pp.183-194 1983
- 笹森健一他 「志久遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書 第31集 1976
- 庄野増寿他 「関山貝塚」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第3集 1974

- 城近恵市他 『花積貝塚発掘調査報告書! 埼玉県遺跡調査会報告第15集 春日部市教育委員会 埼玉県遺跡調査会 1970
- 鈴木敏昭他 『古耕地(1)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第27集 1983
- 鈴木保彦他 『縄文時代中期後半の諸問題』 神奈川考古 第10号 1980
- 関野克 『鐵山秘書高殿に就いて』 考古学雑誌 第28巻 第7号 pp.1-18 1938
- 谷井彪 『板東山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第2集 1973
- 谷井彪他 『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第3集 1974
- 谷井彪他 『大山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集 1979
- 谷井彪他 『舟山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第9集 1980
- 谷井彪他 『縄文中期土器群の再編』 『研究紀要 1982』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 谷井彪 『加曾利E式土器における口縁部文様と形態の承襲』 『埼玉の考古学』 pp.111-143 1987
- 谷井彪 細田勝 『関東の大木式・東北の加曾利E式土器』 日本考古学 第2号 日本考古学協会 pp.37-67 1995
- 並木隆他 『木曾呂妻遺跡』 川口市文化財調査報告書 第九集 1978
- 西井幸雄他 『北塚屋Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第48集 1985
- 西口正純他 『大針貝塚・浮谷貝塚』 埼玉県立博物館 1990
- 橋本勉 『久古』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第36集 1984
- 橋本勉他 『ささら(Ⅱ)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第47集 1985
- 橋本勉 『雅楽谷遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第93集 1990
- 濱野美代子 『大山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第84集 1989
- 早川由利子他 『新右衛門遺跡第3次発掘調査報告書』 鶴ヶ島市教育委員会 1993
- 細田勝 『原・丸山』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第42集 1985
- 宮井英一 『古井戸』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第75集 1989
- 八重樫純樹他 『中部高地をとりまく中期の土偶』 『土偶とその情報』 研究会 1996
- 安岡路洋 『井沼遺跡』 埼玉県立文化会館 1960
- 山口逸弘 『群馬県における阿玉台式の様相 -新巻遺跡出土土器の分析を中心にして-』 『研究紀要7』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.27-46 1990
- 柳澤清一 『茨城県における加曾利E4式編年の検討』 『茨城県考古学協会誌第7号』 茨城県考古学協会 pp.118-148 1995
- 山形洋一他 『下加遺跡』 大宮市遺跡調査会報告 第21集 1988
- 大和修他 『向原・上新田・西浦』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第41集 1984

原遺跡遺構名新旧対照表

旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
SK742	SJ3	SK641	SK30	SK708	SK63	SK737	SK96	SK793	SK129
埋蔵3	SJ69	SK642	SK31	SK699	SK64	SK736	SK97	SK795	SK130
SK468	SJ70	SK643	SK32	SK716	SK65	SK738	SK98	SK3	SK131
SJ10横	SJ71	SK663	SK33	SK701	SK66	SK739	SK99	SK8	SK132
SK355	SK1	SK660	SK34	SK700	SK67	SK740	SK100	SK10	SK133
SK356	SK2	SK661	SK35	SK702	SK68	SK741	SK101	SK14	SK134
SK362	SK3	SK662	SK36	SK703	SK69	SK742	SK102	SK15	SK135
SK369	SK4	SK662	SK37	SK713	SK70	SK743	SK103	SK16	SK136
SK381	SK5	SK662	SK38	SK715	SK71	SK744	SK104	SK18	SK137
SK382	SK6	SK670	SK39	SK717	SK72	SK745	SK105	SK19	SK138
SK386	SK7	SK671	SK40	SK711	SK73	SK746	SK106	SK33	SK139
SK520	SK8	SK672	SK41	SK712	SK74	SK747	SK107	SK39	SK140
SK353	SK9	SK673	SK42	SK714	SK75	SK748	SK108	SK40	SK141
SK612	SK10	SK674	SK43	SK718	SK76	SK749	SK109	SK41	SK142
SK616	SK11	SK675	SK44	SK720	SK77	SK770	SK110	SK42	SK143
SK620	SK12	SK676	SK45	SK722	SK78	SK771	SK111	SK43	SK144
SK621	SK13	SK677	SK46	SK723	SK79	SK772	SK112	SK44	SK145
SK642	SK14	SK680	SK47	SK724	SK80	SK773	SK113	SK45	SK146
SK625	SK15	SK682	SK48	SK725	SK81	SK777	SK114	SK46	SK147
SK627	SK16	SK683	SK49	SK726	SK82	SK778	SK115	SK48	SK148
SK628	SK17	SK685	SK50	SK727	SK83	SK779	SK116	SK81	SK149
SK623	SK18	SK687	SK51	SK728	SK84	SK786	SK117	SK87	SK150
SK624	SK19	SK684	SK52	SK729	SK85	SK780	SK118	SK89	SK151
SK626	SK20	SK690	SK53	SK730	SK86	SK781	SK119	SK91	SK152
SK629	SK21	SK691	SK54	SK731	SK87	SK782	SK120	SK96	SK153
SK630	SK22	SK693	SK55	SK734	SK88	SK783	SK121	SK94	SK154
SK631	SK23	SK694	SK56	SK735	SK89	SK782	SK122	SK92	SK155
SK632	SK24	SK696	SK57	SK743	SK90	SK787	SK123	SK98	SK156
SK636	SK25	SK704	SK58	SK746	SK91	SK788	SK124	SK100	SK157
SK637	SK26	SK705	SK59	SK748	SK92	SK789	SK125	SK101	SK158
SK638	SK27	SK692	SK60	SK749	SK93	SK790	SK126	SK103	SK159
SK639	SK28	SK698	SK61	SK750	SK94	SK791	SK127	SK102	SK160
SK640	SK29	SK706	SK62	SK751	SK95	SK792	SK128	SK104	SK161

谷畑遺跡遺構名新旧対照表

旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
SK113	SK162	SK331	SK195	SK574	SK228	SJ3	谷畑SJ1	SK320	SK33
SK114	SK163	SK332	SK196	SK569	SK229	SK218	谷畑SJ2	SK329	SK34
SK121	SK164	SK333	SK197	SK370	SK230	SK199	SK1	SK318	SK35
SK603	SK165	SK334	SK198	SK371	SK231	SK201	SK2	SK347	SK36
SK655	SK166	SK335	SK199	SK577	SK232	SK202	SK3	SK335	SK37
SK618	SK167	SK336	SK200	SK579	SK233	SK203	SK4	SK336	SK38
SK719	SK168	SK337	SK201	SK578	SK234	SK204	SK5	SK330	SK39
SK485	SK169	SK338	SK202	SK380	SK235	SK205	SK6	SK437	SK40
SK487	SK170	SK339	SK203	SK383	SK236	SK206	SK7	SK462	SK41
SK488	SK171	SK342	SK204	SK382	SK237	SK207	SK8	SK463	SK42
SK489	SK172	SK343	SK205	SK384	SK238	SK208	SK9	SK814	SK43
SK490	SK173	SK348	SK206	SK385	SK239	SK209	SK10	SK822	SK44
SK491	SK174	SK349	SK207	SK399	SK240	SK210	SK11	SK851	SK45
SK493	SK175	SK345	SK208	SK600	SK241	SK211	SK12	SK801	SK46
SK494	SK176	SK346	SK209	SK398	SK242	SK212	SK13	SK802	SK47
SK495	SK177	SK350	SK210	SK391	SK243	SK213	SK14	SE1	
SK496	SK178	SK353	SK211	SK388	SK244	SK214	SK15	SE2	
SK499	SK179	SK352	SK212	SK387	SK245	SK215	SK16	SK297	SE3
SK501	SK180	SK351	SK213	SK389	SK246	SK216	SK17	SK334	SE4
SK502	SK181	SK354	SK214	SK601	SK247	SK217	SK18	SD9	SD1
SK506	SK182	SK356	SK215	SK602	SK248	SK241	SK19	SD68	SD2
SK510	SK183	SK358	SK216	SK397	SK249	SK160	SK21	SD69	SD3
SK515	SK184	SK357	SK217	SE6	SE4	SK259	SK22	SD70	SD4
SK518	SK185	SK355	SK218	SD8	第1号埋	SK258	SK23	SD71	SD5
SK522	SK186	SK359	SK219	SD22-25	第1号埋跡	SK256	SK24	SD72	SD6
SK523	SK187	SK360	SK220			SK257	SK25	SD73	SD7
SK524	SK188	SK362	SK221			SK278	SK26	SD74	SD8
SK525	SK189	SK363	SK222			SK282	SK27	SD75	SD9
SK526	SK190	SK361	SK223			SK299	SK28	SD76	SD10
SK527	SK191	SK367	SK224			SK313	SK29	SD77	SD11
SK544	SK192	SK366	SK225			SK316	SK30	SX1	第1号炉穴
SK528	SK193	SK365	SK226			SK317	SK31		
SK529	SK194	SK573	SK227			SK321	SK32		

付篇 自然科学的分析

1. 原遺跡出土土器胎土分析

(株) 第四紀 地質研究所 井上 巖

X線回折試験及び化学分析試験

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。化学分析は土器をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーティングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40KV, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°
計数時間: 0.5秒。

1-3 化学分析

元素分析は日本電子製5300LV型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光X線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧: 15KV、分析法: スプリント法、分析倍率: 200倍、分析有効時間: 100秒、分析指定元素10元素で行った。

2 X線回折試験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱

物に特有のピークの強度を記載したものである。電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

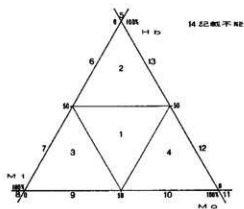
第1図に示すように三角ダイアグラムを1-13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mont, Mica, Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。モンモリロナイトはMont/Mont+Mica+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMica, Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1-4はMont, Mica, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2) Mont-Ch, Mica-Hb菱形ダイアグラム

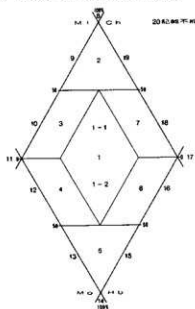
第2図に示すように菱形ダイアグラムを1-19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の内、a) 3成分以上含まれない、b) Mont, Chの2成分が含まれない、c) Mica, Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-Hbのそれ

第1図 三角ダイアグラム位置分類図



第2図 菱形ダイアグラム位置分類図



第3表 タイプ分類一覧表

試料No	タイプ分類	備考	試料No	タイプ分類	備考
第-5	A	焼成	第-1	H	阿玉占
第-10	A	焼成	第-7	H	焼成
第-13	A	加曹料	第-9	H	阿玉占
第-14	A	焼成	第-10	H	阿玉占
第-16	A	加曹料	第-12	H	その他
第-20	A	加曹料	第-15	H	阿玉占
第-20	A	その他	第-22	H	阿玉占
第-21	A	その他	第-24	H	阿玉占
第-23	A	焼成	第-25	H	焼成
第-44	A	焼成	第-31	H	その他
第-6	B	加曹料E1	第-45	H	阿玉占
第-21	B	阿玉占	第-49	H	阿玉占
第-24	B	焼成	第-53	H	阿玉占
第-25	B	焼成	第-54	H	阿玉占
第-17	C	その他	第-56	H	阿玉占
第-18	C	その他	第-57	H	阿玉占
第-27	C	焼成	第-58	H	阿玉占
第-31	C	焼成	第-60	H	阿玉占
第-11	D	焼成	第-61	H	阿玉占
第-8	E	焼成	第-62	H	阿玉占
第-23	E	その他	第-59	I	阿玉占
第-29	E	焼成	第-3	J	阿玉占
第-40	E	焼成	第-5	J	阿玉占
第-42	E	焼成	第-27	J	その他
第-43	E	焼成	第-47	J	阿玉占
第-1	F	阿玉占	第-55	K	阿玉占
第-2	F	阿玉占	第-1	L	焼成
第-6	F	阿玉占	第-4	M	加曹料E1
第-50	F	阿玉占	第-2	N	曹料
第-51	F	阿玉占	第-3	N	加曹料E1
第-29	G	阿玉占	第-7	N	曹料
第-28	G	焼成	第-9	N	加曹料E1
第-46	G	阿玉占	第-19	N	焼成
第-48	G	阿玉占	第-23	N	焼成
第-52	G	阿玉占	第-28	N	その他
第-5	H	阿玉占	第-39	N	焼成
第-11	H	阿玉占			

それぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont/Mont+Ch*100と計算し、Mica, Hb, Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイアグラム内にある1~7はMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、各辺はMont, Mica, Hb, Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第2

図に示す通りである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

- 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- 焼成ランクII：ムライトとクリストバライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- 焼成ランクIII：ガラスのなかにクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつなかりに欠ける。
- 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土 (素地土) の組織をかなり残している。

ガラスは微小な葉状を呈する。

- e) 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎上の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3) 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(10元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいてSiO₂-Al₂O₃、Fe₂O₃-MgO、K₂O-CaOの各図を作成した。これらの図をもとに、土器類を元素の面から分類した。

3 X線回折試験結果

3-1 タイプ分類

第1表胎上性状表に示すように原遺跡の土器と北遺跡の土器が記載してある。北遺跡の土器は勝坂系と阿玉台系の土器を主体として分析したもので、原遺跡の勝坂、阿玉台、加曾利E I、曾利系の土器との胎土の比較を行なった。第3表タイプ分類一覧表に示すように土器胎土はA～Nの14タイプに分類された。

Aタイプ：Hb, Chの2成分を含み、Mont, Micaの2成分に欠ける。

原-8, 10の勝坂系土器と北遺跡の加曾利、勝坂系の土器で構成される。

Bタイプ：Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

原-6の加曾利Eの土器と北遺跡の勝坂と阿玉台系の土器で構成される。

Cタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

北遺跡の勝坂系と縄文系の土器で構成される。

Dタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。

北遺跡-11の勝坂系の土器1個。

Eタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

組成的にはCタイプと同じであるが検出強度が異なる為にタイプ分類が異なる。北遺跡の勝坂系の土器で構成される。

Fタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。

組成的にはDタイプと同じであるが検出強度が異なる為にタイプ分類が異なる。北遺跡の阿玉台系の土器で構成される。

Gタイプ：Mica, Chの2成分を含み、Mont, Hbの2成分に欠ける。

北遺跡の阿玉台系の土器で構成される。

Hタイプ：Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

原遺跡の5と11の阿玉台系の土器と北遺跡の勝坂系と阿玉台系の土器で構成される。22個の土器がこのタイプで、最も多い。

Iタイプ：Mont, Micaの2成分を含み、Hb, Chの2成分に欠ける。

北-59の阿玉台系の土器1個。

Jタイプ：Mont, Micaの2成分を含み、Hb, Chの2成分に欠ける。

組成的にはIタイプと同じであるが検出強度が異なる為にタイプ分類が異なる。北遺跡の阿玉台系の土器で構成される。

Kタイプ：Mont, Mica, Chの3成分を含み、Hb 1成分に欠ける。

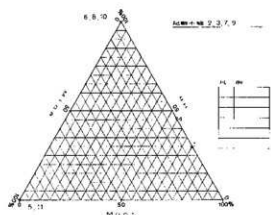
北-55の阿玉台系の土器1個。

Lタイプ：Mont, Hbの2成分を含み、Mica, Chの2成分に欠ける。

原-1の勝坂系の土器1個。

Mタイプ：Mont, Hb, Chの3成分を含み、Mica 1成分に欠ける。

第3図 Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム



原-4の加曾利Eタイプの土器1個。

Nタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

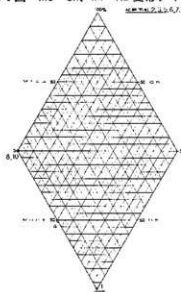
主に、 $nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O$ （アルミナゲル）で構成される。原-2、3、7、9の加曾利Eと曾利系の土器、北の勝坂系の土器で構成される。

以上のように原遺跡の土器はA、B、H、L、M、Nの6タイプに分類され、阿玉台系の土器はHタイプの胎土で、北遺跡の阿玉台系の土器と同じグループにはいる。原遺跡の勝坂系の土器はAタイプで北遺跡の加曾利系の土器と同じグループに入る。原遺跡の加曾利Eと曾利系の土器はL、M、Nの3タイプに集中し、Nタイプのものが多い。北遺跡のNタイプの土器は勝坂系で、型的には異なる。

3-2 石英(Qt)-斜長石(Pl)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作ると言うことは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのこの固有の石英と斜長石比を有していると言える。この固

第4図 Mo-Ch、Mi-Hb 菱形ダイアグラム



有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。

第5図Qt-Pl図に示すように原遺跡と北遺跡の土器はI~VIの6グループと“その他”に分類された。

Iグループ：原遺跡の加曾利Eと勝坂系の土器で構成される。

IIグループ：北遺跡の阿玉台系の土器が主体となるグループで原遺跡の11の阿玉台系と6の加曾利E系の土器が共存する。このグループはPlの強度が高いのが特徴である。

IIIグループ：北遺跡の阿玉台、勝坂、加曾利系の土器で構成される。

IVグループ：北遺跡の阿玉台系とその他の縄文系の土器が集中するグループで、原遺跡の1、2、5、7、9、10の6個が集中する。

Vグループ：北遺跡の勝坂、その他の縄文、阿玉台系の土器が混在する。

VIグループ：北遺跡の阿玉台系の土器が集中し、勝坂系の土器と共存する。原遺跡の3の加曾利E系の土器が混在する。

“その他”：QtとPlの強度が高い領域に北遺跡の土器が分散する。

以上の結果から明らかな様に、北遺跡の阿玉台、勝

は明らかに異質である。原-2、7の曾利系の土器はIVグループに属し、類似性が認められる。

4 化学分析結果

原遺跡の土器、北遺跡の土器の化学分析結果と原、北、飯山満、房谷戸、三原田の各遺跡から出土した阿玉台式土器の黒雲母の化学分析値も第2表化学分析表に記載してある。花崗岩と結晶片岩の黒雲母の分析値はRock forming mineralsの中の分析値を参照した。原遺跡の土器は黒雲母、石英などの部分を除いた素地土を分析した。

4-1 SiO₂-Al₂O₃の相関について

第6図SiO₂-Al₂O₃図に示すように、I~Vの5グループと「その他」に分類された。

Iグループ：原遺跡の5の阿玉台式と10の勝坂系、北遺跡の阿玉台式が混在する。

IIグループ：北遺跡の阿玉台式が集中し、勝坂系と共存する。原遺跡の11の阿玉台式の土器が混在する。

IIIグループ：北遺跡の勝坂系の土器が集中し、阿玉台式と原遺跡の加曾利系の土器が混在する。

IVグループ：原遺跡の1、2、7、9の4個の土器が集中し、北遺跡の阿玉台式も集中するグループで、北遺跡のその他の縄文と加曾利系の土器が混在する。2と7は曾利系の土器。

Vグループ：原遺跡の3、6の加曾利系の土器が集中し、北遺跡の阿玉台式、勝坂系、その他の縄文の土器と共存する。

「その他」：原遺跡の8の勝坂系の土器は明らかにAl₂O₃の値が低く、異質である。

以上の結果から明らかな様に、原-5と11の阿玉台式の土器は明らかに異なるグループに属し、異質である。原-5の阿玉台式と10の勝坂系は同じIグループに属し、類似性が認められる。原-1の勝坂系はIVグループに属し、異質である。加曾利系の土器は分散してお

り3と6は同じグループに属し類似性が認められるが4と9は異質である。曾利系の2と7は同じグループにあり類似性が高い。

4-2 Fe₂O₃-MgOの相関について

第7図Fe₂O₃-MgO図に示すように、土器はI~Vの5グループと「その他」に分類された。

Iグループ：北遺跡の阿玉台式、勝坂、加曾利、その他の縄文系の土器が集中し、原遺跡の11の阿玉台式の土器が混在する。

IIグループ：北遺跡の勝坂系の土器で構成される。

IIIグループ：北遺跡の阿玉台式の土器が集中するグループで、原遺跡の3と6の加曾利系の土器が混在する。

IVグループ：原遺跡の土器1、2、4、5、7、9、10の7個の土器が集中する。北遺跡の阿玉台式の土器が共存する。

Vグループ：北遺跡の勝坂系の土器が集中する。

「その他」：原遺跡の8の勝坂系はMgOの値が高く異質である。

以上の結果から明らかな様に、阿玉台式の原-5と11は明らかにFe₂O₃の値に差があり、異質である。加曾利系の土器は3と6が同じグループにあり、類似性が高いが他の4と9は異なるグループにあり、異質である。原-8の勝坂系の土器はMgOの値が高く異質である。原遺跡の土器はFe₂O₃の値が13%以上の領域にあり、13%以下の領域には北遺跡の土器が分布する。原-3、6、11の3個体は13%以下の北遺跡の領域にある。

4-3 K₂O-CaOの相関について

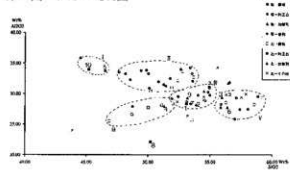
第8図K₂O-CaO図に明らかな様に、I~VIの6グループに分類された。

Iグループ：原遺跡の4、8、10の3個と北遺跡の勝坂系の土器が混在する。

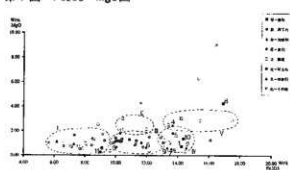
IIグループ：原遺跡の1、2、3、5、6、7の6個の土器が集中し、北遺跡の勝坂、加曾利系の土器と共存する。

IIIグループ：北遺跡の勝坂と阿玉台式の土器が集中し、その他の縄文系と原遺跡の9が混在

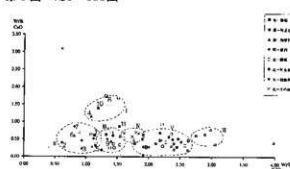
第6図 $SiO_2-Al_2O_3$ 図



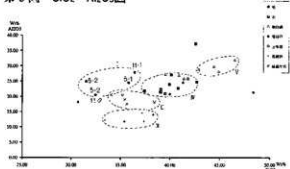
第7図 Fe_2O_3-MgO 図



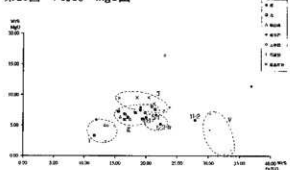
第8図 K_2O-CaO 図



第9図 $SiO_2-Al_2O_3$ 図



第10図 Fe_2O_3-MgO 図



する。

IVグループ：北遺跡のその他の縄文系の土器が集中する。

Vグループ：北遺跡の阿玉台系の土器が集中し、勝坂系の土器が混在する。

VIグループ：北遺跡の阿玉台系の土器で構成される。

以上の結果から明らかな様に北遺跡の土器は K_2O の値が1.2%以上の領域にあり、原遺跡の土器とは明瞭に区別される。

5 阿玉台式土器に含まれる黒雲母の分析

阿玉台式土器には粗粒の黒雲母が多く混入されてい

る。この混入された黒雲母がどのような組成を有し、何に起源を求めたらいいのかを検査するために化学分析を行った。第2表に示すように、原遺跡と北遺跡の阿玉台式土器と群馬県の房谷戸、三原田遺跡、千葉県飯山満遺跡から出土した阿玉台式土器からの黒雲母を分析し比較した。原岩についてのデータは先に記したように花崗岩と結晶片岩中の黒雲母の分析と対比し、検討した。

5-1 $SiO_2-Al_2O_3$ の相関について

第9図 $SiO_2-Al_2O_3$ 図に示すように、I~Vの5グループに分類された。

Iグループ：原遺跡の阿玉台系の土器の黒雲母が集中する。

IIグループ：結晶片岩の黒雲母が集中する。

IIIグループ：花崗岩類の黒雲母が集中する。

IVグループ：北遺跡の阿玉台系の土器の黒雲母と飯山満、房谷戸の両遺跡の阿玉台系の土器の黒雲母が共存する。

Vグループ：三原田と飯山満の阿玉台系の土器の黒雲

母が共存する。

以上のように花崗岩系の黒雲母は Al_2O_3 の値が15%以下の領域にあり、結晶片岩系の黒雲母は15%以上の領域にある。土器に混入された黒雲母は明らかに15%以上の領域にあり、結晶片岩系の黒雲母と同じ領域にある。土器に混入された黒雲母はIグループには原遺跡、IVグループには北、房谷戸、飯山満の各遺跡の土器の黒雲母が共存し、Vグループには三原田と飯山満遺跡の土器の黒雲母が共存するというように明瞭に分れたグループを形成する。このことは原岩が異なることを意味し、何種類かの黒雲母片岩を使っているようである。

5-2 Fe_2O_3 -MgOの相関について

第10図 Fe_2O_3 -MgO図に示すように、I~Vの5グループに分類された。

Iグループ：飯山満と三原田遺跡の土器の黒雲母が共存し、房谷戸と北遺跡の黒雲母が混在する。

IIグループ：結晶片岩の黒雲母が集中する。

IIIグループ：北遺跡の土器の黒雲母が集中し、飯山満と房谷戸遺跡の黒雲母が混在する。

Vグループ：花崗岩類の黒雲母が集中する。

以上の結果から明らかな様に、花崗岩系の黒雲母は Fe_2O_3 の値が30%以上の領域にあり、結晶片岩系の黒雲母は25%以下の領域にあり、明瞭に分かれる。阿玉台式土器に混入された黒雲母は25%の領域にあり、結晶片岩系の黒雲母と判断される。遺跡毎にグループが異なることは使用する原石が異なることを意味する。

6 まとめ

- 1) 土器胎土のタイプ分類は原遺跡と北遺跡の土器で行ないA~Nの14タイプに分類された。原遺跡の土器はA、B、H、L、M、Nの6タイプで、北遺跡の土器の胎土とはA、B、H、Nの4タイプで共通性が認められる。
- 2) Qt-Plの相関では北遺跡の土器は全体に分散し、器種による統一性は乏しい。勝坂と阿玉台系の土器

は共存しており、勝坂系と阿玉台系の土器が明瞭に分れる傾向は認められない。この傾向は原遺跡の土器でも同じで全体に分散する傾向が強く、多種にわたる土器であると推察される。

- 3) 化学分析結果でも勝坂系と阿玉台系の土器は共存し、また、5グループに分散し、Qt-Plの相関と同じ傾向を示す。
- 4) 原-1、5、8、10、11は同一住居からの出土品で、1、8、10は勝坂系、5と11は阿玉台系である。勝坂系の1と10は阿玉台系の5と同じグループにあるが、勝坂系の8と阿玉台系の11は明らかに異なるグループに属し、異質である。
- 5) 加曾利E I系の3、4、6、9はQt-Plの相関では4個体すべてが異なるグループに属し、共通性にかける。化学分析では素地土の部分 analysed した結果3と6は類似する素地土を使っているが混入する砂の比率は異なり、異質である。
- 6) 曾利系の2と7はQt-Plの相関、化学分析でも同じグループにあり統一性が認められ、同じ集団により製作されたものであろう。
- 7) 曾利系の2と7を含め、原遺跡の土器は Fe_2O_3 の含有量が高く、北遺跡の土器とは異質である。3、6、11の3個は Fe_2O_3 の含有量が低く、北遺跡の土器と同じ領域にある。
- 8) 加曾利E I系の土器と曾利系の土器は異質で関連性が薄い。関連性の認められる土器は加曾利E I系の9と曾利系の2と7の関係だけである。
- 9) 阿玉台式土器から抽出した黒雲母と花崗岩類と結晶片岩類の黒雲母の関連性を比較検討した。土器胎土中に混入された黒雲母は結晶片岩系の黒雲母で花崗岩類の黒雲母ではない。各遺跡の黒雲母は同じグループに属する傾向にあり、しかも、遺跡毎に異なるグループを形成し、結晶片岩の原石が異なる。原遺跡と北遺跡の黒雲母の組成は異なっており、原遺跡の阿玉台系の土器と北遺跡の阿玉台系の土器は異なる集団で形成されている可能性が高い。

2. 原遺跡より検出された土壌の理化学分析

(株) パリノ・サーヴェイ

はじめに

原遺跡では、調査区内から縄文時代中期の住居跡が検出された。この床面には、土壌が掘り込まれ、中央部には完形の土器が納められていた。また、住居が埋没した後に、覆土を掘り込んで別な土壌が構築されていた。

今回は、特に各土壌が墓であった可能性を検討するために、遺体に多量に含まれ、土壌中では比較的拡散・移動しにくいリン酸含量を測定するリン分析と、骨の主成分であるカルシウム含量を測定するカルシウム分析を併用することとした。今回は含有されるリン成分をリン酸として抽出するため、以下の報告ではリン酸含量と称する。

1. 試料

調査対象とした土壌は、縄文時代中期住居跡 S J-15の床下に認められた土壌（以下床下土壌と略す）と住居埋没後に構築された土壌（以下埋没後の土壌と略す）である。試料は表土（試料番号1）、埋没後の土壌の覆土（試料番号3・4・5）、埋没後の土壌を覆う土層（試料番号2）、土壌脇の住居覆土（試料番号11）、埋没後の土壌の直下の住居覆土（試料番号6）、その下位の住居覆土あるいは床下土壌の覆土（試料番号7）、住居床直の覆土（試料番号8）、床下土壌の覆土（試料番号9・10）の11点、および対照試料として採取された床のローム層1点の合計12点である。

2. 分析方法

分析は、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸

(HNO₃) 5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO₄) 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸 (P₂O₅) 濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計のよりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P₂O₅mg/g) とカルシウム含量 (CaOmg/g) を求める。

3. 結果

各土壌覆土のリン酸含量は、いずれも対照試料のロームより高い値を示した。埋没後の土壌では底部の試料番号2が最も高い。また、床下土壌では試料番号9が高い値をしめす。

カルシウム含量も、対照試料のロームより高い値を示す。住居埋没後の土壌では、試料番号2が最も高い。また、床下土壌ではリン酸含量と同様に、試料番号9が高い値である。

4. 考察

リン酸のいわゆる天然賦存量の報告例 (Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991) によれば、上限は約3.0 P₂O₅mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5 P₂O₅mg/g (黒ボク土の平均値) という報告例がある (川崎ほか, 1991)。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1~50 CaOmg/g (藤貫, 1979) とされるが、その範囲はリン酸よりも明らかに大きい。したがって、これを著しく越える数値が得られた場合に、カルシウムの富化を指摘できる。

今回の分析結果では、各土壌では天然賦存量を著しく越える値は認められなかった。しかし両含量とも、いずれの試料も対照試料としたロームより高い値を示した。

床下土壌では、土壌覆土の試料番号9でリン酸およびカルシウム含量が土壌底部や他の住居覆土と比較して高かった。これより、土壌中部にはリン酸やカルシウムを含む物が埋積していた可能性がある。

また、埋没後の土壌では底部付近の覆土でリン酸が高く、覆土各層ともカルシウムが高かった。さらに、土壌の真下でもリン酸が高かった。この点から、土壌内にこれらの成分を含む物が埋積していたが、現在までに下方などに成分が流れている可能性がある。

しかし、いずれの土壌もリン酸やカルシウムが濃集していると言えるほど住居覆土との含量の差がみられたわけではないが、現在に至るまでの経年を考慮すれば墓場である可能性はありそうである。

今回の調査では、土壌覆土の一部分を調査したに過ぎず、局所的な濃集を見いだせたとはいえない。今後、遺構覆土では層位的、面的に試料を採取し、これらの成分の濃集を立体的に検討する事が望まれる。

表1 SJ-15のリン・カルシウム分析結果

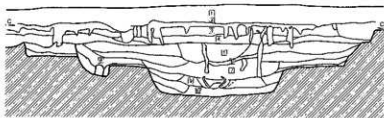
試料採取位置	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土性・土色
対照試料 床（ローム）	1.69	2.90	10YR3/4暗褐・L
住居埋没後に構築された土壌			
①（表土）	4.40	4.06	10YR2/3黒褐・L
②（土壌を覆う土層）	3.94	8.14	10YR2/1黒・L
③（土壌覆土）	4.75	6.73	10YR2/2黒褐・L
④（土壌覆土）	4.81	6.59	10YR2/3黒褐・L
⑤（土壌覆土底部）	5.21	5.89	10YR2/2.5黒褐・L
⑥（土壌覆土の直下）	4.65	4.41	10YR2/3黒褐・L
住居床下に構築された土壌			
⑦（住居覆土）	3.56	4.96	10YR3/2黒褐・L
⑧（住居覆土）	3.95	4.68	10YR3/2黒褐・L
⑨（住居床直）	2.82	4.30	10YR3/2黒褐・L
⑩（土壌覆土）	5.82	9.07	10YR3/3暗褐・L
⑪（土壌覆土）	3.80	4.65	10YR3/2黒褐・L

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色粘（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性の判定法による。

L……壤土（砂と粘土を半々に感じる。）

第1図 第15号住居跡土壌サンプル採取位置



引用文献

- 大野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p. 28-36.
- Bowen, H. J. M. (1983) 環境無機化学—元素の循環と生化学—. 浅見輝男・茅野尤男訳, 297p., 博友社 [H. J. M. Bowen (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, H. G.・Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壌の化学. 岩田嘉午・三輪 太郎・井上隆弘・楊捷行訳, 309p., 学会出版センター [H. G. Bolt and M. G. M. Bruggenwert (1976) SOIL CHEMISTRY], p235-236.
- 土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法, 354p., 博友社.
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法, 440p., 養賢堂.
- 藤貫 正 (1979) カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52:57-61, 地質調査所.
- 川崎 弘・古田 淳・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p., p. 23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書第1巻, 411p., 産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」, 156p., p. 39-40.

3. 埼玉県、谷畑遺跡の火山灰同定分析

(株) 古環境研究所

1. はじめに

大宮台地上には、いわゆる関東ローム層と呼ばれる火山灰土が厚く形成されている。火山灰土は下部の厚いローム層（赤土）と表層部の薄い黒ボク土（黒土）から構成されている。火山灰土中には箱根火山や富士火山などのほか、浅間火山や榛名火山など北関東地方の火山に起源をもつテフラ層が多く挟まれている。それらの多くについては、放射性年代測定法や考古学的な編年研究などの成果により、すでに噴出年代が明らかにされているものも多い。そしてこれらの示標テフラ層との層位関係を明らかにすることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を明らかにすることができるようになっている。

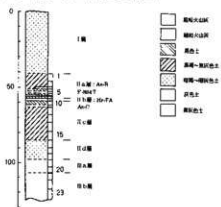
大宮台地上に位置する谷畑遺跡の発掘調査では、台地を覆う厚い黒土の良好な土層断面が認められた。そこで地質調査を行い土層の層序を記載するとともに、テフラ検出分析および屈折率測定を行って、示標テフラの層序を明らかにする分析が行われることになった。また遺構覆土についてもテフラ検出分析を行って、遺構の構築年代を明らかにすることを試みた。

2. 地質層序

地質調査の対象とされた地点は、I-46グリッド北壁およびI号住居跡の2地点である。I-46グリッド北壁では、黄灰色土(IIIb層, 層厚18cm)の上位に、下位より灰色土(IIIa層, 層厚9cm)、暗灰色土(IIc層, 層厚13cm)、黒灰色土(層厚22cm)、黄色粗粒火山灰混じり黒褐色土(層厚1.5cm)、黒色土(以上IIc層, 層厚2.5cm)、黄色細粒火山灰層(IIb層, 層厚1.3cm)、黒色土(層厚0.8cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚0.1cm)、黒色土(層厚0.9cm)、黒灰色土(層厚1.3cm)、黒色土(層厚1.5cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚1.1cm)、黒褐色土(以上IIa層, 層厚9cm)、表土(I層, 層厚41cm)の連続が認められた(第1図)。

発掘調査により縄文時代前期中葉に構築されたと推定されているI号住居跡覆土A-A'セクション北面

第1図 I-46グリッド北壁柱状図



の覆土は、下位より暗褐色土(層厚6cm)、葉理が発達した暗灰色土(層厚8cm)、黒灰色土(層厚6cm)、黄灰色土(層厚24cm)、黒褐色土(層厚7cm)から構成されている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラ粒子の特徴を把握するために、また野外において肉眼で検出できなかったテフラの有無を確かめるために20点のテフラ、土壌試料を対象としてテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を把握。

(2) 分析結果

I-46グリッド北壁におけるテフラ検出分析の結果を表1に示す。試料番号11にはスポンジ状によく発砲した白色の軽石が比較的多く含まれている。軽石の最大径は0.6mmである。ほかに黒色スコリアや赤色の岩片も認められるがその量は少ない。試料番号9にはスポンジ状に比較的良好に発砲した白色軽石が多く認められる。軽石の最大径は0.4mmである。また斑晶に角閃石が認められる。試料番号7にはスコリアが多く含まれている。スコリアの色調は量の多い順に黒灰色、褐色、灰色で、いずれのスコリアにも光沢は認められな

い。ほかに赤褐色の岩片も比較的多く含まれている。さらに試料番号3には淡褐色軽石が多く認められた。斑晶には斜方輝石が認められる。軽石の最大径は1.4mmである。

1号住居跡における分析の対象とした試料5点には軽石、スコリアともに検出されなかった。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ粒子がとくに多く認められた1-46グリッド北壁の試料番号3、7、9、11の4試料について屈折率測定を行い、示標テフラとの同定のための資料を得ることにした。屈折率測定は位相差法(新井,1972)による。

(2) 測定結果

試料番号11の重鉱物には斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱などが含まれている。火山ガラスにはスポンジ状に発泡した白色の火山ガラスのほか、透明のバブル型火山ガラス認められた。火山ガラスの屈折率(n)および斜方輝石の屈折率(γ)は、各々1.499-1.519および1.706-1.710であった。透明のバブル型ガラスは、その特徴から約2.1-2.5万年前に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT,町田・新井,1976)に由来し、2次的に本試料層準に混入してきたものと考えられる。Atの火山ガラスを除いた火山ガラスの屈折率(n)は、今回測定された範囲の中でより高い値と推定される。試料番号9の重鉱物には、角閃石、斜方輝石、単斜輝石などが含まれている。含まれる角閃石の屈折率(n_2)は1.672-1.680である。

試料番号7に重鉱物はほとんど含まれていない。本試料に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.589-1.611である。さらに試料番号3には、重鉱物として斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱などが含まれている。火山ガラス(n)および斜方輝石(γ)の屈折率は、各々1.523-1.530および1.707-1.710である。

5. 考察—示標テフラとの同定

テフラ粒子が比較的多く認められた1-46グリッド北壁の試料番号11のテフラ粒子は、スポンジ状によ

く発泡した白色の軽石が比較的多く含まれていること、さらに火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間軽石(As-C,新井,1979)に由来すると考えられる。

試料番号9の火山灰層は、スポンジ状に比較的多く発泡した白色軽石が多く含まれていること、重鉱物に角閃石、斜方輝石、単斜輝石などがふくまれていること、角閃石の屈折率などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳浅川テフラ(Hr-FA,新井,1979,坂口,1986,早田,1989,町田・新井,1992)に同定される。

また試料番号7は、黒灰色、褐色、灰色のスコリアが多く含まれていることやその層位などから、高島半北遺跡においてHr-FAの上位で後述するAs-Bの間に認められた2層のスコリアのうち、上位のスコリア層(Tk-4),早田ほか(1990)に同定される。このスコリアについて早田ほか(1990)は、864(貞観6)年に富士火山から噴出した富士貞観スコリアの可能性を考えている。

試料番号3には、重鉱物として斜方輝石、単斜輝石、磁鉄鉱などが含まれていること、火山ガラス(n)および斜方輝石(γ)の屈折率などから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B,新井,1979)に同定される。

1号住居跡覆土から軽石やスコリアを検出することはできなかった。約3,000年前以降、富士火山は比較的激しい噴火活動を起こしており、この時期の富士火山起源のテフラは南関東地方各地で検出されている。今回、遺構覆土中より顕著なスコリア粒子が検出されなかったことは、遺構の埋没がかなり早い段階で終了していたことを示しているのかも知れない。

6. まとめ

谷畑遺跡において地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った結果、IIc層中部に浅間C軽石(As-C、4世紀中葉)、IIb層に榛名二ツ岳浅川テフラ(Hr-FA、6世紀初頭)、IIa層下部に富士貞観スコリア(864年)に同定される可能性の大きいテフラ、IIa層

上部に浅間Bテフラ (As-B, 1108年) の4層のテフラ

を検出することができた。

表1 原遺跡I-46グリッドのテフラ検出分析結果

試料	軽石			スコリア		
	量	色調	最大径	量	色調	最大径
1	+++	淡褐	1.1	-	-	-
3	+++	淡褐	1.4	-	-	-
4	+	淡褐	0.8	-	-	-
5	+	淡褐	0.7	-	-	-
7	-	-	-	+++	黒灰, 燻灰	1.2
9	+++	白	0.4	+	黒灰	0.6
11	++	白	0.6	+	黒	0.7
13	+	白	0.7	-	-	-
15	-	-	-	-	-	-
17	-	-	-	-	-	-
19	-	-	-	-	-	-
21	-	-	-	-	-	-
23	-	-	-	-	-	-

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度,
+: 少ない, -: 認められない。最大径の単位は, mm。

表2 原遺跡の屈折率測定結果*1

試料	重鉱物	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)	角閃石 (nz)
3	opx, cpx, mt	1.523-1.530	1.707-1.710	-
7	-	1.389-1.611	-	-
9	ho, opx, cpx	-	-	1.672-1.680
11	opx, cpx, mt	1.499-1.519	1.706-1.710	-

*1: 位相差法 (新井, 1972) による。
opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, mt: 磁鉄鉱。

引用文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石による屈折率の測定—テフラクロノロジーの基礎的研究—, 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1979) 北関東地方における縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—給良 Tn 火山灰とその発見の意義—, 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
- 坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27.
- 早田 勉・矢作健二・小田静夫 (1990) 古墳時代以降に江戸に降灰した火山灰—高島平北遺跡のテフラ層序, 日本第四紀学会講演要旨集, no.20, p.162-163.